明治卅三年十二月廿五日（第三種郵便物認可）
明治四十五年六月十一日印刷納本
（毎月一回廿三日印刷納本）




レートおしろい
河骨の
水より出でしそれよりも
清く幽かしいおすがたは
レート白粉で薄化粧した
美人の姿と誰もいふ
東京 大阪 平尾賛平

足一たび三越へ入り給はば

御婚儀の御支度は立に辨し候べし。

正装、略装、平常着は申すに及はず、時計、指輪、櫛笄、洋傘、化粧品、履物より箪笥、長持、鏡臺に至るまで一として備はらざるなく、すへての御調度は極めて迅速に調へ得べし。

三越は便利なる店なり、御愛顧下さる樣願ひ上げ奉る。

東京駿河町

三越呉服店

博文館創業二十五週年記念

女學世界臨時増刊月宮殿目次

口絵

寫眞版

新婦人叢書

新刊

第五篇

現代女性観

黒公子著

袖珍型クロース表紙 正價金四拾錢 郵税金四錢

女とは何ぞや 見榮と虚勢と嫉妬の化合物なり其外貌の美は以て一時を糊塗すべし錦を以て汚穢を包めば到底其臭を放つを免かれざるなり女は美なる者か將醜なる者か 毒舌にして善罵なる著者の大斧鉞は如何に現代女流をして完膚なからしむるか

目次大要

女とは如何なる者か●女の臭氣●女の武器●女の職業●女流作家●女教師●音樂家女事務員●女醫 看護婦●産婆●女優●女畫家●獨身主義者 女の戀●男女平等●三十女 女の感情 結婚とは何ぞや等字々肺腑劈く

既刊

第一篇 **日本美人傳** 長谷川時雨女史著 袖珍型クロース表紙 正價金四拾錢 郵税金四錢

第二篇 **現代男性観** 小島文子女史著 袖珍型クロース表紙 正價金四拾錢 郵税金四錢

第三篇 **名媛日記** 大平野虹氏著 袖珍型クロース表紙 正價金四拾錢 郵税金四錢

第四篇 **日本艶女傳** 兒玉花外氏著 袖珍型クロース表紙 正價金四拾錢 郵税金四錢

近刊

六篇 日本美男傳 田村とし子女史著

七篇 文章の栞 岡田八千代女史著

八篇 日本烈女傳 尾島きく子女史著

九篇 閨秀作家文粹 佐藤紫仙氏著

十篇 育兒の話 醫學士 唐澤光德氏著

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 〔電話下谷四〇七九番 電話下谷一六二七番〕 聚精堂


クラブおしろい
クラブ洗粉
クラブ白粉
クラブ歯磨
クラブ美顔クリーム
クラブ化粧水
クラブ水白粉
クラブ粉白粉
クラブはき白粉

會長 從三位 下田歌子

女子の安全なる獨習法あり

女子の學校生活には種々の危險と弊害との伴ふことを免れず、何人も進歩せる通信教授によりて安全なる女子獨習機關の出現を望みつゝありしが、本會今新たに本邦女子教育界の泰斗下田歌子女史指導の下に、最新最良なる女學講義錄を發行し以て此の希望を完うせしめんとす。小學校卒業を以て女子の甘んじ得べき時代は去れり。乞ふ速に本會の門に學ばれよ。

實修 女學講義錄

規則書
講義錄見本つき
申込次第進呈

本會講義錄は尋常小學校卒業程度の女子の必讀書なれば極めて平易懇切にし何人も難解の憂なからしむるを期す。且つ進歩せる教授法により僅に一ケ年以内に高等女學校程度の學科と家庭の主婦たる可き各種の準備を修得するに遺憾なからしむ。父母の膝下に在りて家事の傍ら高等女學科を修了せんとする人は速に入會せよ。

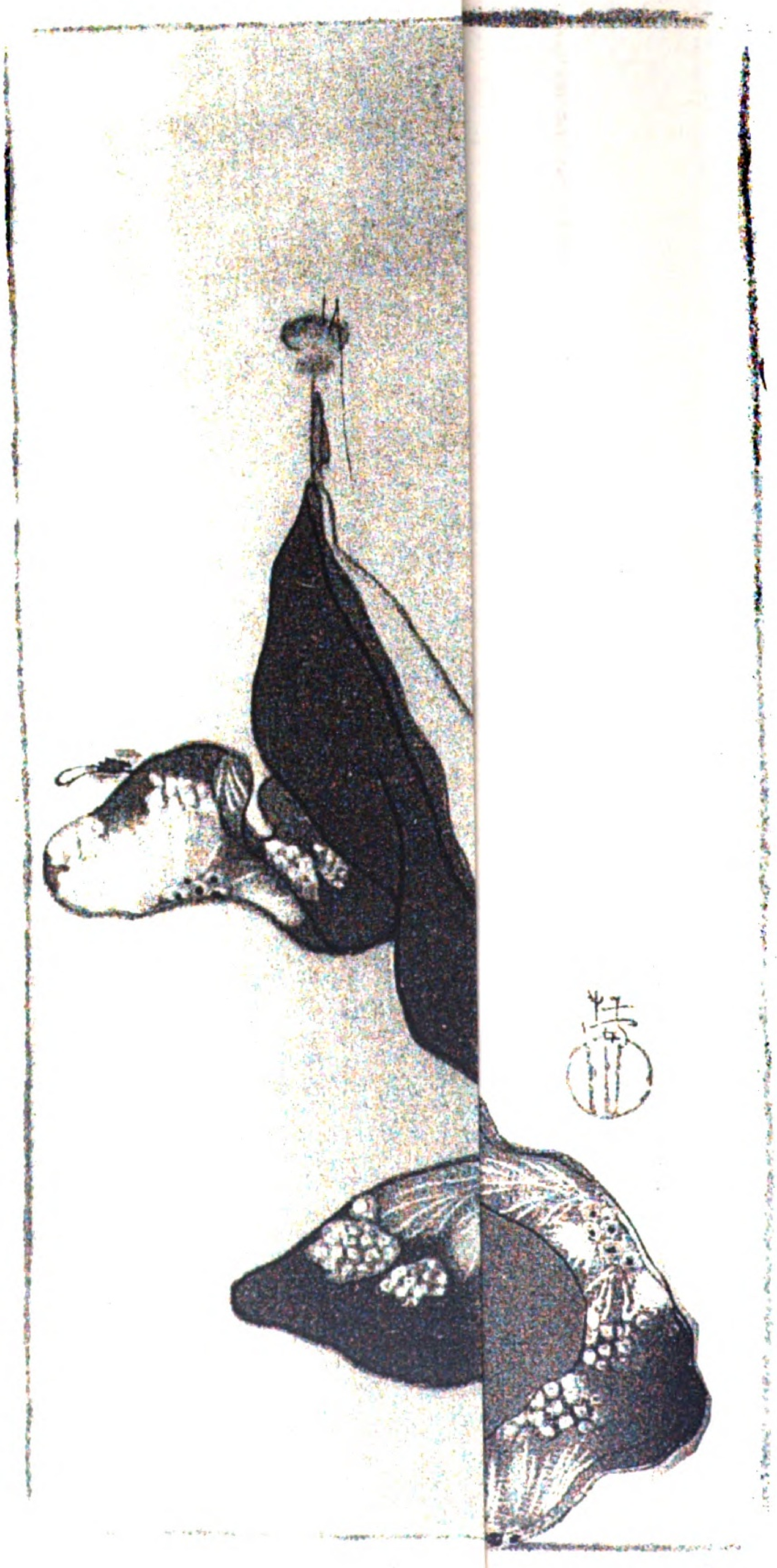
目下大特典あり

最新最良の女學講義錄出づ!!!

東京神田駿河臺

大日本實習女學會

電話本局三〇〇二番
電話本局三〇〇四番
電話本局三七〇七番



北野恒富畫

帯下の療法

一口に子宮病と言つたら、甚だ單純に見えるが、其實種類は多く、症候も複雑して居つて、一々これを詳説する事は、容易で無いから此に子宮病の最も普通な子宮内膜炎に付て一言して置かう。

素人がよく子宮病といふのは、大概子宮内膜炎のことで、今の西洋醫のいふ子宮内膜炎は、漢方醫はこれを白帯下又に寸白と稱へて居た。即ち異名同病である。

帯下の症候

は急性と慢性とにより多少違ふ處もあるが先づゾツト悪寒が起り、風でも引いたかなと思ふて居ると、熱が出初め、内股や腰のあたりが、引張る様に痛み、下腹が壓し付けられる様に重苦しく、頻りに小水を催ふし、子宮に劇しい痛みを覺え、子宮の粘膜は紅く腫れ、薄い水の様な下りものがあり、段々重くなると、黄んだ粘りある濃いものが下りる、これは甚だ悪臭を發するから、素人にもすぐそれと感付かれるそら月經は多量になつて月經前には、子供を産む時の様な痛みを覺え、兩足は冷え、動悸は高まり、頭痛めまひがいたし、胸が苦しく、食慾は衰へ身體は弱くなり、貧血を起こし、顔色は血の氣を失ひ、精神は陰鬱になる、數月若くは數年放置すれば、病勢が行きつ戻りつして居る中に、惜むべし他界の人となることがある、然るに婦人は、一般にこしけを輕く見る風があつていけない。甲婦人が「妾は先月あたりから下りものがありますが、何いふものでせう」と言へば、乙婦人はこれに應じて「妾もさうです、それでは下りものは女の厄と見えますね」などゝ、それで濟まして仕舞ふものが多いが、誠に心得違ひのことである、さて死ぬの生きるのいふ心配は無いにしても、この病氣の結果として下るものは、醫學上の言葉でいへば酸性を帯びて居て、精蟲を殺す恐ろしき力を有つて居るから、

帯下は不姙の原因

となるのである。それで身體に大した故障がある様にも見えないで、子供の無いのは、大概こしけの爲めであるといふことも分る、而して此恐るべきこしけは、何して起るかといふと、月經前後の風ひき、不熟練な醫者が、子宮を診察する時に機械の使用を誤つたり、藥を間違ひたりする爲めに起る事もあるし、御産をして乳を飮ませぬ場合、痳毒を受けた時などの場合である、而して最後に

帯下の療法

は腹部を温めるがよろしい、故に家庭を離れて、氣の合つた友達と温泉に行くなどは極よろしい。そして一方中將湯第三加減を服用し、傍ら宮壯散の溶液でよく膣部を洗ひ、夜分休む時、子宮座藥たる中將球を、膣中に挿入して置けば、藥効は内外相應じて一層迅速である、猶ほ婦人衞生に關する詳細の記事は「婦人衞生手引」に載せてあるから、是を一讀すれば非常の參考になる、同書は東京市日本橋區通四丁目津村順天堂へハガキで申込めば早速無代進呈する


水晶おしろい
艶も透明
東京 大和堂
すきとほりたる
水にて付ると白くなり
流行の薄化粧料
にして
目立ぬ故
男子にも用ゐられる
定價
五拾錢
貳拾五錢
拾五錢

女(いの二)

創作と翻譯と

徳富蘆花氏作

31版

寄生木（やどりぎ）

定價　貳圓（特製）
　　　壹圓半（並製）

東北の一寒村に生れ、功名を夢み、甘き戀に憧がれて、身は青年士官としてひたすら、名譽を趁ひしも、あはれ運命に弄ばれ、遂に戀を失ひ名をえず、剰へ苦しき病に患まされ、一管の尺八「吾妻」を唯一の侶とし、寂しき生を營んで、僅かに二十八を一期に逝きたる薄命の人・良平の生涯は無韻の長恨歌に外ならぬ。寄生木一篇は北の國の雪の中から響く哀音の一曲である。

21版

黑潮

□定價四十錢
□郵稅六錢
□袖珍三五判

「老女は無言、少女も無言、少女の美しき面には、子供にあるまじき悲寥の色あるを認めぬ：：：」と蘆花氏が「自然と人生」中の可憐兒一篇にかゝれたる可憐の少女こそ、此黑潮の悲劇の主人公である。うら若き道子が丈なす黑髮をふつと剃り落して尼の生活を送るまでには、いかなる悲しみがあるでせう。哀れなる少女、深窓の佳人道子のために一掬の紅涙を惜しみな給ひそ

松本雲舟氏譯

ジヨン・バンヤン原作

12mo.357Pp.Cloth

小說

聖戰

再版

□定價壹圓十錢
□郵稅十二錢

本書は世界の大文學として許容せらるゝもの、傳奇文學中の白眉にして中世紀の騎士氣質を彷彿せしむる好個の佳作なり。
表裝は俗惡なる當世風を排し、飽くまでも中世式を發揮す。

ジヨオジ・エリオツト原作

アダム・ビ井ド

□定價五十錢
□郵稅六錢

英國文學史上にその名かまびすしき、閨秀作家エリオットの傑作一つはアダム、ビヰドである近代英國のロマンティク、理想的の流れを汲んで、それを大成したる異國の女流作家の名作を繙きたまへ。

女(いの三)

發兌　東京京橋銀座　警醒社書店（振替東京五五三）支店は本郷の本春木町

洗濯ノ出來ル洋傘

此ノ洋傘ハどなたニテモ御自由ニ切地ヲ取リ放シテ御洗濯シ元ノ通リニ御取リ附ガ出來マス夫故汚レガ附キマシテモ決シテ御差支アリマセン誠ニ御便利ノモノデアリマス

此ノ洋傘ハ白麻地及縞麻地ニ刺繡ヲシタルモノニテ代價ハ金貳圓五拾錢デアリマス

此ノ洋傘ノ御張替ヲ要セラルヽ御仁ハ態々骨迄モ御送リニナリマセンデモ御端書ニテ御注文ニナレバ代リノ切地ヲ郵便ニテ御送リスル事ガ出來マス

亦どの樣ナル切地ニテモ御注文ナレバ出來致シマス故ニ壹本ノ御傘デ種々ノ切地ト御自由ニ取替テ御使用カ出來マス

發賣所

東京市新橋南金六町
關口洋品店
振替口座東京八〇五三

横濱市太田町三丁目
伊勢勘洋傘店
振替口座東京一三三二五

名古屋市榮町
伊藤呉服店
振替口座東京二〇八二
振替口座大阪七一五三

京都市四條通御旅町
山本洋傘店

大阪市高麗橋筋二丁目
小泉洋品店
振替口座大阪三九二七

大阪市心斎橋筋清水町
門坂屋洋傘店
振替口座大阪一〇三八五

神戸市元町通三丁目
彌太中尾洋品店

女(いの四)



山本昇雲畫


最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子一二一番
振替口座五〇二一番

第十四回新學期開講

產婆 看護 講義錄

目的 本會ハ通信敎授ヲ以テ產婆及看護婦タラントスル女子ヲ自宅獨習本會發行ノ講義錄ヲ本會々員ニ分チ產婆看護婦ヲ完全ニ養成スルヲ目的トス

產婆科ハ六ケ月看護婦科ハ四ケ月ニテ卒業ス

規則入用者ハ郵券三錢封入シテ申シ込ムベシ

東京市四谷區內藤町

東京產婆看護講習會

花菖蒲

十種一組十株甲種一圓 乙種二圓にて分讓致候

千葉縣君津郡湊町 獨樂園

男女 ちゞれ くせ毛 赤毛

は何程の難毛も自然に矯正黑化良き艶の出る最新發見專賣特許奇液を郵券封入申込の方に敎授し暫て美髮に治して差上升

東京千駄ケ谷五九五

岩阪澄子

●診察時間每日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒 りん病 生殖器諸病 神經衰弱症 婦人病 わきが ぢ

東京淺草瓦町廿八 淺草橋通瓦町停留場橫

中央醫院

諸病 ぢ

梅毒 橫根 下疳 全身梅毒等 りん病 消渇

子宮病 血の道 月やく とまりたる病 子なき婦人

生殖器諸病 神經衰弱症

記憶力思考力減衰症等 生殖器病 萎縮 遺精 早漏 夢精 發育不充分症等

わきが 色の黑き人 にきび ふきでもの

そばかす あれ性 皮膚諸疾患 いんきんた蟲等症

▲病狀記し郵券四錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特效新藥說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地 淺草橋通瓦町電車停留場橫

中央藥院



▲今漸く判明ました▼

貴孃が傍にいらツしやると…………

花園へ伴れた時の如に何とも言へぬ奥床しい匂がいたしますの!!

判りました、今しがた…………

貴孃はパール煉香油をお用ゐでせう

道理で美しい艶のある髪ですもの…………

そして貴孃はそのハンカチーフにスミレ香水を御使ひ遊ばすでせう





東京日本橋區横山町三

平尾銑也商店

（電話浪花百十番　振替東京百十番）

パール煉香油
スミレ香水本舗

女（ろの四）



河崎蘭香畫

ライラック化粧水



三越始め各地
小間物化粧品店に有り

（美顔術部及小賣部
新橋竹川町 理容館）

◎日焼けとライラック水

黒鐵も溶く。夏が來て日に焼けた、ソレ化粧水と云ふのは「盜人捕へて縄綯ふも同じ事今から勉めてライラック化粧水を愛用せよ。日焼けは勿論ニキビソバカス吹出物御顔の病氣は一切治つて今年の夏も美しく愉快に暮せます。

東京新橋金六町十五番地
理容商會
電話新橋二三〇二番

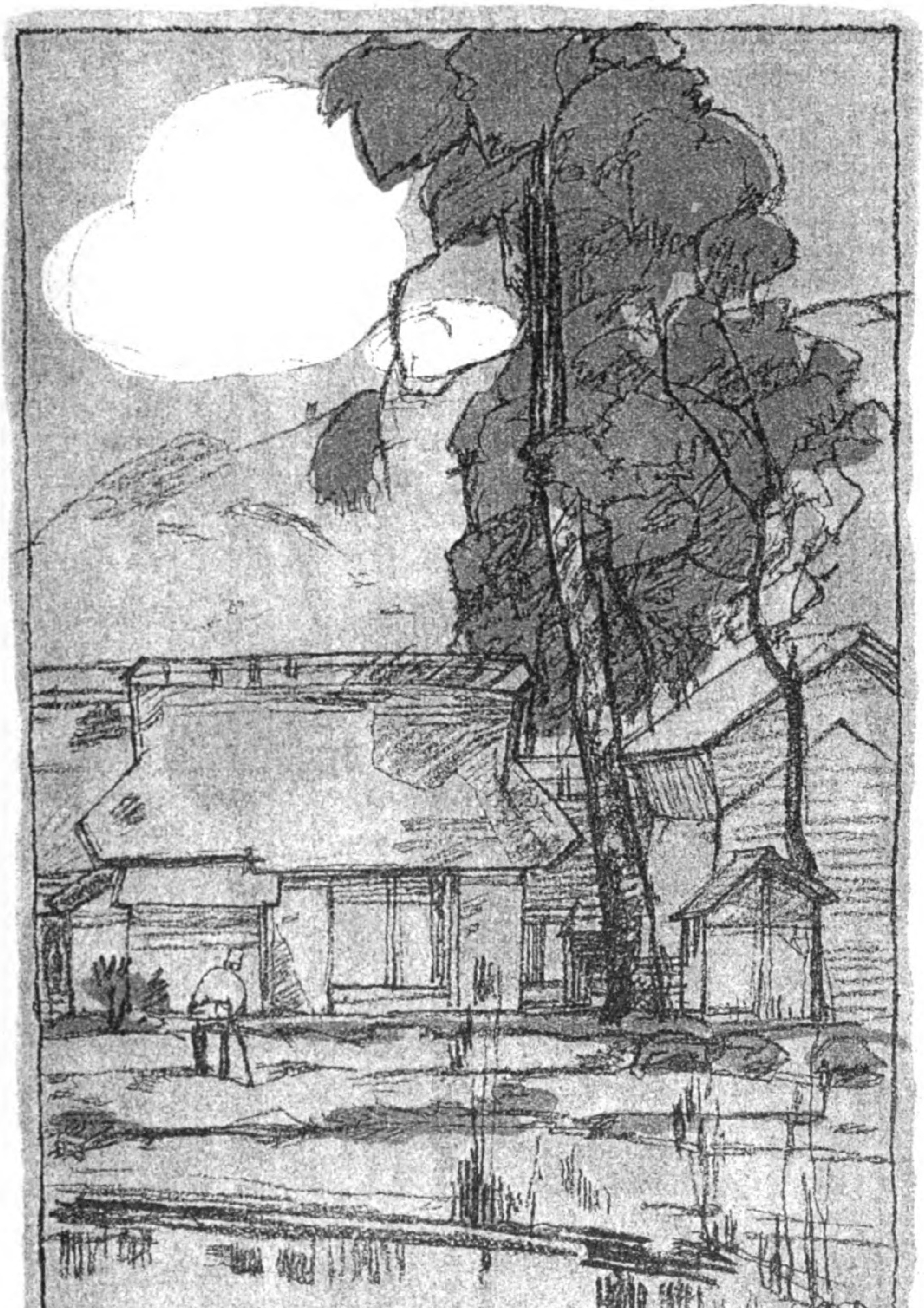
關西代理店 大阪市東區道修町四丁目 服部商店 電話本局三八番 振替大阪三一番

女（はの一）

女(はの二)



木村淡香畫



青梅街道　武田壽画

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著

文鑑 千草の錦

增訂八版

菊判和裝美本 定價金七十錢 郵稅十錢

本書は男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等總て數百篇を選出せられ之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作習の模範と應用とに供せられしは他に其比を見ざる最良の文鑑也

帝國大學文科敎授宮中御歌所寄人 佐々木信綱先生著 大口鯛二先生著

女子消息文のしをり

鏑木清方意匠 木版上半紙刷 定價六十錢 郵稅六錢

本書は現代歌學の大家佐々木信綱先生が多年苦心の末に成りたる消息文を優雅なる書體の師として鳴る大口鯛二先生が習字用にと特に大字に書かれたるものなり、先生が獨得の艶麗なる文章は簡單にして明瞭に而も文例盡く振假名付となし直ちに採りて實用に適す高尙優美なる製本は文と書と相俟ちて錦上更に花を添たるが如し、世の令孃淑女方必ず一本を机上に備へざるべからざる絕好の女子消息文範なり。

女子大學校敎授 鹽井雨江先生著
學習院女學部敎授 小野鵞堂先生書
女子大學校敎授 中村春堂先生書

新體女子用文

大倉耕濤意匠 木版上半紙刷 定價七拾五錢 郵稅八錢

本書は作者鹽井雨江先生が在來の書翰文の陳腐、冗長、經薄、無趣味なる弊を打破せんとの苦心に成るもの、詞藻の淸新、眞情の流露、趣味の津々、眞に書翰文の好模範たり、上欄には諸種の手紙の作方をも示さる、書は斯道の大家小野鵞堂、中村春堂兩先生が靈妙の手腕を以て大字小字に書き分けられ特に振がな付にせられたる者にして其艶麗優美の筆は習字の龜鑑たり、嶄新なる文筆と相俟つて明治新時代を飾るの花たるべし、乞ふ江湖の令孃淑女方疾く机上の好伴侶として朝夕愛讀の榮をたまはらむ事を。

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生作
學習院女學部敎授 小野鵞堂先生書

新編手紙

男子用 木版半紙刷 無類の美本

女子消息文の手ほどき

男女各一冊 定價六拾五錢 郵稅六錢

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振がな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり。

新編書簡文例

男子用 木版半紙刷 頗高尙優美

新編女子書簡文例

男女各一冊 定價六拾錢 郵稅八錢

本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる趣味あり、繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同ぜずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を揭げ書簡文を作成せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文法式と相俟て斯道の完璧と稱すべきなり。

女(にの一)

發兌元

東京市京橋區中橋廣小路六
振替貯金口座四千百〇九番

前川文榮閣

高評

白味美顏料

白粉に優る

ホーカー液

自然の美想を俄に現す

佛國ノルド會社
美顏術師の發明にかゝる

本品特効

▼色を白くすること
▼きめを細かくすること
▼日にやけぬこと
▼ニキビ、ソバカス、アセボ等に特効
▼白味液にして紳士にも婦人にも向く必要品



定價
特瓶八十錢
小瓶廿五錢
送料四錢

御買上の際は必ず●●●●上記の商標と堀越●●●二八堂の名義に御留意願度候

有名なる和洋小間物店に販賣す品切の時は直接御注文を乞ふ
東京日本橋區馬喰町四丁目

堀越二八堂

女學愛讀者特に一割引

各種繪葉書調製

▲私製葉書、葉書文字印刷。寫眞版、コロタイプ版石版、木版、三色版。浮出、ブロマイド。押繪其他精巧細工。

弊堂調達部は繪葉書に關するものは總て葉書文字の印刷より彩色印行まで數の多少に關らず尤も迅速に確實調製可仕候。弊堂調達部は最新式の機械と熟練なる技師を有し居候へば印刷の優美卓絶なるは云に及ばず最も廉價に調製仕り何時如何なる大注文に接するも毫も支障無之誠實に御註文に應ずべく候へば何卒御用命の程希上候

東京市小石川區久堅町百八
精美堂調達部

◀産婆速成唯一の獨習機關▶

講義本科、模型實習、質疑、受驗科試驗問題答案等知名博士學士諸講師の口授を總ふりかなつきわかり易く印刷し頒つものゆゑ通學と同等の學力が得らる

校外生募集

規則書要三錢

講義錄●每月二回發行●五箇月卒業●束修五十錢●月謝七十錢●全科一圓三十錢

東京本郷區駒込林町百八十三
私立日本産婆學講習會

女(にの三)

武士道鼓吹 浪花節

新着發賣

桃中軒雲右衛門入道の義士銘々傳、義烈百傑其他各興行毎に好評を博せる得意の浪花節蓄音器吹込は一切本人と特約を結び其著作權はリツチヤード、ワダマンに譲受登錄濟に有之「象印スタークトン」の商標に異る音譜は必ず僞作品にして法律上の制裁あるものなるを以て之を製造販賣又は購入相成向は御迷惑出來致候儀に付き特に「象印スタークトン」の商標に御注意被下度候　謹言

定價表目錄は御一報次第贈呈……



桃中軒雲右衛門入道吹込

◎赤垣源藏（徳利の別れ）（其一）（其二）

◎南部坂後室雪の別（其一）（其二）

◎大石生立（御樂献上）（其一）（其二）

◎村上喜劍（其一）（其二）

◎正宗孝子傳（其一）（其二）

兩面盤一枚　正價金參圓八拾錢也

東京銀座一丁目　三光堂本店　長電話京橋九七八・九七九

支店
東京市浅草區駒形町　電話長下谷九八八番　振替口座東京一九八八四番
大阪南區順慶町四丁目　電話南三二八三番　振替口座大阪一五一四七番
九州福岡……北海道小樽……

女（にの四）



河野蘭香画

專賣特許

エンゼル香油

田原藥學博士の御實驗證明 清浦子爵 高山三兩博士の實驗有効御證明 東京美術學校千頭教授の實驗有効御賞賛狀其他大家より多大の高評を以て迎られたる特許エンゼル香油は毛髪を黒化漆の如き光艶を出し且毛根を養ふ偉大の特効ある最新發見の高等香油にて殊に本品には目下歐米にて最も流行せる「ヘリオトロープ」「バイオレット」「ホワイトリリー」等の高雅なる芳香を有し御使用後は馥郁として長時間保ちます故別に他の香水等御用の必要は有ません又くせ毛の方はB號エンゼル香油御使用有れば如何なる天性の縮れ毛にても自然に矯正する不思議の特許品で有升

見よ!!



紳士 貴婦人 高等用香油

◎實價は小壜六十錢中壜壹圓大壜壹圓八十錢と天性縮毛用特製三圓五十錢の四種で送料は市内は何れも七錢内地は小中壜迄は十一錢大壜及び特製十五錢です▲代金引替は一切謝絶す▼

東京市本郷區東片町十五番地 エンゼル商會

電話 下谷二五六九番 振替東京二〇七四三番

東京の貴婦人はナゼ美しいでせう!!!

▲其れはこの様にしてみがき立てるからであります

美顔と化粧法

定價送料共金三十七錢 切手代用は金四十錢

目次の大略 ▲色白くなる方法 ▲赤き顔を櫻色にする方法 ▲シワのよらぬ方法 ▲キメを細かにツヤを出す方法 ▲日にやけるを防ぐ方法▲歯を白くする方法 ▲手の色を白くする方法 ▲髪の毛を黒くする方法▲毛のぬけるを止める法 ▲毛をのばしつやを出す方法 ▲ふけを去る方法 ▲ちゞれ毛くせ毛赤毛を直す方法 ▲あるべき所に毛なきを生ずる方法▲やせる法ふとる法▲鼻を高くする方法▲聲をよくする方法▲入浴の方法▲化粧品の撰び方▲おしろいのつけ方▲衣服の模様と縞柄▲衣服の縫び方▲衣服の着方

此外いろ〳〵の事が書いてありますが皆どなたにもすく出來る事ばかりで其効果も面白い程あらはれます。私方へ二錢切手十五枚又は一錢五厘切手廿枚御申越し下されば一千冊限り特別に御分ち申上げませう

本書著者 東京神田錦町三ノ二 高柳孝子

◎色白くなる

私事色々樣々の化粧品など用ゐても効なき處今回ふとした藥にて色白くなりました。嬉しさの餘り皆樣に御實驗を願ひました處、澤山の御禮狀を戴きました。返信料封入御照會あれば委しく御知らせ致します。

東京神田錦町三ノ二 高柳こう子

女(ほの一)

わきが

最新治療薬

本劑の發見は永年斯病に苦しみたる者或大家に謀り該藥を發見し自分再生の喜びを同病患者に頒たん爲め玆に官許を得て發賣するもの乞ふ一劑を試用せられ本劑の卓效あるを知ると同時に此苦境を片時も早く脫せられたよ

●尙奇效御疑ひの方は當所に來りて禮狀を見られよ

定價 試用分拾錢輕症分四拾錢重症分壹圓也送料各貳錢▲郵劵代用二割增

發賣元 東京市神田區錦町三丁目九番地 關口花子

園藝肥料

種類 園藝肥料 庭園肥料 庭木肥料甲 庭木肥料乙 盆栽肥料 草花肥料 萬年生肥料 菖蒲肥料 朝顏肥料 牡丹肥料 菊肥料 梅肥料

○定價 大箱卅錢 中箱廿錢 小箱十錢

○小包料（大一箱、中二箱、小四箱迄）內地各八錢、淸、朝、樺、臺迄各參拾錢

硫酸アンモニア强過燐酸菜種油粕粉大豆粕粉等、園藝器具和洋各種、和洋草花蔬菜種子、園藝全書園藝秘訣其他園藝書籍取次販賣●市內一報次第無料配達

●特約販賣店募集……郵劵代用壹割增

園藝肥料 東京牛込揚場町八番地

發賣元 振替東京一七二八八番 天光園

果實標本通信教授

速成二ヶ月卒業 全學期分七拾錢

林檎カキ梨子桃、葡萄其他內外六拾種の果實自宅にて美麗に出來る郵劵十錢送れば製品見本と案內書呈す

◎東京市牛込區新小川町三ノ三五 美術造花傳習所

隆鼻術（はなたかくするほう）

午後

東京市九段下 神田今川小路二丁目十一番地

和田耳鼻咽喉醫院

電話本局一七三〇番

金張懷中時計……景品付き……大廉價發賣

時間正確ならざれば時計の効なく金張にして瞬時變色すれば眞の金張にあらず本品は夙に聲れ高き米國時計會社美人商標刻印付特製品にして兩蓋純絹斜子刻み中蓋付三枚蓋龍頭卷引出し針廻し機械は最新アンクル式寶石入四拾時間持締十用15 16 17 18形

貴婦人用金張梨地片硝子13形均一特價 五圓五拾錢

本品は製造會社が多年の實驗と嶄新なる化學を應用して十八金張に製造したるものにして普通瑞西製メッキ側等の粗製品と異り眞の金張故に金色燦爛として十八金側を凌駕し尙ほ機械の要所には寶石を以て優に鏤めたるものなれば完全無缺にして進運振止の憂なく故に弊舖は責任を重じ卅ケ年の保險を附す

景品には美術的眼入鎖時計メダル舶來鹿皮の三品を進呈す

御注文の方は女學世界廣告を見たる旨御申越次第代金引換小包郵便にて送る送費貳拾錢



為替に依り生玉局宛

注意 弊舖は信用を重んじ遠隔の購客にして現品御覽なく御購求後万一貴意に適せざる時は無割引他品交換又は代金返戻す

▲大阪市東區上本町五丁目 振替大阪一四一八五番

貴金屬時計商 夏目時計商舖

女（ほの三）

北白川宮成久王妃房子内親王殿下



殿下は今上天皇陛下第七皇女に在しまし、明治二十三年一月御誕生。

清きみぎは



清風衣袂を吹き池塘荷香馨

早稻田大學講師　樋口勘次郎先生新著

少女衛生打明け話

洋装四六判
上製全一冊
正價三拾錢
送料金六錢

やまと新聞の批評──あどけないお嬢さんと雖何時かはお母さんにならねばならぬ時が來るのだ。何うすれば、お母さんになれますか、其問題は少女にとつて最も大切な事柄ですが、何處のお父さんもお母さんも其說明はなさらない、其れでも困ります、著者は敎育家だけあつて叮嚀に厭味なく其解說をしてゐる、「赤ん坊の家や」「全身の健康」「みたしなみ」など其要目の一二だ。

■少女──諸嬢は勿論家庭には是非一本を備へよ！

歌集　永日

學習院、東京女子高等師範敎授尾上柴舟先生著

挿畫の畫伯は　中澤弘光、山本森之助　岡野榮氏

歌を愛し、歌を知らんとする者は本書を得て始めて理想的の資料を獲得するもの歌壇の重鎭たる著者の近詠三百餘首を收錄せり。──價金八十錢

戯曲　新婦人

學習院教授　文學士　藤澤古雪先生譯

（洋裝四六判美本全一冊）

スウテルマンの傑作故鄕を全部譯述せし者近世の問題劇で、新舊思想の衝突を描いたもの一つ此作の舞臺に登るや非常の大喝采を以て迎へらる如何に時代思潮に投せしかは明かなり。──價金八十錢

女（への一）

發行所　東京市神田北神保町　振替口座東京八一一五　弘道館

文學士 沼波瓊音君著

挿畫 小杉未醒君 平福百穗君

俳話小品 しろ椿

洋裝四六判總洋布美本
紙數四百四十餘頁

正價六十錢
郵稅八錢

瓊音は愚を聖なりとする人なり。
この書收むる所の俳話、感想錄、小說其他數十篇の總てを
貫くものは一道の愚氣なり。
愚は即ち俳なり。愚は即ち直なり。
愚は即ち不拘不泥縱橫自在なり。
才の臭、智の臭に厭ける人よ速に
斯書を繙け。
そこに白椿長しへに匂ふ愚國の春
なり。



東京 本町 博文館

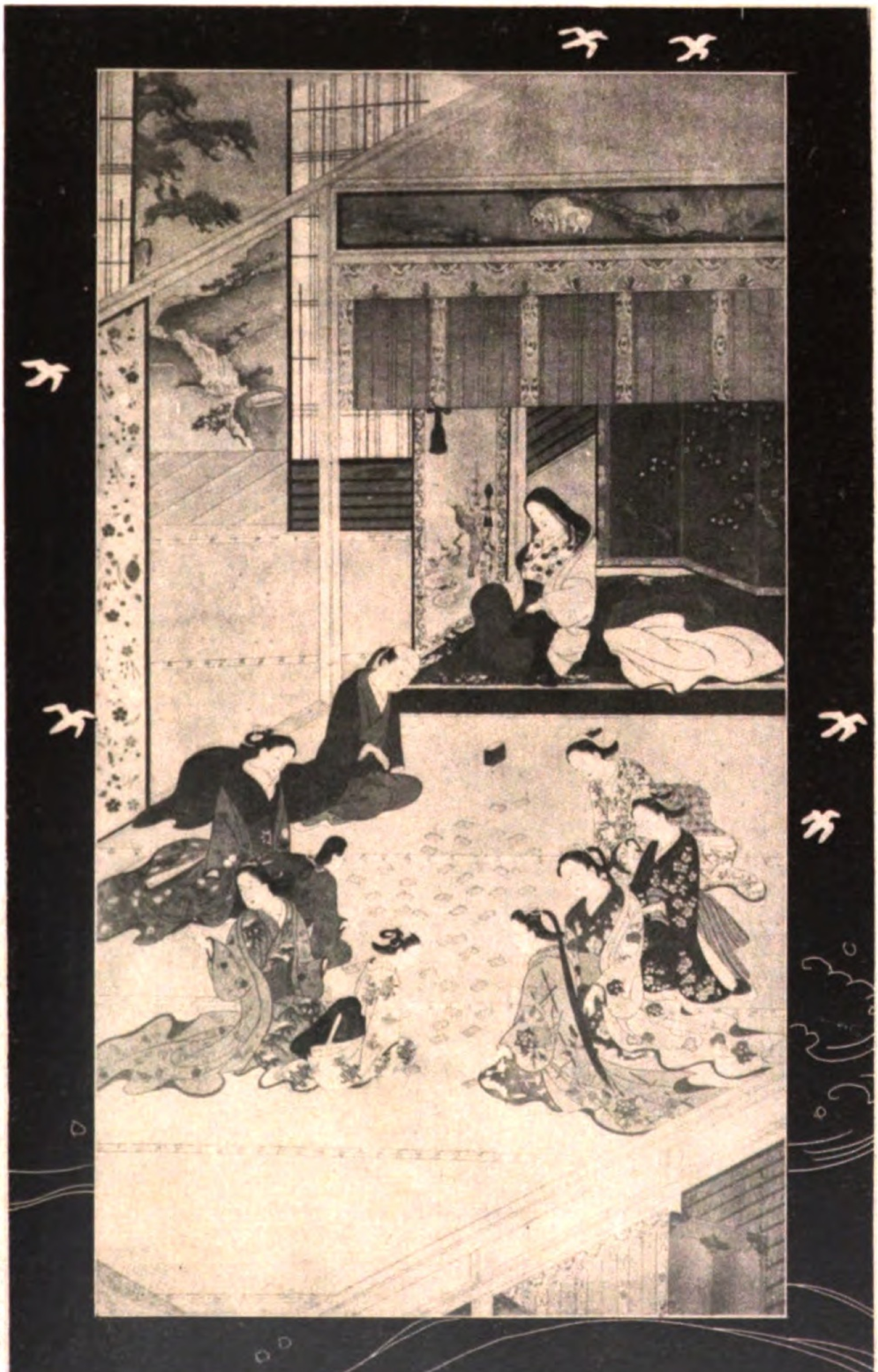
女(への二)

伏見宮博恭王妃經子殿下

殿下は從一位勳一等徳川慶喜公第九女に在まし。明治十五年九月御誕生。



大奥骨牌遊の圖



浮世畫家奥村政信筆（男爵藤田平太郎氏所藏）

女（その一）

燒け石に水

とは博文館發賣の『スヰートホーム』『ホネームーン』の二冊が重版する片っ端から賣れ切れて、亦しても品切れとなる様な狀態を古人が見越して豫じめ作つて置いた言葉と思はれます。

近次女流作家も澤山ありますが本書の著者

内藤千代子

ほどキビ々々した文章を書く作家は少ない。彼女ほど異數の歡迎を受けた者は眞に一葉女史以來である。若奥樣、女學生達の間では『スヰートホーム』『ホネームーン』を讀まなければお話にならないとの事。シカシ男も年長者も一讀の必要があります。今回『スヰートホーム』十七版『ホネームーン』十三版出來

何卒各書店にお立ち寄りの節は御求めを願ます。

定價六十五錢 郵税各六錢

女(との二)

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして生來色黒き男女にても平素之を用ゆれば本劑の主成分たる皮膚漂白作用より漸次肉體**白色**となり肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し**艶美**の容貌となる効果を有す世上種々雑多の色白薬を用ひて奏効なき人は速に本劑特製分貳劑を試よ偉大なる奇効完全に顯る價並製壹劑壹圓廿錢特別製壹劑貳圓貳拾錢

色白飲藥

英國及墺國輸入二種の全身清血劑にて飲んで體内の悪血毒血悪液を體外に排泄し血液を清浄にし完全に肉色を白色艶美ならしむる奇効顯著薬なり價英國製壹劑貳圓九拾錢墺國製壹劑壹圓九拾錢双方併用せば偉大の奏効容易に顯る着金即刻送薬

腋臭必治劑（わきがひっちざい）

本劑は腋臭症に對し最近の學理と實驗とにより研究發見せられたる斯病唯一の理想的卓効新薬なれば他薬にて全癒せざる患者は早く試み病原を去り**苦惱を脱せよ**難重症には特別製を用ゆれば必ず全効を奏す薬價輕症用九拾錢重症用貳圓拾錢頑固慢性症用特別製分五圓卅錢着金小包密送す郵券貳割增し

月やく下し通經劑

本劑は子宮を痛めず如何程長き月經とまりも容易に通經す壹貳ヶ月以上の滯りは壹貳劑にて奏効す參ヶ月以上のとまり及び血塊には特製分を用ひよ極安全に快通**流經**す且つ月經不順より起る子宮病血の道を全治し悪血古血を一掃す患者は早く試み偉大なる特効を知られよ近時無効類似偽薬多し御注意を乞ふ價は壹劑七拾錢貳劑壹圓廿錢參劑壹圓七拾錢特別製分貳圓廿錢郵券代用貳割增し

（奇効顯著）

（最新發明薬）

あざ 及入墨 ほくろ そばかす。なまづ。いぼ

を美麗に除去すること**著効**ある新薬あり患部の大小輕重を問はず容易に治癒し假令顔面たりとも**痕跡**を殘さず除去し得らる但し其製劑を二種に區別し一はあざ。入墨。ほくろを除去し又一はそばかす。なまづ。いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の寸方を明記し申込あれば其症に適應する薬を撰定送付す價は各試用劑壹圓拾錢小劑參圓拾錢中劑五圓拾錢大劑拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）着金即刻送藥す

（奇効顯著薬）

毛生新薬（けはへしんやく）

本劑（薬名ヘアー・グロース）は多年研究實驗の結果發見したる**毛髮發生薬**なり即ち男女共禿頭病の人各種の病氣にて脱毛する人頭髮及はえぎわの薄き人まゆげ口ひげの薄き人其他總て毛のあるべき所に毛なき人用ゆれば毛髮早々と**發生する特効**あり本劑は世にありふれたる種々雑多の毛はへ薬とは其効大に異なるに付幸に玉石混同視することなく速に試みられよ偉大なる奇効を知られよ價小瓶壹圓廿錢中瓶二圓卅錢特別製分五圓卅錢着金即刻送薬す郵券代用必ず二割增しの事

美容 やせる薬

壹劑參圓廿錢貳劑六圓二十錢特製九圓拾錢

本劑（薬名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる唯一の痩身劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保つ特効薬なり故に彼の見苦しくふとりたる諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる特効を知られよ

東京市神田區五軒町十九番地

以上七薬 専賣 **日新館薬房**

電話下谷五四四六番

振替東京壹九二四六番

女（との三）

女(との四)

鍋島侯爵夫人榮子



白耳義公使の家庭



圖は麴町三年町同公使館内庭園にて撮影せしもの、右より令息ジャック氏、公使母堂、夫人附添メイヤー嬢、公使トラファイユ伯、公使夫人、令息シャール氏、家庭教師ウエルシュ嬢、

新婚の人



醫學士井上文藏氏と新夫人正子（男爵伊達宗經氏令妹）

宵の灯



右圖、歌川豊國筆（男爵藤田平太郎氏所藏）左圖、柳々居辰斎筆（男爵岩崎小彌太氏藏）

粉末牛乳クリモラ



一、世人が最も滋養に富むものとして小兒若くは病者に用ひらるゝ煉乳（コンデンスミルク）を分析すれば一罐の半分は砂糖にして其三分は水あとの二分丈け滋養分なり之をクリモラの滋養分に比較するに優にコンデンスミルクの一罐はクリモラの二罐半に相當す。

二、クリモラに熱湯を注ぎて溶かすときは何時にても搾り立ての牛乳と同樣なる殺菌牛乳を得べし殊に夏時に至りて牛乳及煉乳の貯藏を爲すには特別の裝置をするも尚且つ腐敗を免かれず之に反してクリモラは如何に放置するも變質の恐れなし。

三、クリモラの用途は家庭に於ける小兒の哺育用の外各種の調理に使用せられ近時西洋料理店旅館菓子商等は盛んに用ひつゝあり。

四、東京醫科大學敎授大澤醫學博士がクリモラを試驗したる成績に曰く、（從來市場に販賣せる乳粉には大抵澱粉を混ぜるが故に胃腸を害し殊に小兒には下痢を起す事多しクリモラは以上の缺點を補足したる粉末牛乳にして何等他物を混ぜず云々）と證明せられたるを見るも如何に乳製品中優秀なる者なるかを推知せらるべし。

△一罐　二百瓦入金四拾八錢

臟器性營養劑

ボンマロー
（赤骨髓エキス）



臟器療法は近時に於ける治療上の一進歩にして之れが應用の治療幷に營養に對する貢獻は決して少なからず。

ボンマローは實に犢の豐富なる赤骨髓をグリセリン中に轉容せしめたる製品にして體內に於ける赤血球形成の速度を非常なる勢を以て增大せしめ消耗せる組織を完全に且つ速かに補足す然して本品の價値に就てプロフエツソルアリソン氏の實驗に曰くボンマローを滋養劑として結核患者に使用したるに驚く可き速度を以て諸症の輕快を認め漸次體重を增加し試に之を廢せんか體重の增加を中止するに至る又之をマラリヤにて、非常に衰弱に陷れるものに試むるに其效力頗る顯著なるを認めたりと。

故に本品は肺結核及び之に類似せる消耗性疾患幷びに貧血病者、腐骨症脊髓炎等に卓越せる滋養劑として弘き聲譽を擔ふものなり。是非御試驗を乞ふ。

▲四半廿入　金壹圓貳拾五錢

▲半廿入　金貳圓貳拾五錢

發賣元　東京日本橋區岩附町四番地　合資會社友田商店

電話本局二四九六　振替口座東京六七七三番

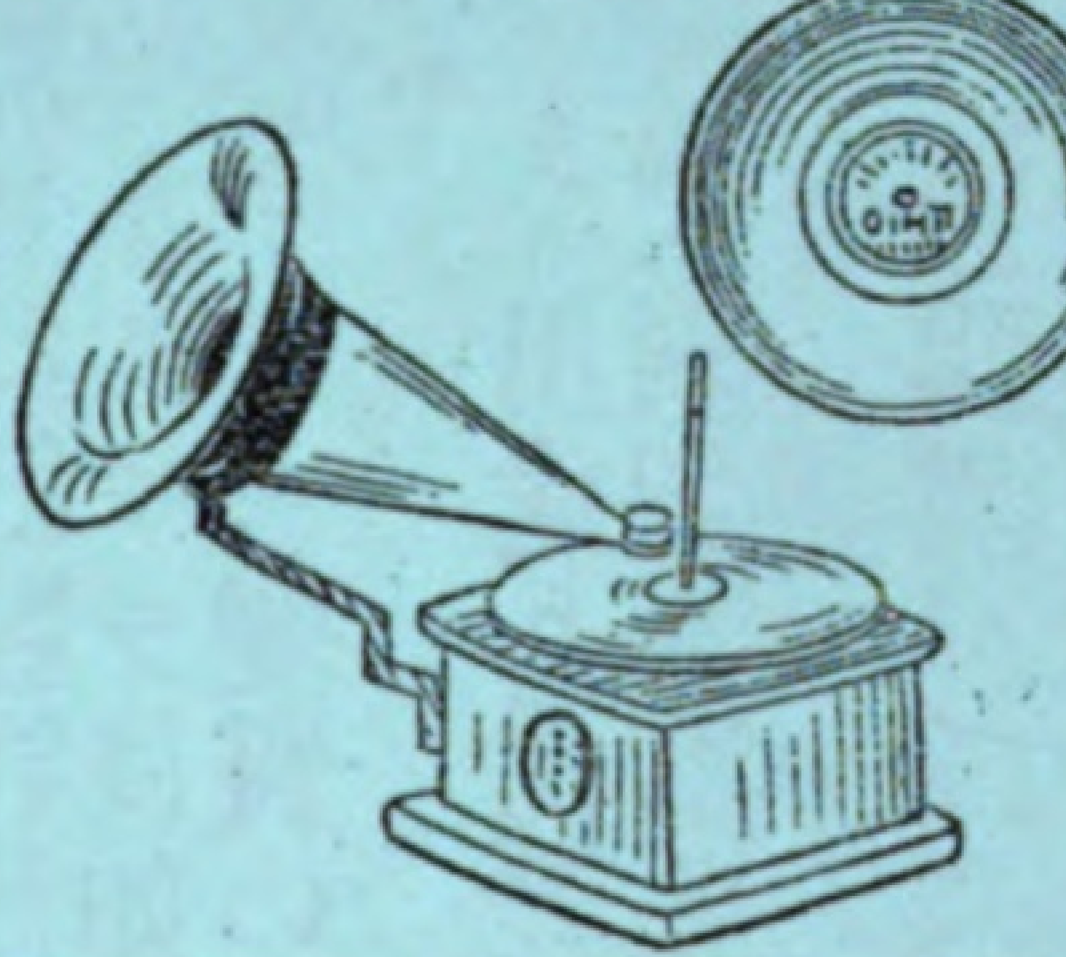
女（ちの一）

祝博文館創業二十

■清くて美しい月宮殿＝廣くて大きい博通社の信用■

兒童教育用蓄音器

特價 一臺 七十五錢
音譜唱歌俗曲三十餘種取揃有



音譜 一枚 拾七錢
送料 内地廿錢 海外五十錢

■電話＝電鈴■

誰でも説明書を御覽になりさいすれば直ぐに架設の出來る電話機—來客の報知盜賊の要心危險なく誰にでも架設の出來る簡易輕便なる電鈴

電話機（聽話機一受話機一）
特價 八圓五十錢
電鈴 甲特價 一圓六十五錢
乙特價 一圓十五錢
電池 特價 八十錢

市内の御注文に對しては現品持參直ちに取付けも致します

■架設＝輕便■

○説明書無代進呈○
取次御望の方は御相談に應ず

■皆さまが既に善く御承知の通り博通社は何んでも■
■皆さまの御入用品を他店より御安くし差上るので■
■皆さま間には博通社の御評判は非常に善いのです■
■皆さまの御家庭で必要な家具料理の器具及材料又は■

卸賣希望者に
弊社の特賣品は總て直輸入品か特約品か又は自製品にして特價が非常なる割引値段に相成居候へども

□近江特產蚊帳□

本麻製萠黄色 ねいめなし

三疊吊特價 四圓二十錢
四疊半吊同 五圓二十錢
六疊吊同 五圓八十五錢
八疊吊同 七圓五十錢
十疊吊同 九圓七十錢

送料内地卅六錢海外六十錢



本麻製萠黄色 小幅

三疊吊特價 三圓廿錢
四疊半吊同 三圓九十錢
六疊吊同 四圓八十錢
八疊吊同 五圓八十錢
十疊吊同 七圓九十錢

(博)
博通社

女（ちの二）

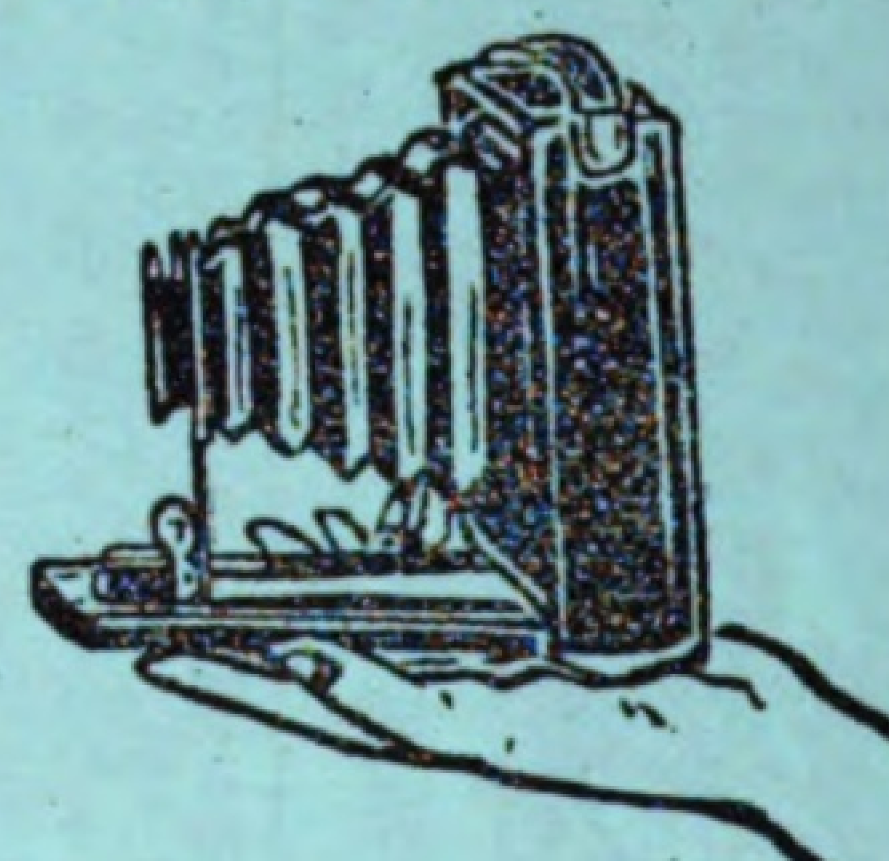
五周年紀念特賣品

■皆さまの日用品着物時計指環ブローチ書籍文房具又■
■皆さまが御望になる細工物とか彫刻とか其他色々な■
■皆さまの御要求は充分な責任を以て屹度御用辨致■
■皆さまの御滿足なさる様廉價と誠實とを以て盡し升■

小賣業諸君の御便宜を計り半打以上の御注文に對しては特に御割引の御相談に應じ可申候

販賣部卸係

最新式寫眞機械



片面取枠六箇 上等革鞄付
名刺形 特價 金八圓五十錢
手札形 特價金十五圓五十錢
金屬製三脚 金二圓十錢
現像燒付用品全部 金一圓四十錢
寫眞部目錄御申越次第呈上す
送料 市內無料 內地十六錢海外卅五錢

萬年筆界の革命

スタア萬年筆は價僅に二圓六十五錢而して**ペン**先は正十四金細く書けるの故を以て好評あり本社の特約製造品なれば永久使用に堪ふる事請合本社責任負ふ

送料 內地十二錢 海外三十錢

キング萬年筆は普通萬年筆と異なり特別の裝置ありて使用に際し**インキ**を叩き出すの必要なく直ちに**スラスラ**と苦もなく書ける其れでも直段は金四圓五十錢

第二回の輸入品

■特約店 博文館 東京堂 文運社■

東洋唯一

メール、オーダー、ビジネス
博文館代理部、通信販賣
東京市日本橋區本町一丁目
電話本局六百十四番
振替口座東京五十番

純銀側八日持懷中時計

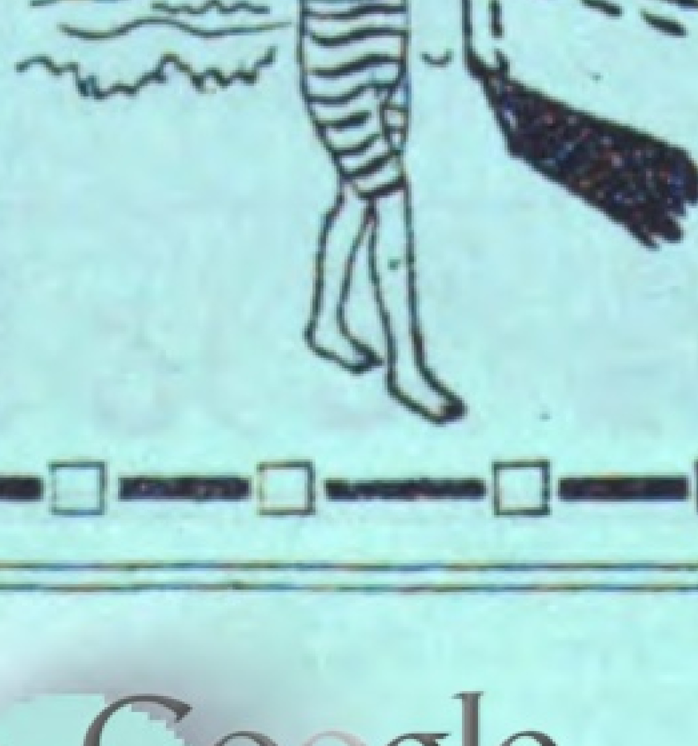
■送料內地十六錢海外卅錢■



■兩蓋付寶石入アンクル十六形 特價九圓八十錢
片硝子寶石入アンクル十六形 特價九圓三十錢

皆様御召遊ばせシツクリと着心地の良い海水浴衣

甲特價一圓四十五錢
乙特價八十五錢
丙特價五十五錢
□送料□ 內地八錢 海外卅錢



■良くて安い博通社の商品――淸くて美しい月宮殿■

女(ちの三)

お嬢さん方の清き讀物

沼田笠峰先生著
山村耕花先生畫

少女十二物語

再版出來　定價五拾錢　郵税金六錢

● 發賣圖書目録進呈

巖谷小波先生閲
小野美智子女史作

姉と妹の書簡

（新刊愈々發賣）

▼四六版洋裝美本　定價金四拾錢郵税六錢▲

春は散る花の行方を偲び秋はゆく雲の流れを望んで云ひ知らぬ胸の痛みわけもなく涙含ましう遣瀬ない悶のたゞ一人忍ばしには餘りに小さな胸の堪へ切れませんもの訴へずにはゐられませんもの：：此の思ひ此の悶知るはたゞおなじ心の姉妹よ！懷しい床しい僞りないその頃の感情を著者も一度は味つて來ました再び歸らぬ此の春の戀しうて思出にもと染めました此の『姉と妹の書簡』願くは世の少女姉妹の友なれ！

河井醉茗先生序
溝口白羊先生編

續少女模範文集

（お待兼の續篇）

▼四六版洋裝美本　定價金三十五錢郵税六錢▲

新しい佳い文章を作らうと思つたら、どうしても新しい善いお手本に就かればなりません。此『續少女模範文集』は方々の少女雜誌の中から模範とすべき優等の文ばかりを選んだものですから、少女方の作文のお稽古には、最も適當した本であります。前の『少女模範文集』が、羽の生えた樣に盛んに賣れて行つたのを見ても、此等の本が、どんなに皆樣に歡迎されて居るかゞ分るでせう。

沼田笠峰先生著
山村耕花先生畫

少女家庭物語

（好評嘖々如湧）

▼三六版上製彩色畫入美本　定價金五十錢郵税六錢▲

愛する少女諸子よ、諸子は樂しき家庭團欒の席で趣味あるお話を聞きたいとは望みませんか。父母弟妹とゝもに平和な空氣に醉ひながら、互ひに清いお話を語り合つたら、どんなに愉快なことでせう。この書は、即ち家庭に於ける優しい少女の物語を集めたものです。家庭の花平和の光と稱へらるゝ少女諸子は、この書を座右に備へて、かゞやく團欒に一しほの興を添へ給へ。

巖谷小波先生
沼田笠峰先生共編

最新日本少女寶典

（空前の大歡迎）

▼三六版上製畫入頗美本　特價金壹圓廿錢郵税八錢▲

少女の友評　本書は教科書以外の參考用または自修用として、少女に必須な學藝ならびに日常の心得を平易簡明に記述したもので、本欄には、小學校及び高等女學校に於ける必須科と隨意科とを適宜に按排して掲げ、上欄には趣味の涵養に資すべき少女美談を始めとして、日常の心得、讀書法その他の事項を網羅してあります。現代少女の學修用書として多大の利益あるものと信じます。

沼田笠峰先生序
溝口白羊先生編

少女模範文集

忽ち四版　定價卅五錢　郵税金六錢

● 往復葉書にて申込

發兌元　東京市神田區南乘物町　振替口座東京六八九番　誠文館

凌霄花のさかり



中央中島かれ子（東京音樂學校出身）、右三木壽子（跡見女學校出身）、左水野御年（跡見女學校出身）

キウピット



美しき人に一矢まゐらせん、甘き惱みになたまひそ痛み。

遠き思ひ



ふと聞えしはそら耳か、白日の夢か、夫は歸らず、懶きの日よ。

新式の髪結ひぶり



マガレツト　　ローマ　　コロネイシヨン

月の入るさ



雲流れ月行く、人界の夜は寂として五湖の水暫く清らかなり。（泰西女優のいでたち）

合せもの



瀟松風に吟じ、潺水石に咽ぶ、大小の絃聲錯綜して魂飛び神逝かんとす、右林久子、中央大澤ゐい子、左廣瀨千代子、孰れも紳商の夫人令孃なり。

函嶺湖畔の一日



飛ぶは雲、聳ゆるは峯、これを眺めて湖畔に高樓あり。樓上に人あり。卓をめぐりて相語る知らず何人の上ぞや。文壇の鬼才、内藤千代子一行の函嶺行紀念の一葉は即ち是れ。

倒影



白日緑樹を照らして晝自づから閑かに池水影を浮べて漣波動かず。

●婦人のこしけは恐ろしい

素人の中にはこ。し。け。と言へば婦人に附物で或人の婦人には誰にでもあるものゝ様に心得て居る人がありますが之は大なる誤りで有升元來健康の婦人には經血時の外は如何なる場合にも決して下物は無いものであります、換言すれば、月經期に當つて時々薄い水様の分泌物の伴ふ事がありますが、其量極めて少く且大抵經血も共に下る所から、殆んど本人自身にも氣附かれぬ位であります。

▲病的の白帯下 之に反して月經期又は月經の前後に卵の白味の様な濃い粘のある分泌物があつたり、月經でない時にも下物があつたり、其下物に惡臭があつたりするのは、言ふ迄もなく病的のこ。し。け。子宮其他の生殖器に病のある證據であります。一體此白帯下は慢性婦人病の特徴で殊に子宮内膜炎、子宮肉腫・子宮癌腫などには頗る多量にあつて病の進むに從ひ黄色な鼻汁の様な粘液に變り強度の酸性を帯び而して何とも言へぬ惡臭を放つものです。

▲白帯下と頭痛 それから斯様な白帯下のある婦人は一般に逆上強く、頭痛持癇癪持で神經過敏であるのは爭はれぬ事實であります、又多く冷性で常に足腰が冷え勝であるのも既に皆様の御存じの事でありませう。之を其儘に打捨て置くと常に局部の不潔となりて惡臭を發し、糜爛、痛痒くなる事もあります、事茲に到れば、勿論婦人病は餘程嵩じて居るから治療愈ゝ困難となり、一朝一夕に根治する事は到底六ヶ敷なります。

▲不姙性と帯下 前にも述べた通り婦人が一旦子宮其他の生殖器病に罹ると分泌の量は著しく増加して所謂白帯下となり、分泌物には異様の惡臭を伴ひ強き酸性を伴ふ様になります、生殖素は極く弱い酸性には耐へ得るも淋疾又は子宮病から來る白帯下の強き酸性に出逢つては、直に死滅し、又偶々死滅せずして卵子と接合しても其勢力の大半を奪ひ去れて居るから迚も妊娠の原因となる事は出來ませぬ。猶此白帯下に就ては種々御話致したい事もありますが、紙面に限がありますから詳しい事柄は北畠、佐藤兩先生の御書になつた『子宮病自宅療法』と云ふ書物で御承知を願ひます。

●注意 兩先生の治療書は一般患者に無代送本せらるゝ筈なれば婦人病者は速にハガキにて東京築地新榮町笹岡藥房宛女學世界で見し旨御申添へ申込せられよ。

文學士 久保天隨君編

讀書作文 新式大辭林

洋裝菊判脊革上製函入
美本紙數千四百五十頁

全一册

正價金參圓五拾錢……小包料（市内四錢 内地廿錢 樺、臺四十錢 支、鮮五十錢）

六月三十日まで――特價金貳圓八拾錢（外要送料）

語を聚むること無慮數十萬、而してその各語に就いて周匝穩妥なる解釋を著けし外、同意義の漢語を類集し、同訓異義を辯じ、更に添ふるに典故を以てす。これを使用するものは、ひとり語義を知るに止まらず、文を作るに際しては、構想の端緒を得、筆端窘束の患なし、たゞこの一部以て他の十數種の雜書に抵敵すべし。編者四年の心力、凝つて乃ち斯書と成る。新式の稱、斷じて僭に非ざる也。

逸する勿れ！

發兌元　東京日本橋本町

女（りの二）


白木屋
白木屋
六月一日より
かたびら地大賣出し
●團扇、扇子陳列會引續開催
●岐阜提灯陳列會引續開催
●夏季洋服地悉皆取揃
●本年流行夏帽子ショール陳列
●スタムプ形一時間寫眞逐日好評
白木屋

(りの四)

女學世界
記念增刊

月宮殿

第十二卷
第九號





年齢、學問、智識、經驗、修養

△女子教育三大家の教訓▽

三輪田眞佐子

忘れられぬ教訓

私は書物の上ばかりでなく、又學者の言葉からばかりでない。いつも世のすべてのもの言ひかへれば綠の山、清い川、咲く花、歌ふ鳥・など時々刻々森羅萬象から教訓を得るのであります。例へば春の盛りの美しい色を見ては、その花の過去は霜や雪や嵐のために殆んど枯木の姿となり、悲しい辛い秋冬を忍んで來たのだと思つて忍耐を學び、また空飛ぶ鳥を見ましては、あの鳥は學校もなく圖書館もないのに、よくその分を心得て獨立自營でやつてゆく、と思ふにつけても、人間の依賴心の強い事など感じられて自ら愧ぢ自ら勵ますなど數へれば限もありません。けれど其の中でも深く身に染みて忘れる事の出來ないのは祖母の事でございます。

祖母の人格の感化

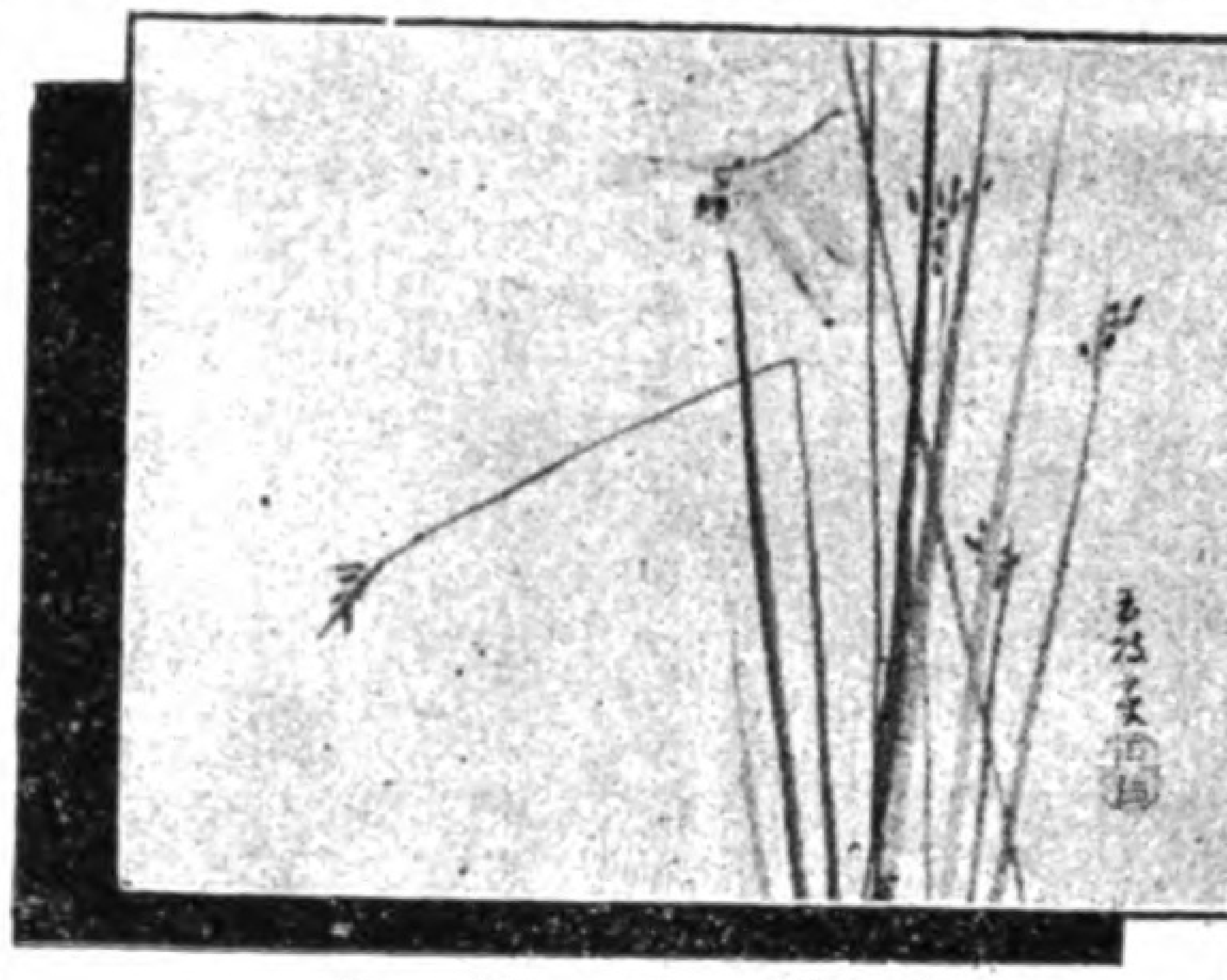
私の祖母と云ふのは大變に人交際のいゝ人でした。近所のものばかりでなく、祖母を知つてゐる皆のものが、非常に敬服し、且つなつかしむで居まして、一人として、陰口をきくものはなく、至つて評判のいゝ婦人だつたのでございます。それもその筈で、祖母は、居間にも臺所にも目に觸れる主な場所には必ず、論語にある晏平仲の「人と交る久しうして之を敬す」と云ふ語を書いて貼りつけて居ました。成程お祖母さんはこの主義で人に接せられるから、これまで、まだ人と不穩の言葉を交された事もなく、何一つ衝突された例もないのだ。圓滑に人と交り、長く交誼をつゞけてゆくには、この心がけがなくてはならないのだ。と私は子供ながらこの言葉を深く腦裡にきざんだのでありました。

師より受けた訓戒

モ一つは私が子供あがりのほんの荒い時分の話であります。その當時左傳の輪講――今日で云ふ研究會がありました。私も若徒をつれて毎日通つたのでございます。(私の外は皆男でございましたが)、で或日の事、輪講を終へて歸らうと玄關に出ると、その若徒が、履物を揃へてくれました。私は召使だから履物を揃へるのは當然だと思つて、



すまして、それをはいて、知らぬ顔で歸りました。すると翌日まゐりますと、先生が私に向つてかう仰しやるのです。「貴女は氣がつかないのだらうが、昨日若徒が履物を揃へたのを平氣でおはきなさつた。あれは、假令召使でも男でも、男でなくとも同じ人間でせう。それが履物を揃へた時には、挨拶には及ばないが、輕く默禮をするとか、さなくともモ少しどうか、氣の毒だとか、すまないとかの意が身振に現はれさうなものだ」と、懇々戒められました。この時私は實に然うだと思ひました。考へて見れば彼も人、我も人、同じ世の人間であると深く自ら顧みて、以來態度をあらためたのでございました。



跡見玉枝女史畫

紅蘭夫人の逸事

又こんな事もありました。私が特別の關係のある梁川紅蘭夫人は、まことに氣高い氣品に富んだ方で私と母子のやうに親しくして下さいまして、よく宅にも遊びに來られ、終日樂しく暮す事も多かつたのでございましたが、その方が「こんなに繁々參つては　あの婆は厄介なものだと女中等に思はれ迷惑をかけるのが氣の毒だから、今から辨當を持つて來るから」と仰しやつて、それからはいつも御辨當持參で見えられました。これは些細の事のやうですが、人に厄介にならない、迷惑をかけないと云ふ夫人の氣高い氣分は大に私共の手本とすべきものだと思ひました。

無限の教訓

書物の上で私の一番感銘してゐますのは、星巌先生の詩の「嘗盡辛酸如鐵」と云ふ一句でございます。これは今迄私の生涯を通じて、困難に遇つた時いつも思ひ起して、自ら勵まし助けん唯一の燈でありました。教訓と云ふものは澤山はいらない。唯一句でも千金の重みのある、實のある精神をかため、心の根柢をつくり得るものでなくてはならないと思ひます。今の人はあまり心の根柢の定まらない中に徒らに多讀する弊があるやうです。讀む本の如きも、智識を愛し、道理を愛し、精神を愛するといふのでなく唯一時の目を樂ましめ、心を喜ばしむるやうなものばかりを選んでゐるやうに思はれます。

兎に角、今申しますやうな事は、今までの生涯に於て忘れられない教訓の二三でありますが　私は七十歳の今日なほ三つゞから教訓を受ける事があります。孫等の無邪氣な天眞な動作や談話を聞いて、無限の教訓を受ける事もありますし　又宅に黑い犬が居ますが、その犬の忠實な行動を見ましても、人間の浮薄な態度と比較して深い忘れられぬ教訓をきざまれる事がございます。

子爵　秋元興朝氏夫人筆



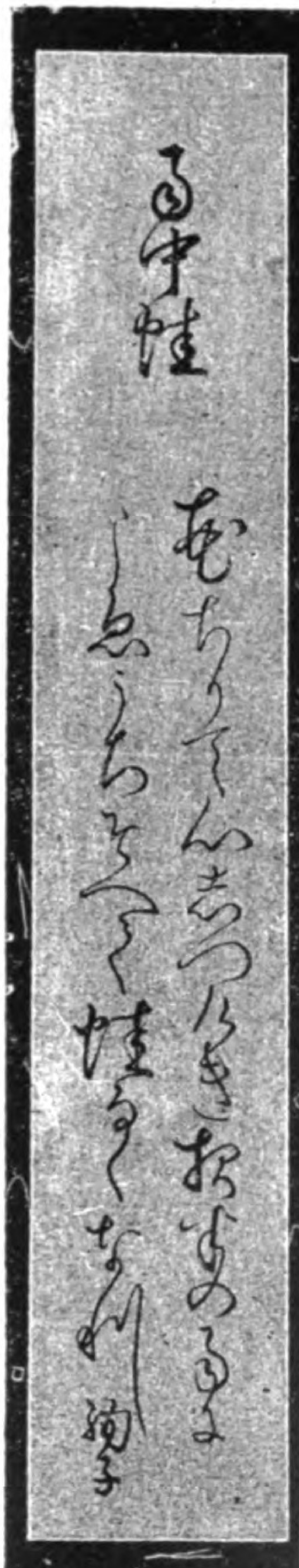
我を作りし我が世界

精神の修養

棚橋絢子

私は讀書が好きで、昔から暇さへあればよく讀んだものです。唯今でも充分讀んで見たいと思ひますが、忙しくて思ふやうにまゐりません。新聞などでも朝は息子が讀んで居ますし、晩歸つてからはおそくなりますから、つひ讀まぬ勝なのです。

私は、何う云ふ種類の本を、どういふ風に讀んだかと申しますと、細かに讀む事はなく至つて大ざつぱな讀み方を致したもので　大體の意味をとる事に重きをおいて、細些な出來に拘泥しませんでしたそれは夫からも始終そんな風に注意をされて居たからです。元來私の家は祖父から父、夫まで皆朱子學の系統で、私も自然そんなものを多く讀ませられ、また好んで讀みましたから、地理だとか何だとか、細かな地名や物產などを詮議して讀むやうなのでなく、早く云へば物質上の智識を目的とせず、精神修養と云ふ事が私の昔からの讀書の目

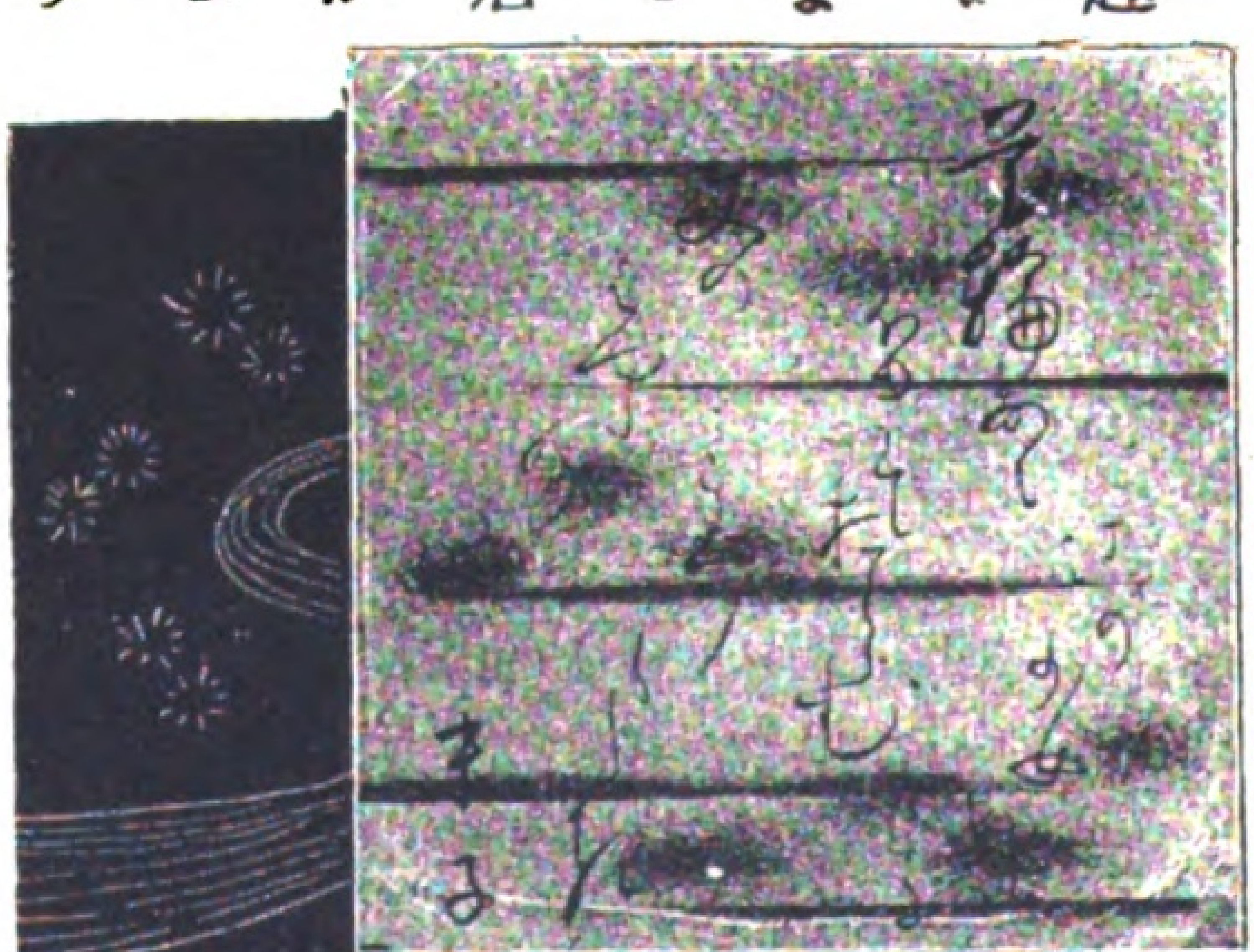


月宮殿…………6

的で、今もそれを主眼として居ます。解り易く云へば、世に處して行くについてのサシガネを得ようと書を讀むのであります。サシガネやブンマハシが正確であれば、どんな書を讀み、どんな社會に立つても、取るべきものと捨つ可きものとの區別が分りますから、間違ふ事はありません。モ一つ例を申せば鏡です。心の鏡が曇らなければ、世の有らゆる事物が正しく映ります。正しくうつれば決して過はありません。ところが若しこの鏡に一點の曇でも殘つて居ると、其の爲め外界の事物の眞相をあやまります。だから私はこの鏡を磨くため、曇なく美しく、透明にするために讀書をするのです。

好んで讀む書物

この見解からして、新らしい本も讀むには讀みますが、漢籍のやうな趣味はありません。知つた方のお書きになつたのならば、どんな事が書いてあるのかと一通り目を通しても見ますが、名も知らない方なのですと、まるで見ないと申してもよい位です。ですから皆さんが時々こんな事もあつた、あんな事もあつたと仰しやるのに、あゝ然うでしたかねえと云つて居なければならない事もありますが、一體私がなぜ新らしい本を讀まないかと申すと、それは精神修養の點から申すと、どうしても昔の本の方が勝つて居るやうに思ひますし、また道德とか人倫とか云ふものは昔も今もさう



山尾子爵令嬢夫人末子氏筆

變るものではありません。だから今の本を見ますと皆昔の燒直しです。昔の數に註釋を加へてやさしく讀ませるとか、または長く引伸ばして燒直したに過ぎないのですから、その本元を讀む方がましだと思ふのです。

古書味ふべし

又一つには、昔のは一句の中にも深遠な意を含ましてあつて、大變かんで味のあるやうに書いてありますが、今のは長い、一丈位のものを讀んでも、その意と云ふものは、ほんのポッちり、一寸にも足らぬ位です。それ故長い時間を費して讀んでも、後で何を書いてあつたのかと考へて見ると、ほんの僅の印象より殘つて居ない。こんな風ですから、私共の樣な忙しいものには、今日の本は一日讀んで居られない。私はいつも然う思ひます。モ少し簡潔に書いて貰ひたいと。實際言葉が少なくて意味の含つたのは、讀んで面白く、時間もかゝらないで兩得です。それにつけても、暇があつたら成る可く多く昔の本を繰返して讀みたいと思ひますが、この節のやうに忙しくては仕方がございません。

無論日に進歩する物質上の智識を得る爲めの歴史だとか地理だとか數學だとか技藝だとか申すものになると、それは何うしても新らしい上にも新らしいものに限りますが、併し私の經驗から申しますと、精神修養と云ふ點からは何うしても昔の本が適當だらうと思はれます。またサシガネの出來て居ない、鋭の磨き上げられて居ない若いものが、今日のフワ〳〵した新らしい書物を、何でもかまはず讀むといふ事は、大に考へねばならないと思ひます。



池水のよいにくしすくみすわれば底の玉藻も光見えけり　　伊勢大輔

（水野秀方畫）

9………………………畫　方　秀　野　水

其日〳〵の務め

跡見花溪



松平子爵夫人岳子氏筆

健康のたまもの

私は散歩が好きですから、毎朝戸外に出ます。この節では五時に起床しますが、女中などを起こすのも本意でありませんから、皆の起きない間に只一人出かけるのでございます。素よりどことあてのあるのでもございませんから氣の向くまゝに本郷から小石川のあたりをブラ〳〵歩るいて見ますので、モウこの邊ならば大抵のところは悉しくぞんじて居ます。朝の散歩は大變氣持のいゝもので健康のためにも少なからず効があると思ひます。

それに私は花などが大好きでございまして櫻時になりますとよく見に出掛けますが、これも朝の間でございます　俥を命ひつけて置きまして四時頃に起きて向島なんかにまゐりますので、花の美しさは朝に限ります。日中になると塵が立つたり何かで、きたない花を見なければなりませんが、朝の間と云ふものは、それは〳〵澄み渡つた、しつとりと沈着いた中に生氣に滿ちた花の色が浮き出て、丁度植半あたりで朝日がさし昇る位にまゐりますと、實に、旭に匂ふ櫻のながめを自分一人で占領してるかのやう

で何とも云へない、いゝ氣持になります。

爽快のこゝろ持

モ一つ氣持のいゝのは朝の間の冷水摩擦で、私は永年之を慣行して居まして、どんな寒い朝でも決して缺かした事はありません。これは何とも云ひぬ、すが〳〵しい氣分になりまして、冬などは却つてホコホコ温まつてまゐりますし、又始終勵行して居ますと寒い風に當つても、さして冷たいとも思はないやうになります。眼も毎朝冷水で洗ひます。

近頃は皆さんが、靜坐法だとか複式呼吸などとか大分御熱心のやうですが、私はいつも深呼吸をやつて居ます。之も永い間やつて居ますが時間は定めて居ません。朝起きた時もやりますれば寢がけにも



いたしますし、その他暇さへあれば絶えず勵行して居ます。殊に俥に乘りました時などは必ず深呼吸をやつて居るのでございます。

齒の事につきましても、いろ／＼はみがきなどが澤山出來ましたが私はいつも就寢ます時分に鹽湯を枕許におきまして、そして朝それで齒を磨きますとこれが一番いゝやうに思ひます　私はズット、かうしてまゐつて居ますが七十三歳の今日迄、齒の痛みと云ふものは存じませんし、奧の齒が一枚拔けたゞけでまだこの通り揃つて居ます。だから食事なども西洋料理でも日本料理でも、皆樣の召しあがるものは何でも大抵いただけますんで、宅でも皆若い女中なんかと同じものを食べて居ます。尤も朝は、殆んど食だかないと申してもよい程、――只お味噌汁の中に卵子を一つ落しまして、それだけいたゞいて居ますが、その他の二食は何でも女中と皆同じものを食べて居ます、どつちかと申せばお野菜ものを多くいただいた方が身體のためにいゝやうです。

學問好なりし私の少時

私は毎朝八時から午後の三時頃まで學校に出まして親しく教鞭をとつて居ますので、是は一日／＼眼には見えませんが、何かゝ出來て行くのでございますから、私にとりましては無上の樂みでございます。元來私は赤兒の時から書や畫が好きだつたさうでございまして、泣いてる時分でも書畫を見せさへすれば直に泣き止む位だつたと申しますが、ほんとうに筆を執つて書きましたのは四歳の時が初めだつたのでございます。又讀書も大變に好きでございまして　あの六歳の時だつたと申します。母方の祖母が

死にまして、その葬式に行つての歸途、父親の脊に負はれ乍ら孝經を諳誦しましたので、その時は父は驚いたさうでございます。私も諳誦しようと思つてやつたわけぢやないんで、好きで讀んで居たものですから自然憶えてしまつたんでせうが、それから皆がこの子は餘程本が好きだと見えるから敎へてやつたらよからうと申したんだと云ひます。

その頃父は私塾を開いて居ましたが、農家の多い田舍の事で夏はいろ〳〵農事が忙しいけれども九月頃になりますと暇ですから夜學がはじまるのでございまして、百疊の廣い間に八十人ばかりが集つて來て讀み書きの道を敎はるのでした。そして私もほんの子供乍ら父の手傳ひをして敎へて居ましたが、今も思ひますのは字を逆さに書いて敎へた事でございます。――相對して居て向にわかるやうに、こつちから逆さに書いたものです。――だから今でも逆さに書いてもチツトも變りはありません。こんな風にして父の手助けをしましたが、十二歳の時京都に修學にまゐりました。しますと私から求めもしないのに華族樣方から、敎へに來てくれだの、敎へて貰ひたいだのと申込まれたんでございませう。それから明治三年でした神田の三崎町にまゐりましたが、そこでもまた上流の方々から御依賴を受けますので到頭八年には仲猿樂町に學校を建てまして、それも狹くなりましたので廿年に只今のところに新築致した次第でございます。かう云ふ風で間斷なく殆んど六十年間と云ふもの敎育事業に身を投じて來ました。

揮毫のたのしみ

尙私は母から跡見の家を再興するのはお前だぞと云はれた言が幼い時からの耳に殘つて居ましたし

再興すると云つて學問、書、畫、などを勵んで天下に名をなす外はないと、その方の努力にのみ意を集中しましたので結婚などの事は思ひつく間もありませんでした。從つて自分の子供を育てるやうな事もありませんし、只讀書、と書畫と生徒を敎育する事とが何よりの樂でございます、モウ私の敎へましたもので孫でも出來さうなのが、いくらもございます。

先日熊谷から花見に來てくれと申しますから、一番古く寄宿舍に居たもの十四名をつれてまゐりましたが、その來いと招んだ者も一番古い寄宿生で、一番若いのが四十歳と云ふんでございませう。それ等の者が集り合つて昔話など致しましてほんとに樂しうございました。

私は學校の仕事の外に揮毫をたのまれるのも澤山、やりきれない程でございまして隨分忙しい身でございますが、人間は働かねば駄目だと思ひます。私の經驗から申しまして、働いて身體を惡るくする事はないのです。只心を痛めると申すのが一番毒でございますが、どんな幸福な境遇でも不滿ないと思へば不滿いもの、つまり氣の持ちやう、考へやうですから、色々の事をくよ〳〵しないでその分に滿足して働くに限ると思ひます。私は先に申しました養生法又モ一つは心に樂を有つて愉快に、毎日働きつゝけて居ますから別に勞れると申す事もなく徒歩いても足が痛むと云ふではないし耳が遠いとか目が不自由だとか、この年になつても、どこと云つて惡るいところもなく肉體上にも健全で働いて居ます。若し私が世間並の御隱居樣だつたらキット身體が惡るいとか何とか申してつまらない日を送るのだらうと思ひますと 私はつく〴〵今の身を有難いと思ひます。



（天沼よれ子畫）

15

交際上の婦人の品位

平安朝時代の才媛

下田歌子

交際上の談話の事につきて御尋ねにより、極雑ながらお話し致しませう。かの才媛の輩出した平安朝時代には餘程注意したものらしく思はれまして、一言一句も苟しくもしなかつたと云ふ風がうかゞはれるのでございます。併しこれは事實として殘つて居るだけで、法としては少しも殘つて居ないのでございます。それが西洋などになりますと、この談話と云ふことが交際上最も大切な一項として、諸禮法の中にも悉く記してあります。先づ第一に話していゝ事は、風景の話とか動植物の話とか、又も少し高尚なものになりますと、文學とか音樂とか、或は美術とか云ふやうなもので、その他、衣食住、または流行等の事につきましては、或



程度迄はいゝとしてありますが、あまり深く立入つて他人の家庭の經濟向に及ぶ嫌ひがあつてはならず、況て人の批評などに至りますのは大に愼しむ可き事として禁じてございます。殊に他の惡口を云ふが如きは淑女の品格を傷けるものとして大々的禁物としてあります。これは道理の事でございまして、私共の始終忘れてはならない事だらうと思ひます。

智識の範圍を廣める事

それからやゝもすると　婦人の話と申しますと、いつも愚痴つぽい家事向の事や、立入つた人樣のお臺所の事や、それでなければ人の噂、それが、ともすれば皮肉な批評になり勝ちで、興味のある上品な話と云つては、まことに少ないと云はれて居りますが、これはつまり、婦人の知識の範圍がせまく、話の材料に乏しいからでございませう。

この話題の單調につきましては、色々の原因もありませうが、日本は地勢上諸外國と離れて居まして、日々の新聞などでも、外國の新らしい出來事などを多く知ることが出來ないのも、その原因の一つでありませう。大陸諸國でありますと、どうしても外國と接近して居ますから報知も早く、新聞の記事の半分は大抵外國の事で滿されて居ますから從つて新らしい話の種も多くなるわけでございます。こ


蘭香女史の筆

れは事情、止むを待ない事でありますが、併しまた、婦人自らの知識の範圍のせまいのも、たしかに其一因であます。



（中山彩畝女史畫）

話の材料は目の前に

併し何もさう、博く讀まなければならない見聞しなければならないと云ふわけでもありますまい。見ても聞いても、讀んでも表面で、よく咀嚼しなければ、知識は博くなりませぬ。假令一つの事でありましても、よくそれを咀嚼して居ますと、いくらも話の緒はその中から引出される筈で、この點から考へ及んで見ますと、何よりも注意の缺乏といふことが話の單調で

また話題の少ない原因であらうと思ひます。

若し充分注意して居ますならば、一丁の道を歩いて來ましても、一時間や二時間の話は充分得られるのでございます。例へばその一丁の間で、八百屋と呉服店、小間物屋と、米屋と魚屋と、これだけのものを見たとしても、注意さへして居れば、それからそれと充分の話が、するするたぐり出されるでせう。實際、私の家から高輪あたりまで參ります間にも、八百屋の品が少しづゝ變つて居ます。それ等の事につき、又日本のものがどれ位まで出て居て、外國の果物がどれ位輸入されてるとか、氣をつけて見ますと、いくらも話題は出て來るのでございます。況して呉服店だとか小間物屋などを見ましたら　どれ位の話が引出されるかしれないのです。

交際上に大切な話の德義

斯くの如く細心の注意を以て極めて廣く話題を求める事も必要ですが、それと共に議論を避けて、肩の張らない、興味のあるものを選ばなければなりません。そして自分に趣味のあるものより、他人に趣味のあるものを題とするのがよいのです即ち談話の一つに就いても、他を先にして己れを後にする德義を含むべきでございます。又他人の趣味に投ずるといふばかりでなく、他人の話をよく聽くと云ふ事が、交際上大切な事でありまして、自分一人で間斷なく咄し續けて、チットも他人に口を利かせないといふのは非常な無禮でございます。人によりますと　他人がチョイと口を出すと、直に、その言葉を奪つて

自分の話にしてしまうものもありますが、これまた無禮な行爲でありますから、呉々も注意しなければなりません。勿論、何等か特別の場合、他を壓して、そして自論を貫かねばならぬ時もありませうが、先づ婦人には左樣の場合も少ないのでありませう。

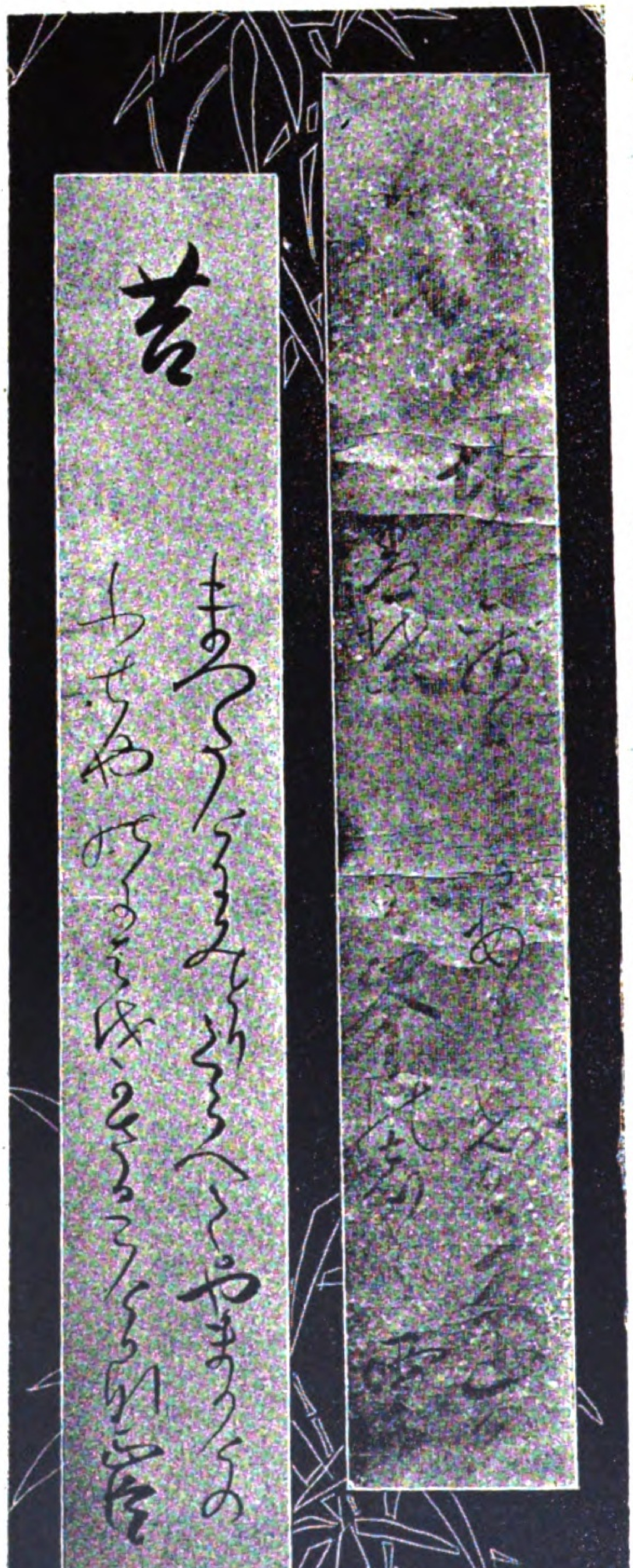
精神のこもつた話し方

モ一つは、如何に話題がよくても、精神がこもつて居なければ、死んでしまひます。ですからいつも精神を入れて生きた話し方をしなければなりません。他人の話を聴いてる場合も同然でございまして、如何にチッと聞いて居たからと申して、徒にして聞かれるのだつたら、相手は却つて不愉快を感ずるばかりで、まことに失禮な事なのでございます。だから面白い時にはチョイ〳〵受け答へをしたり、詞を程よく加へたり、生きた聽方をしなければなりませぬ。

尚大に注意しなければならないのは、言語の事であります。いつでも同じでありますが、殊に交際上の談話になりますと、意味のはつきりと解るやうな話し方をしなければなりません。折角面白い話でも何を云つてるのだか、よく先方に通じないやうでは、駄目でございます。中にはハキ〳〵した話方をすると生意氣な樣に考へて、「あえかにこめきて息の下よりの御物云ひ」などゝ、昔物語にあるのを理想としてる方もございませうが、これは時勢の變遷と、社會の要求に注意しないからでありまして、今日では婦人だからと申して、そのやうな引込思案を免されないので、凛とした淸く張のある聲で、順序正し

く、能く要領を云ひ表はすやうにするのがよろしいのでございます。

と申して、また何でもハキ〳〵した物の云ひ方をさへすればいゝと誤解する人もあるかもしれません。が、凡そ婦人の言語の特長はと申しますと、その優美な點、叮嚀な點にあるのでありまして、この美點のために聽く人をして云ひしらぬ快樂を覺えしめるのでございますから、この特長は、どこ〳〵までも失つてはなりません。且つ言語の選び方が大切で、いかに先方に趣味のある事でも、決して自己の品格を害ふやうな言葉を使つてはなりません。要之、肩の張らない興味ある、そして先方の感情をいためぬやうな話を選び、自己の品格を害はない婦人らしい優美な言語で話すと云ふ事に注意しなければならないと思ふのでございます。



右）二條公爵夫人洽子の方書　（左）阪正臣大人書

處女時代の修養

修養には身體が大切

矢島楫子

人間は幼年時代、少年少女時代、成年時代、老年時代と次第に考が變つて行きますが、女ならば處女の時代に一生涯の運命が定まるのでありますから。この時代は一生の中の最大危機と申さねばなりません。それでありますから、この時代に於て注意す可き事、修養す可き事は數々ありますが、それが今迄は多く枝葉にのみ走つて居たと云ふ事に近頃氣が付きました。元より人間は有形の身體に無形の精神が添はつて出來上つて居るのでありますから、精神を修養すると云ふ事は極めて大切です。併したゞ精神の修養とのみ申しただけではあまり取り止りがないと思ひます。それに精神と申しますと、何か肉體とはかけ離れたやうに感じる人もあるやうですが實際は肉體と精神とは必ず一致して居るものです。その證據には人がすこやかな時にはその思考も正しいのですが何處か身體の中が痛いとか痒いとか云ふ時には必ず精神の方にも障りが出來ます。それ故に精神を修養するにはどうしても身體が大切であります。身體が健全になると共に精神にも曇りがなくなるので、云ひ古した言葉ではありますが、健全なる身體には健全なる精神が



佐々木博士夫人　雪子女史筆

宿るのであります。

そこで處女の時代には身體が大切である事をみつしり敎へて、身體を大切にする事はとりも直さず修養になるのであると云ふ風に考へさせねば駄目であります。さうなると今度は道德の修養をせねばならぬと云ふ事は敎へなくても分つて參りまして、自身にさう云ふ要求が出て來るのです。それには孔子の敎に則るか、敎育勅語を以てするかと云ふ問題になりますが、孔子の敎は元より正しいものでありますけれども、何だか物足りない處がありまして、そればかりでは道德を行ふて行くには差支へはないが、安心立命が得られません。從つて家を維持する事も身體を保つて行く事も出來ないわけになります。昔は孔子の敎が道德の標準で、それについでは女大學があり、烏丸があり、姫鑑がありました。併しこれらは何れもかくある可きものと云ふ事だけを說くので安心立命は出來ませんでした

佛敎を捨て基督敎に入る

私は門徒宗の家に生れましたので、十四五の頃迄は佛壇を飾り、祖先の位牌を並べて花を捧げ、水を供へ、線香を上げるなどかたの如くに日々行つて居りましたし、又開祖の御忌と云ふ時などには、お寺へ坊さんの說敎をも聞きに



與謝野晶子女史筆　河鍋曉翠女史筆



24……月宮殿

行きました。そして坊さんの有がたさうに珠數つまぐつて、種々法の道を說き、佛の功德を頌へるのを聞かせられたのです。處が十五六の頃に小學を讀むと、その中にかう云ふ事がありました。それは佛法がまだ支那に行はれない前の事、一度死んで甦へつた者があるのですが、その人々が死んだ時でも未だ嘗て一人でも地獄極樂を見て來た者がないと云ふのでした。その中に相當の年にもなりまして、緣があつて他へ嫁しましたが全く家風の違ふ家でありました爲に、私はすべて思想の自由を缺くやうになりました。それからかうして一生を送るよりは、自分の身を立てる事が自分に對する務であると考へて、思ひ切つてその家を出ました。

その後東京へ出て、講習所へ通ひましたが、その時につく〲宗教を持つ人の心の平和であり、希望があると云ふ事を感じまして、遂に自分もキリスト教を信ずる樣になりました。今と違つて研究するにも人も少なく、餘程困難でしたが、六七年かゝつて漸く一と通り會得する事が出來、それから引きつゞいて今日迄研究を續けて居る次第なのであります。

宗教は心の平和を保つ所以の道

かやうな私の經驗から考へましても、宗教がなくては心の平和が保てませんし、安心立命を得られません。それ故に自分の人格の尊い事を知つて、殊に處女時代は生理的變化のある時期でありますから、一層身體が大切であると云ふ自覺を確かにして置く事が必要であります。身體が大事と云ふ事が判れば必ず心の慰安として宗教がなくてはならぬと云ふのが自然の要求になつてきます。

この根本さへ出來て仕舞へば、品行がどう、學科がかうと云ふ心配は決してないのです。それらは云はゞ枝葉ですから喧ましく云はないでも、自然に愼まねばならぬやうになつて仕舞ふのです。かうして根本が養はれて居れば、稀に病氣に罹つても、醫者が有り難くなくなります。病氣すると云ふ事が自分の恥辱のやうに思へて滅多に身體を害ふ事はなくなります。子供の中は兎も角十六七にもなつて一應物の道理がわかるやうになれば、自分の身體の事などは、人から干渉されずとも、獨りで始末して行くのでなければなりません。併しこれは決して他から束縛したとて出來ない事であります。處女の心は決して規則などで搦める事は出來ない者であります。何處迄も自發的にさせるより外はありません。

嫁の覺悟と姑の覺悟

鳩山春子

姑の嫁にあたる理由

姑と嫁の間の面白くないのはよく新思想と舊思想の衝突だと申しますが、それならば同じ女大學の敎育を受けた封建時代の姑と嫁とは思想が同じでありながら、やはり仲がよくなかつたのを見ますと、强ち新舊思想の衝突ばかりではあるまいと思はれます。

姑と嫁の仲のよくないのは　年齢の相違から平生の心持も違ふ。其相違がいろ〳〵にもつれて、つい双方の圓滿を缺くやうなことになる。それに嫁に子供でも出來ますと、姑を大切にしなければならないと承知しては居りながらも、つい子供の愛に引かされて、知らず識らず姑の機嫌を損するやうなことにもなるのであらうと思はれます。

一體男でも女でも若い中は希望に滿ちて居りますから、快活で無邪氣でありますけれども、それが一旦嫁になりますと、追々と苦勞が始まります。先づ第一に子を產むのが命懸けの苦勞で、それが難なく濟みますと、今度はそれを一人前に育て上げなければならないといふ苦勞があります。その外家政上の苦勞や何や彼やで、心から苦勞の離れる暇もないやうな次第でありますから、どうかして早く樂をしたいといふことは、女親としては誰でも思つて居るものです。

處で其子供が一人前になつて嫁を迎へ、軈て一家の事を何も彼も皆任せて了つて、是から樂をしやうと思ひますと、身體は樂になりましても、心には今迄の苦勞の代りに不平が起つて參ります　それと申しますのは、今迄は何も彼も自分の手一つでして居たことが一切若夫婦の手に移つて了ひますと、同時に自分の今迄の權力までが無くなつて了ひます。今

迄は女中などから、奥様々々と立てられて居たのが、急に御隠居様には用がないと云はぬ許りの扱ひにされて、餘處から入つて來た嫁の方が權力を持つやうになりますから、自然とひゝがみ心も出て、つい嫁にあたるといふことにもなるのであらうと思はれます。

適宜の仕事を取るべし

又西洋の諺にも『仕事は幸福なり』と申します位で、女に仕事のない程生活に張合のないことはありません。身が樂になつて何もすることが無くなりますと、只詰らないことばかり考へます。若い時の樂しかつたことなどを思ひ出して、皺が寄つて髮が白くなつた今



の身に思ひくらべますと、只味氣ないことばかり、それやこれやがもつれては不平のもとゝなるのでありますから、餘り早く隱居するのは宜しくありません。又早く隱居をするにしましても、今少し何か仕事をして貰ひたいと思ひます。いくら一家の事は嫁に任せましたにしても、人には相應に仕事はあるものであるから、或は家の掃除をするなり、孫の守りをするとか、又は園藝をやるとかした方がよいと思ひます。若し上流の婦人でそんなことをする必要がないとあらば、何か慈善會のやうなものでも起して、適宜の仕事を作つた方がよいのです。現に勞働者などの家庭を見ますと、嫁も姑も共々に一生懸命になつて働かなければ生活が出

來ません。仕事に追はれて樂などする暇もないのですが、中流以上の家庭よりも却つて圓滿に治つて居ります。

双方のたしなみ

一方嫁の方では、夫を大切にするのは云ふまでもないが、其大切な夫を育てゝ呉れた姑をも大切にしなくてはなりません。老人は先きの短かいものですから、出來るだけ大切にしますと、姑の方では自然、自分の子のやうに嫁を可愛がるやうになります。

夫婦仲が好過ぎるとて姑がやつかむなどゝ申しますが、仲がよければよい程、姑が喜ぶべき筈でなければなりません。夫婦だけが仲がよくて姑を粗外するといふなら、不平も起り、やつかみもするでせうが、夫婦同心になつて大切に孝養を盡して呉れるものに對して姑たるものが何で不足に思ひませう。

かういふ風に姑も嫁も互ひに相敬愛し合つて行きますと、一家は自然睦じくなる筈ですが、今一つ大切なことは互ひに惡口、告口を言はぬことです。嫁は姑の惡口を夫に告げ、姑は嫁の惡口を息子に告げるなどは往々あることですが、それでは中に立つ夫が堪りません。そんなことになりますと次第に家に歸るのが面白くなくなりますから、つい茶屋酒でも呑むといふやうなことになります。

それのみならず、双方が惡口を告げ合ふやうなことになりますと、双方の心がます／＼ひがむやうにもなりますし、一方は又段々と妻の面白くないことが目につくやうになります。

之に反して嫁は夫に對して姑のことを褒めると、自分の大切の親を褒められるのですから決して惡い心持はしない筈です。さうなると姑の方でも嫁を可愛がつて呉れるやうになります。

草層つどる盆右の金魚鉢　禾水



(淺見樂娛女史畫)



古人我を欺かざるの説

◎萬づの事、務めて止まざれば、必らず驗あり。譬へば春種をまきて、夏よく養へば、秋必らず結實するがごとし。人もし養生の道をつとめ學びて、久しく行はゞ身つよく、病なくして天命を保つこと疑ひなし。

◎草木を植ゑて愛する人は朝夕心にかけて水をそゝぎ、土をかひ、肥をし、蟲を去りてよく養ひ、其榮ゆるを悦び、衰へるを憂ふ。草木は輕くして我身は重し、豈我身を愛すること草木にたもしかざるべきや

◎養生の道は我身を害ふ物を去るべし。身を害ふものは内慾と外邪なり。内慾とは飮食色慾、睡眠、喜怒、憂思、悲驚の七情なり。外邪とは天の四氣、風寒暑濕をいふ。内慾をこらへ尠くし、外邪をおそれてふせぐ、是れを以て元氣を損はず、病なくして天命を保つべし。

◎養生の術はまづ心氣を養ふべし。心を和らかにして、氣を平らかにし、怒りと慾とを押へ、うれひ思ひを尠くし、心をくるしめず、氣をそこなはず、是心氣の要道なり。又臥することを好むべからず。久しく睡り臥せば氣滯りてめぐらず、飮食いまだ消化せざるに早く臥しねぶれば、食氣ふさがりて、甚だ元氣をそこなふ。

◎酒は微醉にのみ、半酣をかぎりとすべし。食は半飽に食ひて、十分に充つべからず、又若き時より色慾をつゝしみ、精氣を惜むべし。精氣を多くつひやせば、下部の氣よわくなり、元氣の根本たえて必ず命短かし。

◎身をたもち生を養ふに一字の要訣あり。是を行へば生命を長くたもちて病なし、一字

月宮殿……30





の訣何ぞや、畏の字是なり。畏るゝとは身を守る心法なり。事ごとに心を小にして氣にまかせず、過ちなからん事をつとめ、つねに天道をおそれて、つゝしみ随ひ、人慾を畏れてつゝしみ忍ぶにあり。

◎心は身の主なり。静かにして安からしむべし、身は心の奴なり。動かして労せしむべし。心やすく静かなれば、天運ゆたかに、くるしみなくして楽しむ　身うごきて労すれば飲食滞らず、血氣めぐりて病なし。

◎身體は日に少しづゝ労働すべし。久しく安坐すべからず。毎日食後に必らず庭園の内数百歩しづかに歩行すべし。雨中には室内を幾度も徐行すべし。この如く毎日朝夕運動すれば飲　食氣血の滞りなくして病なし。

◎養生の術は、つとむべき事をよくつとめて、身をうごかし、氣をめぐらすをよしとつとむべき事を務めずして臥す事をこのみ、身をやすめ怠りて動かざるは甚だ養　生に害あり。久しく安坐し、身を動かさゝれば食氣滞りて病おこる、

◎言語をつゝしみて、無用の言をはぶき、言葉を少くすべし。多く言語すれば必らずへりて又氣のぼる、甚だ元氣をそこなふ、言語をつゝしむも又徳をやしなひ、身をやしなふ道なり。

◎養生の　志　あらん人は、つれに我が心に主あるべし。主あれば思慮して是非をわきまへ、忿をおさへ、慾をふさぎて、あやまり少なし、心に主なければ思慮なくして忿と慾をこらへずほしいまゝにしてあやまり多し。

◎よろづの事、一時心に快き事は、必らず後に殃となる。酒食を縦まゝにすれば快けれど、やがて病となるの類なり。

随筆

その日〳〵の糧

山茶花

野菊の印象

山の頂には雲が白く積むで居ました。身を切る様な北風の吹く、人影も無い田圃道を、母親は小い子を脊負うて、子供の頭へショールを掛けて、街道の方へ出様と歩いて居ました。其の後を、風呂敷包を重さうに抱へて、従いて行く女の子が有りました。夫れは私です。其の道の傍に葉は霜に枯れた紫の野菊の花が、淋しく咲いて居ました。私は豊で無い自分の宅の事情は知り乍らも、猶人並に學校へ行き度いと母に強請みました。遂々母は私を連れて、幾里も遠くの山に居る、叔父の所へと相談に行きました。

野菊を見たのは其の歸り道でした。母に對してしみ〴〵氣の毒だと思つた其の時の思ひが、其の後幾時迄も野菊の花に殘つて見えます。

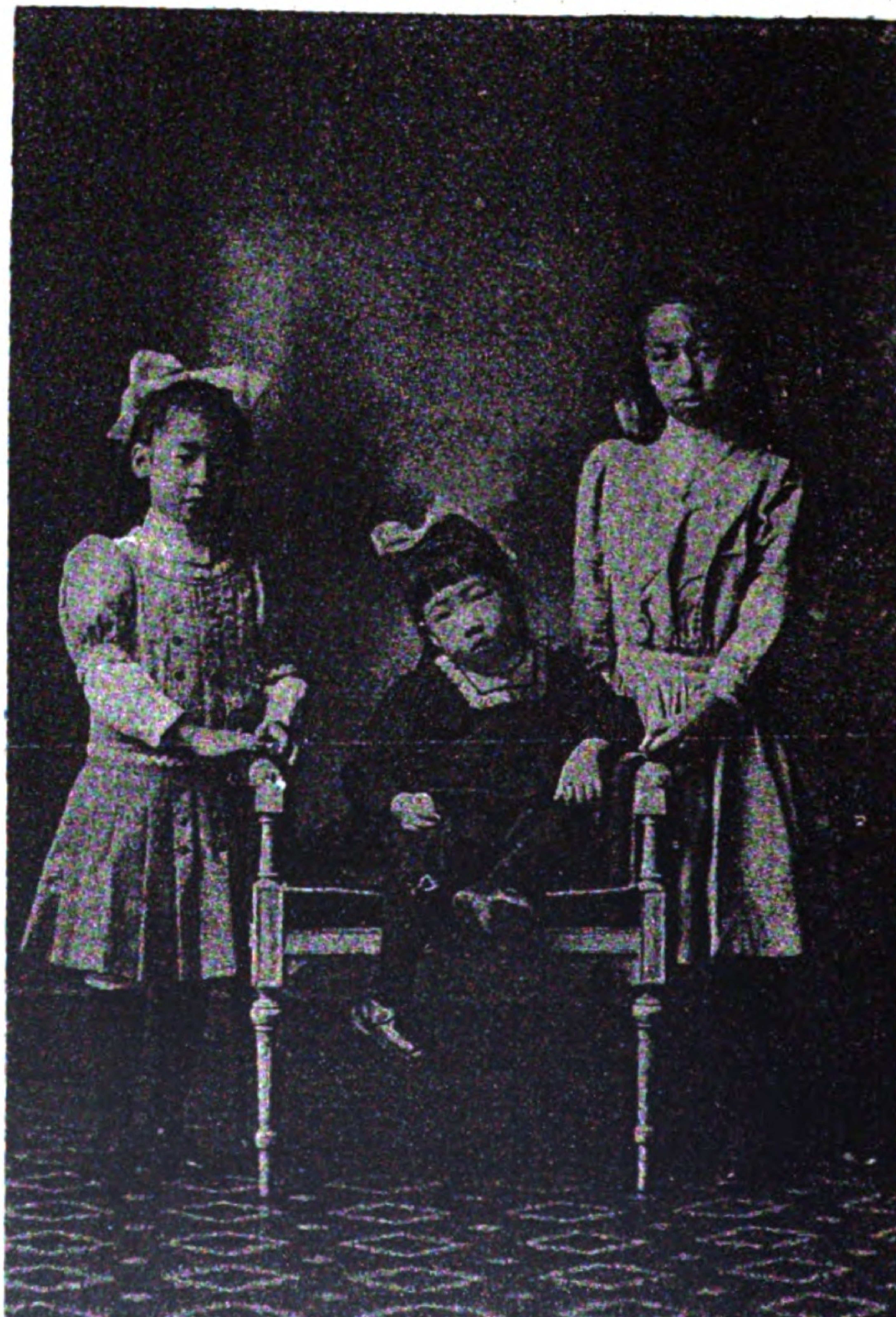
月見草

私は旅に居ました時、何時も夕方になるとぶらぶら外へ出ました。其所は廣い〳〵野原を見晴らす小高い山の上でした。夫れで私はよく大な月が、原の遠くから出る所を靜に眺めた事です。其の山に蝶の羽の様な黄色い花が一面に咲いて居ました。私は其の時脳が悪う御座いました。夫れで一入故郷の事が思はれ、自分の行く先が氣遣はれなどしましたから何となう淋しい遣る瀬無い思ひで、よく其の黄色い花を摘むで來ては本の間へ挾みました。其の後誰かが其の花は月見草といふのだと敎へて呉れました。私は相應はしい名だと思ひました。

繪と事實のちがひ

私が嫁ぎました時に、或方から綺麗な繪葉書を送

つて下さいました。其の繪は、何かの草の下に、雌雄の鶏が澤山の雛を連れて睦し相に遊むで居る所です夫れを見ると如何にも胸が和ぐ様に覺えました。然し私共の宅で養ふ鶏は、可愛い雛が孵化ると、雌鶏は非常に偉くなりまして、雄鶏などとても近付けはしません。もし雄鶏が傍へでも來様ものなら、恐しい顔をして翼を擴げて、掴み懸りもしさうな權幕を見せます。夫れで、はじめ其の葉書の繪を見ました時は是は眞に叶つて居無いと思ひましたが、又強て理窟をつけて見ました。母となると偉

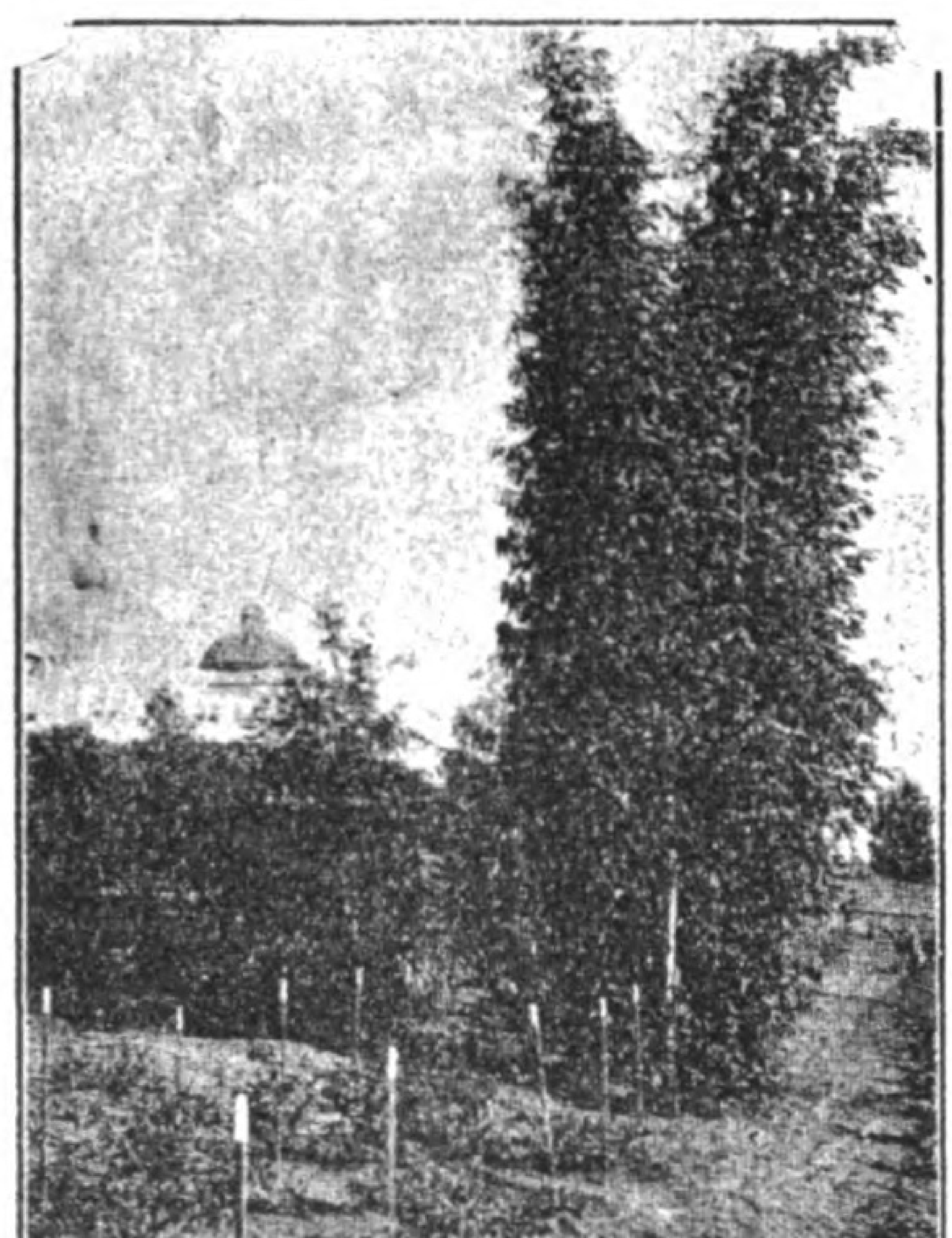


薫風や紫の裳白の袴　（紅花）

くなるのが自然だけれども、偉くならずに此の繪の様に睦しく有れといふので有らうと。

母鷄の精力

私の宅では澤山の鷄を養つて居ます。一度孵化すに十六七も卵を入れます。一羽の母鷄で二巣孵化す事が出來るといひますから、一度試て見様といつて、始め可愛い雛が澤山孵化つたのを見て、直ぐ雛を取つて、母鷄の腹の下へまた二十近い卵を入れました。親を知ら無い雛は、石油箱の巣のまま日向へ置かれました。最初は皆恐さうに巣の出口迄來て外を見て居ましたが、暫時して雛の一つが、始めてそつと土を踏むで見ました。すると次の雛がそれを見て、同じ様に戸の外へ出て見ました。其の中他のもそろ／＼出ました。次の日は早巣を離れて二三尺位も遠くへ出て居ましたが、私の足音を聞くと、すた／＼巣の中へ逃げ込みました。三日目の夕方には、一間から一間半程の所を餌を探して歩いて居ました。第二の巣を熱心に守つて居た母鷄をふと見ますと、顔の色が眞白に成つて居ました。驚いて見てやらうとしましたけれど。卵を離れまいと、ばた／＼悶躁きました。漸々出して羽の下を見ますと、羽蟲がうよ／＼して居ました。それで藥を飲ませたり、石油をつけてやつたりしましたけれども、其の親鷄はぢき死んでしまひまし



34……………月　宮　殿

た。私は顔の眞白になつた鶏が、暖めかけた卵を離れまいとして、悶躁いた樣が暫時目について忘れられませんでした。石油箱の可愛かつた雛は　やがて土臭い雌雄の鶏に成つてしまひました

葵祭の行列

京都には毎年秋になると時代祭といふのが有ります。葵祭に似て、夫れほど古風では有りませんが



夫れよりも賑やかに、幾時代もの行列が引き續きます。或年藤原時代の行列の中に、高倉の石屋の主人が居ました。鮮やかな色の直衣直垂で靜々と馬を歩ませて居ました。平常は破れの印袢纏で、かち〱石を切つて居ますが、直衣姿の石屋は、中將か少將か。何方にしても殿上人といつて可笑しく無い人品が備つて見えました。祭がすんで石屋の前を通りましたら、主人は其の儘の姿で歸つて來て、子供等に見せて笑はせて居ました。

清き名を汚す尼御前

下加茂の糺の森の陰に、せみの小川といふが有ります。後光明天皇樣が、石川丈山をお招ぎになられました時丈山は、渡らしなせみの小川の淺くとも老の波そふ影も恥し。といつておうけし無かつたといはれて居ます。其のせみの小川は今も淺い小い川で、粗末な水車など架つて居ます。私は其所を見て、丈山が閑居して居

るといふ、一乘寺村の詩仙堂を尋ねました。行くと今迄座敷で何かして居た若い女が二三人奥の方へ入りました。私は筧の水の落ちて居る靜な庭を見、丈山が常に居た三階の部屋など見て下りて來ますと、尼さんがお茶を汲むで來ました。歸りに連れの人がいひますのに、あの尼さんがいけない尼さんで、寶物なども賣つてしまひ、變な男を引き入れて居ます。彼所に居た女は其の男の連れて居る娘ですと話されました。せみの小川に淸い名を止めた丈山は、地下でさぞ末世の淺間しさを泣いて居られるでせうと私どもは言ひました。

滴るやうな情味

昔の草紙や物語に出る男を考へて見ますと、源氏に出ます男は、如何にもこせ〳〵と氣が付いて、而してよく間に合せの噓をいひます。妻に言ふ許りでは無く、自分共より目上の人や、恐多いお前でさへ兎角取り繕つた間に合せをいひます。而して表面は美しくして居ても、心の底には樣々の物を包んで居ます。それで淚に袖を濡して泣きます。光源氏や香宮などは殊に柔弱な樣ですが、比較的男らしい夕霧でも、落葉の宮に通ふあたりは、矢張弱々として見苦しい物でした。同じ時代に書かれた物でも、枕の草紙に出る男は、大分違ふ樣に思はれます。枕の草紙で見ますと、女は賢く男は皆薄馬鹿な樣に見えますけれども、其のぼんやりした所に大ぞやかな男らしい所が見えます。大進生昌などいふ人は、常に淸少納言に小賢しう恥かしめられますけれども、少しもびく〳〵した所は無く、女に言ひ媚はされても、無邪氣に笑つて居る樣な、大ぞやかな懷しい所があります。男の筆に成つた故か、また少し時代が違ふせいか、伊勢物語に出る男は、いかにも男らしく、何の拘りも僞りも無く、思ふ通りをすぱ〳〵と遣つてのける風が有ります。而して悲みは强みの有る悲みでせう。或一段に、夫が宮仕へに出て三年歸りま

せんでした。女は他の男に逢はうとしましたが、丁度其の晩夫が歸つて來ます。女は有りのまゝの事をいひます。夫れを聞いた男は、女に少しの未練も無くなつて、歌を詠み捨てゝ歸らうとします。女はもと／＼其の夫を忘れる事は出來ませんでしたから、追ひかけて行きますけれども、男は顧る事もせず行つてしまひます。女は遂に追ひ付く事が出來ず、道に倒れて指の血で岩へ歌を書きつけます。この二人の心の移つて行く樣など、少しも不自然な所が無くて、非常な强みを持つて居ると思はれます。此の一段許りで無く、此の物語は段毎に、少しも雜り氣の無い、滴る樣な情味を汲む事が出來る樣に思ひます。



晝顏の咲くや路通が足の下（小波）

婦人の褄はづれ

美しいお筆は久しい前からお懐しく拜見して居ました或知名の御夫人を、或日始めてお尋ねしました。漸々見付かつたお家は、固より簡素なお住居でしたが、其の高振ら無い御樣子や、亂れたまゝのお髪は、私の前からの想像とは餘程違つて居られました。私がお暇乞ひして出ました後で其の方は、緣先から、お豆腐屋さんと門を通る豆腐屋をお呼びになられました。私は

實に趣味の有る貴い御暮しだと思つて、前にも增しておゆかしく成りました。

古く雅びたる面

洛西壬生寺の念佛狂言は、今から六百年餘り前に始つた物で、每年菖蒲や躑躅が咲く頃に有ります。涼しい野風が役者の袖を吹いて、雀は舞臺の軒の古い瓦から、出たり入つたりして飛んで居ます。此の狂言には一際言葉をいひません、鳴物は金鼓と太鼓と、偶には笛が入る位で、何の表情の變化も無い面を被つてします。筋も極簡單な物ですけれど、何となく古雅な面白味が有ります。何によらず餘り巧妙な物よりは、素樸な物の方に厭きないをかしさが有るかと思ひます。そして私は見る每に來年も來て見樣と思ひます。

小さき嫉妬心

社用で久しく北淸へ行つていらしつた或方が、御歸りの途次御寄り下さいました。「妙な物で、旅行などして居ると、今の家内の事は見無いが、原の家內の事を時々夢に見る。」といはれました。「君の細君は西瓜が好きだつたね。僕も時々御馳走に成つた。」など、主人も言ひました。彼が縫つた信玄袋へ、手紙を十通程と、寫眞とを入れて有つて、僕は時々見て居たんだ、暫時して探して見ると、奈何しても無



いんだね。すると家内が、貴方は時々彼を御覧なすつて、思ひ出していけ無いから、お寺へ持つて行つて埋めてしまひました。と言ふんだ。それでもう彼の形見は一つも無くなつてしまつた。といつて、其の方は淋しくお笑ひに成られました。



世を離れた境界

或秋比叡山へ登りました。私共は足が鈍う御座いますから、頂上へ上り着いた時丁度お日は入つてしひました。頂上には百年も千年も經つて居るかと思はれる樣に杉が、すく／＼と夕暮の空に聳えて居ます。其の重々しい空氣を吸ふと、何ともいへず身が引き締る樣に覺えました。其所に大講堂といふ大い御堂が有ります。其の日は丁度五十年に一度とかの法會の日だ相でして、嚴かな式が有つて、掛け渡した簾の中に蠟燭の火がちら／＼と見えて、大勢の僧さんが靜に篳篥を吹いて居ました。高い／＼山の上に、多くの人が靜な心で集つて居るのを思ふと、何となく世を離れて、心は樂しい自由な世界に遊ぶ樣に思ひ乍ら、私共は階段に腰を掛けて、疲れた足を休め、夜に成つて行く空を靜に眺めました。

宵月や松の影落つ月見草　　露石

塔一を山の景趣や夏木立　　禾水

都路の宿青簾に飛燕哉　　晩秋

目ざまし草

ローマの美人投票

今年の春のことでありますが、イタリヤのローマに面白い美人の投票がありました。それは二十歳以下の娘で兩親共にローマ生れでなければいけないので、ローマの全市を十八區に別けて、一區毎に王女と侍女と二人を選び、別に全體から一人の皇后を選ぶのでありました。初めの中は兎や角の非難もありましたが、何が扨見え坊のローマ娘のことでありますから忽ちの間に大變な競爭が始まり、いよ／＼開票の結果、必ず當選疑ひないとのみ思ひ込んで居たのがまんまと失敗し失望の餘り何階とかいふ高い窓から身を投げて死んだ者もあるといふやうな、一時は大きな騒ぎでありました。



それに引かへ首尾よく當選した美人は、天にも昇るほどの大喜びで、十八組の王女と侍女は思ふ存分の美しい化粧をして、出來るだけの華やかな衣裳を着まして、總人數三十六人行列を作り、皇后に附添ふてローマ全市を殘るところなく練り廻つたので、往來の兩側はいたるところに黒山のやうな人だかりで行列の通るところは、拍手のひゞき鳴りも止まない程でありました。



處で其皇后に選まれた美人は、トラスヴェル區から選ばれた王女でシグノリナ、パルミラ、セツカニ孃といふ十八歳の煙草工女でありましたが、其美しいこと遠近に鳴りひゞいて、英國の或る彫刻家は孃を英國へ連れ出さうとしましたけれども、孃には契を結んだ職工の情人があつた爲めに望みを果たさなかつた。

又此選擧で皇后になれば二百ポンドの賞金を貰へるので、今まで貧乏のために結婚をし兼て居た孃は、此賞金で直ぐに情人の職工と

結婚をいたしました。又王女になつた美人へも二年内に結婚をするなら賞金を與へるといふことであつたが、十八人の王女にはそれぞれに婚約をした人を持つて居るのもありますので、一日も早くと結婚を急いで居ります　其外まだ情人のない向には諸方からおびただしく結婚の申込みが來て返事をするのに困る程であつたといひます。

女同志の夫婦

近頃ロンドンの或街に、一間を借りて餘處目に羨やましいほど睦しく暮して居るダラモーアといふ若夫婦がありました。男は鉛職人でありますが、身分にも似合はぬ至つて眞面目な男で、毎日仕事が濟むと直ぐに家に歸つて、夫婦二人が睦しげに本を讀んだり、又は腕を組合つて散歩をしたり時としては芝居見物に出かけたりして居るが、



如何に睦ましいとは云ひ、只だ一度も口いさかいなど一ツしたことがないといふのは、不思議なほど感心な夫婦であるといふ近所の評判でありました。

處が或日其妻の兄弟だといふ者が突然とやつて來て何ういふ理由か其若妻君を無理に連れて行かうとしましたので、亭主は大變に立腹して、其男と烈しい格闘をはじめましたので、警官が出張して拘引をしまして、いろいろと取調べをして見ましたところが。意外も意外、大變な意外なことが現はれたのです。

今迄は近所の人も、又警官も全く男だと信じて居た亭主は全く女の假裝して居たので、此夫婦は双方とも女同志であつたのです。亭主になつて居た方の女はアデレード、デラモーアといふ名前で、妻になつて居た方はセスシーマンといふ双方とも、まだ處女であつたことが判つたのです。



告白

後の妻

葉がくれ

昔々継母ありて己が子のみ愛し、先妻の子は欺きて煮湯に陥れて煮殺し、又我子には美しき衣着せ美味きもの與へながら継子には破れたる衣を着せ食を與へずうゑ死にさせしなど、継母といふ者は世にも恐ろしい〱者と強い〱記憶を心に印したのは、未だ七八ッの母の懐ろに縋りながら、寝物語りに聞かされた時からであつた。

　私は不幸にして十歳にして母さんに死別れた未だ五歳の小弟のあるにも拘ず、父さんは私達に継母について苦勞せん事を恐れて、未だ四十

かぢの音ぞほのかにすなる蜑乙女沖つ藻刈に舟出すらしも（詠人不知）



42……月　宮　殿



山陰の青水無月の江の水に釣する小舟すゞしげに見ゆ（小澤蘆庵）

に成るか成らずの身でありながら、不自由を忍んで後妻をお迎へにならなかつた。

私は幼いながらも家事を助け、父さんや弟を慰勞つて居た。今もよく覺えて居る。小學校の裁縫時間に、弟の通常服に彼處此處に解き絲の付いたまゝ糊付けて持て行て笑れた事など。

十九になつてから、兄さんが公務上東京に出られたので、私も父さんと共に都に引越した。私は小姑の立場に立つたので、所謂鬼千疋の名は蒙りたくないので、成るべく〳〵嫂さんを大切にして居た。御自分は三越から、それコートそれ縮緬と毎月〳〵御求め遊す時、自分は明日掛けるメリンスの半衿一つ持たなかつたけれど、ちつとも〳〵自分にも一枚位などと思ふ心は起らなかつた。唯心の内で人妻となれば、せつせと働いた良人の金で何でも自由に求めてよい權利があるものであらうかと思つて居た。し

かし一度沁み〲と堪へ兼ねて泣いた事があつた。夫は父様の胴着があまり破れて居たので代りを、どうぞと御願ひ申した時、御自分の御使ひふるしの『オリイロ』の裏の彼地此地傷んだのを、もう一年位之でも宜いでしよう、と下すつた時、其時ばかりはお父上のいたはしく、破れた布を顔に押し宛て、泣いた。朝は暗いうちから演習にお出ましの準備からお辨當の用意迄、私は身を粉にして嫂さんをお助け申して居た。夕方兄さんと嫂さんとお庭をお散歩遊す時、私は井戸端で明朝のお米を磨いで居た時、嫂さんはお手傳ひ致しませうかと、お聲をおかけになつた。その時、私は何だか自分が主婦で有るかの樣な感じがした事もあつた。しかし總ては身の修業活きた敎訓と思つて居た。兄さんが疲勞れてお歸りの折、嫂さんが御機嫌斜の時などは、自分が妻の立場とならば不機嫌な顏はせまいとか、嫂とならば小姑に彼樣もしてやらうとか斯樣もしてやらうとか。總て總て活きた敎訓を目のあたり見る事の出來るのを、心窃に神に感謝して居た。

三年の後都合上、私は父さんと共に復舊の郷里に戻つた。東京に居た頃、工兵隊の××少佐さんゝ××會社の何々役とか。身に餘る緣談は澤山あつたけれど兄さんも嫂さんも、ふり向いても下さらなかつた。一つは父さんが手離すのを、おきらひで有つたからでもあつた。郷里に歸つてからも、雨と降る緣談も女子手なしの不自由と愛とにひかされて、父さんも手放して下さらなかつたし、私も年寄た父さんを見捨てゝ嫁かうとも思はなかつた。斯して私は今年廿一になつた。

叔母さんは私の婚期の後れるのを恐れて色々と心配して下さつた。

恰度其時分、田舍に居た兄の友達で、資產ある、さる工業家で先妻は病死し六歳の男の子のある家で後妻を探して居たとかで、兄は妹をどうで有らうか

と云つたとの事であつた。最も此の六歳の子は叔父なる人が育てゝ居るとの事であつた。

私は叔母さんに此の話を聞た時、自分の樣に俸給生活の家に育ちし者には、職業と云ひ土地と云ひ、其餘りに不似合なのに愕いた。たとひ子供は叔父なる人が育てて居るとも、子ある人である以上は自分は繼母の名を被ねばならぬのである。繼母といふ名、あゝ恐ろしい〳〵。繼母は繼子を憎み繼子を殺す者と、昔から恐ろしい者と定まつて居るではないか。私はどうして應ずる事が出來樣、泣いて不承知の旨を答へた。しかし其時は遲かつた。打續いて失敗に失敗を重ねて居た兄は、財産に目がくれて居たのだらう。未だ私の意中も聞かぬ内に、先方に約して仕舞て居たのだつた。



百合一花靈に秀づる曠野哉（禾水）

私は唯もう泣きに泣いた。泣きに泣いた。若い時代――青春の時代――、嫂さんの影に、おとなしく、暗い月日を送つて居た内も、自分は結婚の一事に依りて、取返す人生の春もあらんと、心窃に慰藉して居たのであつた。しかし夫も空望であつた。絶望であつた。

人毎に人生の春、一生一代と着飾りて、蜜より甘きホームを夢見つゝ、嫁せらるゝであらうのに、私は斯うして、泣きながら、悄然と、繼母の名を荷なふべく、此家に嫁したのである。

來て見れば此は如何に、叔父なる人に遣されてあると聞いて居た子供は、目のあたり居るではないか。始めて人妻となりて、そして始めより母と呼ばれし時、あゝ――其時、私の胸は氷の太塊を投げ付けられた樣に胸が痛かつた。

思想なき趣味なき、泥人形の如き、夫の性格は、尙ほ私に幾重ねの失望を與へた。私は此處にも暗き影を踏まねばならぬのが悲しい。

緣なくんば骨肉相鬩ぎ、緣あればこそ斯かる人をも夫とも呼び妻とも呼ばれるのである。總ては天の配劑である。諦めよう〳〵耐らへよう〳〵。

斯く諦らめ斯く觀念はしても、など愚痴の泪は明け暮れに溢るゝぞ。など運命を果敢なむぞ、喝！弱き我が泪！　我が心！。

滿身の愛、滿身の熱情、命と共に捧げよう、あらん限りを盡して見よう。私はかう覺悟して盡して居る。しかし〳〵旣に子の父と成り給ひし、夫の君には、此の思ひは少しも通じない。一も正雄、二も正雄、子にのみ專念に愛をそゝぎ給ふ。

母樣と始めて、呼ばれし時、胸の轟きと共に、今迄嘗て知らなかつた、一種言はれぬ、いとしさも覺えた。

繼母につく繼子、親あらば知らで濟む苦痛を知らねばならぬ運命の許に生れた子、私は不愍とこそ思へ昔語りに聞た繼母の樣に、恐ろしい心も起らない。なれど、夫の君の、夫も之も彼も之もと、子にのみ物を與へ、愛し給ふを、針仕事などしつゝ、傍から見て居る時、もし自分も子なき初婚の人と婚して居たならば彼の愛、皆自分に、そゝがれるで有らうのにと、心の奥の奥に、這麼淺ましい悲しみも起る。這麼思ひが積りに〳〵やがては繼母てふ名に、ふさはしい、恐ろしい根性となるで有らうか。あな恐ろし我行途、神よ正しきに道しるべしてよ。

春逝き光消え、空望は絕望に終り、千年を契る良人の愛を知らす、乳母の如き冷き心に泣く、あゝ此の心！　許せ！　我繼子！

手紙

別れて後

松平鏡子

歸りがけに小間物屋に寄りました。

白光電氣の光を浴びて、飾窓の中は全で別世界みたいに見えました。紅い絹の根緒で吊り下げられたガラス板の上に、水色縮緬の蒲團敷いて、黄色い鼈甲の笄は笑つてゐた。華美な花櫛や平打の簪などが、ぢいつと私をみつめてゐる樣に思はれた。彼のリボンの代りに鹿の子が長く懸つてゐるのが、何より〳〵嬉しくつてたまらなかつたんです。

別段欲しい物も無かつたけれど、何だかこゝの店に、私の買ふのを待つてゐる物があるやうに思はれたから、電氣の下には恥かしいやうな風姿して、それでも關はず店の中に入りました。



別れて後……47

店には客も居なくつて、年の若い主夫婦が、愛想よくいろ〳〵な品を出して見せて呉れました。今迄自分とは別な空氣の中に住んでゐるものだとおもつてゐた白粉の瓶だの摘細工の前挿だのが、いくつとなく並べてあるのを見ると、自分がこの中の一つをどれでも選ぶ權利を持つてゐると思つて、何となく若々しい微笑が禁じられなかつた。

つまみの櫛に好いのがありましたよ。紅い菊の花が多きくつて華美すぎるつて云つたら、『肩揚のある方が、そんな事を被仰るもんぢや御座いません』なんて云ひました



白金もこ金もなにかおよぶべき、夏は風こそ寶なりけれ

その調子がそりやあよかつたのです。うれしかつたけれど氣恥かしかつた。もう肩揚にも別れる時期が來た。私は年を取りたくないと思ふけれど、美くしくない女は早く年をとる、……さう思ふと眼のうちが熱くなつて、上向く事が出來ない程泪が溜つた。私は紅と淺黄の鹿の子を買ひました。島田に結はうかしらと思つて。

髪は貴姉がゐらつしやる日に結ひたい。都合がついたらまた來て下さいませんか。私は髪を結つたら貴女に連れられて貴姉の宿へ泊りにゆく。

ゆふべは嬉しさを奪はれた爲か　今夜は堪らなく

寂しい。昨夜は面白う御座んしたね。姉様まるつきり袖袂みたいだつたんですもの、いつもの緋縮緬の方なら、お姫様つて云つて上げたかつたけれど。

床の中に入つてから、私泣けて〳〵なりませんでした。一つ位の秘密でも持つてゐちやいけないんでせうか。持つた儘死んで逝つちやあいけないの。私はみんな人に語りつくして、さつぱりした胸の心地よさを味はふのは厭、私はね、誰にも知らさないで一人で苦しんで惑ふてゐるのもうれしい樣な氣持がする。私は今まで誰よりも誰よりも、貴姉に一番何でも話して來ました。貴女に話さない事なんてそれこそありやあしない。たつた一つだけなんだのに、それも聞いて了ひたいつて被仰るの！　さうすれば後の私には何にも殘らないぢやありませんか。

どんな苦痛も默して死んでゆける勇者になりたい…あの私のね、姉さんに話す事はもう一つしきやないんですから、も少しの間だけ大切に藏はせておいて下さい。私は死んでゆく前になつたら、乾度貴姉にだけお話しませう。

歸途、お腹がしく〳〵痛んでたまりませんでした「酸つぱい餡粉」あれの祟ぢやないかとおもつた。安物を買ふと腐つた奴が交つてくる、つて云はれたけれど、姉様だつて御存じですわね。私が、どれもどれもませてつて云つたからいけなかつたのでせう。

お揃ひにしたあの半襟は馬鹿に氣に入つちやいました。絽縮緬つて好いものですね。

髮が島田に結へなくつても、貴姉が來て下さらなくつても、私は土曜日にゆきます。私の枕の布が汚れてゐたら、取更へといて下さいな。

また逢ひませうねえ。

姉さま、さやうなら。

わかれたる夜　　　妹より

姉なる

藤の女に　まゐる。

函嶺湖畔の一夜

日記

石内富枝

五月晴れと云つて、好天氣の續く季節となつたのだけれど、お入道樣がヒステリーでもおこしたのか馬鹿にじめ〳〵と、毎日根氣よく降る雨だ、低氣壓と名を呼ばれて居る茂野さんが來たから許りぢやあるまい、雜布かけもしたり、洗濯のお手傳ひだの下駄を洗つたり、忙しかつた。

箱根は雨さへふれば、きつと霧が出るんだもの、それが何よりうつとうしい、どこも〳〵まつしろくつて、丁度、地獄のお釜の蓋があいたやう　往來の人の影も見えず、眠つたやうな、靜かな町には、靜寂を破るやうな物は一つもなし、たつた一人で住んでるやうで、心細いやうな氣もるすし、亦仙人になつたやうな氣もする　小田原の方は好いお天氣ですよなんて云はれると、憎らしいやうな氣もするけれど、それでも、自分の土地は惡くは言度くなし、心から、いやだと思つた事は一度もない。

お母樣と兄樣は、九州へ御旅行なすつてから、もう一週間になる、兄樣と御一緒では母樣も御氣かしい事であらう、兄樣も窮屈で入らつしやらう、私を引張り廻すやうな譯にも行くまい、

美和子が居る頃なら、私も御供が出來るんだけれど……、

と考へながら繪葉書を出す、俳句と和歌のちらし書の美くしい色刷にこんなのがあつた、

今日になり、菊作らうと思ひけり、
名月や、たゝみの上に松のかげ、
武藏野も、家よりいでゝ月見かな、

金泥の色紙の和歌に

秋風の秋を讃する野は暮れて

いさ歡樂の月わきのほる

といふのがあつた

春に秋の歌も不調和だけれど、お好きなお母樣だからおとがめもなさるまい、兄樣へは杜若を寫生したのを上げる、純白な杜若が、根元に咲く紅の浮草の血を受けたか、白い中に指をついたほど赤をさして、今年は花も大きく、美事に咲いたのをあれほど、大切がつて入らしつたのだもの、一輪お目に掛けたいと思つてそれをあげる、此花が散らぬうち御歸りになれゝば、いゝ……。



晩に珍らしく××が來た、此頃は横濱の方で大分成功の期が近づいて來たと喜こんで居ると一ト月許り前に聞いた、今見れば昔ながらの哀れな姿、××材木店と白く拔いた印袢纏さへ見すぼらしい處々ほころびた、垢だらけなものを着て……。

技倆は好し　氣前は猶更好し、飲むのと勝負事さへしなかつたなら立派な彫刻家だのに、如何に心柄とは言ながら、何んと云ふ不覺悟な人だらう、

又今夜もお金の無心だ、お二人とも御留守ではあるし三度や四度ぢやなし、迷惑たとは思つたけれど、頼まれる人より、頼む人の心のつらさ、苦しさ、男一疋が小娘のやうな私に頭を下げてのたのみ。察して見れば、無情なく斷るにも忍びないで、母樣へ送るお金の中から一枚出してやる……。

今日の支拂の整理をして、時計を見たらもう九時



半、けれど、襟だけくけて了へば仕上がるのだから縫つて了ひませう。

水牛の角にさした八重山吹がふれもせぬのにハラハラと縫つてる羽織にも私の肩にも、前髪にも美しく金の雨のやうに降りかゝる。

去年の丁度今頃であつた、水野さんが來て居るとき八重櫻とぼけの花を他家から貰つた、いくら晩咲きでも、もう咲きすぎて、咳の響にさへ散れる程であつた机の上には、本をのせる處もないほど敷つめた、白い花片、手紙書くにも飯鉢を臺にして書いて一片もすてまいと思つて居たのに、水野さんは、汚いからすてゝ下さいと言はれた時、全く情けなかつた、あんまり惜しい……と云つたら、さんざ冷笑されて、詩人は違つたものさ、多情多恨な、女詩人は我々と相容れざる處があるなんて、失敬な、私は、思切つて枝ごとに湖水へ投げて了つた、

何處からともなくごろ／＼と、石臼を挽く重くる

しい音が聞こえる、私は幼い頃、七八人の下女下男が、グルリと石臼を取りまいて、好い聲で歌を歌ひながら、御釋迦樣のおしんこ餅の、米を挽いたり、お節句のおかしわの粉を引いたりするのを、ばアやに抱かれて見て居た、其音が、ばかに眠氣を誘ふてねむつて了つた、

僅か十一二年の間だけれど、私の家には一大變化が有りました。

怒り狂ふ厄災の神は、大黒柱の父樣を奪つたばかりではあきたらず、縣下に一二を爭つた、鉅萬の資產を大風に吹き飛ばされる紙屑のやう、ライオンも斃れて了へば兎にも嚙まれます。

夏の頃、たへがたい新綠の刺戟に情緒をそこなつた歡樂の森も、凋落の聲に悲しい覺醒の歌を歌ふ今日の、痛々しさ、

どんなに榮えてる家でも、「三すくみ」と云つて、蛇となめくじと蛙が住んで居ると、必ず滅るとか、



私が、八歳の初夏であつた、お父様は大學病院に診察を受けにお出でになり、私は、其頃親戚から來て居たお春さんと云ふ娘さんと、中學生の兄さんと、下女が四人、下男が三人、ジヤクと云つたまつくろな大好きの犬とで、淋しくお留守居をして居た、或朝、何の氣なしに、離れ座敷と母家の中庭へ行つて見たら、大きな蛙があくびをしてる、見たいな、まるで魂のぬけたやうにして居る、向うを見れば、氣味の惡い蛇が陰險な姿をしてにらんでは居るが、さて呑まうともせず躊躇て居る……と、松の根になめくじが居た

其内にお春さんが來る　ばアやもくる、下女も下男もぞろ／＼出て來て、ああ、これが「三すくみ」と云ふものだと不思議がつて見て居たが、其時は誰も氣にかける者もなかつた……。

如何に榮華に暮したとは、云ながら、自然に朽ちる命であつた、寶の山に攻入つた盗人のやうな親戚を、うらむ譯でもないが、血を流してとつた家敷だもの、再興の曉は美事買ひもどさねば置かぬ、と口惜涙をのんで、人手に渡した一萬九千坪の地面。母子三人と下女二人、昔の家にくらべては、見るかげもない小さい家ながら、五人暮しでは廣すぎます。

軒には相變らずしと／＼と雨が降つて居る。

うつとうしい雨ながら、どこか花やかな、人の心を動かすやうな晩春の雨は、まつ毛の濃くつて長い美くしい目の若い女が、しく／＼泣いてるやうだ。

今夜は桂さん達に御約束のポテトケーキ、實は今日の午後から、夕方までかゝつて臺所を一ぱい粉だらけにして、やつとこしらへた――、いつもよりよく出來たやうだ。

部屋の窓を開けて郊外を見た、二三間しか離れて居ない函嶺館の華やかなランプの光りが、緑りの茂つた、松や杉を透して虹の簾を掛けた。

學生らしい七八人が、大きな聲で

祁山悲秋の風更けて、
陣雲暗し五丈原、
零露の文は繁くして
草枯れ馬は肥ゆれども、

と、歌つて居るのが、耳に突き通るやうにきこえる何んだか無暗に懐しくなつて、

蜀軍の旗光無く
鼓角の音も今しづか、
丞相病篤かりき。

惜しいけれど雨戸を閉てて臥床に入る。



しづかに沈む春の日の、夕雲遠き丘の上
きらめきながらわびしくも、暮れ行く光
眺めては
人の得知らぬ愁こそかなしき、胸をおほひけれ。

小さい聲で歌つて見る、あゝ、天津み空にも響け懐しさに、床しさに、たぎりは胸に高かければ‥‥。

ある人の名を呼んで、胸に手を組んで夢路に入る‥‥。

薫風や釣殿に満つ水の影　八重櫻

手紙

東京の世帶を田舍の友に知らせる文

登志子

道子様其後はすつかり御無沙汰いたしました。つひ百日以前まで、鴨東清水寺のほとり、山紫に水清きなつかしの故郷に、明けても暮ても、御一緒に語らひました十幾年の友ですものを、上京後は三日に一度ならずと、、せめて十日目位には是非にと、出發の節あれ程御約束もし、自分でも毎日心にはかかつて居るので御座いますけれど、――良人と只二人の用のない家庭で、今更何のいひ譯とお笑ひ遊ばして下さいますな。道様全くなので御座いますよ。僅か手紙を認める時間がないとは申ませぬ。――けれど、あんまり毎日の失敗に自分ながらもう意氣沮喪してしまつて、机に向つて筆をとるやうな、そんな元氣が更に出ませんのよ。漸う此頃一いきつくやうになりましたので一別以來からの近狀を少く申上げお詫を致しますからどうぞお許し下さいましね。御承知の通り上方で生れて上方で育つた私。幼い時から祖母様にお江戸と脊は見るものでないと敎へられ、兄様からは一も東京二も東京と眞虚言とりませて、永らく憧がれさゝれて居りました。所が昨年末あのやうに、突然新らしいマダムとなつて、新婚の良人に伴はれ、こゝ青山に生活する身の上となつたのですもの。物慣れぬ乙女心には、お笑種の失敗も強ち無理では御座いませんわねえ、東西僅か百數十里で、かうも違ふものかと思はれるばかり、不思議な風習に、驚いた事はそも幾度で御座いませう。百日あまりの間に毎日數へつきせぬ失敗をして、やゝ經驗もつまれましたが、まだまだ田舍者の誹はまぬかれません。げに所變れば品代るとか、竈の口都の私には、見もの聞くもの、

どんなに異樣に響きましたでせう。けれど道子樣あなただつてきつとお驚きになりますことよ。

東京つて恐れ多くも、大君の宮居を始め奉り、幾多貴顯搢紳の住んで居られる日本第一の都、否世界で幾つといふ都會だといふのですもの、凡てに於てどんなに立派であらうと、汽笛一聲七條を發しました時から、私の小さい胸にあらゆる空想をゑがいて、高なる響はたえませんでした。夜半の東海道も事なく通過して、翌朝新橋驛についた時のよろこび――とはいへ、少なからず失望しましたのです。七條や梅田驛に比べて、此狹い汚ない驛が、東京市の關門であらうかと、驚かずには居られませんでした。假令近い將來には立派な中央停車場が出來るにもせよ、今迄幾多の外國人を送り迎へしたあの名高い驛だとはどうして



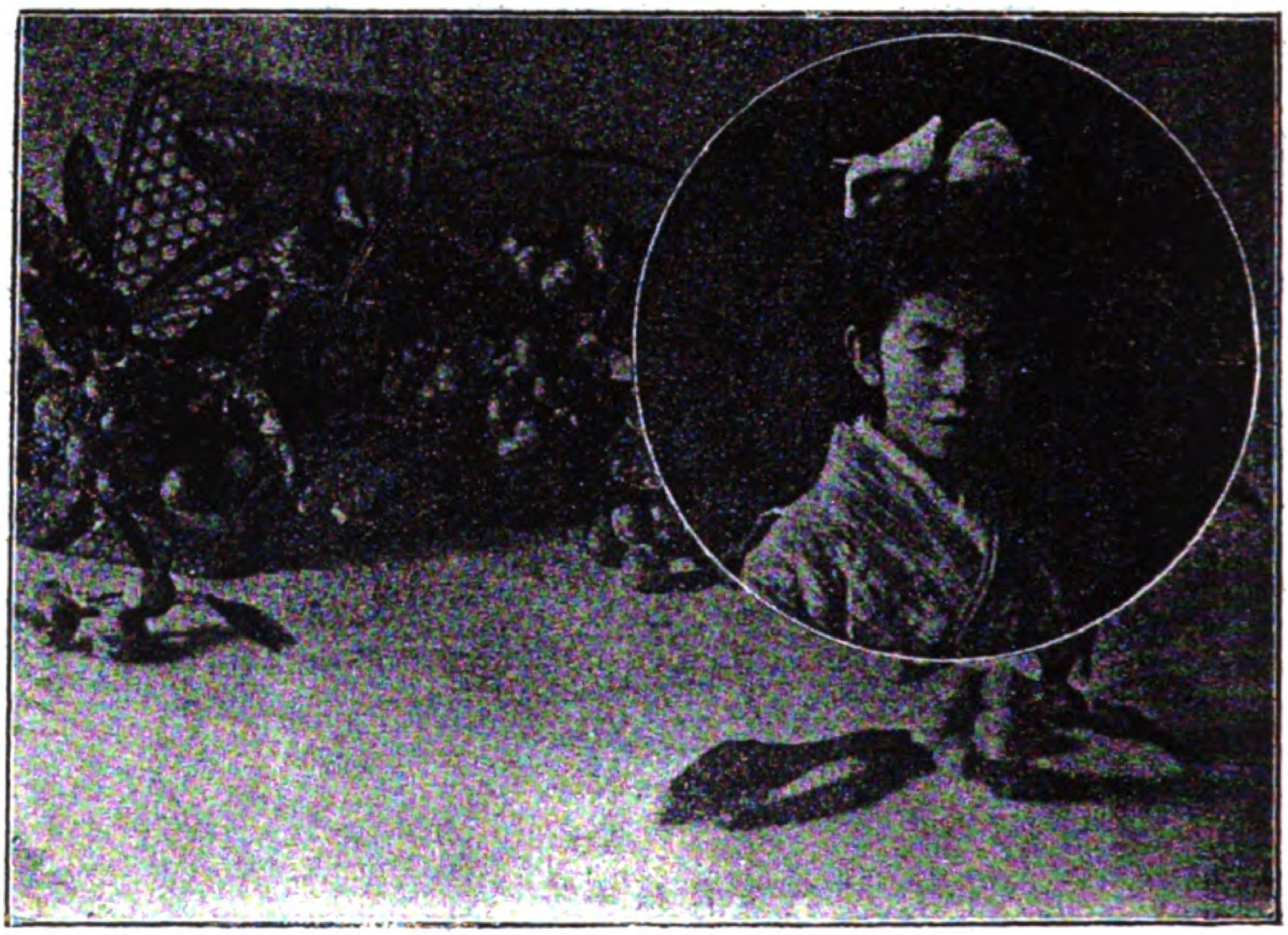
百合の花一輪挿して君眠る（[illegible]村）

も思はれません。併し又上方とちがつてあたりの人のきび〳〵した氣持のよさ、アノナ、オマヘン、ドウドスばかり聞いてた私は、彼所此所に立ちつどひ談してる人の言葉さへ何となしに嬉しう感じました。馬車や自動車の澤山なこと、而して幾輛とも知れぬ小包郵便の二頭立の馬車も珍らしく、プラットホームの車寄には、今はき出された知名の人の出迎馬車が、如何にも上手に次へ〳〵と横づけにされる其早さ、乘る人も乘せる人もそれは〳〵物なれた態度で音もたてずにゴム輪の車のスーと廣い道路を走りゆく樣、氣持がよう御座います、麻布を過ぎて靑山へと走り行く車上から觀察しますと、其曲り〳〵した道、きつい坂の多いこと、三百年の昔家康公が一方ならず苦心されたといふ跡が明治の御代にもあり〳〵と眼にうつります。やがて懇意な方のお世話になつて、こゝに疊建具附の一家を借り受けましたのです。

おほあらきの森の下草しげりあひて深くも夏になりにけるかな（壬生忠岑）



山里は只青葉のみ茂りあふ折にあふちの折もめづらし(宣長)



大阪や京都とちがつて、庭地の廣いのはうれしう御座いますけれど、夕暮のどさくさまぎれに、一寸油斷をすると、玄關の靴をさらはれる、お客様のコートを盗まれる、といつたやうな無用心な上方で、而も四方皆建て列なつた所にばかり、住み慣れた私は、何となしに、庭ばかり廣くつて一寸吹けば飛びさうな竹の垣が便りなく、戶にだつてしまりも何も出來て居ないでしめつぱなし、よく之で以前の人が盗賊に入られなかつた事だと只々呆れるより外ありませんでした。早速錠や鍵を買つて、一つ一つの戶にうちつけ表の格子には內側から釘をさすやら大さわぎ。青山といつてもこゝはもう澁谷に近い所なのですから、通りは賑はしう御座いますが横丁はそれは淋しいものです。東京つて町の眞ん中に大きな邸や別莊があるので、山の手の方は丁度こんもりした森か、また村のやうな感じがする時も御座います。言葉はすつかり違ひますけれど、別に不自由もし



青紫蘇は低く赤紫蘇は丈け高し（鳳鳴之）

ませんでしたが、もう結構といつて笑はれたのは意外でした。こちらではもう澤山だと申のですつて。御近所へは名刺を持つてどうぞ宜敷つて挨拶に行きましたのに、其後お神さん達道で逢つても横をむいて居りますの、何だか此邊はおかしな所ね、人が物をいつても知らぬ顔なんかして、と御用聞きに來た小僧さんに申しますと、奥樣お宅ではお蕎麥をくばりましたかつて妙な事を尋ねますの。おそばつて何？と申ますと、あゝそれでゞ御座いますよ、此以前の方も、それをお忘れになつて、況して子供もありましたので、よく近くの子と喧嘩なんかしてとう〳〵お出ましになつたのです、東京の風習ですから、引越をすれば、お蕎麥を三つづゝくばるのですよつて。まあ小僧さんいゝ事を敎へてくれた同じ住むなら一日でも近くの人に惡まれぬ樣、京の伯母より隣大切といふ諺もあるのだからと早速おそば屋にいつて賴みますと、ちやんと札迄出來てますの。驚

きましたわ。十日も過ぎてだけれど、兎に角くばりましたのです。すると前のお神さん早速禮に來て、相應の御用も御座いましたらつていふのですもの。ほんに妙なものだと思ひましたねえ。

それからいつでしたか、お客様があつておすし屋に取りにいつたのです。所がさつぱり名前が別りませんの。何か出來合でもあれば、之をと申されますのに、運惡るく何もないので、ちらしですか、にぎりですかつて頻りに催促されますけれど、別りませんので顔ばかり眞つ赤にしておすし屋の庭で閉口頓首しました、やつとの事で何でもいゝから五十錢丈といつて歸つて待つてますと、まあ綺麗ににぎつたおすし。而して道子様お醤油をつけて頂くのですつて。おすしにお醤油なんて上方の者は誰だつて思ひ及びませんわねえ。内だからよかつたものゝ、よそ様だつたら尙一層失敗する所なのでした。

次にお風呂へ行くと又不思議の一つ、三助が遠慮會釋もなく女湯の中へ入り込んで、而も肩をたゝいたり、お湯をくんだりしてますの。私はあんな男の人が居なくなつてから、出て洗ひませうと湯槽から得出ない、蝦のやうになつて、つかつてましたの。すると番臺で、一つひよしぎ打つたと思ふと、又一人の女客が來て、此人にも三助がお湯をくんで流してやりますので、私はとう〳〵洗ふ間がなくなつた丈で急いで歸つて來ました。而してお隣の人に



夏の夜は浦島が子の箱なれやはかなく明けてくやしかるらん（中務）

聞きますと、あれはあなた流しといつて一錢よけいに出せば　誰にでも流してくれるのですよつて中のです。女湯に男の三助の流し一寸妙でせう。けれど慣れてしまへば、流しをとらないとお風呂に入つた氣持がせぬ位になりましたのよ。不思議なものですわね。

道子樣東京はもう明後日はお節句ですの。まだまだ日陰は霜柱も消えないで寒い／＼お節句です。四月でなければはんとうの桃の花が開きませんものやはり上方の四月三日の方が眞實らしく思はれますね。それはもう一月二月のお寒いことは申樣もありませんが、此頃だつてまだ中々お寒う御座いますのよ。叡山颪なんて大層な事を申ますけれど、京都には霜柱つて御座いませんものね。それに此邊は庭石といふものが少ないので、じく／＼と霜どけの道の惡るさつたら、お話になりません。夜具なんかでも、夜着つて袖のついたものを用ゐますの。上方では只布團ばかりですから、私共はどうしても防寒の準備が下手なので一層お寒さがきついのかもしれませんけれど、東京の冬はもう眞つ平です。

海の傍丈にお肴は新らしくつて、割合にお安く殊に貝類の多いことは何よりうれしう御座います。其代り肉の値段のお高いことびつくりしました。それからね、あのお豆腐屋さんのように、煮豆屋といつて、いろ／＼の豆を煮て、毎日賣りに來ますのよ。どれ程不性の私でも　まさか煮豆を買はうとは思ひませんね。之も幼時からの習慣でせうか。道子さんそらいつかの雜誌に、

厨にたつ奥樣スリッパ召されけり

つてありましたでせう。あなたと二人で其意味が別らなくつて、議論しましたわねえ。あれも全く東京の事なのです。こゝの流し元は坐つて使ひますので無精者にはいゝやうに思はれますが、水道でない限り、まさか坐つて井戸の水もくまれませんから、や

可憐の友どち



手　　　紙……………………63

はり立つたまゝ、何でも洗はれる關西の方が私共には便利のやうに思ひます。此臺所では強ち奥樣でなくとも、スリツパは是非必要で御座いますのよ。大抵板間に出來て居ますからね。あのお醬油樽の飲口でも上むけについてますの。おかしいでせう。お臺所の事は上方と大分勝手がちがひますよ。

名所も隨分澤山見物しました。電車にさへ乘れば一日で幾里でも行けますもの。殊に均一制度は何より便利で御座います。でも一番いゝと思ひましたのは、あの神々しい二重橋のほとり底の石の數さへよまれさうな、清らかな流れの川をへだてゝはるかに千代田の宮居をふし拜んだ時と、泉岳寺におまわりをしての歸るさ、高輪御殿の森高く、寒月一輪昔のまゝに、てらして居つた其夕景色とです。

道子樣之から追々時候もよくなります。祇園嵐山の春もうつくしう御座いませうけれど、赤坂見附のあたり花のトンネルを行く電車は東京ばかりだと申ます。上野や向島の櫻花も、どんなに、綺麗でございませう。どうぞ陽春四月には是非御上京下さいませ、贅澤なおかまひは出來ませんけれど、氣兼をする姑もなく、お一人やお二人の御逗留に差支へるほどの不如意な家計でも御座いませぬから　どうぞ御ゆるりとお序に御妹御樣もおつれになつて、お越しの程を御まち申して居ります、丁度此月末から一ケ月ばかり主人は出張しますので、私淋しくつてたまりません。是非入らしつて下さいましね。鶴首して御返事をまつて居ります

さよなら

64……………………月　宮　殿

△男のたしなみ

今年六十七のお爺さん、髮はチヨン髷でいつも堅油で結い上げ、顏は何とか云ふ油をベッタリ付けて其上から白粉をつけるのがこの方の化粧法なのです。めんだうなそんな事止めて髮をお切りに成つたら如何ですと或る人が云ふと、イヤ／＼私等そんな締りのない事ようしまへんわ。

創刊七大叢書

博文館創業二十五周年記念出版

七大叢書之創刊

博文館創業茲に二十有五年、其間昭代丕運の進歩と大方諸彦の眷顧とに依り。出版の圖書年毎に増し、今や覇を東洋の出版界に稱するに至る。是に於て創業二十五周年の紀念として東西文學の粹を集めて、七大叢書の創刊を企て、空前の美本を無比の廉價にて提供し、聊か大方平生の恩惠に酬え、以て聖代の文運に貢獻する所あらんとす。

創刊の七大叢書、曰く國文叢書、曰く漢文叢書、曰く文藝叢書、曰く近代西洋文藝叢書、曰く和歌叢書、曰く謠曲叢書、曰く俳諧叢書、乃ち是れ咸な我國文學の神髓たり、東洋文華の源泉たる名著を網羅し、また泰西文壇の傑作は、盡く專門名家の手を藉りて翻譯せらる。而も各叢書を通じて、方今第一流の耆宿の嚴正なる校訂と、簡明なる註解を施して成る。之を書齋に備ふれば東西文學の精華は、坐らにして晨夕これを淸賞するを得む。

晩近古書の翻刻盛んに行はるゝと雖も、多くは漫然たる覆刻に止まり、其內容或は一局部に偏し、然らざれば玉石同架のものゝみ、未だ曾て本書の如く能く東西古今に亙りて、周ねく代表的典籍を網羅したるものある無し。況んや內容の完美、裝幀の瑰麗、用紙の堅緻、印刷の鮮美に加へて其價格たるや出版界未曾有の低廉を以てす。

本叢書發刊の曉は宛がら太陽出でゝ文壇の六合、始めて炳然たるの感あらむ。

各叢書の詳細は以下次頁に連載

取次全國書店　東京 博文館 本町　振替東京二四〇番

文學博士 本居豐穎先生
文學博士 井上頼圀先生
文學博士 萩野由之先生
文學博士 關根正直先生
文學博士 池邊義象先生
校訂及註解

藤島武二畫伯
橋口五葉畫伯
意匠装幀

空押及金模樣揩込天金絲製本頗瑰麗

菊判總クロース上製
口繪及密畫挿入
本文ー新鑄十ポイント組
註解ー六號活字組

校註 國文叢書

第一期刊行（凡隔月發行）
十二冊 毎卷（七百五十頁乃至千餘頁）
□第一卷 六月中發行
總紙數約壹萬頁

■正價一冊金壹圓（小包料内地十二錢）
□十二冊特價金拾圓ー外に小包料を要す

一國の富强、文明は國民の自信力に原因す。自信力無き國民は富强の民たる能はず、文明の俗たる能はず。自信力は己を知りて彼を知るに起る、蓋し己を知ること厚ければ己を愛すること深く、己を愛すること深ければ、益々之を富まし、之を强うし、之を文明に勸めんとするは自然の情なればなり。己を知るは我が歴史に通曉するに在り。我が文學を精究するに在り。此の如くにして、初めて我が國情明かに、その長所は愈々之に培ひ、その短所は速に之を補ひ、以て己を完うせむとするに至るべきなり。これ實に國民の本分たらむ。弊館創業以來、夙に心血を此に濺ぎ、この種の事業に向つて、世に貢獻せしこと鮮少ならずと信ず。就中曩に一般に紹介せし『日本文學全書二十四編』の如きは、蓋し久しく棄られたりし我が歴史的文學の復興普及に先鞭を著けしものにして國文復興國文獨立の聲はこれによりて喚び起されたることは世人も均しく認めらるゝ所ならむ。

東京博文館

創刊七大叢書

今や世界の大勢、益々富强文明の競爭の急激なるものあり、此の時に當りて一層自己の信念を厚うし、自己の歴史文學を研究し以て「我あるを知らしむるは急務の業たらざらむや。故に弊館は更に現代知名の國文學の泰斗諸博士と謀り、往年の『日本文學全書』を更に擴張し、更に精選したる『校註國文叢書』を出版し以て大に學界に貢獻し前條の主旨を貫徹せむことを務めむとす。

國文叢書（第一期刊行）書目

- 源氏物語（附菫草） 上下
- 同（附）紫家七論 二卷
- 太平記 上卷
- 太平記／曾我物語 下卷
- 源平盛衰記 上卷
- 源平盛衰記／義經記 下卷
- 水鏡。大鏡／增鏡。今鏡 一卷

- 平家物語。保元物語／平治物語。承久記 一卷
- 榮花物語 一卷
- 竹取物語。伊勢物語／落窪物語。土佐日記／枕草子。徒然草／紫式部日記 一卷
- 宇治拾遺物語。月のゆくへ／池の藻屑。松蔭日記 一卷
- 蜻蛉日記。とりかへばや物語／唐物語。濱松中納言物語／方丈記。更科日記／大和物語。海道記。東關紀行 一卷

特色

- ●高雅優美の裝釘
- ●愼重正確の校訂
- ●簡明適切の註解
- ●秀逸精巧の挿畫
- ●純良堅緻の紙質
- ●至廉無比の價格

東京博文館

創刊七大叢書

文學博士 三島毅先生
文學博士 服部宇之吉先生
文學博士 高瀬武次郎先生
監修

文學士 久保天隨先生校訂

中村不折畫伯装幀（空押及金模樣摺込天金緑頼美装）

第一期刊行十二冊

毎二月一冊發行 第一卷七月中刊行

菊判總クロース頼美本 約壹萬頁

各冊平均一八百三十頁

校註 漢文叢書

■正價一冊金壹圓（小包料十二錢）□十二冊特價金拾圓（外に送料を要す）

漢學の我邦に行はれしも、すでに千餘年、維新以後强弩の餘勢、時に魯縞を穿つ能はざるに似たるものありと雖も、そは一時偶然の現象にして、頃ろ復活の好氣運に向ひしは世人の齊しく認むる所、その故他なし、漢學は東洋獨得の社會的心象を發揮したるものにして、その中不朽の教訓あり、少くとも吾人が品性修養の上に斷じて之を缺くべからざればなり。漢籍の講習、長しへに廢すべからず。もし然らずして、徒に外を慕ひ新を追ふに汲々たらば國風民俗、その根柢より動搖し、これを大にしては邦家の前途、或は痛哭長大息すべきにものあるに至らむ。さはいへ、漢學の講習は、もとより容易ならず。幸に前代碩學の註釋あるが故に、吾人は之に頼つて、その眞意義を領會するを得べく、これを簡

書目	撰定書著者
第壹卷 論語	
第二卷 孟子	

重訂

創刊七大叢書

卷	書名	註解書	著者
第三卷	大學	新四書俚諺抄	毛利貞齋
	中庸		
	孝經	古文孝經國字解	勝田祐義
第四卷	唐詩選	唐詩選講釋	千葉玄之
第五卷	蒙求	蒙求詳說	宇都宮由的
第六卷	七書	七書俚諺抄	神田白龍子
第七卷	同（孫子、吳子、司馬法、尉繚子、三略、六韜、太宗問答）		
第八卷	古文眞寶 前集	古文前集抄	笑雲和尙
第九卷	同 後集	古文後集抄	同
第十卷	小學	小學示蒙句解	中村惕齋
十一卷	近思錄	近思錄示蒙句解	同
十二卷	詩經	毛詩國字解	東東山

■なほ善本を得て一、二。註解書を變動する事もあるべし

捷便益なる唯一の方法となすなり。本叢書は、重要なる典籍を網羅し古賢が辛苦の餘に成りし平易周匝なる國字解を以て之に充て、細密なる注意の下に字句を訂正したるものにして、庶幾くは、以つて定本となすを得べく、その價の至廉なるは聊か家國の爲に盡さんとする本館の微志乃ち然るのみ。

特長

- 嚴密正確の校訂
- 適切明徹の註解
- 鮮明優美の印刷
- 新鑄ポイント活字
- 純良堅緻の紙質
- 至廉無比の價格

東京博文館

創刊七大叢書

文學博士 幸田露伴先生
饗庭篁村先生
塚原澁柿先生 校訂

藤島武二畫伯
橋口五葉畫伯 裝幀

文藝叢書

第一期刊行(凡隔月發行)十二册―紙數約壹萬頁(毎巻七百五十頁乃至千餘頁)

■正價一册金壹圓(小包料内地十二錢) ■十二册特價金拾圓(外に小包料を要す)

空押及金模様摺込
天金縁製本頗瑰麗

菊判總クロース上製
毎巻挿繪數十個挿入
新鑄十ポイント活字
十七行、四十八字詰
□第一巻 六月中發行

本書は時代の有理なる熱烈の要求に應ぜんが爲めに出でたり。時代は威力の絶大なるものを求む。本叢書の具する威力が絶大にして效果の雄偉なるは、廉價と良質と精確と優麗とを提げて精神上及び物質上の大勢力を背後に有しつゝ、本書の巨軀を

文藝叢書(第一期刊行)書目	校訂者
第一巻■忠臣藏文庫	饗庭篁村
第二巻■椿説弓張月 後寛僧都島物語 頼豪阿闍梨怪鼠傳	幸田露伴
第三巻■西鶴文集	幸田露伴

創刊七大叢書

江湖に現出するの日に於て直に分明せん。見よ、見られん。比較せよ、比較せられん。審重に判斷せよ。判斷せられて而して後、是認せられ採擇せられんことを欲するは進歩せる時代の出版界の最善最正の商理なることを信じて本書を新刊す。文藝の價値の如きは江湖既に知る、復贅說を要せざる也。

特色

- □甚大なる積載量
- □瑰麗高雅の裝幀
- □嚴密正確の校訂
- □鮮明優美の印刷
- □精巧秀逸の挿畫
- □至廉無比の價格
- □純良堅緻の用紙

卷	書名	著者
第四卷	道中膝栗毛全集	饗庭篁村
第五卷	俠客全傳	塚原澁柿
第六卷	演劇脚本集	饗庭篁村
第七卷	忠義復讐傳	塚原澁柿
第八卷	南總里見八犬傳（前編）	幸田露伴
第九卷	南總里見八犬傳（中編）	幸田露伴
第十卷	南總里見八犬傳（後編）	幸田露伴
第十一卷	世話淨瑠璃名作集	饗庭篁村
第十二卷	紀行文編	幸田露伴

東京博文館

創刊七大叢書

近代 西洋文藝叢書

第一期刊行―十二册―紙數約六千六百頁（毎巻――五百頁乃至六百頁）

□**正價一册金壹圓**（小包料 内地十錢） □十二册特價金拾圓（外に小包料を要す）

菊判總クロース頗上製
中村不折畫伯 装幀
橋口五葉畫伯
表紙空押及金模様摺込
天金縁製本堅牢頗瑰麗

文學は人生の表現である。人生を不滅にする唯一絶對の精神的努力である、

吾々日本人は、我が國古來の文學に依つて、不滅にされたる祖先の生活を見ることが出來る。けれども、今日の如く一般の生活が世界的になつて、彼と此との活動が、一々互に相響應する時代に在つては、吾々は單にたゞ生活の源泉を祖先の生活に求めるだけでは滿足が出來ない。廣くこれを世界各國民の生活に見て、以て「我」の生活に培ひ瀲ぐの用意と覺悟とがなくてはならぬ。而して眞によく吾々の生活と其の脈搏を同うし、直ちに共鳴を感ずる所の文學はと云はゞ、即ち西洋近代の名篇傑作を移植せんとするは、實に此の意に副はんとするの微衷に外ならぬのである。

譯さるべきは悉く是れ西洋近代の世界的文豪の名篇傑作。譯者は悉く是れ、近代生活を味到せる現文壇の俊秀、されば吾等は本叢書の出版に依つて徒らに名のみ頻りに傳へられて、其實の味ひ知られなかつた西洋近代文學は、始めて其の眞面目を吾々日本人の面前に展開し、吾々日本人の生活を豐富に且つ深遠にすることを信じて疑はない。

西

○**決闘**【小説】露 クウプリン 昇曙夢

○**サラムボオ**【小説】佛 フロオベル 生田長江

東京博文館

創刊七大叢書

洋文藝叢書（第一期刊行）書目

○人と超人【脚本】英 シヨオ 楠山正雄
○死人の家【小説】露 ドストエフスキイ 片上伸
○陥穽【小説】佛 ゴンクウル 前田晁
○日の出前。織匠。鼠【脚本】獨 ハウプトマン 小宮豐隆
○處女地【小説】露 ツルゲネフ 相馬御風
○クロイツエルソナタ其他【小説】露 トルストイ 阿部次郎
○死よりも強し【小説】佛 モウパツサン 中村星湖
○地獄【小説】瑞 ストリンドベルヒ 森田草平
○氷島の漁夫【小説】佛 ピエルロチ 吉江孤雁
○サツフオオ【小説】佛 ドウデエ 鈴木三重吉

東京博文館

創刊七大叢書

東京帝國大學文科大學講師 文學博士 佐佐木信綱先生 校訂及
東京帝國大學文科大學教授 文學博士 芳賀矢一先生 註解

校註 和歌叢書

中村不折畫伯 意匠裝幀

空押及金模様入 天金綠箋麗無比

第一期刊行六册

□第壹卷七月中發行

總紙數約四千四百頁

菊判 總クロース綴美本 紙數 各册不同

■正價一册金壹圓（小包料十二錢）□六册特價金五圓五拾錢（外に送料を要す）

上下二千載の我が文學史を貫いて、國民文學の精髓をなせる和歌の典籍數多あれど、古來最も世に知られ且つ最も重要なるは、萬葉集、八代集、三十六人集等とす。この三種に加ふるに、新たに選ばれたる名家歌選の一卷を添へ全部六卷として刊行せむとす。萬葉集は最も便利なる加藤千蔭の萬葉集略解をもととし、略解の説を補正せる諸學者の説を鼇頭に列記したり。八代集は古今集より新古今集に至る八部の勅撰集にして、註釋は北村季吟の八代集抄をもととして、更に之を補正せり。三十六人集は人麿、赤人、業平、貫之等所謂三十六歌仙の家集にして、由來誤字多き流布本を新たに校訂せるものを載せ。名家歌選は公平なる選出によつて、よく代表的歌人の作を網羅せり。凡てこれ和歌の經典とも稱すべきもの、而して校訂、補正、選出いづれも、佐佐木 芳賀

東京博文館

創刊七大叢書

兩先生の嚴密細心なる用意によりて成されたり。もしそれ製本の美なる、價格の至廉なるに至つては弊館の夙に世に誇るところ。書齋に應接室に必ず一本を藏すべき好叢書といふべし。

校註和歌叢書（第一期刊行）書目

(1) 萬葉集略解 上卷

(2) 萬葉集略解 下卷

(3) 八代集 上卷

(4) 八代集 下卷

(5) 三十六人集 全一册

(6) 名家歌選 全一册

特色

- 校訂嚴密
- 補正適確
- 選出公平
- 用紙純良
- 印刷鮮美
- 價格至廉

東京博文館

創刊七大叢書

文學博士佐々醒雪先生
巖谷小波先生
校訂

高村眞夫畫伯
意匠裝幀

俳諧叢書

六册（一期刊行）

菊判總クロース
製本堅牢且優美
空押及金模樣天金
緣頗高雅

紙數約四千四百頁
毎册紙數不同

正價 毎册 壹圓
小包料—内地十二錢

朴素と眞率なる志想と感情の反射、雅俗不偏の平民文學を有すること我國の如きはあらず。弊館曩に俳諧文庫を鏤刻發行するや、江湖の喝采を博し、俳諧の普及上劃期以上の效果を收めたるは竊に弊館の誇りとする所なり。玆に於てか弊館は、其要求に應じ、且創業廿五周年を記念せむが爲め、不朽の文獻たる俳諧叢書を刊行す。若しそれ其裝幀の結構と提供せる特價とに至ては、恐らくは弊館の特色を發揮して餘すなく、正に天下の奇觀なるべく、更に其校訂に至つては、所謂新舊何れの方面よりするも斯界の棟梁、不偏不黨の佐々醒雪、巖谷小波の兩先生にして、いかに内容の豐富有益なるかは想像するに難からざるべし。天下の俳人諸彦、机上運座の間、吟花嘯月の序、須らく箕箒の助となし、これを座右に侍せしめて離さず、愛讀翫味されんか、俳諧の太牢醍醐味は載せて本叢書の中に在り乞ふこれを探求尋問して、自家藥籠中のものとなされんことを。

東京博文館

創刊七大叢書

第一期刊行

俳諧叢書目次

第壹編 □ 俳諧註釋集

第貳編 □ 名家俳句集 附。附合集（上）

第三編 □ 名家俳句集 附。附合集（下）

第四編 □ 俳論作法集

第五編 □ 名家俳文集

第六編 □ 俳人逸話紀行集

特長

校訂正確
內容豐富
裝幀雅麗
印刷鮮美
用紙純良
價格至廉

東京博文館

創刊七大叢書

東京帝國大學文科大學教授　文學博士　芳賀矢一先生
東京帝國大學文科大學講師　文學博士　佐佐木信綱先生
校訂及註解

校註謠曲叢書

高村眞夫畫伯意匠裝幀

謠曲は武家時代を代表する國樂にして、後世浄曲の淵源を成せるもの。上は中古の文學に基き、下は近世の詞藻を開けり。優雅にして穩健、宜なるかな、今日に於て盛に家庭の間に諷誦せらるるや、本書に收めたるものは、觀世流の内外二百番を根柢とし、

貞享元祿版の番外二百番其他各流にわたりての出入を補へるを以て、總計五百數十番に達す。下卷には和漢朗詠集をはじめ宴曲諸集を彙集して、郢曲の全觀を得せしめんとす。いづれも新に標註を施したれば、江湖初見の善本なりとす。

特色
校訂嚴密
印刷鮮明
註解適切
裝幀高雅
用紙精良
價格至廉

(上)(中)(下)全三册

菊判總クロース上製
紙數約貳千貳百頁
正價毎册壹圓
小包料十二錢

空押及金模樣
天金緣頗美裝
優麗且高雅

外六大叢書は前頁に連載せり

東京博文館

湧くが如き喝采を得たり

演藝倶樂部

第壹卷第三號の内容下の如し

四六倍判二百八頁
正價卅錢郵稅三錢

（（脚本））
□老後……中村吉藏
□女滿仲……幸堂得知
□國境……田中掬汀

□攝津大掾の人格……馬脚生
□六大力士新弟子時代……華生
□再び老女物を論ず……坂元雪鳥
□表情の下手な俳優……楙本清

・極彩色木版口繪・
木の音……武内桂舟筆
・コロタイプ版・
新富座『南地心中』……
・原色版・
五代目菊五郎の『辨天小僧』……
攝津大掾……

寫眞版
（帝劇、自由劇場、文藝協會、土曜劇場、新富、明治、宮戸、蓬萊、三崎、東京、演伎、柳盛、舞踊研究會、小團次米藏家庭、其他關西各劇場

□第六回自由劇場印象記……國枝史郎
□文藝協會劇『故鄕』の藝……本間文雄
□チオゲネスの舞臺……川村花菱
□歌舞伎座革新論……杉贋阿彌

□俳神樂……田中煙亭
□演藝文學……
□五月狂言便覽……
□落語寢床……柳家小さん

□帝劇扼腕評……闇太郎
□續今昔色物語……岡鬼太郎
□活動寫眞の子役……吉山旭光
□明治座を見る……吉井勇
□樂天會評判記……森曉紅
□長唄研究……中内蝶二
□新派劇の沿革……瀨戸半眠
□近松座見物……岡田翠雨
□湖畔の家見物記……九牛生

（東京日本橋本町三丁目）　博文館　（振替口座東京二四〇）

（15）

更に好評を加へたる　第一卷第三號

淑女畫報

四六倍判口繪光澤紙寫眞版四十頁石版三色版數頁本文百頁　正價廿五錢　郵稅二錢　六冊壹圓卅五錢　十二冊二圓六拾錢　外要稅

◀畫報▶

■二八容姿 誰が爲めにか粧ふ（佳人紫陽花に對す）（彩色石版）池田蕉園女史畫

⊙閑院宮妃智惠子殿下⊙九條男爵夫人⊙鍋島侯爵姫君⊙龜井伯爵夫人⊙前田子爵令妹⊙戸澤子爵夫人⊙松平伯爵令孃⊙安藤子爵夫人⊙石井男爵令孃⊙澤造兵總監令孃⊙周布男爵令嗣夫人……

■精苦旬日 句を成さず（閑庭の逍遙）……（三色版）小坂島邨畫

◉羽田宗羽女史社中の茶會◉愛國婦人會總會◉大隈伯邸の園遊會◉喜樂庵の茶會◉英國大使館の假裝會◉文藝協會公演ズーダマンの『故鄕』◉容姿美と表情美◉戊申婦人俱樂部懇親會◉跡見女學校々友會◉新宿御苑に於ける米國公使夫人送別會

■淑女かゞみ いづれも名譽ある家庭の研麗にして品位ある夫人令孃の最近の撮影にかゝるもの數十葉玉の如く花の如く濃に美し

◀讀物▶

▽小說 窻……遲塚麗水

▽『故鄕』のマグダー……相馬御風

▽家庭演劇──聲曲くさ〴〵譚……小泉迂外

■梅雨中の衣服の手當……佐野青鷲

■男子の眼に映ずる婦人界の流行……白柳秀湖

■新化粧と香料……婦人記者

▽苦節を守りたる女丈夫……川村文芽

▽運命に弄ばれた婦人……一記者

▽婦人問題と婦人……吉田文學士

▽六月のお惣菜

■婦人と時代思潮……加藤男爵

■洋行中の失策談……坪谷水哉

■風俗史に詠まれたる女の髮……桑田春風

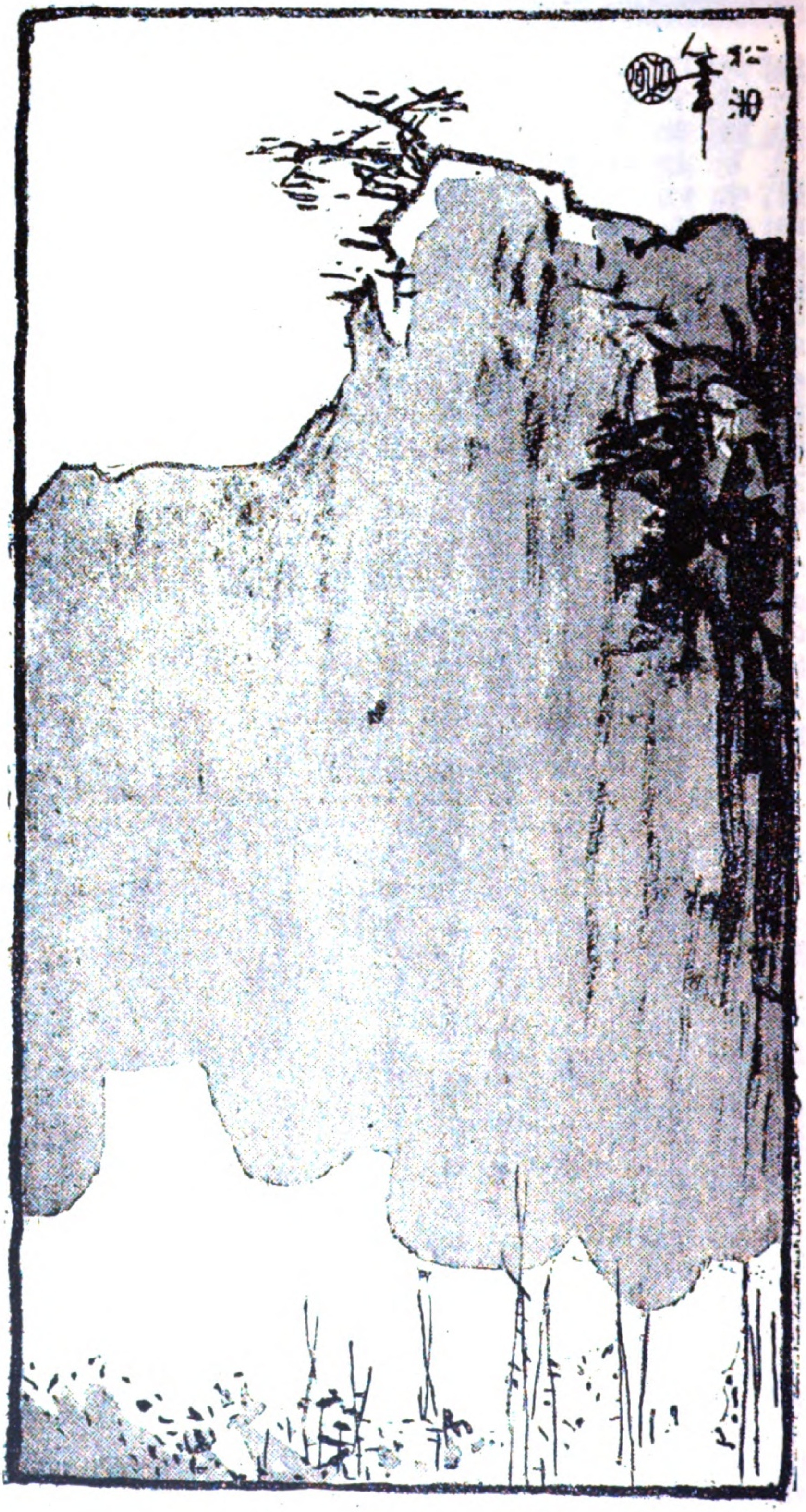
■能樂繪抄……

▽家庭に入らんとする婦人の覺悟……高等師範敎授 篠田利英

▽婦人の虛榮心を善導せよ……下田次郎

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二四〇番　博文館

(16)



夏山（齋藤松洲畫）

松　州　畫……………………………65



新舊思想の衝突と云ふこと

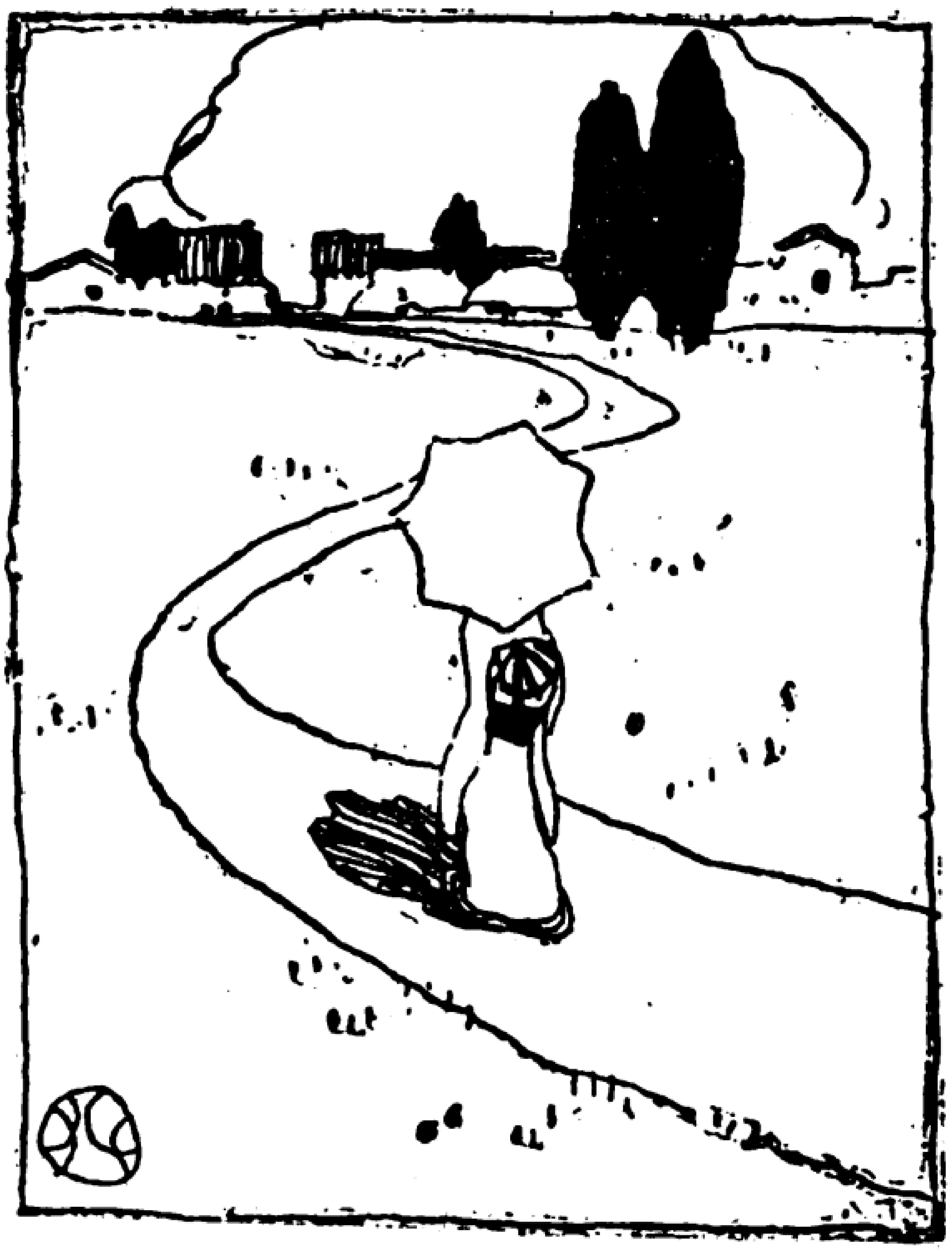
文學博士　建部遯吾

婦人の新舊思想の衝突に就て、如何に考へるかとのお尋であるが、婦人のみならず、全體「新舊思想の衝突」と云ふ事が、我輩には甚だ詰らぬ事で、小題大做の嫌ひがありはせぬかと思ふ。從つて識者顔する人々が頻りに言ふ所の「過渡時代」と云ふ文句ほど、無意味なる言葉は無いと我輩は平生から考へて居るのである。小題大做は、針ほどの事を棒ほどにするといふだけならば、別段罪も無く弊害も無いが、動もすると薪を抱て火を救ひ、火事の所に油を注いて、些かの火の手を數層大きくするの嫌ひがあるのである。子供の喧嘩に親が出ると云ふが、青年男女とか、餘り考の深くない老人抔の間の行違ひに、哲學者と云ふやうな大仰なる連中が飛出すのは、恰も子供の喧嘩に親共が出しやばつて、爲に小さい事柄を大きくして、時としては取返しの付かぬことになることもあるのである。

◎

全體道德の本義は、敎育勅語にも御明言がある通り、之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らずで、萬世不易、損益し增減すべき、若くは輕重を試むべき、變化するものと認むべき餘地は無いの

月宮殿……66



である。唯だ併し道徳の形式。は、所謂時、處、位に依て違ふ。佐藤某は、父が年が寄つて居るから中學校卒業で最早學校を切上げて家へ歸つて若旦那になる。齋藤某は父が若いから、中學卒業後更に高等なる學校に進んで、尙ほ數年間遊學研鑽の勤勉を積む。若しも形式上から論ずるならば、齋藤某と佐藤某とは正反對の事を爲しつゝあるのである。若しも形式に拘泥せる批評を以てするならば、佐藤某は齋藤某を呼んで親不孝と云ふであらう。齋藤某も亦佐藤某を呼んで親不孝と貶すであらう。併し此評論の兩つながら誤つて居ることは明白である。乃ち親に孝行せねばならぬと云ふ道徳の本義は、佐藤齋藤兩人の間に共通不易であるが、彼等が此孝行と云ふ本義を實際に現すには、佐藤は佐藤、齋藤は齋藤、各〻其位、其處、其時に應じてしなければならぬのである。

◎

既に之を古今に通じて謬らずとさへある「斯道」であるならば、何ちよいとし、た世間の景氣の動搖くらゐで、道とする所主義とする所に變りのあるべき筈はない。若しも是で變るやうなものならば、初めから間違つたものであるのである。新舊思想が飽くまで衝突するものであるならば、新思想が間違つて居るか、舊思想が間違つて居るか、新舊思想の双方ともが、思想と名づくべきものでな

いのであるか、孰れかであるに相違ないのである。
然るに「新舊思想」と稱して、五分々々のものが、然も此社會に兩立出來ないものであるかの如くに見るならば、其見解が即ち永久に無秩序紊亂の絶えざる原因となるのである。

◎

彼の「過渡時代」と云ふも洵に珍妙なる言葉で、凡そ時代にして過渡ならざるものがあるか、過現未の三世に亙つて、現在と云ふのは其轉瞬の間に過ぎぬ。現在は忽ち過去となり、未來は忽ち現在となり、過去となるのである。凡そ世の中の勢は、進まざれば則ち退く。人の一生は恰も自轉車に乘るが如く、國運の進みも亦自轉車に乘ると同樣で、一ケ所に靜止し停止して居つては立行くことの出來ぬものである。即ち時勢と云ふものは轉輾して止らず。故に何れの時代か過渡時代ならざるべき。啻に時代に於て過渡があるのみならず、處にも過渡の處があり、位にも過渡の位がある。併ながら斯る所謂過渡所謂變遷にも拘らず、一貫して變ふべからざる、確乎として拔くべからざるものが即ち道と云ふものである。此道は即ち是れ之を古今に通じて謬らざるものである。既に古今に通じて謬らずと云ふならば、之を日清戰爭前と後、日露戰役の前と後、小學校へ入學する前と後、小學校の卒業證書を握る前と後、娘時代と奥樣時代抔と云ふことで、變るべき筈のものでは萬々無いのである。若しも學校の先生が敎へた所の所謂道、所謂德、所謂修身倫理と云ふもの丶敎が、嫁に行くまでは洵に安穩に安々と行はれたが、嫁に行つて行はれなくなるならば、是は所謂羊頭を掲げて狗肉を賣る倫理の先生、學校の校長に謬られたる所の氣の毒な女性の境遇と云はねばならぬ。併し孔子も言つて居らるゝ通り、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣で、忠信篤敬の二つ、若くは四つの德

を全うするだけでも、業に既に野蠻社會へ行ってさへも行はれると云ふのであるから、況や敎育勅語の大體にも渉り、徴細なる點にも渉り、根柢も堅く、又華あり實ある所の、綿密周到なる立派なる所の御敎を奉戴するならば、之を古今に通じて謬らざることは言ふまでもない次第である。勅語には之を中外に施して悖らずと仰せらるゝが、佐藤家から



名所二十五題（陸奥淺香山）

して齋藤家に緣付いて、多少家風が違ふくらゐな精神、之を施して悖るやうな道であるならば、敎育勅語は嘘を仰せられたことゝなるのである。果して今の敎育者や哲學先生は、敎育勅語は嘘を仰せられたと斷言するの勇氣があるか。

◎

世間でよく言ふ「過渡時代」抔言ふ連中は、己れの道徳の實行力の微弱なることを言ひ絡める爲めに「儒教は忽然として玆に亡び、佛教亦萎靡して振はす。今や過渡時代であるから、人心は其歸着する所を失ふ」抔放言するのである。併し人心が歸着する所を失ふたのであるか、爾か言ふ人の精神がお留守になつて居るのであるか、此所一寸吟味を要する。儒教忽然として玆に亡ぶと言ふ前に、先づ儒教だけの事を總てやつて見るが宜い。やつて見て愈よいかないと云ふ證據があるならば、是は頗る傾聽すべき價値のある説である。我輩は固より徳も薄く道徳實現の氣力の弱いものであるが、我々の交際して居り、若くは畏敬する先輩友人で、日本で善人として居つた者は、西洋へ行つても矢張善人として容れられて、能く其國人と和合して行き居る實例は、比々として我々は見て居るのである。如何にも孔子の所謂言忠信、行篤敬、雖二蠻貊之邦一行矣と云ふことの、事實上の實證を我々は澤山握つて居るのである。況や我我にして若し教育勅語の通りを行るべく力むるならば、眞に之を古今に通じて謬らず、之を中外に施して悖らざるものがあるに相違ない。

○

ところで、新舊思想の衝突と名づくる現象は、澤山世の中に在る。其現象は、確にお尋ねの問題が出るだけそれだけ否定することは出來ぬ。然らば此現象を何と見るかと云ふと、是は**古今東西に共通する人間の弱**點である。此弱點があるから、教育者が骨を折り、又克己復禮修養工夫の必要を古より說いて居るのである。而して婦人に於ける新舊思想の衝突と云ふ問題をお掲げであるが、是抔は殊更世間普通の事實で、何も今日所謂過渡時代であるからと云ふので

始つた事ではない。嫁と姑との喧嘩は昔しからある事である。決して所謂過渡時代の特産物ではない。唯だ嫁と姑との喧嘩に、世の中の所謂識者、所謂批評家、所謂哲學先生抔云ふ親共が子供の喧嘩に飛出して、さうして火の手を高め、勿體らしい名前を附けただけの話である。何も「新舊思想」抔云つて騷立てる程のとは無いのである。詰まり人間には弱點がある。婦人には亦其以上に婦人相應の弱點がある。此弱點が、復た弱點を發揮せしむるが如き境遇に置かれる所から出て來て、所謂嫁と姑との喧嘩と云ふものが出來、中には母親と娘の喧嘩も出來るのである。

◎

茲に新舊思想でもないが、新舊思想の衝突の一例をお目に掛けやう。佛蘭西で我邦許多の實例を目擊して居るのであるが、母親が生みの娘に悋氣をするのです。それはどう云ふ事であるかといふと、娘が年頃になつて、舞踏も稽古し、女學校も卒業し、雄心(?)雄心勃々として、頻りに社交場裡、所謂お座敷へ出たがる。然るに娘が人に振返つて見らるゝほどの容姿であるならば阿母さんも亦人に振返つて見らるゝ容姿の女であるのが、所謂三十路の坂を五つ六つ越えた姥櫻の、尚ほ捨て難き風情があると云ふやうな次第で、而して本人たる阿母さんは、是からが社交上の歡樂の一仕事すべき時と考へて居る矢先に、自分の娘を伴れて出ると、今まで自分を振返つて見た中年壯年の浮れ男の、百ある眼の中の五六十は、娘の方に向くものと考へねばならぬ。丁度選擧競爭に投票を分けてやるやうな理窟になるので、そこで娘を伴れて社交場裡へ出るを斷して擇ばぬ。さうすると娘は甚だ不平である。自分は既に斯の如く脊丈も伸ひ、外國語も操り、音樂も出來れば、踊も堪能である。然るに家の阿母さんは酷い人だ。私

を何時までも殿方のお在になるお座敷へやつて下さらぬ。酷い方だ酷い方だと云ふヿが團結して、母親と娘との間に不和になつて居ると云ふ。右の如き實例は、我輩許多個關西に於て接して居るのである。之を何と申すべきか。是抔は即ち「新舊思想の衝突」と謂ふべきであらう。

◎

ところが斯の如きは、思想の衝突でも何でもない。哲學先生抔は、何か事あれかし。そこで以て火の手を揚げて、自分の議論の巧みなるヿを誇らうと云ふ考があるから、何かと云ふと「思想」でござるの、「觀念」でござるのと云ふ名を附けて大騷をおつ始めるが、思想の衝突でも何でもない。人間の動物性の發現くらゐの事に過ぎぬのである。今日女學校教育を受けた若奥さんと、女學校時代以前の人なる大奥さんとの間の、一家に於ける感情の衝突は、角の突合せと云ふが如きもので、何も新舊思想の衝突抔騷立つべきものでない。要するに其大奥樣が、修養、工夫、甚しきは教育の缺乏があるか、若くは若奥樣が、教育と云ふべからざる教育を受け、間違つた教育を受け、而して何等の修養工夫を積まない所に在るか、苟も修養工夫を積み、且つ間違はざる教育を受けて居るならば、道は一也。之を古今に通じて謬らず。之を中外に施して悖らざるものであるから、姑が之を嫁に施して悖らず、嫁之を姑に施して悖らず、之を天保に通じ、之を明治に通じて謬らざるものであるヿは言ふまでもないのである。

◎

兎角社會學的訓練を經ざる「識者、學者、評論家」等は、眼前の塵埃を以て千里の泰山を掩ふ愚を演じて、自ら其非を覺らざる者が往々ある。手近な所に二つ三つ目に映ずる物があると、それが一世の大事

件でゝもあるが如くに言ひ、さうして騒立てる。そこで市に三虎を走らし、一犬虚に吠えて萬犬實を傳へ、曾子の母が亦機を降るといふ次第で、雑誌屋や哲學屋に依つて世の中が物騒になることが非常に多いのである。「婦人の新舊思想の衝突」に就て、どう考へるかといふことに對しての私の考は、先づザッと右の通りです。

△賞罰は常無し

むかし衛の彌子瑕は美男なり。靈帝の寵愛他に越えたりしに彼れ其寵に誇りて、君の車に乘りたるは、敬を失へるものなり、其罪輕からずと申ければ、靈公の曰く、渠に母あり、病ひ重し、故に孝の爲に敬を忘れし事なれば、罪も却つて賞する處ありとて、聊か咎めもされざりし。また或時、見事なる桃の實を獻ずるものあり、彌子瑕まづ自から是を食ひて、其餘れるを君にさゝげたり。君に對する不敬再度に及ぶ、是れ大いに罪すべしと申上げければ、靈公の曰く、それは善味をなして我に獻じたるものなれば、これ君の爲に大忠あるものなりと仰せありて、却つて賞せられたりしが、其後君の寵愛衰ふるに至りし時、この二ツ事をもつて大なる罪なりとして、誅せられたり。世にはかゝるためし多し。心得べき事なり。

△奢らずとも久しからず

太閤秀吉群雄の前に大言して曰く、今我れかく天下を平定せし上は、決して謀反など企つるものあらじいかにとなれば、今の世此秀吉に勝れるものなければなり。との給ひ、

世の中にちと我に似た人もがないきて甲斐なき
事を語らむ

とぞ詠まれけり。扨また關白に登り禁裡補佐の職となり、京都に聚樂亭を建てたまひし時、何者か仕たりけん、その門の扉に一片紙を張りて、かい付けたるを見るに、「奢るもの久しからず」とありしを、秀吉聞召して、みづから筆を取りたまひ、またひとしく張らせたる文に、「奢らずとても久しからず」、と認ため給ひしとなん。


若き命もすぎぬ間に
楽しき春は老ひやすし
咲く間もまたで花散らば
哀しからずやわかき身は
泪なかけそ春の日の
あわき日影をてらしては
いつまた袖のかわく
ーゆく春ー

74



75

容姿と修養

子爵 秋元興朝

美人標準の變遷

美は完全を意味する語であると云ふから、一口に美人と云つても、顏貌から、風姿から、手や、足や、胴等に至るまで、何處に一點の非難があつてもこの定義に當てはまらなくなる。更らに之れを細かく云へば、眼や、鼻や、耳や、口や、眉等がそれぐ完全な形を備へ且つ附着て居る位置も申分があつてはならぬ。又體格、色艶なども、如何にも立派で美しく、縱から見ても、經から見ても、此所ぞと非點を打つ所のなくてこそ、初めて美人と云ふ事が出來るのである。

次に、美人も、その時代に依つて標準が異ふ。或る時代では細面が倘とばれるかと思へば、或る時代には丸ポチヤが喜ばれる。また或る時代には鼻の高いのが流行るかと思へば、或る時代には眼の大きいのを歡迎すると云ふ風である。故に一般的美人の標準を以て其時代々々の流行を律する事は出來ない。

夏帽子の型は年々かはる。之れは人爲的に變へるのだから、月々にでも一週間毎にでも變へられないことはないが、美貌の變遷は夏帽子のやうな譯には行かぬ。然し、兎に角にも時代に依つて美人の型が變ることだけは事實である。

衣服と容姿

又その人の威容と服裝や化粧との關係が非常に大切な事を忘れてはならぬ。たとへば洋服を着て似合ふ人もあれば、和服を着て似合ふ人もある。男でも、女でも、洋服は肥つた丸顏の人に限るやうである。和服は痩せた人、細面の人に似合ふやうである。つまり顏貌や、容姿は如何よくても、服裝及び化粧の

月　宮　殿……………………76

如何に依ては、美人に見えたり、又美人に見えなかつたりするのである。例を引いて云へば、肥肉の年増女などが日本服を着て大きな帯を締めると、見るからに窮屈さうだけれど、それが洋服を着ると如何にも堂々として、品格まで上つて來る。私などは痩せてゐるから、洋服を着ると少しも似合はない。痩ぎすの人や細面の人は和服、肥つた人や丸顔の人は洋服といふのは、確かに好いつりあひのやうである。



名所二十五題（堀切）

美貌と人格

或る論者は斯ういふ事を云つてゐる。美人の美は精神にあるので、顔や姿には依るものでない。これなどは云はゞ宗教的又は哲學的議論で、一般には通用し難い。と云ふのは、美人の標準は矢張り第一に肉體即ち顔や姿が美くなければならない。いくら精

神が美しくても、一見して噴飯すやうでは美人と云はれないと。云つて、いくら表面ばかり美しくとも元來精神と肉體とは離るべからざる關係がある故、精神が良くなければ、ツイ容貌にも其れが現れるやうになる。これを日本の繪畫に喩ふるのに、北齋や文晁の繪は、その筆の達者なことは、他に類を求めることが能きぬほどであるが、繪の品格即ち畫格から云ふと決して餘り高くない。これに比べると、華山、竹田、椿山などの繪は、外形は餘り整つてゐないが、畫格は前者に比べて遙かに高い。これは要之筆者の修養された人格が、その繪の上に現はれてゐるからである。美人も亦たその通りである。いかに顏や姿ばかり美しくても、精神の修養が足りなければ、何所となく下品である。要するに美人とは、容姿と精神と兩々相俟つて初めて完全なのであるから決してその一を斥すべきものでない。彼の精神さへ美ければ美人であるいふやうな議論は、畢竟炭を白いといふやうな、禪學の問答のやうなものである。

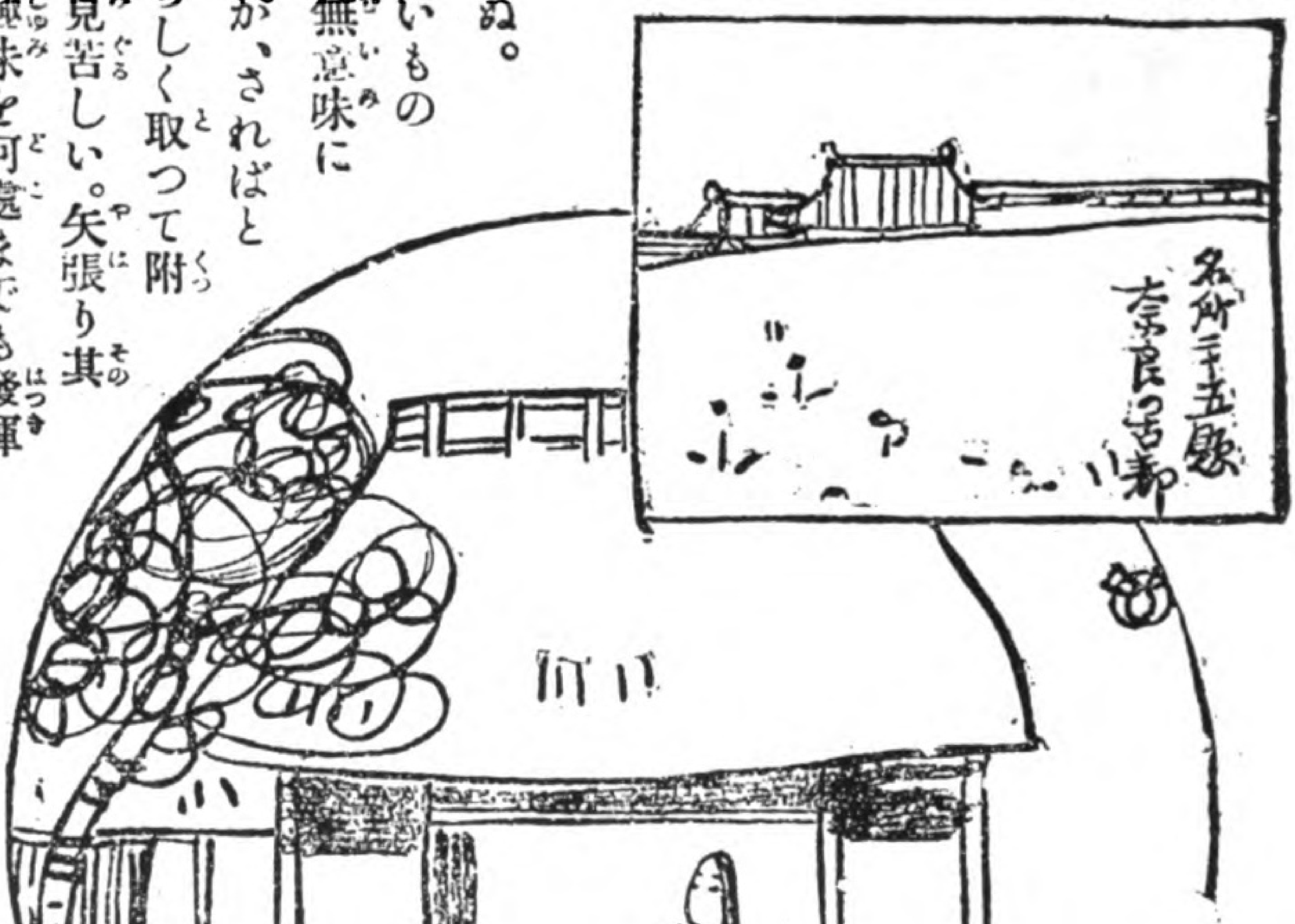
趣味の涵養

女と生れては美人たらんことを望まぬものはない。肉體の美は如何に磨いても或る程度しか美くならないが、精神の修養、趣味の涵養は、その人の心がけ次第で如何にでもなる。先づ婦人の趣味に就て云つて見るのに、或は野外の趣味を好むものもあれば、或は屋內の趣味を喜ぶものもある。亦歐米趣味を非常に愛するのもあれば、又日本趣味を大層尊び碁だの、骨牌などになると、一方に非常に好きなものがあるかと思へば、一方には亦此上もなく嫌ひなものもある。詩歌文學の趣味などもその通りで、隨分極端に走り汔がるが、いづれも其の本業に障らない程度に樂めば、決して害はないのである。

併し、玆に一寸注意すべきは、夫婦間で、餘り趣味が異つて居ると、どうも面白く行かないやうであ

る。故に最初お互ひにその趣味を調べて見て、あまり遠く隔らないものを選ぶに越したことはないが、若し誤つて結婚したならお互ひにその趣味を一致させるやうに努めねばならぬ。

又、趣味の全くないものは何となく人生を無意味に暮すやうに見えるが、さればと云つて、餘り態とらしく取つて附着けたやうなのは見苦しい。矢張り其身にもつて生れた趣味を何處までも發揮せさるのが肝腎である。



名所二十五題（寧樂の都）

常識の修養

次に特に婦人に望むのは常識の修養である家庭や育兒の事はいふまでもなく、政治、經濟、實業などあらゆる方面の知識までも廣く養はねばならない。無論それは専門的に研究する必要はないけれど、その大體は知つて居なければならぬ。さも無いと、たとひ世間話をしても、夫の云ふのがよく分らず、分らなければツイ欠伸が出る

と云ふやうな事になる、それでは困る。

故に妻たるものは、一家の經濟をうまく切り盛りし、子女をよく養育し、そして趣味知識の上に於ては、少くとも夫と話をして其れがよく分る位でなければ困る。

虚榮心の利害

序でに云つて置くが、一體日本の婦人は虚榮心が強いやうである。之れは種々の原因があるだらうが、維新前まで婦人は、階級制度が厳重な爲めに非常な壓迫を蒙り、少しも手足を延ばす事が出來なかつたのが、明治の世となつてから一時に其の壓迫が除かれたので、例へば押つけられて凹んでゐた護謨毬が、押付けるものが無くなつて彈き返るやうな風である。以前は極く低い教育しか受けなかつた女子が、次第に高い程度の教育を受けるやうになり、又一方には歐米の華奢な思想が入り込んで來た爲め、女子の虚榮心も一時に高くなつた。殊に新教育を受けたものほど其の程度が高くなつた。從つてその弊害も少くない。然し一害あると同時に亦た進取の氣象を涵養する一利もあるから、その利害は未だ判斷が出來ない。とは云へ餘り極端な虚榮心は飽くまでも慎まなければ、自繩自縛の苦しみを受けるであらう。

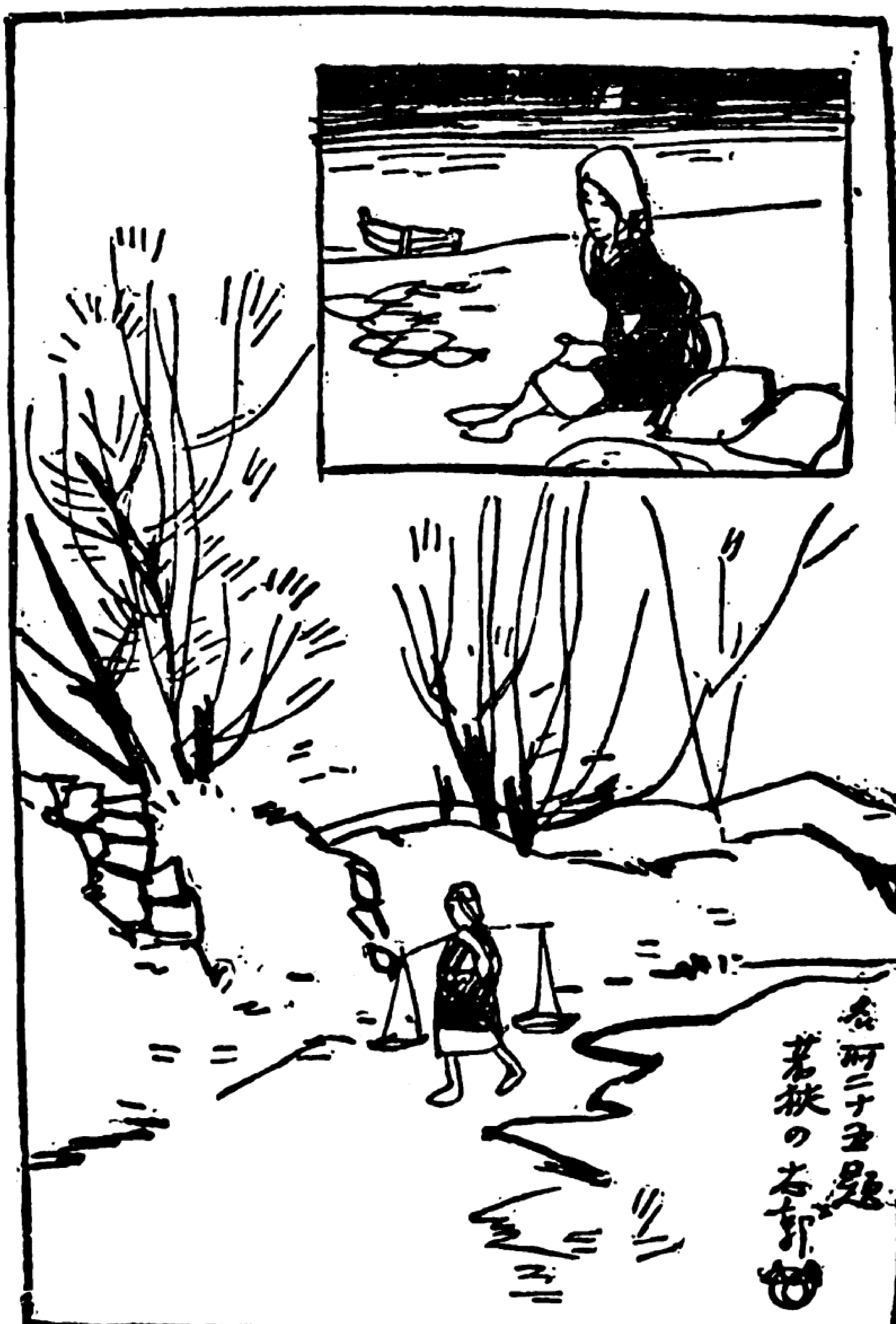
名譽心の解釋

世には名譽心をも汚はしいものと考へて居るものがある。然し人間は何うせ死ぬものと定つて居るので、死後に殘すものは名譽の外に何もないから、誰れしも之れを得やうと望む。その名譽心は人間自然の欲望でたとひ、卑しむべきものであらうと、無からうと如何ともする事の出來ないのである。

併し倩〻思ふに社會に於て相當の仕事をした結果が名譽となつて殘るのは、之れは決して卑しむべきものでも汚はしいものでもない。唯だ名譽を得んが

爲めに僞善をしたり、僞君子ぶつたり、僞忠臣となるのは眞に良くない事で、天下之れより厭ふべく蔑むべく唾棄すべきものはない。けれども眞に社會國家の爲めに貢献して得た名譽までも併せて厭ふと云ふのは、これは亦た人情を撓めた矯僞の情である。之れも亦た甚しく厭ふべきである。

要するに榮華を希ふも、又名譽を希ふにも、身分相當であり、社會に對して然るべき貢献をなした結果として得たものなら、何の差支へもない。漫りに虚榮に憧憬れたり、僞善、僞君子を裝ふて名譽を得やうとするのは、醜惡卑劣の極みである。



名所二十五題(若狹の古郡)

家居十二則

△古語に、一物あれば一累をそふといへり。草木鳥獸器物など、何にても一向にこのみ過せば、必ず其物に心をうばはれ、心に一のわづらひをそふるなり。其上此事を好めば、ひまと財とをつひやし、下人をなやましこのまざれば事少くしてよし。

△常に居るところは陽に向ひ、陰に背くべし。此の如くなれば、日の光明らかに、月にむかひ、夏すゞしく、冬あたゝかくして身を養ふに宜しく又居室も庭中もつれに掃除して、いさぎよくすべし。かくのごとくすれば、氣を養ひいさぎよくす。暗く汚らはしければ心氣の養とならず、又居るところ暗ければ元氣ふさぐ、甚明らかに過ぐれば精神をやぶる、居る處かざりを好めば慾を生ず。

△人の家居は、貧富によらず、身の分より少しせばきがよし。せばければ、つひえすくなく、事少くして住みよし。富貴なりとも無用の屋作ひろくすべからず。ひろ過ぎては通行なやみあり。掃除に家人のつとめしげく、修理もむつかしく、財の費多し。されど又無用の用とて、常に用なきところ少しありてよし。事ある時の爲めなり。

△財を多くたくはへて富める人、もし生れつき仁心なくとも、我身のため、子孫のためをおもひて、善を行ひ人をたすくべし。財幣を多く子孫に殘さんよりは、財をすて、廣く善を行ひ、父母兄弟親戚にあつくし、其餘の人の貧をすくひ、飢寒を助くべし。是れ後の幸ひ、子孫のため、財をのこすにまされり。

△子孫弟姪のともがら、生れつき愚不肖にして、いかに敎へいましめても其の不德改まらず、いさめをふせぎてうけ用ゐず、いさむれば却って心にさからひ、恨み背き、不和に至る、時に諫めてきかざれば、いはずして和を失はざるにしかず。

△凡そ人おの〳〵其の心に生れつきたる偏性あり、妻子下人に癖あらば時につけ敎ふべし。あらためぬればよし、もし其性つたなくして、改めがたきを知りなば、堪忍して、しば〳〵責め咎むべからず。人の生れつきたる癖、おほかた直らず、咎めても益なし。

△吉事をいはひ、凶事をいむは人情なり。然れども愚人は吉凶につきて、はなはだかゝはり祝ひ過し、忌みすごして事に害あり、天命を知らずして福を求め、禍をのがれんとする私心よりおこれり、是れ禍福の理

を知らずしておろかに迷へるなり。

△居るところの室の内にある器物、衣服、調度をば年老たりとも猶立居くるしからずば十の内五六度は、みづから立ちて用をとゝのふべし。奴婢を用ふべからず。是まづ、我が身をうごかし勞して生を養ふ道なり。

△奴婢をつかふに心得あり。多からぬ奴婢をしば〳〵よびて勞せしめんより自から立ちて、心のまゝに事を調ふるが、心のなやみなくして快し。又奴婢を呼んで一事を言ひつけなさしめば、其時に猶つかふべき事あらばおもひ出して、退かざるうちに其ついでをも以て、二も三も事をなさしむべし。奴婢の我が前にある時は、心を用ゐずして、あだに過し、あらしむべき事を言ひつけずして退きて後おもひ出し、しば〳〵よんで事を命ずれば我身も奴婢も事しげく、いたづがはしくしてひまなし。是人を使ふに心を用ゐざるなり。

△園に草木をうゑて愛するも、亦、心を養ふの一助なり。いとまあるとき、少し心を用ゐてあるに任せて求めやすきものを植うべし。

△家園をおさめ、草木を植うるは、もとより氣を養ひ心をだのしまんためなるに、心を用ゐ過して心を勞し、功を費やし、家僕を勞せしむるは、心を養ふ物を以て、かへつて心をくるしめ、隙を費やすは損ありて、益なし。

△十年の計は、木を植うるにあり。樹木を植うるには草木を先とし、花を次とし、薬樹を又其次とす、薬は尤も人に益あり、多く植うべし。取わき柑、橘、柚を植うべし。みのりて熟したるはうるはしきこと花におとらず。

柿、梨、栗、椒、など好品をもとめ植うべし。花木は梅を先とす、紅梅もよし。櫻亦よし、早くちるうらめし、つばき、花久しくさきて、葉うるはし。挿せば活きやすく、花早くひらく、海棠、つゝじ、杜鵑花もよし。薬樹は、杉、檜、樅、などよし、竹を北方に多く植うべし、火と風をふせぐ。又きり〳〵時用に備ふ。前庭には柳、櫻、松、柏など植うべし。じげきをいむ。陰氣ふかく、夏は蚊多くしてうるさし。又桑は日用の助となり、宅中に植うるは新らしくして市に買ふにまされり。其葉さかえてうるはしきは目をよろこばしむること草花におとらず。

うきよには誰か友なるまどの竹
心むなしき人もなければ　　頓阿

新しき婦人

法學博士　浮田和民

新舊思想の衝突といふことは、今日のやうな過渡時代には必ず出來る問題で中にも新しい思想の婦人と舊い思想の婦人との衝突は、近頃になつてから甚しくなつて來たのみならず、新思想の婦人は一般の男子とも激しく、衝突して居るのであります。

元來男尊女卑といふことは、西洋でも昔からある思想で、諺にも『女は男の上に天を持つことを許さず、女は男の爲に作らる』といふことが云はれて居ります。近來婦人もだん／＼と自覺して來た結果、男子と激しく衝突するやうになつたのです。それには樣々な理由もありませうが、人口は一年增しに多くなり、生活程度は次第に高くなつて來た結果、男子は婦人を養ふことは恐か、自分一個の生活にすら困難するやうになつて來たのです。そこで婦人も男子の厄介となつて生活するのはあやふやになつて來たので寧ろ獨立生活をしやうと努むるやうになつたのです。それで婦人が男子の厄介にならない代りに男子と同等の權利を得やうとすることになつた結果男子とも激しく衝突して來たのでありますが日本では生活の程度も西洋程には難儀でないから、婦人の自覺も西洋程になつて居りませんから、男女の間にもまだ西洋のやうにまだ甚だしい衝突がない。

△婦人は結婚すべきものなり

婦人は野蠻の時代から今日まで男子に壓制されて居りました。日本などでは、男子の專橫が殊に甚しく、男と女によつて道德が異なつて居つたやうなもので婦人は今迄忍び難いことを忍んで來て居たのであります。たとへば男子は不德なことをして、それを婦人の前で云つても婦人の方にはそれを責める權

利は無いのですが、婦人の少しばかりの不徳の行は、男子は飽くまでもそれを責めるのです。女子の不徳を男子が責むべきものであるとしたならば、男子の不徳も女子の方で責めるのが至當でなければなりません。

然るに女子が果して獨立して獨身の生活が出來るかといふに、それは出來ないことでありま す。元々男と女とは性が異なつてをるものですから獨身生活といふことは男女ともに堪へ得べきものではありません。思想はいくら新舊と變つても人情に變りは無い筈ですからいくら新思想の婦人でも、眞の愛情を以て接して呉れる男子とは自然身を捧げるやうなことになるので



名所二十五題（小磯が原）

戀愛は男女共に變りはありませんけれども只新思想

の婦人は、從來のやうに男子の玩弄物としてゝはなく、一個の人格として愛情を交換したいといふまでのことであります。處が往々結婚を好まず、獨身生活を主張する女子や男子もありますが、それは甚だよろしくないことであると思ひます。男でも女でも程度の差はあるとしても性慾のないものはありませんのに其天賦の強い性慾を否定して、獨身生活をしやうとするのは間違つた考と言はねばならぬ。女子によつては或年齡に逹すると、母としての本能が強くなつて、ひどく子供を欲しがる人があります。其れが爲に結婚をする女子も多いのですが、兎に角にも普通の女子は必ず結婚すべきものでそれが又、女子として當然のことでありますから若し何處までも結婚しないといふやうな女子があるとしたならば、それは生理上の不具者であるか、左もなければ生活のために結婚することが出來ないとかであるのでせう。

敎育をした爲に女子が結婚を嫌ふやうになつたといふことを聞きますが、性慾でも母としての慾望でも天賦の本能で、本能は決して敎育の爲めに本能が失せて了ふといふことは決してあるべきものでありません。敎育があればある程、却つて女子たるの本分として結婚を望まなければならない筈であります。

△思想は互ひに同化すべし

新舊思想の衝突するといふことは、社會が進歩しつゝあるから起ることで、少しも驚くべきことでありません。むしろ祝すべき現象であらうと思ひます。又男子の方でも、今日の青年の考と、老祖父の考とは、とても一致することは出來るものでありません。今日の世の中に何事をするにも國家の爲、祖先の爲、親の爲といふやうなことにばかり顧慮して居るやうなことでは自分は少でも發展することは出來るものでありません。自分が發展し得ないといふのは、取り

もなほさず社會の要求に應ずることが出來ないといふことになるのであります。そんなら家や親兄弟は捨てゝも自身さへ發展すればそれでいゝのかといふと、決してさうではありません。今日のやうな過渡期には、新舊孰れか一方が多少の犧牲を拂はなければなりません。其爲には舊い思想の老人が新しい思想の若い人人を強ひて舊い思想に同化させやうとしないで、むしろ新しい思想の人々に同化して行くやうにして貰ひたいものだと思ひます。なぜかと申しますと、何事でも、社會の



要求なしに起るものではありません。新しい思想が起つたといふのも、今の社會が其れを要求するからであります併しいろ／＼の思想が入亂れて居る現代のやうな過渡期には、未だ思想の堅まらない若い人々は思想の渦卷の中で西へ行かうかそれとも東へ行つたものかと迷つて居るのでありますから、それを正しい方向に導いてやるといふことは、教育家の責任でありますから、教育家は時代をよく理解し、其の要求が何んなものかといふことをよく察しなくてはなりますまい。



金釵物語

太田三郎

上

支那の國に云ひ傳へられて居る不思議な物語をお話しいたしませう。

大德年中の頃とか申ます。楊州に一人の富人と一人の官吏とがございました。前者の名は呉防禦また後者は崔君と呼ぶのでありましたが、丁度家を隣り合せて居りましたので、何かにつけ互に繁々と往き來して、宛で親族のやうにして居りました。すると或る年、偶然同じ頃に兩家へ非常に美くしい子が生れました。さうして丁度それが、崔君のは男、防禦のは女でありましたので、渠等は不圖思ひ附いて、後日その子等の手と手を握り合はせやうじやないかと約しました。して其婚約の記念として男の父は、双翼の羽ばたき燦として輝き渡る金鳳の釵を、女の父に贈りました。

ところが佳期は隔り易いとか云ひます。其後崔君は動搖する官海の餘波に煽られて、或る遠い〳〵國へ轉任せねばならぬ事となりました。渠等はいたく其別離を憾みとしましたけれど、併し公命は致し方がありません。軈て崔の一家は、何れ兩三年の中に屹度また此地の土を踏むべきを誓つて、懷しい人と

土地とを後にしました。

が、現實の歩みは理想の足跡を其儘に辿つて行くものではありません。官吏の境遇の浮草のやうな運命は崔君の心と反對に動いて、窃に期した二年も過ぎ三年も過ぎ、五年十年と經つても何元の地に歸り得られぬばかりか、却て轉々として遠くへと距つて行くばかりでありました。

さうかうして居る中、女の子の發育するのは實に驚くべきほど早いもの、一方に彼の防禦の子の興孃は何時しか瞳が熱し肌が薫り初める年頃となつて、春酣な情致は日一日と募つて行くのでありました。さあ斯うなつては、もう母親の心は一刻も靜まつて居られはせん。觸るれば落ちる花の命に氣を配る花守の心、それよりもより慌しいのは妙齢の女を持つた母の胸の中です。つく〴〵と思へば崔の家を去つてから既に十幾年、何處でどうして日を送つて居る事やら、杳として其消息さへも詳でないのに、わが興孃は今を盛りの二九の春の、それもつい束の間にうつろつて行かうとする。徒な人の言葉を守つて婚嫁の期を過しては、後に至つて如何に悔いても及ばぬこと、

「いつそ今の中に何處か他に良緣を求めたならば。」

と毎時それを云つて夫に計るのでありました。が、義の堅い父親は、

「だつて一旦口にした男の言は食まれない。」

とのみで、とんと相談に乘りませんでした。

娘はまた娘で豫て其事は云ひ聞かされた事もあり、又時折二親の間に交される噂も偸み聞いて、一本氣な少女氣の何となく其定められた人が懷しく慕はしく、果ては崔家の郎君の外には己が身の一生を託する人が無いやうに思ひ詰めて居るのでありました。だから彼女は其戀しい懷しい人の歸りが待ち遠うで待ち遠うでなりません。同じ年頃の友達の誰と誰とは結婚した誰は誰に嫁したなどゝ聞くにつけ、

充實を缺く遣瀬なさの情は成熟し切つた處女の肉を鋭く責め呵んで、深窓翠帳の裡は夜毎々々紅恨の涙に濕りがちでありました。する中に憫しくもそれが病の種となつてどつと床に就いた切り、其儘段々と重つて行つて、十九の春の末だうすら冷たい雨が椿の花にすゝり泣く或る日、終に無垢の瞳を永へに閉ぢて了ひました。で、彼の婚約の金鳳釵、それも今は亡き人の寂しい髻に挿されて、清い美しい芳骸と共に沈默の土深く封じられる事となりました。

と、二月ほど後のこと、一日防禦の家へ眉の清い若い旅人が尋ねて來ました。外でもない夫れは彼の崔君の子、崔生であつたのです。渠の云ふ所に據れば、其父母は曩日宣德府の理官であつた時に相次で世を去つて了つたさうですが、婚約の事をば其生前に聞き知つて、約を踏む爲に千里の途も遠しとせず尋ねて來たとのことです。防禦ははたと胸迫つてまづ先だつものは涙、頓には事の仔細も云ひ得ませんでしたが、やがて漸く顔を上げて其悲しさを打明けました。

崔生の驚きは喩ふるにものがありません。四つにして分れた對手の女の面影は、素より知る由もありませんが。行末の妻は必ずこれと堅く定めて、樂しい種々の想ひに耽りながら來てみれば、もう其人とは疾に幽明の境を異にして居たのであつたのですもの、其落膽失望のほどが思ひ遣られませう。防禦夫妻も亦、人の悲しみわが悲しみを打混ぜて唯ひた泣きに泣くばかりでありました。

下

其後、兎に角崔生は防禦の厚い情に絆されて、少時其處に物寂しい朝夕を送つて居りました。

すると、春ももう終りに近い淸明の節のことであります。防禦の家では新らしい冥界の人の爲に、渠自身及び妻や娘——死んだ興娘の妹で名を慶娘と云



91　　金 釵 [illegible] 記

ふ十七の美くしい少女――等打揃つて其墳墓を掃ひに出ました。で、崔生は一人殘つて留主を守つて居りましたが、日沒に近く戸外に歸宅の物音がしますので、慌しう門の左側へ出迎へますと、彼の美くしい慶娘が渠の前を過ぎる時に、そつと薄暮の大地に落したものがあります。見るとそれは鳳凰を彫んだ金の釵でした。渠は急いで元へ返し納れやうとしましたけれど、もう其時釵の主は中門に入つて了つて、鎖された扉の外には、たゞ艶めかしい女の匂ひが漂ふのみでありました。

と、其夜も更けて崔生の寢室の扉をほと／＼と忍びやかに打叩く者があります。名を問ふてもそれには答へないで猶頻りに叩き續けるばかりなので、審つて戸を開きますと、こは如何に裳裾を搴げてつと這入つて來たのは晝の釵の主の慶娘であります。：……折柄隙漏る風は生暖かい暮春の空氣を搖がせて、忽ちふつと灯を消しました……。

それからと云ふもの、崔生の室の夜の帳は必ず慶娘の白い細い手に依つて引かれるやうになりました。かくて今まで乾燥し切つた男の部屋は遽に趣深く輝き初めて。うら若い男女の火のやうな脣は、果しもない紅の夢に潤ひ續くのでありました。が、飽くまで激しく濃厚な歡樂を欲求する二人は、でもなほ足れりとせず終に或る夜、新綠の高い薫りが闇黑に瀰漫する中を、互に熱い手と手を執り合つて自由の境へと脱け出ました。して鎭江の呂城と云ふ部落に聊かの知る邊が有るのを幸ひ便つて行つて、其處で一年ばかり唯樂しく嬉しく、宛で極彩色の繪の鴛鴦のやうに美くしく、理想のまゝの戀の生活を續けました。ところが或る時女は男に對つて、

「最に私等は此樂みを奪はれまいとする一心から、前後も構はず恁うして此處へ奔つて參りましたが、熟々と思へば世の中に子を思はぬ親は有りますまい。今私共が歸つたならば、其罪を憎む心よりも先

づ再會の歡喜に躍る情が勝つて、乾度二人を許すでございませう。私はどうにかして今一度親の家が見たいと思ひます。」

と云ひ出しました。男もそれを理としない譯にはゆきません。で、早速女を携へて再び楊州の地へ向ひました。斯くて二人の舟は丹陽を出で瓜州も過ぎて漸て女の家近くになりました。と、女は更に、

「併し飜つて思へば、今打つけに恁うして二人揃つて其敷居を跨ぎましたならば、父も有繫に快くは思ひますまい。どうか貴郎まづ行つて事の次第を語つて下さいまし。私は此處で其首尾を待ちませうから。」

と云ふのでした。而して、

「もし父上が疑つて拒まれるやうな事が有りましたらこれをお見せなさいまし。」

と彼の金鳳の釵を渡しました。

崔生は兎に角に其言に隨つてまづ一人昔の家を訪れました。ところが意外にも激怒を挾して來た對手は却て辭を低うして渠を引き入れ、渠の奔つたのを自己の待遇の薄かつたのに歸して、頻りにそれを謝するのでありました。崔生は消えも入りたい思ひ、たゞじつと差俯首いたまゝ偏に其哀憫を乞ひました。と、防禦は呆然として、

「一體貴君は何の罪が有つて、そのやうに私に謝しなさる。」

と審ります。渠は愈々出場を失つて脊の冷汗はもう衣を徹すばかりでしたが、やつとの思ひで愛姫を奪ひ去つた其重い罪を謝しました。すると防禦はから〳〵と笑つて、

「私の娘は病床の人となつてから既に一年、粥さへ咽喉へは通らぬ大病人であります。どうして貴君の云ふやうな事がありませう。」

とてんで執り合つてくれません。崔生ははたと當惑して了ひましたが、これは必ず世に慣れた老功の

此人が家門の恥辱を思ふ心から、態と言を飾つて拒むのであらう。此上は詮もない事、慶孃を呼んでの上に事を計らうと決心して、
「でも其慶孃は現に今斯く〳〵の舟に居るのです。どうか迎への人を遣はして戴きたい。」
と頼み入りました。防禦は勿論それを誠とせぬ風でしたが、執拗に云ひ張る言葉に根負けして漸くそれを諾ひました。
ところが少時して使の者は手を空しうして歸つて來ました。さうした舟は有つても中には一人の人も居なかつたと云ふのです。防禦は始めて赫と怒つて崔生のあらぬ妄言を詰り寄る。渠はひどく窮迫して了ひましたが不圖氣附いて懷から彼の金鳳釵を出して見せました。と、憤怒の人は遽に打驚いて、
「こは如何にこれは亡き興孃に添へて葬つたもの、どうして夫れが貴君の手に？」
と思ひも寄らぬ言葉です。渠もはつと喫驚して了つてたゞもう夢に夢みる心持、少時は二人茫然と驚異の眼を見合すのみでありました。
折柄、一室の裡に病み臥して居た慶孃に遽に興孃の靈が憑いて、する〳〵と此方へ出て來ました。して、
「興孃は宿世の緣が拙なくて、遠い荒野に去る身となりましたけれど、猶崔家の郎君を想ふ思ひに堪へかねて、特に一年の暇を冥司に乞つて其望みを滿たしたのでございます。が、其約束の一年も今日限り、私はもうあの暗い冥府へ歸らねばなりません。で、此上はどうかして此緣を妹の慶孃に續がせたいと思ふのでございます。若し此願ひをお容れ下さらば、病は直ぐにも癒えませう。なれど不幸にして用ゐられない其時には、不憫や妹の命はございますまい」
と涙に咽びながら瘦せた膝に縋つて搔き口說くのでありました。而して驚異と哀傷とに其老軀を戰慄

させる父親が快諾を口にするのを聞くに及んで、さも嬉しさうな笑ひを寂しい頬に上せましたが、更に熱い涙を戀しい人の腕に注いで、
「さらばで御座います。どうか行末長く幸多い美くしい日を送つて下さいまし。が……が、新らしい人の故に故い人を忘れては下さいますな！」
と云ひ終るや呀と一聲裂帛の叫びをなして其儘息は絶えました。やがて蘇つた慶孃の體には、もう永永の病の痕跡もなく、すつかり昔の艶麗な少女となつて居るのでありました。

間も無く慶孃と崔生との華燭の典は嚴かに行はれました。又、崔生は彼の金釵を市で鈔二十定に鬻ぎ、瓊花觀と云ふ廟で三晝夜に渉る醮りをして、純潔な熱烈な興孃の戀の心に酬いたさうであります。

掏摸と詐僞

「伯父樣、加留多致しませう」
「何だ又虐めに來たの、よし、さあ何でも持つてお出でなさい。だけれど下の句讀み切る迄は、見えて居ても取りつこ無しよ。一體君達の取るのは狡いよ全然で掏摸だもの」
「あら、私達のが掏摸なら伯父樣のは詐欺ですわ、飛ばした札を拾つて來らして、何でも取つたと無理押付に札をお送りになるんですもの」
「まあいゝさ、一層下の句許り讀んだ方が好い。何うも、むベッて云へば直ぐ山風を浚つて行く樣な奴は注意してゝもやられて仕舞ふから」「おや、山風と申す下の句が御座いますか」
「知らないの山風を？、立派に有るよ」
「其下句の、山風の次は何と申ます？」
「其次はね、何だ……山風をして嵐といふらん、さ」
「まあそれは何の歌集に御座いますの、
「辭書を御覧なさい。山風と書いて、ちやんと嵐として有ります、むゝ。」

關白殿下の戀のうらみ

茶道の宗匠、利休居士に二人の娘あり姉なるは同じ茶道の師範水落宗惠が一子千紹二に嫁し、妹は萬舌屋新太郎宗安の室なり。この女の事より起つて、父の利休居士生害に及ぶ、稀代の珍事しゆつたいせり。事のおこりに今天下の主にあふがるゝ關白太政大臣秀吉公が戀のうらみの深かりけるによるものなり。そもこの女音にきこゆる傾國の美君。宗安の妻なりしが夫に後れて寡婦になりたり。年いまだ若けれども子供あまたあれば再縁せず天晴れ貞女の道をたてゐたりける。時しも天正十八年天が下の兵亂止み。世の中靜まりて太平の春ゆたかなる彌生のはじめ、殿下東山のほとりへ御鷹狩あるよしにて、南禪寺前より黑谷の邊へさしかゝりたまふ。御供には佐々淡路入道、藤波牛入齋、木下半助其他御小姓三人ばかりにて太閤殿下自身御鷹すゑさせたまひて山際の細みちを過ぎさせたまひぬ。かゝるところに向ふより、若き女房一人下女三人、めしつれ、乘物はあとより、破籠様のあやしき物を下僕に荷はせ、山々の花の梢をうち眺めやり、いとしづかに、のどやかなる體にてあゆみ來れり。木下半助先に立ちて扇をあげ、やよ上様の御成なるぞ、笠帽子をぬげよと呼はる。供の下僕は乘物を田中に据ゑ、頭を地につけてうづくまる、彼の女房も打驚きたる風情なれども、取しづめたるけはいにて帽子をぬぎ、額わたばかりになりて長き裳をかひとり咲き亂れたる花の木陰に立よるを、關白殿下つく〴〵御覽あるに、年の頃は三十あまりにもなりぬべし、白き小袖に紅の中着かさねたる上に、紫繻子に金絲もて花鳥風月の文字を縫ひたる小袖ゆき長に着なし、腰のまはりの細やかに長き裾をかゝへ、花の下に立かくれんと歩みよるに、たけに及ぶ下げ髮ゆら〳〵とゆりあげたれば、亂れかゝる青柳のいといふばかりなくおもいゆげに秀吉公の御方をほれ〴〵と見かへし

たる。其目つき、眉の匂ひ、うるはしくわりなき風情、これも亦花かとぞ見ゆ、太液の芙蓉、未央の柳も物の數ならずたとへば月宮の嫦娥、一たび人界に下りて今諸人のまなこをなやますかと疑はる、美形すぐれて言葉なし。秀吉公御供の人々もこゝろとみに迷ひ、胸うちさわぐばかりなり。御小姓衆を召して、彼の女房は何者ぞと問はせたまへば、これなん千利休が娘、萬舌屋宗安が後家にて候と供の女答へける。秀吉公仰せらるゝは、さては内々美人なりと聞きしが、噂にたがはぬ傾國よな、殿下の後宮にも、これほどのものはあるまじと仰せありて、聚樂へ御歸りの後、御消息など遣はされける、後家御答申しけるに、我身夫に別れ悲しみの儀、彌まし深く候、まして子供さへあまた候へば、何卒御ゆるし給はり候へとて、御受申しあげざりける。ほとゝぎす、啼かせて見せうの御氣性とて殿下何でう止み給はん、早速富田左近を御使として父利休へその思召を傳へさせ給ひ是非に萬舌屋後家を聚樂へ宮仕せさせ候へとしきりに仰せられけり。されど利休一向に背き入れず、娘を賣物にして我が身を立てんこと是れ師道第一の恥辱なりとて遂に御受申さゞりしかば秀吉公も理において御破りなされ難けれども、わりなき御心入の叶はせたまはぬを、いと殘念におぼしめし、御心底には深く利休の心を憎ませたまふ。其後ほど經て利休、大德寺の山門を建立し、おのれが木像を安置せしこと世に風聞せしは運の盡なり。ほどなく秀吉公の御耳に達し内々にくしとおぼしめしける處に、又讒佞の言もまじりしかば、終に生害に及ぶとぞ。度量海のごとき天下の英雄も一婦人のために、惜しむべき名人宗匠を失ひたまふ事うたてかりける次第、これも亦人間の世なりけり。

通俗講話

物忘れとやり損ひ

文學士　大槻快尊

△面白い原因が潜む

我々は何か事をする時に、間違を澤山やる。波止場へ石炭を買ひに行くといふべきを、波止場買ひ石炭に行くなど〻思はぬ事を話すことはよくある例だ。或は自分の思はぬことを手紙に書いてポストへ投げ込むといふ事も屢ゝある。之れをツイ忘れるとか、やり損ひとか言つてゐるが、調べて見ると、これには色々面白い原因が潜んでゐる。また今日途中で逢つた人はよく逢ふ人だが、誰れだつたか思ひ出せないとか、議論をするときに、否定說を述べずして知つて相手方の說を述べるとか、或は手紙の封筒の表に自分の番地を書いて見たり、其他物を仕舞ひ忘れたりするのも其の例である。

△ツイ忘れたとは嘘

或は自分が結婚することになつて準備してゐる際に、平生自分の氣にくはぬ人に出逢つて、自分は何某と結婚することになつた。式は何日に舉げて、披露は何々ホテルでする、何れ招待狀は差上げるから、是非御出席を願ふと、お世辭を言つて置きながら、其の後招待狀を出すでもなく、當日になつてやつと氣がついて、氣の毒な思ひをすることがある。又私共が何か會でも起して寄附金を募集しやうと云ふ時に、仲間の者から、君も勸誘して與れたまへと頼まれると、いやとは言へないで承諾はするが、其の實少しもやらないで打棄てゝ置く。そして君の方は何んな樣子かと聞かれると、いやツイ用事があつて忘

れて居たといふやうな事がある。此等の例の中でッイ忘れるといふのは、其の原因を調べて見ると、其奥にやりたくないと云ふ心が潜んで居てそれが知らず知らず働くのである。

△結婚を望まなかつた證據

此の事はミーダーといふ人も著書に書いてゐる。或る令嬢があつて、既に婚約も出來て、色々準備をしてゐた。やがて結婚の通知狀も出た。そしていよいよ明日式を擧げるといふ前の晩になると大變なわけで晴衣を注文しないで居たことが判つた。で大騷ぎをして仕立屋をせき立てゝ着物は兎に角間に合はせたが、此の事實によると、此の婦人は果して結婚を希望して居たか、不



滿足であつたかゞ直ぐ判斷することが出來るのである。果して此の婦人は間もなく離婚されたと言つて居る。

又ジョーンス博士の話に面白いのがある。博士は倫敦大學で醫學を研究して、現に亞米利加のトロント大學の教授をしてゐる人だが、或時同僚から、次の金曜日の何時に或る病人を診察して與れといふ依賴を受けた。其の同僚は、其の日に或る宴會に出席しやうといふので、院長に申出るのは工合がわるくて、内所で博士に賴んだのだが、博士は其れを呑込んで承諾した。然るに其の日の其の時刻には、博士は實は院長から他の病人を診察することを引受けて居たのであつた。ところが奇妙なことには、其後金曜日になるまで、或る時は同僚から賴まれたのを思ひ出し、或る時は院長の命を思ひ出しゝて、而かも一方を思ひ出す時は他の方を忘れて居て、いよ〱其の日の其の時刻になると、とう〱同僚から賴まれた病人を診察に行つて仕舞つた。そして歸つて來ると、院長が大變に立腹してゐるので、博士も成程さうであつたと言つて驚いたといふことだが、これも矢張り内所で賴まれたのが隱微の裡に働いて、知らず〱の中に院長の命を忘れさせたのです。

△嫌だからツイ忘れる

また或る紳士が自分の愛する婦人と或る處で會合する約束をしたが、ツイ忘れて行かなかつた。さて五六日經つてから婦人に出逢ふと、なぜ來なかつたと非常に不機嫌だつたから、實は知つて居て行かなかつたのではない。ツイ忘れたのだから、此度だけは何うか勘辨をと辯解したが、婦人は、こんな事が昨年來起らなかつたのが不思議だ。多分もう嫌になつたのだらうと言つて、ます〱不機嫌だつたといふが、此の婦人の考には、たしかに道理があるやうだ。

其他例を擧ぐれば、寄附金なぞはツイ忘れて拂はないし、學會の會費などもなか／＼送らないのが普通である。また大抵の處では、圖書館の書物を貸出すと、二週間といふ約束でも、なか／＼期限には返つて來ない。で葉書で催促すると、其の三分の一位は返へるが、他はとう／＼返らずに了ふ。

此等も返さないといふ考ではないが、持つて來るのが厭だから、ツイ忘れるのでせう。

それから自分の妻から何か品物を買つて來て呉れと頼まれても、旦那樣は大抵忘れてしまつて買つて來ないのが日本の習慣だが、これもそんなに重くも考へないから、ツイ忘れるのである。

△規帳面な友人の例

私の友人に規帳面な極く眞面目な人がある。以前他家へ預けられて勉強して居たが、誰れにでも信用されて居た。此の人は夜分外出する時には、必ず電燈を消して出る癖で、これは五六年來決して變らなかつた。ところが或日家族が皆な用事で出かけたので、此の人は友人と二人で留守番をして居たが、其の内、急に用事が出來て、友人に後を頼んで自分も亦出かけた。そして歸つて來ると、自分の室に電燈が赫々と點いてゐるので、どうも不思議でたまらなかつた。誰れか這入つたのかと思つて見るが、さうらしくもない。誰れか這入つたかと家の人に聞いて見たが、誰れも這入らないといふ。何うもおかしいと思ひつゝ床に就てから考へて見て、漸く自分が友人に頼んで外へ出かけたのだといふ事が分つた。これは自分は留守を頼まれたのだから何處へも出てはならない。出ては惡るいといふ考が頭にあつたから、留守をしなければならぬといふ考丈けが働いて、自分の惡いと思ふ、人に頼んで出掛けた事は、ツイ忘れてしまつたのです。即ち或る事をしないで置かうといふ心(反對意思)の爲めに自分のした事をツイ忘

れてゐたのである。

△妻を大事にしての間違ひ

以上は、主もにツイ忘れた方の事を言つたが、又ツイ思ひ出せなかつたといふ事もよくあることだ。例を擧げて見ると、私の友人に一人の醫者があつて、其の夫人が或時病氣に罹つた。で夫の醫者が診察すると、容體が何うも宜しくない。どうやら結核になりさうである。そして妻に向つて「お前の家には一人も結核患者はなかつたと思ふが、……マア安心じてよからう」と言つたが、其の實、其の細君の母はツイ昨年結核で死んだのだし、其の兄も結核で苦しんでゐるのであつた。これは自分の妻を結核にしたくないといふ考が働いてゐた爲に、醫者は實際の事を思ひ出せないで、こんな間違つた事を言ひ出したのです。

また隱れてゐる考が出て來て、それが他を壓迫して思ひ出されない事が澤山ある。さういふ關係は感情生活と關係ある處によく現はれる。ダーヴインは自叙傳中に、自分の經驗から考へ付いたことで、物を研究するに就ての規則のやうなものを擧げてゐるが、其の中に、著書、雜誌、其他色々見たり聞いたりする中にある事で、自分の考へてゐる道理と合はないものは、直ぐ備忘錄に記して置くと書いてゐるが、實際さういふ事は忘れ易いものです。大學者はどあつて流石によく考へたものだと思ふ。

△秘書の[illegible]

此の種の實例には、西洋の話に面白いのがある。或る醫者が甲なる一人の看護婦を使つて一年餘も一所に居たが、始終看護婦の名を呼ばないで、姓を呼んで仕事をして居た。所が或時手紙を書いて、ふと宛名の所へ名を書いたが、毎日呼んでゐる姓が何うしても思ひ出せなかつた。これは何うしたことかと

研究して見ると、此の醫者には、此の看護婦を使ふ以前に、も一人懇意な乙なる婦人があつて、偶然にも看護婦と同じ名であつた。そして醫者は非常に乙を慕つて居たから、其の乙の何々といふ名に對しては、たゞ乙なる婦人を思ふだけで、其の外の婦人は頭に浮ばなかつた。其の爲に看護婦の名を書いたが、



姓を思ひ出せなかつたのだといふ秘密が知れた。又これは私の見た事だが、昨年の大晦日に、正月

の仕度に、神樂坂へ切花や松の枝を買ひに行つたら、一本二十錢づゝのを五本買つて、價は合計一圓になるといふので、五圓札を出して釣錢を取らうとしたが、二本は面白くなかつたから止めにして、三本にして呉れといふと、お神さんは胸算用してゐたが、やがて一圓四十錢になるから、三圓六十錢上げますと言つてツリを出したのには驚いた。これは晦日の晩で早く商賣をしやうといふ考のみが、心の内に働いて居た爲に、はじめ五本に次に二本、都合七本になるといふやうな便利な計算をしたものと見える。

△結婚の指環を置忘れた花嫁

其他、言ひあやまり、書きあやまり、見あやまりなど色々あるが、それには一々心の内に隱れたる秘密の原因があると見ると面白い。また置き忘れなどもよくやることで、甚だしいのになると、結婚の指環を仕舞ひこんで、何處へ置いたか分らなくする人があるが、これなども研究すると、決してツイ忘れたのでなくて、何か心に秘密があるからで、斯かる夫婦は末長く持つものでないといふ例は澤山ある。或る冷淡な夫婦があつて、夫と妻とは別々の室に住んで、親しく談話をしたこともなかつた。或時妻が夫の好きさうな書物を買つて來て夫に與へたが、有り難うと言つたきり、別に讀んで見やうといふ風もなかつた。併し或日、夫はふと思出して、呉れたのは何の書物か見やうと思つて餘程搜したけれども、何處にもなかつた。さうする中に六ヶ月程經つと夫の母が病氣に罹つたので、夫も日夜看護したが、妻も一生懸命で看護した。妻の此の看護振りに夫はすつかり氣を取り直して以前にかはつて妻を愛するやうになり、それと共に不思議にも非常に搜して見付らなかつた妻の呉れた書物が机の直ぐ近くにあるのが目に入つたといふ事があるが、これも先にはいやいや乍らであつたから、見付らなかつたのである。

醫者の家に、傘やハンケチ、首卷などをよく忘れることがあるが、かゝる遺留品の多い醫者は必ず評判のよい確かな醫者だ。つまり氣持がよくて長く居たいといふ心が働くからである。友人の家へ行くと傘などよく忘れるが、自分の先生の家へ行つては、容易にそんな事のないのも、同じ道理です。

△人間の反抗心

それからやり損ひに付て述べると、爲替を組みながら、手紙にそれを入れないで送つて仕舞ふことがよくあるが、之れもやはりやりたくないと思ふてゐるからである。また日常人をガミ〳〵叱るといふ事はよくないことです。此の陶器は斯く〳〵の由來のもので、或は之れは天正年間に和蘭から來たギヤマンで、などゝ勿體つけてやかましく注意すると、却つてそれがこはれる。こは餘りやかましく言はれると、人は反抗心を起すもので、それが知らず〳〵働いて、本人は知らずに之をこはすことになるのです。下女をひどく使ふと、屹度こんな結果を見る。それと同じ事で、或る事をするなといふと、人は却つて反對になる。新聞を讀んではならぬ。斯んな雜誌は讀んではならぬといふやうな事は、敎育上注意を要することだ。

△秘密の判斷

それから人の癖に就て見ると、ツイうつかり頭を掻く事などがあつて、人は習慣だと言ふが、これもやはり原因がある。或は無暗に着物の着方を氣にする人があつて、一寸湯に行くにでもやかましい人がある。其他人と話してゐる時に、色々癖を出す人があるが、大體から言ふと、人と話して居ながら相手が癖を出して來たら、其の言つてゐることは、心にもない噓言だと思つて間違ひはない。又徵候的動作といふことも注意すると面白いものです。人は心に

何か秘密があると、しなくてもよい事をする。結婚をすゝめられても、自分の氣に入らぬ時は袖をかむなどは其の一例です。或は人の家を訪ねて、奥様がトンチンカンな事をするときには、家庭が亂れてゐる徵と見ることが出來る。斯ういふ風に研究して見ると、ツイ忘れたとか、ツイやり損つたとか、ツイうつかりして居たとか云ふのは、決してツイ忘れたのでも何でもなく、其の心の奥底に大なる秘密、或は其他の大なる力が働いて居ることが分るのである

△津守の名歌

萬づの事一命をかけて爲さんとする時は必ず成就するもの也。虎と見て射たりし矢は巖をもつらぬきしためしあり。むかし津守なるもの友人と歌を讀みてたのしみたるに、はつ春彼の友なる人

鶯のはつ音は何の色ならん聞けば身にしむはるのあけぼの

斯く有ける程に、また是に次で讀出すべき歌なくて、津守は案じ煩らひ病にふして死なんとす。とても果てなん命ならばと、神に祈りて一七日參籠し、七日めの明がたに、はたして名歌一首を讀出す。其歌に

薄墨にかく文と見ゆる哉霞てかへる春のかりがね

△熊野御前

天龍川の東岸に、池田といふ宿あり、此處は熊野御前の古郷なり。熊野は池田の長者が娘なり、其昔京に出で平内大臣に仕へける、池田に殘れる熊野が母、病重しと告げ越しければ、いとまを得て、老たる母の病を問ひたしとれがひしかど宗盛寵愛深かりければ、猶もゆるさで、彼の謠曲に作れる如く、一日花見の酒宴にめし具せられけるに、熊野は君の寵も花の盛も、心なくて斯なんよみける宗盛聞將ながら、孝心に感ずることの殊勝にして人の性は善なる處、また見るに足るものあり。

いかにせん都のはるもをしけれどなれしあづまの花や散るらん

宗盛この歌を聞て感に堪かね、其座よりいとまたまひけり。熊野は數ならぬ女なりしかど、其の至孝の名今に朽ちずして、人をして昔を思はしむ。左ばかり盛なりし平家も、暫しの榮華にて跡かたもなく纔に池田の里と、天龍の水のみ、昔の俤を止めたり。



徒然（坂田耕雪畫）……………………107

生の母よりも親切な私の姑

滿鐵副總裁國澤新兵衞氏夫人　國澤清子

△珍らしい長壽で壯健な人

世間ではよく姑と嫁の仲が惡いとか、難かしくて困るとかいふやうなことも伺ひますが、私などは幸ひにして此家へ參りましてから已來、ツイぞ一度もそんな思ひをした覺えはございませんし、仲が惡いの難かしいのと、何うしてそんなでせうと、寧ろ不思議に思つて居ります位でございます。

私の姑は今年八十一歳になりますが若い人も及ばない程達者でございまして齒だけは拔けましたけれども、耳でも眼でも、今だに少しも何ともございません。餘處の人はよく年寄つた人の手を引いてお歩きになりますが、私共の姑は手を引くことは恐か、何處へでもさツさと歩きますし、今迄若い人にあぶないといはれた例がございません。私共などゝ一緒に何處かへ參りましても、足の加減をして成るべく緩く歩るくといふやうなことは決してありません。却て事によると若い私の方が後れ勝ちになることがあるやうなものでございます。只だ須田町とか銀座とか、電車や何かゞ雜鬧しますところへ參りました時とか鐵道の踏切を越るとかいふ時には、幾らか注意もし、手も引いてあげる位のもので自分でも行けることは何處までも一人で歩けるのでございますけれども、兎に角年を取つて居るから、若しもの事でもあつた時には伜の顏にかゝるから、成るべく出ないやうにして居ると申して居ります。

着物は一切人手にかけず、みんな自身に縫ひますし、洗濯でも皆自身にしますし、髮なども毎朝自身

に結ひます人に結はせると、禿を出すから可けないなどと申して必ず自身にやります。

△安心して子供の世話を托す

私は用事がございまして此度一寸歸つては居りますけれども大抵は滿洲に行つて居ります。一體ならば皆あちらへ行つて居るべきでございますが、子供の學校の都合があるものでございますから、こちらへ殘して、國から連れて參りました老人夫婦の者を留守番に置きますが、姑は其監督をして始終こちらにばかり居るのでございます。それで朝は早くから起きて子供の學校へ出る世話をして呉れますし、それから宅の損じた個處を修繕することから庭の手入れをさせることから、一切萬事をみんな一人で世話をして呉れますので、私共夫婦は安心して任地に居ることが



出來ますやうな次第でございます。

斯樣なことは若い人でも却々やりきれません程でありますのに、それが八十一歳の老人ですから珍らしい達者な人でございます。何時か他へ參りました時に、何時になく眼鏡を持ちましたり、杖を持つたりして出かけましたが、歸ります時に其眼鏡も杖も皆な先方へ置忘れて參りましたので、大笑ひ致したことなどもあます位でございます。

△今から見ると珍らしい早婚

早婚を致しますと、男でも女でも宜しくない。それが爲めに早く老衰するなどゝ申します。それは道理上左樣なこともございませうけれども、私の姑などは、早婚も早婚も、此國澤家へお嫁入りを致しましたのは、十四歳の時で、惣領の新九郎と申す人を產ましたのが十六歳の時、次男の島崎大佐を產みましたのが十九歳の時、其次は女でございましてそれは二十六歳の時其次は今の主人で、それが三十三歳の時と多くは厄年といふやうな年廻りにばかり產みましたのでございますが、別に異狀もなく、そして並以上に長壽をして、生れてから醫者に一度もかゝつたことがないといふ達者で、かういふ人は世間にも珍らしいことでございませうと存じます。

それが何か、特別の養生法でもあるかと申しますと、そんなことはとんとございません。尤も酒は少しもいたゞきません。肉類などしつこい味のものも餘り好みません。どちらかと申しますと、野菜の方を好みます。冬などはどんなに寒くつても脚爐などは逆上せていけないと申しまして決して用ゐたことはございません。

△雷雨の中に拔刀をかざす

連合の四郎右衞門といふ人に亡くなられましてからはいろ／＼艱難も致しましたさうですから、そん

な時に、自然と心も體も鍛はれたもので御座いませう。何でも四郎右衛門と申しました人は土佐の幡多郡の郡奉行を勤めまして、幡多郡の方へ行つて居ります中に、只今ならば腸チブスでございますがさういふよくない病氣で亡くなりましたので御座いますから、それを三十里もある高知まで送りますのに死骸として送る譯にはなりません。それで是非なく長持に入れて、女の荷物のやうにして送りまし



たさうでございましたが、それは〱一ト通りならぬ心配であつたと申します。其時其長持に附添ふて參ります折に、途中で雨が降り出す雷が鳴るといふ凄い天氣になりましたさうですが、雷が鳴ります度に、其長持に一緒に附添ふて參りました惣領の新九郎といふ人も姑も魔を避ける爲めだと申しまして刀を拔いて頭の上へかざしたり何ぞいたしたと申しますが、今から想ひますと魔除けどころか

却て危險などで身慄ひが出やうな氣がいたします。

△生の母よりも懷かしい

そんなやうな次第で、連合に別れましてから、子供を一人の手で敎育しますのには、いろ〳〵と困しい思ひもし、つらい目にも遇ひましたでせうと存じますが、どんなことがありましても、愚痴をいふことが嫌ひだと申しまして、決して泣言らしいことなどは申さなかつたさうでございます。只今でも愚痴をこぼしたり、人様のことをとやかう申すことは大嫌ひだと申して居ります。

そんなことで、自然體も鍛へ、いろ〳〵な經驗も嘗めて心をも錬りなど致しまして人情の細かいところから世の中の甘い辛いがしみ〳〵と解つて居ります爲めに、嫁の私などをも此通りに可愛がつて呉れるのでございませうと存じます。

私の實家は野尻と申しましてこの近處でございますが、實家の母とも姑は大層仲が良いのでございまして始終往來して居ります。それで時々何かこしらへますると、何か珍らしいものでもありますと、野尻のお母さんに上ると申しては持たせてやります。

八十歳のお祝ひは昨年致す筈でございましたけれども少々都合がありました爲めに、ツイ延々になりまして、今年の春いたしましたのでございますが、同じ祝ひをいたしましても、只だ生きて居るといつたやうに老衰をしたのでは仕方がありませんが、私の姑のやうに達者で八十の祝をするなどは誠に目出度いことと存じます。

世間では、姑が居りますと窮屈だとか、其外よくいろ〳〵なことを申しますけれども、私だけは、實際生の母より姑の方がなつかしいのでどちらかと申しますと、本當の母よりも、姑の方へは却つて我儘も云へるやうなもので、本當に何といふ仕合のよいことかとしみ〳〵嬉しく思つて居るのでございます。

ハイカラと舊弊

下院翰長　林田龜太郎

△新思想は舊思想の改良せるもの

西洋の思想などは國柄が違ふから日本に入れて可けない殊に忠孝を本として居る日本には、西洋の道徳を入れることはいけないといふ意見の人もあるやうですが、何も西洋の思想だからといつて、そんなに危險なものではないのです。お婆さんが娘を女學校に入れた爲に、少しも年寄のいふことを聞かなくなつた。新しい考を持つと親に孝行する道も知らないといつて愚癡をいふが。それなどは決して思想が惡いのではない。其娘が眞實の新しい思想は何んなものかといふことも解らず半可通に知つたか振りをするから惡いのです。いくら西洋だつて、新しい思想だつて、善い事をするのを誰も惡いといふものではありません。親に孝、君に忠を盡す可からずなどといふ思想は、何所を探しても、又何時になつてもあるべき筈はないのです。むしろ私などは西洋の思想でも、日本の思想、又は昔の思想でも、今日の思想でも、善とし美とするものに少しも違ひはないと思つて居ります。それは前にも申しました如く、新しい思想といふものは舊い思想と少しも關係なしに、急に飛出して來るといふやうなことは決してありません。皆昔からの思想が段々と改良されて今日に到つたものであります。

△同國人の思想に相違ある筈はない

西洋の思想と、日本の思想、それから又は昔の思想と、今日の思想とは、非常に違つて居るやうに表面から見えますが、實は全く同じ思想ではないかと思はれる程によく似てゐるものです。たとへば宗

教でも西洋の基督教は日本の佛教から轉化したものだと或學者は申しましたが、どちらも情慾を禁じて居ります。而してどちらも極めて神聖な夫婦を理想として居ります。よしや自分が其理想に達することが出來なくとも、自分の子孫を其理想に適ふやうに教育しやうとしてゐるが、其考が果して善いか悪いかは知らないが宗教でさへ、かく一致して居るのですから、其他の思想が一致して居るのも敢て不思議ではないでしやう。殊に同じ國である以上は年が少いからとか多いからとかいつて、さう思想の違ふ譯がないのですのに、それが事實としては違つて居りますのは思想の違ふので無く銘々の理解が違ふからです。

よく日本人は西洋では男女の交際が自由で自由結婚をすると云ひますが、それは違ひます。西洋だつていよ／＼結婚するとなれば、親の承諾が無ければならないのです。親が承知しない限りは決して結婚をすることが出來ないのです。寧ろ日本に往々あります押附がましい結婚の方が何の位悪いか知れません。又日本ではハイカラといふと非常に生意氣な、どちらかといへば悪い意味にとるのですが、西洋のハイカラは決してそんなものではないで實に感心なものです。其證據には内田外務大臣の奥さんなどは、七八年もアメリカの教育を受けたのだから定めてハイカラな夫人であらうと思ふとそれは大違ひで。日本の昔風な上流の家庭に育つた婦人



石楠花や灯黄に見ゆ欄の風

でも及ばないと思はれる程しとやかな方であります。

△親に樂をさせるのは苦しめるやうなもの

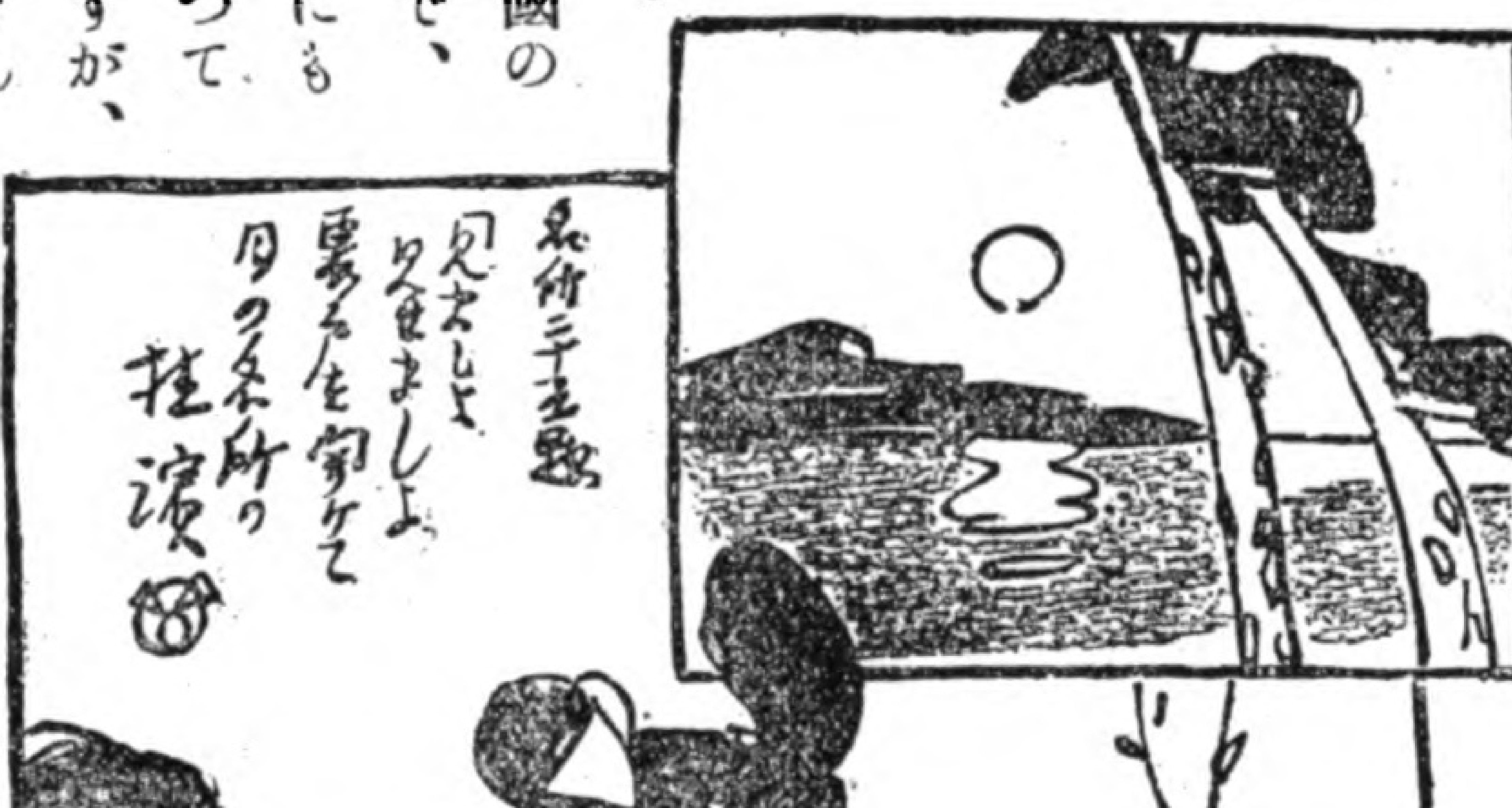
西洋では親子がよく別居しますが、それは親子の情合が薄くて孝行の心が乏しいからだなどといふ人もありますが、それも大間違ひです。日本のやうに樂隱居とか何とか云つて、老人になると親は何にもしないで子供の居候をするのは、第一親の考が悪いのです。何でも人は男でも女でも活動するに限るのです活動するには互に他の力を借りないといふ考が必要ですから活動好きの西洋の人はどうしても別居するやうになるのです。又私共が考へても、老人と一緒に居りますよりは若夫婦は別居する方がいゝです。別居するからといつて親に孝行されぬといふ譯はありません。別居して居つても親の恩は恩として、それに報ゆる心がありさへすれば、働いて居る親を強ひて自分の家に連れて來て何にも仕事もさせずに、體のいゝ居候にして置くのが何も孝行ではありません。むしろ不孝といつてよい程のことです。何故かといへば人間には仕事のない程苦しいものはないからです。親に仕事をさせないのは、親を苦しませるといふ結果になるので、不孝の甚しいものと云はなければなりません。尤も親が老衰して、いよいよ働けなくなつたならば、其時には大事に養つてやるといふ事はもとより當然です。何所の國に行つたつて、親が老衰して其日の生活さへ難かしいといふのに、子供が鉅萬の財産を持つて知らぬ顔をして居るなどいふ事は無い筈です。

△眞の淑女は東西異ることなし

私なども昔は西洋人の男女の様、殊に米國人の男女の様を見ると、男は旦那であらうが、親であらうが、女を大切にして殆んど奴隷のやうだ。あれでは

米國の女などは、實に仕方のないものであらうと思つて居たが、實際米國に行つて見て、今迄の考の違つて居つたには驚きました私はスチブンス氏の家に厄介になつて居りましたがスチブンス夫人が或時こんな事を話して聞かせたとがあります。

「日本の方は米國の女は我儘なもので、夫には勿論、親にも孝行しないと思つて居られるやうですが、米國の女だつてそんなものではありません。米國でも上流の婦人の間には次のやうな諺があります。それは女が人の妻となつて何が一番苦しいかと申しますと、自分の夫から『お前の代になつてからパンの味がお母様の代よりはまづくなつたといはれる時である』といふ諺です。



僕は此スチブンス夫人の言葉を非常に感心して聞いたのです。此一事を以て見ましても西洋の婦人も眞實に淑女といはれる婦人の心掛は違ふものではないといふ事が解るではありませんか。

△新舊思想の衝突は迷悟の衝突なり

新思想だからとか西洋思想だからといつて私は退けませんむしろ大に贊成しますが、日本の今日のハイカラ思想は實に困つたものだと思つて居ります。日本だつて眞實に新しい思想、善い思想は昔からいくらでもあります。又眞實に新しい思想、善い思想は、日本だつて西洋だつて違ふものではありません。

例へば日本の人は坐る習慣がついて居るが、あれなどは衞生の上からいつても、時間の經濟からいつてもよい習慣ではありません。活動するには坐つてゐるやうでは駄目です。昔しからの諺にも「立つて居る者は親でも使へ」といふ事がある位ですから、今日のやうに活動を要する時代では、西洋式に椅子卓子の方が適してゐます、頑固な人は嫌ふかも知れないが、それは仕方がない。嫌ふ人には嫌はせて置いても、最後にはそれを便利であるとする人ばかりの時代が來ると信じてゐます。

要するに、眞の意味の新思想や新風習が勝利を占むるものでそれは西洋から最近に傳つたものでなく日本にも古來からあつたのだが、只それを眞實に理解する事が出來なかつたが生活上の必要に迫られて近來漸く理解されかゝつて來たのであらうと信じて居るのです。新舊思想の衝突は決して親子の思想の衝突ではなくして、自分自身の迷つて居つた思想と、悟りつゝある思想との衝突であらうと思ふのです。

△奇抜な計略

ちとキ印的の奥様が居らつしやいました。お腹が大きくなると、きつと前髪を五寸ほどお出しになる。皆人が顔ばかり見てゐるから姙娠と云ふ事が知れない。といふ計略なのです。四人のお子様がお有りですが、誰も前もつてお生みなさるのを知つて居るものが有りませんでした。然しもう其の手に乘りません。

椅子テーブルの女の勝利

園田孝吉

痛い疊とバネの椅子

近頃よく人がいふ新舊思想の衝突といふことは、くだいて手近な例についていふと、椅子テーブルビフテキの女と、座蒲團茶漬の女との衝突である。純粋な女大學式、孔子曰く式にそだてられた親と、椅子テーブルで英語まじりにそだてられた娘との衝突である。

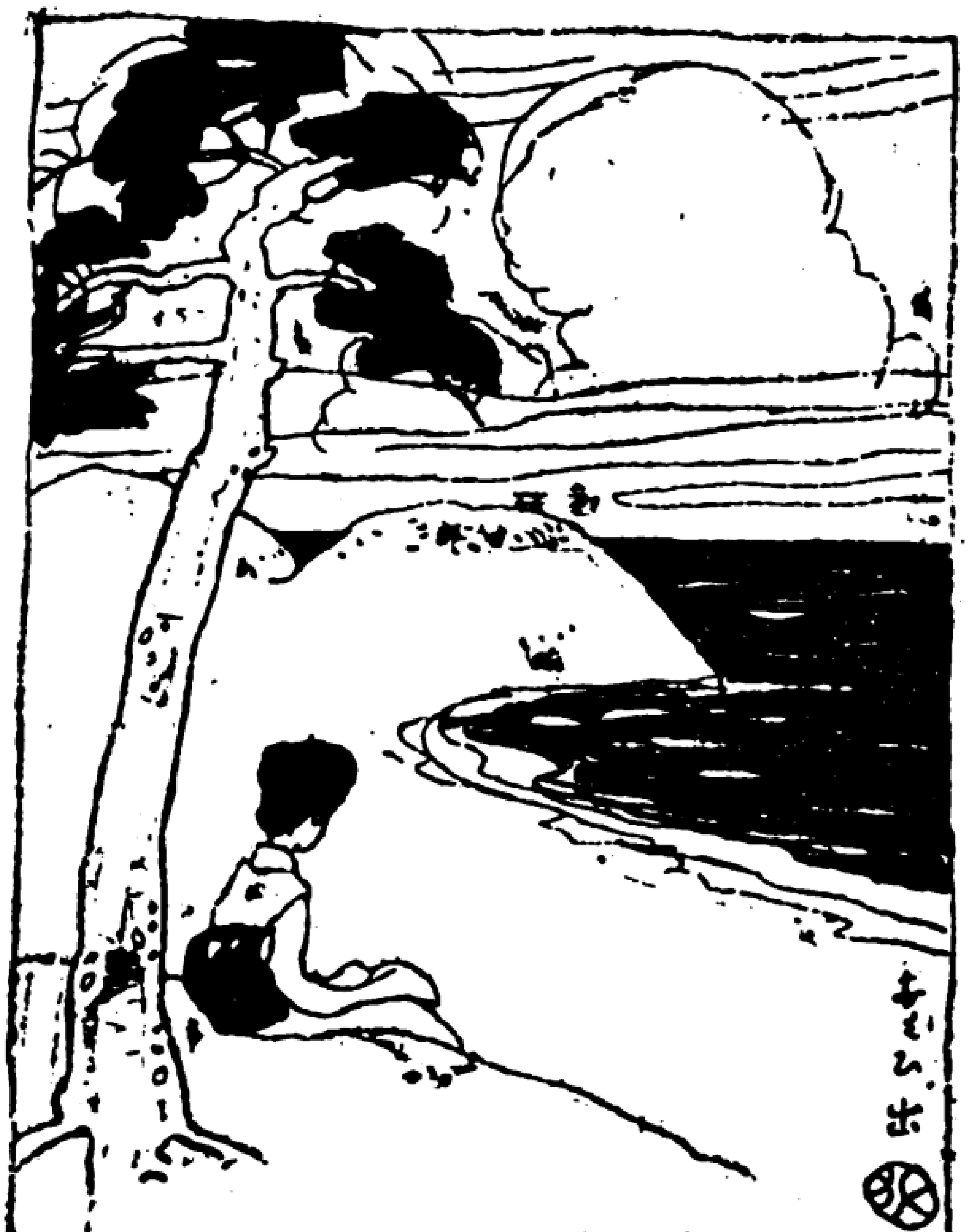
親からみると椅子テーブルで血のたるゝビフテキをつゝきまはすのはいやである。だから親は今時の若い者にはこまる、けがらはしい毛唐人のまねなんかして、おてんばで仕方がないとぐちをこぼす。が若い女、あたらしい教育でそだつた娘、椅子テーブルで人となつた者は、なにもさう子曰く式にかたくなつて、しびれがきれやうが、蚤がくいつかうが、ヂッと我慢してかたい疊の上にすわつて痛い目をするにもおよぶまい。だから老人はこまる。昔と今とは時勢がちがふのだもの、少しは自由をゆるしてくれてもよさゝうなもの、何にも知らないくせに、何でも服從するのが孝行だとか何とか理窟をつけて、お爲ごかしにするのだものと云ふ不服が出る。

これは何方もまちがつた考であるとおもふ。天保や慶應年代にうまれた老人に油くさい氣味がわるい嫌ひだといふビフテキを無理にくはせたり、椅子に腰掛けさせてねぢの尻當におどろかせ、足に血をさげさせて、若い者がかちほこるにもおよぶまい。また老人が、自分は女大學でそだつたのであるから、娘も自分と同樣に女大學でそだてやうといふのも無理である。もつとも老人がさういふ氣でをるのは、一方から考へるとまた無理からぬわけがある。といふのは人にはどこか保守的な氣分があるもので、ま

た自分が一番たゞしいと思ふものであるからである。

食つて見れば好きになる

私は今年六十五になるが、明治の初年頃、長崎で洋學を習つた頃は、其の洋學を實地に應用しやうといふことは考へずに毛唐人を追つ拂つてやらうといふ謂ゆる攘夷根性から習つたのである。それが今日では洋服をきて椅子テーブルで、きらつた西洋人のまねをして仕事をするやうになつて。そして仕事をしてみると、座蒲團に文机よりは、洋服椅子テーブルの方が便利がいゝ。頑固な老人が今日でも新しいとか西洋式とかいふことをひどく嫌つて



ゐるのも、恰度それと同じ氣分であらうと思ふ。食つて見れば好きになるかも知れないビフテキを、食はずにきらつて、あくまで澤庵の酸つぱいので茶漬をくつて、若い者が洋食に舌鼓うつのをいやな顔をして見てゐるのであらうが、しかし若い者に好きな洋食をやめろといふのが無理なやうに、老人に好きな茶漬をやめさせてビフテキをつきつけるのも無理である。のみならず、實際に於ても、さういふ衝突をしてゐる人は、百人に一人か千人に一人といふ位なごく〳〵少數であらうから。左程心配したことではない。

不經濟な生活

親と娘とはもと〳〵生ひ立ちが違ふのだから、何時でも調和してゐるものとはいへない。むしろ調和してゐるとみるのはうはべだけで、内心は不服不滿がたえないのである。がそこは親も娘も互に讓りあつて、娘はとにかく親であると思つて大事にし、親は娘の方が自分よりも今の時勢にはあかるいのだからと思つて、少々の不服は忍ばなくてはならぬ。さうしてゆくうちに、今の親が死んでしまつて、今の娘が親となり、老人となり、かくして同じ明治に生れ明治の教育をうけた人々の世の中となれば、多少の衝突はあるにしても、今日のやうに甚しいことはなくなるだらうと思ふ。

けれども今迄の女はとにかく、これからの女は何うしても椅子テーブルビフテキの女でなければならないし、またなるに違ひないとおもふ。鎖國時代のやうに孤島の日本で甘んじてゐるならとにかく、今日のやうに世界的の日本となつた以上は、すべてが世界的とならなければならぬ。椅子テーブルの應接室へとほされて、絨氈の敷物の上にすわるなどは、あまり賞めた話ではない。それに誰れもよくいふことであるが、今のやうに和洋兩式の生活をして居つては、第一不經濟である。

といふと大變に新思想の娘の肩を持つやうであるが、新思想にもいろ〳〵ある。かの男女同權だとか女權擴張だとか、婦人參政權だとかいふやうな思想は、私はすべて不贊成である。

親を驚かす娘

これほど極端な考でなくとも、隨分今の娘達には虚榮心にあこがれて、前後の分別もなくいかゞはしい行ひをする者もある。これなどは昔風の親からみると、最も女らしくない好ましくないことである。が私の知人のある老母のやうに、娘をつれて或る外國人の夜會に行つて、娘が若い紳士と手をとつて舞踏したのを見て、親不孝だといつて大變に怒つた事があるが、かういふのも餘り頑固すぎるとおもふ。

外國人との交際上、舞踏位は仕方がない。それも悪いと云へば、今日の學校教育は皆なわるい事になつてしまふのである。之れもその老母の娘時代、十七八から二十一二の頃にくらべてみると、娘の飛んだりはねたりするのは、いかにもお轉婆にみえるのであらう。昔は女は内氣なので、人の多勢あつまる所へはなるたけゆかないやうにし、止むを得ずいつても隅つこへちゞこまつて、耳朶まで眞紅にして口もきかなかつたものである。それが女らしい女、お姫様らしい女として尊ばれたのである。から、今の女がお轉婆に見えるのも無理のない話である。けれども前にも云つたやうに、今からの女はどうしても椅子テーブルの女でなくてはならぬので、茲十二三年も經ては大抵かういふ事もなくならうと思ふ。



名所二十五景（逢坂）

葉櫻や歌帖に昇る月一つ　禾水
蝴蝶のほろなき散るや花時　同

處女の煩悶は何から起るか

吉岡彌生

△心身の變革時代

婦人の一生は處女時代に於ける敎育の如何によつて定まるとも申される位で實にこの時代の敎育と攝生とは忽がせに出來ないものであります。然るに只今の時代は、處女とその母親の敎育が一致しないと云ふ事であります。即ち學校敎育と家庭敎育とは懸隔を生じ矛盾が出來て、處女は何方を取つたら宜しいかに迷ふのであります。さらぬだにこの時期は精神及び身體の變革時代でありますから、精神狀態も身體の諸機關も一變するその場合に持ち込んで學校で敎へられる事と家庭で躾けられる事とが一致しないので如何したらよからうと思つて心の定まらないこの時代の女は迷ひが出來たり、煩悶したりするのであります。

嚴密に云へば七歳頃から男女の性が分れて來るのでありますが、靑年期、處女期迄はその區別があまり著しくありません。この時代になると學校の敎育でも男女の差が生じて來るので所謂春機發動期、即ち月經の來潮と同時に處女時代が始まるのでありましてこれから全然男子と途が分れて行くのであります。

△遺傳病と感情

この時代には心身共に種々の變化が起るもので身體は今迄健全に育つて來たものが、處女期になつてから肺結核、その他の遺傳病が起る事もあり。神經系も今迄何ともなかつたのが眩暈がしたり、頭痛がしたりするやうになる例もあります。性質から申しましても今迄快活であつたのが沈鬱になり、學校の成績も善かつたのが俄かに惡くもなつたりするもの

で、一方喜怒哀楽と云ふやうな感情の方面は烈しくなつて、無暗に泣き度かつたり、怒りたかつたりするので猜疑心なども漸々起つて參ります處から折角の人の好意も惡意に解したりする様な事もあります。それ故に繼母の失敗するのも多くはこの時期であります。これらの事は著しい人とあまり著



しくない人とありますが、多少の變化は誰にでもあるのですから、この時期に當つては精神及身體の衛生を重する事が最も大切なのであります

△昔の女よりは餘計に食べる

それからこの時代は身體の發達する時でありますので、食慾は非常に進んで參ります。そこで昔風の母親な

どは女の子がそんなに大食ひをしてはならないとたしなめたりするやうな事もありますが、これは甚だいはれのない事で、この場合そんな理由の下に食慾を減らしたりしてはなりませぬ。自然にそれ丈の要求があるのですから、充分に食物を與へて相當の滋養分を取るやうにさせねばなりません。殊に是非共注意致さねばならない事は、學校のお辨當です。女學校あたりの生徒に就いて見ますのに、一般にお辨當は小さいのが見榮で、そして早く食べて仕舞ふと云ふのが手柄のやうな傾でありますが、これは甚だ間違つた事で、身體を運動させたり、腦力を使つたりすれば、それだけ身體の組織が消耗されるのですから、それを補ふだけの食事はどうしても必要です。この點から申しますと、今迄の母がとつた丈の食事では、今の處女には足りません。と云つて間食は宜しくありませんから、定まつた食事をば充分にとらせるのが何よりも肝要であります。殊に蛋白質の如き滋養分の食物を供給するのが宜しいので、あまりに控へ目にさせて何時も空腹い、食べ足りないと云ふやうな思をさせて置くと遂間食をする、その爲に胃を弱くすると云ふ結果になります。

△小説は嚴禁すべし

それから身體は出來るだけ働かせるのが宜しいので、身體に餘裕があると種々の事を考へて無用ぬ煩悶や、悲觀を始めますから、あまりくだらない事に考を費さないやうに仕向けるのが必要です。この時代には精神狀態は極めて單純にさせて、將來の嫁入り先きの事などは考へさせない方が宜しいので、それから又家庭の紊亂した事とか、家政の不如意などと云ふ事は成るべく聞かせたくありません。併しこの際はいろ〳〵の事を知りたがるもので、その中でも最も知り度のは男女間の情に關する事柄であります。それ故に誰でも小説を讀み度がる 新聞をみても、毎日の小説を樂しみにすると云ふ傾向が一般に出來て來るのですが、この時に小説を讀ませる事は

最も悪い結果を生じます。これから次へ〳〵と種々の連想を起し、空想を逞しうして煩悶などを起します。ですからこの時代には小說は嚴禁するが宜しいと思ひますこの外男女の情事に關係した小說的の話を聞かせふとか、不潔な話をするとか不潔な場所へ近づくなどは、處女の情を挑發して不知不識不健全な方向へ導く恐れがありますから、處女自身も保護者も、力めて注意を要するのであります。



△三文の價値もない煩悶

處女時代の煩悶と云ふものは殊につまらないもので、全く三文の價値もないやうな事柄が多いのです。この時代は智的方面よりは情の發達が盛んでありますから、事に當つて冷靜な態度で考へると云ふ事が少なく、善惡の判斷も事の大小も辨へずに何でもつまらない感情に支配される事が多いのです。それ故に遠慮せず

ともよい所へ遠慮をし、氣兼せずともよい所へ氣兼をしたり、例へば明日は學校で遠足會があると云ふやうな場合にでも、學校の催しならば考へる迄もなく行つて宜しいのですのに、誰さんが行かないつて云ふから私も行つてはあの方に惡いとか、自分はかうすればよいと思ふが人が何とか云ふだらうとか、至つてつまらない事なのです。それで私はいつも生徒に良心の善いと信じた事なら、人に遠慮は要らぬから決行したら宜しい。途中であちらこちら岐道に入り込んだり、他所見をしたりするのは成功の邪魔になると申してきかせますが、根本の思想が確かりして居ませんから、善いか惡いかの判斷にも迷ひますし、たとへ、又善いと信じて進んで居りましても人から兎や角云はれると直ぐにぐらついて仕舞ふのです。善いと信じたら何處迄もやると云ふやうにさせるには、如何しても根本の思想を固めて置く必要があります。それは何と申しても學校で一番に精神教育に重きを置いてその基礎を作るのにあると思ひます。

△精神教育の基礎は儒教

處が今の女學校教育は、あまりに學科が澤山過ぎて、何が中心だか判ない爲に煩悶なども起ります。で精神教育の基礎を作るには、矢張り儒教を中心にして、論語や孟子のやうなものを讀ませて、大體の根本が出來たらば、その上に物理や化學、代數も幾何も敎へたらば宜しからうと考へます。隨分私の處にも、身體の狀況に關して、種々樣々な質問が參りますが、それは生理上の智識が乏しいからの事で、診斷すれば何の異狀もないのですが、自分では何か非常に常態でないやうに思つて心配し煩悶するのが多いのです。全きり何の智識もない者は、又一向無頓着ですから、何も苦勞も心配も致しませんが、未熟聞き嚙つて居ると、それが却つて煩悶の種子になるのです。處が今日の女學校の敎育は、すべてが生嚙りですから如何も面白くありません。と申しても

普通教育ではこれ以上の事は望まれないのかも知れませんが、せめて精神教育だけは儒教主義で充分に固めて置き度いと思ひます。これと同時に母親が一定の見識を持つて居らねば、完全な教育は望まれません。娘のする事がよいか悪いかの判斷の出來ないやうなものは、何でも娘のする事がよいと思つて、何でも思ふ通りにさせる、娘はそれが癖になつて、我儘一杯になります。今更母を如何しやうと申しても及ばない



事ですが、母としての地位を保つだけにはせねばなるまいと思ひます

△同性の戀

近頃は又同性の戀とでも申しませうか所謂オメサンとか、オデヤサンとか云ふやうな事が女學校などには大分流行すると云ふ事でして、中には女同志情死する者も稀にありますがあれらの事に就てもまだ充分の研究が出來て居りませんから、確な事は申上げられません、けれども要するに精神教育の不足と云ふ事に原因するのが多いやうに考へられます。その證據にはさう云ふ關係を生

する處女達は、皆意志の薄弱な、決斷力の足りない、勇氣の乏しい、依賴心の强いと云ふ樣な者が多いのです。それですからその交際も天下に耻ぢない公明正大なのではなくて、何となく人目を憚るやうな風があるのです。もうかうなつては普通の友情ではありませんから、數多の弊害を伴ひます。これを救ふには矢張り精神の基礎を固める事にありますが、處女時代には力めて快活に、のび〳〵した心を持たせる樣に敎育する事が何よりも必要なのでありましてかうするのは比較的この時代の變化を少なくさせる方法なのであります。

△呼吸を溜めて置く必要

空氣が肺にはいつて、酸素が血液をむすびつくには、一定の時間と溫度とを要します。ゆゑに呼吸の吸ふときと吐くときとの間に、いくらかためて置く時間をおかねばなりません。すぐ吸つてすぐ吐くやうでは、空氣に充分の溫度を與へないから、健康によくありません。しかし空氣を吸つてしひて長く肺にたもたせて苦痛をしのぶのもよくありません。つまり一度吸ひいれた空氣を充分に使用して、有効な成分のなくなつたところで之を吐き出すのが最もよいのです。たとへば食物も、胃に入れてまだ充分消化せしめないうちに之を腸におくるやうでは、消化の働きをしたものとはいひません。一旦喰つて消化したものを殘らず吸收してから排出すべきでありますかく食物に消化時間を與へ、また休止時間をあたへる必要があると同じく、呼吸の間にもしばらくの靜止時間がいるのです。その時間は人々によつて一がいには申されませんが。あまり苦しくないかぎりに於て之をなし、しだいにのばしてゆけばそれだけ健康になるのです。

△不眠を治す法

不眠は多く神經が亢奮してゐるからですが、これをなほして眠りを催させる方法はいろ〳〵あります。その一つは水をもつて頸すじをひたすのです。すると冷たい水は腦の中から餘分の血液をおひだして、自然と眠むくなつてきます。次に床につく前にレモン油を頭、腕、肩などへ萬遍なくすりつけ、かるく其處をうつのも妙で、皮膚の神經をしづめて、おひ〳〵眠けを催します。また頭をぐる〳〵まはして運動させるのも一法です。すなはち寢床の上に眞直にすわり、兩手を前にくみ、眼を細くして靜かに頭をまはすのです。不眠がちと頑固なときは、足部の溫浴をとるとよいやうです。大凡十五分ほど溫かい湯の中につけてよくもむと、大概はねむられます。また眠られないときに溫かい牛乳をのむのも効があります。



草市の買物

129

紀行

思ひ出の旅

藤堂春千代

親より譲られた。數萬の財産といふてありませんから。世の富豪の奥様が。一筋の帯に數百金を。費すやうな贅澤は。思ひもよりませぬ。又指に輝くダイヤの光も。誠に小さう御座いますけれど。お米が三十圓近くもするといふ此頃に。生活難の聲も身にします。身分相應に買て與へられる。四季の衣服に少しの不足もなく、月々戴く百數十圓の俸給を袋ながらに。與へられて。やさしい夫に侍き。忠實な女中を使つて。明くれ氣樂に暮らしてる私は。自分でも順境の部だと思つて。常に感謝して居ます。そりや同窓の友で。既に勅任官夫人となられた方もありますし。當時飛鳥落とす。○○社長の令夫人として。交際場裏に。天晴れ活動して居られる方もないでは御座いませぬ。併しそれはほんの僅かな、尤も幸運な方々で。十中の七八迄は、まあ悲境と申上げてよい位の家庭に在て。不足もいはずに、主婦として活動して居ますもの。悲境と申しました所で別に生活難といふのでは御座いませぬ。意地の惡い姑様に氣兼して。旦暮に泣かされてる方や。腕にまかせて覇をきかし給ふ脊の君の、あらぬ方に迄才走りて度々の茶樓通ひに、御自分の前途を悲觀し。空閨に泣いてる人も御座います。又鬼千疋の君の攻擊に僻易し。當時有がちの女中難になげいてる友も御座いますのです。とは申すものゝ昨日の淵も今日の瀬となる世の習。人の事だと思つてる間に、自分にめぐつて來ないとも限りませぬから。強ち人様の幸福をさう羨むにもあたりませんし。又逆境だからつて、あまり力を落とすにもあたりますまい。昔の世襲制

度とちがつて。實力さへあれば徳利をさげてお酒を買ひにいつた田舎の少年も位人臣を極める事が出來ますし。銀行の頭取様が一躍して大臣になれる世の中です人間七ころび八起きは世渡りの常習。只丈夫で忍耐力の強い人が最後の勝利をしめるのですかね。

だから人の價値は棺をおほふて定まるとか申します位で。まだまだ年若い私共が順境だの逆境だのつて、さわいだ所で。此後どんなになる事やら。あんまり暢氣な事をいつて居りますと、神様は、きつと淺ましい奴とお笑ひ遊ばしてるでせう。けれどそんな未來の事は扨置いて。假令一日でも一時間でも滿足して樂しう暮らせる事が出來れば、それ程結構な事は御座いませんわね。



名所二十五題（加茂の森）

そりや私だつて人妻ですもの。暢氣だといつてもやはりそれ相當に苦勞は御座いますよ。どんなおとなしい夫だつて妻が氣のきかない事をしたり。自分の思ふ通りにならなかつたらば。誰だつて不愉快に思ひますから、朝に出て夕に慰安を求めやっと歸る人には。其顔色やそぶりを見て口でいはれない間に滿足をみたす位の機轉がありませんとね。況して人にはなくて七癖とか申します位で、私の夫も亦御多分に漏れない一癖がありますの。それはもう寸暇さへあれば私をおどかしてやらう〳〵と思つてるのでせう。日曜日の散歩でも。夕食後のそゞろ歩きでも始めから行かうと思ふ所を聞かせてくれた事は未だ甞てありません。只おれについて來いとの一命の許に。ステッキ片手にすたこらさと出て行くのです。だから家を出る事は出たが。東へ行くのやら西へ行くのやら。坂を上つたり下つたりして。足が勞れてくたぶれてしまつた夕暗の中を。藪のトンチル見たいな中へ。ズン〳〵。さあ行當つて道がない逆戻りといふやうなさわぎですもの。併し之位の事はまだいゝとして。今年の九月でした。暑中休暇に、さあ明日から一週間の旅行だと申すのです。處が例の通り行先はいうてくれませぬ。どんなに尋ねても只ニコニコ笑つてる許り。聞かせてくれなくていやなればお留守番だといふのでせう。全くひどう御座いますわね。故郷へ歸るならいゝ着物の二三枚は持て行かねばならず。又土産もとゝのへねばならず。溫泉や海水浴ならばゆかたがけでもよしと申しましても。そんなお土産物は外へ出ればどこにでもある。着物の荷物は眞平だよつて。知らぬ顔の半兵衛。さも面白いといふやうな樣子をしてますの。すると。女中が奥樣どこでもよいぢや御座いませぬか。旦那樣と御一緒ですもの。假令どんなおけがをしましても。どなたにすまないといふぢやなし。おとなしくついてお行き遊ばせよつて申しますので。私もあきらめて

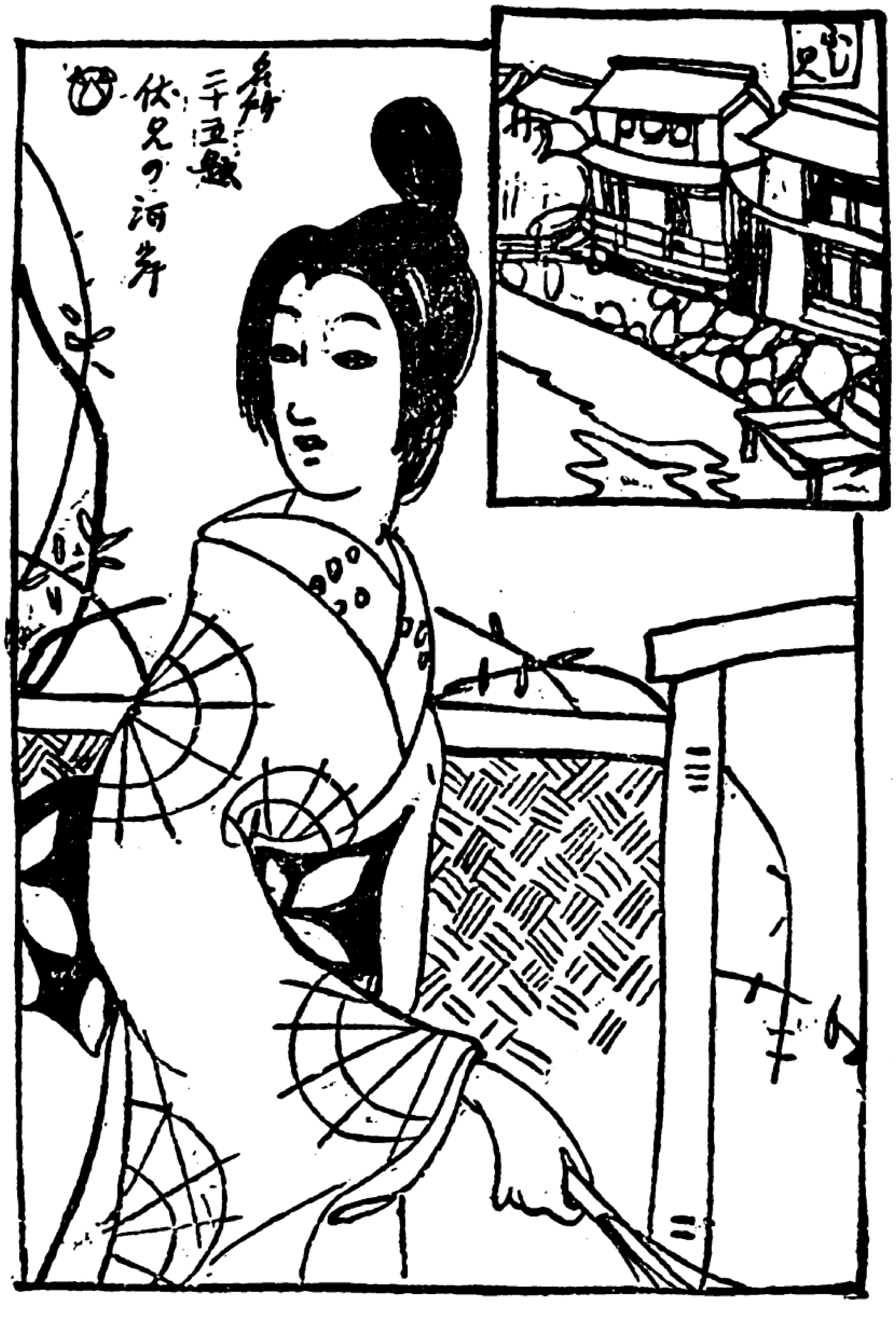
家を出ました。停車場へ行つて切符を買ふのを見ますと。まあ思ひがけない山田行二枚。あゝ伊勢參宮だわと思はずほゝ笑まれました。それでもまだ申しませんけれども列車はずん／＼伊勢路に走るではありませんか。私は伊勢參宮に一週間もかゝるだらうかとのうたがひ丈はありましたけれど。夫は胸にちやんと豫算がたつてるのでせう。悠然とかまへ込んで途中しきりに名所舊蹟の說明をしてくれます。私は知らぬ所を見られる樂しさと。夫に伴はれての旅行といふ安心とは。どこへでもついて行きさへすればいゝと思つて。別段にもう尋ねもしませんでした。午後三時半。山田驛へ着いて。內宮外宮の神々しい宮居に參拜を終り、電車に乘つて二見の朝日館といふ宿についたのは六時半。すぐお湯に入つて。二人で樂しい夕食をすませ。久々振で新らしい魚の御馳走に腹つゞみを打ちました。食後二階のおばしまに立つて、沖の方を眺めて居ますと。曇つた夜だから、いさり火が點々と見ゆるばかり。あたりは眞つ黑で心地よく吹き入る風ははだえにしみ。永らく山國にすみなれた私には。ざわ／＼とよせては返す浪の音も何となう物すごう響きます。一本の御酒に陶然といゝ氣持になつた夫は。床柱にもたれてうとうとといねむりをして居ましたが。宿の女中があわたゞしく手をついて何か御用と申しますので。室の間違でせうといひますと。イーエ、こちら樣でといふ。呼びもしないのにと思つてると。まアひどい旦那樣ですこと。電氣鈕の上にちやんと坐つてるのですもの。近年にない失敗だと大笑ひしました。

すぐ下の青松の間には、あざやかに十六燭の電燈が輝いて、白い眞沙の數さへもよまれさうで。あたりがひつそりと靜まつてるから。なぎさによする浪の音が一層さわがしう響きます。あゝ浪の音――。年頃日頃あの樣に戀しかつた此浪の音……。今夜はからずもそれを聞きながら。思ひもよらぬ伊勢の

海邊に。眠る身となつたのです。

第二日　二見の日の出——名物の一つだ相です。明日は晴れてくれゝばいゝと祈つた甲斐もなく。今朝起きいづる少し前から雨がしと〳〵。まだ玉だれの音はたゝないが、きのふ白かつた沙も、いつの間にか色づいて、一層青い松の枝から露がぽと〳〵落ちて居る。あまり大降りにならぬ間に。夫と夫婦岩のあたりを散歩し。繪葉書を買つて宿に歸ると、今から鳥羽に行かうと申します。もう此流儀になれた私は別に驚きもしませんで。早速荷作りの用意して巡航船乘り場へと出掛けました。雨中の風景又趣きがちがつて。いゝ事はいゝが旅には雨は禁物です。小さな巡航船へ乘つて。此大波をうねらせつゝある伊勢海を横ぎることの便りなさ。雨はます〳〵烈しう西北の風さへ吹きすさび。靑色に底もしられぬ深い〳〵海の上を。ちよろ〳〵と走りゆく此の小舟。もしも一寸かやつたならばと思ふとぞつとしますがあまり海岸の景色がいゝので見あきもせずに眺めて居ると。いつの間にやら鳥羽に着いた。錦浦館といふ宿について晝食をとり。四五日こゝに滯在の豫定だつた相です。所が來て見ると思ふにました此淋しさ。九月も既に半過ぎて。朝夕の冷氣身にしむ此頃は。海水の客もいつしか去り。此廣い宿に只の一組もない靜かさ。殊に四五日前に此土地で泊つた男女が。つい此下で情死したとかで。私共もまた其類でないかとのうたがひがあるらしい。宿にいらぬ心配をさせるのも氣の毒だし。あまり淋しいから。もう一泊もする氣になられず。今夜の船で紀州の那智の瀧見物に行かうと申します。音に名高い熊野灘の荒浪。さすが海邊に育つた私も。聊かあやぶまれましたけれど。只一船がかやつて海底の藻屑となつたとて。夫と一緒でないかとの反抗心も起り。こゝに相談一決しました。宿の者に尋ねても。一向道順が別りませんから。電話で商船會社へ問合せると

紀州行の船は今夕五時に入港して六時出帆ですと申ます。時に午後二時半。少し早いけれど。商船會社の待合室へ行けば。また熊野路の勝手知つた人に、逢ふだらうからと。雨中車を雇うて會社へと行く。



名所二十五題（伏見の河岸）

志州鳥羽港——港は一寸立派だし。紀伊路に通ふ唯一の交通機關、商船會社の待合室。——定めて相當の場所であらうと行つて見てびつくり。其不潔さ加減つたらお話になりません。又西國三十三所を

めぐる乞食のやうなと申しては失禮だが。そんな三等客は多いが。一二等の客は一人もない。切符賣人は親切だけれど。紀伊路の事は一向不明で。どこで上陸してよいのやら別らぬといふ始末。しかたがないから。地圖をひろげてまづ近かりさうな三輪崎までのものを買ひました、而してまてども〳〵船が來ません。其退屈さ例へやうもないのに。田舍の人は平氣なもの。四時間も待つて。漸う午後六時半に牛の吼く樣な笛を鳴らして。大野川丸が入つて來ました。まちくたびれてしまつた。けれど乘船さへせば直ちに出帆するからと。樂しんで急ぎのつたのに。乘り込んでから船員は「少し沖が吹いてますから今夜はこゝに碇泊です」つて申すのですもの。私は夫と二人。顏見合せてあまりの事に啞然としました。汽車が二時間隔より出ないから不便だの。電車ががた〳〵ゆれるのつて。小言をいふ都の人に。此文明の世にも。まだ此樣な十九世紀式の所もありますつて。敎へて上げたい氣持がしました。甲板に落つる雨だれの音が。ます〳〵烈しうなつて。頭の上に落ちないかと思ふ位。其心地の惡さと申しましたら。ピユッーと吹く風は。鳥羽町の海邊の松をざわ〳〵させて。暗い灣内の浪の音と共に枕にひゞきます。船室に橫になつても眠れませんから。天幕ある甲板へと出ました。少し小ぶりになつたが雨はまだ中々止まない。あゝ此僅か二百幾十噸の小さな船に。私共の貴重な生命を託して。長途航海の途に上るのかと思ふと心細さ此上もありません。船長室はと見ますと、小さな室に之といふ娯樂もなく。明けても暮れても不自由な船の上ばかり。職務とはいへ。習慣とはいへ。ようも退屈や不自由を感せないことよ。一航海の間には。戀しい妻にもなつかしい子にも逢ふ事が出來ないで。終日終夜働いても。誰一人慰めてくれる人もないのに。時々起る暴風雨の時は。生死さへ定まらない境遇と思ひますと。何だか氣の毒

なやうな感じがして。思ひなしか、船員は皆淋しさうな力のない顔に見えます。更に其夫人の上を思ひますと。あゝ懐しい夫は今何地の海を渡つて居られるだらうかと。旦暮天候ばかりを打案じ。指をりかぞへて無事に航海を終へて、歸宅するやうと一日千秋の思ひして待つて居る事でせう。だから海員の方はいつも新婚當時のまゝの情交が變らないと申しますのも。恐らく誇張の言ではありますまい。こんな事を考へてる間に大分時間がたちました。僅かばかりしめ殘された。船員の室の戸のすきまから。洩りくる燈火は。浪にゆれながら細く長く輝いてる。船室に歸つて休んで居ると。午前三時半漸う錨を上げたらしく。甲板でコト〳〵と響き出しました。まあ此ゆれること。上下動左右動は恐かなこと。土瓶の水はこぼれ積んだ茶碗がたふれるといふさわぎ。午前五時頃にはもうたまらなくなりました。先程波切から六十あまりのお婆さんが乘り合せたから。女づれが出來て。少々醉うても友達があるからと悦んで居ますと。やがて朝食が出ました。私は中々一口も頂く氣になりませんのに。其お婆さんがまあどうでせう。此烈しい動搖の中で。平然として食事してるではありませんか。私は其元氣に驚かされてしまつて。いつもこんなにゆれますかと尋ねると。今日はあなた樂ですよ。いつもは船が立ちますよ。つて平氣で申しますのです。あゝ之でこそ。眞の海國婦人だ。習慣は第二の天性だといひますが全く其通り。例令口ではどんなに海國婦人だといばつても又海事思想を養成せんといけないなんていつても。京都や奈良の學校で。生徒に油繪の海を見せて敎へて居つては到底だめ。眞に我帝國の前途を考へ。子女に海事思想を懐かせやうと思ふならば。時々此樣な旅行に伴うて。實地に經驗を味はさねばならぬとほと〳〵と感じました。東へ行くにも西へ行くにも、此荒浪をこえなければならないといふ事がつまり習ひ性と

なつて。六十過ぎても此様な元氣があるのでせう。尾鷲といふ所で。一寸甲板に出た許り。一晝夜の間一つも物を食べないで。吐瀉して苦しみました。錨を下ろして居つても。たえず左右に傾斜は止みません。夫ゝ玄海灘よりひどいと申してます。而して新たに乘る人毎に那智の案內を聞きますと。勝浦で上陸すればよほど便利だけれど三輪崎からでも行かれるといはれた一言に。三輪崎港に入つた時は。もう一分時も船に居る心はしません。勝浦はもう眼前に見えて。今から更に二時間さへせば。そこに行かれるのだからと船員も親切にいつてくれたが。もう誰が何といつても、一度上陸しなければとこゝで上る事になりました。ゆら〳〵する船の上を起つ丈の力もありません。夫の肩にすがつて。よろめく足を漸うふみしめ。浪荒い熊野の奥の海上を。●●せどりに運ばれ。更に人夫に脊負はれて。無事海岸につきました。冷たい砂上に下りて。始めて人心地になつた私は。ほつと一いきついて。扨あたりを見廻しますと。最早夕暮の空。暮色蒼然ともいふべき熊野灘の上に。今乘りすてた氣船からもれる火影も清らかに。折しも九天には恍々たる明月一點の曇りもなくあらはれて。おもむろに吹く涼風はネルの袂をかろく拂ひ。之が幼い時から、音にばかり聞いて居つた熊野の奥の海邊などゝは夢にも思はれず。一種の感情全身にみち渡り。遠く異邦にでもいつたやうな氣持がしました。大前屋といふ宿について早速入浴し暫時休養しますと。もう船の醉はすつかり忘れてしまつて、常の元氣になりました。こんな田舍でもやはり文明の光は輝いて。明日は日韓合併の祝だといつてます。むかへの宿では。觀音様へお參りをする一群が。しきりに。ふし面白く御詠歌を歌つてる。こゝは船員より外にあまり用のない土地柄とて。私も女中からおかみさんといふ稱號を奉られました

第四日——昨夜賴んで置いた車夫が朝六時に來ま

したから。早速仕度して宿をたつ。近日にない上天氣。こゝでも十五日許り雨であつたとかで。此様なお天氣は珍らしいと申して居ます。これがまあ。みくまの山奥でせうかと思ふばかりの肥えた土地に。錣重たげによくみられる稲のさま。其景色のよろしい事。右に山を控へ。左に大洋を望んで。けふは海もよほど静かですから。紀伊の南端だなどゝは中々思はれません。百羽ばかり一群になつた燕が。畑の上に遊んでる中を。二代の車は静かに走ります。朝のにごりない海氣は。肺臓の底までも洗ひ去つて氣も心もすがすがしう。オゾンに富んだ。松の並木の間のなめらかな道路。之が大邊地の新道ださうです。此邊の車夫も。吉野山と一緒で。犬に先引を命じるが



名所二十五題　（千曲川）

其犬のさかしさ。寧ろ不思議な位。二つの峠をこえると。勝浦から來る道に合して那智へと上る。熊野といへば、山ばかりの土地と思うて居つたことの。今更に。此整頓した道路を見て。恥かしい感じがしました。山高く上るにつれて。しきりに冷氣を覺えます。山の麓で車をすてゝ。表坂を上るのが普通だけれど。足弱い身だからと先引を命じて。新道十八丁を引かせる。此瞬時。私は夫いませばこそ。此樣な十分な旅行が出來るのだ。と感謝の念にたへませんと共に。過ぎし戰役に。戰死せられた。幾多の友の未亡人の上を思ひ。運命とはいへ。あゝお氣の毒だとくれ〲も思ひました。道の半から。おの名高い瀧が見え初めた其うれしさ。やがて行きつくと。觀音様の反對に下り坂があつて。二丁ばかりの下にゴト〲とすさまじい響がして居ます。其坂を下りて。更に上を仰ぎ見ると。まあ〲綺麗ですこと。丁度紳樣が。人に見えないやうに。白い大きな綿をちぎつては捨て。ちぎつてはすてゝる樣に。ふわふわと。上から下へやみまなく落ちて居るさま。飛沫も何もありません。上部は之が水だと。どうして思はれませう。白色不透明の其清らかさ。十五日も雨ばかりなので。瀧の幅は日頃の倍は慥かにあると車夫は申しましたが。まあ何といふ壯觀でせう。高さ八十丈の大瀧。仰ぎ見てると。すぐ。首がだるくなります。西國三十三ヶ所第一番の靈所で此瀧に接しては、最早殘りの三十二ヶ所をめぐりませんでも。既に〲心は清められて。病あるものは治し。心配あるものは洗ひ去られてしまひませう。實に天下の壯觀。其風致の宜しきこと。其形容する詞の未熟な筆に。盡されないのを返す〲も惜しみます。文筆に達した世の學者やまたは大磯や逗子の濱邊に。年年高價を拂つて。避暑する人々が。一度來つて。此雄大な景色に接し。極致な筆を奮つて。滿天下の人士に照會したならば。一種崇高の念の永久に忘れる

ことの出來ないと共に。此名蹟もます〳〵名高うなる事でせうと思ひました。いつ迄見ても限りないから。更に幾つかの坂を上つて。觀音樣にお參りをする。不老軒といふ茶店に休んで。繪はがきにスタンプを捺させ。土產にしました。又も車で靜かな那智村を過ぎ。勝浦についたのは丁度十二時半。宿で晝食して居ると。午後三時出帆の〇〇丸があると申します。今日こそ天氣がいゝから。それに乘らうと。商船會社へ行く。鳥羽の樣に。又汚い所だと思つてると。どうして雲泥の相異。一二等待合室は。きれいな二階の二十幾疊といふ廣い所で。疊もしいて碁盤迄も供へてる。カーテンの間から見渡すと。丁度赤島溫泉は。すぐ眼下にあつて、繪の樣に小さな舟がたえず通ふてます。間もなくはしけが來て乘り込みました。

空よく晴れた秋日向。ネルと襦袢でまだ暑い位。きのふの航海でおぢけたつたから。もう今日は甲板で。風に吹かれて居ませうと。夫と二人おばしまに堅くもたれて。雲と海とを眺めてる。勝浦港のよい景色と申しましたら。海が深くて、浪が靜かで。はるかの山の間から。那智の瀧の上の方丈許白く見えてます。いざさらば。熊野の土地よ。生きて再び來る事は出來ないだらう。又二度も來る所でないと。別れ惜しみつゝ。船は次第に外洋に出ました。靜かと申しても熊野灘ですもの。港を出てからは。船の傾斜が正に四十度。丁度大海に木の葉が浮いてる樣見渡す限り。青い雲と。青い水と。どこがへだての一筋やら別らない位の雄大な其景色。底も知られぬ青海原に。音もたてずに。大きくうねる波の樣。一呼吸せば。宇宙の大氣を吸つたやうな。いゝ氣持がします。此荒浪のたゞ中で。ほんの小さな小舟に乘つて。釣をしてる人もありますもの。私は思はず左の軍歌を口ずさみました。

風吹き浪たつあらしの時も

妻子の爲には沖へと出でゝ
命を惜しまぬ日本男兒
何ぞや恐れんかたきの軍艦
我をばせめんとするものあらば
武勇をくらべん怒濤の中に。

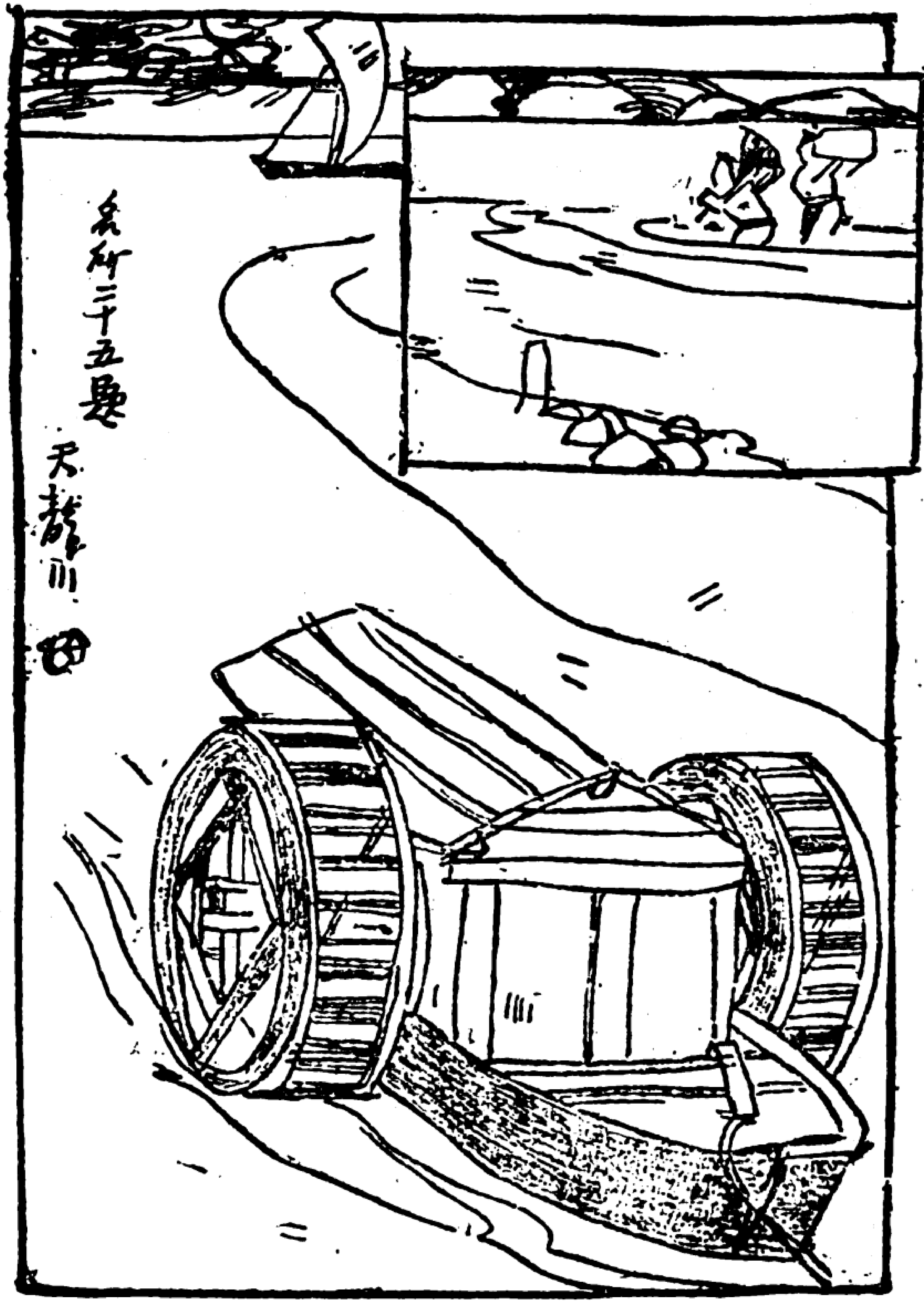
此様な人をこそ眞の海國男兒といつても。恥かしくないでせう。樫野ケ崎の燈臺のあたりでは。トルコの軍艦の沈沒した所かと。其當時の光景を忍び。潮岬も誠になだらかで。きのふとは大變な相違。船員もこんな海は。年に二度だと申してます。眞ん丸いお月様が。青空高く輝くと。眼前にさへぎるもののない海上の月世界。而も今宵は八月十五夜――。今年のお月見を熊野の海上で。夫と共に。眺めやうとは昨日迄も思ひませんでしたのに。

夜の更くるも知らずに。甲板で遊びましたが。一時頃船室に歸つて。一眠りして眼がさめると。早や大坂。まあ今日の航海の安樂でしたこと。かうして私の旅行地圖には、新らしい赤線が一つ加はりました。夫も始めには恐らく。こんな大旅行をしやうとは。思ひませんでしたのでせうに。ほんの氣まぐれが。思はぬ動機となつて。紀州沿岸を。すつかりめぐりましたのを。不思議な事だと申して居ます。

併し私はこゝで一寸御忠告申し上ます。此海岸の旅行は。只今では汽船より外にありませんけれど。婦人が一人で決して旅行してはなりません。又女同志監督者なしの旅行ならば。それも見合せた方がいいと思ひます。富みて敎育のない男子の乘客や。ボーイや下級船員などの談を聞いてますと。夫の傍に居る私ですら恐ろしい氣持がしましたもの。東京や京都を汽車や電車で旅行するやうな譯には決してまありませぬ。

今年からは二見鳥羽間も。既に汽車が開通しました。勝浦新宮間の鐵道工事も起す相です。又紀勢鐵道問題も。過ぎし議會に提出せられて。否決にはな

りましたが。政府では調査を始めたとか申しますから。幾年かの後には。汽船に乗らないで。行かれるやうな事がないとも限りますまい。けれどそんな事はまだく。ずつとずつと。十年も十幾年も後の事で御座いませう。



名所二十五題（天龍川）

△眼の養生

眼は心の窓といつて顔のうちの中心美である。女の眼は鈴を張れ男の眼は絲を引けといふ諺はあるが女の眼は涼しくて愛嬌あり、男のは大きくして威厳あるのが矢張り好い、身體の疲勞てゐる時に本を讀んだり細かな物を久しく凝視めては不可せん。食事中や其の前後、乘車中や歩きながら新聞雜誌などを讀んだり、黄昏時の薄明りや、暗い燈火の下で讀書しては不可せん。夜間燈火を用ゐる時は背面の方から光線を受けるやうにして、眞向に受けてはなりません細かい物を見る時は、時々遠景を眺めて視力を休めねばなりません。

家を修むるの要訣

◎凡そ家を修むるには、まづ父子兄弟、夫婦の三親をあつくすべし。古語に父子親しみ、兄弟和し、夫婦正しきは家の肥えたるなりといへり。もし、三親和せずんば富めりといへども家のやせたるなり。

◎凡そ家の内の平日の用心は、かねてより早くすべし。農家ならば來年の秋までの糧米をそなへ、次に鹽醤油をたくはへ、脯醢をつくり、薪炭油をかねてよりあつむべし。右の貯なければ家の計たゝず。奴婢をあはれみ、其衣食を察して飢寒せしめず、其所を得せしむべし。常に用ふる器などゝのへそなへ、器のそこなへるをば修補し、屋宅、藏庫、牆壁の破損せるをはやく修理し、菜蔬草木、時に順ふてうゑやしなふべし。藏のあけたて出入を察し、盗賊と火災との用心、つねにきびしくしてをこたるべからず。火をふせぐ器なども平日より備ふべし。

◎家をおさむるにも忍の字を用ふべし、忍とはこらふるなり。堪忍するをいふ。いかりをおさへて、慾をほしいまゝにせざるもこらふるなり。又わが家の貧なるをこらへて、人をむさぼらざるべし。人堪忍せざれば人の交は和らがず。故に人の行の我がこゝろかなはざることを、たがひに堪忍して、うらみいからざれば一家の内は和ぎ、したしむ。是れ家をとゝのふるの道なり。

◎家を修むるに四ツの敎あり。一には稼業をつとめて生業をなさむ、二には儉約にして財用を足す。三にはつゝしみて我が身をたもつ。四には恕にして人を愛す。

◎身を修め家を保つに約の字を守るべし。約にすとはつゝまやかなるなり。ほしいまゝならず、取ひろげざるをいふ。是を以て情慾をふせぎ、財用を節にするは身ををさめ家をたもつの道なり。

◎わが身朝夕の保養をかろくして身をば勞働すべし。をごりて酒食の美をこのみ、をこたりて身を安逸にすべからず。をごらず、をこたらず、かくのごとくすれば第一徳をやしなひ、次に身をやしなひ、次に財をやしなふ。飯食淡薄にして、身を勞働すれば、食氣滯らず、氣血めぐり、脾胃やぶれずして生を養ふによろし。又身を勞すれば艱難辛苦にたへて忠孝の行、學問藝術を習ふにつとめよし。

◎人の家の禍は多く利を求むるよりおこる。利をむ

さぼれば却つて財を失ひ、わざはひ来ること多し。利を求めんこゝりは只稼業をおこたりなくつとめ、家財をみだりに費さずして分外の利をむさぼらざれば禍なく財を失はず。

◎客を招きて饗せば、只、眞實に客の心にかなふをむねとすべし。かざるべからず。食品すぐれていさぎよし。味をよくしてすゝむべし。酒をすゝむるに心得あるべし。多少はのむ人の分量にしたがふべし。少ししふるはよし。しひても猶辭せば其心にまかすべし。

◎親戚をば時々招きて饗應すべし。しからざれば情意うとくなる食品はうすくし、情意は厚かるべし。

◎家を修むるに、法なく、いろがせにして、家道みだりなれば、其家の奴婢もおこたり、無禮にしてわがまゝなる故、身のならはし惡しくなる事をばしらで、其家風のいろかせなるをよろこぶ。又主人儉約ならざれば奴婢のためゆたかなる様におもひてよろこぶ。この二は無道にして却つていやしき惡かなかるものゝ譽を得るものなり。故に奴婢のほまれを得る人は却つて其家法みだりなること多し。しかればいやしき者と愚人との譽をよろこぶべからず。

◎家を修むるに奴婢もつとも治めがたし。これを使ふに尤も道あるべし。遠ざけてきびしくすれば、うらみそむく。近づけているがせなれば、おごりをこたる。恩愛をもつてなづけ、禮法を以て正すべし。

◎奴婢は才力ありて質實なるこそれがはしけれど、かゝるものは稀れなり。才辯にして利口なる者は、多くはまことすくなくして、主をあざむき、かたましきことを行ふ、主人もしこれを喜びて家事をまかせては必らず大禍となる。才德ふたつながら得がたければ才鈍くとも質實なるを好むべし。鈍くしてはかゆかざれども主人の敎にしたがひやすく、後の禍なし。

◎いにしへの諺に『癡ならず、聾ならざれば家翁とならず』といへり。言ふこゝろは、家の主となる者は家人の過あるを堪忍しておろかなるやうにあるべし。かしこだてして、明察にすぐれば家人くるしみて家をさまらず、又家人の、人惡しきをつぐることをとりあげて、聞き用ふべからず。耳聞かざるがごとくなるべし。かくの如くならざれば家の主人となりがたし。この諺よく心得べし。大かたは知らず顔にて過ぐすは、わざはひなし。是れ智者のすることなり。（益軒翁訓言）

實驗談

家庭教師の一日

みさを

私等は田舍の女學校を卒業する前から、もう魂は花の都に飛び出して、女學世界や其他の雜誌で見る美しい彼の目白の女子大學へ迷込で居たのでした。

女學校の校長さんが、女子大學などは餘りよろしくない。金頭のやうに頭ばつかりが堅くても、實地の利かぬ不具の女、殊に男を男とも思はぬ氣風には全く寒心する。裁縫や料理は家婦となつた後々の助けともなるが、をつに氣取つて自轉車に乘つたり、又は哲學だの、禪學だのとそんなことよりは木の芽田樂の一つも出來る樣にならねばいけないと、非難されたのも構はず、七十名の卒業生中から、田村さんとたつた二人で飛出して女子大學に入り、國から持參した行李の内の木綿衣服は、人に笑はれる度に送り返して、都好みの矢絣に空色の袴を長う地に引き、頭は本校一流の人格髷に結つて、夏の歸省に舊友をあつといはせてやつた事もありました。

春は上野の櫻花、秋は隅田の月の夜も、寄宿舍生活の身にはそれもしらず、何かしら理窟澤山に新熟語や、燒直しの英語をあやつつて居る古い卒業生の方々を神樣の樣に思つて居る中に早くももう三年。天晴れ卒業はして見てもといつたところが、資格問題のやかましい今日、女學校にだつておいそれと買つては與れず、さうかといつて小學校の代用教員で大枚十六圓の俸給頂戴して、もし〳〵龜よ龜さんよも餘り氣が利かず、さりとて國許へ歸るのは思ひも寄らず、まあ〳〵私の樣な者は、家庭教師位が適當だらうと某伯爵家の家扶に頼みこんで其邸へ行く事になりました。是が始めて人の御飯を食べるそもそ

もです。

姓名は申されませんけれ共、御當主が大變にさばけた御方で、洋行迄遊ばした殿様だし、奥方様も誠におやさしい御方で若様姫様で、七人の子澤山、若様には男の家庭教師が付いて居るといふ事でした。

神經過敏な寮監の先生が「男の家庭教師の居る邸へ……」と不審と恐怖の眼を睜つた程でしたけれど男だつて人間ですもの まさか取つて食べるとも申しますまい。そんなに意志の弱い、自身を保護し得ない様な私じやありませんと、口へは出さなかつたけれども、卒業後保證人の家に一週間ばかり休息して、勿論早稻田に居る家兄に、何も彼も呑み込んで國の兩親へよしなに云つて貰ふ様に頼んで、友人と共に其邸内の家扶を訪ねました。暫くすると紬の紋付に古い銘仙か何かの袴をはいた、もう經から見ても緯から見ても三太夫式に出來上つて居る家扶其人が出て來られました。



家扶の伯父さんはろくろく笑ひもせずに、何分よろしく御勤めを下され度い。お上は誠に御二方様とも結構なお方で、御母堂様の事をおまへ様と申ますが、こなたも至つて御やさしい御方、若様方には伊藤といふ人がお附申て居るから、姫様お三方だけの御世話を願ひ度い。尚御不案内の點は申ますからとの挨拶。それから始めに取定めて置く可きは

お手當ですなお望はどの位？と短刀直入。

何もお金が望みで來たのでない。申さば物好き：：だから、と申て今迄嚙つた親の脛も弟の爲に少々殘して置かねばならず、つまり國許から支出さへ仰がねばよろしい決心でありますから：：、ともまさかいはれず、其邊は御考へにお委せ申します。別に望みもありませんから、ときつぱりと答へましたので、それでは尙熟考の上でと其話しはそれ切り。

其夕方お上へ御目見えをといふので、例の家扶に引かれて奥の十疊も敷ける立派な日本室へ伴はれました。

成程兎に角品位のある御主人に、並んで撫で肩のすつきりとした人形の樣な眼鼻立ち、一絲亂れぬ丸髷の奥方が、黑塗金紋散らしの手あぶりを中にして御出になる。

私は何も奉公に來たのでないから、そんなにぺこぺこと頭を下げる必要もあるまいと思つて居りましたのに、どうも其家扶の物言ひ萬端が、恰も侍女を召抱へられる初御目見えのやうに、苦しうない近う近うといつた風なので、扨はとうなづいて、丁寧に不束者何卒よろしうと挨拶を致しました。

姓は何とかいつたね、松田かうん、成瀬の學校出身だね、我輩の所へも贊成しろとか、金を出せとかいつて幾度も尋ねて來たが、男女同權の細君製造は全く御免だから、何にもしやしないのだアハ：：：と大笑ひ。

奥樣も何やらお口の内で仰しやつたが、よく聞えなかつたけれども、だまつて頭だけ下げて置きました。

△奉公人の多い事

御家族は御母堂樣に、御前御夫婦から、マイナスの弟御樣當歲の若樣まで都合十一人であるのに、召使が車夫馬丁迄三十足らずの人數、家令、家扶、玄關番や取次の書生達が三人、臺所專門の女が三人、

御母堂樣には老女と、お小間と、今一人お相手をする女中、奥樣附御前の御出入の世話は、今迄侍女がしたのだけれ共、少々事件があつた以來これは奥方の役目になつて居る。

奥を取締る老女、これは奥方の御緣付の折に御實家から附て來た人で、女大學流のしつかりした人らしい。

それにお針といつて裁縫をする人が二人、小間使お庭を掃除する小使それは〳〵多人數。何れも揃ひもそろつて不別嬪な女ばつかり故、御同族中で番町の化物屋敷と仇名が付て居るさうですが、これは奥樣が天下無類の燒手で御出になるからです。それだから奥方の御出にならぬ時、御前に口を利かぬ樣御注意遊ばせ、こんなわけですよと智慧付けられました。其内學校から歸宅された三方の姫樣達にも、初對面の挨拶をして、いよいよ家庭敎師になりすましました。



△凡て姓を呼び捨て

お上を初め、お子達迄が松田〳〵と呼び捨てにす

るのが何だか癪に障つて仕樣がない。御無理御尤の斬捨御免の昔なら兎に角、多少教育を受けて教師として入つて來たものを捕へて……。

それ位なら未だ辛抱もされるけれ共、一番上の令孃、是は頗るの疳癪持ちで、算術の豫習をする時に、自分の腦が遺傳的に役に立たぬのをいはずに、鉛筆で持て人の手甲をいやといふ程打つたのです。失敬なとは思つたけれ共、だまつて堪へて居たが、こんな事は度々だと今迄さんざいぢめられたお附のお時が涙を流して私に訴へる。

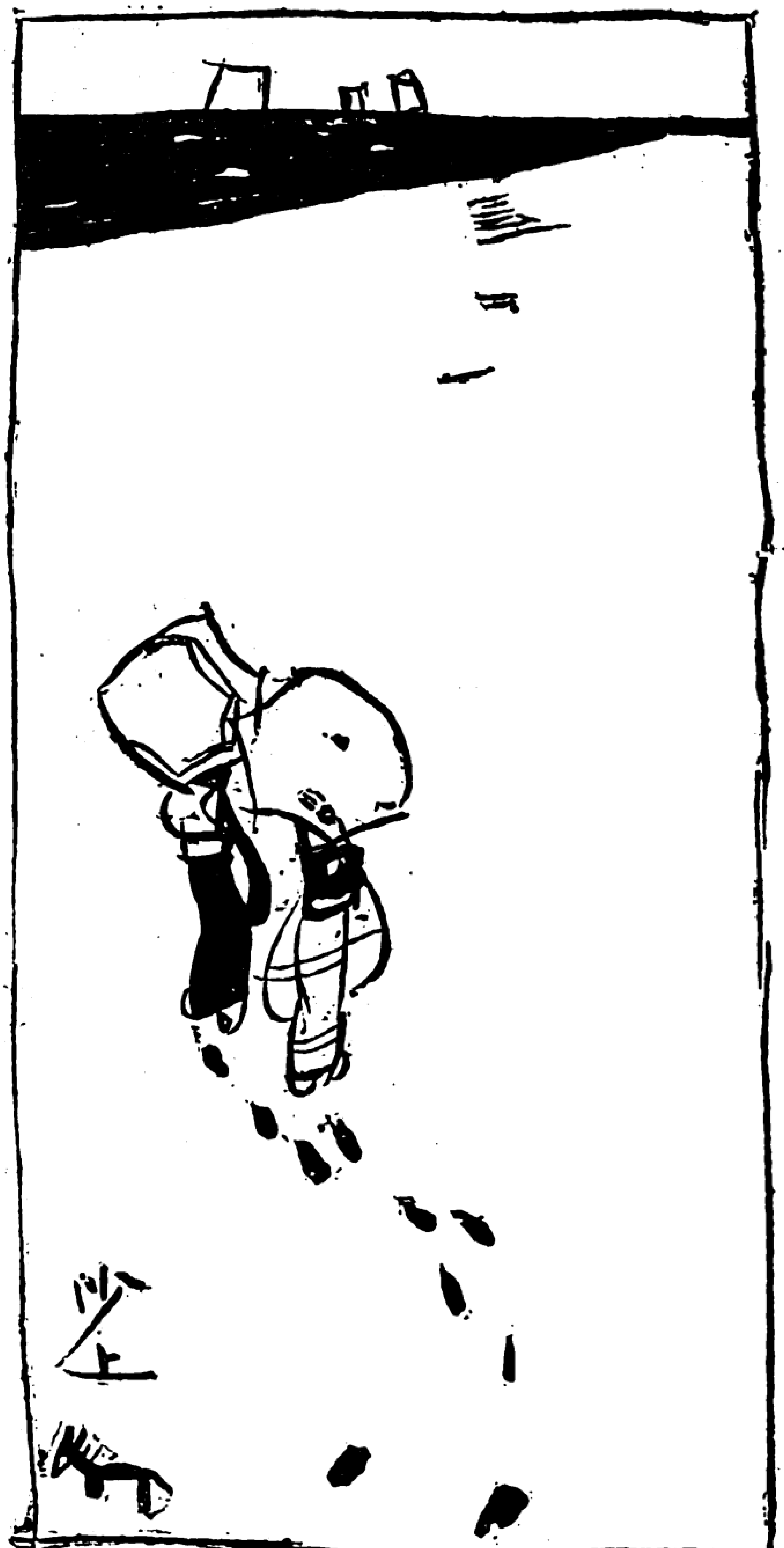
二番目の姫は至つておしやべりであるが、大變に人なつっこい可愛らしいところがあるのみならず、なか〳〵研究心に富んで居て、前栽からいろんな草を取つて來ては名稱を聞く、御器量も一番、今に學習院の花とうたはれるであらう。

三の姫はまだほんの赤ちやん、これといつて毒氣ある樣な事もない。つまり此三人の高等子守になつたわけで、私の一日の職務は、朝は今頃なら五時半に起きて、結髮、更衣、洗面、と手早く仕度をして、三人の方を起します。そして居る内にお附女中が來るから、共々に夜具をしまつて、湯殿へ來て顏を洗はれるのを介添して、すぐ隣りの化粧室で髮を結ふのですが、今日はお下げよ、私しはマガレツト、今度はローマにして頂戴、おれ前髮が横になる、後ろを引張つて痛いのと、大混雜の末やつとこすつとこ片付て、今度は學校行の着物に替へさせる。

これもお附のお時さんと二人でするのですが、毎日の事とはいひながら、實にうるさいもので、それがすむと食堂で、パン、茶、うで卵子といつた朝の御飯、これは若樣も御一緒で其にぎやかさ加減、王の子も食に付くとやら、誰のパンが大きいの、何のと論議の持上る事もある、牛乳一合づゝは何れもお定りで、それからおばゝ樣、お兩親と、順に御機嫌ようと朝の禮をして、ごた〳〵の上お時がお供で電車

で學校行き。私等は外の召使や何かと一緒に圓形の大卓で味噌汁に香物の朝飯を頂戴する。

晝前は令嬢の勉强室の掃除や取片付をしたり、着物をたゝんだり、白衿をかけ換へたりして居ると、もう歸邸の時が來る。



三時半にはお八つといつて、食堂で皆様お揃でお菓子が出る。マイナスの弟御樣、今年三十歳の堂々たる男が此時ばかりうれしさうに一番がけに入つて來て、子達とお揃でカステーラや栗饅頭をパクツイて居られる。御母堂樣は之を御覽になると御泣きになるとは御尤千萬、お小さい時に腦膜炎を遊ばして以來、あんな殿樣におなり遊ばして…とは老女の話し、五時頃に入浴が初まる。夕飯後に復習をして九時頃から御寢に

なる迄此間の氣の忙がしさ、怪我の無い樣に我身の職に落目のあらざるやうにと、あちらこちらに氣を配るのですからもう並大抵な事ではありません。

△表に現れた仕事

月に二度位學校を參觀して、受持の先生と打合せをしたりするのですけれども、社會の事は實に表裏常なしで、殊にこんな邸になると、何かしら暗流がある樣に思はれる。私なんぞは其方は別に我關せずであるけれ共、政治に野心あり、花柳の遊びに堪能なる御前は、餘りに捌け過ぎて、夜分に御邸に歸られぬ事もあると、奥樣は身も邸も燒かんばかりの御機嫌、夜更けに車の用意させて迎ひに御出になる事も度々だと、お次の人の陰口を聞た事もある。

奥方樣の御實家は有名な大藩で、其御妾腹とやら莫大の御仕度持參金での御入輿に、實は御母堂樣も少々手に据ゑて御出になるところから、ずゐ分と我儘氣儘、それに殆んど一年休みの勘定で御產み出しになる若樣、姫樣は、乳母やお付女中、乃至は私共の樣なものに放り任せで、もう〳〵御化粧と、御前のお召換へや其他御出入の送り迎へ、其他は白牡丹が伺つたり、三越をお召になつたり、御一緒で同氣倶樂部や帝國ホテルに御出かけになる位で、月日を送つて御出になる。婦人會などへも御出席にはなるけれ共××樣の奥樣はめつたに笑顏も遊ばさねば、兎角の御說の出たためしもないとの評判ださうです

一體こんな風ですから、人に好惡が多くて、偏窟で、侍女達が始終びく〳〵もので女中達に怨嗟の多いのも尤な次第。前にもいつた樣にお里附の老女が取締であるけれ共、御母堂樣附の老女はかつて御維新の時分から忠勤を勵んだ人故、奥と御隱邸とは暗暗裡にすれ〳〵もある樣子で考へて見れば不愉快な家庭であるのです。

△家庭教師の取扱ひ

以前姫樣達の幼稚園時代には、保姆が賴んであつ

て、これは客分として食事萬端優遇を與へたところ、とんでも無い、御前と笑つて御話しをして居たとか御庭を散歩しながら並んで居たとかゝ大變に奥方の機嫌を損じて、以來は其儘になつて居たのを今度所謂御召抱へになるに就て、前車の轍に習はぬ樣、人は何でも初めが大事故、外の次の者同樣何事も斟酌するに及ばぬと御聲がゝりがあつたのだとの事。

道理で私しの居間は次の者の通ふ便所の隣り四疊半のうす暗いしかも隅の方に行李か、つゝらか、何かしらぬが積み重ねてある部屋で、食事の事など申度くは無いけれ共、他の奉公人同樣時々御下りですが如何、と氣を利かしたつもりで小間使のお米さんが、一皿の燒物などをくれるけれど、乞食じやあるまいし、人の喰ひ餘し物など嚙るものかと、もう澤山ですよと返してしまふ。

まだ一年位で何事も充分には分らぬけれ共、家風とやら家令とやら、面倒臭い事のために、自由を束縛された樣な氣のする事も度々あります。

襟拂ひだといつては古い浴衣を袿のつもりで、女中共が大さわぎ、あまつさへ胴上のしつくらとは、もう〳〵吹き出す樣な事があります。何の事はない小間使と、子守と、教師と此三職兼任の私の朝夕は、考へて見れば實に馬鹿を見て居るもの〻、これも愉快な經驗と思つて居ます。歐米諸國の家庭教師の樣に、待遇と權利とを與へらる〻もの、姫樣達御外出の折には二頭立の馬車に同乘して、都大路を乘り廻す事が出來るものと、淺墓な考へを持つて居ては到底出來る仕事ではありますまい。

△流水腐らず

高貴の人は日々美食に飽き安逸に住する故、多くは種々の病ありて短命なれども、農を業とする百姓は、平日粗食をなし日々耕作に身體を働かしむるゆゑに、無病長壽の者おほし。是をもつて流水腐らず、要樞蝕ずとは、古人もいへり。五色墨の蓮枝が句に、

精出せば氷るまもなし水車

勉強力行の模範女生

美佐雄

桑港の實業家に家庭の取締となつてゐる神宮倉子といふ婦人の身の上に就て感心なお話を聞きました。

嬢は高崎で元は有名な財産家の娘に生れた人ですが、父の代に相場に手を出して失敗し、鉅萬の家産一朝にして失ひ嬢の幼少の折は隨分の悲慘なものでした。

天性孝心深き倉子嬢は、如何にもして親を救ひ家を興すべく決心して十九歳の時に東京へ出たのでありますが、固より學資などの蓄へもないので、島貫兵太夫氏の力行會へ入會をしました。

△四年間休みなき精勵

倉子嬢は郷里で高等小學卒業後、高崎女學校に入り、成績はよく優等で卒業をして、その後同地の實業學校の裁縫科に入りて、ここも好成績で卒業をしましたが、豫ての希望があつたものと見えて傍ら語學も大概の對話が出來る程に研究して居たのに、身體は壯健であり、殊に操行が正しいのでありますから、何處へ出しても立派な女でした。

嬢は湿紀の素養がありますので、力行會では始めの中菜閣に通勤をさせて居りましたが、何うも見どころのある婦人だと思ひましたので、島貫氏は自宅の家庭教師として、子供の世話を頼む事にしました。

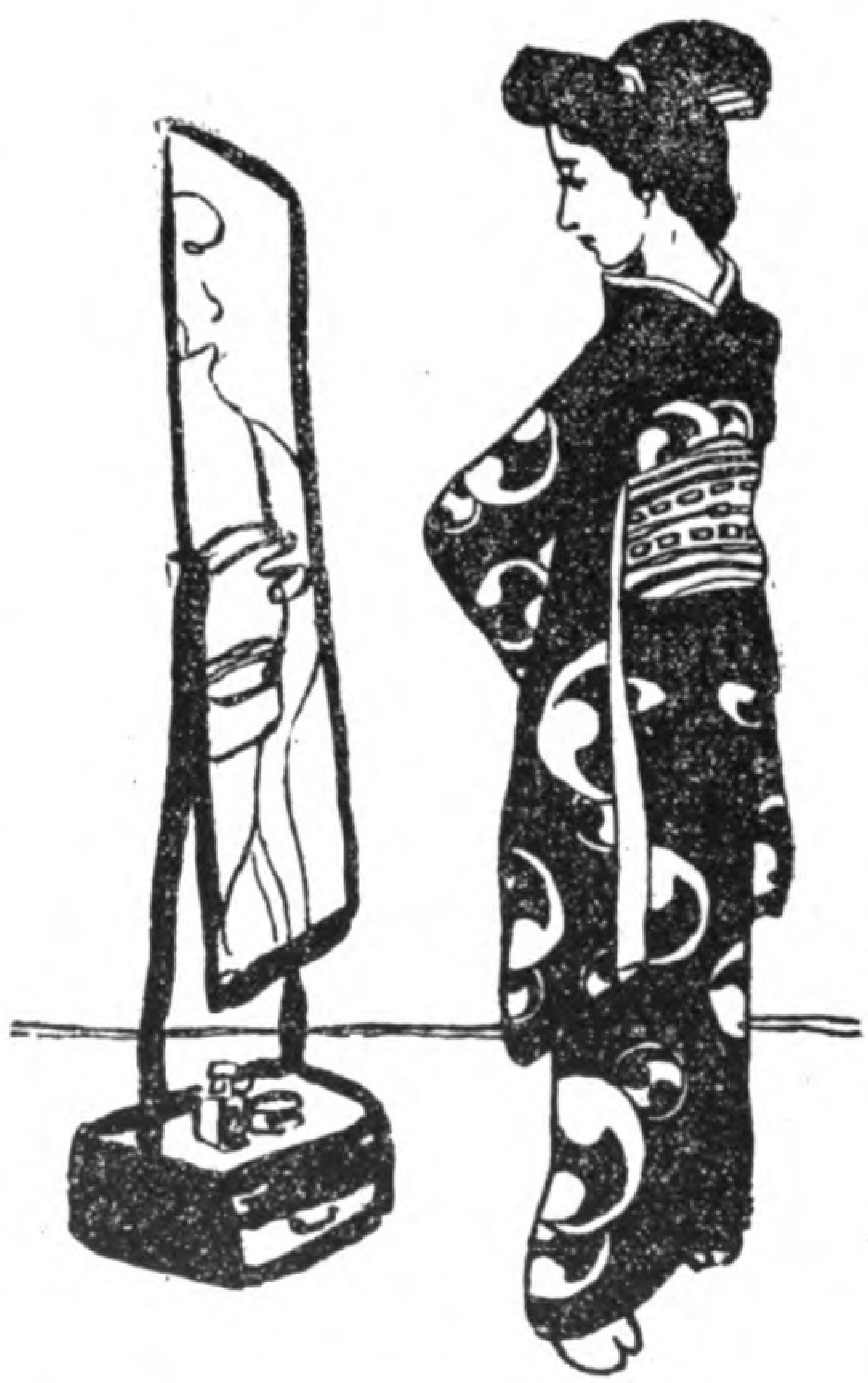
朝には早く起きて下女の傳ひをする、子供の起きる頃になれば着物を着換へさせて、床を疊んで、顔を洗つて與れる。學校へ行く準備を整然として御飯を食べさせて學校へやつて、それから力行會へ來る諸方からの手紙に對して返事を認めることやら雜誌の發送やら、諸處へ送る慰問狀を認めることから、殆んど殘らず一人で爲て、其間には聖書の研究もする、禮拜の時間になれば缺かさず出て禮拜をするといふ工合に四年間一日も缺かさずに繼續して居りましたが、それ位煩雜な仕事をして居るのに、何時も餘裕があつた程でありました。

△自然に人を感化する德

それ位に忠實に熱心に殆んどあらゆる用事を一身に引受けて、するのであるから、女子には有り勝の人から嫉まれでもしさうなものでありますが、不思議にも誰一人嬢を惡く云ふ者もないのみならず、却つて外の人に敬重されて居た位で、中には秘密な事までも嬢だけには相談をかけるものもある程でした。するとそれを

煩さいとも思はず、自分の身にかゝたつ事でも處理するかの如くに一々親切に面倒を見て世話をしやるのですから、ます／＼敬愛されるばかりでした。

孃はこの如く力行會の事務の殆んど全部を引受けてした外に人の相談にもあつかつて彼是と世話を燒くのでありますから、湯に入る暇も、髮を結ぶ間も無ささうなものですが、三度の食事も必ず時間通りにキチンとし、髮も何時の間にするか必ず綺麗に取上げて、取亂した樣などは誰も見たことはないといふ程で、着物や足袋なども何時も洗濯した垢のつかないサツパリしたものを身に附けて居るといふ有樣ですから、自然外の人もそれに感化されて皆身のまはりをキチンとするやうになり、誰一人だらしのない風をして居るものが無いやうなことになつたのでありました。



△晝は會務、夜は勉學

大抵ならば晝間のつかれで夜分は草臥れて寢て了ひさうですが、決してそんなことは無い。島貫氏の子供達を寢かして了へばそれから後は自分の勉強にかゝるのです、それが夜遲くまでやつて居るものですから若しや健康を害するやうなことがあつては可けないと云ふので島貫氏や、同氏の夫人などが、勉強も大切なことだけれども、餘り遲くまで起きて居ては身體の爲めによくないからと云へば、さうですかと少しも逆らはずに寢るといふ風に、島貫氏夫婦の言ふことには決して逆らつた例しがなかつたので いよ／＼洋行すると定つてから、多少心に緩みを生じた爲めであつたが、腦が痛いとて、二日許り休んだことがありました。

△數十通の結婚申込書

其頃或朝報の記者が何かの用事で力行會に島貫氏を尋ねられたことがありました。其時に島貫氏が倉子孃の事を其記者に話しましたので、次の日の新聞に孃が斯樣々々で如何にも感心すべき女だといふ短かい記事が出ました。すると其記事を讀んで早速倉子孃に結婚を求めたいといふ人が、云ひ合せでもしたかのやうに八方から島貫氏へ宛てゝ手紙を送りました。其數が數十通に上つたといふことです。

けれども倉子孃の希望は、結婚どころでない。海外へ渡航して働いた上に如何にもして父の家產を恢復しなければならないといふ堅い決心と覺悟を持つて居るのですから、其數十通の結婚申込などに對しては殆んど振向きもしなかつたのです。私は親を助ける爲めに海外へ出て是から働かうと思つて居るのですから、自分の目的を遂げない中はまた／＼結婚などは出來ませんとて、悉く斷つて了つたのです。

△洋行の手蔓

倉子孃の海外渡航の志望は一日も忘れることは無かつたのでしたが、どうも其希望を果すべき機會は得られなかつたのです。

けれども、此やうな粋い人の爲めには進むべき道は開け易いもので青木氏が正金銀行の支店長になつて米國へ行かれるに際して、子供の保姆として連れて家庭の取締をして吳れるやうな婦人が欲しいものだがと力行會の方へ申込みがあつたので、島貫氏は取敢へず倉子孃を薦めたので、倉子孃は始めて多年の志を遂げることを得たのでありました。

倉子孃は三年間の契約で青木氏の家庭に傭はれて、いよ／＼桑港へ參りましたが、青木氏方に居りましても以前のやうに滿遍なく働き親切に子供の世話も見て居る外、家庭一切のことを身に引受けて何から何までして居りますので青木家でも非常に喜んで、孃を尊敬して居るさうで、夜間は夜學に通はせて居るさうです。孃は以前力行會で評判がよかつたやうに、青木家でも非常に受けがよいさうです。それにいくら働いても勤めてするのでは、何處かでボロを出すものですけれども、倉子孃は決してボロを出さないのはつまり誠心誠意を以てする爲であらうと思はれます。殊に感心なのは、向ふへ行つてから、若し外に給料の多く取れるところでもあれば、約束が何年であらうとそんなことは頓着なしに飛んで行つて了ふやうな者が比々皆然りであるさうですが、倉子孃はそんなことで心を動かさない。飽くまでも三年間の契約を守つて期間の滿るまで青木家に居る決心であるさうで、又力行會の

方へも間接に直接に爲めになるやうな通信は忙がしい中から怠らずして居るといふことです。

△女嫌ひの軍人に婚約成る

茲に孃の性質の如何に善良で、如何に温和であるかを知るべきことがあります。孃の母は、實母でなく繼母であるといふことですが、其繼母が倉子孃に對して實母以上に可愛がつて有らゆるいつくしみを加へ、倉子孃の方でも實母父よりは却つて繼母を慕ふやうな有樣であんな仲のよい親子は實の親子でも珍らしいものだといふ評判になつて居る程で、繼母は倉子孃が可愛いさの餘りに何くれと物を買つて呉れるのを實父の方で却つて小言を云ふ程なさうです。

倉子孃は青木家の年期も今少しになつたが、青木家を出れば在桑港の休職陸軍少尉永田彌氏と結婚する約束になつて居るさうです。此永田氏は非常に女嫌ひの武骨一遍の人ださうですが、倉子孃に對しては非常に敬服して居るさうで。今までは女などは汚らはしいとか何とか云つて威張つて居て、人が結婚を勸めても頭から斷つて居た程の人であつたさうだが、倉子孃の人格には餘程感服したものと見えます。永田氏は目下桑港で日本人の經營にかゝる或花屋に傭はれて居るさうですが、倉子孃と結婚せば獨立の花屋を營む目的で頻に其準備中ださうです。桑港の花屋といふのは大抵日本人の經營で種々の草木を栽培してそれを毎朝剪花として賣出すので大層利益ある事業ださうです。



世間には、人に重寶がられる女子、可愛がられる女子は澤山ありますけれども、倉子孃のやうに尊敬の意味で愛重される人は珍らしいと思ひます。

胃病全治の實驗

嘉悦孝子

△幼い頃の健康

私は先ほど東海道すぢを汽車旅行しました。時候は暑からず寒からず、風はそよ〳〵吹いて何ともいへぬ清い美はしいこゝろもちになり、野に咲く花、木々のみどりは笑ふ如く、招く如く、得もいはれぬ風情でした。相手もない儘に、いろ〳〵默想に耽りますと、自ら我が身の幸福を感謝する念が起りました。思へば、私の幼年時代は、餘程弱い方でございまして、直ぐ風を引く、お腹をそこなふといふ風でお醫者とは、ごく昵近でございました。明治十六七年のころには、非常な胃病にかゝり、時々胃に痙攣をおこし、晝一度夜一度は必ず疼痛をおぼえ、殆んど辛抱し切れない程でした。已むを得ず醫師に診て貰つて藥を呑みましたが、進陟しく効驗もありませんでした。で呻きながら考へて見ると、身體と精神とは、深い關係があつて、身體の思ふやうにならぬときは、精神に不快を感ずると共に、精神に煩悶のあるときは、必ず身體の不調を來し、持病を重くする傾きがあり、精神が平和になれば、起るべき病氣も起らないやうな心持がしたので、極めて精神を安らかにするやうに致しました。

△嘘を言はぬが無病の基

私の幼い頃は、身體が弱かつたと同じく、精神も不健全で、少しのことにも腹を立てたり、つまらぬことを何時までも繰返したり、及ばぬことに愚痴を言つたり、すべき事をしなかつたり、いろ〳〵の缺點があつたので、こんなことでは、病氣も癒らず、將來の幸福も得られないと思つて、儒道の本をいろいろ讀んだり、先輩に質したりして、こゝろの修養をいたすことにしました。ところが何時の間にか、

心はすなほになつて參つて、人から何か言ひかけられても、自ら守るところは失はず、腹の立つと云ふやうなことがなくなり、赤心を盡して結果がわるければ、天運の惡かつたのだとあきらめ、何事にも心を惱まさないやうになりました。そして人樣が言つて下さる言は、一つの學問として拜聽し、ことに私に向つての批評や忠告は、心から喜んでお聽き申し、惡いことはさつさと改めるやうにして居りますので、假ひどんなことを言はれても、殘るは感謝の念と、愉快な心持丈けで、腹を立てたり、愚痴を言つたりすることはありません。此のやうに思が修養の事に及ぶやうになりましたら、私の永年の持病も、すつかり癒つて今では人が病氣であると言はれるのが不思議に思ふ位になりました。古人は、噓言を言はぬのが無病の基である、



仁者は壽長し、とか云ふやうなことを申して居るやうですが、私共の實驗上から申しても、精神の平和は身體の强壯の基であるやうに思はれます。

△菜食主義の効驗

私の健康は、このやうな心の平和から得たものですが、今一つ私を無病健全にした大なる原因がございます。それは食物の攝生でございます。維新以來我が國の人も、頻に肉食を好むやうになりまして、いろ〳〵の肉類が日を逐うて庖厨に入るやうになりましたが、私はあまり肉食すると、重くるしく不快を感ずるので、やはり古くから用ゐて來てゐる菜食を主もにし、永年の間、朝は味噌汁と澤庵、晝は煑魚と澤庵、夕は野菜の煑〆に天麩羅の類をたべて居ります。謂ゆる一汁一菜、御飯七分に、お菜三分の制を取り、多少時候に依つて品をかへますが、何れかと云へば輕いものを食べるやうにして居りますので、何時の間にか弱い身體も丈夫になり、今日では御覽の通り、斬つても斬れない程の强壯な身體になりました。これは私ばかりでなく、家人にも實行させ、亦私の學校の寄宿生にも施して見ましたが、初め不健康だと思はれた學生も、何時の間にか丈夫になつて、よく勉め、よく働くやうになりました。これは私共が田舍育ちだからでもありませうが、確に道理があらうと思はれます。

△肉食する人の氣質

古人水野北南と云ふ人も『自分は幸福なるべき筈の人が、不幸であつたり、長命であるべき人が短命であつたりすることを調べて見たところが、幸福の身を備へて居る人が食を奢つてゐるのを見、短命なるべき人が、食を愼んで居ることが分つたから、初めて食物を研究して、ます〳〵眞理のそこにあることを確めた』と言つて居ます。むかし佛敎が渡來して、非常に肉食を排斥した反動として、一時甚だしく肉食の流行を來した時代があつたさうですが、そ

月……………………160

宮

殿

の結果は、人心に、どんな影響を與へたかと申しますに、人の氣が徒に荒くなつて、猛獸のやうに殘忍の業をもものともしないやうになつたさうです。それが爲に又肉食を禁ずるやうになつたさうですが、日本人には氣候風土の關係上、又數千年來の慣習上、米麥野菜の類が、最も爲によろしいやうでございます。



△食事の取りやうを工夫する

同じ食物でも、食べ方に依つて爲に良かつたり惡るかつかりしますから、陳腐ではありませうが、私の實行して居る食物上の注意を述べますれば、食物と食物との間は、五六時間を隔てゝ、分量を一定することとし、疲れたときは消化し易いものを先づ食し、暫く休息して後、他の食

物を取つて、その不足を補ふやうに致します。冷いものも、熱いものも、どちらも健康を損ひます。そして、皆様の家庭では、少くとも夕方一回位は、一同打集ふて、最も楽しく食べるやうに致したら宜しいでせう。また頭脳を使ふ人と、手足を使ふ人とは自ら食を別にせねばなりません。年齢や性質、職業等に依つても食物を加減するのは無論のことです。又食品にも盛合せにも変化が必要ですから、こゝに料理の研究を感じますが、どうか同じ物でも活かして食べたいものでございます。

病は氣で退治る

病氣は氣のもちやうですつかりなほることがよくあります。こんな話がある。或る人が兩親とも肺病で死んだと同時に死んでしまひ、非常にかなしんでゐる中に、自分もつひに肺病になりました。そして醫者は全治はまづ難かしからうと頭をかたむけ、それから何ヶ月かを不愉快な病床にくらしたので、つひには癇がおこつて、醫者が來てくれないといつては怒り、下女のすることが氣にいらぬといつては癇癪をおこして居ました。ところが或る日、ふとこんなことを考へました。どうせ死ぬ體なら、にがい顔をして死にたくはない、一つ笑つて死んで見たいといふ考が一寸おこつて、かう陰氣ではいけないから、ぐつと陽氣にならう。それにはこんな陰氣な部屋はいけないといつて、それから急に湯にはいりたいから湯をたてゝくれと頼んだところが、醫者は手足をうごかしてもわるいのに、湯にはいるなどゝは以ての外であるといつて許しません。そこで私はもう死ぬものと決心した、その最期のねがひとしてこれ一つだけは是非かなへてほしいとたのんだので、親族が協議の上、やうやく湯をたてゝやつたので、病人は看護婦の肩にすがつて湯にはいつて見ると、どうもいゝ心持でたまらない。それから湯からでゝ縁側の柱にもたれて空をながめてゐると、何ともいへない愉快な氣もちがして、一點の光明が心の中にかゞやいてきたので、そろ〳〵縁側づたひに明るい部屋へいつて坐つてみると、自然に喜悦の情があらはれてきた。そこへ、下女が御飯をもつてきたので、無性にうれしくなつて、お前にこれ迄隨分ひどいことをしたのは許してくれとあやまり、つゞいて細君にも無理をいふてすまなかつたとあやまり、醫者にもうれし涙にむせんで禮をいふやうな始末で、それからこいふものは身體がずん〳〵よくなる一方で、數ヶ月の後にはとう〳〵元の體にかへつたので、人間といふものは何でも陽氣でゐなければならぬ。それには太陽を拜むのが一番であるとおもひ、毎朝はやくおきて朝日にむかつて深呼吸をするやらして病氣はすつかりなくなつたといふことです。



山の手電車　（渡邊香涯畫）

163

食卓座右銘

近世儒宗の泰斗貝原益軒翁の養生訓中より、飲食攝養に適切なる個條數十項を選定して日常の訓戒とす。

○人生日日に飲食せざることなし、常につゝしみて、欲をこらへざれば、過ぎやすくして病を生ず、古人禍は口より出で、病は口より入るといへり、口の出入常に愼しむべし。

○飯はよく熟して中心まで柔らかなるべし。こはくればきをいむ。煖なるはよし。羹は熱きに宜し、酒は夏月も溫なるべし、冷飲は脾胃をやぶる。

○飯を炊ぐに法多し、たきほしは壯實なるに宜し、湯取飯は脾胃虛弱の人に宜し、粘りて糊の如くなるは、滯塞す、硬きは消化し難し、新穀の飯は、性強くして、虛人はあしゝ、晩稻は性輕くてよし。

○凡ての食、淡泊なるを好むべし、肥濃油膩のもの多く食ふべからす、生冷堅硬な

夏季

珍物料理廿五種

小泉迂外

△鯉の生作り

材料の鯉はなるべく新鮮なるを選び、水より引上げて直に濡紙を以て三重ばかり頭部をぐる〳〵と包みて目隱しをなし、頭部を左に腹部を手前にして俎上に置き、頭部を一寸抑さへ、庖刀にて顋部より尾にかけて三四回撫で下ぐる時は、材料は忽ちに靜止すべし。其時背を切らざるやう注意して庖刀をつかひ背より開らき、片身を放し取つて皮を剝ぎ、小口より適宜の厚みに刺身に作り、淸水にて能く洗ひ、ちよつと假に他の器に移し置く。

次に前の半身の、血の染みたる部分を濡布巾にて能く拭き、それに先きの作り身を列らべ更に其上に剝ぎたる皮をかぶせ、葉蘭若しくは靑々したる新笹等を敷きたる皿に盛り、客に出す時に、以前の目隱の紙をとり除くべし。

斯くて銘々の小皿に分ち盛る時、とり箸の先きに一寸



る物を禁ずべし、あつ物只一つにてよろし。肉も一品なるべし、飣は一二品に止まるべし、肉も二つかさぬべからず。又肉多くくらふべからず、生肉をつゝけて食ふべからず、滯り易く殊に肉あらば、飣には肉なきがよし。

○飲食は飢渇をやめんためなれば、其の上にむさぼり。ほしいまゝにすべからず、飲食の欲をほしいまゝにする人は義理を忘る、これを口腹の人といふ、いやしむべし、食過ぎなりとて藥を用ゐて消化すれば胃氣藥力のつよきにうたれて和氣をそこなふ、飲食する時心に好み口に快き物にあはば先づ心に戒しめて、恣まゝにすべからず、心の力を用ゐればざ慾にかちがたし。

○大魚は小魚よりも脂多くしてつかへやすし、脾虚の人は多食すべからず、薄く切りて食へばつかへず大なる鯉鮒、大に切り、或は全身を煮たるは氣をふさぐ、蘿蔔、人參、南瓜なども大に厚く切りて煮たるはつかへやすし。



刺身醬油をつけて魚の眼に點ずれば、材料の頭尾はピク〱と活動して席上の興趣深かるべく、添物に山葵と胡瓜など輕淡にて涼しかるべし。

△鯉の酢煮

鯉は鱗のまゝ、筒切（五六分の厚みに）になし、鍋に昆布を敷き、酢五合、鹽少量を加へたる汁をつくり、材料を此中にて二時間ほど、ゆつくり煮上げ、皿へとつてこの鍋の酢をかくべし。醬油は別に銘々小皿に注ぎ、山葵と葱の細末にしたるを香料にすゝむ。

△鯉の北京料理

鯉は鱗をひき、腸を拔き出し、身の兩面に庖刀にて一分間きに、深さは骨に至るまでの疵を全體に附け、其疵の間に、豫め調へ置きし辛子菜を挾むべし。

さて別に濃き葛餡をつくり、上に豚のあみ脂をひき、此を以て前の魚を包み、胡麻の油の煮立ちたる中に入れて揚げ、よく揚りたらば更に平つたき鍋に



○生魚味をよくとゝのへて食すれば生氣あ
る故早く消化し易く、煮過ぎしと又はほし
て油多き肉、或は鹽につけて久しき肉は皆
生氣なき陰物なり滯りやすし。
○甚だ腥さき膾多き魚食ふべからず、魚の
わたは油多し、鹽辛はことに惡し。
○さし味、膾は、人によりて斟酌すべ
し、酢すぎたるをいむ。虛冷の人はあたゝ
めて食ふべし、殊に未熟の時、又熟し過ぎ
て日をへたる食ふべからず。
○珍味の食に對すとも、八九分にて止むべ
し、十分に飽き滿るは後の禍あり、少しの
間欲をこらふれば後の禍なし、少しのみく
ひて味のよきを知れば多く飲食ひて、あき
みちたるに其樂同じく且後の災ひなし、萬
つの事十分にいたれば必ずわざはひとな
る、欲食尤も滿意をいむべし。
○飯を多く食へば脾胃を破り、元氣を塞ぐ、
客となりて主心を用ゐて設けたる品味を箸
を下さゞれば主人の盛意を空しくするも快
よからず、おもはゞ飯を常よりも中減し、

投れ、醤油一合、スープ二合、酒一合を加へたる汁にて煮、又更に此を大きな丼に移しとつて、汁ぐるみ蒸器の中にて蒸しあぐるなり。

此法は北京料理にても稍贅澤に數へらるゝ調理なれば、多少手心をして用ふべし。

△鯰の山葵醤油

、、、手ごろの鯰を擇び、頭の附根より約一分程離れし鰭の間を庖丁のムネにて一打すれば、骨は脆く折れて同時に動きを止むべし。後ち尾を斷ち、鰭際へ庖丁を入れて脊開きに裂きて適宜に鹽をふりかけ、串を打つて火に翳して兩面を燒き、火の透りたるを見て、串を拔き皿に移して、山葵醤油にて食す。

この調理法は最も簡易にして、其淡味とせるは酒の肴として好適なれど、あまり試むる人なきは遺憾なりと、嘗て重箱主人の嘆息せる料理なり。

△眼肉素麺

大鯛の頭を二つ割りになし、眼肉附の處を四角に庖丁をなし、それに普通の切身の小さき一切れとを一人前となし、此れに充分鹽を強く振り、

斎の品味を少しづゝ食すべし、この如くすればさい多けれど食にやぶられず。
○夜食するには暮れて後早く食すべし。深更に至りて食すべからず、酒食の氣よくめぐり、消化して後、ふすべし、消化せざるに臥せば病となる、凡夜は身をうごかす時にあらず、飲食の養を用ゐず、少し飢ゑても害なし。
○生魚あざらけきに鹽を淡くつけ、日にほし、一兩日過ぎて少しあぶり、うすく切りて酒にひたし食ふ、胃に妨げなし。
○味噌の性和にして腸胃を補ふ、たまりと醤油はみそより性するどなり。泄瀉する人にはよろしからず。
○食物の氣味、わかこゝろにかなはざる物は養とならず、かへつて害となる。
○酒食の後醉飽せば天を仰ぎて、酒食の氣をはくべし、手を以て面前及び腹腰をなで、食氣をめぐらすべし。
○およそ人の食後に俄かにわづらひて死するは多くは飲食の過ぎて飽滿し、氣をふさ

二三十分置いて鹽を洗ひ落し、鍋に湯をたぎらせて一旦茹で、水に取り置く。

水より引上げたる材料は大茶碗か、深皿へ移し、阿波素麺を茹でたるを適宜に切りて盛り添へ、鰹汁一合と醤油五勺とを五勺ぐらゐに汁切りたる汁をかけ、有合せの香料をかけて侑む。

△鰹の土佐作

鰹を節どりて金串にてさし、直か火の赫々と強き上にかけ、皮の方をザット焼き、直に水に投じ、引き上げて板にはさみ、壓を置きしばらく經ちて、皮つきの儘刺身に作るべし。皮だけに火が透りて普通の刺身よりも遙かに美味にして且衛生的なり。

△含珠盛

麵粉を捏て團子となし、更に夫れを壓潰して煎餅の如くなしたるを、フライパンにてバタで揚ぐければ、ちよつと膨脹むべし。之れに鯛、鯉、鮪等すべて刺身になるべき魚肉を賽の目に切り、山葵醤油を附けて、以前揚げ置きし煎餅に包み、冷めぬ内に、一人前四つぐらゐ杉形に盛つて侑む。

けばなり、初め先づ生姜に鹽を少し加へてせんじ、多く飲ましめて多く吐かしむべし。其後食滯を消し、氣をめぐらす藥を與ふべし。

○飢ゑて食し、渴きて飲むに、飢渴にまかせて一時に多く飲食すれば飽滿して脾胃をぶやり、元氣をそこなふ、飢渴の時つゝしむべし。

○夏日、瓜、菓、生菜多く食ひ、冷麪をしばしば食し、冷水を多く飲めば、秋必ず痢瘧を病む、凡そ病は故なくしておこらず、かれてつゝしむべし。

○食後に湯茶を以て口を數度すゝぐべし、口中淸く、牙齒にはさまれる物脫し去る、牙杖にてもさす事を用ゐず、夜は温なる鹽茶を以て、口をすゝぐべし、牙齒堅固になる。

○人他鄕にゆきて、水土かはりて、水土に服せず、わづらふ事ある、まづ豆腐を食すれば脾胃調へあしゝ、是、時珍が食物本草の注に見えたり。

○山中の人肉食乏しくして病すくなく、

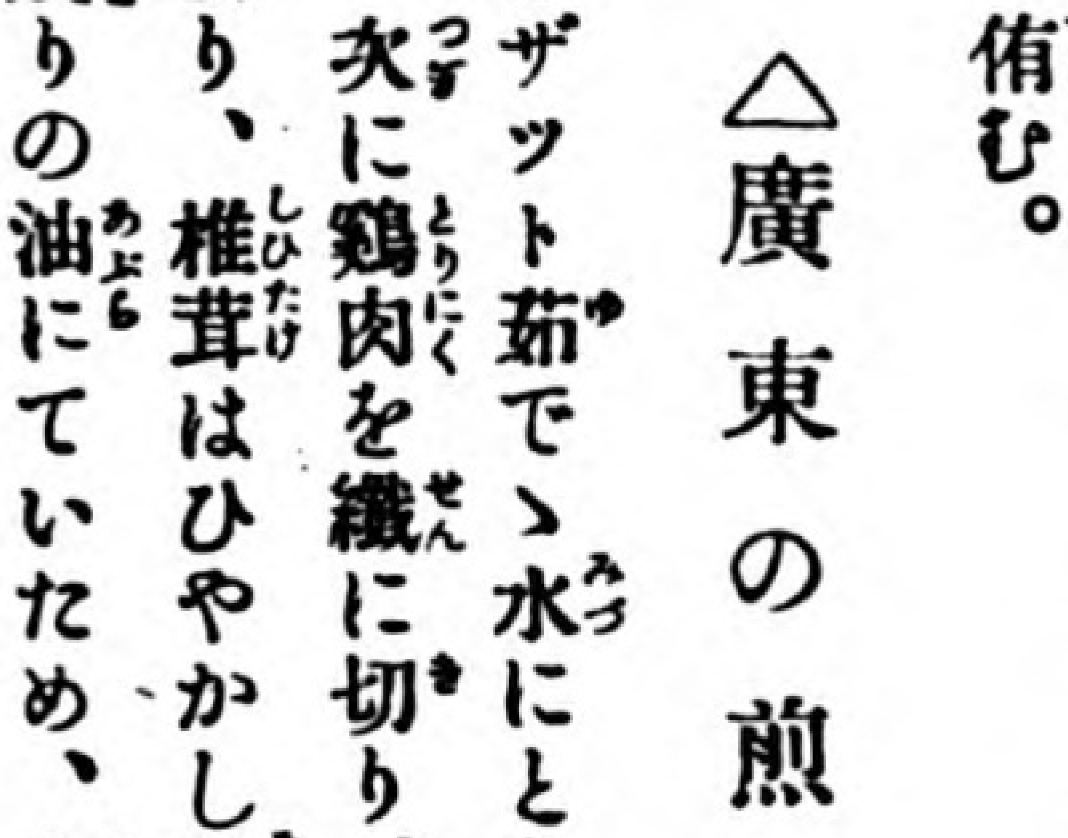
又席上に揚鍋を持出し、煎餅を即座につくり、刺身なり鹽燒なりを客自身に包ませて試みるも妙なり。此料理は印度のチャプチーを日本式に應用せしものなり。

△海老蕎麥

芝海老の皮を剝き、擂鉢に入れて擂り潰し、海老の量の三分一の葛粉と、葛粉の三分の一の砂糖と、砂糖ぐらゐの量の水を交せて、又能く擂り、擂上りに鹽を一つまみ入れて能くまぜ、之れを板に薄く塗り、その板ぐるみ煮湯に入れて茹で、更に冷水の中に浸して晒し、引上げて庖刀を以て板の海老を離し、細く蕎麥のやうに小口より切る。盛り方は深皿に青葉を敷き、氷を碎きたる上に右の材料を乘せ、辛子醤油若しくは山葵醤油にて侑む。

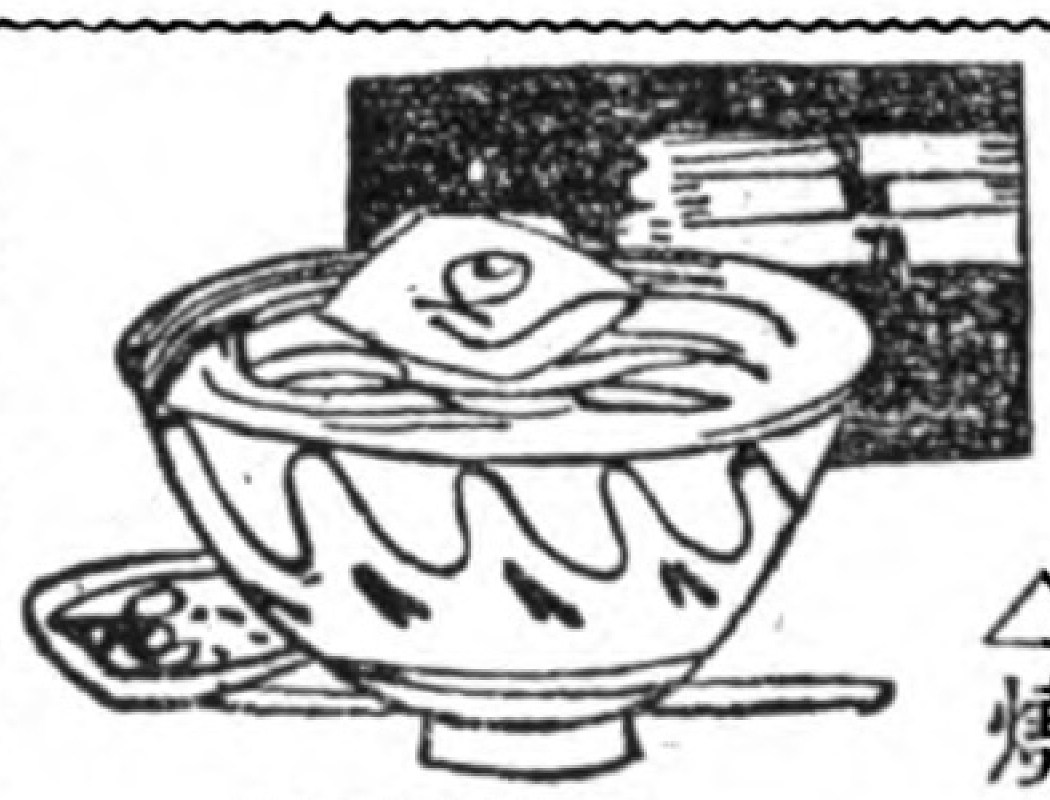
△廣東の煎蕎麥

干饂飩をザット茹でゝ水にとり、水を切つて油で痛め置く。次に鷄肉を纎に切り、竹の子を短冊に、葱は斜に切り、椎茸はひやかし其外芹等以前饂飩を煎りたる殘りの油にていため、之等をスープの中に



命長し、海邊魚肉多き里にすむ人は、病多くして命短しと千金方にいへり。
○朝早く粥を温かにやはらかにして食へば腸胃をやしなひ、身をあたゝめ津液を生ず、寒月尤もよし、是、張來が説なり。
○生薑、胡椒、山椒、蓼、紫蘇、生蘿蔔、生葱など、食の香氣をたすけ、惡臭を去り、食氣をめぐらすために、其食品に相よろしきからき物を少しづゝ加へて毒を殺すべし。多く食すべからず、辛き物多ければ氣をへらし、上升し、血液をかわかす。
○飯後に力わざをなすべからず、急に道を行くべからず、又馬を馳せ、高きにのぼり、嶮路に上るべからず。
○怒の後、早く食すべからず、食後怒るべからず、憂ひて食すべからず、食して憂ふべからず。
○腹中の食いまだ消化せざるに又食すれば性よきものも毒となる、腹中空虚になりて食すべし。
○曉の頃ひ、腹中鳴動し、食つかへて腹

入れ、酒、醤油を適宜に加へて味を附け、更に葛を溶いてこれに加へて、ドロ〵の汁をつくる。
さて前の饂飩を皿に盛り、この汁をほどよく上にふりかけて侑む。



△燒き鮑

鮑を短冊に切り、牛酪(フライパンにて溶かす)でいため、一寸ちゞれて焦目のつきしを西洋紙にとり、更に胡椒をふりかけ、青柚を添へて皿に盛り、山葵醤油かソースにて侑む。ビールの肴に頗るよろし。

△水貝別法

鮑を普通の如く鹽にてよく洗ひ、斜に庖丁を入れて刺身の如く薄くへぎ置く。次にガラスの深皿に青紫蘇か蓼を敷き、その上に細かく碎きし氷片を澤山平らに盛り、其氷の上に前の鮑を刺身の如く並らべて侑む。之れに用ふるソースは日本醤油を一と垂らし交せて別の小皿にて出すべし。

△鮑の白子和



中快よからずば、朝食を廢すべし、氣を塞ぐもの肉菓などを食ふべからず、酒を飲むべからず。

○飲酒ののち、酒氣のこらば、餻餅、菓子、油脂の物、甘き物、其他本氣をふさぐもの等飲食すべからず、酒氣めぐりて後、飲食すべし。

○勞倦して多く食すれば必らず睡り臥す事をこのむ、食して後ちに臥し眠れば食氣塞りてめぐらず、消化し難くして病となる。故に勞倦したる時は食ふべからず、勞をやめて後食ふべし。食して眠らざるがためなり。

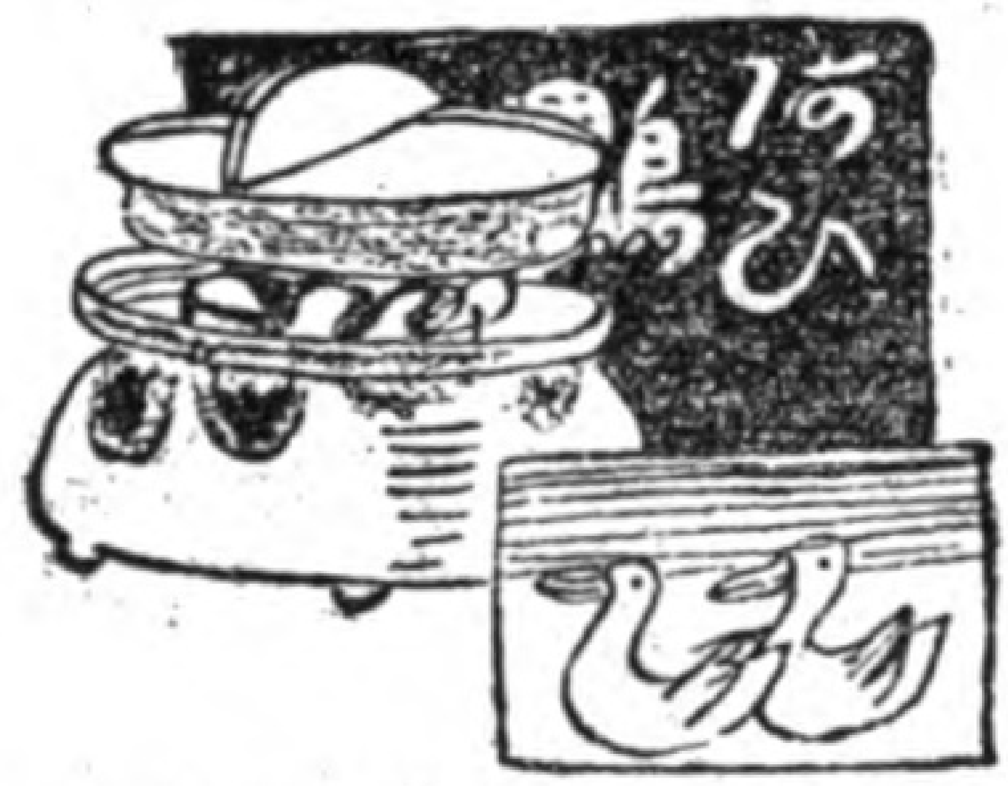
○永夜寒甚しき時、もし夜飲食して寒を防ぐによろしくは晩饌の酒飯を數口殘すべし。又やむことを得ずして人の招に應じ、夜話に人の許に行きて食客とならば晩餐の食をかれて減ずべし、この如くして夜少し飲食すればやぶれなし。夜食はすゝみやすし心に任せて恣にすべからず。

○朝食肥濃の物ならば、晩食は必らず淡泊

勢よろしき鮑の腸を放し、肉は薄くへぎて細作りに庖刀をなし、薄醤油にてアッサリ味を付け置く。次に鯛の白子を醤油と酒鹽にて能く煮上げ、少さき擂鉢にて白味噌を少し加へて擂交せ、味のつきたる椎茸、木くらげ等の細切りになしたるをあしらひ、以前の鮑に和へるなり。胡椒山椒等をふりかくれば妙なり。

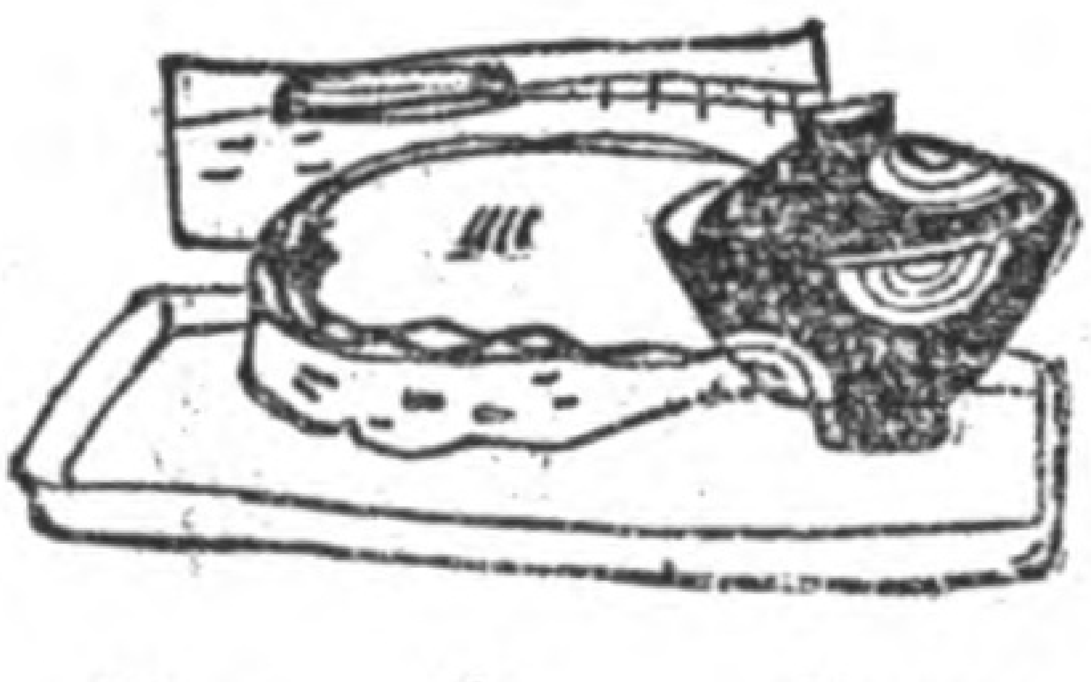
△鮑の腸ずひもの

鮑の腸を生のまゝ小口よりブツ／＼切りになし、熱湯にて茹で、水にとりて二三度水を替へて洗ひ、沙をよく落し、酒、醤油にてザット下煮をなし、味噌ずひものの種として面白し。



△ジブ

あひ鴨の肉を心持厚く刺身の如く切り、鐵鍋（普通の鳥鍋）を水コンロに懸け、鍋の中に鳥の脂肪を適宜に入れて沸騰させ、之れに其切身を投じ、少時煮沸せしめて後、豫め調合せし醤油をつけて食す。之の法は二三人の膝つき合はせての會食に限るべく



にすべし、晩食豐濃ならば翌朝の食はかろくすべし。

○一切の食陰氣の鬱滯せる物は毒あり、食ふべからず、穀肉などふたをして時を經たるは、陰鬱の品にて味を變ず、魚鳥の肉など久しく時を經たる、又鹽につけて久しくして色臭變味したる皆陽氣を失へるものなり、菜蔬など久しければ生氣を失ひて味變すこの如くなるは皆陰物にして腸胃に害あり。

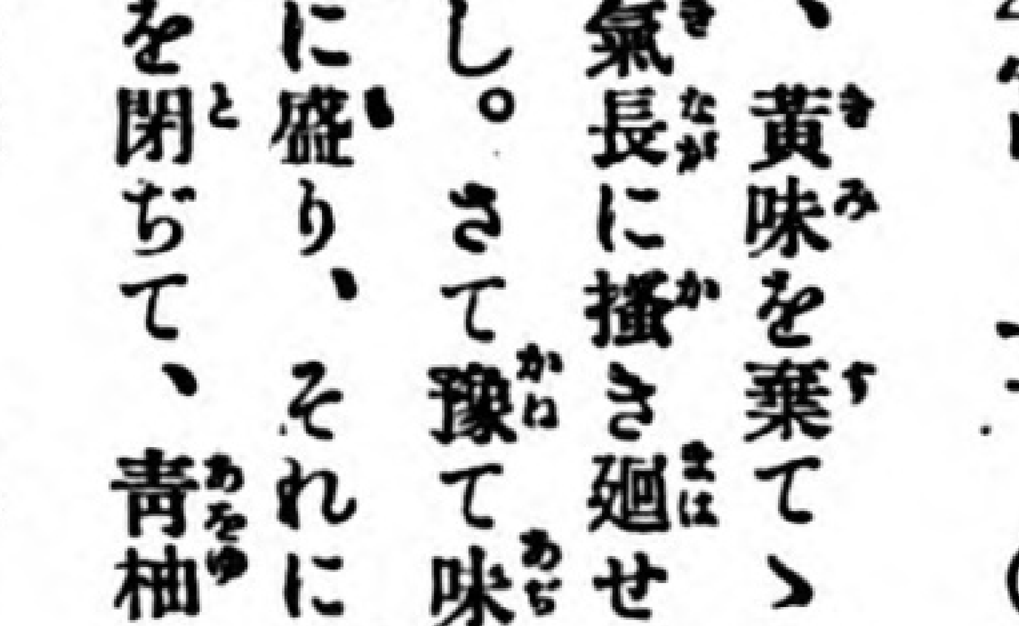
○松茸、筍、豆腐など味すぐれたる野菜は、只一種煮て食すべし、他物と兩種合せ煮れば味おとる。味あしければ、腸胃に相應せずして養とはならず。

○胃腑よわき人は、蘿蔔、胡蘿蔔、芋、牛蒡など、うすく切りて、よく煮たるを食ふべし。大に厚く切りたると、煮ていまだ熟せざるとは皆脾胃をやぶる、一度薄味噌か、うす醤油にて煮、その汁にひたし置き半日か一夜置きて再び前の汁にて煮れば大に切りたるも害なくして味よし鶏肉、野猪肉な

舊と加賀の名物なれば知る人夥し。又相鴨の造り身に小麥粉をまぶし、前の脂肪中に投ずれば簡易なる天ぷらをつくるを得べし。

△富士の雪

鶏卵を割り、黄味を棄てゝ白味のみ稍大なる丼に入れ、箸にて氣長に掻き廻せば、終に全然少さき泡のみを生ずべし。さて豫て味よく拵らへし清汁を能く煮沸せて椀に盛り、それに前の泡を金杓子で掬ひ入れ、直ぐ蓋を閉ぢて、青柚を吸口にして侑む。



△筏玉子

丼へ鶏卵を割り、アク引、醤油、味醂を普通の玉子焼の分量にて加へて掻混せ、少し宛玉子焼鍋に流し込みて、能き得るだけ薄く焼き、之れを長さ二寸位に切り、筆軸か葭に卷き、合せ目に白身を塗り、少時火にかざし、合せ目の密着きたるとき、心の葭又は筆軸を拔き、之れを五本或は七本位宛筏の如く白身を用ゐて合せ、玉子焼鍋にてつぎ合せ青味を落して吸物種になすもよく、又は口取に用ゐても趣味深し。

どもその如くす。

○蘿蔔は野菜中の上品なり、つれに食ふべし、葉のこわきを去り、やはらかなる葉と根と、豆豉にて煮熟して食へば、脾を補ひ、痰を去り、氣をめぐらす。

○糕餅の新たにして再び煮ず、あぶらずして、即ちに食するは消化しがたし、むしたるものより煮たるが柔らかにして消化しやすし。糕は數日の後焼き煮て食ふによし。

○藥を服する時、あまきもの、油濃きもの、獸肉、諸菓、糕餅、生冷の物一切食ふべからず、服藥の時多く食へば藥力とゞこほりて力なし、淡き物を食して藥力をたすくべし。

○いにしへ支那に食醫の官あり、食養によりて百病を治すといふ、殊に老人は脾胃よわし、尤も食養よろしかるべし、藥を用ふるは止むを得ざる時の事なり。

○一切の食物の中園菜極めて穢なし、其根葉に久しくそみ入りたる糞汚、俄かに去りがたし、水桶を定め置き、水を多く入れて



△筍げつかん

柔く湯がいたる筍の軸を適宜に切り落し、心をくり抜き、其中へ、鯛の子或は魚肉を細かく刻んで詰込み、此れを昆布と鰹節のだしにて約そ半日ほどトロトロ火で煮込み、筍の味の消えぬやう薄醬油で味を付くべし。侑むるには輪切にして青味を一種添ゆれば妙なり。京都の食品なれば關東の方には珍しかるべし。

△松風燒

蓮根の皮を剝き、卸し金で卸し、水を切り鹽と砂糖を手加減にて入れ、葛の粉を加へて掻き廻し、玉子燒鍋に胡麻の油を延きて、材料を入れ、鍋の上に金網をかけて火を載せ、上下より稍焦目のつく程燒き、罌粟を表面に振りかけ、カルタの如く庖刀して出す。精進料理の口取によろし。



△絲瓜田樂

絲瓜の二寸位のものをよく洗ひ、首尾を切り、薄く皮を剝き、たてに

菜を浸たし、上におもりを置き、一夜か一日つけ置き取出し刷子にて其根葉、塵なす り洗ひ、清くして食すべし、支那にては古來神を祭るに園菜を用ゐずして山菜水菜を用ふ、園菜も瓜茄子などはけがれなし。

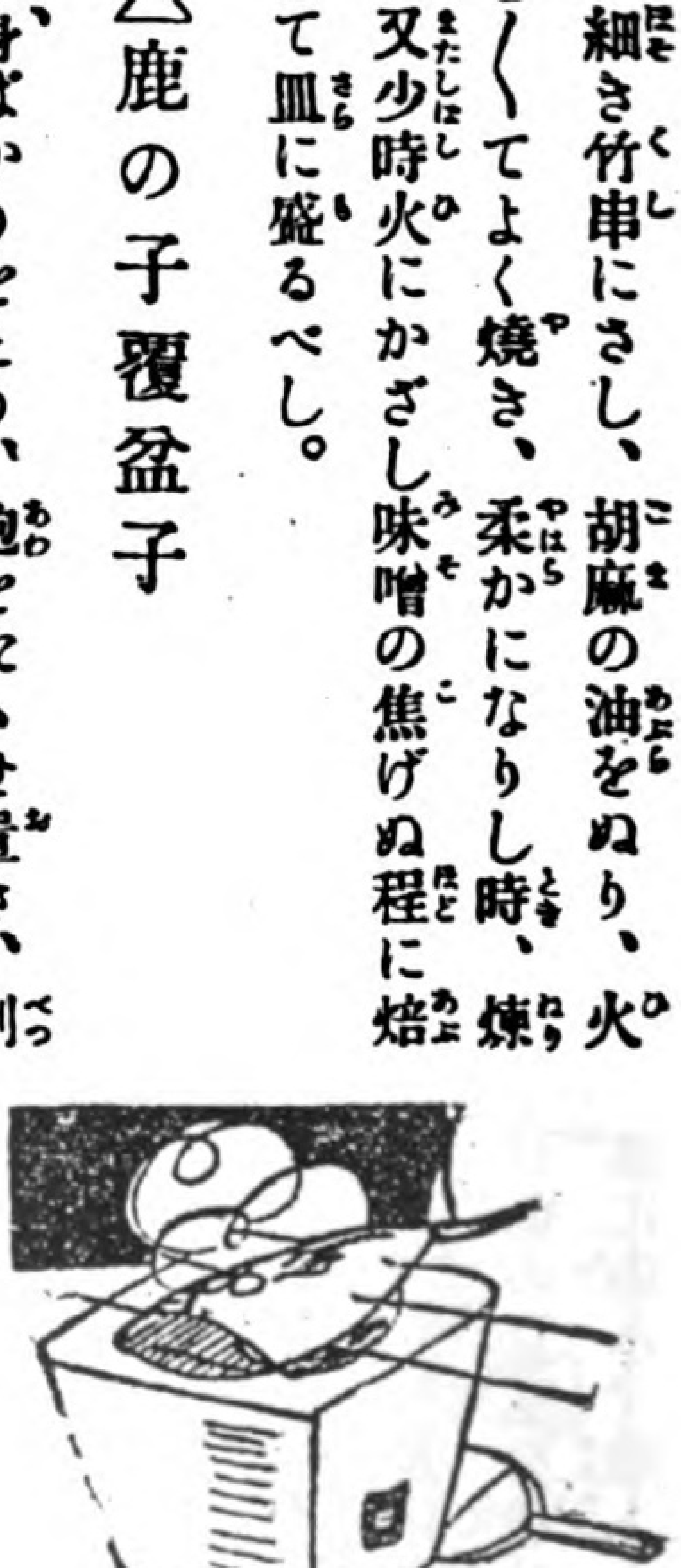
○凡ての人食ふべからざるもの、生冷の物、未熟のもの堅硬の物、ねばきもの、ふるくして氣味の變じたるもの、製法心に叶はざるもの、鹽からきもの、酢の過ぎたるもの、飪を失へるもの、臭悪しきもの、色悪しきもの、味變じたるもの、魚餒れ、肉敗れたるもの、豆腐の日を經て味あしくなりたるもの、いまだ時ならずして熟せざるもの、すでに時過ぎて爛れたる物は食ふべからず、夏日の焼食ふべからず。魚鳥の皮こわき物、脂多きもの、甚だなまぐさきもの食ふべからず、肉の脯、屋漏水にぬれたもの、米器の中に入れ置きたるもの、肉汁を器に入れ置きて、氣を閉ぢたるもの、皆毒あり食ふべからず。

○空腹に生菓食ふべからず、つくり菓子多

二つに割り、細き竹串にさし、胡麻の油をぬり、火にかけ、返し〱てよく燒き、柔かになりし時、煉味噌を塗り、又少時火にかざし味噌の焦げぬ程に焙り、串を抜きて皿に盛るべし。

△鹿の子覆盆子

鶏卵のしろ身ばかりをとり、泡をたゝせ置き、別に寒天を水にて煮て裏漉にかけたるに右の白身をまぜ、苺を丸粒のまゝ共に箱へ流し溶れ、水或は氷に浮べて固め、固くなりし時箱より出し四角に切りて用ふ。幼なき子女には白砂糖をふりかけて侑むべし。



△和蘭味噌

牛蒡と鯣とを細く混ぜ合はせ、味醂を少し加へて、焦げ付かぬやうにとろ火にかけて攪き廻しながら煮つめ、下ろさんとする時、うどん粉と唐辛を少し入るゝなり。此味噌は夏季に於ても味の變る事なく貯藏せる。

△松茸の山葵和へ

莟松茸の石突きを落し、鹽水で洗ひ、つま切りにして、ざつと湯がき

く食ふべからず、脾胃の陽氣を損す。
○同食の禁忌多し、○猪肉に蕎麦、梅、生姜、炒豆を忌む。○牛肉に黍、韮、栗、生姜をいむ。
○鶏肉に芥子、蒜、糯米、李、魚の汁、鯉魚、鼈をいむ。○雉肉に蕎麦、木耳、、胡桃鮒、鮎をいむ。○鮓に緑豆、蒜、素麺○蟹に柿、橘、棗○李に蜜○棗に葱○枇杷に熱麪○瓜類に油揚もの○緑豆に榧子を食すれば中毒す○魚膾と瓜冷水○鯉魚に紫蘇、塩梨○梨瓜と魚膾と一にすべからず○酒後茶を多く飲むべからず、腎をやぶる○酒後芥子及び辛きものを食ひ筋骨を緩くす○南瓜を魚膾に合せ食すべからず○松茸を米を貯ふる器中に入るべからず。

家居數則

△飯食、衣食、器具、家屋など、我が身の分よりかろくするが、よきほどなるべし。身上に相かなへりとおもふは、分に過ぎたるなるべし、只、親をやしなふは、本に報

水氣を切り置き、冷めぬ内に山葵醤油にて和へて、侑むる際に焼海苔を細く揉んで撒布けて出す。之の山葵醤油は山葵を卸し、醤油にて少しく堅目に溶くべし。



△鯛の茶漬飯

新鮮なる鯛を節どりにして皮をすき刺身に作り置き、鶏卵の黄身、紫蘇の穂を醤油に浸けたる器に、此刺身を投れ、生姜の汁をしぼり交ゆ。(供膳の三四時間前に浸け込むべく、此調理の要は醤油加減に有り)

侑むるには飯碗に熱たかき飯を一層盛りてはこの醤油漬の鯛を一層ならべ、幾層にも斯くなし、その上に番茶のよく培じたるを煎じてかけ、蓋をなして出すべし。こは長州の鯛茶漬と稱ふる珍品なり。

△とろろ豆腐

豆腐の水氣をよく切り置き、火の上に鐵弓を二本渡し、青竹を五分位の幅に割りたるを間を少しづゝ離して並らべ、その上に前の豆腐を載せて焼く。斯くする時は竹は焦げて、其竹の油の自然豆腐に染み、焼上り

する道なれば、我身をわすれて、財ををしむべからず、又禮義を行ひ、人をすくひ助くることは、分に隨ひ、力を出すべし。財ををしむべからず。

△財を用ふるは、小をつんで大にいたるゆゑ、小の費をもをしむべし、一時の大なる財を用ゐんとおもはば必ず、猶豫してよくはかるべし。

△家ををさめ、財を用ふるに、事ごとに心を用ゐて精しくし、こまやかにして疎略あるべからず、をごらず、やぶさかならず、過不及なく、よきほどにすべし。

△器物は朝夕用あるものを寶とすべし。無用の奇物を寶とするは、價は多く費えて、我が用に立つことまれなり。常に用ある器は價すくなくして用に立つこと多し。

たる豆腐は黒く格子縞を生じて面白し。燒けたる豆腐は一旦水に取り、直に引上げ昆布だしと薄鹽にて下煮をなし、とろろをかけて侑むべし。此とろろはとろろ芋を摺り昆布だしに醬油をさして煮たる汁にて味を付くべし。名古屋風の料理として妙品なり。



△海苔卷燒

冷飯を普通の海苔卷の如く海苔を敷き、心にコールビフ或はハム、又は福神漬にても何んにても有合せの品を一種入れ、簾にて卷き三寸位に切りて金網にて燒き、熱きうちに侑む。一種の冷飯利用法にて夏季によろし。

女親の惡智慧

母親が子供と歩いて居ると、或る家の軒に。二十錢銀貨が落ちて居た。子供は目速く見つけて拾ひ掛けると、そこへ人が通りかゝつてあやしさうな目で見て居る。母親の曰く、

そら云はんこつちや無いお前に持たせると落すから

一體に父親より母親の方が子供に惡智慧を敎へる事が多い樣です。



間違ひの結婚

鳳梨園

一

數年前、北米マリポサ郡に石油坑が發見された事がある。これが爲め附近一帶の諸州は、この坑の爲めに潤ふと言ふので、多くの人々が盛んに入込み、新たに組合を組織するやら、喞筒、汽鑵、梯子、桶、小桶、錐、鍋など、種々な機械を輸入するやら、勞働者の長屋を建築するやら、それは仲々の大騒ぎ。而して此處を油出村と命名した。一年前までは唯だ山犬の棲家だつた土地が、兎角する間に數十戸の家屋が建てられるやうな殖民地になつたのである。

夫れから二年經つて、油出村は油出町と改稱されて、靴屋だの、洋服屋だの、鍛冶屋だのが續々出來た。而して醫者さへ住むやうになつた。但し其の醫者は佛蘭西人、佛式に髯を剃つてゐて、いかにも無邪氣な人である。而してこの先生は、亞米利加の村落によく在るやうな、藥屋と郵便局とを兼帶してゐる。醫者として無邪氣な先生は藥屋としても無邪氣な商人で、店では單舍利別と毛生藥レロアとの二種の藥を賣つてゐる許り、毎時も穩かな溫柔しい調子で、患者に斯う言ひ聽かせてゐる。

「俺の調劑は心配御無用だ。俺は病人に藥を遣る時屹度同じ分量で一回分丈け毒味をして見るでナ、私が健康な時に服んで障らん藥なら、病人に服ませても大事あるまいがナ、然うで無かろか？」

月宮殿…………………176

「御道理で御座ります」と患者達は安心して答へる。係る患者には、何の道病人に障る事を避けるばかりが醫者の職務では無く、病人を救けるのが醫者の職務だと言ふ事は解らぬのである。モンシユール、ダゾビーユ、是れが老先生の姓名である。先生は殊にレロアの神變不思議の效能を信じてゐるので、度々集會の席上で帽子を脱つて、衆人に向つて斯う言ひ聽かせる——

「淑女並に紳士諸君、是非ともレロアを御試用下さい、私は今年八十四歳になりますが、毎日レロアを使用致して居ります。私を御覧下さい。私の頭には一本の白髪も御座いません。」

淑女紳士は先生の頭に一本の白髪も無いことを發見した。併し是れは醫者の頭が洋燈の玉の様にピンツ



ルになつてゐて、一本の毛も無いからである。但し斯ういふ發見は油出町の發展に毫も裨益する所がないので、誰れも今まで發見しやうと努める者が無かつたのである。

兎角する間に油出町は發展又發展して、滿二週年の後には、支線鐵道が敷設せられた。種々な公選官吏も出來た。例の先生は何人からも愛されて居るので、智慧の代表者として裁判官に選ばれ、靴屋の和蘭人デビス君は警視總監即ち警察署の長官に選ばれた。但しこの警察署は警視總監唯だ一人で組織されてゐる。

二

油出町の石油事業は無限に活氣づいてゐる。石油の輸出は莫大な利澤を齎した。デビス君が桑港の靴屋を飾つてゐるやうな硝子の陳列箱を店頭に出したと言ふ廣告が出た。次回の集會に市民は所謂『此の町の新裝飾』に對して公式にデビス君は感謝する。デビス君は大市民の謙讓な態度で『諸君に感謝します！諸君に感謝します！』と答へた。

裁判官あり警視總監ある處には必ず訴訟事件がある。訴訟事件にはインキと紙とを要する。そこで一番町と山犬町との角に文房具店が出來た。此の店では又政治上の諷刺畫を賣つてゐる。諷刺畫には大統領を牝牛の乳搾り男の姿に象り、從つて合衆國を牝牛に象つた物もある。亞米利加の一都市には一新聞紙無かるべからずと言ふので、第二年目の年末には、『土曜毎週評論』と題する一新聞紙が現はれて、是れには油出町全町民が其の購讀者になつた。其の新聞の主筆は同時に其の發行人兼印刷人、營業部長、加之に配達夫である。倘一つ手輕な職務を有つてゐる。それは副業に牝牛を飼つて、毎朝町民の戸毎に牛乳を配達してゐるのであるが、時々紙上に『憐むべき我が合衆國大統領にして、吾人が前號に於て彼に提供

したる諫告に追從したらんか」など大氣焔を揭げてゐる。

斯くて幸福な油出町には何一つ不足な物が無くなつた。殊に此處の坑夫は至つて穩かで、一向荒つぽい態度が見えない。町內は至極平和である。個人同士の爭鬪も無ければ訴訟も起らぬ。歲月は平靜に流れて、水の一滴が他の一滴と等しきが如く、今日の一日は昨日の一日と等しく過ぎ去つた。朝は誰れも皆な仕事に身を委ね、夕べは街上で塵埃を焚く。而して集會さへ無いのだから、次の晚も、又その次の晚も、塵埃を焚くものと心得て皆な寢床に這入つて了ふ。

尤も玆に警視總監を惱した一事件がある――それは人々が夕方この町の上を飛ぶ雁を狙擊することである。一體この町の法律は、街上で發砲する事を禁じてゐた。「是れが穢汚い小村落位ならば、何も言ひ度く無い。併し斯う言ふ立派な町では、甚だ不體裁で御座る」と總監は言つた。

市民等は傾聽した。首肯した。而して「ハイ御尤です」と答へたが、夕方になつて、夕陽の空に白や鼠色の雲が現はれ、夫れが山々から海へ擴がると、誰も皆な約束を忘れて銃を擔ぎ出す。是れには流石の總監も少からず弱らせられた。

元來デビス君は、一々犯人を裁判官の前に召喚しどし／＼處罰すべき筈である。雖然その犯人が病氣の場合には醫者の患者であり、靴の破れた場合には警視總監の得意先である。言はば手で手を洗ふのであるから、手で手を苦める事は出來なかつた。夫れが爲めに、油出町は天國の如く至極平和であつたが、不圖した事から此平和に一頓挫を來した。

それは何？一雜貨店を開いてゐる一人の男子が、一雜貨店を開いてゐる一人の婦人に向つて不倶戴天の憎怨を抱き、婦人も亦た彼れに向つて呪つたのである。

三

新開地の雜貨店と言へば、有らゆる種類の物品を鬻ぐ所である。雜貨店へ行けば麪粉、頭巾、煙草、箒、釦、穀物、鰮、靴足袋、ハム、草花の種子、上衣ズボン、洋燈のホヤ、斧、鉈、乾魚、即ち一口に言へば、人間の使用する有らゆる物、何でも購ふ事が出來る。

　最初油出町には唯だ一軒雜貨店があつた。店主はハンス、カスケと言ふ三十五歳位の獨逸人、目附の茫つとした瘦ぎすの、凛々しい男である。彼れは二六時中襯衣一枚で駈廻つて、煙草を口から放した事が無い。商賣に要る丈けの英語しか知つてゐぬが、商賣にかけて如才ないので、一年足らずの今日、數千弗は確かに儲けたらうとの噂である。

　然るに俄然第二の雜貨店が開店した。

　而して驚くべし！　獨逸人の男子が第一雜貨店を開いてゐるのに、獨逸人の婦人が第二軒目を建てたのである。忽ち兩店の間に戰端が開かれた。夫れは今度開店した雜貨店の主婦なるニユーマン孃が、開業祝の景品に曹達と明礬の混入つた麪粉で燒いた麪菓子を配つた事からである。彼女は是れが爲めに信用を我れから傷けたのであるが、彼女は故意と、是はハンスから買入れた麥粉であると言ひ觸らしたのである。これを聞いたハンスはぐツと癪に障つて、何うかしてこの復讐を取らうと考へ、取りあへず風が對向の店へ吹き込む時故意と塵埃を焚いて、その煙を對向の店に吹き込ませた。斯うなつてはいよ／＼眞個の爭ひ、對手の婦人はハンスの名を呼ばずに、每時も『オランダ人／＼』と云つて彼れを屈辱しめた。

　最初は町民も面白がつて笑つてゐたが、その中に段々贔負々々が起つて、ハンス派とニユーマン派に分れて、お互に妙な眼附で睨合ひだした。その眼附

が何うやら油出町の平和を害しさうなので、政治家デビス君は、この禍根治療せずんばあるべからずと言ふ風に、両方の雑貨店の主を街道の眞中に立たせて斯う言つて聴かせたのである——。

『何故あなた方は喧嘩を為さるのだ？同じ靴屋を贔負になさらん故



たらう？私は今桑港にも無いといふ斯う言ふ立派な靴を持つて居ます。』

と云ふと、ニユーマン嬢は冷笑つて、

『彼の方に靴をお勧めするのは無駄ですよ。遠からず素足で逃げ出すに極つて居ます。』

と答へた。これを聞いて、ハンスは急き込んで、

「私は足で信用を得ませんです。」
と、力味返つて答へた。但しニユーマン孃の足は頗る立派である。自分も其れが自慢であるだけに、一層腹立たしくて堪らない。

四

油出町ではニユーマン孃對ハンス問題で持切つてゐる。若い者たちは大抵ニユーマン孃に味方して、ハンスに對してボイコツトを始めた。併し之に對して婦人――殊に夫のある婦人は皆なハンス派に味方したので、孰らの店も最初のやうには賑かにならなかつた。而して兩方の店にお客が一人もゐない時には、ハンスとニユーマン孃とは、互に店の入口に立つて毒氣滿々たる眼附で睨み合をしてゐる。殊にニユーマン孃は故意と節を附けて、『和蘭人、和蘭人、オオオランダジン、オオオオランダジン！』と詩を吟ふやうに歌ふのである。

するとハンスの眼附はます／＼不氣味に輝き、宛がら野原に饑死れてゐる山犬でも睨むやうにしてニユーマン孃の足を見、姿を見、而して最後に惡魔のやうに笑ひ崩れ乍ら、

『オヽ神よ』と叫ぶのである。

ハンスの呪ひはます／＼高まつた。彼れが朝店頭に出た時、もし向店にニユーマン孃が居らぬ場合には、宛ら遺失物でもしたやうに其邊をまご／＼してゐる。

處が茲に又一つハンスに取つて一大打擊が起つた。それはニユーマン孃が「土曜每週評論」の主筆を味方に引入れて、その紙上に『和蘭人の譏謗に就て』といふ莊重な論說が揭載されたのである。

これを見るとハンスは躍氣になつて、其日からは主筆の牛乳を取る事を止めて仕舞ひ、每朝白い牛乳の代りに黑い珈琲を喫むやうになつた。その代りにニユマンー孃は二人分の牛乳を取るやうになつた。

而して毎朝店頭に立つて　愈々聲張上げて歌ふのである。

『和蘭人、和蘭人、オオオオランダジン、オオオオランダジン！』

ハンスは考へた。私は何う爲やう？　鼠殺しの小麥がある。彼物で彼奴の牝鷄を毒殺しやうか？　可かん。裁判官は私にその賠償を申渡すに違ひ無い。併し善い事がある！

すると其の晩、ニューマン孃に不思議に思はれたことがある。見ると、ハンスが向日葵草を幾束も持つて來て、穴倉の閉切つた窓の下へ列の樣に並べてゐる。孃は窃に考へた。何をするのか探り度いものだ、確かに私に仇する事には相違ない――其の間に夜が來た。ハンスは向日葵草を二列に並べたので、列の間に穴倉の窓まで一本の廣い徑が出來た。軈てハンスは布に包んだ物を持つて來て、ニューマン孃に脊中を向けた。怪しい一物の布を奪つて向日葵草の葉で夫れを包むと、今度は壁に近寄つて、壁の上に何やら文字を書き初めたのである。

ニューマン孃は樣子が知りたくて耐らへられぬ。孃は考へた――勿論私の事を書いてゐるに違ひない。世間が寢靜つたら、縱令殺されるまでも彼處へ行つて見てやりませう。

五

ハンスは用事が濟むと、二階へ行つて、間もなく燈を消した。そこでニューマン孃は手早く卷衣を纏ひ、素足に床履を穿いて、街道を突切つて行つた。向日葵草の處へ來て、直に窓の所へ行つて、壁の上に書いてある物を讀まうとして、俄然眼が頭頂へ吊り上つて、上半身は反り返へつて、口からは苦痛の爲に、『助けて！　助けて！』といふ死物狂の叫喚が迸つたのである。

上の窓が開いて、『何事だ？　何事だ？』と言ふハン

スの低聲が聞える。
孃は叫んだ。『オ、オ、オ、オランダジン、私を殺す積りだな、私を殺す積りだな！　首縊人、助けてくれ！　助けてくれ！』
『俺が今降りてつてやる。』
とハンスは言つた。成程彼は暫くして手に燈を持つて現はれた。ニューマン孃を見ると、地上に釘附のやうになつてゐる。彼れは兩腹を抱へて哄笑ひ初めたのである。
『是あ何じやい？　ニューマン孃か。ハ！　ハ！　私が鼬係蹄を懸けて置いたのに、ニューマン孃が懸つちまつた。何だつて宅の穴倉を見に來たんだ？　俺は壁に『御用心』といふ掲示を書いて置いたのに。さあ泣きなさい。此處へ人寄を爲なさい。お前が夜中に『和蘭人』の穴倉を覗きに來た事を皆なに知らせてやりなさい。オヽ可哀さうに！　さあ泣きなさい。だが夜明けまで其處に待つてゐなさいよ。左樣なら、ニューマン孃、左樣なら』
ニューマン孃は、叫び立てれば人が集つて來る。自分が迷惑をせねばならぬ喚き立てねば係蹄に懸つた儘徹夜して、明朝見せ物にならねばならぬ。而して足は益々痛んで來る。頭はグル／＼廻つて、星が互に入亂れて、月がハンスの忌々しい顏と混雜になつた。孃は氣絶したのである。
ハンスは竊かに叫んだ。
『あゝ大變だ！　孃が死ねば朝になつて皆が調べもせずに私を打擲するに違ひない。』
ハンスは身震ひして、成る可く早く係蹄を外さうとしたが、ニューマン孃の卷衣が喰ひ込んでた爲に容易くは外れぬ。少し卷衣を剝除けると、大理石のやうな美しい足がブラ下つてゐる。蒼白い月光が其れを照してゐる。
ハンスは辛とのことに係蹄を外して、ニューマン孃を兩手に抱へて孃の宅へ擔つて行つた。夫れから宅

へ帰つたけれども、その夜はマンジリともする事が出來なかつた。

翌朝、ニューマン孃は雜貨店の前に現はれなかつた。『和蘭人、和蘭人、オオオオランダジンオオオオランダジン！』とも歌はなかつた。恐らく孃は羞恥が惡いのであらう。否恐らく沈默の中に復讐の策を廻らしてゐのであらう。

果して孃は復讐の策を講じつゝあつた事が分つた。其の日の夕方になると、土曜毎週評論の主筆がハンスに拳鬪を申込んだ。最初は二度負けたけれど、ハンスは死物狂ひになつて猛烈な打擊を與へたので、暫時無益な對抗の後、主筆は『まゐつた！ まゐつた！』と叫びながら全身を横たへた。



　この事があつてからは、町中の人々は又一としは興味を得て注目した。

六

ハンスは敵から何か突撃を受けるだらうとは覺悟してゐたが、果せる哉待つ程も無く遣つて來たのである。元來雜貨店では、商品の名目を看板に書いて店頭に出すことになつてゐるのであるが、殊に氷賣つてゐるのを知らせるのが肝要である。氷が無くては、亞米利加人はウヰスキーも麥酒も飲まぬからである。ところが忽ちハンスは、皆が氷を取つて呉れなくなつた事に氣が付いた。わざ〳〵鐵道便で取寄せて穴倉に積んで置いた莫大な氷は容赦なく溶け初める。これは實に非常の損失である。何故だらう？如何したのだらう？　ハンスは味方の者が毎日ニユーマン孃の店から氷を買ふのを見た。更に譯が分らぬ。彼れが此の眞相を確めるべく決心した。

「何故宅の氷を取つて呉れないのです？」

彼れは或る酒屋の主人に、覺束無い英語で訊いて見ると、

「品切れだと言ふからさ。」

「何故品切れと言ふのです？」

「何うしてか、私に判るものか？」

「でも品はありますもの。」

「では、彼物は何かい？」

と訊きながら酒屋の主人は雜貨店の表に貼つてある看板を指した。ハンスは見た。而して喫驚した。Notice（廣告）と言ふ字から、何者かゞ中字のtを搔取つた爲に No ice（氷品切れ）となつてゐる。

「是ア何うじやい！」

ハンスは叫んだ。而して眞靑になつて慄へながらニユーマン孃の店に踏み込んだ。

「彼は卑怯だぞ！　何故貴樣は儂の中字を搔取つたのだ？」

と口角泡を飛して叫び立てる。ニユーマン孃は素知らぬ顏で尋ねた。

「何か私がお前さんのを掠取つたのですかい？」

『ｔの字だと言ふに！　貴樣私のｔを掠取つたな！もう堪忍しないぞ。氷の代金を辨償しろ。』

　ハンスは正氣を失つて狂人のやうに叫び初める。ニューマン孃は泣き倒れる。見物は大勢一度に飛んで來る。ニューマン孃は喚き立てた。

『助けて下さい！　和蘭人が氣が狂ひさうです！何だか私が彼の人の眞中の物を掠取つたと言ひますが、私は彼の人の物を取つた覺えはありません。私は取る位なら、何より先に彼の人の眼玉を掠取つてやります。私は弱い獨身の女です！　彼の人は私を殺します。彼の人は私を殺します!!』

　斯う言ふ風に喚き立てながら孃は身も浮くばかりに涙を流した。集まつてゐる亞米利加人等は、何事が起つたのか分らぬけれど、兎にあれ亞米利加人は婦人の涙を見るに堪へぬ。突然ハンスの首筋つかんで戸口から外へ投り出した。彼れは抵抗しやうとしたけれど、迚も敵はぬので、往來を飛越しざま、一目散に宅へ逃げ込んだ。

　夫れから一週間經つと、ハンスの店頭に大きなペンキ塗の看板が懸けられた。縞の洋服に白い前垂と肩紐を懸けた、ニューマン孃に彷彿な人眞似猿。その下に大きな金字で題銘があつた。

　——人眞似猿の雜貨店——

七

　見物は寄つて集かつて此の看板を見物した。その笑ひ聲に釣りこまれてニューマン孃は入口へ出て來た。見た。而して眞青になつて喚きだした。

『人眞似猿の雜貨店ですつて？　毫とも不思議はありません！』

　とは言つたものゝ、孃は胸を抱いて身震して口惜がつた。午後になると、此店の前を通る學校歸りの子供達が、看板の前に立止りながら、

『ヤア、彼は向店の叔母さんだ！ 今晩は、叔母さん！』
など〻騒ぎ立てるのが聞える。
これは餘り殘酷である。その夕方主筆が來た時、孃は彼れに斯う言つた。
『あの人眞似猿は私の事です。私は決して降參しません。是非あの猿を下させて、彼人の舌で舐めて消させてやらなくては承知しませぬ。』
『貴女何うなさる積りです。ニユーマン孃！』
『是れから直裁判官の處へ行きます。』
『では是から直？』
『直ぐ！』
ニユーマン孃は宅を出た。而して先づハンスの處へ行つて斯う言つたのである。
『一寸と、和蘭さん、あの猿は私の事ですね。さア私と一緒に裁判官の處までお行でなさい。裁判官に裁斷をして戴きませう。』
ハンスは冷笑つた。
『私の店へは私の好きなことを勝手に書けと言ひなさる筈さ。』
『だから行きさへすれば直に判ります！』
ニユーマン孃は息を外ましてゐる。
『だが、何うして彼の猿が貴孃の事だと分りますね？』
『分らなくつてさ。さあ、裁判官の處まで行つて貰ひませう。どうしても來なければ、總監樣に鎖で引張つて連れて行つて貰ひます。』
『よし〳〵今行く。』
兩人は店を閉めて出懸けた。途中で思ひ〳〵の事を考へてゐる。兩人は裁判官の宅の入口まで來た時初めて兩人共事件を説明するだけの英語を知らぬ事に氣が附いたのである。今更何うしたものか？ 併し總監は波蘭人だから、獨乙語も英語も知つてゐるかも知れない。兩人は又踵を廻らして總監の許に行

つた。總監は恰度荷馬車に乘込んで、今駈出さうとしながら、

「俺は材木を取りに出懸ける處だ一寸待ちなさい！」

彼れはザッサと荷馬車を驅つて去つた。

ハンスは兩手を脊に廻して、急き込んだやうに、

「明日まで待ちなさい。」



「待つものか。あの狼を下させなくつちや、私は死んで了ふ。」

「下すものか。」

「縊首人め。和蘭人、總監様抜きでもいゝ。裁判官は既う何も彼も知つてゐなさる。」

兩人は又又裁判官の宅へ行つた。併しこの裁判官こそ、町内で喧嘩の喧の字も知らぬ温和な人

で、たゞレロアの調合に忙しく、又それを世間救けだと思つてゐるのである。それ故彼れは普通の客を迎へるやうに、慇懃に而して愛想好く迎へた。

八

「コレ舌を見せなさい。俺が今直に調合して上げる。」

と先生は言ふ。

二人は手を振つて、薬は要らぬと言ふ合圖をしたのである。ニユーマン孃は諄々と、

「違ひます、違ひます！」

「では何か。」

二人共行詰まつた。ハンスが一言云ふ間に、孃は十言も言ふ。終に孃は、ハンスが自分を一命に拘はる程苦しめたと言ふ容體の積りで、自分の胸を指した。

「分つた！　今度は分つた！」

と老先生は叫んで、軈て帳簿を開いて、ペンを走らせた。ハンスの年齢を訊く――三十六歳。ニユーマン孃にも訊く、明瞭とは判らぬが――二十五歳位。宜しい！　二人の姓名は何と言ふ？　ハンス――ニユーマン、宜しい！　何商賣か？　二人共雜貨商。宜しい！　夫れから其の他の訊問がある。二人には分らぬが、ハイ〳〵と答へた。先生も肯いた。

先生はペンを擱いて、突然立ちあがると、莞爾笑つて、ニユーマン孃の手を把つて、堅く握手した。孃は屹度裁判に勝つたのだらうと思つて宅へ歸る途中、ハンスに向つて、

「思ひ知らせてやるぞ！」

「幾何でも思ひ知らせなさい。」

ハンスも平氣で答へたのである。

翌朝、總監は雜貨店の前を通つた。例の兩人は各自入口の前に立つてゐた。ハンスは煙管を燻らせ、而してニユーマン孃は、

『和蘭人、和蘭人、オオオオランダジン、オオオオランダジン！』

を唱つてゐる。

『お前たち、裁判官の處へ行きたいかな？』

『既う行つて參りました。』

『フーン、して何事かい？』

ニユーマン孃は愛想よく、

『ねえ總監樣、お店へ行つて持つて來て下さいな。私唯今靴を二三足御注文致しますわ。夫れから裁判官へ貴方から宜しくお口添を願ひます。私は御覽の通り弱い獨身の女ですから。』

總監は去つて、十五分ばかりで戻つて來たのである。

『さア、如何です？如何なりまして御座います？』

双方が訊ね初めた。

『萬事都合好く行つてゐる。』

と總監は言ふのである。

『ハイ、先生は何うして下さいましたのです？』

『さア、先生が何の邪魔をなさるものか？　彼の男はお前と結婚した。』

『結婚したつて？』

『諾、結婚しない人間があるか？』

雷が一時に落ちても、ハンスとニユーマン孃は斯程迄には驚かなかつたであらう。ハンスは茫然として口を開いたまゝ舌が痐つて馬鹿のやうにニユーマン孃を見詰めてゐる。ニユーマン孃も茫然して口を開いた儘ハンスを見詰めてゐる、兩人は地藏立に立つてゐたが、やがて双方とも喚き出した。

『私は彼の男の女房になるのですか？』

『私は彼の女の良人になるのですか？　殺して吳れ！殺して吳れ！　誰れが結婚するものか！』

『然うよ、私だつて結婚するものですか！　私死に度い！　殺して下さい！　離緣してください。離緣して下さい！』

九

総監は穏やかに言ひ聴かせた。

「まあ二人とも、然う騒いでも何の徳にもなるまいが？　先生は結婚は為せるが、離縁させる事は出来ん。喚いても何の役にも立つまいが？　離縁すると云つて、お前方は桑港の大金持でゝもあるのか？　夫れとも離縁するのに若干要るか知りなさつてるか？　喚いても何の役にも立つまい！　俺は良い子供の靴を持つてゐるから、安く賣つてやらう。左様なら！」

言ひ棄てゝ総監は立去つた。見物も嘲笑ひながら立去つた、新婚の夫婦丈けが取殘された。

新婚の花嫁は喚き立てた。

「あの佛蘭人の、私達が獨乙人だから態と斯んな事を為たに違ひ無い。」

「修正させろ！」

ハンス獨乙語で應じた。

「兎に角離縁して貰ひませう。」

「俺が先だ！　お前は彼の眞中のを除つたな。」

「いゝえ！　私が先へ行く！　お前さんは私を係蹄で捕つたな。」

「俺は貴嬢に用は無い。」

「私はお前さんに關つちやゐられ無い。」

二人は分れて店を閉めた。ニユーマン嬢は終日椅子に凭つて考へたのである。ハンスも同じ室に座つてゐた。夜に入つても少しも心が落着かぬ。孰方も眠ることが出來ない。兩人は横になつたけれども、孰方も眼が合はされぬのである。男は考へた——私の妻は彼家に眠つてゐるのだ。孃も考へた——私の良人は彼處に眠つてゐるのだ。而して何だか妙な感情が心中に湧いて來たのである。夫れと一緒に寂寞の感じが起つて來たのである。

殊にハンスは店にある例の人眞似猿の事を考へ初

めた。扨て今になつて見ると、彼物は自分の妻の額刺書である。何うして掲げて置かれやう？ 彼れは讃を書かせたのが如何にも自分の拙策であつた事を知つた。併し彼れは孃を憎く思ふ。孃の爲めに莫大の氷が解けた。これから月夜の晩に孃を係蹄で捕へたことが、胸に浮んで來る。ハンスは考へた——併し孃は實に勇敢な處女である。併し流石の孃も私には敵はない。而して私も孃には叶はない。私



は結婚した。誰れと？ ニユーマン孃と！ 而して此處で離縁するには、此雜貨店全部でも支拂ひ切れぬ程の金が要るのである。

ニユーマン孃は獨語いた——私は彼の和蘭人の妻である。私はもう娘では無い。確かに結婚したのである！ 誰れと？ 私を係蹄で捕つたハンスさんと！ 彼の人は私を擔いで宅へ連れて來てくれた。而して彼の人は眞實に强い！ 斯う私

を抱き上げて……オヤ、何だらう？　其處らで物音が聞える……

何も物音は爲無かつた。雖然ニユーマン孃は物怖をし初めたのである。但しこの時まで孃は曾て一度も物怖した事が無い。

併し今彼の人から切出して呉れゝば……ア、神よ。――而して又孃は一種變な失望の調子を帶びたやうな聲音で――だが私からは切出せない。彼の人から……

斯如な事を考へるので、怖氣は愈々募つて來る。孃は考へた――獨身でゐればこそ何時でも斯んな寂しい思ひをするのである。若し宅に男子が一人でもゐたら嘸ぞ安心であらう。私は此邊に人殺しがあつた事を聞いてゐる。此度その人殺しが此處へ來たのに違ひ無い。ア、あのハンスさん！　彼の人は私の邪魔をした。けれども離婚するには料金を整へなければならない。

斯んな事を考へながら、孃は廣い亞米利加式の寢床の上に、眠りもせず仰向けに寢てゐる。而して實際しみ〴〵と孤獨の寂寞を感じた。復び突然飛び起きた。此時、孃の怖れた物音が確かに耳朶に響いて來た。眞夜中の寂寞を破つて槌を打つ音が瞭然と聞える。

十

ニユーマン孃は寢床から飛起きて窓口へ飛んで行つた。雖然窓の外を眺めた時には、ホツと一息安心の胸を撫で下した。月明に梯子が見えて、梯子の上には人眞似猿の看板の釘を拔いてゐるハンスの眞白な凜々しい姿が見えるのではないか。

ニユーマン孃は窃に窓を開けた。而して――彼の人は猿を下してゐる。善い事をして呉れると――思ふと、忽ち何物かが自分の心の周圍を溶かしてゐるやうに感じたのである。

ハンスは一本〳〵に釘を抜いた。看板は轟然と音して地上に墜落した。續いてハンスは徐々と梯子を降りて、枠を取り、頑丈な兩手で畫面を疊んで、而して梯子を取り除け初めたのである。

ニユーマン孃は男のする事をヂッと見てゐた。靜かで暖かな晩である。

「ハンスさん。」

孃は小聲で呼んだ。

「貴女、お眠みなさらないんですか？」

ハンスも矢ッ張り低聲で答へた。

「ハイ、今晩は。」

「今晩は。」

「貴方、何をしてゐらつしやるのです？」

「猿を下してゐる所で。」

「ハンスさん。有難う御座います。」

兩人は暫く無言でゐたが、やがてニユーマン孃の聲で、

「ハンスさん。」

「何です？」

「離婚の手續を爲無くてはなりませんね。」

「左樣ですね。」

暫時また無言でゐる。お月樣は何だか笑つてゐるやうだ。犬も吠えてゐない。

「ハンスさん。」

「ニユーマン孃、何です？」

「私達は結婚したのですね。」

「どうも左樣のやうですな。」

「では少し御相談致したいことがありますが……」

「私も左樣思つてる所です。」

「では今直ぐ御相談致しませう。」

「貴女さへ宜しければ。」

「では宅へ御來で下さい。」

「一寸と衣類を着て行きます。」

「それには及びません。」

下の扉が開いて、ハンス君は暗がりの中に消えた。而して暫くすると、其の姿がうら若いニューマン孃の居室に現はれたのである。室は靜かで、暖かで、整然としてゐる。ニューマン孃は白い綺麗な外衣を着て、而して非常に美しく見られた。

『私は貴孃のことをいろ／＼考へました。』

とハンスは斷々な優しい聲で言つた。

『私も貴郎のことをいろ／＼に考へました。』

『今更離縁しては、お互ひに破産するばかりですね。』

『私も其れを心配して居ります。』

『困りましたね。』

『眞實に困りました。』

『何とか好い工夫がありますまいか。』

『左樣ですなア。私も考へてるところです。』

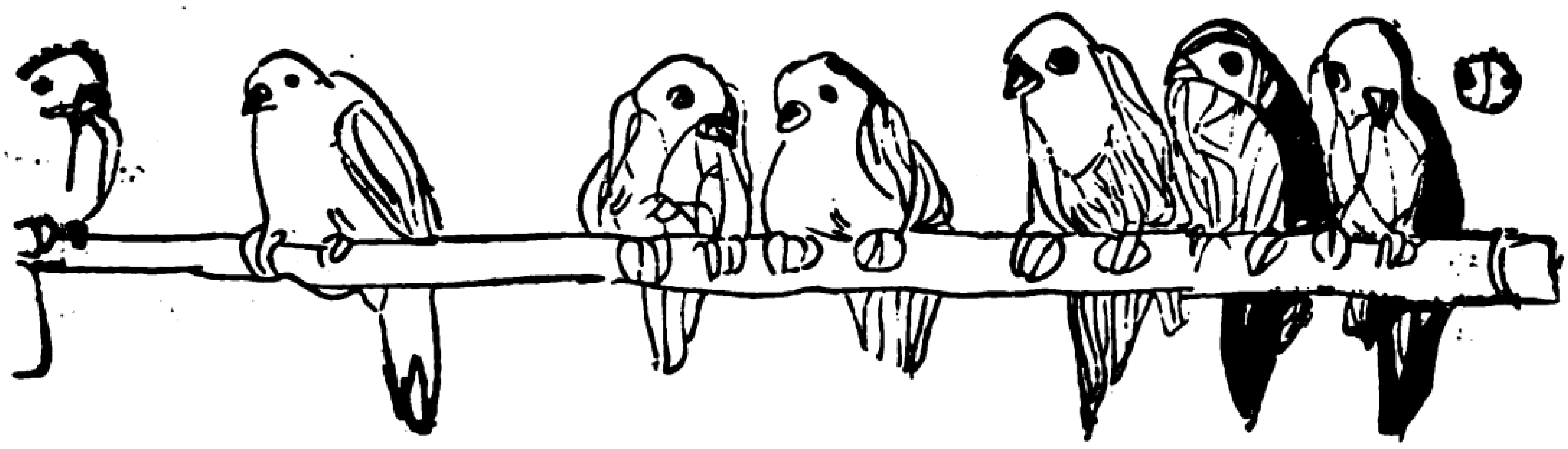
　この談話があつた翌日から、油出町は再び平和に歸つた。

猿智慧

　或る所の母親が子供に手拭を買ひにやりました。歸つて來て擴げると、假樣枚よけい付いて來ましたよ、早く返して來ませうかと、早や立ち上る。母親の曰く、いゝよ餘計な事、あそこの雜貨屋は皆で何時も議事にだつてつまらない物許よこすのだもの此くらゐのもの取つて置いたつて宜いんですよ。子供は呆氣に取られて見て居ました。

　此の村に同じ年輩の少年が居りました。二人共今年中學の入學試驗を受ける事になりました。一人の方は學校から歸つて來ると急く師の許へ習ひに行き、夜も十一時頃まで寢ずに勉强しました。今一人の少年は勉强するでもなく童を相手に戰爭ごつこなどして遊んで居ます。餘りなのでいつか宅に遊びに來た時。此度應募者は八百人、其の中でわずか百二十人しかとらないのですもの餘程勉强しないと落第しますなど、それと無く注意してやると、はあ、左樣でせうとすまし込むで居ました。いよ／＼其前日と成つて、遊び屋の方に逢つた時試驗でせうと聞くと、ソン、何處の――中學のよ。ウンまう／＼左樣だツた大抵駄目よ。と云つて笑つて居りました。結果は不思議にも、遊び屋の方は宜い成績に入學し、も一人の子は又小學校に止まられば成りませんでした。


伊太利の歌ひ女



△夏のたのしみ

○夏もやう〳〵深くなりぬれば、木として繁らざるなく。草としてさかえざるはなし。日々に物を卯のぶる様に見へてひたすら緑のいろふかく夏木立こそ花にもをさ〳〵おとるましけれ、春の花はところ〳〵に咲きてまれなり、夏は山も里もあるとしある草木ごとに打はえて青緑のいろなれば春にことなる眺めなり、やちぐさにうゑあつめてなづさひし前栽の草木とも露をおびておの〳〵其梢をあらはし、ところ得顔に心にまかせておひしげれるもうれしと見や、むかしおぼゆる花たち花のかをれるは夜るひかぜもいとなづかし、早苗とる頃、田家い雨をまち得て、いそがはしくにぎはし。この頃やり水のほとりに飛ぶ螢のおともせですだくを見ればなく虫よりいとあはれむべし。夏山のけしき春みわたりたる高き峯、おほぞらにつらなりて雲の外に聳えたるをあくまで見るこそことにすぐれて心を慰くするながめなれ。

○みな月のころになりぬれば、はし居の風したしく簟席しきてなるも心地よし、池の心ふかく、蓮葉のにごりにしまずして、花あらで夕風にほひわたるだにもこと草にすぐれたり。殊に花のゑみの唇ひらけたるは所せきまでかほりみて世に似たるものなくきよげなり。涼を逐ひて木陰にやすらひ、木々の下蔭のなつかしきに、清き泉をむすび夏を忘るゝ心地するもいとよし、光明らけき夜半の月を清き水にやどして見るはさらなり、やり水の音などきくも、いみじう心ゆくばかりなり、日ごろへてあつきたへがたきに夕立のしぐれわたりすゞしきもいと心よし。

清水　夏の夜の月まつほどのてすさびに岩もる清水いく結びしつ　中納言國盛

常夏　とこ夏のにほへる庭はからくにゝ織れる錦もしかじとぞ思ふ　中納言定頼

夏月　あまの河水まさるらし夏の夜は流るゝ月のよどむまもなし　讀人不知



夏蟲　つゝめどもかくれぬものは夏蟲の身よりあまれる思ひなりけり　讀人不知

水鷄　夜もすがらはかなくたゝく水鷄かなさせる戸もなき柴のかり屋を　源雅光

△秋のたのしみ

○秋來ぬれば風涼しくうち吹きて草木のそよぎ秋の聲の、いづくにも打なびきて聞ゆるこそ、はつ春の風にかはり、心をいたましめ、身にしみて、金風の至れるしるべとおぼゆれ、蟋蟀のきさはしの下にすだくも、なりしり顔にきこえず、大暑やうやく退き、新涼すでに來りぬれば、あだかも酷吏の去りて故人のこゝに來れる心地ぞすなる。この頃は、人の形氣力を得て、燈もしたしくなりぬれば、ふみともまきのぶるに、時を、得て萬づの樂しみにまされり。荻の上風、萩の下露、さま〴〵の虫の音皆秋のあはれをもよほして身にしむ事限りなし。門田の稻葉、朝露にうるほひ夕の風をとづれてそよぐ景色、ことさら早稻、晩稻の先たち後くれて穗に出づるありさま、皆見るにたへたるながめなり秋の最中になりぬれば、一年をへて待ち得たる月あきらけきは凡そ天地の間にならびなきつゝいでのひとつの見ものなればよろづのうるはしき樂飾りて皆其下なるべし。

○秋もまた夕暮の景色こそ、たゝならず見ゆれ、うす霧のまがきに立のぼる粧ひ、風の音、虫の音、いづれとなく人の心にしみて、春にもまさりて哀れふかし。秋は夕と誰れか言はざるべき、夜長ければ曉の鐘、人を驚かしやすく、ねざめがちなり。ことさらに老の身は眠りはやくさめて常に夜をのこせば、いのねられぬまゝに懷古の心殘夜に上じて、來し方往くすゑの事おもひゞつけとる。

○長月の末になりぬれば秋の花みな衰ろへ、虫の音もなきかれて、もみぢやう〳〵色づきぬれば、秋の暮行物おもひも亦ふかし、秋は只今日ばかりぞとながむにも名殘いとおしむべし。春の盡くるに比らぶれば草も木もやう〳〵枯れ果てゝ、行末のけしきまでおもひやられてさびし。（貝原益軒）

誹謗文

鬼千疋

毒紅唇

暑中休暇を待ち兼ねるのは毎年の事だけれども、今年は殊に待遠だつた。家には今度新らしい嫂さんが入らした。どんな方だらう。兄樣がお選びになつたのだから、きつと私も大好きな方よ。女學校出の美人。きつと私とはお話がよく合ふだらう。理想のホーム……と想像するとぢつとして居られない。休暇になると直ぐ飛ぶ樣にして歸つて來た。

汽車の中でもいろ〳〵想像したり考へたりしてるものだから少しも退屈を感じなんだ。ステーションにはきつとお二人で迎へに來て居て下さるだらう。

そしたらあゝ云つてかう云つてと御挨拶迄考へて樂んで居たものを。それどころか何時も來て下さる兄さんさへ見えなかつた。

門迄驅けつけると玄關にはいつもの通り母樣と淸とがにこ〳〵笑つて立つて居らつしやるばかり、外には人の影もない。お留守かと思へば奧でお話聲がしてゐる。

父樣母樣にお挨拶していろ〳〵お話などして待つてゐるけれどもまだ出て入らつしやらない。

△初對面

お部屋へ行くとお二人は机に向つて頭をあつめて、何か見て居らつしやる、ちやんと坐つて御挨拶をすると、兄樣はいつもの通りやさしく云つて下さる。

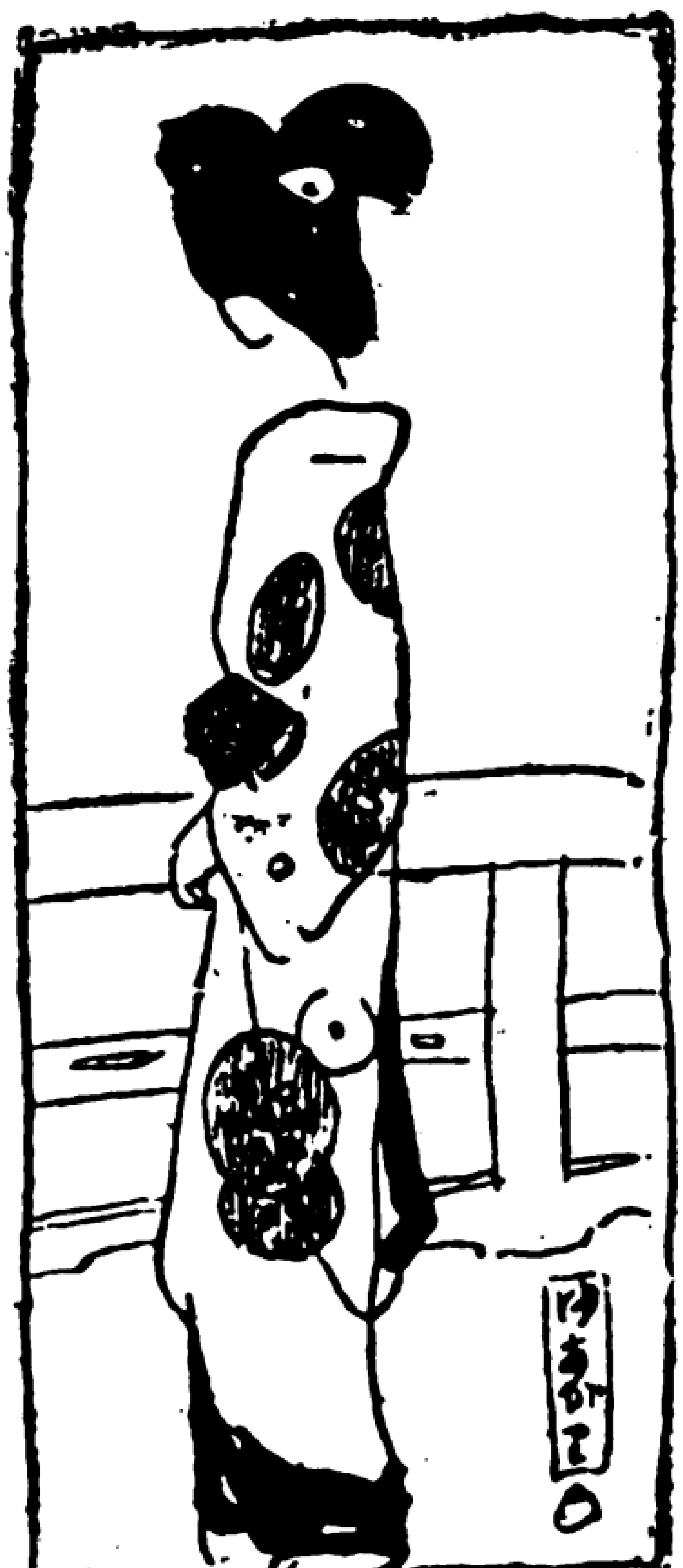
そしてこれが嫂さんだよとにこ〳〵して御紹介になる。初めまして……私は妙です……と一生懸命で御挨拶をすると、嫂さんは、は、どうぞよろしくと仰有つたきり、にこつともなさらない、冷淡なものだ近所へ轉居して來た人でももつと丁寧だのに……

月……………………290

愛想のないにも程がある、ほんとに曖昧のない人だと、去年から父樣母樣無性にお急ぎになつてゐたので。

初對面の目にうつつた人格に見損じはないものだとか、私は此時既に反感を抱いた。しかし是れが、所謂ひがみ根性と云ふのだらうと自ら誡めてお部屋を出た。

嘸うれしからう面白からうと樂んだ甲斐もなく、家の內は一足每に冷たい空氣が深くなる樣で、私は何だか不平でたまらない。嫂さんが入らしてから未だ、半年にしかならないのに…人ひとりでこんなにも變るものか、恐ろしい。



△嫁としての氣品

兄樣は文學士、地方ながらも女學校の敎頭である以上、信用にも係はるから、少しも早く嫁をとつてと、去年から父樣母樣無性にお急ぎになつてゐたので。

隨分いゝ所から申込があつたのだけれど、兄樣が天降り女房は家庭破壞の基だとか、財婚は家名の汚れだとか、何とか彼とか難くせつけて、斥けてしまつて、親友の妹で性質もよく、知つてゐるし早く親にはなれて苦勞をしてるから家の爲めにはきつとよからうと仰るものだから本人の氣に入つたのが一番よからうと、遂に話がきまつて此春入らしたのがあの嫂さん。

なるほど美人には違ひない殊に眼千兩とでも云ふか黑目がちに露を帶びた樣なあのお目でちらりと一目見られると私でさへ恍惚する、よく人をチャームするとか云ふのはあんなのだらう、しかし惜しい事

には氣品がないので卑しい。

私立ではあるが女學校も卒業してゐらつしやる。それにまた早く兩親に別れて苦學なすつたのだと云ふから、お年は二十一だといふ事だけれど、二つも三つもふけて世の中のすゐも甘いもかみしめて居らつしやるから、人を籠絡する事はなか／＼お上手だ。

だから坊ちやん育ちの兄様なんか、よい様にふり廻はされて居らつしやる。いくら最高學府の秀才でも、嫂さんにかけては盲人同然、あんなに理想々々て、やかましく被仰つた兄様がよくもあんなのをおよりなすつたと可笑もありお氣の毒な様だ。しかし、兄様には痒い所へ手の届く様によくお仕へなさる、實に感心だ。あれの幾分かを兩親の方へ分けて下さつたら申分ないのだけれど——

あれが西洋風だか知らないが、私は秀雄の妻です父様だらうが母様だらうが指一本さへて下さるな。夫の用事の外は一切お斷りと云はんばかり朝から晩迄兄様の傍につきつきり親の方なんか見向きもなさらない。況んや私をやだ。此間お座敷で涼んで居た時だつた兄様ばかりをあふいで上げて、そばに父様が居らつしやるのに私の務以外ですとばかり、すましして居らつしやる。あんまりで私は涙が出る程、腹が立つた。それはもう誰れがしたつて同じ様なものだけれど、私がするのと嫂さんがなさるのと受身の父様にとつてはどれだけ感じが違ふかしれない。母様も一々口にお出しなさらないが、どんなに失望して居らつしやるだらうとお氣の毒でたまらない。うちだからこそ天下泰平なんだけれど——

一體嫂さんは家族を何と思つてゐらつしやるのだらう。私がたまにお部屋に行くとむつちりとだまつてしまつて少しも打とけて下さらない。出ると後では人が變つた様にキャッ／＼と笑つてゐらつしやる。時々皆が團欒して昔話がはずむ時もある。さういふ時はお勤めは眞平といふ顔をしてさつさとランプを持つてお部屋へ退却だ。すると兄様がまた直

について行つておしまひになる。今日もお話最中に嫂さん俄かに歯痛を起して大さわぎ、兄様があわてて藥だ水だと大そうなこと、まさか歯痛で死もしまひに――水仙の根をおろして持つて行て上げたら、まあ驚いた、兄様の膝を枕にして横になつてゐらつしやるじやありませんか。あんまりですものも云へなかつた。現代はこんなのが流行るのか知らん。東京の路英さんとかは藝術家をふり廻して随分、我儘をなさるとかいふ事だがこんな地方で其露英式の實現を見やうとは思はなかつた。西洋風はいざ知らず矢張我國特有の美點たる夫婦別あり、長幼序ありであつてほしい。でなければ決して家庭の平和は得られない、こんな事では家庭教育なんて零だ。兄様あれで未來の良妻賢母を養成する大任を負ふ



名所二十五題（白河）

教育者と云はれるだらうか、ちつとどうかしてゐらつしやるわ。

此間久しぶりで綾子さんに逢つた時、妙子さんが、い〻、お姉樣が出來て結構な、理想の御夫人だらうですから嘸ねえ、私等は模範にしやうと申してゐますのよだつて、私は覺えず冷汗が出た。

△衝突一番

嫂さんは苦勞をした人に似合はない無精ものだ。苦學生なんか、よく目はしのきく身の輕いはきはきしたものだらうと思つてゐたが、正反對だ。朝だつて何時も兄樣が先きにお起きになるし洗濯物は無論きよの受持、淸が留守でお母樣の忙がしい時でも、水一杯汲ふとなさらない。毎日々々何をしてゐらつしやるか知らないが、御飯の時お顔を見るばかり。間には、めつたに出てゐらした事がない、其御飯でも、成丈皆と共にするのを避ける樣になさる。此間硯の水をとりに行たら、お二人で御飯を召上つてゐらしたが、お肴を一つお皿に入れてつつき合つて食べてゐらした。嫂さんは嫁といふものを、どう解釋してゐらつしやるのか、ゐらしてからもう半年になるに、少しは打ちとけて家の事でもなさりさうなものを――でも兄樣のお友達でも入らつしやると、直に西洋料理の御注文が出るものだから、仕方なしに出てゐらつしやる。嫂さんのお料理は「カツレツ」と「オムレツ」ときまつてるから可笑しい。此暑いのに油氣の多いしつこい物ばかり、それに平生なさらないものだから、お手のおそいこと〳〵、私の樣な性急は見てゐてもいら〳〵する。だから此間見かねてお手傳をして却て大失敗をした。あまり暑くるしい氣のきかない献立だつたから、ちやうどキヤベツのあつたのを幸ひサラドをこしらへて上げたら大そうお喜びなすつていつにないよい御機嫌、私もまことにうれしかつた。ところがお客樣お歸りになつてから兄樣が今日のサラドはよく出來てたがカツレツの肉がかたかつた、たゞくのを忘れたのじやないか

と、何もお存じないものだから私の方をお賞めになつた。

すると嫂さんは顏に青筋を立てゝ、はい今日は妙子さんに手傳つて頂いたものですから……つい……だつて好意もかうなつてしまつてはだめだ。徳のない人にいくら盡しても「豚に眞珠を與へる樣なもの——さはらぬ神にたゝりなしと——私は漸くさつてしまつた。」

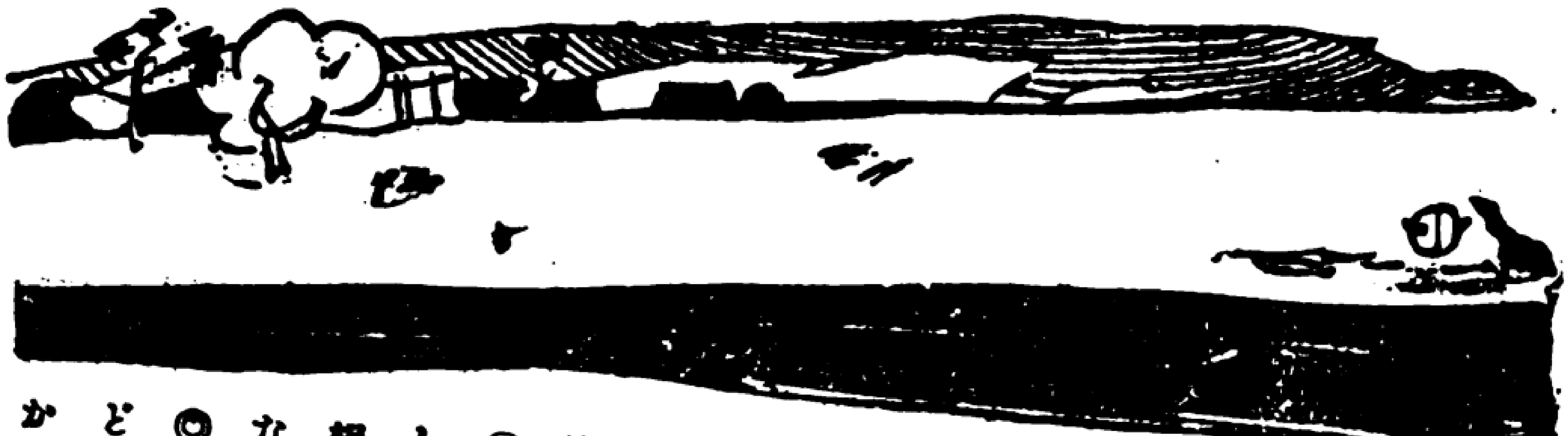
毎日〳〵あんまり面白くないから好きな絲に氣でも紛らさうとヴワイオリンをひいてゐると、ヷワイオリンはきい〳〵いふ計りで妙味がありませんねえ、ですつて、遠慮のないのがいゝからつて、下手だと云はんばかり、あんまり露骨も甚だしい、腹が立つたからこれでも晴がましい演奏會の壇上に立つ事もある私、あんまり見くびつて貰ひますまい。毎日毎日パンのために働いてばかり居た樣な人に俗氣はなれた高尙な音樂が分かるものか、音樂趣味のない人に優美な品性はないものだと、よつぽど云つてやらうと思つたけれど後のたゝりが面倒だから止めた、なんの恐がない、たゞ母樣がお氣の毒ですもの。

嗚呼樂んでた休暇もかれこれなかばを過ごしてしまつた。こんな調子ではいかに佛性の私でも今の間に鬼になりさうだ。母樣はこれも人情學といふ學問、お前も他家へ行く身だから、よく〳〵見て置いて心得になさい。善惡に係らずどんな事でもためにならないことはありませんと被仰るけれど「君子は危きに近よらず」だ。長居は恐れ、早く學校へ行てまた愉快な學生生活に入りませう。

鬼　千　定……………………205

△士官と香水

一農家に一人の下士官が、一夜の宿を借りた。朝起きて、手水の水を汲むでやると、イヤ私やあまり水を用ゐません。と云ふので御湯を沸して與ると、顏を丁寧に洗つて、やがて袋の中から二つの瓶と鏡とを取り出した。一つは香水でも一つはお白粉であつた。農夫はこれを見て、今の兵隊さんは駄目やな。日本は一等國と威張つて居るけれど、今に戰爭でも起ると、敗けにや良いがとつぶやいた。



飮食行儀作法都の手振

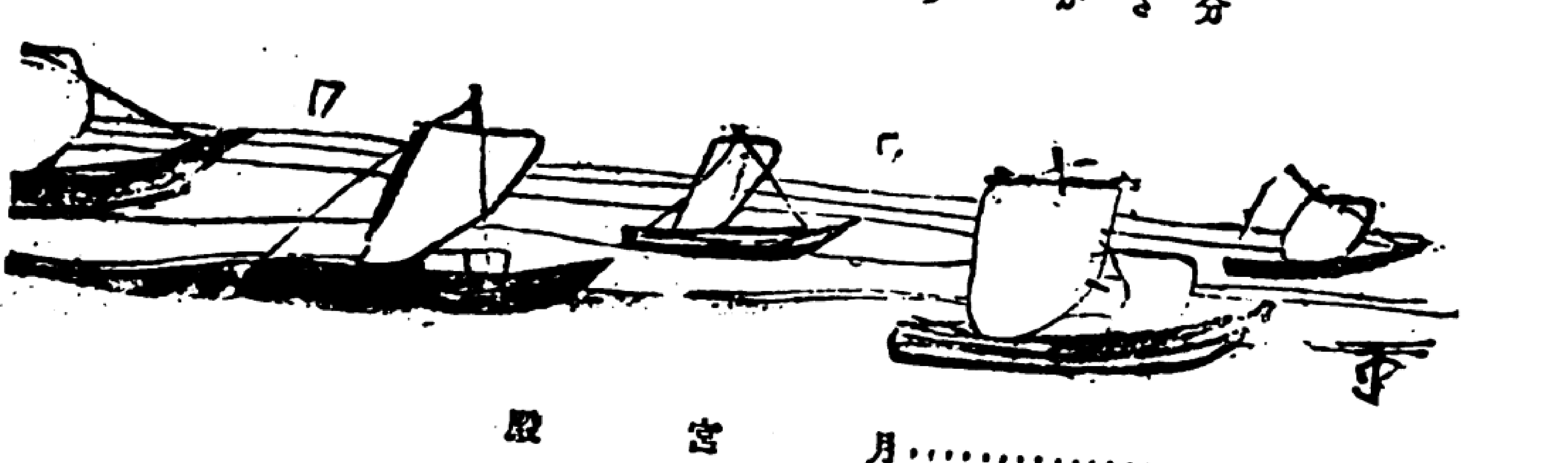
◎酒はしづかにつぐべし大きなる盃ならば、さう〳〵とつぐがよし、ひるは九分よるは八分と心得べし、こぼるゝ程につぐは無禮なり。盃を傾けて受くる人あるとも銚子の口にておさへなどすべからず、銚子をかゆるは酒のある内くはへにたつべし。したむ程にならざる内にかゆべし。

◎肴に何にてもきやしやなるものを盛らすべし、手の汚れる物、はさみ難きもの、皮質などある物をまいらすべからず。

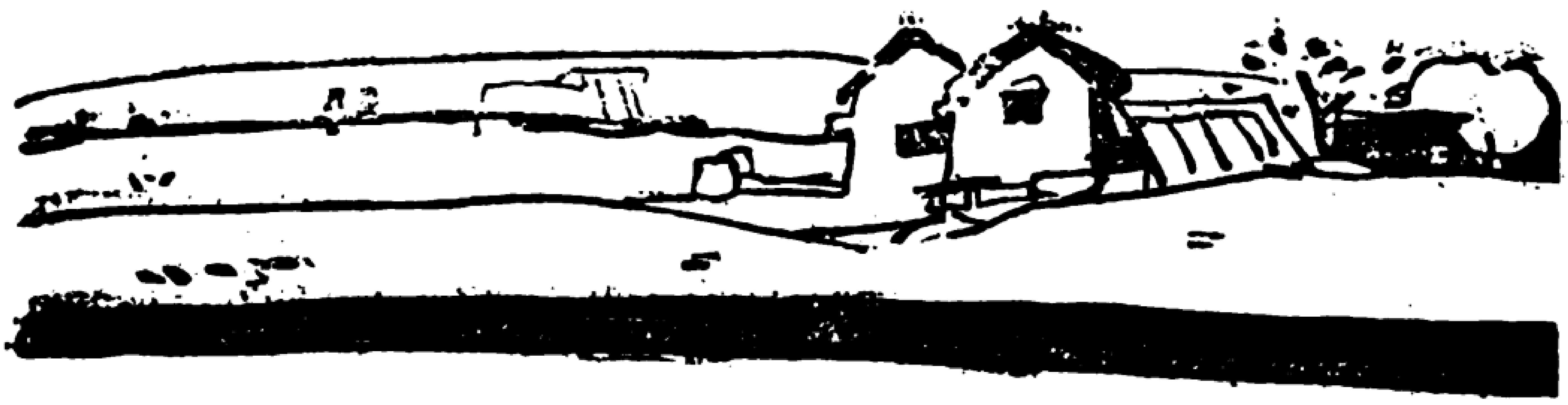
◎三寶据ゑやう向ふのさまに左の手を入れ底をうけ右の手の指を緣にそとかけて持ち出すべし、下におく時は左の手を拔き兩手にて臺を直し、右の手にて我がうわがへのつまを取あとへ少しにじりて膝を立てゝひらき其立てたる膝をつきて又一方のひざを立てさまに立なり。臺の緣のとぢめは我が前と知るべし常の膳もとぢめ有は客の向ふに爲と心得べし。

◎茶臺は相客なきときは臺ともに左の手にてとり、右の手にて茶碗を取臺を下におきて飲むべし、扨てもとの如く臺に据ゑて置くべし、相客あらば茶碗ばかりを右の手にて取り飲むべし、相客への辭儀は茶碗をとらぬ先きにすべし、茶碗とつて後それあがりませなどの挨拶は無禮なり心得べし。

◎給仕人の心得、主人の仰なくとも座敷にてさし心得ていたすべき事は掛物のゆがみ以爲などよく揃へて直すべし、蠟燭の心をとり位き燈をなをすべし、例へば屏風など開びてこけかかる樣に見ゆるなどを直すの類なり。此外に主人の仰らるゝ心を知らずしてみだりに直すべか



月宮殿……………………206



らず。

◎膳に座り箸をとる事人より遅く取て人より早く置くべし、然れどもかく心得て餘り遅くとりはやく置くは悪し、少しの違ひと心得べし、われいちと遅くとると心得るときは見合せてひまとり料理の加減ちがひて亭主の心遣大方ならぬなり。

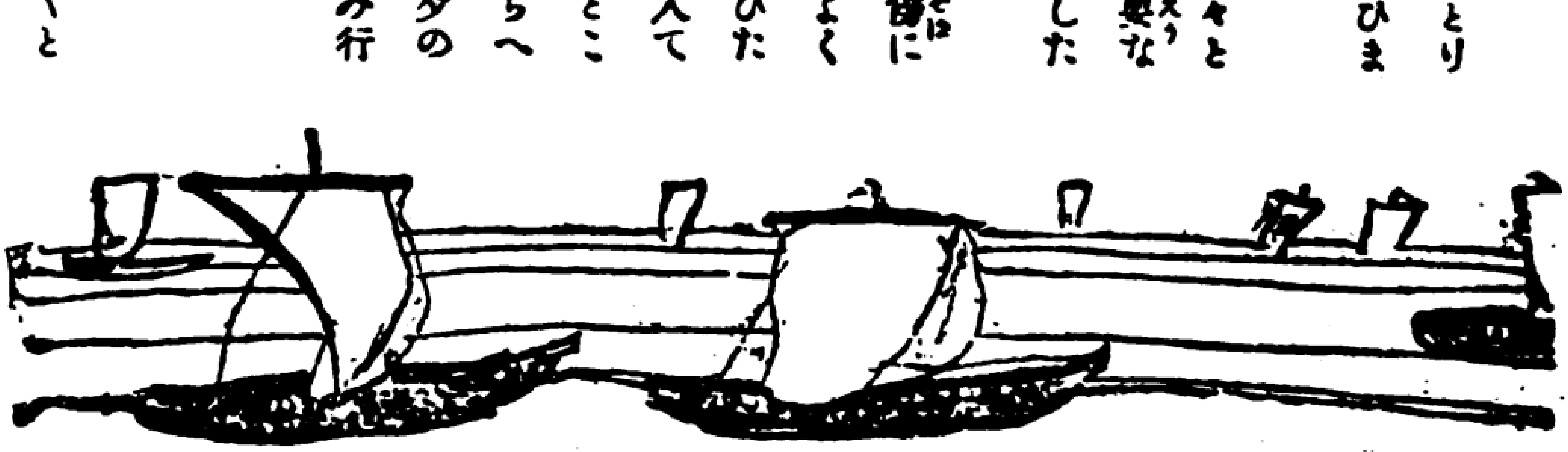
◎上座にて苦しからぬ人も一應は辭退すべし、ずかずかとは上るべからず、又辭退過て様々と人にしひらるゝは悪しく、出すぐるは無禮なり、又引こみ過るも無禮なり其座の見合せ肝要なり、相客の上下我身のほどをはかるべし、まして貴人などの仰あらば一應は辭退もすべしたつて辭儀することは大なる無禮なり。

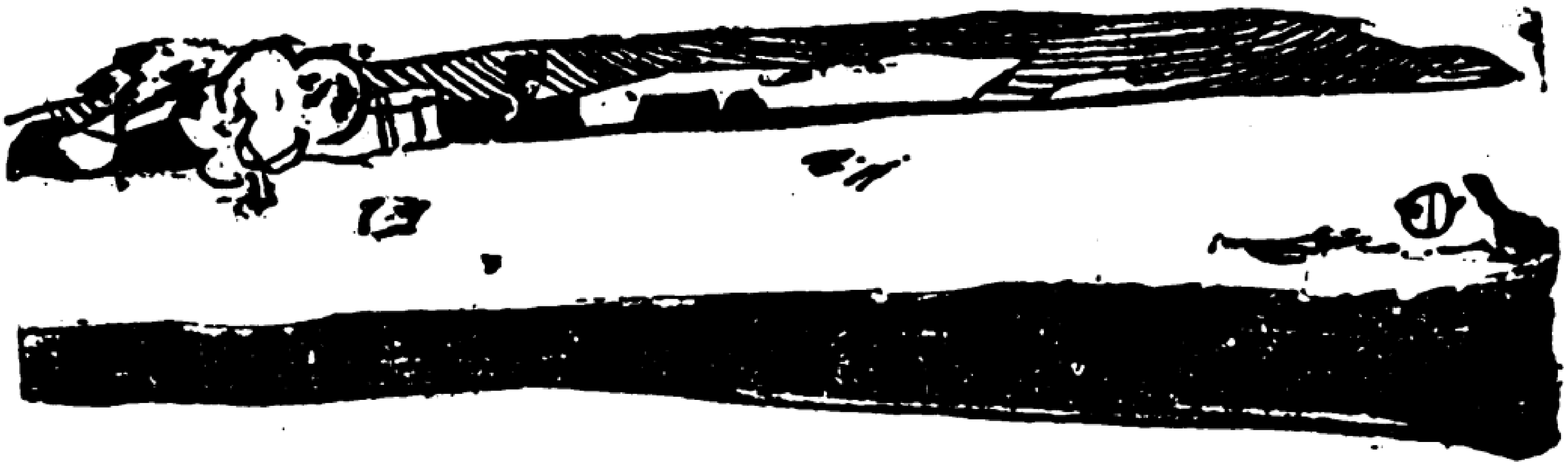
◎料理のうちに魚の骨などなきやうにする事女中亭人の馳走なり、もし骨などあるを膳の傍に出しおき、かさなどに置く事あるまじ、塵などありとも同じ事なり随分器物のうちにて、よく見て骨なきところを食ふべし、口より骨を揀りいだすことあるべからず、すべて食ひ仕舞ひたる料理の内にて骨又は堅きもの嫌ひなるものあらば平つぼ又汁椀など蓋のあるものゝ内へ入て蓋をして置くべし、食ひあらしたるまゝにおく可らず、焼物など若しむしるとも殘つたるところの見悪しからざるやうにすべし。食ひ仕舞ひたる箸ははな紙にて拭ひおくべし、膳のうちへ何にても雫の落ちざるやうに心得べし、こぼすことなどは大なるぶしつけなり。常々朝夕の食べものゝ時たしなみて膳の廻り綺麗に食ひつけおくべし。晴れの座敷にて俄かにたしなみ行儀にせんと思へばかへつて必改まりて過ち出來るものなり。

◎副食は左の方より食ひそむべし、菜よりさいを食ふ事わたり箸とて嫌ふなり。

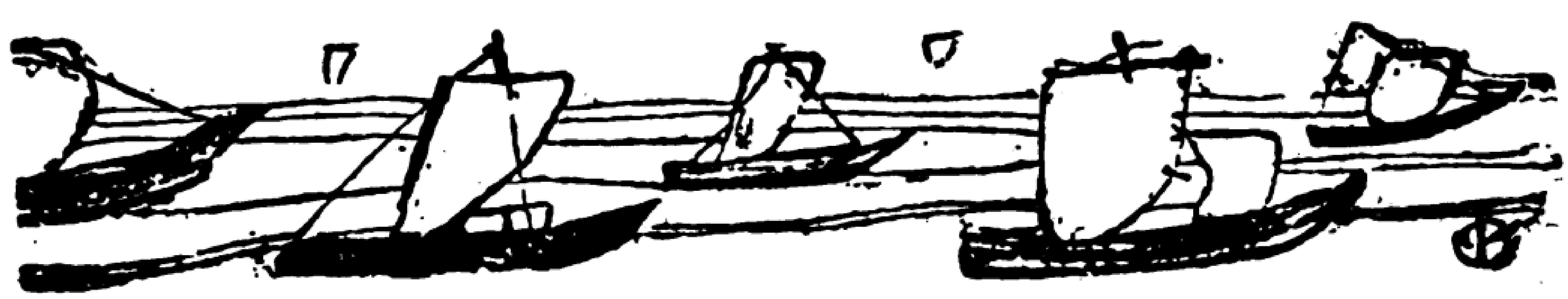
◎飯椀の内より外目を遣ふべからず。

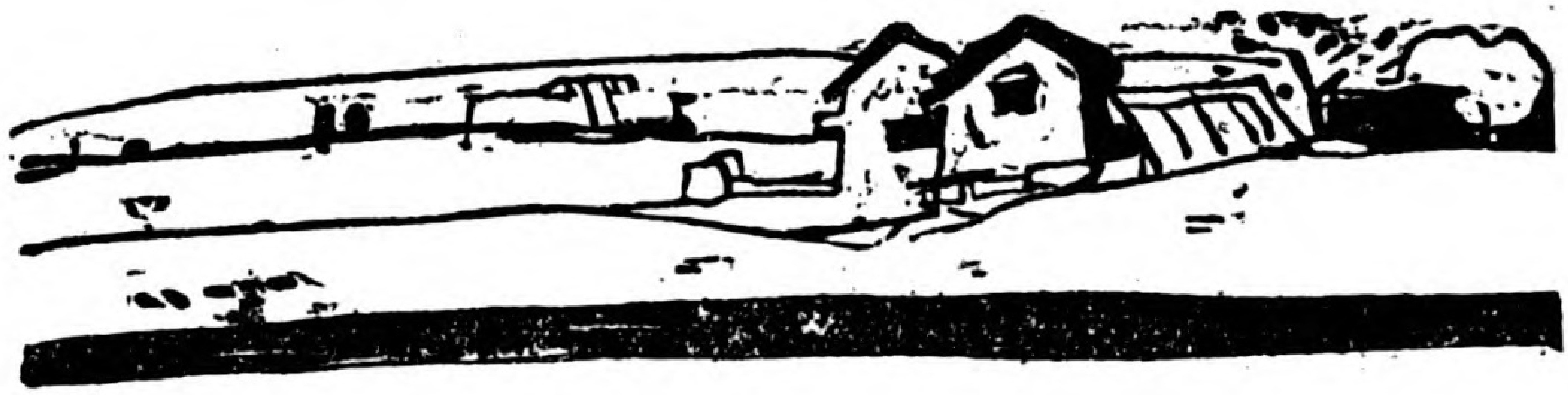
◎挨拶もなく、打傾きて食ふは、大食ひといふなり挨拶度々いふも悪し。一どきに早やばやと





云ふは聞きにくきものなり。よき程〳〵を見合せ輕く挨拶あるべきことなり、口の内に食ある
うちに挨拶いひかけられたるは大に迷惑なるものなり。大口に食ひて含みながらものいふは大
に見惡し、尋常にせんとて餘りに小箸につぼ口なるもいと初心なりほど〳〵あるべし。
◎生酢の酢なかたく吸ふべからず同けんを食ふ事努々あるまじ。
◎二三の膳の汁をくふ時はその膳につきたる菜をくふべし外のさい食ふべからず。
◎香の物は湯の菜なれども湯の中へ入て食ふ事あるまじ同じくは食はぬがよし。
◎味噌のもの鹽辛の類汁のたるもの箸の汚るゝもの喰ひにくきものはさみ惡き物鱠なとの高き
もの斟酌あるべし。
◎辛山椒など甚だからきもの匂ひあしきもの食ふべからず。
◎腰かゞめうつむきなどして食ふべからず口音たかく食ふべからず。
◎通ひの人を待たせおき汁を吸ひ出し又かよひ汁をかへて持いでたるを取つて直ちに食ふべ
からず、受け吸ひとてせぬことなり。
◎盃は酒を少し殘しよくしたみて其したみ口を左の剃指の腹にてぬぐひ又ははな紙にて拭ひ
てもよし扨人に達すべし、人よりうけたる盃久しくひかへ置くべからず、又は手に持ちながら
長話などすべからず。
◎常時の行儀は朝早く起き出て嗽ひ手水すべし髮結はぬ内、人に逢ふまじきなり、事により
逢はでかなはぬ事あり、さるに依て早く起て身じまいすべし。
◎客の來たるに遲く出てあふまじき事。
◎戸障子のたて明けあらくせまじき事、戸障子出入はたてゝある時は随ひて引くべし、あとも
そとたて置くべし、始めより開てある時は其儘明けをくべし。





◎人の手拭汗拭扇、楊子履物つかふべからず是も時によりてくるしからぬ事あり然れども返す時の心得あるべし、楊子は借りたるとも返すまじき也。

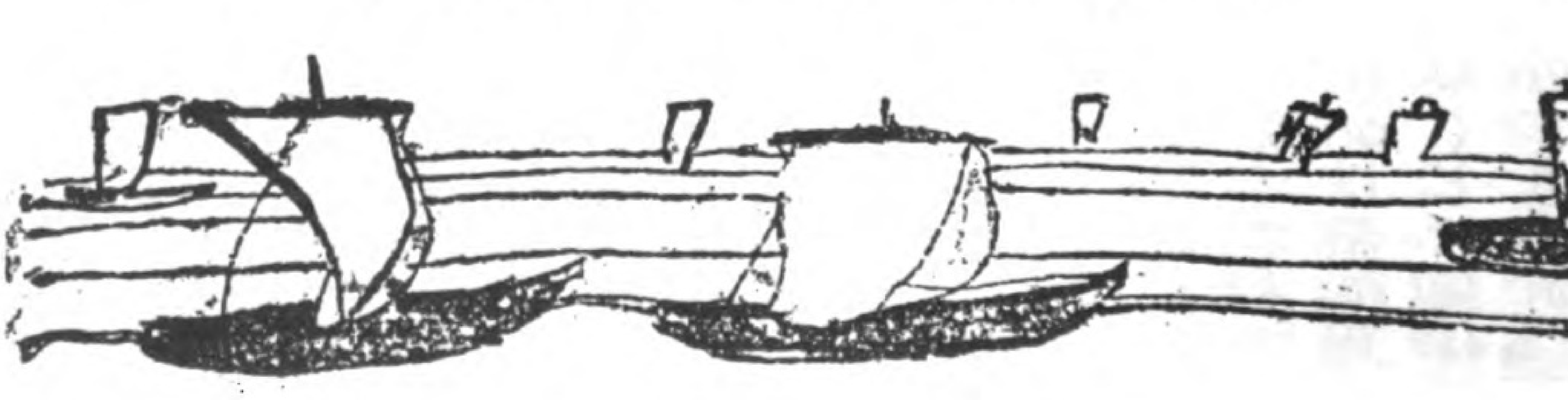
讀書のたのしみ

◎凡そ讀書の樂しみは、色を好まずして悦びふかく、山林に至らずして心閑かに、富貴ならずして心ゆたけし、此の故に人間の樂しみこれに代ふるものなし。天地陰陽を以て道の法とし、古今天下の事を以て心を遊ばしむる境界にして其のおもむき至りてひろきこと極まりなし、一日書を讀むのたのしみ至れるかな。聖賢のふみを見て其の心を得てたのしむは樂しき事の至りなり。

◎凡そ天の物を生じたまふ事二つながら全からず彼れ是れたらひぬるは稀なり。故にこなたを得れば、彼なたを失ふ、たとへば花うるはしければ實よからず、實よければ花うるはしからざるがごとし、又千葉の花には實なし、此の故に才學ある人は多くはまづし。

◎書をよみ字をうつすに、あさらけき窓、いさぎよき机、筆硯紙墨の精良なるを得て用ふるも亦人生の一の幸なり、この樂を得る者鮮なしと、蘇子美がいへるも書生は貧しき人多ければ斯くいへるなるべし。又貧しきは燈なし、むかしは雪に映じ、螢をあつめ、壁をうがちて書を讀みし人だにあれば今この六つの助けを得てたのしむ人はやゝ幸ありとおもひてつとめて書をよむべし。

◎四時に隨ひ、月花をもてあそび、をり〳〵の景物をめで、其のをりふしに叶ひたる、からのやまとの古き歌をすして心に樂しまんこそみづから作る勞なく、たはやすくしていとおもしろきわざなるべけれ。



月に對する趣味

飛雲閣

月宮殿裡の人々

あゝ美しき月よ。千春萬秋變りなき美しき月よ。そも〳〵それは何であらうか。今でこそは解し得られるやうになつたのであるが、昔の人達はこの美しい月に對してさま〴〵の想像を逞しくしてゐた。印度の傳說に依ると斯うである――月は吉祥善喜が造つたものだ。陰性の凝結つたものだ。その證據には氷晶の玉を月光に照すと水を取ることが出來る。月の中には美しい宮殿がある。四方の垣は七寶で造られ、天井や何かは白銀や瑠璃で葺かれてある。而して其處に住はせられてゐる主は、その壽命五百歲、何の病氣もなく、何時でも大勢の侍女と一緒に車に乘つては其處等中においでになる。誠に快樂極りない生活の御ありさま、これが月宮殿裡の人々の樣子であるさうな。

それから又支那の傳說は斯うである――月の中には嫦娥といふ美しい女が住んでゐる。いや嫦娥はすでに蟾蜍になつて了つてゐる。一體この嫦娥といふ女は何であるかといふに、往古支那で弓の名人だつた羿といふ人の妻であつたが、或日ひそかに良人が納つて置いた不死の藥を盜み出して月中へ奔つて行つたところが、やがて蟾蜍になつて了つたとやら。月のことを嫦娥といふのは此故である。

玉兎と桂樹

よく澄んだ月を眺めると、ほのかに薄黑いところが見える。古人は之を兎だとも云ひ、又桂の木だとも云つてゐた。それは斯うである。むかし帝釋天が老翁に化けて、狐と猿と兎との許にゆくと、狐は鯉を御馳走し、猿は果實を御馳走したのであるが、兎

月……………………210
宮　殿

ばかりは何も別に御馳走するものが無かつたので、それを苦に疾んだ揚句、自分の身體を火に焙つて、その肉を御馳走した。すると帝釋天は大に感心して、その奇特な志を永く後世に傳へるために、兎の身體を月中に置いたのであるさうな。これが即ち月中の兎の由來である。

月中に桂木があるといふのも矢張り印度から來た傳說である。それに依れば月中に高さ五百丈の桂の木があつて、その下に一人の仙人が佇みながら、切りに其枝を伐つてゐるが、いくら伐つても／＼直ぐ切口が癒合いて了ふ。それは此の仙人



が、元來下界にゐた時に過失をした爲めに、いつまでも此やうに罰を受けてゐるのだとやら。この傳說は夙くから我國に傳つたものと見えて、月の桂といふ言葉は餘程古くから言ひつへたられてゐる。藤原定賴の歌にさへ、

月の入る峰を
うつせる大井川
このわたりぞや
桂といふらむ

などゝ詠じてゐる。

四季の月

これ同じ天に懸る月であるけれど、四季に依つて大にその趣きが異つてゐる。春の月は宛ら少女の羞恥を含んで甘へるやうである。動もする

とホンノリ暈を着てゐるのさへ、何うやらベールを被つてゐるやうに見える。往時、業平朝臣が水無瀬の離宮で惟喬親王と酒酌みかはし、衣の袖かきあはせ、

飽かぬだにまだきも月のかくるゝか
山の端逃げて入れずもあらなむ

と詠じたのは、たしか彌生十一日の月であつた故、いかにも其夜の溫かい景色が偲ばれるのである。また、大江千里の、

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の
おぼろ月夜にしくものぞなき

は、假令白樂天の「不明不闇朧々月」といふ句を飜譯したものとは云ひながら、よくその景色を描し出してゐる。

夏の月は、春の月の其れに比べると、いかにも涼しく清明としてゐる。丁度年頃は稍〻老けてゐるが、眉を剃つた女の、却つて落着が見えたやうな趣である。よく錦繪などに描いてある牛若丸と辨慶とが五條橋で鬪つたのは、恰も六月十七日の夜であると云へば、その時の月は如何にも清く涼しく、彼の晃々たる刃に映じて、嘸ぞ美しかつたらうと思れる。昔からの多くの和歌の中にも、殊に源三位賴政の、

庭の面は未だかわかぬに夕立の
空さりげなくすめる月かな

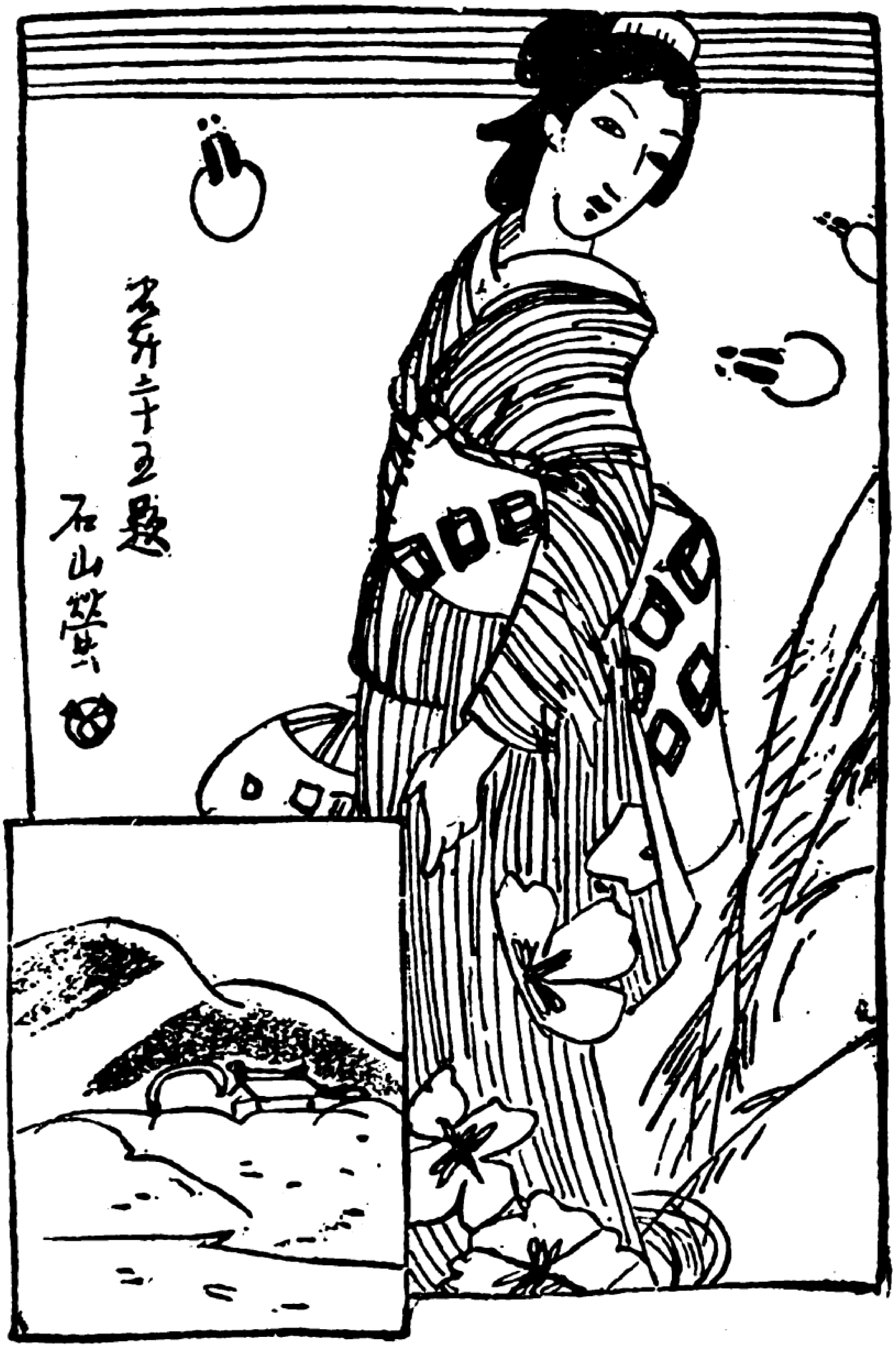
の一首が、最も涼しく淸らかな感じがする。

併し何と云つても月は秋のものである。金風しきりに吹いて、白露地に普ねき頃、明皎々たる月光に浴して水の如く流れる蟲聲を聞けば、英雄も、佳人も、皆な齊しく詩人になるのである。彼の仲國が寮の御馬に騎つて嵯峨野に小督を訪づれたのも、德大寺左大將が舊都の月に今樣を謠つて女房達の袖を絞らせたのも、皆なその頃のことである。菅公が筑紫に謫居して去年賜はつた御衣を捧持して泣いたのも、謙

信が軍營で詩を賦したのも、皆なこの秋の月に對してゞある。故に昔からこの頃の月を詠じたものは、それこそ數限りもなくあつて、何れを秀れたものと言ふことは能きぬけれど、源順の

池の面に照る月なみを數ふれば今宵ぞ秋の最中なりける

は、まことに然こそと肯かれて、いみじき歌の一つになつてゐる。



名所二十五題（石山）

冬の月は、昔から醜女の薄化粧したやうであると云はれてゐるが、實にその通りで、淋しさのほど、ひし／＼と身に沁みわたるやうである。かの靜御前が吉野山で義經に別

れた時、辛う雪が降りやむと思ふと、枯木の間から月がキラ／＼と射のぼつたといふが、あゝ其時の月はいかに悲しく、心細く、物すごくあつたらうか。唯だ何のこともない、藤原清輔の、

　冬枯の森の木の葉の霜の上に
　　落ちたる月の影のさやけさ

の歌を口誦さんでさへ、淋しい感じが犇々と胸を襲ふのに、あゝ俊寛は何んな心細い思ひをしたであらうか。

芋名月と豆名月

舊曆八月十五夜の月を芋名月、九月十三夜の月を豆名月といふのは、別に改めて云ふ必要もない。一體何時ごろから起つたことかといふのに、何れも平安朝の初期からである。支那では唐の世に盛んに八月十五夜即ち仲秋の月を賞してゐたと見えて、彼の玄宗皇帝などは、何時も楊貴妃と一緒に大液池の欄に倚つて十五夜の月を眺めてゐたさうであるが、やがて其れが我が國にも傳はつて來たのである。それだから十五夜の和歌は昔から非常に多く、殆んど枚擧に遑あらぬほどであるが、その中に斯ういふ珍しいのがある。

　月月に月みぬ月はなけれども
　　月みる月はこの月の月

これは或る女が十五夜に芋を箸に刺して、その穴から月を眺めながら詠んだのだといふが、右の歌には月の字が八つ、假名が十五あるので、丁度八月十五夜の形になるのださうである。

次に九月十三夜の月、それは一名後の月とも云ふが、これは一體如何いふ譯で起つたかといふのに、天道滿つるを闕くとの古語がある故に殊更に十三夜を選んだのださうであるが、果して何うであらうか、疑はしいものである。

秀歌と綽名

秀歌を詠んだ爲めに綽名を得た歌人は、昔から隨分多いけれど、こゝには唯だ月を詠んだ歌人だけを擧げて見る。源三位頼政の姪に丹後といふ女があつた。ある時、

忘れじの難波の秋の夜半の空
　ことうらにすむ月は見るとも

といふ歌を詠んだので、早速「ことうらの丹後」といふ綽名を得たとやら。又頓阿法師は、

月やどる澤田の面にふす鴫の
　氷よりたつあけ方の空

といふ秀歌を詠んだので、直ぐさま「澤田の頓阿」といふ綽名を貰つた。また正廣といふ人は、

小簾の戸にひとりや月の澄みぬらん
　ひごろの袖の涙たづねん

といふのを詠んだ爲め、直ちに「ひごろの正廣」といふ綽名を頂戴したさうである。

夜月の名

又、夜月の名も、一日の夜から三十日の夜に至るまで、それ〴〵その夜に依つて名が異つてゐる。まづ新月の極く細いころのは三日月といひ、七八日ごろのは弓張月又は上弦月といひ、十五日の夜月を望月と云ふ。それから十六日のをいざよひ、十七日のを立待月、十八日のを居待月、十九日のを寝待月、二十二三日ごろのを弓張月又は下弦月といふのである。又總じて下旬になると、月の出が遲い故、従つてその沒するのも遲く、夜がすでに明けても、なほ月は西天に懸つてゐる。かう云ふのを凡て有明の月といふのである。

夏引のいと離れえぬ契にて
　三日月すぎば秋の夜までも

奇婚風俗二十五種

月下氷人

（1） 三々九度の代りに顔を洗ふ

蒙古北部にある土民間の結婚は、頗る奇妙である。先づ花嫁が來ると、媒酌人に導かれて、佛前に座を占める。そこへ花婿が來る。之に續いて其日特に招待して置いた喇嘛僧は、頻りに讀經を始める。之が高砂の謠曲代り、其座の中央には、鼎の上に鍋を掛けて、湯をグラ〳〵沸して置く、お經が濟むと、花婿花嫁は其鍋の湯で顔を洗ひ、恭しく佛前に禮拜する、之が三々九度の式である。

（2） 多人數の中から探し出す嫁

琉球與那國島の結婚式は、風變りである。愈よ今日は儀式となると、島内の未婚女はズラリと濱邊に立並ぶ。すると花婿は、この群集の何處かに態と身を匿してゐる花嫁をばチークト見運した後、一直線に其處へ走り寄り、手を握つて群集の列から連れ出すのである。すると花嫁は花婿に先立つて歩き、他の群集は口々に祝賀の歌を謡ひながら新郎新婦をゾロ〳〵と其家へ送り込むのである。

（3） 棹を昇いで村内を練歩く

南洋サモア島の土人の結婚式は、花婿花嫁が一定の時刻を定めて村長の門前へゆく。すると村長は双方へ花環を贈る、花婿も花嫁もその花環を頸に掛け、手に棹を持つて、部落の一同へ披露に歩く、之で式は濟むのであるが、その後祝賀として、親戚友人が新夫婦に附き添ひ、唱歌しつゝ再び部落内を練つて歩く、之をウラと土語では踊へて居る。

（4） 祝盃の代りに服藥

馬來半島のピナン港附近では、未婚の男子が、此地にのみ生える不思議な奇草から製した藥を未婚の女子に飲ませるのである。その藥は丸藥になつて居る、女子が其れを承知で飲めば、こゝに婚約と結婚式とが同時に成立つのである、この丸藥は一種の催眠作用を有するもので、獻身的の愛情を生ずるものと、土人どもに思つて居る。

（5） 鬼ごつこする結婚式

同じ馬來半島でも、未開の部落へゆくと、面白い式がある。花婿花嫁は、一人の村老に導かれて、地上に畫いた大きな圓い線の上に

月……………………216

宮

殿

立ちならぶ、花嫁が先づその上を歩み始めると、花婿も少しく距離を置いて其跡から追つかける、それは決して形式的にやるのではなく、一生懸命汗しづくになつて線の周圍をグル／＼追つかけ廻すそして若し捕へ得たならば、村老は兩人に結婚の祝辭を述べるのである、かゝる習慣の行はれる所以は、男女の歩足が相匹敵して優劣のないものを選ぶ爲めである。

(6) 競馬して式を擧げる

中央亞細亞の土人の中に行はれる結婚式には、小説に似たやうなものがある、花嫁は先づ馬に跨つて疾驅すると、その跡を夫たるべき男子が矢張り馬に騎つて追駈ける、もし男子が追つかなければ、幾度かゝつても之を遣りなほすことが出來るのである而して辛と捕へられたら、花婿は花嫁を自分の天幕の内に連れて來るのである。



(7) 花嫁の着衣を裂く

西伯利亞の北方民族は、花嫁の逃げ出すのを、背後から追驅けて、その着物を裂く儀式になつてゐる、而して何うかすると時には花嫁の身體に怪我させるとは物騒千萬

(8) 隱れん坊する結婚式

北米南方に住んでゐるキリーパ人のは、婚約の成立つた日、花嫁は自分の家を遁げだして、或る場所に匿れて仕舞ふ、花婿は一生懸命になつて之を捜すのであるが、何うしても見つかなければ、あはれ其婚約が破裂して仕舞ふ、併し幸ひに捜し出せば、それが直ちに結婚の式となるのである。

(9) 花嫁が花婿の頭髮を握る式

ヒッピン群島の一土聖は、花嫁が花婿の頭髪を握つて、山林から部落まで伴れ帰るといふ奇抜な結婚式がある、その日花婿は山林に逃げこむと、花嫁が之を追駆けて、花婿の頭髪を攫つて部落へ帰り、その途中で人に逢ふと、花嫁は『妾は愛してゐる男子を征服した』と誇りがに叫ぶとやら。

(10) 象の背上で三々九度

印度河の上流、ヒマラヤ山脈と崑崙山脈との中間の或る部落では、象の背上で結婚式を行ふ、その時花嫁も、花婿も、各自に象の背上に沢山積んで来た家鴨を交換へ、自分達に従つて来た親戚どもに分配して遣るのである。

(11) 祝言の代りに褒紙を渡す

南洋ガーム島の土人は、婚約が成立つと、許々と椰子の葉を飾り立て、無数の紅い燈灯を下げ、大勢のお客を呼んで盛んに御馳走をし夜つぴてトバ酒を飲んで、唄つたり踊つたりする。そして翌朝新郎新婦は共に教会に行くと、僧侶に男女が夫婦になつたことを教會の門前へ発紙する、これはつまり誰れにも異存はないかと確める為めである。

(12) 祝言の代りに手料理

南洋フイジ島では、花婿の方から先づ手製の食物を贈る、すると花嫁は四日間外に出ずに美貌を暴らして暮してゐる、而して四日目に近所の婦人に連れられて海へ漁にゆき、家へ帰つて其料理をする、そこへ花婿が乗込んで来て、差向ひでその料理を食べるのが即ち祝言の盃なのである。

(13) 梯子乗りと鉢合せの式

ヒリツピン島の一部には、こんな馬鹿げてゐるのがある、花嫁は僅か十三四歳の小娘で、これが態と逃出さうとすると、花婿は態と怒つて追駆けて捕へる、ところへ一人の白髪の老人が出て来て、花婿を梯子の上へ登らせる、また一人の老婆が出て来て、花嫁を捕へ、一緒に梯子へ登る、老爺は梯子の前へ一羽の鶏と、水を盛つた椰子の實とを捧げる、一同梯子から下りる、男女が地面に額づくと、老爺は二人の頭を抱へて鉢合せをさせる、これで式が済むのである。

(14) 弓を渡す祝言の盃

錫蘭島の土人は、婚約が成立つと、花嫁の父は花婿に弓を贈り、花婿の父は其子に狩猟免許状を與へる、花嫁が弓を携へて花婿に渡すと、花婿は衣服と装飾品とを花嫁に與へる、之れで結婚の式が済む、それから新夫婦は森林深く分け入つて、新婚旅行ならぬ新婚

狩獵に赴くのである。

(15) 盃の代りに椰子の餅

南洋トラック島の土人は、先づ花嫁が山間の泉に往つて水浴する、すると遠方から花婿が聲を掛けて、女が服裝を着けるのを待つて、同じ泉で入浴する、其間に花婿の方の父母が椰子の實の餅を携へて、花嫁の家に往つて待受けてる所へ、やがて新夫婦が來て、共に餅をたふ、これで三々九度になるのである。

(16) 花婿の腹を撫でる儀式

新西蘭土附近の某島では、先づ婚約が成立つと、酋長の許可を受け、婿の小舎の前を式場とし、五月幟の如く、青草でつくつた異形の物を竿の先に突立て、其下で兩人互に一禮し、婿は嫁の腹を撫でるのである。蓋し女の腹は子の宿る大切な場所として、これを撫でるのは婦人に對する最高の禮式である。此式が濟むと立會人一同に、酒、魚、果物等を十二分に飲食し夜を徹して唄ひ踊るのである。

(17) 草履を頂く儀式

北米アラスカ土人には奇拔な風俗がある、いよ／＼當日になると海岸へ島民一同が、祭壇を設けて、整列する、其處へ祭主となつた男が、二人を連れて正面に來り、お經のやうな文句を聲高に演べる、群集は聲を揃へてそれに和する、此時新婦は新郎の前に跪づいて、祭壇を拜し、次に新郎に拜し　我が兩手を新郎の肩にかけて縋る樣にする、そして新郎の足から草履を脫がせて、それを我が頭の上に戴せて、二三歩下ると、祭主が手を擧げて唱へ事をする、それが濟むと未婚の女共は、新婦の頭上の履物をとつて、順々に各自の頭上に戴く、斯くして最後に又新婦の頭の上に其小履を置くと、新婦は二三歩進んで新郎の足に穿かせ、それにて式は終る、新夫婦は其場から手を携へて、群集に送られつゝ吾家へ歸るのである、此の奇妙なる儀式の理由を聞くと、拜むのは夫婦の誓で、手に縋るのに身を托する意味、又頭に草履を頂くのは、新郎の奴隷となることを誓ふのであるさうな、又未婚の女が其れを頂くのは、早く配偶が得られるやうにとの縁起だといふ。

(18) 頭に飾つた鏡の分配

獨逸の或る地方では、花嫁が自分の顏の十倍もあるやうな大きな花冠をかぶつて、婚禮の席へ現はれる、其花冠には無數の鏡が飾付けてあるが、新夫婦の握手の禮が濟むと、花嫁は花冠を脫いで、其飾付の鏡の中の、一箇の大鏡を花婿に捧げ、次いで他の小鏡を、列席した父母、親戚、故舊に分配する。此式の終つた後、酒宴

が開かれる。

（19） 花嫁を擔ぐ式

濠洲中部の土人間には、夜中花嫁の通行するのを、物蔭から婿が現はれて、小腋に抱へて己が家に連れ來るといふ殺風景な結婚法が行はれて居る、つまり花婿が、花嫁をして己が家の敷居を跨がせさへすればよいので、それで立派に結婚の式を擧げたことになるのである。野蠻丈に物騒な禮式である。

（20） 互に泣き合ふ結婚式

緬甸の附屬する或島には、奇妙な禮式がある、平日友人同士が出會ふと互にジツと顔を見合せた後、男も女も、オイ〳〵、ソイ〳〵と泣き合ふのが禮式となつて居る、結婚の時もさうで、新郎新婦は、互に設けの席に就き、ロイ〳〵と泣き合ひ、遂に双方が腕を相手の頸へ廻し合ふて、泣き叫び、泣き疲れた處で手を離すのである、扨て結婚して終ふと、二三十日間は、啞の夫婦同様、一切無言で暮すのである、不態な習慣ではないか。

（21） 手を拍ち鳴らす歡喜の式

濠洲の北端に在る一島では、結婚の時に、新郎新婦對座して、互に手を拍ち鳴らして、歡喜の情を示す、すると列座の者も之に和する、此拍手の式は、南洋の他の島民の間にも見受ける、尤も祝ひの時には、日本でもシヤン〳〵とか云つて手を拍つ習慣がある、それは扨置き此島民は、上記拍手の禮を交はした後に、椰酒などを酌んで、笑ひ興ずるのである、猶土人が自己の感情を現はすに嬉しい時に拍手する外、ビツクりした時には、口中へ指を突込む、『然り』といふの場合は、頭をツンと上へ上げ『否』の時は、鼻端をば右手の指で彈き、まんざら否でも無い時は、鼻の上を小指で徐々と摩で廻すのである。

（22） 不潔な迷信の盃

印度のパーシヤ人の結婚は、互に寶石を飾つた着物をきてキラキラした扮裝で式場へ來る、さて式の盃は、牛の排泄物で行ふのである、之は印度人は牛を以て神聖なる獸とし、牛の排泄物も亦た神聖なるものと信じて居るからである、それ故毎朝かゝる汚物をば、薬と稱して佛前に供へ、それを家内一同が飲用して居る。

（23） 芽出度き席に不祥の盃

臺灣の生蕃中のヴオヌ族の結婚式は、盃の代りに骸骨を用ゐる、新夫婦は、其骨の一部へ注いだ酒を、双方から吸取るのである、も

と此風習は、生首で行つたものであるが、今日では髑骨で満足して居るのである。

（24）「ハイ」の一語が夫婦の固め

印度カルカッタ地方の結婚式は、子供の間に行はれる。男兒四五歳、女兒三四歳に達すると、双方の両親が列座して、此無邪氣な新郎新婦に向つて、嚴格に夫婦の誓約をなすべく命ずる、其際双方が只一語『ハイ』と答へさへすればよいのである。斯くて眞に結婚せしめるのは、十歳内外である、其際は何の儀式もないのである。斯かる風習であるから、不幸にして許婚の夫が死んだ場合には、女は最早一生寡婦で暮さなければならぬ、之が印度一般の風習である。今其統計を調べて見ると、十四歳以下で人の妻となつて居る者が全印度で六百萬人、十歳以下のものが二百五十萬人、結婚後夫に死なれて寡婦となつて居る者が二千七百萬人、同十五歳以下の寡婦二十八萬人、四歳以下の寡婦が一萬四千人ある。是は實に印度の爲めに最も悲しむ



べき社會現象である。

（25）黒装束に襷掛の嫁御寮

伊豆の大島の結婚式は襷がけである。服裝は黒の無地の着物に、黒の前掛黒の帶といふ風、少しも平日と違はぬ、式の大體は少しも内地と異はぬが、高砂の謠ひ代りに、大島訛りの俗謠を謠ふ。それが實に平民的で、何の造作もなく式は終る。

△室町時代の結婚式▽

今日日本に行はれる様な禮式は主に室町時代に始まつたのである。此時代から結婚の儀式も改められたが、其後少しづゝの訂正を經て今日に至つた。この時代には女の家に行かず、女を男の家に迎へる様になつた。こゝに只一つ變つた事をあげると、女が我が家の門を出る時火を焚いた。是れは死人を送り出す時に門火を焚くのと同じく、一度我が里方を出たならば何時迄も歸つて來ぬ様にと云ふ意味であらう。

社交座右銘三十則

△人に交はるには貴賤と親疎によらず愛敬をむねとすべし、愛とは、人をいつくしみて、憎まざるなり。敬とは人をうやまひて、あなどらざるなり。人に交はるに、愛敬なければ、人我の間へたゞりて人倫の道行はれず。父母につかへ兄弟夫婦に對し、賓客に交はるも、皆、愛敬を以て心法とす。

△人に對するに、温和にして謙だり、おのれにほこらず、人をあなどらず、ことば少く、信實に愛敬ありてむかひよからんこそ、善人とはいふべけれ。

△人に交はるに恕を以てすべし。恕とは、己をおして人に及ぼすなり。言ふ意は、わが心を以て、人の心にくらぶるに、たがふことなし。わがこのむことは、必、人もこのめり。わがきらふ事は、必、人もきらへり、故にわがこゝろを以て人の心をおしはかるなり。

△人に交はるには自反をむねとすべし。自反とは、みづからにかへるなり、人をとがめずして、我が身に立ちかへりて、善をおのれに求むるをいふ。人我れにしたがはず、我にそむかば、わが過をせめて、人をとがむべからず。人に求めずして身に求むべし。

△凡人に交はるには、言もかたちも、禮をあつくすべし、人の言葉をとがむべからず。もしやむことを得ずして、人のあやまちを正さば、禮義を以て其道理を眞實にのぶべし。いかりて、言を過し、無禮をなすべからず。

△人我をそしらば、そしるものを咎むべからず。わが身にかへり見て求むべし。わが身に一分のあやまちあり、人われをそしる事十分ありとも、わがあやまりより起りしことなれば、恨むべからず。我があやまちを責むべし。

△朋友の間禮あつければ、あらそひなし、喧嘩口論に必無禮よりおこる。人に交はるに禮義正しく慇懃なれば、人と我との間滯なくして和らぎむつまじ。

△古語に和なれば、かたきなし、忍べば辱なしといへり。

△臍下三寸を丹田といふ。人の一身の氣を丹田にたくはへて、胸にあつむべからず、是れ氣をおさむるの良法なり。人に交はり、事に應じ、物をいふに、まづ、心

をしづかにし、又氣を丹田におさめて物をいひ、事をなすべし。是れ氣の本をたつるなり、本たてば、ちからありて道生ず。

△人に交はるには厚きをむねとすべし、厚しとは人をせめずして、我をせむるをいふ。この如くすれば我こころ和樂にして、人をうらみず、人も亦我をうらみずして、したがひやすし。人のあやまりをきびしくせむれば、子弟の輩といへども、うらみふかく、そむきやすし　況他人をや。

△世には愚なる人多し、世に交はるに我が道理を專らに立てんとおもふべからず。我に道理あり、人に非ありとも、人とあらそふべからず。

△明月の玉にも、きずなきことあたはず。過なき人なんぞ、今の世にあらんや、ひとの小過あるを見ての人をいやしみ、すこし短なる所あれば、言ひおとし、すてゝ取用ゐず、おろかなるかな。

△おろかなる人は、情こはくして、さとし難し、殊に移りがたし、かゝる人に對して爭ふべからず。我が身のふるまひだに、我がこゝろに協はざること多し。なんぞ他人のしわざ、わがこゝろに協はんや。

△人の生れつきは、各同じからず。得たるところあり、得ざるところあり、何事も人の身によきことそなはれる人なし。其人の得たるところを用ゐて得ざるところをせむべからず。

△不智不才の人といへども、必すぐれたるところあり智者はその得たるところをとりて、得ざる所をゆるす故に天下にすたる人なし。

△高位の人に對しても、其勢に屈しへつらふべからず。又品くだれる人に對すとも、あなどり輕んずべからず。

△人にまじはるに、おくり物を以てするは何ぞや。是心の愛敬を外にあらはし行ふ禮なり、贈物をもちゐざれば、心にある愛敬の誠を外にあらはすべきやうなし、贈物を用ゐるはこの故なり、是れ人に交はるの道なり。

△いにしへ神につかふるに、蘋藻のすゝめ物あり。是いさぎよき水草をもて、神にそなふるなり。はじめて師にまみゆるに束脩の禮あり。是、贄を持参して、師をうやまふなり。

△神につかへ人に交はるに、かくのごとくならざれば



其誠あらはれず。されど貧しき者は、貨財を以て禮とせず、ちからに及ばざる贈物をつとめて行ふにはあらず。

△人を知ること極めてかたし、謹厚なるやうにして和順なりとも其心信じがたし。剛直なる人は、和順ならざれども、かへつて忠實なり。

△およそ人に交はるに、其人をよくえらぶべし。其人の善惡見しりがたくば、まづ、このんで交はるべからず。彼より親しむとも、只こたへの禮をばつとめて、われよりはうとかるべし。

△さばかりよき所ある人なば、一のくせ、一事のあやまりにより一向にすつること、なしむべし。

△人の惡しきをのみ、咎めてわが身にかへり求めず、自からを修めざれば、怒りうらみなほくしてわがこゝろ和さず、人と爭ふこと繁ければ世に立ちがたし。わがこゝろにおいてもくるしみ多く樂なかるべし。身にかへり求むる工夫を專一になすべし。

△およそ、人に交はるに、其人よく物いひ、才はたらきて、我が心に協へりとも、其の眸子正しからず心術うたがはしくば、交りを深くすべからず。後に必、我が身の害となることあり。

△心あへば千里も相したしみ、心あはざれば隣家も往來せず、或は日々に對談しても其心をしらず、或は千里をへだてゝも、其人を相したふ。是こゝろの合ふと合はざるとによれり。世に心の合へる人稀れなり。

△人の譽、そしりを聞くこと、よく察すべし。譽むる人、そしる人、智なくして、人の善惡と事の是非をしらず、其上、私ありてわが氣にあへるをほめ、氣にあはざるをそしれば、善惡みだれて人をまよはす。かゝる人の譽、そしりは必ず信ずべからず。

△喜によつて、人に物をあたへ、賞を行ひ、いかりによつて、人をせめ、罰を行へば必、理にあたらずしてあやまる。喜怒の時、こらへて事を行ふべからず、よろこびも止み、いかりもやみ、常の心になりて後、事を行ふべし。

△事に處するはよく思案し、しづかに行ふべし。よく思案すれば、理にそむかず、しづかに行へばあやまちすくなし。

谷風間落つ鳥や百合の水香戀ふ　　禾水





能の女と芝居の女

文學博士　佐々醒雪

能の女は溫和な性格

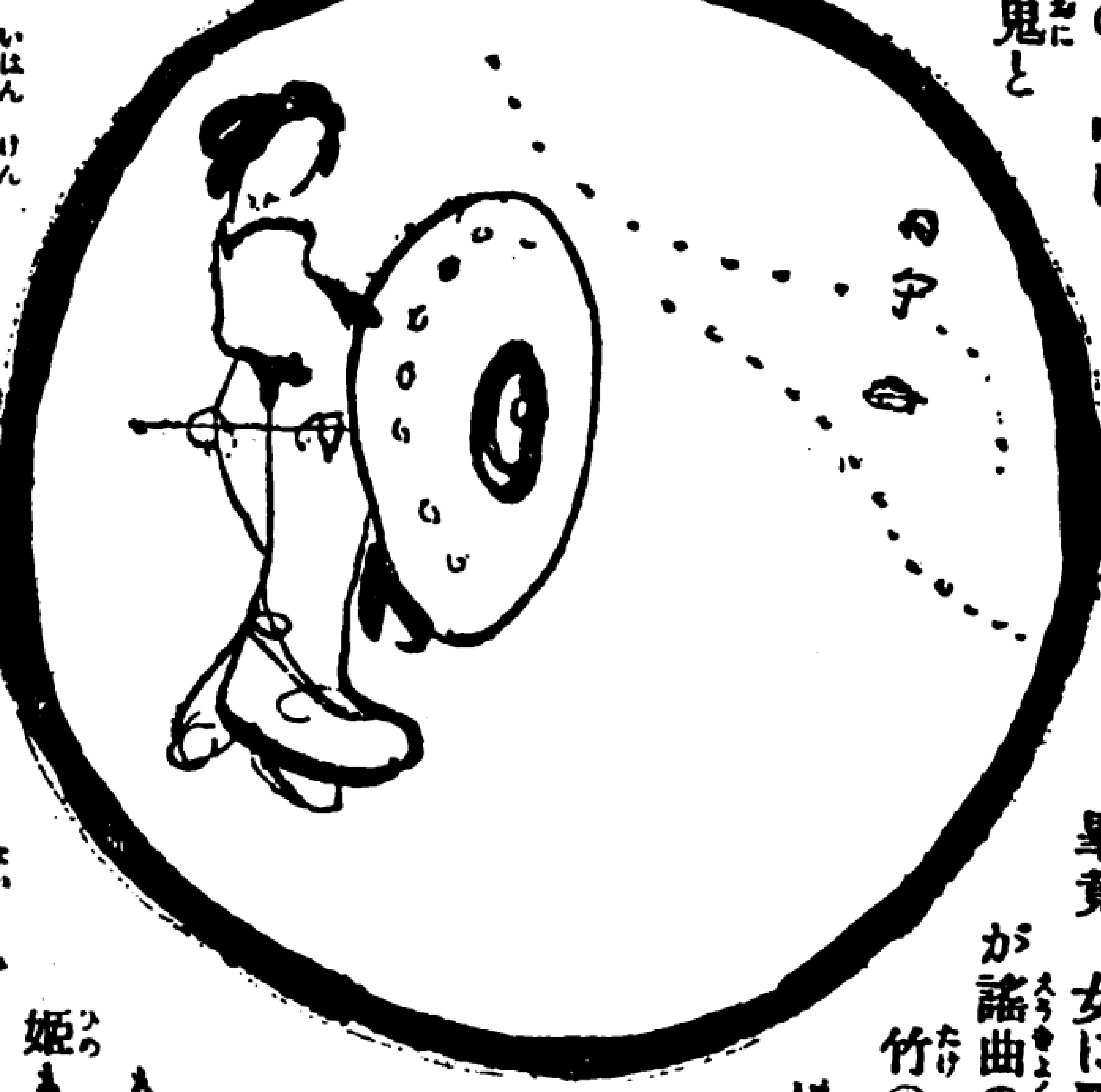
能の作者や芝居の作者が、女といふものをどう見てゐたかといふことは、多少興味のある問題ではあるまいか。

能は、誰も知る通りに、悉く男役者のみが勤めるものであるから、女に扮する場合には、必ず面をかける面なしに素面で女になるのは狂言のみである。されば、女の面は直に能の女の性質を表はしてゐるわけであらう。然るに、その女性を表はす面といふものには、孫次郎、萬媚、小面、增、若女の樣な、當代の美人が多數を占めてゐて、それ等は、總じて面長な、額が廣くて、細い眼の眼尻が少し下つた、優美な溫和な顏である。近江女といつて、少し眼尻の上つた面は、海士などに用ゐられて、身分の賤しい田舍漢を代表してゐる。その外に、泣增といつて、額に皺のある憂ひ顏のものや、曲見といつて、頰の少し瘦せたもの、深井と稱して、少し年增の女を表はすもの及び老女、姥の如き皺面などが普通であつて、强さうな女の惡漢を表はすものは殆んど見えぬ。唯泥眼といふ眼のやゝ丸い、髮のやゝ亂れたのが、葵の上や鐵輪の樣な怖しい女に用ゐられるのみで、眞に物すごい顏といへば橋姫、生成、瘦女の樣な鬼女や幽靈ばかりである。

この事實のみで見ても、能の女といふものが、概して優美な溫和な性格であるかといふことを明にしてゐると思ふ。且つその脚色から見ても、女を主人公にした謠曲は、必ず女が優美な舞を奏するかさらずば狂ひといふことを演ずるのである。而してその狂ひを演ずる物といふと、又必ず子を失つて狂氣したのでなくば、夫に別れ、又は夫の愛を失つて

月宮殿……226

氣がふれたのである。而してその狂女物の十の八九は、子や夫を搜し當てゝ、再會の悦びに終るのであるが、その芽出度く終らないものゝ中に、かの道成寺や鐵輪の樣に嫉妬の鬼となり龍となつたり、葵上に出る六條御息所の樣に生靈になつて女を苦しめたり、或は砧の樣に、戀ひ死に死んだ者の亡魂が浮びもやらで惱んでゐるものがあるのである。併し、それ等も皆、男を思ふ優しい心から狂ひ出た魂であつて、決して、男を尻にしかうとする悍婦もなく、他し男に契つた奸婦もない。況や權勢富貴を爭ふ樣な、後世のお芝居の惡婆風のものは一人だに見ないのである。



能の女に惡人がない

畢竟、女に惡人がないといふこと、これが謠曲の女の一大特長である。偶〻竹の雪といふ謠曲の繼母の樣に、繼兒に竹藪の雪を拂はせて凍死させる樣な殘忍な女は、能役者の役ではなくて、狂言の役である。從つて一寸舞臺に顏を出しても直に退場してしまふ。殆んど見物人の注意を惹く程の臺詞もなく、所作もしない。中將姫も繼母などになると、唯文句の中に見えてゐるのみで、全く舞臺へは顏を出さないのである。かく、女の敵役といふ者を脚色の中から除いたといふことは、女性に對する

謡曲作者の深い同情でもあらうが、併し又、一般に、女といふものが優しい者弱い者として認められてゐた時代思潮をも示してゐるのではあるまいか。

一體、謡曲には敵役といふものが尠い。男子であつても、立役に征服せられるのみは、多く、天狗か鬼などの類であつて、これ等の中には鬼女もないではないから、鬼畜魔性となると、男性も女性も等しく悪漢として表はれるのである。併し、男性には、例へば熊阪の様な、正尊の様な、草子洗の黒主の様な、關原與市の様な、鳥追船の左近尉の様な、様々の悪漢又は敵役がないではない。ことに、左近尉は主人の妻や娘に鳥追をさせて虐待する男で、丁度竹の雪の繼母の役であるが、それを流儀によつては能役者中の連といふ役が勤める。然るに、竹の雪の繼母の如き女性の敵役は決して能役者は勤めないのである。

強い女には滑稽の感

狂言の方は、殆んどそれと反對に、多くの女が悍婦か奸婦である。亭主が意氣地ないと云つて、無理に暇をとらうとする。亭主が他の男に言ひ負けたと云つて、腹を立てゝ、自分に亭主を引き連れて口論に出かける。甚しいのは弱い男を打擲するので、男の方が逃げまはるといふ騒ぎである。かゝる氣の強い女は、勿論、頭から滑稽に感せられて、狂言でなくては用ゐ得ないものと見做されてゐたのであらう。その貞操より見ても、謡曲には絶えて見えぬ墨塗女の様な薄情の妓女が描かれてある。これは或る大名が歸國せんとして、兼て親昵の妓女に暇乞に行くといふので、太郎冠者はその女の薄情なことを兼ねて知つてゐて、苦々しく思ひながら隨行する。やがて、女は、主人に別を惜しむ振を見せようとして、傍の鬢水入の水を頻りに眼につけてゐるのを見て太郎冠者が、竊にその中へ墨を入れておくと、女が空涙をぬりつける度に、顔中が眞黒に成るといふ滑

稽である。

かく能狂言を通じて見ると、惡女といふものは皆道外方になつてゐる。女の惡事は總て滑稽である。眞面目な手強い敵役にはなれないといふのが、(少くとも鬼女や惡龍に化けない限りは）謠曲時代の作者が、女性に關する觀察の結論であると見なければならぬ。



足利期は女の弱い時代

平安朝には、源氏物語の弘徽殿の大妃がある。大妃は實に源氏物語中の最も力強い敵役である。落窪物語にも、頗る頑固な繼母の惡婆がある。武家時代に入つても有髯男子を飜弄する。所謂る傾城傾國は屢〻描かれた。その夫が自分

の任國へ携へ返らうといふを嫌つて、身替りの老婆を、夫からの迎の駕籠に入れてやつて竊に自分は情夫の家に隱れた。橫着者、菊亭殿のお才の方も太平記に見える。深い親昵の佐藤忠信が忍んで尋ねて來たのを、賴朝方に訴人して出た薄情女も義經記に見えてゐる。謠曲が女の敵役を書かなかつたのは、かゝる女を知らなかつた爲ではない。唯そんな女を劇に仕組まなかつたのが、時代思潮である。男に致される女が滑稽に見えた。否々、男に勝たうとする女までも滑稽に見えたのが時代思潮である。

　これを今日の時勢から見れば、「慰に女房の意見聽いてゐる」といふ樣な男は、淑女を侮辱したものである。併し、古はかゝる男が男らしいのであつた。前句附に「猫撫聲で女房ども」といふのは、昔は野呂間の標本であつたが、今ではこれがスキートホームの理想である。かく時代の變遷する、足利期は女の弱い時代であつたのだ。

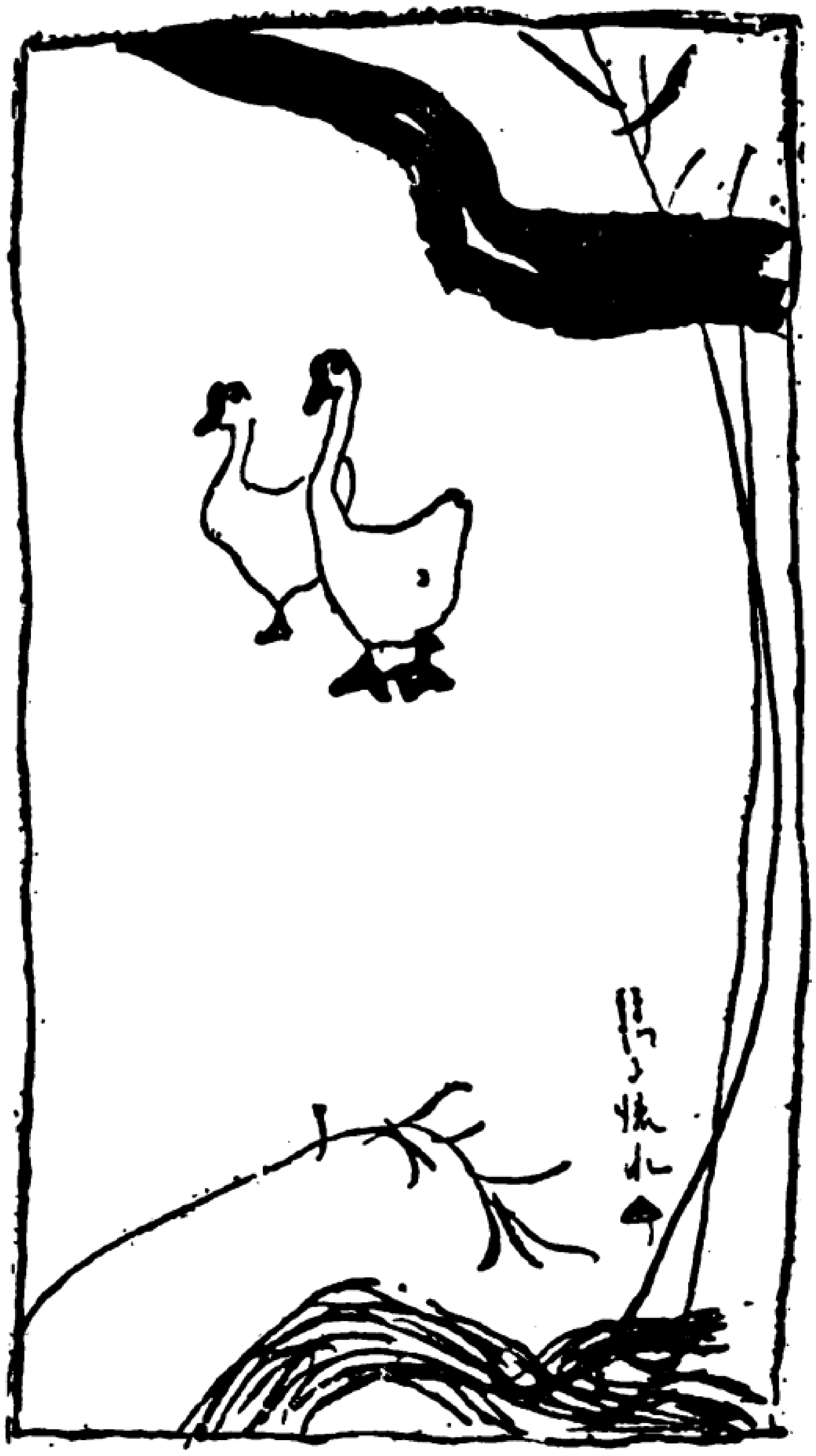
　德川の初期に盛になつて歌舞伎狂言に、謠曲と同じ傾向、即ち女の敵役を作らないといふ傾向があつたといふことは、或は耳新らしい人があらう。啻に初期のみではない。元祿享保にも、女形の敵役といふものは、番附にも評判記にも絕えて見えてゐない。

歌舞伎の女の役

　抑、歌舞伎といふものは、女の太夫の舞を主として、これに男の道外方の滑稽な所作を加味したものから起つたのである。だから、當初には、美しい女と滑稽な男とのみで、能の三番物即ち女の舞の中へ時々間狂言が飛び出して惡巫山戲をするといふ風のものであつたらう。それが進んで能を俗化した樣な八島、曾我、自然居士などと進化した時代までは、大體、能と同樣の脚色であつたと見てもよいのである。

併し女歌舞伎が禁せられ、女の役も男が演ずる樣になれば、女にも敵役が出來さうなものである。殊に、徳川の初期には、能の狂言師から歌舞伎役者になつた者が多いし、從つて狂言を改作した脚本も多いのであるから、強い女も惡い女も出て來さうなものであるのに、全く是れが見えてゐない。

唯女形の中に繼母といふ役がある。併し、これが悉く竹の雪や、中將姫の繼母の樣な繼子呵責めのみを演ずるといふのではない。唯年増女の役といふことで、後世の華者形に當るものである。だが、その中には、能の繼母の樣な敵役を勤めることは勿論ないではなかつたから繼母役といふ名もついてゐるのではあらうが、それが皆頗る輕い役で、ことに十の八九は半道即ちお道化た敵役である。決して仙臺萩の八汐とか加賀見山の岩藤とか、鬼神のお松だとかいふ怖しい強い敵はなかつたのだ。否々、その頃には明鴉の遣手程の手強い照婆も未だ演ぜられなかつたのである。



加之、その女形といふものが、悉く道德上立派な女で、必ず立役や若衆形の味方でなくてはならぬといふことになつてゐたのは、頗る不思議な程である。

元祿の女形の開山ともいはれてゐる芳澤あやめといふ役者は、決して貞操を汚す女は勤めないといふ

ことを誇にしてゐた。その弟子に對しても、女形から脚本の訂正を要求すべき第一の箇條として、女形に若し不貞な所業がある様な仕組であつたら、必ずその僅に演ずるなと敎へてゐる。

男には立役と敵役と相對立してゐる。女は善人ばかりであるといふのは、奇妙にも謠曲と同じ形である。すれば、この理由も亦謠曲と同じではあるまいか。元祿享保には、やはり、意志の鞏固な、敵役となるべき女が、實際上にも乏しかつて、女の惡人は多く滑稽に見えたのではあるまいか。

天明頃の理想美人

元祿には、西鶴が寫實の筆によると、白刄の下に投節を唄つて情夫の膝を枕にしてゐる様な女もゐた。併し、これは意志の強い敵役ではなくて、感情に激しく盲目的になる女である。容易く心中する女ではあるが、周密な計畫を立てゝ、お家を覆さうとする女ではない。喜代三のお七である、あやめの無間鐘である。梅幸の富浦とは氣質が違ふ。かう思つて、元祿享保期の浮世繪を見ると、西川祐信などの顔は著しく下膨れの、温かい感情的な顔で、決して意志の強い顔ではない。何處となく温和なところが能の面に似てゐる。

これを、安永天明以後の歌麿や國貞などの瘦ぎすを、眼尻の上つた、多少險のあるともいふべき意氣な顔に比して見ると、その時代の理想的な美形に自ら變遷がある様に思はれる。意氣といふのは偏に感情的なといふことではない。時と所によつては男子にも負けない意志のあることである。かゝる好尙で女を描き出す様になると、自ら意志の強い敵役をも女の中から描き出さうとする傾向をもつて來るのではあるまいか。

女の強くなつた時代

傳ふる所によると、女形の立役といふものは、加賀見山の岩藤が初であつて、それから後、時鳥の百合の方とか、近くは緋櫻の富浦などを一座の立者が勤める樣になつたのであるから、近く天明以後に初つたことである。それより先に、路考菊之丞慶子富十郎などの女形の名人が輩出して、從來立役を演じてゐた、鳴神とか、工藤とか、草摺引とかいふ藝までも、强ひて女形が演じたことも、女形をして立役たらしむる一原因であつたであらう。且つ、女優時代はいふまでもなく、若衆歌舞伎といつて、男娼めいたものが芝居の立者であつた時代には、熱心な見物は多く男であつた。然るに、女優や若衆の登場が禁ぜられて、芝居が漸く女のものとなり、女客が土間の牢を占めるに至つては、脚色にもなるべく女を主としたものを用ゐる樣になるのは當然である。かの仙臺萩の御殿場に、女たる者を禁じたといふ筋を立てゝ、故意と女性ばかりの舞臺を見せる樣なのはそのころに著名なもので、かゝる傾向の重なるに從つて、女の中にも强い惡人が出て來ねばならなくなつたのであらう。

　さもあれ、一面に、女の意志の强くなつたことは享保以降、ことに目に立つ樣に思ふ。世が戰塵に瀆されてゐては、腕節の强からぬものはどこまでも弱者である。泰平久しきに涉つては、天下の實權を左右するものは屢〻纖手の力である。上には、黑鍬者の娘が大老職をさへ蔑視する世の中に、女にも謀叛心がなからう理由はない。して見ると、樣々な副因はあるにしても、かゝる脚色もやはり時代思潮の反響を出でないのであらう。ノラやマクダの樣なすさまじい女の芝居を見て、そゞろに進み行く女の世界に怖れつゝ、その辿つて來た昔をふりかへつて見ると、僕もシユッチユ黨に味方したくなつた。

百合畑のこの館裏も半富士　　碧梧桐



二十五年前青年の間に愛讀された小說

（惨風悲雨世路日記の一節）

東溟晨曦を孕んで斷霞紅を帶び、蒼海波平らかにして宿霧漸く散ぜんとす。幾群の白鷗は潮流に隨ひて輕く水面に上下し、數艘の漁舟は櫓歌を和して遠く沖より歸る。時維れ午前六時なり。久松菊雄は早起已に我が居を掃ひ、其座に就く時に校奴來て茗湯を進む。菊雄取て而して之を喫すと雖も、顏容大に平素に似ず、怏々として甚だ快らざるものあるが如し、菊雄は獨り昨夜の奇夢を想起し、胸裏私かに以爲く睡夢は神經の作用にして、空漠固より取るに足らずと雖も、深く精神の感する所、或は一夜の夢に入りて以て其容貌を彷彿の間に見ること無しとせず。彼の夢と知りせば覺めざらましをこの恨みを發起せしむるに到れるものありと。彼を想ひ是を思ひ、疑念百端思想繽紛、心緒亂れて糸の如く自ら其の決する所を知らず、時に柱頭の時器鏘々として七時を報じ、已にして上校の生徒又敎場に充つ、因て菊雄は其衣を更め、出て而して授業の事務を執れり。

殘陽西嶺に沒して餘光赤く海波を彩り一天雲收つて暮禽漸く林樹に歸らんとす。時已に午後第六時なり、久松菊雄は終日精神の疲勞せるを醫せんが爲め校舍を出でゝ海濱に到り、獨り岸頭に佇立して暫く四方の景色を眺むる際脚夫會ま一翰を齎して來たる者あり取つて而して之を閲すれば、豈圖らんや、松江タケ子より送れるの手書なり。菊雄は心中稍驚くものありと雖も之を顏色に出さず、只厚く脚夫を勞し、遽はしく入つて緘を展らき讀み來れば其の文に曰く。

月…………………………234

宮

殿

虔て尺素を呈す。分袂既に八閲月、全く芳顏を拜する能はざる事殆んど此に二百十有餘日り、尊體近ごろ恙なきや否や。妾一び師に別れてより、留來愁雲胸間に滿ち、憂霧心頭を鎖し、朝餐の食ほ下らず花の爛漫たるも憤を消するに由なきのみならず之れに逢ふて却て前日を追懷し、之を見て却て往事を想起し、爲めに双袖をし



て空しく濕然たらしむるの一にして足らざるなり。而して妾茲に一の伏して師に請はんと欲するものあり。頃者妾が父母未だ之を妾に告げず、私かに妾をして他に嫁せしめんとす。妾初め之を知らず、一び聞て驚愕の至りに堪へず。固より妾が箕帚を奉じて、畢失所夫と頼むものは、只一の師あるのみ、不慈の双親未だ妾が心事を察せず妄りに妾を他に嫁せしめんとす。抑壓も亦極まれりと謂ふべし　是を以て妾偏に焦心苦慮、事を處するの道宜しきを知らず、只願くば一たび師に接して以て妾が滿腔の悲哀を訴へ、師の明断を仰ぎ請ふて以て一身の方針を定めんと欲す。然りと雖も數里の長途單身自ら到る能はず妾が心緒の切なるや一片紙の能く盡し得べき所に非ざるなり、加ふるに文辭拙劣、前後錯亂せり。請ふ幸ひに推讀せよ。書して此に至れば、紅涙千行又言ふ所を知らざるなり。時下寒進冀くは自愛せよ。

月　日　　松江タケ

久松菊雄様

と之を一讀し終るや菊雄は只茫然と叉手するもの良久し矣、菊雄はタケ子が手書を巻舒幾回漸くにして之を收め、胸裡熟ら以爲らく、嗚呼昨夜の奇夢こそ、是れ全く今日に此書を見るの兆なりき。然るにても憫む可きはタケ子の身上なり彼れ一び予と袂を別ちしより、獨り堪へ難きの愁苦に堪へ、忍ぶ可らざるの憂愁を忍び日夜悲歎措く所あらざるの悲境に在る可し。今にして余之を慰諭する所あらずんば、悪んぞ人に信ありとせられんや、昔者尾生橋下に溺死す、行ひ過ぎたるを笑ふ者ありと雖も、是れ未だ人の親意を知らざる者なり嗚呼タケ子の難此に及ぶ。豈默して等閑に附するを得んや、今若し猶豫して速かに之を救はずんば、或は轍鮒を枯魚の肆に問ひ、蕉鹿を肉俎の上に惘むの悔あるも知る可からずと菊雄は意中私かに志を決し獨り悵然として叉手低回するもの良久し、時に山寺の鐘聲遠く暮を報じ、一室の中稍昏朦たり、此に於てか菊雄は校奴を呼び命ずるに點燈の事を以てす。



女の容姿美――と夏の句

啞　蟬

晩春初夏といふやうな蕭みりした心持が、私共の詩境から次第に強烈な夏の氣分に移つて來た、雲の姿、水の色それだけにすら強い光熱が漲つて見える、濃い色調も加はつて來た。

水無月の水より嬉し君が顔　作　良

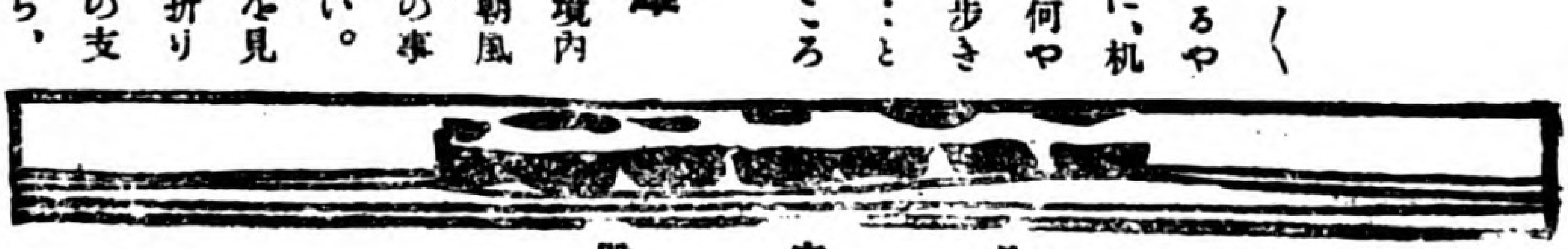
この句には「寄水戀」といふ表題がある。六月は水の乏しい月で、身體が汗みどろになるやうな暑さに、その乏しい水の僅かでも手に入れて、一時の涼を取る――その嬉しさよりも、女の顔の晴々と美しいのが、暑さに徹へた時だけに、猶更ら水際立つて目を引いたといふ句意である。「水無月の水より」が、透きとほる玻璃器に滿々と張つた清冽な水を思はせた上に、洗ひ上げたやうな女の顔立をも想像させる。水の乏しい月に得た一滴の水の嬉しさが、他の多くの女に立勝つて際立つてゐる女の艶やかさ水々しさによく働いてゐる。

氣の重き妹が顔吹けあな嵐　梅　東

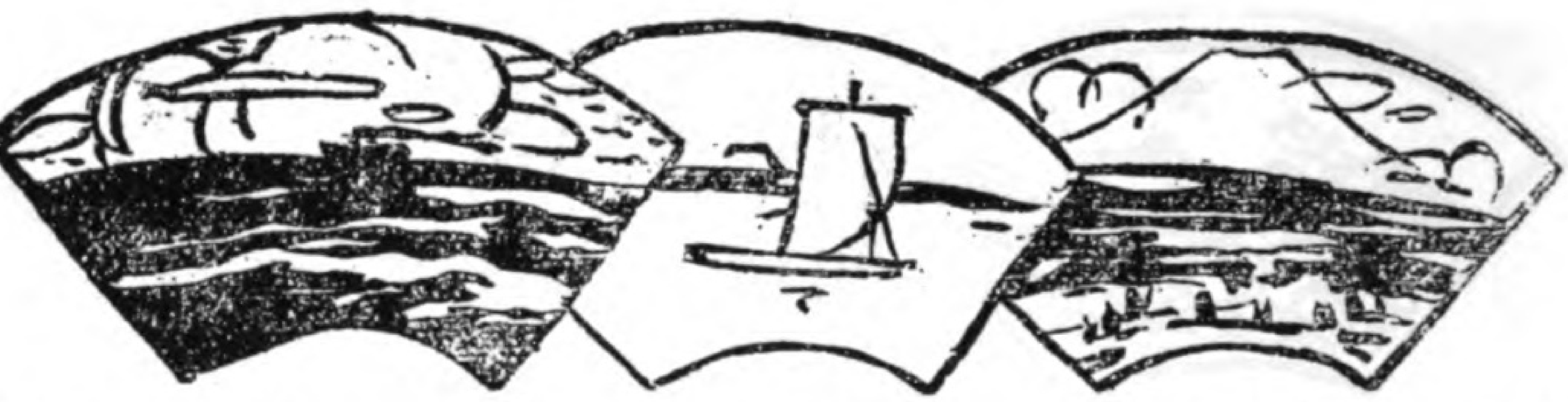
綠のやうな葉裏〳〵を飜して、前栽の木立に渡る青嵐が、甘い若葉の匂を座敷の奥に吹送つてくる。サラ〳〵と戰ぎ立つ木の葉を見てゐると、胸がスーツと開けるやうな心地好さ。ふと細目に開いた離房の障子の陰に、机に肘突をした女の姿が見える。一室に垂れ籠めて、何やら物思はしげな素振をしてゐる。些とは庭のそゞろ歩きでもして、この爽快な青葉の風に吹かれて見たら……と露骨に云つて了はないで、「吹けあな嵐」と咏嘆したところに、更らに強く青嵐の爽やかな氣分が出てゐる。

鐘撞の妻に勸める夏花哉　白　雄

鐘撞は寺の鐘樓守に解するのが好い。閑かな寺の境内に、まだ朝陽の射さぬやうな頃だ。鐘樓の下徑に、朝風に揺れて夏の花が一輪咲いてゐたといふよりも、寺の事だから、罌粟の眞赤な花圃のある所を通る方が好い。鐘を撞いて歸つて來ながら、露に濡れた美しい花瓣を見ると、一枝欲しくなつて、袖をピッショリ濡らして折り取つて來た。僅た一間しかない番小屋では、妻が朝飯の支度をしてゐる。鐘撞はその顔を莞爾と見て笑ひながら、



月宮殿……236



花の枝を默つて手渡しをする。妻は嬉々と裏口に出て、水の絶えず滿ち溢れた筧の中に浸して置く――その中本堂の方から、朝の看經が聞えてくる。涼しい夏の花と、浮世離れた鐘撞の生活とに、非常に微細な觀察がある。その一輪の花が、常々鐘撞の丹精して造つた花で、折取つて來て妻に與へるといふ事にも、美しい夫婦の情が現れてゐる。

帷子や帶もさせずに風が吹く　杜若

もう外出をするのに帷子を着る頃だ。樟腦のプンと薫るのを取出して、着換へやうとすると、吹き通しの部屋一杯に涼しい風か這入つて來て、帶を廻はす事も出來ない。「帶も」のもが、如何にも風の威勢の好いのを示してゐる。恥含みながら衣服を掻合はせやうとする女の光景が目に見えるやうである。

短夜や暇賜はる白拍子　言村

何朝臣の館に集會がある。その興を添へるために美しい白拍子が召出されて、舞つたり歌つたりしてゐる。その中にしら／＼ともう短夜が明けかゝつた。で暇を賜はつて歸つて行くと云ふので。夏の夜の明け易いといふ感じが、白拍子の舞に興の盡きぬ、その時代の武家達の酒宴を思はせて、漸やく感興の醒めかゝつた時分に、酒も盡き、一夜の歡樂も終りを告げる――そのガツカリした倦なげな、一座の空氣が面白く出てゐる。

配膳に女の多き暑さかな　完來

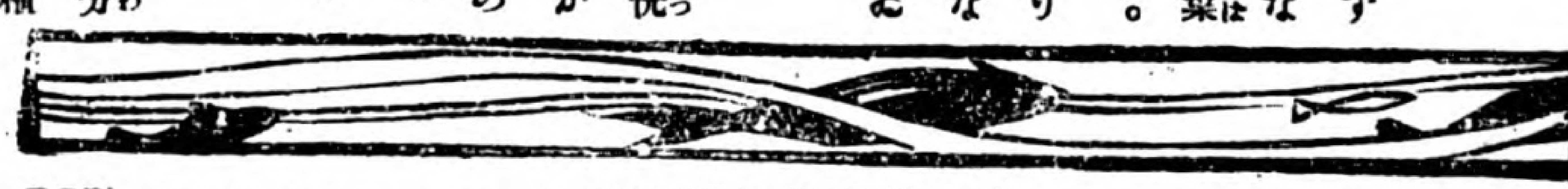
家に祝ひ事か何かゞあつて、客を聘ぶ。それが殘らず揃つたところで、奥の間に膳部が運ばれ出した。障子などはすつかり開け放つてあるけれど、「配膳」といふ言葉で人數の多い事を示してゐるから、猶暑さが身に徹へる。ところが又膳を運ぶのが皆な女なので、入れ替り立替りぞろ／＼這入つてくる。中には肥滿つた女の目障りになるだけでも暑苦しい。顔を外向けて團扇で風を入れてゐる客の姿さへまざ／＼見えるやうだ。

似合はしき　思ふ身の夏書哉　蓼太

未だうら若い處女か、只だ大空に漂ふ白雲のやうに恍とりとして、自分の聟となる人を心に浮べながら、何がなしに筆を動かしてゐる。それには自分の識つた限りの男の面影を、あれこれと數へ出してゐるかも知れない。その句法に些しも無理がなく、「似合はしき聟思ふ身の」と事もなく詠み出したところに妙味がある。

早乙女の見に行く宮の鏡哉　言水

早乙女とは田植に出る娘を云ふ。生温い田の水を掻分けて、紅い紐の菅笠を冠つた娘の群れが、一巡早苗を植





る絡るのが、丁度お午に近い頃だ。畦で辨當を濟ませると、その中一人二人抜け出して、田圃の中の森に出掛けて行く。森にある小やかな村社には、半ば瘻すりと剥げた奉納の額が、拜殿の横にかゝつてゐる。娘はそれを目的に行くと云ふのである。「見に行く」は自分の姿を映して見る、それを云つたものだ。面白いところを覘つた句である。

象潟や雨に西施がねぶの花　芭蕉

この句は想像的である。象潟は地名、水際には白粉刷毛のやうな、合歓の花が薄紅く咲いて、水草のヒメヒメと搖れる水面を、ほつ〳〵と靜かな雨が降つてゐる。そこで、此の場面に支那の名高い美人を點出したのである。西施は呉王の愛妾で、姑蘇臺にゐて遠山近逸の絶景と美食とに飽いてゐた。で、雨の煙つた沼の眺めからうつら〳〵と晝寢をしてゐる西施の面影を描き出したのである。「雨に西施がねぶの花」は、合歓といふ言葉と睡るとが掛かつてある。沼、雨、合歓、そして美女西施、それらの取り合せが非常に巧みに働いてゐる。

我戀や口も吸はれぬ青鬼灯　嵐雪

青鬼灯の實る頃に、處女の身でなくなつた女の述懷と見るべきである。青鬼灯は、未だ口に含んで鳴らす譯にいかない、自分もこんな處女時代があつたと、青鬼灯を見てつく〴〵昔を偲ぶところに趣きがある。「口も吸はれぬ」の中七字が、青鬼灯にしつくりと適合つてゐる。

夕顔や人待つ女見つけたり　也有

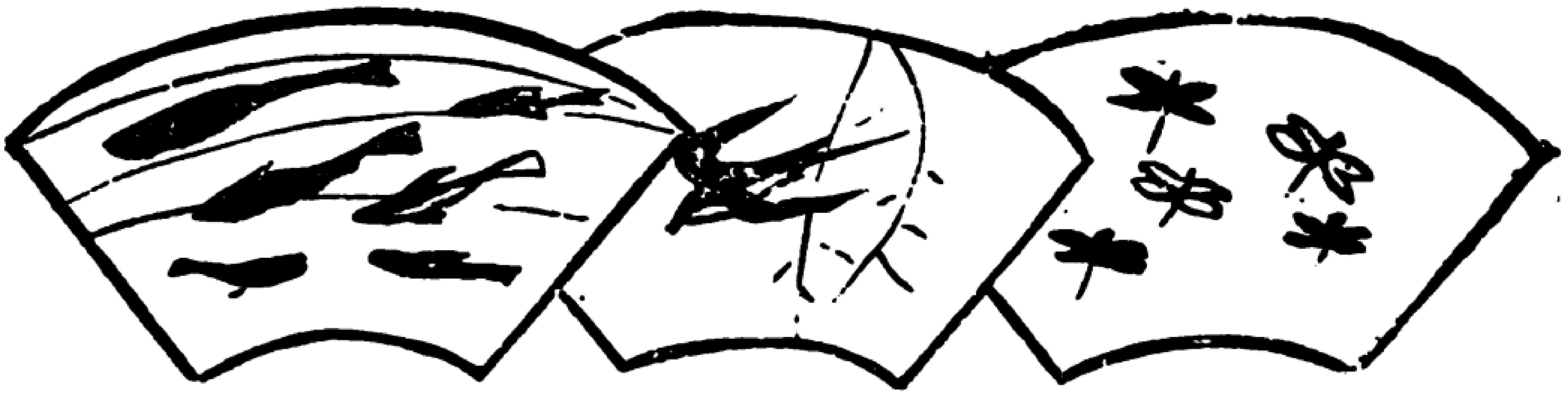
夕闇が、漆のやうに地上を這つてゐる。風に吹かれてそゞろ歩きをして來ると、もの蔭にふと人待ち顔な女の姿を見つけ出した。その句意に「夕顔」が旨く利いてゐる「見つけたり」と率直に云ひ放つて、自づから大輪の夕顔の花を思ひ浮ばせるのが、夏の夜の趣に適つてゐる。

はした女や歌ほしげなる白團扇　曉臺

はした女は、素生の卑しい女を云ふ。その女の片肌脱ぎか何かで縁側に團扇を持つて涼んでゐる。その團扇には何の畫書もしてない。惡どい色彩の繪も書いてはない。アッサリした純白の團扇である。それが眞つ白であつて初めて人柄が奥床しく氣高く見えるのだが、女の顔色には、何うやら畫書の歌でも欲しさうだ。何故だらう、眞つ白だから好いではないか――と、作者が、慨嘆したのである。斯ういふ説明的になつた句は、得て理窟に陥り易いけれど、その弊のないのは有繋に此の作者である。

若竹や橋本の遊女ありやなし　蕪村

淀川縁の橋本は、昔から名高い遊女町であつた。上り



下りの百石船の船着場だ。その途りには八幡から掛けて竹藪が多い。竹の翠が明るく水岸に射す頃、船で此處を通つて、ふと遊女を思ひ出したのである。あの女は、今でも健やこかに暮してゐるだらうか。浮川竹の身だから今ではもう何處かへ流浪してゐるかも知れぬ。こんな風に考へて、綿々と昔を思ひ浮べてゐた。この場合に「ありやなし」と云ふ業平東遊の歌調が、旅から旅と云ふやうな身の愁をそゝるのに非常に力強く、そして懐かしみに富んで響く。

煽ぐにもあらで女の扇かな　麥光

暑い日だ。見てゐるとこの暑いのに着飾つて、キチンと行儀よく坐つて、扇を使つてゐる。それが如何にも愼ましやかに有る無しの風を起してゐるに過ぎない。もつと強く、パタパタ煽いだらよからうに――それでは煽いでゐると云ふでもないと、傍から憖う思つてゐる。其處を詠んだ句だ。この「女の扇かな」が面白い。相手の一人の女を指したのだから、廣い意味の女に取ると理窟張つた觀念的な句になつて了ふ。

起きて見つ寢て見つ蚊帳の廣さ哉　千代

この句は、女性が詠んだのであつて、猶面白く感じられる。散文などでは到底も云へないやうな和しい心持が流露してゐる。昔からこの句は、良人が亡くなつたその當座、一人寢の蚊帳が廣過ぎて、寢て見ても起きて見ても、仍且自分一人には廣いと云ふ、作者のその時の眞情を詠んだものだとして名高い。その解釋が好いに違ひないらしい、若い未亡人の心持が如何にも危な氣なしに讀む者の哀感をそゝらしめる。

女小式部も小町も抜けし茅輪哉　大江丸

茅の輪は、茅萱で大きな輪を造り、それを潜るのである。然うすれば、諸ろの疾災を免れると云ふ風習になつてゐる、この句の「小式部も小町も」は、別に内容上の意味が添つてゐるのではなくて、單に言葉の面白味でそれ等の女を持つて來たのである。又實際、老幼男女さまぐの人が潜る中に、若し小式部や小町が交つてゐたら面白い事だらう。それは兎に角、作者が茅の輪潜りを見ながら、中に美人が一緒に潜つてゐたのを、さしづめ小式部や小町に見立てたのだとしても面白い。

夏川や笊抱いて行く女　史更

その笊に入れたものは何だらうか。未だ朝露に濡れたまゝ胡瓜や茄子だらうか。それとも海近く川の水が汐に交はるあたりの沙道で、貝類などを入れて持つて行くのだらうか。こんな風にいろいろの聯想を呼び起させる。



涼しい川の瀬音が、よく茂つた夏草の間に聞えるやうな田舎の堤道を、是から町にでも賣りに行く女の姿が、淡淡とした一句の中にハッキリと見えてゐる。

我につらく起きて蚊を焚く君が顔　几董

蚊帳の中に蚊が這入つたと云ふので、妻は起き出して蚊を燒いて廻つてゐる。それが恐しく一生懸命で、自分の事なぞは忘れて了つて、その事ばかりに掛つてゐる。それが如何にも自分にはつらく訴つてゐるやうに見えるこれを露骨に詠んで了へば、何の餘情もないのだが、「君が顔」と穏和しく云ひ切つてゐるので、よし自分には辛いとても、又無理もないと云ふやうな氣分が巧みに現はれて居る。

夏痩と答へて跡は涙かな　季吟

恁ういふ句の内容は陳腐である。けれ共そこに何人もこの感じを眞情の現はれだとして頷くに違ひない。甚く頬が瘦いて目元もゲッソリ落窪んでゐる。何か病氣なのかと問かれて、その小さな胸に疊まれてある思ひを、明明白に云ひ出しもされず、小聲で夏瘦せのせいだと答へる樣の女ごゝろ。その慎しやかさ、遣る瀬なさ、思はず涙がホロリと膝に零れる。面瘦せのするほどな心の想ひそれを表面に云はずして、「跡は涙かな」と包み隠してゐる。「涙」は言葉もないと云ふ無に掛けた陳腐な縁語だけれど、それすら優しい情味を催さしめる。

掛香や心ときめく行違ひ　卯七

道を歩いてゐて、その時行違ひにふと女に逢つた。プンと得ならぬ香りが擦れ違ひに鼻を打つた。思はず胸の動悸が高まつて、顔を一時に染める。さうした初心らしい情景が、男の方にも女の方にも見える。掛香は、夏の頃臭氣拂ひに用ふる匂袋を云ふ。極單純な詠み振だが、「心ときめく」が此の場合非常に働きのある言葉となつてゐる。

青簾あまり出過ぎな娘の子　心流

青すだれを掛けたところは、なんとなく奥床しい感じを添へて見せるものである。奥にあるものは判然と見えないで、風に揺めく度に、波のやうに顔面が陰影を刻んで、殊に女の姿は美しい輪廓になつて透される。それだのに、娘の子があまり縁側の方に出跋ばり出て、足の裏まで見せてゐるのは、はなはだ見よくないといふのである。唯だ其れだけの句意だが、「餘り出過ぎな」が稍ゝ説明的でありながら、未だ一人前の女になりきらぬ娘の態度によく利いてゐる。

殿　宮　月……………………240



二十五絃（川端龍子畫）

241 川端龍子畫

數寄傳

玉露女

はしがき

花に嵐、月にむら雲、黴が生えた云ひ草ですけれど、まあ早い話が、木戸郎が菫子を忍ぶ戀路のおとづれにも、折角の口笛を犬が吠える世の中、憂き人の世の何とかつて詩人が泣くぢやございませんか。人間と生るれば三百六十五日心持ちのよい日ばかりはつゞく筈がないのを、自分ばかり天晴れ悲劇の主人公に任じてたゞみのけばを引張つたり、襦袢の袖口を引裂いたりして煩悶するにも及びますまい。お姑樣のお眉が曲らうと、小姑の眼の玉がゆがまうと綺麗にあきらめて、何處までも優しく清らかに短い一生を送るうちには、年貢の納め時が來てしまひますわ。どうせ二度と來ぬ此世を僅かの命で送るなら平々凡々よりは雨風多い生涯の方が暮し出があると云ふもんですね。美しい悲劇、華やかな命、まあまああなた方、くよ〳〵被仰らずに昔の人の血の循り方でも御覽あそばせな。小さな下らない我儘の蟲なんか潰れてしまひますよ。

長門の妻

銀燭またゝく奥の一間に只二人、妻は花の如く化粧こらして、玉酒數献進むる盃、靜かに受けて脣にあつる夫の露垂る眸のあたり、うす紅に笑みかけつ「久々に味ふ酒の殊の外に快かりつる。夜も早や更けぬべきに、明日はまた大事の戰、汝も引かずや」「されば……」と妻も打笑みて、「仰の如く明日は華華しき御功擧げ給ふとあり侍るに、今宵は猶しばし御物語らせて……。」夫もうなづき、「實にも汝は我が家へ來りて幾何もなけれど、不肖の余によくぞ忠實やかにかしづきたる、思へば此日

頃汝ある我身の幸者なりしよ」殊更らしう首下ぐる　目の坐ろにうるほひて、様見すれば、颯と散る紅葉、羞ぢてそむくるうなじを染めて、

「妾こそ……我君殿中に参り給ふ毎に御袂の重うなり給ふが常との噂隠れもなう……左程の君に仕へまつる妾こそ天が下の果報者にてはべれ。たとへ此儘死なばとて暫なりとも添ひ奉りし身の、ゆめ〳〵口惜しうは……。」

涙さへさし含めるを、いぢらしと見る

名所二十五題



「いつしかは行く道の、未來永劫變るまじきは夫婦とよ。さ其心して納めの盃、其方も一献。」口に云はねど今生の名殘盡きじと汲みやしつらむ。

天晴れ長門の妻十七歳の花の盛りを夫に捧げて、

「御先途仕れば、君には御心おきなく戰場の御はたらきを」

と一筆を此世の名殘り、その曉の露と

消えぬる。
汝ばかりは死なせはせじ。主家の滅亡武運の盡きし此正成思ひ出に思ふ樣の戰してと、兜にこめし名香の名も芳ばしき討死なせし。時に行年二十二歳。

靜

畠山が手練の皷丁々と音も冴え渡る八幡社頭、綺羅星を連ねし如き今日の宴、前には將軍頼朝公、瞳こらして御座します。右に左に居流れし勇士の面面、皆片唾を呑で打眺む。滿場水を打つたる樣。白拍子とは云へ妾も靜、判官だに世にいませば荒き風をもいとふべきに……、君ならで誰にかざらむ舞の袂。いでく思ひの儘に歌はむ。

　賤やしづの小田卷くり返し
　　昔を今となすよしもがな

凛たる面は白梅の霜にをごれる風情あり。玉の聲音に血の響。

頼朝の眉は上りぬ。武士達の肩はそびえぬ。されども靜に鬢の毛一筋動かずして、芙蓉のまなじり涙を湛へ、悲憤に燃ゆる眸の色。

　さるにても我君は、あゝ我君は……。

　吉野山峯の白雪ふみ分けて、
　　入りにし人のあとぞ戀しき

「默れ女!!! 我を誰と思ひての過言ぞ。其場去らすな首うて!!!」

朝頼の一言。白けし一座は殺氣立ちて、あたら名花は散るよと見えしが、

「彼はおみなにて侍る。胸の苦しみ思ひたまはゞ、ゆるしがたきをゆるしてたまへ。」

政子の君の命乞ひに、露の命をしばし止めぬ。しをるゝ袖に餘る涙。舞姫の身こそいとしや。

214……………………月宮殿

おさん

風や引かむ。炬燵の温み加へむか。と、さし寄り

てうたゝねの夫が顔。つく〴〵見れば涙の跡。恨め　の内。しや小春を戀ふる涙なるよ。それ程別れが惜ければ……。オヽ妾は生くる甲斐もなし。と一度は恨みしも、夫が恥は妻が恥、まして小春を死なしては此さんが義理立たず……オヽそれよ女子供は何着ても、とかく男は世間が大事、妾の衣物を皆捨てゝ、小春の志を請けてもらはむ。さて其女の來む曉は……此身は妻と呼ばれずとも、子供の乳母か飯炊きか、面倒ながら眞實の妹持つたと思ふて。」と賴みつ、泣きつ、まめやかに情も厚き小袖の重ね簪の玉も取添へて捧げ盡す眞情に裂けもしぬべき胸



狂女

川風にかをれる雪と散る櫻、花に棹さすすみだ川、霞に消ゆる鐘の音や名にし吾妻の春の夕、橋場の渡し土手づたひ、尋ねさまよふ狂女あり。花見る人の酒きげん春の日長のたはむれに、暮るればまたも渡守の、慰ものとなるいぢらしさ。今日しも狂女は川風に亂れて長き黒髮の吹きなぶらるゝいとひもなく、小笹の先きにて散る花をすくはむとこそつとめ居るなれ。心して吹け川風よ。水面瀬に浮ぶ櫻花の幾ひらをだにすくひなば、いとし我子に

逢はせむと、彼の人々ものたまふなれ。

九夏三伏の夏の日も、玄冬素雪の冬の夜も、身に代へてめで育ぐゝみし我子幸若。人惡き人に誘はれて、何處白浪行邊も遠く、影失ひし悲しさに、子を思ふ道のあやなくも、亂れ〳〵し我心、神もあはれと見そなはせと、しづ心なき狂亂の夢見る如きまなざしに、世になき影となつかしむ。

實に〳〵それも理りよ。燒野のきゞす夜の鶴、子を戀ふ思ひ變らじと、流石心なき船人もいとほしがりてさし招き、

「美し花の數々をよくこそすくひ止めしよ。今年の春は暮れ行けど、月の再びめぐりなば、また來む年の彌生には、花の盛りの見らるゝもの、花とめでぬるうなゐ子に、逢ひ見む時のあれかしと、我人ともに神にいのらむ。今宵は宿にかり枕、夢になりともおもかげを忍ばれよ」

とて宥むれば、若草しめる木下蔭に、さめ〴〵と泣きて伏し沈む。現なきこそあはれなれ。

高尾

新内の投げ三味線に夜は更けぬれど、廓大路に人影絶えず、軒頭の燈華やかに、不夜城のとゐる樓上、大廣間に酒の香滿ちて興まさに闌。

と見ゆるは表面、各ゝの面に殺氣立ちて、冷き笑みは口に浮ぶ。

「それもさう御座らう。貴殿は先つ頃迄某辻に、謠うたひて合力を乞はれし辻謠殿にて御座せば、如何蓼食ふ蟲の腸に巣くふ女のあればとて、貴殿を人並にもてなす馬鹿は致すまい……。な、女ども!!!、それとも其方達は此辻謠殿に執心ともあるかな!」

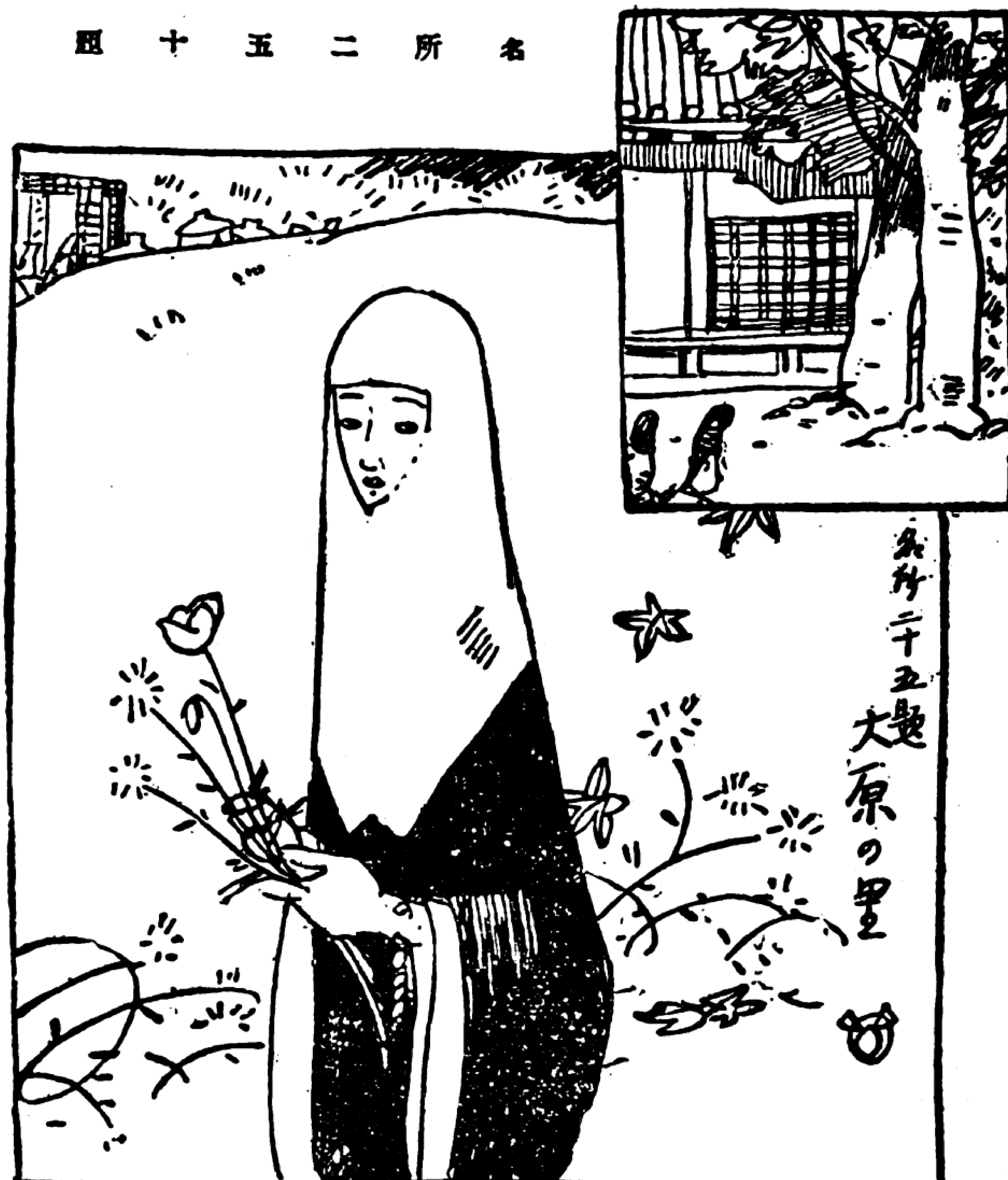
色黒々と面卑しげなる武士の憎々しう大聲出せば尾につく犬の欲得づくの追從笑ひ。

「ホ、、、、何の〳〵、物乞ひ同然の非似武士に用らしい事もあるものか。オ、いや〳〵」

と殊更に立ちよりて、「さ一つ其辻でうたふ謡の一ふし、お座興にうたつて聞しや。一文進ずる程に……。」

雪白の面貝青に、唇きと噛むで眼閉ぢたる儘、身動もせで坐せる武士、此時静かに見開きて、低き聲に力あ

名所二十五題



某此家へは、初めてなれば知れる女もなけれども、三浦屋の高尾と云へるに年久しう親しみたれば、此品仮が許に屆けて、石井よりと招けば何を置いても參らう筈。」

聞くより人人失笑し、さては散々

の恥かしめに心狂ひし氣の毒さよ。三浦屋の高尾樣は今此廓にて飛ぶ鳥を落さむ全盛。貴き大名大盡達が黄金の山を積まうとも、心の誠通はすとも、一顧の笑だに得られぬものを、人もあらうに物乞の…………。」

心にかけで嘲けりしが、絶つての言葉にさらばこれも笑ひ草にと、一座の一人に彼の武士が差出せし金の簪持たせやれば、こはそも!!。

「御なつかしき石井樣の御招ぎうれしう參上申さう程によしなに。」

晴天の霹。如何にせむ術にまどひてあわてふためく人々のさゝやぎを、かくとも知らで思ひ迷ふ石井常右衛門。

「嘗て一家の惡武士の我殿に御覺えめでたきをねたみて、かゝる謀のありと知り、高尾の許に頭下げて武士が一生の賴み聞えし時、義に勇む彼女は快よう宜なひて、妾呼ばせ給ふ時の印にと金の簪を預りしが、彼も原より傾城の誠ありとも定まらず。一面識もなき者の不意の賴みと其儘に打捨てられなば、今此恥何によりて雪がむか、よし我も貴き身なれど刀の手前、死人の山を築かむか…………。」

思案半ばに聲高く、

「三浦屋より高尾樣參らるゝ……。」

今は、一座驚きに色失ひて物云ふ人もなき中を、月姫の輝き出せる如く、靜々と歩み來れる高尾の、廣間の亂れ目もくれで、石井が膝に、つと、寄り樣

「オヽ常樣よくぞ呼ばせ給ひつる。高尾は夢かとばかりうれしう、此頃は打絶え給ひしが、御變らせもなかりしか。若し常樣に御變りも御在せば、妾は死ぬる思ひもせしに、麗しき御顏見て胸のつかへも去り侍るよ。さるにても御色艶のすぐれさせで、御髮の亂れはそも…………。」

穴あらば消えむ思ひにそのゝく人々を、後目にかけて立ち上れば、

「其髪の亂れは、髭を物乞ひ風にしてくれうとて……。」それ云はれてはと、手を合せ人知らず頭下ぐる者もあるぞ、「そこな人々も常樣の御髭の亂れ、目に入らぬかや。此樣に亂れたら、とゝのへてあげるが道であるものぞ、さらば高尾が御髪といて参らせう程に、暫しこらへて後むかせて……。」

某昔辻に謡うたひたれば、武士の　雪の眞玉手さしのべて、鬢の亂れぞかきなほす。いつ見ても君が御髪の艶やかさ。御髪なほして衣紋つくらひ、例もの通りから御座れ、此樣なむさき家に酒汲まいでも、高尾の部屋は君のもの、御氣に入るやうにして進せやう程に、我儘云ふてさしづして、例もの樣に晴やかに笑ふてたまへ。」



名所二十五題

鈴守傳………342頁

いざとばかり手を取りて、人なき路を行く如く語りつ笑みつ連れ去りぬ。

金屏ゆるく圍りて名香くゆる高尾の部屋に、手を支へて常右衞門、

「さても〳〵恭けなき只今の御計らひ、某が面目相立ち候事、一重に御身が義心の賜千萬御禮の申さうやうも無之、」

涙流して喜べるを、

「恐れ入る御言葉、妾は賤しき流れの身、かひなきあだ名立ちそめて、全盛のさはりとなるとも、そさま御身の汚れ御刀の汚れに比ぶれば、何惜しき事もなう。何はともあれ今宵は路に犬武士どもの待伏せも心許なしの無禮なれど、妾が部屋に泊らせて、東雲に御歸りあれかし。」

思はぬ事の緣の端となるものよ。

此後は此美丈夫が深編笠の、三浦屋の軒に脫がるる事の度重なりて。

月は移りぬ。四國大盡が義理のしがらみ、逃るゝ術もなくなりし高尾は、操の爲め、戀のため、たゞ死をのみぞ覺悟しても、流石ひかるゝ愛着の今日明日を命の瀨戸。

かくと知りし石井がなやみ、知るや知らずや主の君には、晝夜去らずの御召し續け、辛くも勤めおふせて今や退かんとする時、殿は暫と彼を止めて、

「此日頃其方に取らせよとて作りおきし枕あり、これをつかはす程に持ち歸りてよい夢を見よ。」

忝なく御受けする心も空、御館より宙を飛ばせて走せつけし三浦屋の奥。

「あゝ石井樣一足おそう御座りました。」

九寸五分の刃先き見事に玉をのべたる胸を刺して芳魂永しへに歸らす。

「殿の賜ひし此枕も今は何の……」

丁と投ぐれば、伽羅の香りのひまよりも、さと輝く黄金の光、高尾が身の代幾兩もあはれ甲斐なし。

月　宮　殿……………………250



婦人が社會を風化する力

貴族院議員　江原素六

婦人が社會を風化する勢力はいろ〳〵な形になつてあらはるゝ、こゝには唯その浹洽といふ方面について述べて見やう。浹洽とは水が物を濕ほして行くことで、いつとなく婦人が社會を風化して行くその樣が恰も水の物に濕ほすが如くに行渡る、その威力の勢力をいふのである、一例をいふと家庭の言葉である、中にも中流家庭の言葉は、大分破壞されてゐる、一例を擧げると、先年或る外國の傳道學校を出た女學生は相應な會社員の妻となつて、可なりの知識があると認められて居つた。處が或る時其の夫が上海あたりに出張した歸りに、荷物は車で先に自分の家へ屆けさせて、自分は家に歸らずに會社の方へ立寄つた。會社員の父は近所に住んで居たので、もう息子は歸つたらうと思つて訪ねて來て、「まだ旦那はお歸りはないかネ」と嫁に聞いた處が、嫁が答へて云ふには「荷物は先刻いらつしやいましたが、旦那はまだ歸りません」といつたとの事である。その答でも意味はよく解つて居るが、實におかしな言葉である、一般の家庭の言語も、殆んど之れと大同小異で、極く手近な言葉でも、何となく使ひ方が下手である。私の家にハイカラな女中が三人居るが、近所から一寸電話を拜借といつて來ると、屹度「どうぞお使ひ下さい」と挨拶して居るが、之れが昔流であるなら「御自由に」とか「御ゆるり」とかいふ可き所である。どうぞお使ひ下さいでは不調和である。之れは單に言語についてであるが、其他一切の事がすべて不調和である。かやう

な言葉の破壊は誰がしたかといふと、確かにミッションスクールを卒業した女學生などが、日本の子弟の教師となり、ミッションスクール製の言語で全國の官公私立學校を風靡した結果であらうと思ふ。かやうにして中學校や女學校の卒業生が、自分の父の事をいふのに、父がかく／＼おつしやつたなどといひ、手紙にも敬語を反對に用ゐるといふやうな風になつたのである。婦人の風化力はかやうに甚しいものであるから、今後女子の知徳については、大に注意をしなければならぬ。そのむかし、奥村女史が若し日本が露西亞に敗けるやうな事があつては一大事であると心配して、婦人會を組織したが、今日もやはり一種の愛國的精神を女子に養成することが、必要である。他日日本を襲ふ敵は、露國よりも強く米國よりも強いもので、一度其れに襲はれると、大抵は鋒を逆さにして軍門に降らせられるから、特にこれは大切である。幸に其の敵はまだ我國に上陸してはゐないけれども、其の探偵隊は既に諸方に潜伏して居るのは事實で、我國は實に今日最も警戒を要する時である。其の敵といふのは何國であるか、誰でも想像はつくであらうそれは即ち奢侈虚榮といふ敵國である。そしてその參謀はいかなる計畫をするかといへば、先づ第一に婦人を襲ふのである。アダムとイーブはエーデンの花園に、質朴な然かも美はし



い生活をして居る事が出來たにかゝはらず、アダムの妻イーブは、神の如き智者となり、神の如き生命を保ちたいといふ、望むべからざる望みを起して、遂に神の禁じ給ふた果物を食つた。一度び婦人が誘惑に陷ると、必ず其の夫を共犯者とするもので、夫アダムも遂にイーブと同じやうに罪を犯したのである。かく誘惑の斧は先づ婦人に下され、次に其の夫に下される。

右の大敵は、婦人の中でも先づ上流の婦人の虚を覗ふ第一にまづ上流の婦人を虜にし置きさいすれば下流の者は譯なく征服されてしまふのである。下流の者は出來得る限り上流の眞似をしようとの熱い欲望を燃やして居るから、上流の風俗が下流に及ぶ影響は、實に恐ろしいものである。「君子の德は風、小人の德は草、草に風を加ふれば必ず伏す」と云ふことがあるが、上流の風俗は風で、下流社會の風俗は草である。だからフランスの諺に、「大木は梢から枯れ、果物は花落ちて腐る」といふことがある。梢に二三尺の枯枝が出來ると、數年ならずしていかなる大木にも大きな洞穴が出來てだん／＼枯れて了ふものであるが、梢さへ枯れなければ、途中の枝はいくら枯れても洞穴は出來るものではない。之れと同じく一般の思想の堅實なるか否かは、上流の思想のいかんによつて定まるといつていゝ位である。又果物は花落ちて腐るといふ意味は、どういふ事かといへば、桃でも李でも其の花の散る時には既に小さい實の形が出來て居る。其所へ蟲が來て小さい孵卵針で卵を生みつける、果實がだん／＼大きくなるにつれてうちの方も實と共に大きくなつて果實を腐らせる、即ち果實が腐つて落ちるのは、花の散つた時から既に原因があるといふのである。之を親子の間に例ふれば、母が奢侈虚榮であれば、乳呑子にも虚榮の卵が生みつけられるのであるから、其の子供が成長すれば必ず奢侈虚榮の人となるのである。だから、其の奴隷とならないやうに、堅實な

る理想を鼓吹するといふことが、娘を敎育するには最も大切なことである。

佛國のルイ十四五世の時代は最も奢侈な時代であつたが、十五世が天然痘で崩じた後に皇后メリーが十六世となられた。時たま〲貧民が多くして餓死するものが



名所二十五題（鎌倉）

*澤山あつた。奢侈に慣れたメリーは其の樣を見て、「貧民はなぜかくも怠惰であるか。いかに怠惰だからといつて、ナイフで肉を切りフォークで口に入れる位は出來さうなものだ」といつたとの事である。又支那では宋の世は大變に奢侈で、殊に徽宗皇帝の時代は非常

月宮殿……254

代に華美の風をした。宰相に蔡京といふ者があつた。或る時家庭の談話中に蔡京が二人娘に米は何所から出るかと聞いた處が、妹娘は米は臼の中から出ると答へた、それを聞いて姉は大變に笑つたので、それではお前は米は何所から出ると思ふと聞いたら、姉はさも知つたらしく、米は俵から出ると答へたといふことである、之等はいかにも作り話のやうであるが、人間も奢侈病に慣れると、全く一種の病氣にかゝつたやうなもので、知識が鈍つて、大人も三ッ兒と少しも差はなくなるのである。先頃も私は靜岡に行く用事が出來て、八時半の急行列車に乘る考で新橋へ行つた。列車に乘つてプラットホームを見ると、澤山なハイカラの女達が誰かを見送りに來て居た。誰を見送つて來て居るのだらうと思つて居る中に、列車は進行を始めた。すると間もなく同車して居つた若い婦人が、私の側によつて來て「江原さん、暫らく」と聲をかけた。見るとそれはアービングの令孃であつた。それで今送つて來て居たハイカラな婦人は、アービング孃と交つて居る人々だといふ事が解つた。其のアービング孃が道々の話に、「今度自らが英國に行くについて、皆さんに度々帝劇へ連れて行つて頂いたが、あの芝居にあつた按針といふ人は何時頃の人でしやう」と私に尋ねられるから、「三百年位前の人と思へば大した間違ひはあるまい」と云ふと、アービング孃は驚いて「皆さんな七十年位前の人だとおつしやいましたが。ではあの目つかちは誰で何時頃の人でしやう」と聞かれた。「多分それは伊達政宗でしやう。政宗も三百年程前の人です」と云ふと、アービング孃は「あの人も七十年位前の人だと聞きましたが」と云はれて大變に驚いて居られた。これといふも今の婦人が唯うはべの風俗を見て判斷するからの間違である。折角新知識を得ながら歷史に暗く無識を表すのは難ずべき事である。

其後靜岡の用務を濟まして歸京すると、たま〳〵二三のハイカラな奧樣が私の家に來られた。そして樣樣な話をする中に　計らずも前の七十年云々の話しをすると、其の婦人達も、私共も七十年位前の人々と思つて居りましたといはれたのには驚いた。一派の人のやうに、飽くまでも儉約主義、貯蓄主義でも困るが、今少し新しい意味の修身教育を盛ならしめて奢侈虛榮を除き、己が家庭をば先づ一般の家庭の模範たらしむる心掛けがなくてはならぬ。而して此の要求に應ずべき者は、今日年老いて居る親や老婦人ではなくして、若い娘、若い奧樣である。正しい血潮、高潔な血潮の血管の中を通ふてゐる新しい婦人でなければならぬ。かくして私は理想的婦人の一日も早く實現されんことを望むと共に、現代の若い婦人の任務の愈愈大なることを注意したいのである。

△精神感動を避ける法

子供の神經をすこやかにするは、幼少なときから十分營養に注意すること。その食料は、あまり片寄らずに、牛乳に、野菜、少量の肉食を加へたものが最もいゝのです。そして茶や胡椒のやうな刺戟性のものはなるべくあたへぬやうにし、また酒、ビールなどすべて酒精分をふくんだものは一切十四五歳まであたへぬやうにすることが肝腎です。それから、子供のうちはおこりたい時に、おこり泣きたい時になき、我儘をしたい時には我儘をし、暗い處をおそれ、雷鳴をきらふといふやうな風ですが、かういふ場合に、さうやたらに感情をうごかさぬやうな慣習をつけておかぬと、成長くなつてから、感情のごくうごきやすい人間になつて、些細のことにでもすぐに怒り悲しみ、喜び、恐れ、何事によ我儘をいふやうになり、ともするとつひに神經病をおこす者があります。といつて子供のときから感動のおこるやうな刺戟には一切ふれさせないものも、成長くなつてから何の役にもたゝぬ人間になるから、子供はできるだけ多くの刺戟にあふても平然として感情を制しうるだけの力を養成してやるのが最も大切です。

△病氣が内攻するとは嘘

皮膚病は、之をなほすと内攻するといつて、よくなほさないで打すてゝおく人があるが、決してさういふものではありません。もし手當をしたために體に害を及ぼすやうな事があるとすれば、それは手當をしたからではなくて、手當の方法をあやまつてゐるからであります。たとへば、皮膚病の原因が體の中にある時に、たゞその皮膚の表へあらはれたものだけをなほすとすれば、病氣は依然として殘つてをります。この場合には、手當をしたから病氣が内攻したのではなくて、たゞ皮膚手當だけをしてその根本をなほさぬから、前からある病氣はやはり頭をもたげるといふだけのことでありますゆゑに皮膚病にもいろ〳〵種類があるが、いづれも速かになほすにこしたことはありません。



新島にて(平福百穂画)

百穂画……………………三四五



史傳

血書の心經

武田仰天子

一

庵主は今暮時の勤行を終つたばかりで、持佛堂の禮盤から、靜に老體を起して下立ち、朗かな月影の射す簷の間へ出て、敷居際に坐を占めて、そして庭の鉢前の、筧の水に押流される落葉の行方を、見るとも無く徐と見送つた。

その時次の間から擦足の音舒がに、若い娘が短檠を持つて來て、庵主の後へ差置いた。

庵主は珠數を爪繰りながら、やをら娘の方へ向直つて、そして脣を潤した。この場合に是だから、法話でも聞せるやうに思はれるが、どうして〳〵、そんな抹香臭いのでは無いのだ。

「喃お清、」と庵主はまづ彼の名を呼んだ。その只一言呼んだ聲が、もうこの來年の尼前には相應しない腹の底から出る冴切つた太い聲、恰で男だ――それも修養を積んだ男の聲だ。

お清は直に「はい」と答へた。

「お前もう太平記を何の邊まで讀みやつた。」

「只今十一の卷の、筑紫合戰の所を讀んで居りまする。」

庵主の顏に笑が浮んで、「ほう、筑紫合戰。」

「はい。丁度この土地での合戰で御座りまするゆゑ今まで讀みました所よりは、餘ほど面白う存じます

月宮殿……………………258

る。」

「然うであらう。ぢやが只面白う讀むとのみでは、眞實讀むとは言はれぬぞ。その合戰に討死せられた菊池寂阿は、俗名を武時と言うて、天晴な勤王家で、鎌倉幕府の專横を怒られて、王政復古の御爲に起された義軍ぢやで、その心得で尊んで讀まねば成らぬ。これは話が外れるやうぢやが、當時鎌倉の北條家が、天朝を蔑ろに爲た事と、今江戸の徳川家が、天朝を蔑ろに爲る事とは、どうして斯うも似たもの歟。まだしも昔の姦賊北條は、新田義貞公に誅せられたが、今の姦賊徳川は、誰が何日誅する事やら。」と庵主は憤慨に堪へない狀で、「どうにも夫が待遠なり、且はまだ齒痒うて喃。」と抑へ付けるやうに言つた。



抑〻この庵主は、在俗の時の名を望東子と言つて筑前國福岡の藩士、野村新三郎といふ人の妻で、以前は野村家の別莊であつた此所へ、夫と共に隱居を爲て居たのだが　その夫に死訣れたので、福岡とは地續きの博多の禪寺、明光寺の元善和尚を受戒の師として、ごそりと髮を剃下し、俗名の文字をその儘に呼換へて、法號を望東と名乘り、爰に世を捨て、この別莊をも捐てて寺とし、行ひ澄さうと爲るのだが、天性和歌の道に長じて、おのづと國典にも明かな所から、深く朝

廷の式微を愁ひて、一旦捨てた世を捨難ね、四方有志の士と交はつて、たゞ一途に勤王倒幕の論を鼓吹するのだ。

偖この場所は、福岡から南方へ一里ばかりの平尾山で、時は文久元年の秋の央だ。

さて望東尼のこの憤慨の最中に、飯炊の老婆が來て、「庵主樣、月形樣が和歌の添削とやらを願ひに：……。」

「お見えなされたか。直に此處へお通し申しや。」

やがて壯年の武士が來た。これは福岡藩の月形洗藏といふ人で、同じく勤王家であるのだ。

「洗藏樣、氣掛りなは近頃の都の樣子、何かお聞きなされたか。」と望東尼の口切の詞が是だ。時候の挨拶などは爲て居ない。

洗藏も同樣で、和歌の添削を乞ふとの觸込であるのだが、そんな事は氣振にも見せないで、もう最初から眉を顰めて、「長州藩の永井雅樂め喃、彼奴實に途方もない男で御座る。豫て開國論者で御座るが、その開國を行ふ手段の爲に、今度新に公武合體論を唱へて、既に中山大納言へ献議いたしたと申すぢや。」

「あれ、それはまア何といふ僻論で御座らう。譬へば本家と分家となら、合體と申す事も行はれ、また行うても宜しけれど、天朝と幕府とは、今はたゞ名義ばかりながら、明かに君臣のお間柄、それさへ心有る者は、幕府を存する事を厭うて、倒さう／＼と爲て居ますに、それを助けて、恐れ多くも天朝と合體させやう抔とは、實に餘りな思ひ付きやう。本氣の沙汰では御座るまい。」

「いかにも呆れる外は御座らぬ。長州には優れた志士も御座る代りに、又そんな不埒な奴もあつて、賊臣徳川の肩を好んで持ちまするぢや。いや、拙者はその永井めの面へ、唾を吐掛けて遣りたう御座るわ。」

「世も末になりました喃。」
月は何時しか雲に隠れた。

二

是はその翌年の春の事で、響灘から福岡灣へ入つた小舟が、折柄の風雨を衝いて、博多の港の岸へ着いた。

着くと直に篷の下から、簑笠を被た大男が現れて草鞋穿の足早に、石藏屋といふ宿屋へ行つて、帳場に居た主へ小聲に、卯兵衛、卯兵衛。」と呼掛けた。

卯兵衛は笠の下を覗いて、「ヤア、貴君様は、長……。」

「あッ、言ふ勿。内々來たのぢや。あの奥の離亭が明いてあるか。」

「へい。明いて御座ります。早速御案内いたしませう。」

客は手早に草鞋を脱いで、ぼた〳〵雫の垂る簑笠のまゝ、つと店先へ飛上つた。

「あゝもし、それをお脱ぎ下さりませぬと、其處等邊りが渾濡になりますわい。」

客はそれを聞流しつゝ、卯兵衛の案内を待たないで、勝手を知つた廊下傳ひの離亭へ行つて、其處で始めて簑笠を脱捨てた。年は二十四五でも有るべく腰に兩刀を佩びながら、頭は辨慶を見るやうな大毬栗で、そして白綸子の重小袖に、古錦襴の袴といふ異様の打扮、坊主上りか山伏か、何とも譯の分らない人間だ。

これは奇行に富んだ俊傑の士、長州藩の高杉晋作で、今毬栗頭で居るのは、曾て放蕩を盡して家を逐はれて、それを父へ詫びる爲に、一旦くる〳〵坊主になつて、まだ髪が延揃はないのだ。

さて晋作が此處へ來て暫く經つと、福岡藩の月形洗藏が訪れて、これは高杉氏、近頃貴國に居りまする中村（仍り福岡藩の志士で、名は圓太）より、只

今お手前の事を、委しく報じ越しましたで、早速お尋ね申したので御座るが、意外だ事になりました喃」と深く氣の毒さうに言つた。

「いや、まことに恥入つた事で御座る。御承知の通り、近來我が藩の俗論黨の勢ひは、それは實に素晴しいもので、正義黨を悉く平げやうと爲るので御座る。なに、身共命が惜しいでは御座らぬが、天朝の御爲藩の爲に、まだ〳〵是からが入用のこの首を、彼奴輩に渡すが無念でも御座るし、また御同藩の中村氏、並びに大和浪士の北畠氏（治房）の意見に任せて、斯やうに窃にお便り申した。俗論黨がいかに素晴しい勢ひでも、何日までも今の儘で居られる筈は御座らぬで――天が免し申さぬで、遠からず衰へる事で御座らう。何卒それまでお隱匿ひ下されたい」

「さア、その事で御座るが、至極お易い御用ながら此處に一つ御相談が喃。と申すは、拙者の屋敷は町の中で、人目が煩う御座るゆゑ、御大切の御身をお隱匿ひ申すには、どうも甚だ不適當で御座るぢや。それも外に恰好の處が無ければ、然やうな事を申しては居られませぬが他に實に得難い好い所が有るので御座る。」

「それは何れで。」

「定めしお聞及びかと存じまするが、平尾山の望東尼の庵で御座るぢや。」

「ん〻、望東尼。實は身共は、度々御當所へ參りながら、まだその尼僧に面會した事は御座らぬが、いかにも聞及んで居りまする。」

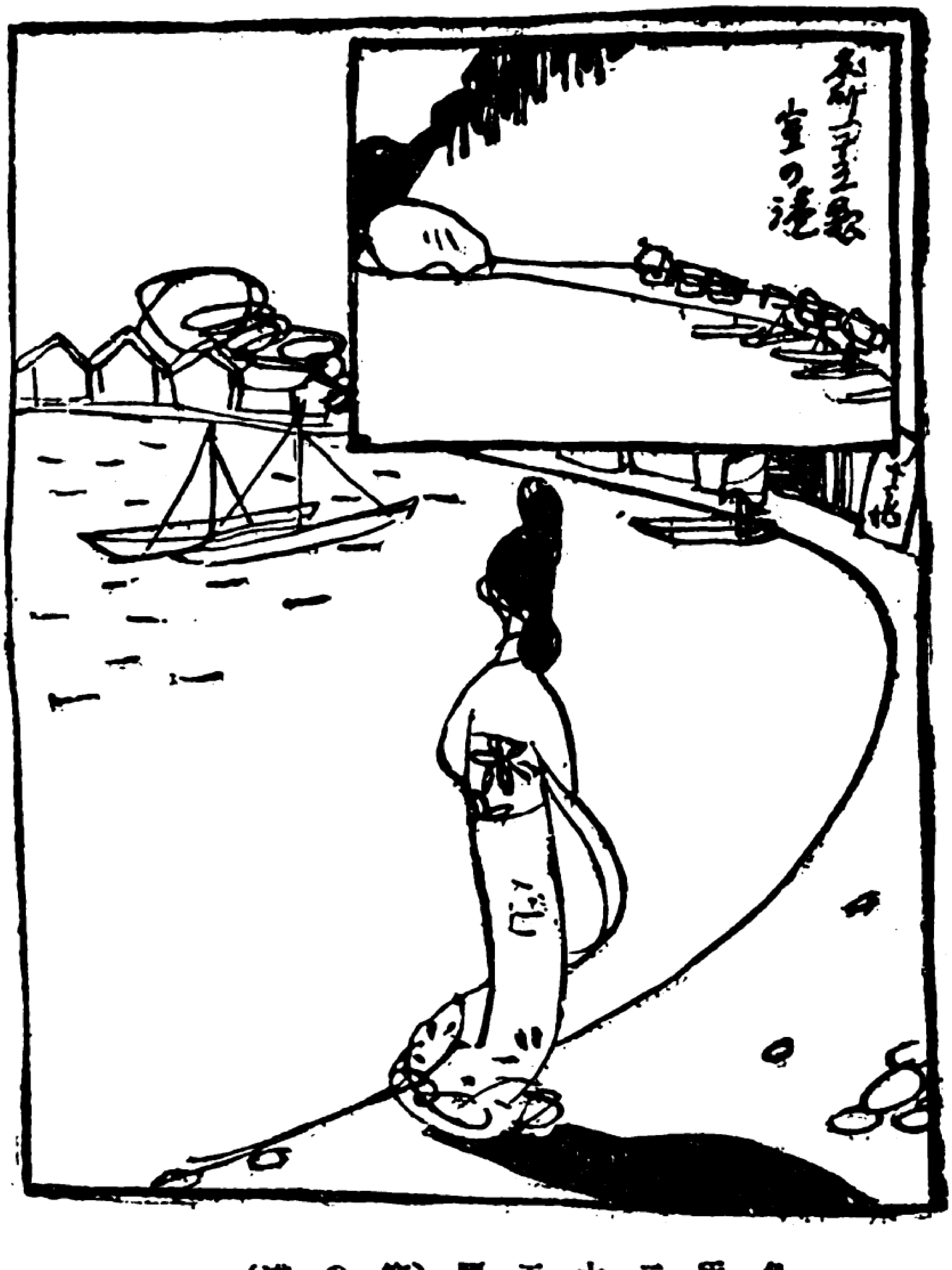
「その庵には、人々の無事に隱匿はれた先例が、幾許も御座つて、志士に取つてはまことに目出たい隱れ家で御座る。まづ京の淸水の月照法師、これは二度も隱匿はれて居りました。平野次郎（國臣）もその頃は……これはまた屢〻の事で、世間へ出て身が危うなる度に、其處へ駈込んで潛みましたぢや。なほ他にその庵へ逃げて參つて、首尾好う難を免れた名

士は、三人五人では御座るまい。是みな望東尼の侠聞えた。氣に依る事で今お手前をもお誘ひ申したら、仍りその侠氣で、悦んで隠匿うて與れるに相違御座らぬ。」

「では何卒その庵へお頼み下され。」

三

洗竅はその夜竊に晋作を導き、平尾山の望東尼の庵へ行つて事を明して頼みる。御迷惑では御座らうが、何分どうか……。」



名所二十五題（室の港）

望東尼は一議も無く、「宜しう御座る。高杉様、御心配遊ばす勿。決して誰にも覚られぬやう無事にお隠匿ひ申しますゆゑ、御安氣の上、何日までも御逗留なさりませ。」と心好く引受けた一忝うござ

「いえ〳〵、迷惑どころでは御座らぬ。斯やうな事を申しまするは、嗚滸がましい義では御座るが、この尼とて時事を愁ひまする心は、皆様方に劣りは致さぬ積りながら、法外の身の、加之も斯やうに取る年で、志士と共に京諸國を奔走する、と申す事も成難ねまするゆゑ、切めて然やうな御難でも、お救ひ申したいので御座る――これが尼の素志で御座る。依てお心をお置きなされず、この庵をお宅のやうに思召して、若お氣に入らぬ事でも御座つたら、御遠慮なう御無理を仰しやれ。」

「有難う御座る。早そのお詞で、もう御當庵を我が家のやうに存じまする。身共元來が遠慮知ずで御座るゆゑ、只今の仰せに狎へまして、どんな無理を申さうかも知れませぬぞ。はゝゝゝゝゝゝ。」

主は親切、客は磊落であるのだから、まだ媒介者の去らない間に、もう二人は打解けた仲になつた。

晋作はこんな風で、一日二日經つ間に、小間使のお淸にも、飯炊の老婆にも、また共に心安く成つて了つた。

晋作は某日お淸へ、「喃これ。當庵の庵主樣は、男優りの憂國者で、大和心を持つた者の中の御開山ぢやが、お前も大和心を持つて居るか。」と戯れた。

お淸は言下に和歌を詠んで、「われもまた同じ御國に生れ來て、大和心を知らざらめやは。」と言つて退けた。

晋作は舌を卷いて、「やア、これは驚き入つたものぢや、庵主樣の日頃の御薫陶が偲ばれて、何と謂ふ懐しい事か。あゝ、身共はうッかり物を言うて、この五尺の身體を微塵に爲られた。」と感歎の外は無かつた。

望東尼はまた某日晋作へ、「高杉樣、薩州の西郷吉之助殿(隆盛)が、御藩と幕府との間柄の儀に付いて當福岡藩へ參られました。この人も聞えた志士で御座るゆゑ、幸ひ一度お逢ひなさるが宜しからう。お

紹介せ申しませうか。」と問試みた。

晋作は頭を掉つて、「いえ、今薩長の仲が惡い爲でも御座らうが、身共は、何とやら薩人を好きませぬ逢ひたう御座らぬ。」ときツぱり答へた。

望東尼は卽吟一首、「くれなゐの大和心はいろ〳〵の、糸まじへねばあやは織られず。」と詠んで示した晋作は忽ちその諭しに服して、始めて西郷に面會した。

さて晋作がこの庵へ來て以來、およそ三四箇月も經つた頃、國許から手紙を得て、それを讀むと、せか〳〵望東尼の居間へ行つて、「庵主樣、我が藩は今や遂に亂れに亂れて、はや累卵の危きに臨みました斯やうな時にも一身の安きを思うて、國外へ遠く遁れて居まするは、志士たる者の耻づる所で御座るゆゑ、事の成敗は運に任せて、歸國いたして義兵を募り、反正を試みやうと決心しました。今日までのお心盡しは、謝し申する詞も御座らぬ。早速ながら、今より出立いたしまする。」と唐突に暇を告げた。

「あれ、足元から鳥が立つやうな急なお詞。併しその御歸國なさるは好う御座るが、今はお出での頃とは違うて夏で御座るぞ。雨が降つても御座らぬぞ。」

「うむ、成程。」

「仍りお國許までは、お忍びて御座らうが、この炎天といひ晴天に、まさか簑笠は召されますまい。」

「然やうで御座つた。少しも早うと存じますので。其所へ心が付きませなんだ。」

「只今お立ちなさる所を、明朝までお延しなされ。雨の降る降らぬに關らず、尼に好い工夫が御座るゆゑ。」

「では然やうに致しませう。」

望東尼は直にお清を町へ走らせ、一匹の縞木綿を買つて來させて、そして徹夜て、衣物と羽織とに縫上げて、翌朝晋作を招ぎ寄せ、「喃、これをお召しなされたら、商人とより見えませぬゆゑ、忍んでお歸

りなさる事が叶ひませう。目出たう御歸國なされた上は、錦のお召物とお着換へなされ。」と言つて、「まごゝろをつくしのきぬは國の爲、立かへるべきころもでにせよ。」と詠添へた。

晋作は悦んで品々を受領した。

四

斯くてその時から四年後の、慶應二年の冬の事だが、突如として、望東尼の身に災難が降掛つた。福岡藩でも長州藩同樣に、豫て家臣が正義俗論の二黨に分れて、互に爭つて居たのだが、この頃は俗論黨が勢力を得た爲に、すなはち望東尼が中てられて、斯う言ふ達しを受けたのだ。

野村助作曾祖母　望東

其方奸曲の輩へ隨身致し、抱へ屋敷に於て、密密に同氣の者相會し、剰へ旅人を潜伏をも致させ、其外樣々不所行の儀、之れ有る段相違し、女の上、曾て之れ有る間敷き所行少なからず。不屆に候。之に依て、重く仰せ付け被る可き儀に候得ども、格別の御慈悲を以て、姫島へ流罪仰せ付け被れ候事。

望東尼は寢耳に水の、こんな處分を受けたのだから、驚きもし悲しみも爲たのだが、俗論黨の蔓る折柄、免さるべき筈は無く、やがて舟に乘せられて、本國の海岸から五里の洋中、玄海灘の一孤島たる姫島へ送られて、嚴しく牢獄へ繋がれた。

その牢獄は、僅六疊敷の建物で、それを剰へ二間に仕切り、一方を警固所に爲て、望東尼の入れられた間は、總體板で張詰めて、そして日光を受ける處は、たゞ一つ高い小窓が有るばかりだから、狹くもあり暗くもあつて、その窮屈き陰氣さは、實に想像の外なのだ。

望東尼はその夏は、蚊帳が無くつて蚊に攻められまた冬は、火の氣が無くつて寒に攻められ、有らん

限りの苦を嘗めて、蓬に延びた髪の毛は白さを増し健かであつた身體は痩衰へて、見るも憐れな姿となつた。

が、切めてもの幸ひに、藩から筆硯を許されたのと、まだ情の在る人から、窃に蠟燭を差入れて與れるのとで勤行の暇には、或は日記を認めたり、又は只さへ枯れた老體の血を絞つて、同志の故人の菩提の爲に、般若心經を血書しなど爲て居た。

望東尼はこんな有樣でその年を送つて、明けて慶應三年の正月に、また突如として心魂を驚かされた例の夜中に筆を執つて居る折柄、常には似ないで數人の跫音が爲たかと思ふと、板壁一重の警固所に居る番人が、きやーーッ。」と悲しい聲を立てる。望東尼は怪しみつゝ膝行り寄つて、板壁の節穴から窺つた。すると意外千萬にも、數人拔連た刀の光が目に入つた。



牢番は殺されたのだ曲者は只そればかりでは無く、其所に有つた鍵を取つて、牢屋の戸を開きに掛つた。

望東尼はます〳〵怪しまざるを得ない。この尼を生けて置いては面倒だと言ふので、藩から窃に殺させに遣したの歟。とも考へ、それなら牢番を手に掛ける筈は無い。とも考へて、無氣味の中に、いろ〳〵思ひ煩ふのだ。

その内曲者は戸を開いて、さて意外にも、庵主樣是を。」と聲低に言ひながら、一封の手紙を渡した。

望東尼は表書をちらと見て「おう――」と悦びの聲を放つた。

彼は仍り聲低ながら早口に、「いえ、庵主樣、他聞を憚りまする。お靜に。」と斯う言つた。曲者では無くつて、救ひ出しに來たのであつた。

望東尼は慌急しく封を開いて、そして嬉し涙を溢しつゝ讀了つた。

彼はそれを機會に、「庵主樣、少しもお早う。」と促した。

望東尼は立上つたが、長く牢住居を爲て居たのと、この不意の悦びとで、ぐたぐたと足が顫へて、ばたりと其所へ膝を突いた。

彼は忽ち近く寄つて、望東尼を脊に負つて外に出た。

其所に三人の仲間の者が、なほ拔刀を攜へながら待受けて居た。

望東尼はその者等に守られつゝ濱邊へ出て、其所の小舟へ乘せられて、そして將に岸を離れやうと爲た。

折節この姫島の島番の、飯田嘉右衛門といふ者が鐵砲を引擔ぎつゝ驅けて來て、「汝牢破りめつ。」と罵りながら、筒口を向けて狙ふのだ。

救ひに來た一同は、これに酷く心を痛めて、必死になつて漕出した。

嘉右衛門は火蓋を切つた。が、中らなかつた。

舟は半町ほど沖へ出た。

嘉右衛門はまた再び火蓋を切つた。が、また同じく中らなかつた。

救ひの人々はもう氣丈夫で、「御餞別有難い。もう一發、もう一發。」と嘲りながら、遠く沖へ漕出して、そしてその翌日の夕方に、某所へ漕寄せた。

五

すると空籠を擔がせた異風の武士――猩々緋の陣羽織を被て尾州扇を持つた茶筅髪の武士が、小舟を目指して駈付けた。それは高杉晋作で、此所は長州馬淵の堂が崎であるのだ。

望東尼は懐かしさ嬉しさに、舷に取付きつゝ伸上つて、「まア高杉様。」と顫へ聲で呼掛けた。

晋作も懐し氣に小腰を屈めて、「これは庵主様、御挨拶は後刻ゆる〳〵。さア、直様これで。」と籠を示した。

望東尼はまた人に援けられて、舟から籠へ乘換へた。

晋作は先に立つて、同所の白石正一郎といふ人の家へ誘ひ、直に奥の間へ導いて、「早速ながら、長々の御牢舍で、嘸お召物が汚れてあらうと存じて、調へて置きましたゆゑ、何より先にお召換へなさりませ。」と言ひながら、白茶色の絹小袖に、墨染の麻の法衣に、それに襦袢、帶、湯文字までも添へて出した。

「あゝ、これはまア御結構なお仕着。有難う御座る早速お詞に狎へまして。」と望東尼はその品々を押頂いて、やがて着換へた。

晋作は改めて手を下げて、「さて庵主様、先年は一方ならぬ御懇情に預かりまして、その御恩は決して忘れは致しませぬが、國事多端に取紛れて、ついつい御無沙汰に打過ぎました段、平に御容赦を願ひまする。その御無沙汰を致した故に、少しも存じずに居りましたが、和僧は昨年より姫島にと申す事を、漸う近頃耳に致したので御座る。それで片時も捨置かれぬと、すなはち人數を遣はしまして、お救ひ出させ申したので御座るが、能うまアその御老體が、獄中の艱苦にお堪へなされて、斯う御無事に居らせられました。それで身共の念が達いて、お救ひ申す

事が能きましたので、斯やうな悦ばしい事は御座らぬ。」と泌々言つた。

「忝うござる。」と望東尼も慇懃に頭を下げて、「この尼とても、否、この尼は一入増して、斯やうな悦ばしい儀は無いので御座る。實は何も惡事を犯したと申すでは無く、御國の御爲に囚はれたので御座るゆゑ、心に耻づる所は聊かも無いながら、このまゝ此所で身を果す事かと存じますと、つい悲しう成りまして、泣かぬ日とては無かつたので御座る。それに一昨夜思ひ掛なう、御人を遣はされました有難さお禮は詞に盡きませぬ。餘りの意外に、實は一旦は驚きましたが、お文を拜見しました時は、もうそれは飛立ちます程の――天へも登ります程の心地で我知らず嬉し涙が……。」と話すに付けて、ついその嬉し涙に誘はれて歟、新しい法衣の袖で目を押へた。

流石豪氣の晋作も、この時この體を見て、坐に目を潤ませた。

望東尼は氣を變へて、「時にお手前、福岡よりお歸りなされて後の御様子は喃。」

「はい。あれから早速檄を飛して、一隊の義軍を起し、俗論黨の重立つ者を討平げました爲に、我が正義黨は、やゝ勢ひを盛返した事で御座る。それにお禮を申さねば成らぬのは、例の幕府の、我が長州征伐に付いてゞ御座るぢや。徳川は當藩を攻める爲に薩州へ出兵を命じたので御座るが、あの西郷が頭を掉つて、然やうな無名の軍を援ける事は相成らぬと出兵を拒みました。就いては他の諸藩も出兵を怠つて、先づ傍觀と申す有様で御座るゆゑ、憖じ長州征伐なとと觸出して、迂濶の手勢を繰出した徳川は、今更持倦みの體たらくで御座るが、この西郷が頭を掉つたと申すのは、先年身共が庵主様のお諭しを受け、始めて彼に對面して、直その場で打解け話を致したのが、それが利いたのに相違御座らぬ。」

「では彼の時のこの尼の腰折が、おのづと當御藩の

殿　宮　月……………………270

お爲になつた。と申す次第で御座るか喃。」

「然やうぢや。斯う徳川が沮喪致した元はと言へば、あのお和歌の力に歸せねば成りませぬ。只それだけでも、庵主樣をお隱匿ひ申すべき筈――及ぶだけ鄭重にお隱匿ひ申す可き筈で御座るに、況して身共の御恩人で居らせられるでよし福岡藩がこの事を聞付けて、いかに嚴しう掛合うて參つても、決して御身を引渡しは致しませぬ。依てどうか御安氣に、御生涯御逗留下されたう御座る。御不自由は必ずお爲せ申しませぬ。」

この時下女が來て、「高杉樣、お湯が沸きまして御座ります。」

「いや。御入湯よりは先お月代ぢやで、誰でも剃刀の持てる人を呼んで與りやれ。もし、庵主樣、身共が御厄介になりました節は、毬栗頭で御坐つたが、今はお互に地を換へて、庵主樣が毬栗頭



名所二十五題（磯谷）

「で御座る喃。はゝゝゝゝゝ。」
「これは隠匿はれ者に附物と見えまする。おほゝゝゝゝ。」

六

さて福岡藩では、望東尼を奪つた者を探索して、それと當りを付けたのだが、先年長州藩の使者に向ひ、恥を與へた事があつて、その以來同藩とは、絶交の姿になつて居る爲に、この掛合の面倒である事を豫じめ推察して、知らない體で見逃して居る。

望東尼の方に取つては、豪勢な保護者が付いて居て與れるのだから、よし本藩より、嚴重な掛合が有らうとも、恐れは爲ない——びくとも爲ない。併し掛合はれないに越した事は無いのだから、おのづと日陰の身であるのを忘れて、その後頗る安穩に過して居た。

所が望東尼の力と頼む高杉晋作は、大酒の爲に病氣に罹つて、その年の三月初旬に床に付き、四月中旬に歿つた。

望東尼はどれほど力を落した歟。恰で我が子に先立たれたやうに歎いた。そして保護者に死なれた爲に、もう當所に居られない勢になつた。同國の山口へ引移り、楫取素彦といふ人の家に居たのだが、同じ年の九月下旬に、防州の三田尻へ行つて、宮市の松崎明神へ、今なほ忘れない尊王倒幕の祈誓を籠めて、一七日の斷食を爲た結果、老體に病を醸して、遂に十一月の六日の夜に、一首の辭世、「花浦の松の葉白く置霜と、消るはあはれ一さかりかな。」と詠遺して、行年六十二歳で客死した。

七

が、望東尼の祈誓は徒爲では無く、平生の志望は貫かれた。

幕府は望東尼の死に先立つて既に倒れて、政權は

天朝の御手に歸した。
且つ福岡の藩論も正義に復して、千代松原へ招魂の祠を建て、望東尼の靈を祀つた。
尚且つ朝廷に於せられても、望東尼の苦忠を感じさせられて、明治二十四年の三月に、彼を靖國神社へ合祀せられたのみで、無く同年十二月の十七日忝なくも彼に左の勅命を賜はつた。

贈正五位　故野村望東

宮内大臣從二位勳一等子爵　土方久元宣

當意即妙

秀吉朝鮮を征し給ふとき、人々今日御渡海あるや、明日御渡海あるべしつなど、風説せしかば、堺の鞘師曾呂利新左衛門といへる滑稽者が戯れに、

太閤が一石米を買かれてけふもごとかいあすもごとかい

と申けるを、秀吉傳へ聞かれて大に憤り、曾呂利を召されて糺し給ひけるは、落首杯はむかしよりある習にて是非なければ許すべし。我今一天の君を補佐し來る所の關白職たるを、太閤がとは過言はなはだし。せめては太閤のなどならば、すこしは許す處もあるべきにと、嚴しくいかり仰せけるに、曾呂利少しもおそれず。君と天子とはいづれが尊くおはしまし候哉と、申上げけるに、それは知れたる事、我は臣下也。いかで天子と比する事の有るべきやと、仰せあるを曾呂利すかさず、然らば左のみ怒り給ふことのあるまじ、すでに天子のおん名をさして、君が代は、君がため、などゝ申すにては候はずや、と申上げけるにぞ、秀吉深く其才を愛して曾呂利を用ゐ給ひけるに、其後は太閤の傍に侍しておん伽をなし、色々おもしろき滑稽ありしは人の知る處なり。曾呂利病篤り、今はに及びしとき、何たりとも望あらば申せ、かなへて遣さんとありしかば、

御威勢で三千世界手に入らば極樂淨土われに給はれ

とおん請して、其後程なく果てたりとかや。

名流婦人逸話



△勅選夫人の結びの神

貴族院議員仁尾惟茂氏の夫人(繁子)は人の世話をなさることが何よりお好きで、何時でも書生の五六人も置いた外に、親戚や知己からの嬢さん達を行儀見習に三四人は絶えず預けられて居ります。其外何か紛紜があれば持込む、婚禮沙汰があれば持込む、それを面倒とも思はず一々世話をなさるのが繁子夫人なのです。

書生は皆それ〴〵の學校へ通はせて、卒業すると相當の口を探して兎に角生活して行くだけのとをなしてやる。見習の嬢樣達も皆相當のところへ世話をして縁附けるといふので、夫人の媒酌で結婚された人は何十組あるかわからない程だがそれが皆何れも圓滿な家庭を作つて居るとは目出たい次第です。

夫人は手に附けた女中でも仲働でも、それ〴〵似合はしいところへ縁附けると、結果がまことに良いので、今では、仁尾さんに居た人なら安心して貰はれるとまで信用され、誰いふとは無しに、仁尾の奥樣は結びの神樣だとの評判が高いといふことです。

△藏相夫人の丸ポチヤ好き

女中や仲働き、上女などを雇入れるのに、心柄の優しい、縹致の餘り惡くない、よく働くのといふことは誰しも望むところでありますが、大藏大臣山本達雄氏夫人(多穂子)は、其條件以外に顔は必ずポチヤでなければならないといふ條件を加へられるのださうです。他の條件が悉く及第しても、長い顔とか、ヒステリー性な痩せた顔の女なら決してお傭ひにならない。是は只感情から





の好き嫌ひでもあることか、それとも何か理由でもあることか、其邊を聞き漏したのは返す〲も殘念です。

△伯爵夫人の散歩好き

伯爵東久世通敏氏夫人繁子さんは、土方伯の令孃ですが、至つて氣輕な平民主義の方で、一寸位の外出には仰山らしくお伴などの附くのが大嫌ひ、『お一人では何でございますから……』と腰元などがお伴をしやうとしましても『ナニ、直ぐ其邊までだから、それには及ばないの』とばかりで、サツサと出て了ひなさるのが例であります。

夏の夕暮などには、浴衣がけに團扇を持つて、勝手口の方から、腰元達の知らぬ間にフイと出て、足の向き次第ブラ〱と散歩をなさる。こちらでは待つても〱お歸へりにならないから、どうしたものかと案じて居ると緣日物の草花の鉢植なんかを提げて歸つて來られるので『まア何處へお出遊ばしたか、餘りお暇が入るので、大層心配致しました』と申しますと『それは濟まなかつたね。餘り風が涼しいので諸方を散歩して來たの』と氣にも止めて居なさらない樣子。

△博士夫人の放任主義

三宅花圃夫人は毎週の金曜日を道樂日と定め、此日には門下生を集めて書を書いたり、和歌を詠じたり、いろいろの話をしたりして、家庭の事は一切忘れて一日を愉快に樂しく暮されるとの事です。

夫人は又草花を好まれ、お庭の花壇にはいろ〱の草木を植ゑてありますし、小さな溫室などもありますが、夫人の園藝趣味は人とは餘程違つた方で『私は何事によらず、無理なつくり方をするのが嫌ひです。草花を植ゑるにしても、野生でも何でも構ひません。唯だ花が咲き



きへすればそれでよいので、枝を撓めたり葉を摘んだりしないで、自然の趣きに咲き亂れた風情が面白いのです』と云つて居られます。

夫人は日常の生活でも、お子さんの教育のしかたでもやはり放任主義で『子供の教育などはやかましく申しませんけれども、幸ひにみなよく育つて居ります』と云つて居られます。

△辯護士夫人の三味線

辯護士栗塚省吾氏の夫人(龍子)は音樂といふ音樂は、ピアノでもヴアイオリンでも、オルガンでも、琴でも琵琶でも、三味線でも、何一ツお嫌ひといふものはなく、皆大好きなさうでございますが、愛國婦人會の事やら、其他交際がせはしいので、音樂會などへも滅多に顔を出されない。

併し三味線は、今は亡くなつたが、お慶とかいふ師匠に就て、最初は常盤津から、長唄、それから一中と隨分苦心をしてお稽古なされただけに、たしかに巧いものださうですが、今では何分にも忙しいので、殆んど撥などを手にされることがないといふことですが、それでも栗塚さんが極く親しい御友人などゝ一酌でも催されるといふやうな時には、夫人が三味線を取つて冴えた音〆に何か彈かれることもあるさうですけれども、それは一年にやうやく二度か三度、餘程お氣の向いた時でなければなさらないさうです。

夫人には目下淺草の高等女學校に通學して居られる令孃がありますが『妙なものですね。私は此樣に音樂が好きですけれども、子供はどうしたものか、厭がつて一寸も手を付けやうとはしないのですよ』と令孃の三味線嫌ひを何だか物足らなさうにして居られます。





△代議士夫人の花見ず主義

代議士小久保喜七氏夫人(政子)は十六歳で結婚をされて以來二十年になりますが、長き間の逆境に處してよく内助の實を擧げ、夫をして後顧の憂ひなく國事に奔走することを得さしめたのは誠に賢夫人と申すべきですが、其やうにいろ〳〵な經驗を積まれただけに、深窓に育つて世の中の波風を知らないやうな方々とは違つて、茶の湯とか、花を活けるとか、音樂をやるとかいふことには一向に趣向が無く、其代りに家庭の事は一から十迄萬事萬端何一ッ夫人の手から外れるといふものは無いさうです。

小久保さんは政治に奔走をなさることの外は、家庭の事などには一切手を附けられん者ですから、若し夫人が二三日も家をあけるやうなことがありますとそれこそ大變、何が何處に藏つてあるやら一向わかりませんで、衣服を着替へるにも、一寸客があつても茶を一つ出すにも事を缺く程だといふことです。

そんな次第ですから、夫人は、よく〳〵據どころない場合ででもなければ、滅多に家をあけることが出來ないさうで、御夫婦が上京されてから、彼此れ十年程にもなりますが、夫人は今以て五町と隔たつたところへ出られたことは無いと云ふことです。

されば上野の櫻が咲かうが、向島の花が咲かうと、そんなことには一向頓着が無く、つい近くの四谷見附の花さへも見たことがないといふは、本當と思へない程の話です。夫人は此やうに終日家に居て家事を整理する外に餘念が無いのですが、其の忙しいところに夫人の趣味も慰藉もあるので、それが夫人の道樂だといふことです。





△精力女史の寄席好き

『怒るな働け』主義で生徒を薫陶されて居る嘉悦孝子女史は四十幾歳の今日までも獨身で通して居られます。それでお獨りではお淋しいと思召すやうなことはございませんかと訊ねますと『それは淋しいんですよ。私だつて獨身主義の爲めに獨りで居るのではなく、唯適當の夫が見當らないからなんです。夫がありませんから随つて子供もなく、時にはしみ〴〵淋しいと思ふこともあります。ですから今でも適當な人さへありましたら結婚をする積りで居ります。本當でございますよホヽヽヽヽ。』

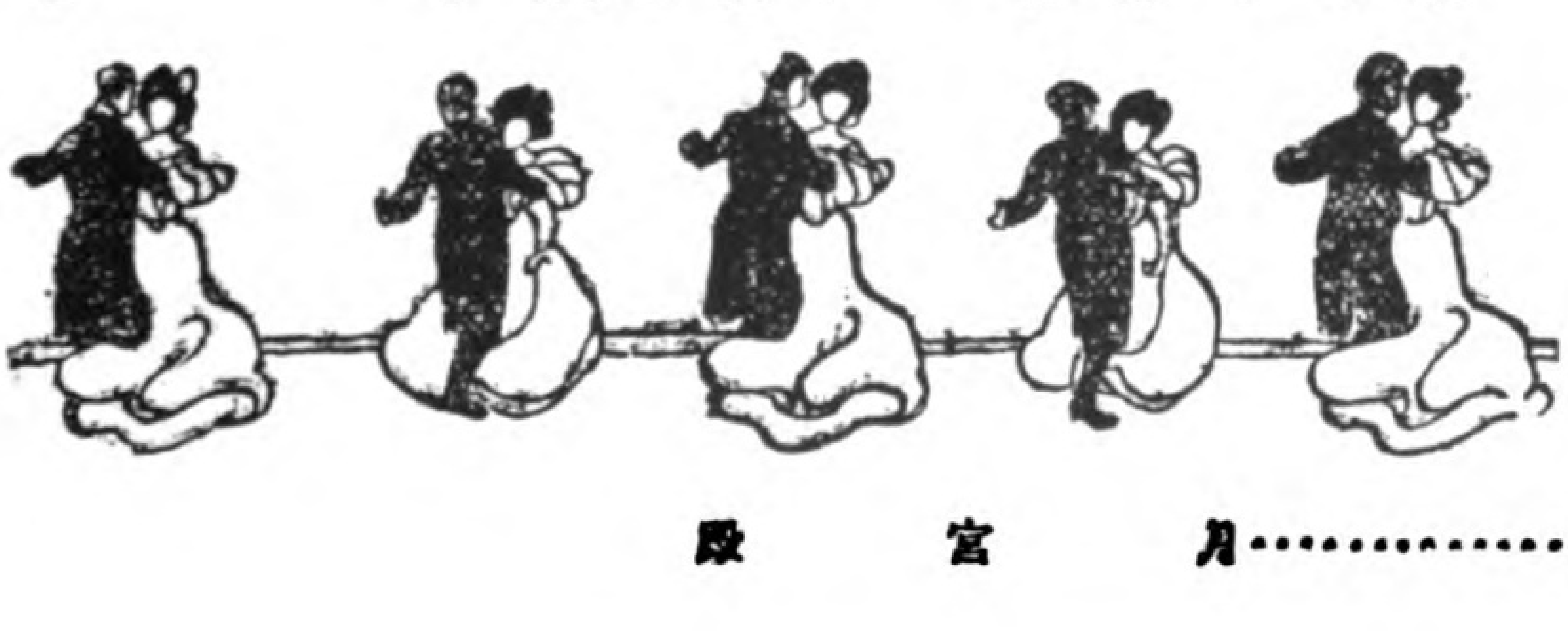
女史には一人の御老母があります。女史は此老母を、淋しき味氣なさを慰める唯一のお相手として孝養を盡して居られるのです。それで殆んど毎晩のやうに御老母の手を引いて芝居とか寄席とかへ行かれるのです。近所の寄席などは義太夫であらうが落語であらうが、それには頓着がなく、かわつたのがかゝれば、待ち構へて出掛けられます。時としては淺草邊や日本橋邊までも御老母と一處に行かれるので、凡そ市内の芝居といふ芝居、寄席といふ寄席で此お兩人の覗かれないところは無いといふ程です。

それは、芝居通とか、寄席通のやうに、藝が何うとか聲が斯うとかそんなことには一向頓着がなく、兎に角見たり聽いたりするによければそれで可いといつた風なのださうです。つまり女史は、夫のない淋しさや、子供のない味氣なさやらを、芝居や寄席で慰藉し、又御老母をも慰められるのでせう。



△博士夫人の朝寢起し

故々女史は本名が榮子、法學博士江木衷氏の夫人であ





ることと今更申すまでもありません。又其才色双美なる上に多藝多能なことも世に隠れないところで、筆蹟から書畫から、琴でも、謡曲でも、小鼓でも、寫眞でも、樂燒でも、其他いろ〳〵のことがお出來になる外に武張つた方では馬術に堪能なことです。

『乘馬などは餘り突飛だと仰しやる方もありましたが、江木はナアニ構はぬ。併し一旦乘り出したら人に笑はれない程に上達しなくてはならないと申します。乘馬に限らず、何事に就ても江木は然う申します。私も負けぬ氣ですから、やり出したら一生懸命になつてやるのですよ』と云つて居られましたが、それだから何にかけても女史は上達なさる譯です。

處が馬術練習のことから女史は御親戚の物議を釀したことがありました。女史はまだ馬術を始められてから間もない頃でしたが、さすが濶達な女史でも日中に市街を乘りまはすのはキマリがわるいからと云ふので、何でも夜の明け〳〵まだ朝霧の霽れ上がらない中に馬を乘り廻して練習を重ねて居られましたが、次第に乘り馴れて來ると何處か少し遠方へ行つて見たくなつて堪りませんけれども日中を憚ることですから、餘り遠く行く譯にもなりません。フと山の手に御親戚のあるのに氣がついてさうだ彼處へ行つてやらう、さうすれば、餘り人の起きない中に歸つて來られるからと思ひましたので、或朝早速その山の手の御親戚へ乘り込んでまだ寢惚けて居る下女を驚かしましたが、下女位では面白くないと其家の主人を起してやつたのです。

夫人は人の朝寢を起してあるくのが面白くて、それからといふものは、殆んど毎朝のやうに方々へ乘り出しては起して歩かれるのです。すると一週間許り經つてから親戚連名の手紙が届きましたから、何事であらうかと



封を切つて見ますと、夫人の乘馬御練習は活潑で至極結構で御座るが、早朝から乘込まれるのは實に閉口だからこれだけはどうか止して頂きたいといふのであつたといふことです。



△子爵夫人の骨董趣味

青木エリサベット夫人は、青木子爵が以前獨逸駐在の當時に結婚された普國某男爵家の令孃ですが、お國柄だけにビールは大瓶一本位は平氣で平らげられるが、日本料理は今以て嫌ひですけれども、日本の美術が大好きで書畫骨董には眼がない位。それだけ鑑識にも長けて、應擧や、元信のものは、落款がわからないながらも、之は名畫であらうとの鑑識、又佛畫や佛像なども非常に好まれ、時々お寺などで佛壇にある佛像を見て頻りに欲しくなり、是非譲つて吳れと仰しやつて住職を困らせることなどがある。

△代議士夫人の執念物語

日向代議士夫人欽子女史の美貌と蛇好きとは婦人界に誰知らぬ人もなき程有名なものになつて居ります。夫人は蛇が大好きで、青大將の大きなのを始終傍から離さず、頸筋などへまとひつくのを心易げに撫でまはすとか何とかと一時はいろ〳〵評判もありましたが、それは全く無いことで、夫人もあの執念深かさうな蛇の眼を見れば、怖毛立つ程氣味が惡いと云つて居られます。

それならどうしてそんな風評が立つたかと申しますと日向代議士が何時か旅から一疋の青大將を持つて歸られたのを暫く籠に入れて飼つて置かれたことのあつたのに尾がつき鰭がつき果は夫人が蛇好きであるかのやうに噂さをされたのだといふことです。



其飼つて置かれた蛇は、段々と人に馴れて、人が傍へ寄つて驚かないやうになつたが、何時か夜中に籠の目を拔けて逃げて往つて了つたので、若しや家の中にでものたくつて居りはしないか、夜中に床の傍へ這つて來はしないかと、しばらくの間は夜の目もあはぬ程怖ろしかつたとのことです。『あのじり／＼と如何にも執念深かさうな眼つきを見ますと、堪らない程いやな恐ろしい氣持が致します。物の本などにも、女を蛇にたとへてありますが、あの執着のつよいところが似て居るといふのでせう何だか自分の心の内部を鏡にかけて見るやうな氣がして身ぶるひがいたします』と夫人が云つて居られます。

△新夫人の聯珠趣味

鳩山秀夫氏の夫人(千代子)は、雨の降る程澤山な候補者の中から春子刀自の眼識で選拔されただけに、學問といひ氣立てといひ勝れた方であるさうですが、お慰みの方面では碁も上手、歌留多もうまく、分けても五目並べなどは、春子刀自さへも見苦しく敗北されるほどの達人だと申します。

夫人は令兄一郎氏夫人(薫子)とも至つて仲がよく、同邸内に新築した別々の新宅に住まはれて、毎日互ひに仲よく往つたり來たり、風呂などは兩家で隔日に立てゝ交る／＼招んだり呼ばれたり、湯上りの肌を青葉越しのそよ風に吹かせて、千代子夫人がお得意のヴァイオリンを彈けば、薫子夫人は玉のやうな指をピアノのキイに走らせて樂しさうな合奏をなさる、是からの夕方などによく床しい音色の漏れ聽えるのは、此美しい兩夫人の睦しい聲であります。春子刀自も、こんな美しい仲のよい二人のお嫁さんを迎へられて、嘸ぞお樂しみなことでせう。



△公爵夫人の外學文學

米國へ留學した最初の女學生であつた大山元帥夫人（捨松）は、その學生時代には馬に乘れば、游泳もなさる、米國一流の荒つぽいほど活潑な方であつたが、一方には又文學の嗜好があつて、日本流に優にやさしく、シエークスピヤ全集などは最も好んで耽讀なさるさうです。

夫人は西洋式の教育を受けられただけに、毎年の夏季にも溫泉へ行くとか海水浴に出掛けて䆁もなく日を暮すといふやうなことなく、動物學の研究であるとか、我國語を學ぶとか、有益に日を暮されるといふことです。

△子爵夫人の親思ひ

末松文學博士夫人（郁子）は故伊藤公爵の令孃ですが、非常な親思ひで、故公爵が少しでも氣分が優れないと聞けば直ぐ飛んで行つて看病をなさる。それが又なかなかうまいもので本職の看護婦も叶はない程まめまめしく働かれるのが常でありました。

そんな風ですから、ハルビンの變事を聞かれたときなどは餘所目にも痛ましい程の御愁傷でしたが、今は唯一人殘つて居られる御母堂も兎角勝れぬ勝のことゝて夫人のお心遣ひは一通りでありません。

夫人は謙澄博士を良人に持たれるだけ、文學の趣味深く、敷島の道にも造詣淺からぬといふことです。

△世嗣夫人の趣味生活

華族の若樣や、姬君も、近來は樂しい世界に徜徉されるやうになりました。日本畫の平田松堂さん、吉井勇さん、『白樺』の武者小路實篤さん、正親町公和さんは、





白馬金鞍の貴公子が轡を並べて平安の大道を行つた昔もさこそと覺ゆるばかり、美々しく文藝界に姿を現はされた。

吉井さんは旧爵家を餘所にしての下宿ずまひ、面白可笑しく世を渡つて居られるが、身體も弱さうな温厚な松堂さんは、父子爵の邸内に新夫人と樂しい日の空氣を呼吸して居られます。松堂夫人は前田利定子のお妹さんで、花鳥風月を詠ずる程の才はあり、良人の畫伯も亦新派の和歌に趣味をもたれる處から、燈下に額を鳩めて物の本など打披き唱和を試みて、互に悦に……。

夫人は子爵令嗣夫人としての交際よりも、若い畫伯の若奥様として立働き、畫伯の詩興を破らぬやうにと、草木の開落にすら感傷し易い詩人に慰藉を與へて居られます。昨秋の文部省展覽會に出品の金屏風『我庭の秋』なども、夫人は時々畫伯の側に侍つて、凝と見惚れては色彩中の人となつて居られたとのことです。

すべて斯う云ふ風に、良人の趣味に融和し、良人の事業に同情する處に、家庭の平和を維持し、良人の名を成さしめる偉なる力が潜んでゐるのでありませう。

△金髮夫人の浴室問答

新渡戸博士の夫人は金髮夫人中で錚々の聞えがあつて家庭はキチンとして一糸亂れずと云つたやうに、規律が立つて居ります。そして博士は終日忙しいので、夜の用務が終へて、寢に就く前に博士は入浴されるので、其の時、夫人は浴場の隣室で、何呉れとなく家事上のことを相談されるといふことです。

夫れから博士には常にポッケットに菓子袋を入れて置き、途上を歩いてゐる内、そこらに遊んで居る小兒を見ては、それを出して與へられるといふ面白い癖があります。





痛しい文明の風潮

▶婦人の職業增加◀

▲近年經濟上種々の原因の爲婦人の職業は非常に擴大して男子のなすと云ふ職業の多くに亙つて活働して居る而して今東京市中で是等の婦人が何の位職業に從事して居るかを取調べて見ると東京市に於ける女の數は七十五萬三千餘人ある其内職業に就き幾何かの金を得て居るものが約十九萬千人ある更らに其の中で副業を營む ものが二千人餘あり其の 職業の種類は人力車夫銅鐵などの鑛物業軍事に關するものを除いては男子のなす總てに涉つて居る就中女中の五萬九千人、衣類其他の裁縫に從事するもの二萬六千餘人物品販賣業に關係して居る者二萬四千二百人、宿屋飲食店其他

▲娛樂場の營業に働いて居るもの約二萬人 敎員其他自由業に關して居る者一萬四千五百餘人を以て最多とし何れも汲汲として其業務に服して居るのであるされば男子の就職者と比較すれば婦人の就職者は其三割強に當つて居る而して就職者は矢張り未婚者若くは寡婦に多く其の過半數を占めて居る年齢に依り之を區別すると二十歳より二十五歳までの者最も多くして二萬二千餘人次いで十五歳より二十歳迄のもの約二萬人で兎に角婦人の働く時は十五歳より四十歳迄で五十以上になると年を老るに從つて減少し七十以上で尙ほ職業に從事して居るものは約千人あるそれで十五歳より二十歳までの者は飲食店又は製糸工場等に多數を占め、

▲二十歳より二十五歳の者は宿屋飲食店物品販賣其他娛樂場に關した職業に就き二十歳より三十歳迄も此順序で進んで居るが三十五歳より五十歳までの人は被服等の裁縫に最多數の地位に立ち五十歳前後の人は物品の販賣に最も多く從事して居る六十歳以上の老婦になると洗濯又は裁縫のみに從事して居ると云つてもよい斯の如くにして東京市には昔から東洋の因習であつた婦人は内を治めると云ふ習慣を破つて各種の職業に從事して居るのである此の趨勢は目下の生活難問題に連れ日一日と擴大しつゝあるのである斯くて現存する殘餘の五十六萬二千餘名の家庭的婦人は所謂此の文明の痛ましき風潮に驅られて職を追求する人となり又一種孤獨の生を送らねばならぬ者が多くなる譯である。

284…………………………月　宮　殿

小説



女の心

野上彌生子

友子は今朝、いつもの通り郵便箱をあけに行つた女中の初から、二三通の良人宛の手紙と一緒に、思ひがけもない久しぶりの學校友達からの手紙を渡されて、喫驚したやうな晴れた調子で、

「まあ、珍らしい人から手紙が來ましてよ。」

と縁側で顔を洗つてゐる良人の後から聲をかけました。

「誰から。」

「春江さん。ほうら、遠藤さんの奥様から――、まあ又轉任してゐますよ。今度は大變近くなつたのね宇都宮市××町とありますわ。よく變ること。」

と友子は一人で饒舌りながら、その手紙ばかりに氣を取られて封を切つて讀み初めてゐますと、良人はさつさと髮の手入れをすまして、玉子なりの柄鏡と櫛を化粧臺の上に置きなり、

「さあ、仕度は可いのかい。飯にしなくちやもう遲い。」

と促がすやうに云ひ捨てゝ茶の間の方へ行つたので、友子は、

「意地惡ねえ。」

と云すたやうな顔つきをして其後姿を見送つてゐましたが、そのまゝ見かけた手紙をぐる〳〵に捲いて懐に突き込んだまゝ、すた〳〵と上草履の音を立つて廊下を小走りに行きました。

良人の出勤を見送り出して、受け持ちになつてゐる寝間と書斎との掃除をしてゐる間にも、友子の胸の中には先刻の手紙の事ばかりがありました。そして何か物珍らしい、新たな悦びの湧き立つやうな、そは〳〵した輕い心持ちで、威勢よくハタキや箒木を働らかしました。やつと掃除がすんで綺麗に片づいた机の前に坐ると、幼兒が取つときの玩弄物でもいぢる時のやうな、待ちかねた他愛のない笑顔をして懐の手紙を引き出して讀み始めましたが、だん〳〵讀んで行くうちに、初めの晴れ〳〵した笑のかげはいつの間にか、引きしまつた眞面目らしい顔つきに變つて、息を籠めたやうに凝ッと目を通して了ふと、黒い眉を無慘らしく寄せてゐました。ほぐれた紙は膝の上に幾つかに疊まつて、こぼれた端は疊の上に白く流れながら、直ぐ向ふの肱掛窓から吹く五月下旬の生濃い風に吹かれてさら〳〵鳴りました。

手紙は隨分長い手紙でした。先久々の御無沙汰のお詫びから始まつて、かれこれと取り集めた思ひを書き連ねた中に、「實は先だつてより遠藤の例の持病の事から胸に餘るやうな心配が湧いて來て、朝夕人知れず袂を絞つてゐます。こんな女の心の底の苦しみを、一緒に泣いて下さるやうな人は、貴女より外に二人もない私の身の上を可哀想と思召して下さいまし。それにつき、いろ〳〵御相談も申上げ度し。御力も借り度い事が御座いますので、ぜひ〳〵お目にかゝり度い。以前のやうに和歌山だの盛岡だのと申せど、所詮致し方もない事と諦らめもいきますが、此土地からなら三四時すればお目にかゝれる事が出

來るのだと思ふと、飛び立つ程に思はれます。けれども只今突然何の理由もなしに貴女をお尋ねいたす爲めに出京すると申しては、良人から直ぐ感付かれますから迚も出られません。それ故全く我儘なお願ひだけれど貴女が入らしては下さいませんか。どうぞ私を助けると思つて……。』と云ふやうな悲しい言葉に續いて、學校の窓から覗いて見た頃の世界とは、天と地と程も異なり行く目の前の世界こそ、恨めしくも又厭はしく候。今一度夢にてもあれ、彼の頃の屈託のない輕い淸らかな心持ちになつて見度いと思はれ候らへども、そんな學校時代の夢さへ久しく見もせず候。何もたゞ悲しき事ばかりに相成り候。かしこ。と留めた筆の跡は、友子の胸にも何となく涙の誘はれるやうなもの淋しい思ひを漂はせました

それにしても心配事つて何事が起つたのだらう。遠藤の持病……また遠藤さんが不身持ちでも始めたと云ふのか知ら、それにしても春江さんの氣の病み方も少し甚だし過ぎるやうに思はれる。餘りくよ／＼しずに打ッちやつた樣な、知らぬ顏をして入らした方がよろしさうだけれども……假令どんな眞似を遠藤さんがなすつたからつて、それが爲め春江さんを如何すると云ふやうな事は到底出來ない事は分つてるのだもの、春江さんが餘り眞劍になつてかゝるから、遠藤さんが妙なからかひ氣味の興味も交つていつまでもそんな持病をやめないのかも知れない――。

友子は手紙を繰り返しながら、そんな事をいろ／＼に考へ續けました。而してその夫婦の間に持つてゐる自分の妙な隔てのない位置と、その位置にいつともなく這入り込んだ學生時代からの親しい友情を思ふと、その追懷の中には、兄夫婦や姉夫婦と云ふものに對するやうな隱し立てのない懷しみがありま

した。殊にその二人の中に始めて這入つた時の自分のぼん●●●●やりした世馴れぬ滑稽な失策は、今でも思ひ出す度に甘い微笑を禁ずる事が出來ませんでした。それは二人を本統の兄妹だとばかり可なり久しくまで思ひ込んでゐた事なのでした。年若な許婚の男女の間で、生れたまゝの兄や妹のやうな呼び方やあしらひ方をしてゐる習慣のある事は、その頃の世馴れぬなかにも知らない事でもなかつたのだけれど、友子は全くぼんやりなのでした。遠藤さんはその頃法科大學生で友子の世話になつてゐる親類の、直ぐ裏續きになつた先の隱居所を借りて住まつてゐたのでしたが、その夏休みから歸つた時、

「今度は厄介者を連れて來ました。」

と云つて、春江さんと小さい色の黑い下女とを連れて來たのでした。而して九月の學期から春江さんは友子と同じ小石川の女學校に通ふ事になりましたが、お國の高等女學校からの轉校が出來たので、級も友子と同じく四年級になりました。二人は直ぐ仲のよい友達となつて、毎日長い振りの袂を並べながら誘ひ合つて學校へ通ひましたが、暫時たつうちに、春江さんは餘り勉强家でないやうに友子には思はれ出しました。友子がどの科目についても燃ゆるやうな智識慾の湧き立つのに比べて、春江さんの何事にも打ちはまらぬ樣な氣の乘らぬ勉强ぶりを見ると、一緒に寄り合つて下調べなどをしてゐながらも、友子は時々焦つ度くなるやうなもどかしさを感じました。而してあんな危やふやな勉强でよく氣が濟んでる事だ。何故も少し一生懸命になれないんだらう。左樣すれば教場でだつてあんな恥はかゝないで行けるものを……と思ひました。全く教場でも春江さんは何か見えぬ物の影をでも追つてるやうな茫然とし

た態度で、よく先生の質問等にまごつきながらきつと顔を赤めて俯向いて仕舞ふやうな事が屢々ありました。そんな日の歸り途には友子は自分の事のやうに齒がゆい、腹立たしい氣がして、つん／＼してゐると、春江さんは悄然とした便りない顔つきをして、

「私、學校よしちまはうか知ら、迚も駄目だわ、ねえ友子さん、もう貴女愛想が盡きたでせう。」

と云ひました。友子はその柔らかな寄りすがつた花のやうな、優しい表情を見ると直ぐと氣の毒な心持ちになるのでしたが、それでも、

「貴女がも少し學課に一生懸命になつて下さると私嬉しいと思ふわ。今日のやうな事があると口惜しいんですもの。」

と生一本な友子が思ひのまゝをぐん／＼云ふと、春江さんは一層しほれて、

「幾何一生懸命に勉強しやうと思つたつて、その側から直ぐ下らない事ばかり考へられて少しも頭に這入らないんですもの。全くこんなになつて仕舞つちや駄目ですわね。」

と思ひ捨てたやうな言葉を洩らしました。けれども友子にはその述懐が何を意味するかと云ふ事が少しも分らなかつたので、そんな言葉を聞く度に大きな子供々々した目をくる／＼さして、

「又、春江さんは何を云ふのだらう？」

と云ふやうな顔つきをするのが常でした。

遠藤さんは快活なさく／＼した人で、春江さんの事をお國風に「おはさん」だの「春公」だのと強く呼び

すてながら、言葉の裏にはその調子とは反對な一種の優しい愛情が見えてをりました。それに對する春江さんの甘へた態度も友子の目につきました。けれどもそれが若い良人と許婚の妻との情合であつたと云ふやうな事には、思ひも及ばなかつた友子は、或日の偶然な出來から初めて喫驚して目を見はりました。而して俄かに湧いた物珍らしいもの丶やうに、それまでの馴れ親しんだお友達をつく〴〵と眺めました。それは春休みの或夕方の事で、伯母さんが急に思ひ立つて飛鳥山に夜櫻を見に行くから、裏の春江さんにもさう申してお出でと、さう云ひつけられて、友子は氣輕く庭下駄のま丶柴戸から裏口に廻ると、そこの井戸傍にちいが立つてゐました。お米研ぎに來たのだと見えて、足下の揚げ笊には、美しく打ちあげた米が、もう一の暮のほの暗いあたり色の中に、しら〴〵と浮いて見えました。ちいは直ぐその揚げ笊を持つて歸るでもなく、そのま丶何となくしよんぼりした樣子で立つてゐるのでした。友子は、「春江さんゐらツして？」と聲をかけて、ちいの「えゝ」と云ふ口重な返事を聞き流して通り過ぎると、後から、

「あの、ちよツと。」

と呼び留めるちいの聲がしきした。

「何アに？」

と友子が不審らしい顏を振りむけると、ちいはどぎまぎした樣子で何か口を動かしたが、はつきりした意味の通ずる言葉は一寸後に續かなかつたので、友子はいやなちいだ、と思ひながらその儘すた〴〵

急いで隠居所の前まで來ますと、三間ばかりの小さい家はまだ灯もいかずにぼそりとしてゐました。縁側から、

「春江さん。」

と呼ぶと一寸返事がなくて、その癖すぐ前の障子の向ふから人のたつけはひがして中の間の唐紙をあけて勝手の方へ行きました。春江さんらしいのに如何したんだらう。と思ひながら何となく不斷と逆ふやうな氣分で、遠慮したやうにも一度よんで見る氣もなく縁の前に佇んでゐますと、今度は奥の間から大股な足どりがして、遠藤さんががらッと障子をあけました。

「お友さんか、なアんだ上ればいゝのに。」

「春江さんは？　あのう伯母さんが飛鳥山に夜櫻に行きませうつて。私お迎ひに上つたんですの。」

二人がうす暗い縁側でこんな問答をしてゐるところへ、春江さんはランプを持つて其座敷に這入つて來ましたが、その明るい灯の下に春江さんの顔が赤く泣きはれてゐるのに氣がついた時、友子は思はず

「春江さん如何なすつたの？」

と眉をよせて聞きました。春江さんは默つたまゝ友子の方をむいて笑顔を作らうとしましたが、危い泣き笑ひになつて膨れた兩方の目からは涙がはら〳〵とこぼれました。遠藤さんはそれを見ると面倒臭いと云つたやうに舌打ちをしましたが、突然氣を更へたやうに、

「お友さん、春公は燒き餅やで困るよ。」

と云ひ放つて、から〳〵と笑ひました。

それから二三日の間に友子は春江さんから今まで知らなかつた色々な身の上話を聞かされました。春江さんの本統のお父様やお母様は、春江さんがまだ赤ん坊の時に流行病で一時に亡くなつてしまつたのだと云ふ事、父方の親類に當る遠藤さんの家に引き取られて、兄妹同樣に育てられたので、友子が本統の兄妹と思つてた通りに、春江さん自身も一昨年内祝言をすます暫時前までは、遠藤さんを良人になる人などは夢にも知らなかつた事、それを聞いた時の驚き、胸の動搖、餘りの恥かしさ、極りの惡さ、切なさに病氣だ〳〵と云つて幾日も部屋に籠つて臥せつたきり、御飯も碌に食べられなかつた事のと、友子の生れて始めて耳にするやうな珍らしい「女の身の上話」を幾つも致しました末に、

「全く私の身の上は小説見たやうね。」

と申しました。而してお父様やお母様は親身の娘同樣に可愛がつて下さるし、何にも不足のない身の上だけども、たゞ遠藤さんの浮き〳〵した氣の多い性質が、いつも絶えぬ心の苦痛であると云つて、春江さんの上京する前、國元にまで知れた關係の女の事などを話しました。

「お千代つて、先に下谷で藝者をしてた事なんかある女ですつて。こゝに訪ねて來たやうな事はなくつて？」

「知らないわ私、そんな事ないでせう。」

「さう。そりや意氣な女なのよ、寫眞見せませうか。何處かに匿してゐるわ、屹度。」

と春江さんは立ち上つて、遠藤さんの机の抽斗だの、そこいらの手箱などを探し始めました。友子はそんな女の寫眞なんぞ馬鹿〳〵しい氣がして、

「もういゝわ、私そんなもの見度くはないわ。」

と云つて留めると、

「何故？」

と不承らしく探すのを止めて元の坐に戻りながら、今度は胸の間に手をやつて紅入友禪の帶あげを解きかけました。何をするのかと思つて友子は凝つと見てゐますと春江さんは其帶あげの中央に圓く蒲鉾なりに高まつた心を取り出しましたが、それが皆んな手紙だつたのに友子は喫驚いたしました。その手紙はみんな春江さんが、まだ上京しない前遠藤さんから送つたものださうで、その中の厚い一二本を春江さんはばら〳〵と手早く擴げながら、

「これはね、もうお千代とは何の關係もないんだつて一生懸命辯解して來た手紙なのよ。貴女だから見せてもいゝわ。」

と目の前に置かれて友子は有難迷惑なやうな奇妙な心持ちで、見るともなく太い男手の假名文字の多い二三行に目を走らせました。

「ねえ、こんなにまで書いてあるんだから多分眞實に手は切れてるんだらうと思ふんですけれども、何



295　色と匂ひ　(太田三郎畫)

んだか心配なんですもの。それに女が中々者だつて云ひますから、どんな事をしてるのかも知れやしないと思ふと口惜しいわ。」

と平常は物柔らかな彈力のない春江さんの樣子が、そんな話になると俄かに一種の力が加はつたやうに活き〳〵と熱をおびて來て、目を輝やかして話しました。

遠藤さんが卒業して文官試驗に合格してからは、春江さんは良人の任に從つて地方の縣下を其處此處と廻つて歩いて、五六年にもなる今日まで、東京に出て友子に逢ふと云ふやうな事はなかつたのでしたけれども手紙は可なりしよつちゆう來ました。餘り久しく音信がないと思つてゐると、飛んでもない縣から又轉任でごた〳〵してゐて御無沙汰をいたしました。なんて書いて所の名物などを送つて來ました

友子が結婚した時には、

御主人樣と高等學校時代からのお友達だつたと云ふ方が先達つて第二事務官で赴任してゐらしつて不圖した事からお噂が出ていろ〳〵お話を承りました。學問見識は云はずもあれ、お珍らしいお堅い方と聞いて、私は何よりもそれを嬉しく安堵致し候と共に、又お羨しくお祝ひ申上げます。私は相變らず遠藤から苦勞させられます……。

と云ふやうな事が書いてありましたが、今度友子が手にしたやうな、せつぱ詰つた悲しい手紙は初めてなのでした。

其夜、友子は良人に其手紙を見せて、

「何事が始まつたんでせうねえ、私に宇都宮まで來てくれなんて、少し騷ぎ方が大き過ぎますわねえ。」

と云ひました。

「お前の手腕を信用されてるわけだね。」

「手腕も何もそんな事の經驗はまるでないんですもの、まあ春江さんの愚痴を聞きに行くやうなものですわ。」

「ぢや我家でも少し始めるかな。」

「澤山ですわ、女道樂のお稽古なんぞ……。」

夫婦はそんな事笑談を云ひ合つて笑ひました。けれ雖友子は久しぶりの春江さんにも逢つて見度いと思ふ望みは十分ありました。日歸りにでもいゝから一寸行つて様子を見て來よう、と考へてまだ返事を出す間もないうちに、突然春江さんが訪ねて來ました。それは手紙を受け取つてから二日目の朝で、友子はいつもの通り良人の出勤を見送つた後、書齋や居間の掃除を毎朝の如くきちんとすまして仕舞ふとやれ〳〵と云つたやうな打ちくつろいだ氣分で、書齋の籐椅子によりながら新聞を讀んでゐた時でした

女中が氣忙しさうな足どりで這入つて來て、

「あの宇都宮からとか仰しやいまして、お若い奥樣が……。」

と取り次いだ時には、友子はハッと驚きました。

「全く何事が起きたのだらう？」

と考ふる隙もなく急いで出て見た玄關の式臺の前に、すらりと佇んでゐた六年ぶりの春江さんの姿が目に入つた瞬間には、たゞ譯もなく胸のせまるやうな氣がして、

「どうなすつたの、心配してゐましたわ。」

と云ふと、淋しい顔をして笑ひながら、

「出し拔けに上つて驚ろいたでせう。」

と云ひながら柔らかく滑べる半コートを脫ぎました。

打ち連れて坐敷に通りながら春江さんは物珍らしさうに始めて見る友達の家の間取りや、部屋の裝飾や、廊下を取り廻した可なり手廣い初夏の庭の景色などを眺めながら、

「いゝお住居ねえ。私共ぢや何處へ行つても官舍住ひで、そりや沒趣味なものよ。たゞ廣いばかりでねえ、却つて困るのよ。」

と云ふやうな事から、長崎縣の官舍は十五間もあつて幾日も足を踏み入れないやうな間が幾つもある。その中にお化けが出るといふ或因緣付きの部屋が一つあつてみんな恐がつたと云ふやうな話をしましたそんな話をしてゐる春江さんの樣子を見ると以前とはぐつと違つて落ち着きが出來て、顔立や物越しにも何となく高官の夫人といふやうな權威が添うて品よく見えました。友子は自分の胸の中に殘つてゐるたゞ物柔らかい——まあ人の好かつた——親しい昔の春江さんとは違つた人に逢つてるやうな氣がする

と共に、これがあんな頼みきつた寄り縋るやうな手紙をよこした人か知ら、と疑がはれるやうな妙な當てのはづれた心持ちがしましたが、頓て話が二日前の手紙の事にうつると二人は矢張り昔の日を見出しました。春江さんは、

『實はね、昨日不意に出張があつて二泊ばかりで田舍の方へ出掛けたものだから、その留守に私默つて出て來たのよ。えゝ、いゝえ、貴女に少し相談したい事があるから一寸上京して來るつて置き手紙をして……………。』

『そんな事をなすつてお怒りになりやしなくつて。』

『怒れるものですか、御自分で弱味があるんですもの。それに知事さんの奥樣が私を大層可愛がつて下すつて、よく遊びに呼んで下さるものですからね。何か愚痴をこぼされやしないかと思つて、そりや私の機嫌を取つて旨く胡魔化して置かうとしてるのよ。憎らしいんだけども、又考へると可笑しくつて。』

と云つて春江さんは笑ひました。今度の心配と云ふのは遠藤さんが先の任地先の有名な旅館の一人娘と關係してゐたのが、この頃その娘が跡を追つて宇都宮に來たさうだと云ふのでありました。

『全く仕方のない人なのよ。私もう藝者なんぞが相手なら持病だと諦めてるんですけども、そんな素人の娘を一生どうする積りでせう。いろんな探りを入れて見るとね、娘には旨い事が云つてあるらしいのよ。私は許婚で據ろなく貰つてる女房なんだから、國許の兩親でも亡くなればどうにでも出來るなんて云つてあるらしいんですつて。呆れるぢやありませんかねえ。』

と春江さんは口惜しさうな熱した顔をして、
「今度宇都宮に來るなんて云ふのも遠藤が呼ぶらしいんですよ。それでゐて私の前には何處までもしらを切つてるんですから憎らしくつて。」
と忍び兼ねたやうに眼を押へました。
「女も女なのねえ。」
と云ふと、春江さんは赤い眼を見据ゑて、
「どうして、その大きな旅館を一人で切り廻してるといふんですものね、それで高等女學校まで優等で卒業した女なんですつて。」

　夫故春江さんの考へは、その位しつかりして、教育も十分ある女なら却つて話が分るだらうから、其女にすつかり打ち明け話をして見たら如何だらうと云ふのでしたが、それに就いてはその女に直接面會するのが一番いゝ手段とは思はれるけれど、遠く離れた土地で致し方がない。もし手紙をやるとしたら春江さんが直接自分から書いてやつたものだらうか、又間に立つ人でも作つたものだらうか、と友子に相談と云ふのはその事なのでした。『私の考へではね、もし御迷惑でなければ貴女にお願ひするのが一番好都合だと思ふんですけれども……貴女なら私共の事を十分知つてゐらつしやるのだし、遠藤に知れたつて貴女にお話したのなら、さう腹も立つまいと思ひますわ。たゞそんな厭な話の中に立ち入る事を旦那樣がお許し下さるかどうですか……。』

と春江さんは氣遣はしさうに云つて友子の顏色を伺ひました。

『そりや貴女の事は平常から話してあるんですから不可とも申しますまいけども……。』

と云つたまゝで友子は一寸返答に困りました。それと共にそんな手紙を遣つたりする事は見合せた方がよかりさうなものだとも思ひました。どうせ遠藤さんだつて眞面目な心持ちからその女に對してるのでもなからうから、一時の腹立たしさ妬ましささへ忍んでゐれば、軈て勝利は春江さんに歸るのではないか……。春江さんには氣に入るまいと思ひながら友子は思ひきつて考へる通りを話すと、春江さんは凝つと身を堅めて聞いてゐましたが、切なさゝうに溜め息を洩らして、

『貴女にはさう考へられるでせうねえ。』

と打ち沈んで答へられた時には、友子は心から氣の毒に感じられました。

『氣を惡くなさらないで頂戴な。私はたゞ私の思ひつき丈けをお話したまでなんですから……。』

『いゝえ氣を惡くなんぞ……、私も又よく考へて見る事にしませうよ。』

と春江さんは大人無しくその話の口を閉ぢましたが、軈て、

『友子さん、貴女には私がさぞ下らない女達と良人の愛を競爭してる、嫉妬深い女と見えるでせうねえ。』

と云つたまゝ、兩手を顏に當てました。白い彫刻のやうな五本の指の間からは、淚が粒々にこぼれ出ました。

「そんなこと春江さん……。」
「いゝえ、さう思はれても仕方がありませんもの。全く私の頭の中にはいつも絶えない、妬ましい、腹立たしいの爭ひばかりで一杯になつてるんですから情けないものですよ。それを思ふと貴女は羨しい、何より羨しい。」
と咽ぶやうに續けましたが、その儘つと立つて障子の外に出ました。友子も一緒に出やうとしたが、却つて一人置いて高ぶつた神經を靜めさした方がよからう、と思つたのでわざと座に殘つて考へるともなく男の貞操と云ふやうな事を眞面目な打ち沈んだ心に思ひ廻らしてゐるところに、春江さんは涙を拭いたうす紅い美しい顔になつて戻つて來て、
「馬鹿らしいのねえ、泣いたりなんかして。」
と云ひながら晴れ〲しく微笑しました。友子もつり込まれてはゝ笑みながら、
「手紙書くなら書いてよ。」
と氣輕に云ふと、
「本統にもう暫時樣子を見る事にきめたの、心配しなくつてもいゝわ。」
と側に坐つて懐しさうに友子の手をとりながら、
「笑はないで頂戴よ。貴女は私共のやうな苦勞をしらないんだから笑ふ權利はないのよ。」
「だから笑ひはしないわ。」

「勿體ない身の上ねえ。私ばかりぢやない大概の女はみんなこんな苦勞で泣いてるのに、ほうら、貴女あの有名な××夫人の話はまだ御存じないの？」

と妙な事を春江さんは尋ねました。

「××夫人の話つて去年の秋だつたか亡くなられたあの名高い××夫人？」

「えゝ、あのお美しい××夫人が何で亡くなられたか眞實の事を御存じなの？」

「腹膜炎だとか新聞には書いてあつたと思ふわ。」

「大變な腹膜炎？ そんな事は皆僞なのよ。あの方は自殺なすつたんですつて。」

「あの方が自殺ですつて？」

「懐劍で美事に喉を突きなすつたんださうですよ。私確かな人の口から聞いたのだから事實に相違ないんですがね、お氣の毒でせう。矢張私見たやうな事の苦勞で、思ひつめてしまつたらしいんですよ。」

と聞いた時には友子は一種の奇妙な怖ろしさを感じました。友子は元より××夫人を生前一度も面のあたり見た事があつたのではありません。けれども萬人に立ち勝ぐれた美貌の夫人として、有名な呉服店の繪看板として、「紫しらべ」の肖像畫の主として、かまびすしき迄で持て囃されたその美しい面影はようく見覺えてゐました。而して女性の命とも賴まるべき美身の天寵を受けたる上に、或程度までの豪華な生活の中に浸つて、他目には何不足のない身の上とばかり思はれてゐたその人が、我と自らその美しい肉體を滅さうとまで思ひつめたその執心。その念力、何と云ふ怖ろしい烈しい女心だらう。自分も女

の一人である。いつかそんな烈しい執心に燃ゆるやうな機會があつたらどうしよう？　そんな時節も來るだらうか。いゝえそんな事のある筈はない。あられる筈はない……友子は今まで夢にも知らなかつた不思議な血潮が心の底にさして來るやうな氣がしました。

　春江さんは尙そんな例として或高貴な夫人の話をしました。その貴夫人は良人なる貴人が臨終の近づいた黄金の床の前に、久しく別居してゐた奥御殿から現はれて無言のまゝ石彫の人のやうに坐つて居ました。而していよ／＼最後の脈が切れたと聞いた時、靜かに枕許に進みよつて、まだ若々しい貴人の美しい死顏を凝つと見つめてゐましたが、頓てはつきりとした音聲で、

「私はこれでやつと安心しました。」

と云ひ放つと、そのまゝわーッと泣き伏したと云ふ話でしたが、友子にはそれもこれも皆身にしみて聞かれました。而して春江さんのお蔭でいろ／＼と眞實の女の心と云ふものを覗いて見たやうな氣がいたしました。



少年世界 第十八卷第九號 増刊 紙數二倍もの 六月十五日發行

創立廿五週年

日本一

菊判紙數二百五十八頁 口繪石版寫眞版數豐富 本號限り 正價二十錢 郵税二錢

▼口繪▲

日本五大噺●桃太郎(尾竹國觀)●花咲爺(尾竹竹波)●カチカチ山(中澤弘光)●猿蟹合戰(渡邊審也)●舌切雀(鏑木清方)

□神武天皇(平福百穗)□富士と少年(太田三郎)日吉丸(杉浦非水)

〔油繪〕…乃木大將…岡野榮畫

●日本一…お伽劇…巖谷小波
●少年の覺悟…長谷場文部大臣
●日本は農業國…横井博士
●歐行日記…菊地男爵
●天賦の才…辻男爵

□□十日に十里(題詠)桂公爵□□

●眞の大畫家…中村不折
●日本語の速發…坪井博士
●英國の少年軍…乃木大將
●樺太の歴史…上田博士
●家庭の教訓…後藤男爵
●勉強時代…澁澤男爵

●朝の勉強…加藤博士
●太陽の出る國…大隈伯爵
●日本の神社…伊藤博士
●讀んだ本…坪内博士
●誠の一字…花井博士
●少年時代…森博士

□□日本一(題字)東郷大將

●豪傑主義…黑田清輝
●捕鳥部萬…萩野博士
●ハイカラ桃太郎…竹貫佳水
●古戰場…坪谷水哉
●貰らぬ寶…江見水蔭
●魔の海…木村小舟

紀念増刊豫告





〔東京 博文館 本町〕

五(中付の四)



第一巻第三號　主筆　本多精一　六月十五日發行

地球

四六倍判　紙數二百四十八頁 ● 口繪 三色版二色版寫眞版十四頁　正價三十錢　郵稅三錢

女（中村の六）

東京日本橋區本町　博文館　振替東京二四〇番

博文館編輯局編纂

明治四十五年

夏期休暇 小學生日誌

洋裝菊判
石版刷表紙
頗美木版各冊
口繪寫眞版
一枚、挿畫
數十個挿入

昨年は中途にて賣切たり
本年は最も
速に注文
せざれば賣切の恐あり

(定價)

▼尋常科第三學年用
▼同　第四學年用
(紙數毎冊四十二頁)
正價各一冊五錢五厘
郵税一冊二錢宛

▼尋常科　第五學年用　第六學年用
▼高等科　第一學年用　第二學年用
(紙數毎冊四十二頁)
正價各一冊七錢
郵税一冊二錢宛

特別割引

尋常小學三、四學年用

冊數	價格
五十冊以上	一冊送料共 金五錢八厘
百冊以上	一冊送料共 金五錢六厘
二百冊以上	一冊送料共 金五錢四厘
三百冊以上	一冊送料共 金五錢二厘
四百冊以上	一冊送料共 金五錢
五百冊以上	一冊送料共 金四錢八厘

尋常小學五、六學年用・高等小學一、二學年用

冊數	價格
五十冊以上	一冊送料共 金七錢貳厘
百冊以上	一冊送料共 金七錢
二百冊以上	一冊送料共 金六錢八厘
三百冊以上	一冊送料共 金六錢六厘
四百冊以上	一冊送料共 金六錢四厘
五百冊以上	一冊送料共 金六錢二厘

注意

一、臺灣、樺太、朝鮮、清國、送分は……一冊に付三厘增しの事
二、內地代金引換小包送分は……一冊に付三厘增しの事
但し臺灣、樺太、朝鮮、清國行、代金引換小包送りは……注文者の負擔を輕からしめんため前記三厘增の外割增を爲さゞる事

女(中付の七)

東京日本橋區本町三丁目　**博文館**　振替貯金口座東京二四〇番

新家庭

雛鳥

ぼーと鳴り響く汽笛にお良は喫驚して起きた。釣瓶の立木に這ひ懸つた烏瓜の葉が、涼しい朝風に戰ぐ。汲み馴れない釣瓶に手を懸けて、一釣瓶汲むで放すと、空いた釣瓶はがら〳〵とんと舞ひ上つた。

「貴方濟みませんが一寸釣瓶を取つて下さい。鎖が車から脱れたんですの。」

夫の順一は眠い〳〵顔をして、井筒へひよつと上つて譯無く直してまた寢た。お良は顏を洗つて、バケツへ一杯汲まうとして、復も釣瓶を脱した。

「また釣瓶が脱れたんですの。ほんとにお氣の毒ですがどうぞも一遍取つて下さいな。」

「莫迦だな――。」とぶつ〳〵言ひ乍ら順一は直して置いてまた寢た。

お良は水菜でお味お汁を炊かうと思つて、昨夜買つて來た石油厨爐へ仕懸けた。お味噌を入れても入れてもお加減が薄いので、とう〳〵有り丈入れてしまつた。

昨夜はお湯飲茶碗で御飯を濟ましたが、今朝からはお茶碗で食べられる。お味お汁も出來たと喜んで夫のお碗へ注がうとしたら、どろ〳〵掻き切る樣なお味お汁に成つて、水菜は消えてしまつて居た。順一は、

「出來た物だ。」と笑ふ。
「甘味噌つて駄目ですねえ。今度は辛いのを買つて來て見ませうよ。」
秋に入つてから順一は毎日大學へ行つた。豫ての計畫通り、何か內職をし乍らといふので有つたけれども、其の內職を人に賴みに行くのでも無ければ、何時迄經つても發見り樣も無かつた。二人の生活は元より困難で有つた。お良は毎朝夫を送り出すと、仕立屋が持つて來る仕事を、息も次がずせつせとした。そして靜に生活の事を考へては、縫ひ物の上に淚も零れたが、夫の平氣な顏を見ると、直ぐ其の氣に成つて、此の先奈何なる事かとも、此の月末はとも、其那くど／＼した面白く無いお話は成るべく出し度く無かつた。
斯ういふ風で月日はずん／＼經つた。
緣先の鵯上戸の實が、赤く色付く秋の末に成つて見馴れぬ書生風の男が名刺を持つて尋ねて來た。順一は留守で有つた。名刺は順一の學友で、官途に就いて地方に居られる人から、淺村君を御紹介申すといふので有つた。夫が歸るとお良は一番に其の事を話して、
「木綿の紋付の羽織で眼鏡を掛けて居ましたよ。」
「宿を聞いて置けば善かつたな。」と言つた。
順一は學校に會が有つて、夜に入つて歸つた晚、待ち兼ねて居たお良は御飯を始めた。所へ御客が有つた。薄暗い玄關に股引で印袢纏を着た男が風呂敷包を負うて立つて居た。よく見ると淺村と言つた過

日の人で有つた。客は、
「今日は斯麼風です。」と馴れ〳〵しく笑つて、
「夫れでは一寸御邪魔しませうか。」
といつて座敷へ上つた。順一は食事を止めて其の方へ行つた。挨拶が済んで、
「貴方は杉山君を御存知だ相ですね。」と問ふと、
「はい英様のお國のお宅は私の宅のすぐ近所です。今度此方へ来る途中で、一寸徳島へ寄りましたが、大變親切にして戴きまして、羽織や着物などは貰ひました。夫れは返すつもりですが、そして旅費なども與れて、是れは君に恵むのでは無い。君を京都迄運搬するのじやつて、――中々勉強して居られます。」などと快濶な調子で、田舎者らしくも無く話して、
「私の目的といつて、今お話するのも痴しく御座いますけれども、是非米國へ行つて、社會事業をして見度と思つて居ります。夫れ迄どうでもして三四年熱心に當地で勉強し度いと思ひます。――幸身體も丈夫ですから、何所迄も精力主義で、――夫れに就いては何分今後色々御教を仰が無ければならないでせうから、何卒よろしく御願ひいたします。――私は國の中學に行つて居ました時分にも、矢張新聞配達や牛乳配達で遣つて来たんですから、苦學には馴れて居ます。――杉山の英様にも言はれました。今度私が無錢で四國路を歩いて来ました事を話しますと、君は餘程社會に報い無ければならないと。實際金無しで歩くと、人の情の有り難い事が分ります。どうかして社會に對して此の恩の十分の一でも報うじ

なければ濟まし無いと思つてます。」
といつて、山の中で雨に逢つて、炭燒きの小屋で泊めて貰つただの、お芋を一つ貰つて一日の饑を凌いだの、夜更に道傍の風呂を貰つて浴つただの、親切な道連れの人が村芝居へ連れて行つて呉れて、夜は其の家に泊めて呉れたゞの、といふ事を膝頭を抑へて思ひ入つて話した。旅行好きの順一は、自分の經驗に照して面白く聞いた。

「私は昨日から漸々或本屋へ入りました。夫れで斯麼失禮な風で來たのです。」

などゝ言つて、夜の更くる迄話して歸つた。

「ほんとに感心な人ですね。二十二にしては中々しつかりして居ますわ。」などゝお良はいつて、遲く御飯を濟ました。

夫れから後時々淺村は來て、自分の店の者共が遊蕩で仕樣が無いとか、今の學生は皆虛榮に驅られて居るとか、大學生には人格のゼロなのが多いとか、今の社會は腐敗し切つて居るとか、と言ふ樣な事を熱心に言つた。其の健氣な・寒む相な身形を見兼ねて、お良は夫の着物や足袋など時々遣つたり、夫のお友達に相談して、シャツやズボン下など貰つて、土鍋でお湯を沸かして、洗濯をして直して、遣つた遣れば格別辭退もせず、快く受けて行つた。

或時順一の家の近所に火事が有つた。其の時一番に驅けつけて來たのは淺村で有つた。火事は事無く濟んだ。他には一人來て呉れた本屋の手代と、取り散らした書物の中で、順一は本に就ての話をし古本

の珍しいのなど出して見せた。お良は夫れ等の人々に饗應ふ爲に、忙しう筍を切つて煮たりなどして居た。

或時淺村は母が死んだと云つて來て、此の頃非常に頭が惡くなつて困つた、といふ話をした。兼て過度の勉強を詰めて居た二人は、氣の毒に思つて、引き留めて出來る丈の養生をさせた。お良は留守番を賴んで置いて、病人の爲になる樣な物を買ひに出た。

六月に入つて順一は學年試驗が始つて忙しかつた。其の時淺村は奉公先を代へて居たが、今度は昔恩に成つた人の宅だと言つて、主人の爲に非常に盡力して居ると言ふ話で有つたが、軈て其の主人に誤解せられて面白く無いから出るといふ事を言つて來た。其の頃はよく友達の爲に多くの金を借りて遣つたとか、或友達が病氣で昨晩は夜通し看護して疲れてしまつたとかといふ樣な話をして、そして繁々と來た。

夕御飯の時分に成ると淺村はのつそりと來る。お良は夫の命令によつて、俄に魚屋へ走つた。夫れが二三日續くと、

「今日も來るだらう。忙しいから、來たら直ぐ飯を食はして歸つてもらはう。」

など丶言つて順一は待つ樣に成つた。

最早少し親切も盡きて來たお良は、忙しい縫物しながら、

「まあ何といふ廣いお心だらう。」

と來たよく知る事の出來ない夫の心の中の限り無い深切を貴いと思ひ、自分の内心を恥ぢた。

淺村は例の樣に日に二度も三度も來て、

『當地の人氣は分りました。いや、どうも色々經驗をしました。私は斯樣眠つた樣な地は面白くありませんから、是から横濱へ行つて、新しく奮鬪して見ます。――汽車で行つては駄目です。是も社會研究の爲めに徒歩で行きます。夫れで五圓丈借して下さい。』といつた。

順一は驚き乍ら、淺村の是迄の仕口を誡めて、人の爲に盡すのも考へなければならない事、如何に社會が腐敗して居るといつても、一人の力で一朝にして改良するといふのは到底出來無い事、などゝ注意して、而して、金は本屋へ賣りに持つて行つて有る本が有るから、行つて其の代を貰へ、といつて名刺を渡した。其の時はお良も、自分の小袖を賣りに出して有つたが、其の代が朝來るか晩に來るかと待つて居る程、手許には何も無い苦しい時で有つた。

其の夜は淺村が明日出立する迄にといつて、持つて來た浴衣を、夜通し縫つて遣つた。

『淺村樣も彼樣片寄つた氣性では横濱へ行つても駄目ですわ。』

などゝ朝の食卓に向つて言つて居る所へ、淺村はすた〳〵來て、横濱行は中止しました、といつて、其の理由をこま〳〵話した。

暑中休暇に成つて、二人は屋主の老媼さんに留守を頼んで置いて國へ歸つた。その歸るといふ日淺村は走つて來て、其の時は早新聞配達に成つて居た。

動物園のお咄(岸田秋双畫)



『お留守は時々來て見て上げます。私が居るから、もし近所に火事など有つたつて大丈夫です。』

といつて居た。

其の後淺村は留守番の老媼さんが迷惑相にして居るから、私が來て上げて居ます。といふ手紙を寄越した。順一は格別疑ひもせず、居所が無くつて困つて來て居るだらう位に思つたが、其の仕方が氣にくはなくて、直ぐ出してくれ、と屋主へ電報打つた。そして二月許の後二人は歸つて見たら、大切にして居た書物は一つも本棚に無くなつて居た。制服も角帽も無かつた。近所のお婆さん迄は、いろ／＼淺村の事を話して二人を驚かせた。お良は、

『私は始めにあの人を見た時から今日迄の事が朧に見えて居ました。』

『夫れでもお前は夜通し着物縫つてやるでは無いか。』と順一はいふ。

『けれどそれはいふ事が出來ない位ぼーつとして居ました。』

などゝいつてお良は笑つた。二人は無益な骨折をしたのと耻ぢ乍らも、淺村が角帽着て制服を着けてどんな芝居をして居るかを言ひ合つて笑つた。

軈て『大學生と稱する色魔』と言ふ見出して、淺村が警察の手で捕へられた顛末が、地方の新聞に出て居たのを見た時は、二人は心地善げに笑つた。夫れでもまだ、色魔とは例の新聞屋が書く事だらうと思つた。

或晩淺村の書いた日記が、質札と共に風呂敷に包んで、或本屋に預けて有つたといつて順一は借りて

來た。お良は夫れで長い謎が解けるだらうと思つて讀んだ。日記は前年尋ねて來る前の事である。

十月十八日――我が熱血を注げる片身のハンケチを君に與へぬ。神二人の中に幸を給へ――我は今泣けるなり。月は此の眞の情を知るならん。――其の愛らしき君と、幾日の甘き戀を談りし身も、今また再別れんとする。――破れ脚袢や、破れ布子、――

お良は吹き出す程笑はせられた。前年斯うして別れた女に、今度角帽で逢ひに行つた所はお茶番で有る。

二十三日――旅の疲れにて八時頃起きたり。主人夫婦は忙しげに、（居候三杯目にはそつと出し）三杯には食も終つて・重ね〲厚情を謝し、出でゝ行く先を高知市と氣の張り弓も的は無し。痛む足を引きずり、人川なん呼ぶ所迄來りぬ。夫れより道連れ二人三人と峠を越ゆ。其の中に速見郡日出町の人も混り居たりしが、故郷の人とて懐し。凹凸の甚しき山道も、連れの有るまゝ心安く越ゆ。見返れば名も知らぬ山は峨々として聳てり。――入日に心急がれて、足の勞れも打ち忘れ、――あゝ思へば遠く來つるかな。彼の鳥さへも塒に歸るものを我は何所に塒かある。あゝ思へばうたて此の身。――入日の山の遙き彼方には、母も親しの兄姉弟も、さぞかし拔け出でし我を思ふならん。母はさぞ我を怨めるならん其の恨の炎は眞紅に燃えて西の空を焦せるか。あゝ顧れば罪なりけり。あゝ罪の子よ。罪の子よ。汝は如何に成り行くか、我が身乍ら知らず。必竟成り名遂げて而して後に懺悔せん。西の空の紅雲は次第に薄れてオレンヂ色に變りぬ。あゝ恨は消えけるかと。

西の空を伏し拜む。

暮れて行く空を眺めて足を進ませ、椎谷といふに下り着きしは火點す頃なりき。――無理遣りに拜み賴みて宿を求めぬ。其所の主人の許に、食ひ逃げの事を誹られぬ。(二人の旅人、先日食逃げせしが、後を追ひ捕へて撿ぶるに、中々の惡者なりしとか)兎も角も泊り、痛む足を休ませて、日記書く隙も無く夢路を辿りぬ。

二十四日――昨夜祈りし甲斐も無く、今朝見れば雨降りて居たり。旅に雨ほど憎き物はあらず。せん方なけれど主の心暖ならざれば濡れ乍ら立つ。――暫時行きて農家に憩ひぬ。天も我を哀れと思し召してか。一時間許りして小降りとなりければ、空を眺めて進みぬ。

人は此のあたりを景色善しといはん。我もさ思へど、今の財布と衣にては秋風身に沁みて、――今宵は歩み明さんと思へど、さて暮れて見れば空は眞暗にて星も無く、一寸先も見えぬ樣な、眞盲目とはこれを言ふのでせう。――あゝ嬉し。後から灯が來た。これで命も助つた樣なものさ。

二十五日――山の頂上に達せし頃は日は既に入りたり。半傾きたる店屋に、寒き手と衣の袖に忍ばせて、店を片付けんとする嫗あり。あゝ斯く年老いても浮世の苦勞は遁れぬものか。母は今何せるか。此の嫗の樣にか。我は不孝の子。罪の子。

二十六日――須崎に着きし頃は黑白も分らぬ頃なりき。星は輝きて、――我を宿るに家は有れども金は無し。即ち田のクラの中に寢ぬ。――勞れて眠れども更るにつれて寒氣身に沁みて、あゝ昔を思ひ今を

思ひ、戀しき君を思ひ、悲しき身を思ひ、時々野犬の吠ゆる聲、藁を吹く風ざはく／＼と、後は波の音の聞ゆるのみ。人聲は無し。あゝ死なんか。どうせ罪の子よ。今迄世を欺き渡り來し過ぎこし方を思へば、社會の罪といはゞいはんも、思へば自ら求めし罪なり。――我世をすてしにはあらず。捨てられしなり

三十日――求むれど遂に此の地にも職は無し。三日にても住まば戀しき高知市を後にして、行く方に光も無し。唯我が心許を便りて德島へと越す。「旅千里財布空になりて秋の風」水神樣の生れ變りか。金色といへば眼鏡の縁許り一厘もなし。當つて砕けよと決心しつゝ、町も煙突も今は幽なる二里半にして後免町に着。山田過ぎて行き行けば川に達しぬ。橋もなし金も無し。あゝ只水淺きを天の助けと、少し下りて堰を渡る。あゝ清き此の流れ、穢多き此の身を入れても濁らぬか。我が身は此の水にも恥しき心よ。水鏡を見れば髭は延び、帽は破れて、――空は晴れて一片の雲も無きに、心は常に曇り勝ち、あゝ今宵も一夜、否明日も明後日も食せんに金は無し。腹はへりにへつたり。飢ゑて餓ゑて進まねばならず。斯くて行く中、酒に醉ひたる人に道問ひぬ。二言三言の後、我が家に來りて泊れよと。霹靂一聲とはこの事か、（神では無いかと思つた）酒に醉ひたれば戯れか。さては心もとなしとも思ふ。我が家に行きて泊れよ。我が家にもお前位の靑年有り。（此の國の人はよくお前といふ。）今年鎭臺に採られて臺灣に行くとか。親心なり。自慢話をする。――願つたり叶つたりとは此の事で有らう。行き度きは山々なれど、餘りにはしたなしと思はれはせぬかと思へば、確と返事はせざりし。今日は村芝居の有れば立ち寄りて見て行かんと爺の言ふまゝ、從ひて行く。若き女は白く塗りて、地金も見えず。一帳羅の虚物着、

我こそ美人よと言はぬ許り、青年は失れを見んとて押し寄する。可笑さ譬へんに物なし。幕明きて市若なん呼べる武士の子の、主人の身代りに腹切りて死ぬる。武士道の花なり。されど見る人は藝を見るのみにて、かゝる感有る者は一人も有るまじ。一幕見て出る。爺に誘はれて川を舟にて渡りて家に着く。人氣なし。暗きを探りて灯を點し、圍爐裏に焚き付けて自在鍵を下し、湯を沸かし始めぬ。祖母なる人あ芝居より歸り、飯を持つて來ぬ。麥飯ひ引き割り。今の身には是も過ぎたり。菜は味噌、(丸麥の鹽辛い)漬物(菜)如何にしても是のみは食へぬ。一口食ふ。鹽辛いやら苦いやら、何ともいへぬ。吐き出さんかと思ひしかど漸と呑み込みぬ。田舍の奴等は感じが無いか。神經が鈍いか。味が分らぬか。何にしても餘りに奇なる味。——

お良は讀むで『淺村樣は隨分嘘言を言つて私共を騙して居るけれど此の日記は眞實でせうね。』と言つた。そして漸々淺村の人物が分つた。

二人は面白い芝居でゝ見た樣に、淺村の事を言ひ出しては笑つた。

緣先の鵯上戸はまた赤い實を着けた。取られた本を買ひ換へる事も出來無かつたけれども、順一は相變らず暢氣な物で、警察迄歸つて居た幾分の本や角帽は、何時迄も受取りにも行かず、打ち捨つて置いた。お良も何時と無く夫に化せられて貧にも馴れ、さのみ苦勞とも思はぬ位横着になつて、朝々ぼーぼー鳴り響く汽笛にも驚かず、縫ひ物も怠り勝ちになつた。

『貴方此方の善い方の着物着ていらつしやね。』と出懸け樣とする夫を見て言ふと、

『お前も女だ、矢張虚榮心が強い々々。』といふ。

『貴方のお頭は淺村と同じに成つて來ましたよ。塵だらけで赤く蓬々と、おゝ穢らしい。夫れではどうも人格が下りませう。』

とお良は負けぬ樣に言つて笑つた。淺村がよく言つた虚榮といひ、人格といふ言葉は、此の家庭に面白い意味を持つて殘つた。



動搖

茅野雅子

思ひ出したやうに、折々寒い日が歸つて來て、わびしい雨が夕暮れから、雪に變るといふやうなことがあり乍らも、陰鬱に曇つた冬の空は、何處からともなく、日に〱明るくなつて、病室の中にも最う春の來たことを思はせた。淺黄色に軟かい芽をふいた、枳殼の垣の上に、連翹の華美でさうして何處となく物懐しい色も見られるであらう。郊外に出て見たら、紫紺にしめつた土に、麥の葉も鮮かに見えるであらう。南をうけた小川の堤には、小さい薺の花も咲いてるであらう。そんなことを想像し乍ら、三月も最う半を過ぎた頃、私は一人じつと病院の寢床の上に横になつて居た。

「入院なさらないでも、どうか斯うか行きませう。」

斯うも云はれたのであるが、主人は自分と下女一人といふ至つて人手の少ない家であるから、どうも賴まなければならない。看護婦や、產婆さんの食物の世話等も、主人を煩はさなければなるまい。世間にはさういふことに、却て一種の興味を持たれる殿方もあるやうだけれども、斯ういふことになると、殊にうるさがる人ではあり、旁々、病院の方が萬事都合が宜からうと云ふので、それと、氣がついた時から、直ぐ病院へ釣臺で運ばれた。七月頃に生れる筈だつた子が終に流產したのであつた。その上手術

そさへ受けなければならなかつた。

貧血の爲であらう。人が訪ねて來て時候の挨拶をする位のことでも、また一寸考へごとをしても、直ぐ耳鳴りがしたり、目が霞んで來たりした。私は成る可く心を動かさないやうに、そつと目を塞いだまゝ、眠た振をしてゐることが多かつた。斯うなるとまた不思議なもので、終日何の思ふこともなく、影のやうに茫然と寢て居ることが能きるのであつた。併しそれも長いことではなかつた。外面には冷たい冬が去つて、新しい春が匂ひ出したやうに私の身體にも精神にも、生活の力が漸々に歸つて來た。寢てゐて考へると、部屋の中位は、最う自由に歩けるやうに思はれる程になつた。

「大事をとる方がいゝでせう。」

と醫者の云ふまゝに、長くなつてゆく日を一入長く思つて、起上りもせずに單調な日を送り乍らも凡ての回復期にある病人の樂しさにもまして、云ひやうのない樂しさが身内に込み上げて來る。新らしい血が刻々に增して來て、それが爪の先、髮の端までも、強く脈をうつやうに感ずるのである。

私は天井の高い、可なり廣い病室に一人で寢て居ることが寂しくなつた。見ず知らずの他人と、同じ部室にゐるのは厭だからと云つて、無理やりに壹等室を望んだことを後悔しだした。訪ねて吳れる友達と云つてもさう澤山はない上に、もう來さうな人は、今迄に皆な來て吳れた。毎日來て吳れる夫も、勤めを持つて居る身體のまう長い間、話相手にもなつて居られなかつた。附添の雇女も此頃では話し飽きて、新聞をぽち／＼讀むで聞かせた後では、默つてることが多く、折々はそつと隣の附添室で晝寢等を

していた。何にも手のかゝらない病人なのを却つて退屈にさへ思ふらしかつた。

「ほんたうに、二等の方がいゝのねえ、話相手があつて。」

「まあ奥様。それは輕い御病人だつたらようおすがなあ、熱があつて、夜中、うん〳〵、うなられたら奥様、あんぢやう寢られやいたしまへん。」

それもさうだ等と、今更ら新らしい發見でもしたやうに考へた。私が此處に入つてからにも、この病舍から死體になつて出たものが二人あつた。その一人は十三歳の女の兒だつたといふ。それはある夜明のことであつた。

未だ薄暗い春の朝の靜に重い病院の空氣をふるはして、けたゝましい草履の音が入亂れた。何かいふ人の聲が低い乍らも力強く抵抗し難い、或物に押潰されまいとするやうに響き渡つた。三十分程前から眼の開いてゐた私は、直ぐ急變のあることに氣がついた。暫らくすると、張詰めた沈默が病院全體を壓搾するやうに思はれた。私は屹と惡感の身を襲ふやうに感じたのである。五分間程經つて、糸を引きちぎるやうな、悲痛の聲が微かに其沈默を漏れて來た。後で聞けばその死くなつた子の一人の姉が、悲しみの餘り卒倒したのであつた。

病、死、病院の中に漂つて居るさうした物悲しい運命の裏には不思議な明るい一面が開いて居て、外には見られないやうな強い生活の喜悦を示してゐた。それは回復しつゝある病人を圍繞した光と、嬰兒の出產とであつた。現に私が寢てゐる處から、病舍を二つ隔てゝ外の建物とは形まで違つて晴やかに塗

られた產室が立つて居た。そこには毎日、

「まあ御安產でお芽出度う御ざいます。」

「お坊つちやまで入らつしやいますつてねえ。まあ御丈夫さうな。」

さう云ふ言葉が繰り返された。

「はじめは女子の御子さんの方がようございますよ。」等とやゝ不足さうな聲が交つたり、

「お母さんのお身體が第一でございますから。」と云ふやうな悔みも折々紛れ込むことがあつたけれども總じて暗く沈んだ世界をよそに見て、取交さるゝ女達の言葉も殊更ら滑らかに艶やかであつた。私もそこに二晩程寢かされて、それから、今の室に移されたのである。

前にも云つた通り、私は寧ろ此明るい病院の一面に浮び上つてゐる一人であつた。雨の中に立つてる蠟燭の火のやうに、亡びまいとして病と戰つてゐる人々の苦痛が、壁を接してうめきだされたり、同じ棟の下に黑い死が忍び入つて來るを見て、さすがに身を震はして、生類の凡てが味はねばならぬ共通の恐れに戰くことはあつても、それでも尙ほ私の心は暗い方へ向くことは能きなかつた。考へることは凡然と未來の方へ流れて行つた。何かしら新らしく充實した世界があるやうに感ぜられるのであつた。

丁度日曜の午を過ぎた頃だつた。朝から來て呉れる可き夫が何うしたのか來ないので、半分はぢれて居る處へ思ひがけなくも、大阪の叔母が訪ねて來た。

「あら叔母さん。」

私は斯う云つて頭を少し擡げた。

風呂敷包みと洋傘とを附添室の方に居た女に渡して、小作りの故か年より十も若く見える叔母は、いそ〳〵と入つて來て、私の前に立留つて、凝と私の顔を見つめた。その眼は出やうとする涙を押へてゐるやうに見え乍ら、口元に寧ろ笑ひたい人のやうにも見なされた。

『叔母さんどうなさつて。』

いつも顔を見れば氣輕に直ぐしやべり出す叔母に今日に限つて斯うした妙に混雜した表情をして物も言はずに立つてるのを見て、私は怪しまずにはゐられなかつた。

『まあ御かけなさいまし。』

附添女の椅子をすゝめる聲に初めて我に歸つたやうな叔母は、私の間には答へやうともせずに、直ぐそれに腰をかけたが、やがていつもの快濶な調子に歸つた。

私は此の叔母の流暢な言葉で語られる樣々の物語を飽くことも知らず聞き入つた。櫻の花が例年より早く咲くだらうとか。叔母の二番目の子がこの四月から女學校へゆくとか、そんな平凡のことをも少なからぬ興味を以て聞いてゐた。

それから話は漸々芝居の上に落ちて行つた。三度の御飯を一度にしても芝居にゆかないではゐられない此叔母は、夢中になつて延二郎を讃め出した。私も可なりよく話したけれども、この五六年殆んど缺

舞伎町の紅い燈をくゞつたこともないので、たゞ默つて聞いてゐなくてはならないことが多かつた。

「うちは何うしてこんなに遲いのでせう。今日は朝から來てもよいやうに云つてたのに。」

私が突然かう云ひだした時、叔母の顏は變に曇つたやうだつた。私は叔母が熱心にしてゐる芝居の話の腰を折つたのを惡いと思つた。

「喬はんも氣の毒やなあ、私も此處へ來る前に一寸寄せて貰うて御飯をよばれて來ましたがなあ。」

「あらさう。叔母樣、寄つてらしたの、ちつとも被仰らないんだもの、ひどいのねえ。何をして、うちは。」

叔母は何か他のことを考へるやうに默つてゐた。「喬はんも氣の毒やなあ。」といふ言葉が何處か異樣に響いたやうに思つたけれど、私はそれをさして大した意味のあることゝも思はなかつた。

「え、何をしてゐてゝ。私ねえ、叔母さん、もう立つてもよからうつて先生が被仰るもんですからね、今日うちが來たら立つて見やうかと思つて待つてるのに。」

叔母は夫のことには何も答へずに、

「さうか、それはよかつた。立つて見なはれ、最う大丈夫だつせ、その顏色なら。」と云つた。

私は「えゝ、私立つてみますわ。」と云つたものゝ直ぐには起き上らなかつた。同じことなら夫の見る前で立つて見せたいと思つたからである。

「いつ迄待つてゝも來ないんだもの、かまわない立つてみやう、後でさう云つて驚ろかしてやるからい

ゝ。」そんなことを思つて私は叔母と附添人とに助けられて、靜に床の上に起上つたが、思切つてゆかの上に降りて立つて見た。

長い間、航海を續けてゐた人が、俄に陸を踏むだ時はかうでもあらうか、二週間程寢てゐた許りであるのに、足の裏に身體の重量のかゝるのが何ともいへぬ安心と快さを感せさせる。それ許りか、腹から腰にかけて急に輕くなつた身體は、急に脊が大きくなつたやうに思はれて、見るものゝ色が皆な新鮮に感せらるゝ。私は心から微笑せずにはゐられなかつた。

『もう、奥樣、大丈夫どす。』附添人も嬉しさうに私の顔を見て云つたが、叔母の方を向いて『またもう直きお後がお出來やすえ。』

私は耻かしいやうな氣がして下を向いた。叔母は何にも云はなかつた。今度目、私が頭を上げた時には附添人が、やゝ手持無沙汰な顔をして居つた。叔母は窓の外を眺めてゐた。

私は今日の叔母の擧動には、何だか不思議な秘密が隱れてゐるやうに感せずにはゐられなかつた。

花鎭祭、祇園の花と、京の春の盛りも過ぎ、嵯峨小室も新らしい綠に衣を更へて、都踊の舞の手振りも、稍ゝ倦怠の氣を帶びて、なげやりに亂れてゆく頃、私は今迄知らなかつた身の一大事を聞いたのであつた。叔母がいつか病院に訪ねて來た時の不思議な擧動も、それですつかり解つた。夫が私を見て苦しさうな顔をすることが折々あつたことも解つた。私は眞黑な壁に衝當つたのである。



午後三時 (秋川若菜畫)

齣插……325

「最う御子さんはお出來なさらないかも知れません。」

云はゞ斯ういふ意味のことを醫士は宣言したといふのである。其ことを聞いてから私を照らして居た太陽は急に光を失つて仕舞つた。永久に失つて終つた。もうどうすることも出來ない。私は泣かずには居られなかつた。

此の話を私に聞かせた時の夫は、もういつもの强い、力のある人であつた。物事に當つて人並優れて激烈な感情を持つてゐた夫は、一面運命の不可抗力に對して極めて從順であり得る聰明を持つてゐた。丁度あの谿間を走る激流が驀然に山を衝き岩に當つて碎け乍らも、やがて飛沫を集めて悠々と淵を湛へ瀬を作つて綠をうつし紅を點づるにも似てゐるのである。

「夫婦は子を作り子を育てるといふ丈けではないよ。最つと重要の、貴いものがあるに違ひない。吾々は其處迄行かなければいけない。」

夫は確く信ずる所あるやうに斯う云つて、私を慰めた。併し私には其意味が充分には解らなかつた。そんなことを云つてゐる夫自身も自己を美しく詐つてゐるに過ぎないのではなからうか。

子の無い夫婦。世間に類のないことではないけれども、とう〳〵さういふ不幸な群に入らなくてはならないのだ。

「私一人なら未だよい。夫迄もさういふ殘酷な目に合せるのは堪へられない。」

日夜思ひつゞけて泣く外はなかつた。私は歸るに家のない身體であつた。濕つた病院の空氣の中に此

樣な不幸が自分を待つてゐるとも知らずに、獨り樂しい思に耽つてゐた私は、天鵞絨のやうな手ざわりの暖かい風が、軟かい匂を吹く世界の中に、薄暗い室の隅を求めて、獨りくよ〱と、深い寂しさと悲しみの底に沈んで居た。

「何處かへ行かう。」

朝から書齋に入つて、好きな讀書の出來るのを唯一の樂しみにして、日曜々々を待遠しくして居た夫も、私の一人、じめ〱して居るのを見かねては、よく私を誘ひ出した。

新婚の人達のやうに、二人は手をつなぎ合つて、嵯峨にゆき、小室に行つた。新緑の中から見える仁和寺の塔や、黄い壁の色も捨て難かつた。宇治は殊更らによかつた。水に望むだ旗亭の一室に通つた私達は、若鮎の香ばしい鹽燒を肴にして一寸盃を取つた。

「何處かで三味線が聞えるね。」

酒量のない夫はもう指の先きまで眞赤にして耳を傾けた。私は立つて縁の先きの欄干に凭れかゝつた。

「何處でせう。斯うやつて聞いてると何だか河上に聞えますねえ。」

「さうどすやろ。きつと、最前この向ひから舟を出しやはつた衆に違ひおへん。」

果して給仕の女の云つた通りだつた。やがて五六人の男女を乘せた屋形船が上から下つて來た。最う三味線はひいて居なかつたけれども、赤い毛布の上に座つた人々は酒を飲むで興じてゐるのであらう。

時々どつと大きな聲を出して笑つてゐた。女は藝者らしかつた。

『や、おつにやつてるな。』

夫も欄干に出て來た。舟の人々も私達の方を見上げて、わけもなく笑ふのであつた。

人生の短かいことを知つて、當面の歡樂に飽かむとする人達を乘せてるやうな、その船の行き過ぎた後も、私は茫然として流れる水の姿に眺め入つた。滔々として逝いて盡きぬ水を思へば、自分の寂しみも悲しみも、またその中に流れてゐるやうに考へられた。子から子に傳はつて行く人の命も、實もなくて枯れすがる花草のやうな自分も、畢竟は同じ哀愁に根ざしてゐるやうに感せられた。それでも尙ほ涙は頰を傳つて流れたのである。

自分の心を慰めやうと思つて、力めて物見遊山に日を暮した私は、初めの中こそ華やかな處に行けば行く程、自分一人の暗い色が殊に目に立つやうに感じて、一層やるせない思を增しもしたが、日を經ると共にうら寂しい自己の運命を悲しむ心も、だん／＼と紙を剝ぐやうに薄らいで來た頃には、最う今迄のやうに落ついた家庭の生活に歸ることが出來なくなつて居た。強い刺戟に馴らされた目や耳は、變化のない四圍の空氣に堪へられないで、音樂會とか、芝居とか云つて、大阪神戸邊迄も私を飛びあるかせるのであつた。行く處がなくなると活動寫眞へさへ入つた。

或る夕方私と夫との間にはこんな會話が取り換された。

「此頃のやうだと、大阪の叔母さんも、芝居にかけては、お前にかなふまい。」
「まさかさうでもありませんけれどもねえ。……叔母さんの方はずつと以前からですもの。」
「それでも同じ芝居を二度見に行つたりはしまい。」
「それはねえ……併し先月の中の芝居は眞實によかつたんですよ。紙治の炬燵ですもの。」
「さうかい。」夫のその顔を、私は非難してゐるのかとも思つたが、さうでもないやうだつた。云はうと思ふことが直ぐ言葉にならない時、此人の眉目の間には重い苦痛の色が現はれる。今もそれであつたのだ。
「血だね、矢張り。」
「え。」私ははつと喫驚した。突然夫の歯の間から嚙み出された。その言葉の意味を考へる暇もなかつたのであつた。
「なに、血統だらうといふのさ。芝居や音樂の好きなのは。」
「さうかも知れませんわ……母も好きだつたし、叔母もあの通りですし。私も小さい時にはよく連れられて行つたんですものね。舞や三味線のお稽古は少しはしたんですよ。」
「今でも彈けるかい三味が。お前おれの處へ來てから、一度も彈いたことが無いぢやないか。」
「でもお琴と違つて何だか……何なら彈いて見ませうか久振りに。」
「はははは……お前も大分變つて來たねえ。」

「大分變つて來た。」それは私も認めずには居られなかつた。寧ろ喜んで云つて呉れた夫のこの言葉も、私自身には可なり耻かしく聞えずには居られなかつた。

どつちかと云へば、しとやかだと云ふことが私の特長だと人も許し、自分でも私かにさう思つてゐた私の、今日此頃の擧動は何といふ騷々しいものであらう。若い娘の浮々と樂しむでゐる軟かい懷しさもなく、譬へば、狂ひ咲きの花の物荒まじい樣にも比べやうか。顧みると我ながら汗の出るやうな。

「否、々、々」私は高く斯う叫びたかつた。ならうことなら此二三ケ月のことを皆んな揉み消して仕舞ひ度いやうに思つた。併し二三日すると最う家に靜つとしては居られなかつた。夫は大らかな心に私の我儘を許して、たゞ遠い目に私を監督してゐるに過ぎなかつた。丁度神經を立てた子供の守をする大人のやうな態度であつた。

斯うしていつの間にか夏も過ぎて、朝夕は單衣の上に羽織を引掛けたいやうな日が續いた。

「最うすつかり秋になりましたねえ、叔母さん。」

避暑から歸つてから、久振りに又、私は大阪へ行つた。地方廻りから歸つて來た雁次郎と延次郎とが一座をするから是非泊りがけで見に來いと招かれたのであつた。

「よろしおましたやろ海岸は。」

「ええ、でも退屈でねえ‥‥だけど叔母さん、お蔭で私三味線のお復習が出來ましたよ。もう何年ぶり

物　（森田太三郎畫）



動　指……………………331

でせう。」

私は態とらしく指を折つて數へてみた。一二・・・

「かれこれ最う八九年になりますね。こんな長い間どうして一度も撥を取つて見たいと思はなかつたのでせうね。全く嘘のやうですわね。」

「あんたとこでは、餘り好の方でもなささうだつな。」

「さうでも無いやうですがねえ。何しろ本ばかり讀んでる人だから。」

私は何んだか急に悲しくなつた。自分が華やかな外氣を求めて飛歩いてる間に、夫は獨り寂しい心を懐いて事業を營むで居るのだ。せめて自己の命をその上に殘さうと思つて働いてゐるのだ。それに無智無能な私は、それを助けることが出來ない許りではない、力弱い私は自分の勝手な擧動をして、却て夫を苦しめないでは止まないのだ。子といふものを外にして、私のやうな平凡な女は、何一つ夫に酬ゆることが出來ないのだ。犬や猫もなほよくする。その力さへ今私には奪はれた。

「思ひ出さん方がよろしい。」

叔母の氣の毒さうな顏を見て、私は强て笑顏を作つた。叔母は言葉を續けて、

「でもよう覺えてなはつたなあ。矢張り稽古ごとは小さい時するもんだすなあ。」

「さうですよ。少さい時に習つたのは割に忘れないものですわ。この間も東さんの繁ちやんが來て一緒に彈いてみますとね、私の方が却つてよく覺えてる位ですもの。」

「さうだすやろ。あんたは五つ位の時からお稽古をはじめたんだすもの。」
私は生家の榮えてゐた頃のことを考へた。春秋の温習會などには可なり人の目を引く華美な事もしたものであつた。それが一寸した商業上の手違から一時に沒落して、私は十六の年から東京の親類の家に引きとられる。父も間もなく亡くなつた。母は幸にもその離散の慘状を目にしないで世を去つたのである。
「併しねえ、叔母さん、子供の時にはたゞ複雜だ手を綺麗に彈くとかむつかしい處をよく覺えるとかいふことが張合だつたし、たまに讃められでもすると無性に面白く嬉しかつたものですがねえ、あの頃は矢張り眞實には解らなかつたのですね。」私は考込むやうな叔母の顏の若々しい心のこの人には珍らしい思慮深さを見乍ら云ひつゞけた。
「ねえ、叔母さんは何う思つて。私ね斯う絲を彈いてると何だか引き入れられるやうに、悲しくなのるですよ。……まあ悲しいつて云ふんだか、寂しいつて云ふんだか、妙に斯うあはれになるんですもの。」
「矢張り身につまされるのだすやろ。わてえでもさういふことはあるよつてになあ。」
叔母の言葉もしみ〴〵とした。
「年の故でせうねえ。」
笑談らしく云つて笑つてみたが其聲は冴えなかつた。
「華美な長唄の中にだも何處か浮き度いやうな調子があるもんだつせ。」

「眞實にねえ。」

いつになく話が漸々滅入つて行く處へ、下女が車の來たことを知らせた。私だちの車はやがて勢よく赤い提灯の下つた芝居茶屋の門口に引き込まれた。

その翌日は早くと思つてゐたのに、丁度土曜に當つたものだから、叔母の家の子供等にせゞられて箕面の動物園へのお伴をさせられたりして、歸りの汽車は可なり遲かつた。それに夕飯頃から、ぼつぼつと降り出した雨は、さして烈しくもならなかつたけれども、秋らしく濕やかに降りそそいで、夜更けのプラツトホームは、いつもの活氣あるに引きかへて、何となくわびしかつた。遠い旅をする人を送るらしい人々が、此處彼處にちらほらと、塊になつて話してゐるのも、思なしか影が薄いやうで、笑聲さへ陰に寂しかつた。

私は列車の窓に音もなく降りかゝる雨の脚の、車內の電燈に照らされて小さい玉のやうに光るのを眺め乍ら、歡樂の後の寂味に似たやうな甘い哀愁に身を委ねた。本來の性情の然らしめるのか、それとも種々の不幸に逢ふたものゝ常なのか、私は如何に美しく華やかな世界に心を放つても、畢竟推移の哀しさを味はずには濟まなかつた。私はまた過去半年の生活を振かへつた。

「それはまあ御不幸の中にも何よりで御座いますこと、」

耳元で斯う云つた聲が不圖私を沈んで居た考から呼び覺した。それは丁度私の直ぐ後に坐つて居る四十恰好の女の人だつた。さう云はれた人は、もう五十を越えて居るだらう。薄くなつた鬢の毛に大分白

いものが見えた。私が振返ると丁度眞直に此方を向いて居たので、その柔和な小さい眼も、小ちんまりした鼻も、脣の下の細い皺までも私には明白と目に映つた。物なつかしい人だつた。

「眞實に私もまあ幸福だと存じましてねえ、今では他人の子のやうには何うしても思はれないので御座いますよ。」

私はその聲に耳を欹てた。母の聲のやうな懐しさがある。

「それだものですから、時々私もさう申すので御座いますよ、お前と私と不思議に此世で嫁姑になつたけれども、前世には眞實の親子だつたかも知れないなぞと。」

「全くで御座いますよねえ。御子さんでもおありなされば格別で御座いますが、さうでもおありなさらないと、お舅さんがおかくれになれば、まあ十が十までお嫁さんはお里の方へお歸りになりますものですのに。まあさうしてお睦まじく一所にお暮しなさる貴女でございますが、又お若いのにお嫁さんもよいお心だてで御座いますこと。」

「私も時々は誰か良い人があつたら貰つたら何うだらう。私には他に子供もなかつたし、この儘では瀬川の家も斷絶て仕舞ふ譯なんだから、若しさうしてお前達に子供でも出來たら、私も眞實の孫のやうに嬉しからうと申しますとね、嫁はまた嫁で、相當の理窟を申しますのでございますよ。」

速力を増すのか汽車の響が急に高くなつたので、暫く二人の會話は聞えなかつた。

「…そんなに云つて呉れますと私も尚いとしさが増しましてねえ。」

私は強てその方をみないやうにして居たけれども、あの小さい柔和な眼から涙が零れるのが明白と想像されるのであつた。

『それは息子が在世の時にも、ちよい〳〵致して居りましたので御座いますが、夜分など寂しくなりますと、一人で書齋へ籠りましてね、態々そのために京都から取よせた色々の香を焚いて、その匂をきいて居りますのでございますよ。大昔の女は髮や着物に香をたきしめたと申すことで御座いますがねえ、嫁もまあさういふ風なのでございますのか、さうやつて種々の匂をきいて居ると、心がすうつと澄んで來て、その癖どことなく暖かく賑かに思はれるのださうで御座いますよ。月の佳い夏の晩等不意と二階へ上つて見ますと、灯もつけない部屋の中に、細々と立上る煙をながめて、じつと心を澄してる姿を見ますと、私までが終ほろりとする程殊勝な心持になりますので御ざいますよ。』

私はゐても立つても居られないやうな心持になつた。見えない大きい手が骨の髓まで浸通れと續け樣に背を叩いてるやうにも感せられた。私はその時にはそれを何故だとも思定める餘裕がなかつた。

『それから嫁はまた斯う申しますので御ざいますよ。私が生きて居ります間は、亡くなつた人の心は確に生きて居られるのですから……その中には素性の正しい子供を貰つてその子供に自分達の心を傳へれば、譬へ血は混つて居ないでも、生命は長く傳へられることになりませうつて。私のやうな老人には何だか飲込めない處もあるやうに思ひますけれども、あの嫁が申すことだと思へば、その云ふなりになつて居りますのが、私には結句嬉しう御ざいましてねえ。まあ差當り、かせぐ人が無くても、どうかかう

かやつて參りますものですから、女二人の世帶で……。」

汽車が何時の間に止まつたかも知らないで居た私は、どや〳〵と乘り込んで來た人々に初めて氣がつけば驛夫が京都々々と呼んで居るのであつた。

逃げるやうにして、また小雨の降り止まぬプラットホームへ飛び降りた私は、汽車の再び動き出す迄其處に立つて居た。大きな聲を出して泣きたいやうなすがりついて祈り度いやうな心持だつた。併し涙は一滴も零れなかつた。

その後間もなく私の生涯の新らしい日が來た。

（終）



箱から出た女

内藤千代子

一

「平尾様の別荘のお嬢様かね。お目にとまりましたかい。ヘッ〳〵ヘッヘッ。へえ知つてます段ぢやねえ。評判ものでさア。ウンニヤお前さま、もう旦那はあるでがすよ。よく手え組んで歩いてまさア。」

厚い掌に吸殻をころがしながら美味さうにすぱり〳〵。庭前を掃いてた爺やをつかまへて、まアお話し〳〵無理遣り縁に腰かけさせたのは、黒い髪をぴつたりと分けて、色の赤白い丸顔の、眉の濃い二十五六の優男でした。糸織の褞袍鼠羽二重の兵古帯尻高に引結び、一閑張の机へ片肱ついて、寶石入りの指環はめた白い手で、しきりと左の耳たぶを丸めては放し丸めては放し。

「平尾様の……はアよくお見かけ申しますですよ。エヽお美しい方で。あの東京にも澤山はない御容色だつて申しますけれど如何ですか。お二階の學生さん達なんぞ。彩子様がお通りなさると申すと、もうさわぎなんで御座いますよ。」手捌よく茶をついで出しながら受持のお花さんは云ふ。

この客は夕方散歩に出たついで、角の煙草屋で敷島を二つ買つた。一つは袂へ、一つはすぐと口を切つて、そこの火鉢で吸ひつけて、平尾の別荘に來てゐる女つてどんな人だときいた。お世辭のいゝ五十

ばかりの主婦さんが答へやうとするのを引取つて、

「ヘンお孃樣――お孃樣がきいて呆れらアね。この頃のお孃樣くれえ油斷のならねえものはねえですよ。旦那、あの娘つ子もね、日髮日化粧でしやなり〳〵、天人樣のやうな顏してるだが、どうしてなかなかの吝嗇者で、乳母さんも大抵ではあるめえつて云ふことさ。此間も…あれは正月の四日の日かねえ東京から客があるから蕎麥を打つて貰ひてえつて、あの乳母さんが蕎麥粉二升ばかり持つて、私が裏の家へ賴みに來さしつたんでさ。

丁度わし居合せたもんだから、田舍蕎麥でお客樣の口に合はねえやうちやと一式のことにわめいての。わしんとこから鷄卵を持つて來る、山から貰つた長芋があつたもんだから其奴もさん出したりよ、うで上るまでつききつて居て、それでも賴まれ物だからと一つ箸の初も見ねえで、別莊へ持つて行つたですよその時だつてお孃樣ア奧から出ても來ず、禮一つば云はつしやらず、有合せの菓子折に手拭の二三本つけてよこさしつたきりよ。旦那の前だがね、朝晩芋團子に味噌汁ばかり吸つてる百姓等に菓子折なんかどうしべい。それが砂糖でゝもあればな、ア、何處でも調法しるだけどね、藝もねえお前さん、小供どもがジヤのやうに食つちまひましたよ。

否え何も手間なんか欲しいとは云はねえさ。長芋なんぞも此方の勝手で入れたもんだからそれはいゝさ。せめて鷄卵の錢だけは貰はなければお前さん、三錢五厘つしる時だつたよ。利口者だ。その位のことに氣のつかねえお孃樣でもあるめえけんど、しまりやなのさ、そんでお高くつて〳〵近所のものになぞ

莞爾とならしたことはねえだ。

「なみ〳〵のお嬢様なら何の年中こんな土地に隠れてゐべい。何だか知れたものではねえだで、乳母さんと只た二人、何をいゝことしてるだか。」

店先に話しこんでた古女房、俵の様な膝をゆすりながら、襷掛の澁紙色した腕を扼しつゝ大口開けてまくし立てるに、可哀想に客は面喰つて了つた。

二

この時平尾別莊の奥座敷には、彩子が緑の安樂椅子にもたれて、目覺るやうな紫の紋羽二重に包まれた肱枕、白魚の指を頂に組んで、深い吐息をついてゐた。

折からの夕陽を浴びて、きら〳〵と照る黑髮は、ハイカラな併し上品な、名も知れぬ卷方の束髮、水色地に緋の亂菊を刺繡の半襟は、一入色を白くみせ、小作りのせいか二十一の年よりはずつと若々しく、黃八丈に藤色の細ぶき、振をこぼるゝ襦袢の袖は燃ゆるが如き緋縮緬。

輪廓のいゝ細面で、濃い生ぎは、一文字眉、鼻の高い眼の黑い、何處となくはき〳〵とした勝氣の容貌だけれど、これで含笑む時にはウソの様な可愛い笑渦が現はれるのでした。チラリと左の糸切齒に金を入れてゐる。

待つて待つて待ちぬいた土曜日は今日となつて、朝から物事は手につかず、好きな讀書も身に入らず、二時も過ぎ、三時となり、四時となり、心たのみの五時も過ぎ、六時も過ぎたのに、門にわだちの

音も聞えず……。午後からはもう、牛乳屋の小僧が門を入り來る瓶のふれ合ふ音をさへ、俥の響ときいてはつとなり、隣家の犬がほえたと云つては胸とゞろかし、イラ〳〵待ちわぶる心の中。

身も心もつかれはてゝこの椅子にくづ折れてから、だん〳〵氣が遠くなつてゆき、あれ、彼處に誠一樣が……愕然と我にかへつたとき、四邊は薄暗に暮れ切つてゐました。二ッ三ッ四ッ星がまたゝき出して……。

「彩子樣、おや、お緣に。お羽織を召してゐらつしやいますか。お風邪を召しますといけませんで厶いますよ。」

乳母がはいつて來てランプを點けました。

「今日は、もしかすると誠一さんが……。」

あつち向きのまゝ椅子をギチ〳〵ゆすぶりながら、併し思ひあまつた一端を少しもらして、やゝ心は輕くなる。

「おや、左樣で……。中山樣は今度しばらくお見え遊ばさないンで御座いますねえ。」

「さうよ。だつて。」

身體をねぢ向けて、

「お多忙いのよ。御勉强が。他の方たちは春期休暇に、房州だの湘南だのつてお出掛なさるけれど、誠一さんはこつちへ來ると、私がお邪魔ばかりするもんだから。」

言譯らしく語つて含笑む。

「さびしいわね、誠一樣來ないと。」

「左樣で御座いますねえ。あんなお活潑な方でいらつしやいますから。」

涙はポト〱と膝に落ちた。こんなに〱待たれるとも知らないで、誠一さんはいま何處にどうしてゐらつしやるのだらう……。つと立つて室内に入りながら、これも神樣の試みと思つて、あきらめられぬけれどあきらめる。來て下さらないからつてお恨みの出來る身分ぢやなし……こんな時いつも彩子は、不如歸の浪さんをおもつて心を落ちつけるのでした。

病氣の浪さんでさへ武男の留守を、二月でも三月でも暮せば暮されたものを、私なんか、ねえ誠一樣、強て顏をあげて、莞爾とほゝゑみました。が、生憎はふり落つるは玉のやうな涙の雨！ 我ながら迫り來る呼吸ぐるしさに堪へかねて、

「自然の成行に任せるより外ないのだわ。」

ひしと胸をおさへて叫びました。

掻き挘られるやうなこの思ひ、たゞ逢ひたくて悲しくて、世も名もそんな物は——彩子の前には何物もなかつた。あまりに戀しくなつかしさの募る時はどうなる身の末ぞとあやぶまれもしたが、

「もう八時打つたのに……」

書棚の置時計を見返つた眼は、またも湧き出づる小霧にへだてられつ………、

「乳母、もう門を閉めてもいゝことよ。
この次の汽車だと、藤澤驛へ八時半なんですもの、だからもう。」
わざと元氣よく云はうとしたのも、途中でとぎれて含み聲。
しきりと沸騰り立つ鐵瓶の湯は、さしそへてもさしそへても松風の音となつて散じ去り、あたゝかい春の夜はゆるう更けてゆく。

三

話は十日ほど後にもどる。
場所は麻布なる平尾邸の西洋室、その日は午後からめづらしく閑な身體を丸卓によせて、夫人芙代子は吸さしの莨を灰皿に落しこみ、
「ね、芳夫さん。さうでせう、」向ひ合つた青年の顏をみる。
「いや、姉さん。」
わざと頭抱へて恐れ入る。女のやうに長い襟足、雪恥かしく、黒羽二重の羽織、糸織の二枚襲、芙代子夫人の甥とあつて――即ち鵠沼の東家に現れたそれ――一歳違ひの叔母甥なれば、いつも姉さん〳〵とのみ呼んでゐる。
艶々した丸髷、金脚の玉の簪、紫紺地の半襟に栄ゆる襟の白さ、髱つきのよさ。流石に服裝はじみなので、二十七違ひの良人を持つても、さのみ不釣合とは見受られぬ。それ者上りかと疑はるゝは、顏立

のさうなす業で、どうしてこれが一年前まで、××女學校に敎鞭とつた人と思はれませう。

卓上の貰入から一本とつて芳夫と火の口を合せつゝ、

『だから芳夫さん。そんなことを云つたつて仕樣がありはしませんよ。貴郎が彩さんに相當したやうな人なら、私だつてどんなに嬉しからう。云はれるまでもなく盡力もしませうけれど、いかに贔屓目で見たからつて、芳夫さんに彩さんをとは何うしても云へはしません。またお父樣がお嫁りなさる筈もなし……。』

『伯父さんは姉さん次第なのぢやないか。彩さんは、僕よく知らないけれど、箱入娘で育つた人だらう何にも知りはしないんだ。だからそこを姉さんが。』

『だから芳夫さん。貴郎が御當人を手に入れてお了ひなさいと申すのですよ。さうしたらあとはどうともして上げますわね。けれど、何だわ。貴郎が思つてるやうに、財産を分けるの何のと、そんな事はありません。それは違つてよ、芳夫さん。

何もあの女は當家の何でせう。先の夫人が、御自分の血筋だから連れていらして、お育てになつたまでのこと、籍だつてお實家にあるんですし何も此方ぢやこれまでの好みに相當の支度して、嫁けてさへ上げれば、それでいゝ——澤山なのですわ。

何だか明坊が出來たからこんな事云ふやうで惡いけれど、芳夫さんは何かあの女が、當家の相續人ででもあるやうに思つてお出だから……。』



ヂギタリス（橋口五葉畫）

『だつて左樣なのぢやないか。實際、姉さんさへ來なかつたら、こゝの家は彩さんの物なのさ。ねえ。それを明坊が生れたからつて、今更千や二千の嫁入支度で厄拂ひつて方法があるか。伯父さんもこんな人ぢやあるまい。え。』

『ウソ被仰い。人聞の惡い。お父樣は私が來る前に、彩子は一先麴町へあつけやうかとまで被仰つたんですよ。けれどお實家には御兄弟も多いもんでせう。自分の勝手で別莊の方へ行つて了つたんですわね。別莊へだつて私が追ひ出しでもしたやうに云はれてるけど、何の、別莊のね、先の所有主から引續いてゐる留守居つて云ふのが、彩さんのもとの乳母だとか何とか、それだもんだから大よろこびで、手まはりの道具なんぞもみんな別莊へ運んで了つて、今ぢやたまに東京へ見えたつて、他人行儀、まるでお客樣のやうですわ。打ちとけにくい方でね。』

『ぢや何かい。彩さんは本邸へは滅多に來ないんだね。』

『えゝ、麴町の方へばかり行くんでせうよ。乾度。麴町ぢやアお兄さんや弟さん方のお友達が大騷なんでせう、どうしてこの頃の若い女は油斷がなりませんよ。かへつて箱入ほど蟲のつきやすいもんでね。いろんな噂も耳にはいるけれど、何も私がそんな事に干渉する義務もなければ權利もなし……。つて何ですよ。打捨つてもおかれませんしね。實家ぢやまたお母樣が、矢張手許におかなかつた子は子の樣な氣がしないつてね。兩方から繼子あつ

かひにされてるんで、思へば彩さんも可哀想なんですよ。』

『否。伯父さんとは仲がいゝつて話ぢやないか。』

『どうして——情の薄い方でね。先の夫人が亡くなつた時だつて、涙一滴こぼさなかつた。それや平氣なもんだつたつて、親類中の一つ話になつてますわ。ましてお父樣となどしみ／＼お話なすつたこともないんですつて。私が嫁てからはなほのこと。妙な方ですよ。イヤに澄ましてね『芙代子樣』ですつさ。私のことを芙代子樣／＼つてねまア。』

栗梅の小紋縮緬の肩をゆすつて、

『何しろ、芳夫さんの奥さんて柄ではありませんね。ホヽヽヽ可笑しいやうだわ。貴郎も相替らず蕋がいゝわねえ。』

芳夫は俯いて、小指の先で耳の穴をほじつてゐた。

四

『あら、誠一樣。』

『はゝゝ』

朗らかな笑ひ聲、薄紫の富士を見渡す築山の上の四阿に椅子を並べて語らふ二人。まぶしいやうな白銀の小波よする泉水と、枝たわゝなる吉野櫻と、碧玉の空とを背景にして、珍らしい唐人髷、紅白の丈長を三枚重ねて、大きな緋薔薇の花束をさし、日向には白過ぎる程の厚化粧、長い髱をすーつと、羽織

の下に結び上げた帯の高さ。
誠一は彩子と五歳違ひ、中肉中背で五分刈頭の、顔は丸い方、引しまつた口許、涼しい眼ざし、太い眉毛は何處か癇癪持らしく、小高い鼻に金縁眼鏡、髭のあと青々と、羽織は黒の五ツ紋、太白の太紐豊かに結んだ胸をテーブルでくぎつて、右手に吸さしの卷莨の灰を彈く。
冷むる紅茶をそのまゝにして、ぢつと俯いた彩子は、紫銘仙の膝を撫て居る。
袂に顔をおしあつるや、颯と、緑濃き鬢を透かして、血のたれさうな耳朶の紅。
誠の戀の證據には君のすべてをたまへとせまる、處女の權威を地になげうてよと云ふ。
彩子は泣くより外ありませんでした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

丁度去年の四月中旬、遊行寺の白木蓮の眞盛な時分でした。キチンとした角帽の青年、七里ヶ濱に病を養ふ友人を訪ふとて藤澤驛に下車した誠一が、電車の乘場で圖らずも彩子に邂逅つたのは。
彩子その時は活花のかへりでありましたとやら、ルイザ卷に水色リボン、手に持つ緋桃の花よりも濃く紅潮して……會釋したのが精一ぱい。
「おより下さいまし。」つて、たつた一言。
何心なく誠一は彩子とつれ立つて鵠沼で下車ました。右も左も小松原、翠緑に染ゆる矢飛白と制服の黒との見えつ、かくれつ。濃紫のパラソルの蔭にかくるゝ、彩子の頬は、日光に蒸されしそれのみな

らで、息のはずむまではてつてゐました。
小花まじりの若草を靴のあと、緋ビロード表の草履でふみつけながら。
それから誠一は、折々この別墅に浪の音きく身となつた。
聖なる兄よ妹よ。と誓ひ合つたのも、刹那の眞ではありましたらうが、いつまでそれのつゞいたものでせうか。いつとなく激しやすく、狷高な、顔の色さへ白うあせ、妙にヒステリックな氣のするどい女となつて了つて、思ひつめては矢も楯もたまらず、一週間の別離を悲しみ、日毎日毎に書き送る彩子の歌は絶えませんでした。帝劇の特別席に二人並んだ姿をみたも、精養軒の樓上に、愼ましう卓をはさんで語らふてゐたと云ふのも、運動會や音樂會につれ立つたのをみかけたと云ふのも、みんなその頃からのことなのです。
人の肌に手を觸るは、新なるべき君が手よ。暫時は許せ。我が胸に、遠のく浪の音あらむ。」
一盞の葡萄酒に熱し切つて女の膝を枕にたふれた人は、その和らかな手をとつて胸にかき抱いた。彩子は湧き出る懐かしさの情の、渾身の脈にめぐり渡るをおぼえて、沸ゆる涙を漑ぎつゝ、男の肩に面を伏せてひた泣きに泣いたこともありました。
感情の高潮に達した時期も過ぎました。
一語なくとも眼と眼相見て心足りし日や、純の純なる熱情の燃えたつて、心と心のぴつたりとふれ合ふた時の氣分はもう得られない。いつよりとなく萠しかけた、疑ひと云ふことや自尊心と云ふこと、そ

れらによつて溶化しきらぬ心の缺陷をおぼえた彩さんは、そのさびしさやるせなさ、もどかしさに、焦れてもだえて泣いた。すねた。誠一さんに當り散らしもした。

『彩さん。女つて氣樂なもんだねえ。駄々さへこねてりやいゝんだね。男子はこの激烈な生存競爭の渦卷のまん中に、血と骨をけづつて奮鬪しながら、君たちには不自由させないんだからね。着物もこさへてくれるだらうし、芝居へもつれてつてくれるだらうし…。馬鹿にしてる！』

と云はれた時には、たまらなくなつて落涙した。

やつぱり自分は一人だつた。人の心に隱れ家はなかつた。吾を守るもの吾あり。あまり人に多くを望み過ぎたら罪だつた。とさとつては、それが二人の靈の離れ行くはじめでありました。

青春の智力充實、輝くごとき希望をもつて、人生の光明境に突進しつゝある誠一さんと、現實の世界をさけすんで、すねてぐづつて立ちすくんでゐる彩さんと、同じ道を行けやう筈はありません。明るい心と暗い心と、そむき合つた思ひを持つた二人は、どうしても別々の天地に生きねばならぬ運命だつた。

初心と云はうか。無造作と云はうか。二十一と云ふ年をしながら、あまりに幼かりし己を恥ぢ、戀愛の意義も知らず、最後の目的もなく、まつはり戀した自分の愚さをおもひ、さりとていまさら絶ちがたき愛著の情の切なさ、苦しさに、彩子はこのまゝ氣も狂へとばかり、醒めてはかなき日は來れるに…泫然として泣いたる。

五

『だつて乳母。』彩さんは打ち傾いて、讀みさしの頁を指先で彈きながら、洗ひ髮を肩に流して、頭上に光るは眞珠入のさし櫛、籠ランプの灯影に顏色美しく、ふくやかな友禪の座布團に横座り、ぴつたりと片頰は机へあてゝました。

『だつて乳母。』

てら／＼と灯に寫る紫檀の光澤、その上に伏せた半面、石膏細工の樣に眞白く、動かさぬ瞳の黑さ。飽くまでも拒み通して、勝利の悲しみを味はふか。愛の犧牲となつて服從しやうか。彩子は死ぬ決心をするほど迷ふた。食もすゝまぬこの頃の有樣を、乳母は乳母だけの取越苦勞から、あらぬ臆測をたくましうし、今宵しも面をおかして、涙ながらに彩子を掻口說いたのでした。

あちら樣は殿方でゐらつしやいますもの、何のお障りも御座いますまいが、女は損な物、御出世前の貴孃が、と泣かれ、お約束でも公然とおきめ遊ばしたらどうなので御座います。お二人きりのお談合ぢや仕樣が御座いません。あちら樣は小說とやらもお書き遊ばす方ぢやございませんか。お筆もお口もお手の物でゐらつしやいませうし、かう申しちや何で御座いますけれど、ほんの一時のお出來心としましたら、貴孃は生涯の疵物、どう遊ばすお氣で御座います。とせまられ、苦笑してビクリと濃い眉に物あり。その少さな丸髷をふるはしてゐるのをながめやり、二三度またゝきしながら落ちついた聲音で、

『乳母。心配しなくつてもいゝ。私は生涯男の自由になるやうな女ぢやなくつてよ。また誠一樣もそん

なお方ではゐらつしやらないわ」

「ハイ彩子樣。」

襦袢の袖引出して涙をふきながら、

「それやアもう御孃樣の御氣性も中山樣の御人格だつてお信じ申して居りましたからこそ、私がおつき申して居りながら、こんな事になつて了つたので御座います。麻布の方へも麴町の奥樣にも何と申譯致しませうやら、年甲斐もない……。いえお覺のないことにも致せ、いまとなつては何を證據に潔白をお立てなさるおつもりで御座います。もう近頃近所で何と申して居りますか。貴孃は何も御存じなく、引こもつてお出遊ばすからよろしう御座いますけれど、きかされる乳母の身になつて御覽遊ばせ。彩子樣方はぢきに世間なんぞつて輕蔑遊ばすけれど、世間は何より大切で御座います。」

無言で栞の絹糸總をしきりと指に絡めてゐる。

「近所ばかりぢや御座いません。先日も御門の前を、中山樣のお友達らしいので御座います。大學の方が二三人、大きな聲でいろんなことを被仰りながら、お通りなさるぢや御座いませんか。中山樣と御結婚遊ばすのなら宜しう御座います。こんな結構なことはムいませんけれど……。」

「第一彩子樣。別莊にばかり引籠つてお出あそばすと申すのが間違つて居ります。人には逢はれない御病氣なのだとか何とか。みんな碌な事は申しませんでムいます。そんな事がどれほど御緣談のお障りに成つてゐますか。ずつと東京にさへゐらつしやいませば、今頃は立派なお奥樣——何誰だつてもうお子



353 夏の日（太田三郎畫）

様抱いて被居るお年で御座います。嗚呼、早く然うおなりになつたら、乳母はどんなに嬉しう御座いませう。』

『そんなに世間を恐れたり、はゞかつたりする要はない。云ひたいものには何とでも云はせてお置き。どうせ私はひとりぼつちなんだもの。』

『お傷はしい。ほんに歴とした方々がついてお出遊ばしながら、真實お一人もお力になつて下さる方はムいません。麹町の奥様は以前からあゝした方でゐらつしやいますし……あゝ麻布の先奥様さへお出で遊ばしましたらねえ、彩子様もこんな御苦勞は遊ばしませんに……』

豊ならぬ彩子の頬には微笑が閃いて過ぎた。二年前、十一年ぶりの思ひがけない再會に取ついて放れす。

『御苦勞遊ばしましたねえ。平尾様の奥様つて方もあんまりで御座いました。彩子様。』

と泣いた乳母がと可笑しく思つたので。

『で御座いますもの。決して御無理とは存じ上げませんが、何しろ中山様も、まだお若いので被居しやいますから。』

云ひ憎さうに、云ひさすと、

『乳母つたら、乳母つたら、乳母つたら。』

机の上に身をのり出して。

「何處までも疑つてゐるんだね。私も誠一樣もそんな氣があつてたまるものですか。乳母たちは、自分等の考に引くらべて――いろんなことを――失敬だわ。」

彩子も泣き出して了ひました。例の紫羽二重の袂の下で啜り上げる。

「どうせ私共にはわかりませんで厶います。彩子樣はあれほど中山樣をお慕ひ遊ばしてゐらつしやる、中山樣も此方さまをお思ひ遊ばせばこそ、あゝして入らしやるので御座いませう。それをいつまで通るものと思つてゐらつしやいますか。それは貴孃のお我儘と申すもので御座います。」

「乳母つたら。」一聲高く、

「いゝよ。お云ひ。何とてもお云ひ。私はそんな、そんな、誠一樣だつて誰だつて、この世の中に私の身を任すやうな男はありやしない。ある筈はないのだから、そんな心配は安心おし。

「まア何を‥‥彩子樣は少しお氣に障ることを申すと、すぐ根にもつてそんな事お云ひ遊ばす。」

「今更始まつたことぢやないわ。乳母があまりいろんなこと云ふからさ。云つて聞かして上げたばかり。私はさう思つてるのだから、私の思つてるやうな人格の人は、とてもこの世にないのだから。」

「また其樣な意地つぱりをお‥‥少い時の癖はぬけないもんで御座いますね。」

「だつて良人にするだけの資格の人がなかつたら、一人で居るより外仕方がないぢやないか。どんな人でも男でさへあれば、お嫁に行くなんて女とは違ひますよ。」

「彩子樣。」涙の目を光らせ、

「彩子さま。意地づくや行がかゝりで云つてゐらつしやるのなら宜しう御座いますが、それを御本心としましたら、飛んだ事で御座いますよ。」

きつとなつた乳母をみて、彩子は恐れてだまつて了つた。

乳母は家庭と云ふことを說きました。お小い時から、つひに眞實の親御樣の御情愛つてことを御存じないんで厶いますから、御無理も厶いますまいが、あんまり冷淡でゐらつしやる。貴女は御自分から世の中にそむいて拗ねて被居しやる。

お孃樣でお出のうちはまだ眞の世間の味などのおわかりにならう筈はない。奧樣となりお子樣をお持ち遊ばしてからこそ、ほんたうの幸不幸――物質的でなく、表面的でなく、精神的の、眞面目な御生涯となりますのです。それを食べず嫌ひにそんな事被仰つたとて、それはお机の上の御空想と云ふものでつまり御不自由がなくお閑だもんだから、其樣に方圖のない贅澤をおこね遊ばす、と思ひ切つて叱りつけました。

「さうよ。乳母。食はず嫌ひだつてそんなこと、お芋やお魚ぢやあるまいし。一寸でも箸をつけてから、やつぱりこれは美味くないつて、よしちまふことが出來ますか。

何も日本に女ひでりがしやしまいし。私一人ぐらゐどうしたつて、それがどうしたと云ふのよ。

何だね、お前だつて牛乳だのバタだの、人の食べるのも大嫌ひのくせに。」

「嗚呼、今日までは何處へお出し申しましても、恥かしくないお孃樣と思つて居りましたが、彩子樣、

情ないこと被仰います。乳母だつて平尾の奥様だつて、そんなお方にお育て申したおぼえは御座いませんものを、御不足のないお身體にお生れになつたからは、一人前だけのことをなさらなければ、人間の役目がすまないぢや御座いませんか。それが世の中と申すもので…彩子様の様に。」

「だから私は生存税の滞納者だと云ふのよ。それで不可なければ、執達吏でも何でも差むけるがいゝ。」

「彩子様。花ならば今が盛りでムいます。女の春は短かいもので御座いますに、いゝ氣に増長遊ばして、下らない強情張つて被居いますと、中山様でも何誰でも、みんなお身をお固め遊ばして、あなた、もう其頃はふれて歩いたとて、買て下さるものはムいません。御兄弟方の御保護をお受になりますのと、旦那様におより遊ばすのと…どちらが女の誇で御座います。もう乳母だつていつまで生きては居りません。」

「いゝよ。御飯をたいてくれる人ぐらゐ、何處へ行つたつてあるから。」

「まア彩子様。」涙をふき〳〵、

「さうまで被仰れば…でも、人間には病みわづらひと云ふこともムいます。」

「さうよ。小供でもウジャ〳〵出來てから、病氣したり、されたりしたらお互に隨分困るわね。一人者は氣樂なものよ。病院もあれば看護婦と云ふものもある死んだつて泣いてくれるものもなし。」

「そんな事ばかり被仰つて…。」

「そしたら井上の叔母様を御覧な。あれほど叔父様をお嫌ひ遊ばしたくせに、毎年々々お産をしてサ。は

んとに女はいけないわね。嫌つたものなら死ぬまで嫌ひ通すがいゝぢやないの。よく今更赤ン坊なんぞ出來たものだわね。」

乳母も躍起となつて、

「それはさうで厶いますとも、彩子樣のやうな方ばかりありは致しません。」

「女は一旦嫁入りしたら、其の後は一種の道具として使用されるばかりなのよ。私はいつまでも人間でゐるよ。妻だの母だのつて男の奴隷にはなりたくない。」

一體女性がこの世に存在の意義と價値とは何なのであらう。誰れでも女は子供を生んで育てれば、それでよい樣に言ふが、彩子はそれが心外でたまらなかつた。そして世のあらゆる女の心理を疑つた。みなその天職をまつたうせんために、使命を自覺して嫁ぐのか。何にも知らずに結婚して、否でも應でも絶對的の服從に甘んじなければならぬ境遇におちいるのか。虚榮のためにか。本能の擒か。或ひは百年の苦樂人によらねば生存は出來ぬので活きんが爲に身を賣るのか。それならば芙代子樣なんぞ、立派に先生と立てられるお身でありながら、何の必要があつてお頭のはげたお父樣のとこへなぞ嫁つたのであらう。

湯上りの軀を鏡にうつして、泣いた彩子でありました。精神的ばかりでは滿足が出來ぬと云ふ、それも人間の本能とおもへば、誠一樣をさら〳〵無理とは思はぬが……あゝ現實暴露の悲哀！　と彩子には堪へられぬ思ひがした。

いまはしさに身震ひして目を開くと、乳母は悄然と思案の體。

「まア／＼お若い方はみんなそんなもので御座いませう。けれど、いまに何でございますよ。どんな方でも旦那様を持つて御覽あそばせ。またそんなものぢや御座いません。」

「ホヽヽヽ誠一様と同じ様なこと云つてるわ。本能に負けるやうな私ぢやアない。」

彩子は迸しるやうな高笑ひした。燈火に輝く瞳のうちきら／＼と、後ざまに片手をついて、雲のやうな黑髮の、背をあまつて疊にしいたを、さら／＼と左右に打振りながら、

「やつぱりお年頃にはおかたづき遊ばしませんとね。御病氣なんか起るもので御座いますよ。光子様や藤枝様を御覽遊ばせ。お二人ともお二十五でお亡なりになりました。」

「もういゝつてことよ。」

震ふ唇にのぼる冷笑、つまさぐつてた筆の軸はばり／＼とかみつぶされた。

彩子は生れながらに小說の主人公のやうな運命を持つてゐました。

二十餘年前、父様は當時××省の利者、品行謹嚴、廉潔のきこえ高く、しかも評判の美男子と云へば、彩子の美しいのは父様似なのでありませう。その永田家の嫡女となつてゐるけれども、これには込み入つた事情があるやうです。

同鄕の夫人をたよつて、永田家に身をよせてゐた或る學校の先生で、内外の評判もよく、先生々々とみんなから慕はれてゐた吉川といふ婦人がありました。

その頃のこと故引詰の夜會結び、黒縮緬の羽織がよく似合ふて、脊の高い、色の白い、美人と云ふ名は許せなくとも、どこか重々しい勝氣な婦人で、家庭を忌み嫌つて孤獨の生活をつゞけやうと云ふのでありました。

永田夫人とは姉妹のやうに仲がよかつた。

夫人も、へだてなく睦み合つて、まさかこの婦人のために、大なる悲劇がかもされやうとは夢にも思ひがけなかつた。

ところが一夜、花は狂風に散らされました。泥土にまみれた花片のやうな吉川さんは、夫人の膝に縋つて泣いて〳〵正體もなかつたさうです。

彩子は夫人の子として披露されましたが、誰もあやしむものはなかつた。情の薄い御兩親と何も知らぬ乳母は泣いたさうですが、一年とへだてぬ間に妹の、文子が生れてはなほのこと、病身を名として乳母もろとも、しばらくその田舍の家へあげられることゝなつたのでした。

とう〳〵こゝで八歳の年まで成長ちました。そのうち實家では弟たちが二人も殖えるし、いつになつたらお迎への來ることやら、乳母ももとより手離す氣はなく「孃ちやま」が、いつか「彩坊」となり、送つてくるメリンスの着物は簞笥の底にしまはれたまゝ、日に燒けた顏の眼ばかり光つて、金巾の帶に藁草履パタ〳〵、すつかり田舍の子になりすまして居たが、丁度麻布の平尾家では、年來夫妻の間に子なきを愁ひ幸ひ子柄も美しいので非常な熱心で懇望の末、ついに彩子はこの伯母夫人のもとに引取られ

たのでありました。

赤ちやけたそゝけ髪も純黒な稚兒髷に結ひ上げられて、白衿、矢絣の見かへる樣な姫樣仕立、幼いながら犯しがたい威光に、誰も〳〵舌をまくほどな容色よし、利口な子。することなすこと、口の利きかた、まるで芝居の子役の樣と、心ある人は眉をひそませたさうですけれど。

夫人は昔風が好な女でした。

彩子はその犧牲となつて、學校ももとの高等二年まで。その後は家で裁縫とお習字と琴のお稽古、お轉婆盛りを重たげな文金高髷しほらしく、花を活けたり、お茶をたてたり、母夫人と一緒でなければ、緣の外へも出たことはないんでした。

かくて籠の鳥同樣な、四疊半の室を天地と觀じて、十八の秋までは無心にすら〳〵丈のびた。外出勝の父なる人は、彩子のことは夫人任せ、何にも口に出しはしませんでしたが、折々晩餐の傍に侍べる。日蔭に咲いた花の樣な、可憐な美少女の風姿をみては、流石惻隱の情も催ほして、氣むづかしい夫人に鍛へらるゝ年端も行かぬ身をあはれがりました。

が、彩子は父に懷きませんでした。むしろ輕蔑して居たんです。あまり母夫人の勢力が良人に強いのを見樣見眞似て。

けれども花のやうな乙女心、うらゝかな春の光りに逢ふて、のびむ〳〵とする若草は、いつまでもふみつけられたまゝでは居ませんでした。日ましに美しうなり勝る白い肌や、黒髪の光澤と共に、母夫人

の眼をしのんでは裁板の下に詩集がおかれ、小說がかくされるやうになつて、あまりの壓制を恨めしと思ふ心も起つた。束縛れたる境遇をかへりみて泣いた。

さうして慰藉を／＼と求めて、ます／＼文藝の道に傾いて行き氷のやうな胸もとけ、熱い血汐が鳴り響いて、さながら白い女鳩の和毛のやうに震へた。甘い／＼乙女の悲哀や、若々しい煩悶と云ふことも知り初めた。

一方ではそろ／＼持ち上つて來た結婚問題に、母夫人が氣をもみ始めやうと云ふ時、幸か不幸か、急激な一大革命は、彩子の上に落ちかゝつた。夫人の死に逢つたのです。

常からかよはい人ではあつたけれど、心臟病とやらでたつた一日病ふただけ、あつけないやうな別れでした。失心した樣な彩子は、たゞ喫驚して了つて、悲しいと云ふ意識もなくものめづらしげに賑かな家の内を見廻してゐた。そして葬送の時氣分が惡いとて供に立たなかつたのがはしなく導火線となり、世間の口にのぼされて、今まで朧げだつた自分の身の上も誰からとなく聞かされました。

それでいつとなく永田夫人のことを、母樣と呼びかへましたが、この時はもう法學士の兄樣が當主で、夫人は切髮の被布姿。お茶の水へ通學てると云ふ妹の文子や、腕白盛りの弟達の中に交つた彩子は緋鯉の群に追ひまはされる金魚のやう、弱々しいあはれなものでありました。

俥でなければ外出は出來ず、電車にも乘たことがなければ、ピアノ、ヴアイオリン、など知らずとのたまふ。彩さんの樣でも一種の不具者だね、としばらくは麹町の家の笑ひのたねでした。

ところがその後の一年間に、別人のやうなかはりやう。母夫人が一週忌の法要のむしろには、白無垢姿端然と四邊をはらつた氣高さ立派さ。

いまはひそかに文子の方が、髪の結方など眞似るやうになりました。

丁度その頃のことでありましたらう。麹町の家で落ち合つて、はじめて誠一に紹介されたのは。

誠一は文科大學の秀才、文子等とは從兄にあたる人なのでした。男としては瘦形ながら、すらりと背の高いのに、制服も見榮がして、二ツ目の金ボタンをまさぐりながら、微笑を身邊に湛へてゐた。その凛として朗かな聲は、この時から耳について了つた。青年文士としてのその名や創作は、彩子はすでに知つてゐました。美しい藝術でも見るやうな氣がして、その人の態度をながめました。

明けて二十の正月には、妹のカルタ會に招かれたら、その席に誠一も來てゐた。

向ふから目禮されたときの嬉しさや、丁度隣合て座つて、藤紫の振袖に包むにあまる胸のときめき。常の樣にもなくうなだれて物云はず、そのくせ誠一が他の女達と談笑するときは、流人のやうにさびしかつた。とう／＼たまらなくなつて、中座して了ひました。多くの花やかな人と共にあるのは苦痛だつた。

その夜歸邸てからも、しきりと胸がをどつて凝つかれなかつた。數日の間はねてもさめても、誠一の姿が目の前を去りませんでした。けれどそれから間もなく父君は、新夫人を迎へらるゝ騒となつたので、彩子は別莊へのがれました。

乳母に過つたよろこびや、海岸の風光やもののめづらしさにかてゝ、やましい頭のおさへてはなし、小さな女王様のやうな氣になつて日を送つてた處へ、かの時かの人との邂逅！

もう誠一の往來するやうになつてからは、何もかも忘れはてゝ了つた。恐らく一時は世の中に、彩子ほど幸福なものはありませんでした。彩子樣はだん〲お若くお美しうおなり遊ばすと、目をまろくしたのは乳母ばかりではありませんでした。

活々した憂鬱とでも云ふのでせうか。樂しい苦しみとでも云ふのでしやうか。涼しかつた星の眸は夢みるやうにうるんで、ひとりすゝり泣いてゐることもめづらしくはなかつたが一度誠一の笑顔に接すれば、母親の乳房にすがりつく稚兒のやう。春の朝、秋の夕、たわいもなく月花に憧れくらした。

あはれ一年後の今日、戀する女はいつまでも處女のまゝではゐられないのかと知つた驚きや、すべての希望も期待も歡樂も、夕陽の空のそれの如くに薄れゆきて、榮華のあとの凋落に泣く身となつて、自分で自分がわからない。こんな矛盾した話がまたとあらうか。何が不足で誠一樣に、あゝ誠一樣に……。片時も離れがたく身もやせるほど思ひ焦れながら、なほその人に從ふことをがへんせぬ心とは……。自分でも今まで、こんな女とは知らなんだ。許して下さい。誠一樣！

彩子は聲もなく机に打ち伏して身をゆすぶつた。乳母はそつと水さしを持つて、臺所へ立つて行きました。

六

或雨上りの心地よい朝、彩子はつまらなさうな顏をして、誠一を電車の乘場まで見送りました。朝化粧した頬には血の氣が失せて、さながら月夜の梨の花畑のやうに白く、血筋の張つた眼ばかりがぬれて大きく輝いてゐた。諸共に麥笛吹いて子供らしう興じたはこゝ、藤ケ谷橋の白い手摺に身を凭せ、並んでうつる水鏡に思はず顏見合して含笑んだのもこゝ、菫をつんだ岡、雲雀の歌に誠一が巧みに口笛を合せたことや、何もかも傷心のたねなのでした。黄ろい蝶がひら〳〵と二人を越えて、豌豆畑に舞ひ入つた。天にも地にも逝く春の愁は長い。

プラツトホームの柱に凭つて腕ぐみする誠一の足元に蹲踞んで、あふるゝ涙を七分コートの袂におさへた。お召の縞はしとゞににじんで了ひました。

二人は何にも云はずに別れた。

ぐわうつとやつて來た電車は、青年を吸ひこんで、いつものやうに窓からさし出す目禮の笑顏もなかつた。

頭も下げずに歩を返した彩子ははじめて、誠一さん堪忍して下さい。と音に立てゝ嗚咽した。空氣草履の足元も定まらず、ふら〳〵と別莊へかへりつくや否や、馳け入つて襖閉めきり、我を忘れて泣き伏して了つた。

心ゆくまで泣きに泣いたが割れるやうな頭痛を感じて、やう〳〵顏をあげると、襖のすきから次の間

の誠一の抜殻の床がなほ人ある如く、黒ビロードのくゝり枕は、裾の方に投り出されてゐる。室内には
まだその人の人の香さへするものを、今日からの二人のへだては‥‥。
二度と都の地はふむまい。人にも遇ふまい。私は、私はと‥‥、堪へかねてふたゝび突伏して了つた
とき、
「おや、彩子様、まア彩子様。」
驚いた乳母はひざまづいて、其の畳につけた前髪の下に真白い指のわなゝくを、ぢつと見てゐたが、
「どう遊ばしたので御座います。よ、よ、彩子様。何か中山様と‥‥」
「どうもしないよ。あつちお行き。」
がばとはね起きて縁へかけ出したが、柱につかまつて物狂はしう、咽入る優しい肩は顫々と木の葉の
やうに打ち震へる。
誠一は怒つて去つたのでした。僕だつて男だ。未練はない。君ばかりが女ぢやアない。つて後悔する
な。逸した機会は、永久にかへりはせんぞ。知つてゐます。どうとも御勝手に遊ばせ。と云ひ放した。
彩子の面は強う御座いましたけれど‥‥。

七

打けぶる春雨に天地濛々。生ぬるい南風は蒸つて鏡面の雲となり、朝化粧する彩子の指環玉を破裂さ
した。オリーブがゝつた絲織の袷、匹田の丸帯のお太鼓可愛く、大きな大きな桃割に花櫛を挿してゐる

ところやつと十七ぐらゐにしか見えません。

身も世もあられぬ人戀しさに、何故、何故、私はあの戀を捨てたのだらう。と彩子はめちや〳〵に泣きました。せめて手紙でも出したらば、もう一度逢へるかもわからない。行かうか。東京へ。誠一さんとこへ。もう打たれても蹴られても離れまいか。と驅け出しても行きたく思つたり、ふつと我にかへると、現實はつひに人を禽獸たらしめずば止まず、の一句を思つて、わづかに心を慰めた。

夢、夢をみたのだ。夢は美しかつたけれど。現實に求めて得らるべきものではなかつた。泣く〳〵も机によりそふて、抽斗しの奥からビロード張の小箱を取り出してパチンと開けた。それは金光燦たる、寶石入りの、筐の指環です。

別れる時に、氣のつかないではなかつたが、これぱつかりは返す氣になれなくつて……誠一様は忘れてゐたらうか。あゝ平氣でこれを指にさしてゐた頃が戀しい。いまではどうしても氣がとがめて、毎夜毎夜燈火の下に、そつと手にのせてながめるばかり。

ちつとその寶石にキッスしました。ヒヤリと冷たかつた。けれど胸の中は火の樣でした。

「戀する人に健忘と
つよき心臟を與へすや
いま悲哀に過ぎし日の
快樂おもふに忍びしよ」

思ひあまつてうたふ時、聲はいつになく美しかつた。夕方などよく柱にもたれて、默然として雲をみるのが癖になつた。

目立つほど細つた手首に、亂るゝおもひを掻抱いて、疲れ切つた頭をかりそめに疊の上に横たへていつかうと／＼して了つた。目の覺めた時、雨は篠突くやうな大降となつてゐて、戸をひいて了つた室内は晝ながら手さぐる樣な薄暗さ。自分の上には友禪メリンスの掻卷がふはりと着せかけてありました。やはらかい紫ビロードの襟に顔をしづめて、こんなさびしさのいつまでもつゞく位なら、いつそ死んで了つた方がいゝと思つた。あゝ誠一樣に今一度、逢ひたい。逢ひたい。逢ひたい。

額ににじむ汗をぬぐふて起き上らうとしたが、何とも云へぬ、味氣ない、わびしい切ない果敢ない感はむら／＼と胸をついてたちまちふら／＼と倒れかゝりました。

誠一樣。

もう逢つては下さらないのですか、二人は敵同士でもないものを。

男の心つてあゝしたものか知らないけれど、あんまりな邪推だ。情ない。何しに爲になすの涙などがこぼれやう。それを空涙だの、僞つたの、釣つてたの一時の感情を刺戟して樂しむためであつたらうのつて、誠一さん、そればつかりは、あんまりさもしい邪推ですわ。あまりのことに云ひとく術も知らなかつた。どうせ／＼私のこの胸のうちは、誰も知つてくれるものはない。くらぶるものもない故に、現し世の人の胸にはとほらないのだもの。なまじ力ある腕に縋つて、泣かうとしたのが惡かつた、一人で

生れて一人でゆく、やつぱり私は一人でした。

戀しい〳〵人に、なぜ身も心も捧げつくすことは出來ないのか。我儘者、自我の強い女、罵らるるまでもなく、すねたる性を自らも悶えて泣いてゐるのですけれど。

みんな〳〵幼い夢でしたわねえ、儚なく醒めて了つたけれど、夢とは知つても、あきらめやうとしても、忘れることは出來ません。忘れる程の戀ならば、はじめからこんなに思ひはしませんものを。

誠一樣。貞操は躰のみの問題ぢやあるまいに、心はもとよりその躰の半までわれに許しながら、なほ處女の純潔をたもてるものと誇るか。と被仰つた。

そんなおそろしいことは云はないで下さい。私はもう生れたまゝの乙女ではありません。君が胸にふれたるこの手、この額、ましてこんな傷ついた胸を抱いて、再び他し人にまみえやうとはゆめ〳〵思はぬものを、どうしてそれをおせめなさるのでせう。そんな私と思つてゐらつしやいますか。

女にだつて意地はある、どんな事があつたつて、あらゆるものをなげうつても、この一念ばつかりは、守り通さうと決心したのに、おどさないで下さい。私の四十路はどうあらう。誰も〳〵たよる人なき獨身の心細さ。オールドミスの末路の悲慘な事も知つてゐます。自然は一人を許しますまい。けれども〳〵そのすべてに打ち勝て、えゝ打ち勝てみせますわ。

誠一樣、男に敵對しやうなどと云ふ。強い女ではないんです。長い目でみて居て下すつたら、いつかは御胸のとける樣も……いゝえ、いゝえ、私のことなんか。忘れてお了ひなさるかも知れないけれど、

それだから、それだから、捨られぬ中に退いた身です。熟すれば、落ちる木の實のならひでせう。うんで腐つて溶けてゆく……。

落ちぬ間にとの神の情か、どうしても抗することの出來ぬ。不思議な心理狀態に引ずられて、こんな運命の穴に飛びこんで了つた。誰をうらまうやうもない。

みんな私が悪いんです。絶ず火水の相戰つてるやうな、私の性格から來た悲劇です。この苦悶につかれて弱つて、君戀しさに焦れ死ぬのが自分の天命だと思つて居ます。

もし幸に命があれば、俤の人を胸に秘めて悲しい。記憶をせめてもの慰藉に、清い美しい生を送らう。誠一樣、あなたはこれから御家庭の主人公となり、可愛い幾人ものお父さんにおなり遊ばしても、彩子はやつぱりいまのまゝの彩子よ。可哀想とは思つて下さいませんか。君に捧げつくした愛と涙へ：：いゝえ、捧げたとは云ひますまい。囚はれ果たあはれな彩子が、これほど苦しんでゐると知つたら、そむいた罪は許して頂戴。何のためにそむいたか。清浄い／＼二人の間は、肉躰の滿足なんて云ふ、最後の墮落で、蹂躙つて了ひたくはないのだもの。

こんな事おきゝになつたらまた、あてつけがましいとお憤怒なさるばかりであらう。だから／＼、私は何も申しません。そんな事が云へるものですか。何〻誤解されても、罵倒られても、だまつてお別れして了つた。

もう、もう、山とも云はず海とも云はず、まよつて／＼足の向くまゝに、何處かへ行つて了ひたい！

彩子は飛び起きて雨戸を細めにあけました。一面の小松原、右に左に、さながら千馬萬馬の鬣をふるふが如く、ざ、ざ、ざアーとほとばしる雨、吹きつのる風、ばら〳〵ばらつとつぶてのやうに池の水が飛びかふ。

前髪からたら〳〵と雫をたらしながら、びつしよりしぶきにぬれて、袖を抱へて立ちつくしてゐると、其處でもこゝでもがあーがあー〳〵とやかましく蛙が鳴き出した。（完）



生活の半頁

長谷川時雨

薄色の輕さうなセル地の單物をきて、濃い色の袴をつけた學生達が、肩へ手をかけあつて、うつむきがちに會話の暗誦をしながらゆき過るのもあつた。楓の根もとに袴の裾をスカートのやうに開いて、小さなブックを一心に讀入つてゐるのもあつた。詩を聲高に練習しながら逍遙してゐる人達もあつた。ベンチに集つて、睦しげに目白押をしてゐる群もあつた。

初夏にうつる雨上りの晴れた日のことで、專科の生徒になつた藤子が、はじめてうけた校內の印象は明くあざやかにハイカラな感じであつた。寮舍の軒に、日除けのやうになつてゐる藤棚から洩れてくる日の光りが、もの丶色を一しほ美しく見せてゐた。年頃の女達の集つてゐる中へ浴せかけた薄靑い光線は、艶やかな頰やら、さはつて見たいやうな丸みのある肩やら、胸やらへ流れて、眉根を顰めて見せたり、白い齒をだして笑つたりしてゐるのを、其女の容貌以上の美しさに見せてゐた。

其人達から見れば年長の藤子は、極く下級へはいつた。廿歲を五つも越した藤子は、赤いリボンをかけてゐるお下髮の娘達と一緒のプライマアの仲間入りをした。それも一二週間の事で、間もなくナショナルの組へ編入され、またすこしたつと拔かれて、幾週日かには本科の專攻生になることが出來たの

月宮殿……………………372

である。月でいへば二月にはならない。日數でかぞへれば六十日にもならない間ではあつたが、藤子は下町の家庭に育つて、規則だつた學校生活をした事がなかつたので、パノラマを見にいつたやうに、暗いところから不意に明るみへ出た心地と、物馴れないで輕い眩暈を起すやうな不安とがあつた。

藤子には學生達がもつてゐる野に舞ふ雲雀のやうな自由と、暢々した、思ふまゝにふるまふ春がなかつたのである。花ならば咲初めたところを散らされた、悲しい影をもつてゐる身であつた。何事をも締めてしまつた心には、落葉の匂ひが好ましかつたり、一人旅をして汽車の窓からぽつねんと、景色を眺めてゐたりするのが好きであつたりした。それを淋しいとは思ひもしなかつたし、淋しさうにもしなかつたが、どんな幽な響でも聽き洩さず、人の思つてゐることが、すぐに自分の心にうつるやうな氣質にはなつてゐた。それ故藤子は、年のゆかぬ女達のすることなすことが、無邪氣でするのか、學校風を吹廻すのかと判じかねてはゐたが、何となく壓迫を感じないわけにはいかなかつた。それで、藤子はなるたけ人の目にふれぬやうにと心掛けて、そつと行つてそつと歸つてきた。授業のはじまるまでは講室へいれないので、扉の側の鼠色の壁によりかかり、誰の注意をも避けてゐた。

新入生の誰でもがうける流し目が、一通り行渡つてしまふ時分には誰かしら、一人二人の友達の出來るものであるのを、藤子ばかりは何日も自分の影と二人だけであつた。そして時折は年の七つも下の、學校摺れのした、おさきものたちの寐むけざましにされてゐた。

或日のことである。藤子が敎室へはいらうとすると、遲れてあとから來た一人が、突然突飛ばすやう

に藤子を押のけて、室内へ駈こんだ。自分の席へはつかずに、敎壇へ登つて黑版へ束髮の横顏を白くかきながら

「たぼの長いのは何者ですか」と、振かへりながら、近眼の敎師の眞似をして、生徒達の顏を見返した。

「知つてゝよ、藝者よ」

「嘘、……さんよ」

「……さんよ、あ、分つた此方でせう」

藤子へ指差しをしたものがある。描いた當人は、犬が嚔をするやうな聲を出して、嘲るやうに笑つた。

矢つ張り其仲間であつた。習字の時には、態々立つてきて、藤子の襟許をのぞきこみながら、

「御免なさい。背中が見えるかと思つたのよ。隨分拔衣紋ね、をかしいわ」といつたりする。

藤子が本科へのぼつた時に、其組の若い女が、はじめてかはした挨拶は、

「あなたおいくつ」といふのであつた。

藤子は、そんな時には、魂に泪がにじむやうな笑ひを答へにしてゐた。侮蔑に答へる冷笑もかへさないので、組しやすい、何をいつても腹をたてない、甘いものとめやすを立てられてしまつた。藤子にはそれが却て氣安すかつたのである。廣い緣を歩く時にも、なるたけ壁の方へよつて、靜かに避けて歩いてゆくやうにしてゐた。それでも後から飛んできて、藤子の痛がる肋に突かかり、白足袋に跡のつくほど靴で踏んでおきながら、五六軒行過ぎてしまつてから振返つて見て、藤子がだまつてゐると其儘駈て

いつてしまつたりした。
藤子は外の女學校の寄宿舍にゐる女から、こんなはなしをきいてゐた。それは舍監とよばれる女が、寮舍を見廻つて歩いてゐる時のことだつたさうである。反古のまるめたのが落てゐたので、緣から掃捨たといふ事を承知の上で、それを拾つて紙屑籠へいれやうとした。それはいふ迄もなく、口に出さない戒めのためであつたのを、室內にゐた生徒の一人は其舍監をよびとめて、
「先生おついでにどうぞ」といつて、新しくまるめた紙屑を、先生の足許へ達しるやうに投げたといふことである。
一つ棟に住んで、日に夜に心をつくして撫育してゐる敎師でさへ、さうであるものを、自分なんぞがされるのは仕方がないと、藤子は惡戲をされたり、笑はれたりするたびに、其時の、其舍監の心地を思ひやつてゐた。
日本科の生徒が、作法の時間が終つて本膳をさげてきたことがあつた。厭々さげてきた塗膳から、お椀もお平もみんなころがしおとしたのを、折惡しく藤子が通りかかつて見てしまつた。其生徒は藤子にそれを見られたのが、よつぽど口惜しかつたと見えて、
「何だこんなもの、買つてかへしてやれば好いのだらう」と、いきなりころがしたお椀を、藤子に蹴附ける見幕で庭へ蹴落した。
さうまでされないでも、藤子の痛む胸へは響くことが多かつたのである。時折りは自分のやうな年長

の者が、同じ校舍に學んでゐるのは、若い人達の恥にでもなるのではなからうかとも考へてゐた。けれど年の若いのが誇りならば、つまらない誇であるとも思つたりした。藤子は女の身の若い誇りといふことが、ほんの夢の間のことで、さめてからが長い時間であるといふことを、痛切にさとらされた切ない若い經驗があるので、其誇の早く破けてしまつた罅へしみる風が、痛ませる胸に兩手をおいて、若いといふ短い誇のほこられるだけ誇らせておく方がよいと、嘲笑の的になる。自分の上よりは笑ふ人達の上を悲しく考へたりした。

それでも藤子には學校にゆくといふことが、樂しい日課の一つであつた。日がたつにしたがつて、學生達の不作法なのは、藤子一人に對してばかりではないといふことも知つたからである。それに藤子は行違ひになつて知らなかつたが、上級の者には、年の多い人達もかなりにゐて、其人達はみんな眞面目で、そして此校で生立つてゆく女達はみんな上品であつた。何處の學校にもあることだとかいふ、學校あらしの他からはいつてきたものが暴れ返るので、あの人、この人と、名をさすことの出來るほど少數であつたのである。其學生達は藤子ばかりにではなく、おだやかな、優しい童貞達にまで、種々な綽名をつけてゐた。學校は舊教の尼達が職員になつてゐる。宗教的のもので、外國人の子達も多く通つてゐた。寄宿にも西洋のと日本のとがあつた。私立學校ではあつたが、何となく家族的な親しみのある外國語のたしかなのを知られてゐた。

專攻科の上級生には、美人も多くゐて、みんな相當に位置のある人の娘や夫人らしかつた。いたづら



南國の・をとめ（名取春僊畫）

は外國人の方が激しくはあつたが、その無邪氣なのを藤子はよろこんでゐた。色の青黒い、鼻のひくい、束髮にした髮に艶のない學生達は、見た眼の見劣りがするばかりでなく、あくぬけのないものであつた。

長い月日のうちには、小さな出來事で藤子の心をひく事も多くあつた。藤子がどういふ目的で學校にはいつてきたのか、またどういふ階級の人間であるかといふことを、疑問にしながらそれがよく確められないうちに、氣の多い學生達の好奇心は薄くなつてしまつたのであらう。其儘に投出した氣味であつた。

丁度讀本の譯をつける日のことである。藤子は、幼い姉弟が雨の降る日に窓をあけて、あはれな弱鳥かたすけてやる小話の下譯をつけながら、深い軒をくぐつて、廊下の梁の裏へ出つ入りつしてゐる燕の樣子を眺めてゐた。もうかれこれ、柳に風の涼しい心地をさせるころであつた。朝露の濕りが干いてゆく午前のうちは、あるかなきかの花の香もまじつて、青葉の薰りが深よふてゐた。瑞枝さす梢の影が、爽やかな氣を濕らして、廊下をゆききする次位の童貞の白い冠りものにまで、初夏らしいものの綾を、薄靑く染めてゐた。そんな時は他の組の生徒達が、美しい聲を揃へて、フランスの唱歌のお稽古をしてゐるのを、夢のやうに遠くきいてゐるのが藤子は好きであつた。アルゼンチン公使の令嬢の美しい可愛い姿が、庭をへだてた向ふ側の、外廓の傍のカーテン越しに、童貞の黒衣と重なるやうになつて、銀色の髮を搖りながら、うつむきがちにピアノを彈じてゐるのを見るのも好きであつた。そんな時には藤子は自分が、何をしに學校へきてゐるのかといふことも忘れてゐた。空想ずきな藤子の魂は、唱歌の聲を

おつかけたり、ピアノの響きに呼かへされたりしてゐた。
黒い着物を着た女――藤子はそんな事を考へることもあつた。自分の心と童貞の心と似たところがあるであらうか。似てゐればどんなところが似よつてゐて、そしてどんな個所が異つてゐるであらう。
藤子は其話心地のよいといふことが、何よりも何よりも大切なことに思つてゐる。氣分をいためぬやうにと、自分の心を贈物にさはるやうにあつかつてゐた。それ故着物の好み髪かたちなども、我と我心に心地よく思ふだけ、あんまり刺戟のないつくりにして、配合に心を用ゐてゐた。それがまた艶だちて見えることもあつたが、心の中は落附いた淋しみをもつてゐた。黒い着物を着てゐる婦人の心地はどんなであらう。落葉にかゝる夜の雨のやうな、しみじみと淋しからうか。それとも表には消たと見えて、庭にもゆる埋火のやうに　おししづめてゐる心の影は赤いものであらうかとも思つたりした。
ある童貞の誕生日がきた。八十歳にあまる神父、リンギヨル博士の道話の時間の終つた、水曜日の午後のことで、學生達は聖堂の前の廣い廊下へ集まつて、聖堂から出て來る其の童貞へ、各自に持つてゐる花を贈りものにした。その童貞は菖蒲が好きといふので、言合せたやうに菖蒲ばかりで、紫や、白や薄紫の絞りの花が、燕の飛ぶやうなかたちに、すいすいとした青い健かな葉をわけ出して咲いたのであつた。
其次の日は童貞百合の、何か童貞の方の役についてのお祝ひがあつた。其時には其の童貞の好みで、夏菊の花ばかりであつた。藤子はこの百合に、忘れられぬ印象をもつてゐる。それは藤子が下手な文章

に苦しんでゐた時のことで、何心なく、まつたく藤子は何の心もなく、通り掛つた百合に、自然といふ文字と、自由といふ文字の綴りをきいたのである。百合は藤子のさしだした鉛筆と紙とをとつて、その文字を書いて渡した時に、藤子の瞳をじつと見た。

神へ身を一生捧げつくす人。黒いきれを眞深に冠つてゐる尼達は、自ら沈んでゐる人もあれば、強てもと沈めやうとしてゐる人もある。同じやうに冷たい眼差しをしてゐても、柔らかい色の人と、光輝のある人と、眠むさうに弛んでゐる人とある。それは常から藤子は氣がついてゐたのであれど、其の場合の百合の眼の色は、藤子の心を讀まうとするやうな、何物かを隱さうとする影のあるやうな、複雜した閃きが見えてゐた。藤子はおもはず顔をそむけて、百合の視線から逃れやうとした。強い香料にうたれたやうに、藤子の眼裏はいたみをおぼえて、うるんでくる涙をかくされぬからであつた。

百合は佛國の上流の生れで、貴族の血をひいた、姫君ともよばれるきはの人であるといふことを藤子はきゐていた。名高い女優が尼君に扮つたやうな、美しい、纎細な、稀に見る美人であつた。瘦れてゐても骨だたぬ大理石のやうな皮膚と、細いきれいな鼻筋、うるみのある大きな眼、小猫の總々した柔毛へ頬をふれたやうな、柔らかに、すべ〳〵として、それでしつとりした感じを與へる女であつた。

百合の受持ちは、習字を見てくれるのである。其度に藤子はどんなに心をつかつたであらう。藤子は妙なことを考へてゐたのである。もし百合のあの綺麗な、細い透通るやうな指へ、もし過つて墨をつけてしまつたらば、百合の魂までも黒い墨の色が鈍染こんで、一生消ない汚點をつけてしまふ。尼院でお

ぐつてゐる清い生涯に、咒をかけるやうなものであらうと、百合の手が藤子のペンをもつ手に重なるたびに、藤子の心は顫くのであつた。

それでも藤子は童貞達と一所にゐるのには、ちつとも壓迫をかんじなかつた。西洋裁縫をしてゐる隣の室から、ビフテキを燒く匂ひがしたり、敎室へ猫が飛出してきたり、臨時唱歌室になる廊下の隅で、女小使達が、童貞のお茶の時の菓子を製造てゐたりするのが、心安い家族的な心地をもたせてゐたのである。



旅の宿

清水玉藤

「大仁停車場に下車し西南に二里、道は平坦砥の如く」と案内記に書いてあるが、此砥は何十年も用ゐ古した物と見えて高い所低い所、細い道曲つた通り、さても／＼其行路難！

さりとてピーポーの圓太郎氏を煩はすも有り難からずと矢張り車の上で腰の骨をさすつて居る始末、しかも二里とは話半分の三里行つて辛く青葉の緑深き中に廣々とした建物××旅館が見える位、まだまだ其美しい庭の眞中にはら／＼と白玉をどる噴水の先きが見える迄には約十分は車上の人。

そんな思ひをして行つても、例の十三番の八疊の客間にトランクを片付けて、お菊さんのすゝめる羽二重の座ぶとんに腰を下すと、早や壽命が一二年は延びたやうな胸の晴れ、まして青葉かをる温泉の玲瓏たる神泉に浴して初勝男のお刺身に箸をつける時はお腹の底まで洗濯が出來たやうに思はれます。

天上天下唯我獨尊、一年三百六十五日誰に仕へ誰に諮らう對手もない私は梅雨頃のうつうつしい心持ちを散ずる爲めいつも半月餘り此處へ來て遊ぶのです。

そして此十三番を我が部屋と定めるのです。南を向いた八疊間、前に潺々たる清流横ぎり後に鬱蒼たる山をひかへ靜かな奥まつた所が氣に入つて居るのです十番から十五番迄六つ合せて別館と云ひ一むね離

れて建てゝゐるのです。
今年は別館はどんな人達？　と氣をつけて居ると一日二日のうちに皆知れました。
机の上に書物を重ねて床の間にノートを積んでそれで別段に勉强もなさらないのが十番の文科大學生、文科に似合はぬ體格のよい方、一日の内に五回位お湯に入いる其間々には、
花の都を立ち出でゝ……
などゝ何の國何とやらの僧にて候と名告をあげたり、座つて居ながら「急ぎ候程に早や津の國すまの浦に旅行したりして喜んでお出になる一名リウマチの君、惡ひたまはぬ御年輩の十一番のお客樣で一番我々には緣が遠いやうに思はれました。
十二番は私の部屋と背合せで後ろの廊下を裏の方へ下りて行くので御夫婦連れの方とは知れどお聲ばかりで姿は更にお見えになりませぬ。襖一重で獨り者の住むと知るや知らずや華やかな笑ひ面白い問答は日に幾度となく聞えます。
十四十五の二間を通して侯爵××樣は御主從三人、晝のうちは大かた釣や御遠乘のお留守勝ち折々お出の時はお慰みの寫眞現像で地下の暗室へお入いりになる時が多く、一向にお手重くない殿樣でお氣高い御品格はお美しいお口元に涼しいお眼に見上げられますが、私など廊下でお行逢ひすると莞爾と御會釋遊ばします。
今日は珍らしく十一番のお謠も聞こえず十番も御勉强のお樣子……と見たのは髮を結び變へた油

手を下の湯殿へ洗ひに下りた時お部屋の前を通りながら……それが手を洗つて序に顔もふいて一寸姿見で映してかへつて來ながら見ればオヤお二方は敷居際へ碁盤持ち出して頻りと烏鷺を戰はせて居らつしやる……と思つたのは五目並べが始まつたのでした。××様は例によつてお出まし、静まり返つた日中を流れの音ばかり潺々と聞えて居ます。

私は机に向つて持つて來た金色夜叉終編を讀み續けました。黄金の光もダイヤの輝きも人の情けに代へがたくて泣きつ悶えつ遂に狂じた宮は病院のベットの上に意識無き身を容されて夢の如く微笑ました私も思はずホツト息をいつて一先づ本を伏せました。紅の栞の總の絹糸は長く机の上に垂れました。此時ふと隣部屋の話がはつきりと耳に入りました。

女「それぢや貴君は敗けたやうなもんですわ。其人にそんな事云はれてそれで今でも一人で居らつしつちや。」

男「何敗けるものか其人は「どんな人とでも友達として交際ふなら面白い。夫として仕へるのはつまらない。」と云ふんだよ。だから僕もどんなに何もかもよく出來てどんなに美しくつてもさ、たとへば其所に居る誰かさんのやうな絶世の美人でもさ、アハヽ、まあさ默つてお聞きよ。心意氣の面白い人でもさ情人にして遊ぶけれど女房には持たないときめたのだよ。」

女「分りましたわ。して見ると女房は一人きりにきまつちまふ情人は。幾人でも持てると云ふ寸法ね。云ひかへればもしもいやになつたら捨てるにも都合がいゝつて譯でせう？　そりや駄目よ貴君にやそんな

薄情な眞似は出來やしませんよ。そんな捨てられるやうな人に妾しや心中立はしやしませんわ。」

男「…………。」

女「それよりは妾いつも云ふ通り後生ですから、いゝ奥様もつて可愛いお子様でも出來て御出世なすつて下さいよ。私しや末長く時々目をかけて頂けばそれで結構ですからさネエ……」

男「何いゝよ。出世出世出世つて出世なんかしたつてしやうがないぢやないか。出世して喜ぶ親兄弟でもあるぢやなしさ。」

女「妾が喜ぶわ。私あなたさへ立派になればもうそれが何よりうれしい。」

男「お前はそんな事うれしがらずに此儘何も考へずに居れば何も不足はないぢやないか。」

女「アラ妾、妾の體の事なんか云つてやしませんよ貴君がさあ、ぢれつたいねエ。」

男「僕はこれでも立派なもんだよ。學士にはなつてるし小遣にや困らずさ。」

女「知らない!!! あなたはあんまりだわ。子爵様の若様が……………貴君は男ぢやありませんかそれぢやあんまり情けない。」

男「口惜しがたつて駄目だ。もう遅いよ!!」

つと縁に出る人の足音がしたと思ふと女の聲もハタと絶えました。

夫婦連れと思つて何の氣も止めなかつた隣室の二人は此問答によつて其關係が悟られました。女の水際立つて艶な物云ひ、定めて男の云つたやうな粋な美女でせう。さうして男の人は子爵家の若様……

溫泉の宿の奥の一間に淺酌低唱の樂しみもあたら男子一旦の思ひ遂げざりし憂さ晴しか。あゝ思ひまはせば五年の昔!!!

葉山の波は靜かでした。露樣姉妹に藤尾樣、それに私の四人連れ、遊び半分稽古半分の自炊生活、連れて行つた花だつて本邸に居れば姫樣添の小間使お芋一つ煮るのだつて一つ一つ穴をあけて突ついて見て居る始末、毎日〳〵隨分賑やかに笑ひました。

それが秀麿樣達御出になるやうになつてあんな事になつてしまつた。

お眉秀でお眼元涼しう誰とやらに似て居ると云ふ義麿樣は御身柄に似合はぬ通人で音曲は何知らぬものもなく文學書は讀まぬものもなくボートもこげば柔術もなさる打てば響くと云ふやうな方でしたから藤尾樣とはお話もよく合ひました。だのにどうした迷ひかあの無邪氣な秀麿樣の方が藤尾樣に命かけての御熱心、露樣と云ふ許婚の君はそつちのけで猛烈なお熱でした。それを「そんな無邪氣な方可愛いゝ許りで弟のやうな氣がする義麿樣のやうな方でさへお友達以上にやお交際の出來ぬ藤尾樣は學士も華族も何の糸瓜、」と一笑に附しておしまひなすつた。

失望した秀麿樣を今迄と異つた淚の目に見た露樣は千萬無量の胸を振袖に包んで藤尾樣と中のよかつた義麿樣へ嫁ぎました。華族會館の廣間の席、幾十人の貴夫人が花と粧ひ列席した其注視の的となりながら常に變らず美しく笑つて金屛の蔭に何氣なく。

「道樂者ですけれど梅小路は(義麿樣)男らしい人ですらから胸の一方に靜枝や萬龍を可愛がつても一方



387　海の風（岡落葉畫）

に私の涙位は入れてくれるでせう。意地張りは不幸ねェ、私の胸中察して……。」

とそつと私、さゝやきました。

藤尾樣と私とは心は異へど五年の後今日迄二人共獨身です。私の事はお聞き下さいますな。それよりは秀麿樣、僕は通人になるんだとばかり自暴自棄の御振舞ひ、それでも御養父母は昔に變らぬ御いつくしみ、

「不束な息子が秀麿の氣に入らぬは尤も、私達は何處までも秀麿の世話を受けたいのです。」

とばかり、流石秀麿樣此頃はお體も勝れず烏森の歌路と云ふ、人に知られた名妓の看護に大かたはお邸へも寄付き給はぬと聞いて居た……。

それかこれか？隣室の男の聲、今迄は常に低くつて聞き取れず、また私も聞かうとも思はなかつたが、今の樣子では、若しや、若しや？

丁度××樣が大きな鰻を釣つて御歸りになつたとかで下の入口で番頭の大城さんが一生懸命お世辭を云つて居る。殿樣はたゞ笑つてお出になつたが突然大聲で、

××「山口さん。」

と十番のお部屋へ向けて被仰ると。

山口？ハロ」

とＬの君お顔を出して、

山口「ヤお歸りでしたか、お草臥でせう。見事な鰻ですな、何處でお取りになりました。」

××「大きいでせう。此間君が葉卷を落して惜しがつていつまでも、のぞいて居た、あすこの處で取れました。晩には皆樣に御馳走するやうにしませう。」

十一番「ヤ恐れ入ります。私も東京から例のアイスクリームの機械が參りまして晩にはこしらへてお招ぎしやうと思つた處で。」

と十一番の君も何時の間にか立つて來てゐらつしやる。

××「それはありがたう。然しリヨウマチでもアイスクリームがまはせますかな。」

十一番「何分量だけは私が致しますがまはす時は山口君が來てくれますよ。ネエ君。」

廻り縁の角の處へ身をのり出して見て居た私は、ふと左の方を見ると隣の人も半身を屈めて縁の欄干に寄つて下を見下して居た。

紺と藍の棒縞のお召に銀の高浪に薄墨の千鳥浮かした七寸許りの帯をきりゝとしめて銀杏返しの襟足長く匂ふばかりの髮の艶、下向いた長い睫毛眞白の横顔は云ふばかりなく美しい。

我にもあらず見惚れて居た私は「アッ!!」と云ふ下の騒に驚くと下では鰻を入れた桶を大城さんが引くり返して土まぶれの魚をあわてゝ拾はうとして××樣の御供の人と一緒に大さわぎ。

××「尻尾をつかんぢや、すべつてしまふからいかんよ。頭の方をつかまんけりや駄目だ。」

と殿樣が指揮して居らつしやると、

「ワッハッ。」
と汗を流してあつちの土をつかんだり、こつちの石をおさへたり。
「ホヽヽヽ」
あでやかに笑つた彼の女は、つと身を引き擦ぎ「貴君、何考へていらつしやるの？　先刻から川ばかり眺めて……。」
私も急いて部屋に入いつて境の襖にひたと身を寄せた。
「何をくよ〳〵川端柳水の流を見て暮すつてね。」
男「オイ。お歌一寸お出で。」
さてこそ歌路よ。すれば正しく秀麿様!!!
胸ははげしくをどるを抑へて……。
「あの水は何時も美しいがよつぽど深いのかね。」
歌「エヽッ？　水の深さ？　そりや深いんですとも傍へ行くとはげしく流れてますから押し流されさうですわ。どうして？」
「今夜も月は好いだらう。昨夜のやうな靜かな晩だらう。實は僕は昨晩夜半に起きて見た。」
歌「アラまあ、私知らなかつたわ。恥かしい事今夜は私も起して頂戴な。夜半に散歩に出ませう。ねエ貴君。」

「ア、さうして二人であの水へ入らうか。」

怪しくふるへた秀樣のお聲に歌路は一寸ためらつたがすぐ、冴え〴〵した聲で。

「エ、入りませう。死ぬんでせう？ うれしいわ。私死にます!!! 若樣!!!」

聲はだん〴〵低くつてあとは何だか聞こえませんが正しく聞いた今の言葉……。只一重の此襖閉いて秀樣のお傍へ出て泣いて泣いて、お諫めしたい。けれども……、けれども……。

人こそ知らね、神や知る不思議の所でお逢ひ申す。實は私は秀樣おしたひ申して居りましたが露樣と云ふ許婚の君お在すと思つて我と我胸の思ひ草摘みすて、花咲く春を今も猶獨身の、あけくれに昔を思ひ出して泣いて居りまする。藤尾樣との御交際、承知したのも私ばかりと思ひの外露樣はあのやうにおなり遊ばしたので中には私が秀樣の處へ嫁いたらと申さるゝ人もありましたが、いたちこつこ、の義理つゝき、何事もたゞ自からの心の扉深くをさめて、あきらめて、あきらめて一生かうして暮す覺悟、秀樣はちつとも御存じ御座いますまい。私が今此處にかうして居る事すらも……羨ましい!!! 羨ましい!!! 私しや歌路が羨ましい。朝な夕なお弱いお體の御看護して、果ては死ぬとまで……あゝ、あゝ、葉山以來五年の間お目にもかゝりませむ。親友の露樣とさへ音信も絶え〴〵になつた今日、一目秀樣のお顔が見たい……、けれども、……けれども……。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊　　＊

氣をしめて眠つたので十二時打つとすぐ目がさめた。セルの寢衣をするりと脱いで晝着て居た結城の

上に女波御召の袷羽織重ねてそつと部屋を出る。

部屋々々の電燈が皆小さくなつて居る中を、廊下傳ひ足音もなく下りて溪流の方へたどる。鏤星散らす空澄み渡り皎々たる月影は變らぬ光を投げて居る、淙々と音立てゝ水は常のやうに東より西へ。遠くの山は薄黒く近くの梢はさや／＼と鳴る。てり入梅の日中は暑い位だけれど、更けては流石肌寒い、人影もない橋の上に立ち盡したがまた引返して其處の切株に腰を下した。今にも秀樣逹が入らしつて此處へ入ると被仰つたら何と申上やう……。

それからそれと物思つて、まてども待てどもそれらしい影もない。別館の戸が一枚今私の開いたまゝに開いてあるばかりが見える。

さつと一つ、星が飛んだ。

私は衿かき合してホッと溜息をついたが其まゝ袂を顔に當てゝ傍への木の幹へ突伏した。靜かな夜よ、榮枯盛衰、悶え悲しみ、皆見る人の心心にまかせおきて御空に澄める月影、永遠にかはらぬ溪川の水!!!

夜は音もなく更けて行く。

弱い女

伊藤左千夫

汽車の中では疲れ心地に、稍靜まつてゐた千枝子の胸が、東金停車場へ降りた時に、又譯もなくざわつくのであつた。

早く向うへ行きたいと思ふ心が少くて、しようことなしに人を便つて落ちて行く行程の變り目である。行くべき處への汽車はもう茲でお終ひになつて、行く處へ近くなつたといふ氣持が、氣の弱くなつてる千枝子の心を何ともつかず不安に誘ふのであつた。

二時過ぎの日盛りじり／＼と照りつける天日の下で、荷馬車や人力車や、それらの鈍い運動の中から、聞馴れない語調の意味さへ解らぬ男の高聲などが、傷はれてる千枝子の胸には痛ましく響くのである。

茲から三里、人力車で行くといふことは、初から豫定されてありながら、そこに幾人の車夫が立迎へて頻りに勸めるにも係らず、千枝子は、其片貝までと、直ぐに車を命ずるやうな運びがつけられなかつた。

「婆やどうしやうかねい。」

無意識にさういふ詞が出て、千枝子は停車場から町へ通ずる、低い家並の兩側を譯もなく眺めて佇むのであつた。婆やは假おんぶした、みな子の眠りを覺ますまいとして何に心づくひまもなかつた。

「おくさま今どう云はつしやつて、」

「なにさ、どうしやうかと思つてね。」

四人の車夫が、とりまくやうにして立つて見てる。どはり〳〵と間蝎して吹く熱い風が、物のむれるやうな、腥いやうな、これまで覺えのない厭な臭氣を煽つて、落ちつかない女の心を、一層淋しくさせるのであつた。

御新造とか奥さまとか云ふ詞が、輕くは出ない田舍の車夫ともが調子はづれに、

「あなたがたどちらへですか。」

といふやうな間拔けた勸め方をするから、千枝子は餘計にそれに應ずる口が切れない。母の手に取附てる七つの小夜子は、元氣なく母を見上げて、

「お母さん車に乘らないの。」

「おくさま何だか厭に臭うございますね。」

千枝子は二人の詞に答へない内に、小さな麥藁帽子を冠つた色の黒い若い男が、顏の汗を拭き〳〵自分等に眼をつけてくるのに氣づいた。男は近づいて少しためらふ樣子であつたが、

「あなた方水野さんで……。」

「はアさうですか。」
「あさうで御座いますか。わたし齋藤さんからよこされたもので御座います。」
「そりやまア御親切さまに、有難う御座いました。」
千枝子の云ふべきことを婆やは傍から云つて終つた。
「ぢや婆や、そこで一寸休息して行くことにしやうかね。」
「それがよろしう御座いませう。」
「お母さんあたい氷、」
「ぢやねいお前さん、車を二つさういつて下さいませんか。」
「えよろしう御座います。」
休息所へ這入つて、みな子は目を覺した。婆やは冷水に手拭を絞つて、みな子の汗ばんだ顏をふいてやる。自分も胸を開いて顏から頸から汗をふいた。
「良い氣持ですよ、おくさま如何ですか。お孃さまも、さうですか。」
婆やは直ぐみな子に氷をたべさせやうとする、みな子は目を覺した許りで、ひだるさうに婆やの膝に乘つて終つた。ぢや蜜柑でもと小夜子が取つてやつた蜜柑も食べやうとはしないで、婆やにひしと抱きついた。蜜柑を持つた手を其儘婆やの懷へ入れて、それを見ながら漸く笑つた。みな子は十月生れの五つなのだ。

『みいちやんは何んの事です婆やが熱いだらうに。』

『なアにおくさま。』

『お母さんお母さん。今日九十九里の濱が見られるの。』

『はア見られませうよ。』

『早く行つて見たいな。あたいお母さん貝を拾うんだ。』

小夜子は今は今朝別れを惜んだ友達の事を忘れて元氣が出た。婆やも齋藤からの迎ひと聞いて、しつかり安心した。車は二專軒下へ並んだ。使の男は『一寸町で買物して來ます直ぐ來ますから』と走つて行つた。主人の云ひつけで何か買物に行くらしい。

千枝子の荒れた胸の動悸は僅に靜まつたが、細かに複雑ないろいろな、氣掛りが心のおくにしつこく纒つて、思ひ切つては體も伸ばせず、口も思ひ切つては利けないやうな氣持がしてるのだ。

向側のトタンの屋根には、太陽の光が殊に多量にそこに集注されて、あたり憚らぬ熱氣のかたまりが、見るも恐ろしい勢で人を壓して居る。

休息所の正面に眞近い停車場の露天の物置場には、多くの材木が亂雜に置かれてある。其白い材木の上にも太陽は多大なる光を放射して、燃ゆるやうな熱炎の輝きが人を脅してゐる。

千枝子は、つくゞくと人間の弱さといふことを思はせられて、自分達一族の脆弱であつた運命のあは

れさを又しても思ひ出すのであつた。

破壞された運命の斷片が、一層細かい弱いものとなつて、知らぬ他郷に彷徨ふ危さに、しみ〴〵恐れを感じてきて、心持が變になるのであつた。

二人の兒を夫の友人に託して、自分は夫の跡を逐はうかと幾度も考へたのに、氣の弱い自分にはとうとうそれが出來なかつた。

生き殘りたいと願ふ心が露程もあつたのではない。只死ぬことの出來ない弱い心の詮なさに、彷徨つてこんな處まで來たのだ。

かう考へ出した千枝子は、どうしてこつちへ來る了見になつたのであつたかしらと迷ふのであつた。

又奥樣が考へ込んでると心づいた婆やは、わざと平氣な聲して、

「さアおくさま、あちらでも乾度待つてゐらつしやるから出掛けませう。」

千枝子はとぢてゐた眼を開いて、あたりを見廻しながら、直ぐには返事が出來なかつた。みな子もいつのまにか元氣になつて、可愛らしく笑ひつゝ姉と氷を突ついてゐる。使の男も歸つて來て居つた。

「おや婆や、もう出掛けた方が良からうかね。」

「でも奥さま、茲にそんなにいつまで居られやしないでせう。」

「そりやさうだが、わたし妙に氣が重くなつて來てね。」

婆やはちらと千枝子の顔を見るのであつた。

「濱の風に吹かれて御覽なさい。直ぐ氣がせい〳〵して來ますよ。聽いて御覽なさい。あれが九十九里の波の音ださうです。良いぢやありませんか。」

小夜子とみな子とは「お母さん婆や」と口々に呼立てゝ土間へ降りた。千枝子も今は目が覺めた樣に乾となつて車に乘つた。

車は少し走ると東金の宿を出て終つた。右を見ても左を見ても見通しのつかない青い田圃がつゞいてる。白い菅笠を冠つた田の草取が、遠くに近くに幾組も幾組も見えた。里芋の畑や、甘藷の畑、大豆や大角豆の畑千朶畑、間には何かしら紅い花の畑一ぱいにびつしり咲いてるのもあつた。それらが青田の處々にまじつて、次ぎ〳〵送り迎へしてくれる。さうしてさわ〳〵さわ〳〵と、朗かな涼しい風が人を生かすやうに吹いてくれる。

世の中をさう一筋に思ひつめて、厭に許り考へるものではない。と多くの自然が總掛りで慰めてくれるかと思はれた。千枝子の心も漸う〳〵しつかりとして來た。是れが命ある者の有難さと云ふやうな心持にもなつて來た。

青田を過ぎて里へ這入つた。椎の木や楠の木の森を構へて、槇の生垣珊瑚樹の生垣などを廻した家が多い。千枝子はそれが非常になつかしかつた。親にも兄弟にも早く別れて、僅かの間にも居住を幾度か轉々して來た。千枝子の目にはかうして、先祖がしめた昔の儘に、子孫何代ともなく永住して、古い樹



木曾の女（武田穎畫）

木に圍まれ住む人々はどんな幸福な人達であらう。同じ社會の人とは思はれない程に羨まないのだ。

其里を出ると又青田が廣かつた。さうして又里へ這入る。少しづゝ貝殼の交つた沙地の道になつて、海の近くなつたことが、初めて來た人にも判るのであつた。東金を出た時には、海の音が空の一局部で響つてるやうに聞えたが、玆まで來て見ると、地面全體で鳴つてるやうに、波の音の響る區域が廣くなつて居た。

千枝子はいつしか、自分達の行く齋藤の家も、今見て來た、古い樹木の森に圍まれてる家のやうに思はれて、早く行つて見たいと云ふ氣持にもなつてゐた。

玆から片貝だと云はれた處から五六丁も行つた沙道の曲角に、遠くから自分達を見て笑つて立つてる人を認めた。體のでつぷりした、平顏に顏の大きい、頭の上は少し禿げかけて居るが、四十二三としか見えない賤しくない男であつた。千枝子は早くも齋藤だなと思ふと、夫の親しい友達といふ感情が胸に湧いた。

近寄るまゝに其人は、親しげな笑ひの顏から、

「やア早かつたな。隨分熱かつたらう。」

使の男に云ふやら車夫に云ふやら判らぬやうに聲を掛けた。車夫は心得顏に其人の前に車を止める。

「私齋藤です。能く早く來られました。」

千枝子が車を降りやうとすると、

「いや其儘其儘、まだ一寸道がある。沙地で歩きにくい。わたしは近路を先に歸つてるから、其儘どうぞさア。」

と云つて車を前へ押遣つた。如何にも無造作に親しげで、殆ど身内の者を迎へた調子だ。夫の極親しい友達だとは云へ、來て見ない内はどんな人かと氣になつてゐた千枝子も、逢つて見て始めて氣が落ちついた。

車の輪が深く沙地に喰込んで、ぎしぎし搖られながら少し行くと、行手に見えた松の森は、枝振神さびた古い松が、幾十本となく青空にとゞろいてるやうである。あれが齋藤の家と聞いて千枝子は嬉しくもあつたが、悲しくもなつた。

「齋藤の家は其松の森が非常に良くてな。」

夫が嘗つてさう云つた事を、急に思ひ出したのであつた。

千枝子はまだ二十七であつた。どつちかと云へば細面の方だが、額が廣くて束髮のうつりは非常に好かつた。有餘る黒髮を無造作に束ねて、自然にふくらんだ廂の風のよさ。東京でさへも大抵の女を顔負ちした。

用心深い千枝子は、これから何年の間世話になるのか判らない齋藤の家庭と、萬一折合がうまく行かないやうな事があつてはならぬとの用意で、品振つて居るとか、氣が勝つてるとか、苟もそんな風に思

はれないやうにと心掛け、思切つて質素ななりをして來た。
　二人の子供には中形の單衣にメリンスの兵兒帶を締めさせ、自分は瓦斯双子の絣に、安物の博多の帶と云つたやうな調子で、『それではあんまり人柄に似合ひません』と婆やが不平を云つた位に、謙遜つた嗜みをして來た。それでも身に包んだ爭はれない光があつて、片貝へ這入つてからは、道端の人が皆立留つて見るのであつた。

　前は廣々とした小松林が、濱の芝原に連續して居る。海の光は見えないが、波の音は此の土地を包んで鳴るかのやうに廣く聞える。
　齋藤の家の構へは、道路から五六十間も經上つて、瓦葺の長屋門がある。塗倉板倉幾棟かを控へて、萱葺の大きな母屋は、雄大な松森を背景にして、如何にも舊家らしい。
　貴族の威嚴は無くとも、多くの人を抱擁する大家の寬濶があつた。千枝子は先刻見た齋藤が、其風釆も氣象も、如何にも此家の主人たるにふさはしい感じがして、心丈夫に思はれるのであつた。
　千枝子は門の前まで車を乘り入れるのを憚つた。で門前十間程手前で車を留めさせた。齋藤は又にこにこして門口まで迎へに出てくれた。
　齋藤の妻女と云ふ人は久しく子宮を煩つて今も藥に親しんでゐる。青いといふより黃色い顏で、年頃の判らない女であつた。客を迎へる用意か髮も綺麗に結び、上等なセルの單衣は流行の藍鼠で、着こな

しも良い加減垢拔けて居つたが、千枝子は氣の毒で眞的に顏は見られなかつた。十歲許りの勇と云ふ男の子は、これが此人の子かと思れるほど色艶のよい元氣な子であつた。紺絣の筒袖を可愛げに着て兩手を張つて無造作にお辭儀をした。齋藤の見る眼、詞の掛端、此子を唯一の樂みといつくしむ樣が一目に判る程であつた。齋藤には舅になる六十近い頑固さうな老人も出て來て一通りの挨拶をした。

『僕の家庭は何にもかにも是れだけです。此の大きな家ではあなた方と僕の家庭と二組入れてもまだ廣ろ過ぎます。水野君は、外も廣いが家の中も廣い。こんな廣々とした處は餘所には無いと能く云はれました。』

『ほんとにお廣いのは氣持がよろしう御座います。東京の窮屈な借家住居から上つて見ますと、自分の小さゝが急に判つてきたやうな氣が致します。』

千枝子はどこまでもつゝましくと、たしなんでの物云ひ振りで、猶型にはまつたやうな話が老人から主人から妻女から、千枝子は暫く應接に口が忙しかつた。男女は幾人許り使つてるのか、臺所の方では賑かな人聲である。

氣六づかしさうな舅御さん。神經の强さうな御内儀、千枝子にも婆やにも等しくさう見えた。千枝子は固より、金錢上の庇護を少しも齋藤から受ける精神は無いのだから、そんなに氣兼の必要はないものの、折角かうして便つて來た以上は、どこまでも心持良く交際せねばならぬと思ふと、主人が婿養子であることも、氣六つかしさうな御内儀親子の事も、多少氣にせぬ譯に行かないのだ。

『奥さまがこちらへお越しになるに就ては、私はお暇いたゞくべきでありましたが、若い奥さまもお痛はしく、お二人もお可哀想で、どうしてもお別れ申すことが出來ませんで……無理にお伴致して參つたやうな次第で御座います。どうか何分にもよろしくお願ひ申上げます。』

『それは〳〵は又御奇特な事で……。』

婆やは何となく我主の爲に、さう云つて置かねばならないやうな氣がして、我知らず云つたのを、老人からそれは〳〵奇特と云はれて妙に詞が行詰つて終つた。齋藤は自から起つて極めて置いた座敷へ案内した。そこには前に送つた荷物も揃へてあつた。兼て用意して來た土産の品々も、卑しくない。さうかと云つて無駄なと思はれるやうな物でもない。安い物ながら心の籠つた幾品を人々に配つた。内儀は土産物の挨拶ながら這入つて來て『自分が萬事お世話申上げれば良いのですが、何分服藥してゐるやうな次第で失禮致しますが、能く又女に申附けて置きますから、何なりと御遠慮なくなど親切か冷淡か一寸判らぬ事を云つて引込んで終つた。

神經の餘程過敏になつてる千枝子は、齋藤が自分を呼び寄せるに就て、舅御や内儀は快く同意して居なかつたのぢやないかと、氣が廻るのであつた。

齋藤は一切頓着のない調子で、何かと親切に指圖してくれる。

『そら勇、をつと何さんと云つたつけ。さう〳〵小夜子さんにみな子さん。涼しくなつたら、庭で少し

迎んぢやどうか。』

二三日前から父に云はれて樂んで待つて居た勇は、さつきから右へ廻り左へ廻りして、姉妹に纏はつて居たから、もう三人は友達であつた。

母屋と離れとの間に大きな花畑がある。鳳仙花や、鷄頭や、浦島草や、今流行のダアリヤやコスモスも最う盛に咲いて居る。彼等は間の徑を餘念なく駈廻つて、蝶を逐つたり蜻蛉を捕つたり、苦勞の多い親々の忘れ果てた別の天地に這入つてゐた。

停滯を好まない小い詩人等は、興を逐うて飽くことを知らず、いつのまにか門を走りだして、小松原の高みの沙山に駈行くのであつた。小夜子が海を見たいと云つたのであらう。

姉妹の鬱金の兵兒帶と、勇の白メリンスの兵兒帶とが、風にひらつく後姿を夕日に向けて、彼等は如何にも面白げに海を見て居る。無數の月見草は、風を頭に振りつゝ小詩人等に纏つてゐる。微妙に纎細な夕日の光は、如何にも又物なつかしげに、小詩人等の周圍を別して鮮かに照して居る。

永い日は容易に暮れない。夕涼の心地よさに、齋藤は誘ふとはなく女客二人と門を出たのであつた。繪のやうな小松原と、可愛ゆきものゝ姿を認めては、千枝子も婆やも等しく『あらあそこに』といふ内にも足はそこへ向くのであつた。

親々が近くへ來たとも知らぬ彼等は、沙原に輪になつて坐りこみ、持つて行つたコスモスや浦島草の花を沙に立て並べて餘念なく笑つて居つた。

千枝子はそれを見て、はや涙は双頬に傳はるのであつた。限りなき心の動搖に、少しも落つく時はなく、且つは恐れ且つは危ぶみ、或は人の頼もしく或は人の恐しく、我れと我が心をさへ疑うては、求めておのが不安を促すであつた。何の爲に躁掻いて、何の爲に氣を揉むのかと自から怪む程、捨鉢な時にも、二人の子の可愛さには呼覺まされて胸に明りもつくのである。此子の爲めに生くる命はどんな苦しみをしてもと思ふかとすれば、又世にもか弱い一人の母を頼みに苦もなく眠り苦もなく遊ぶ可愛さいぢらしさを見ては、廣い世界に母子相頼る命の悲しさが無限の涙を誘ふのである。

『まア良い處に遊んでゐたわねい。』

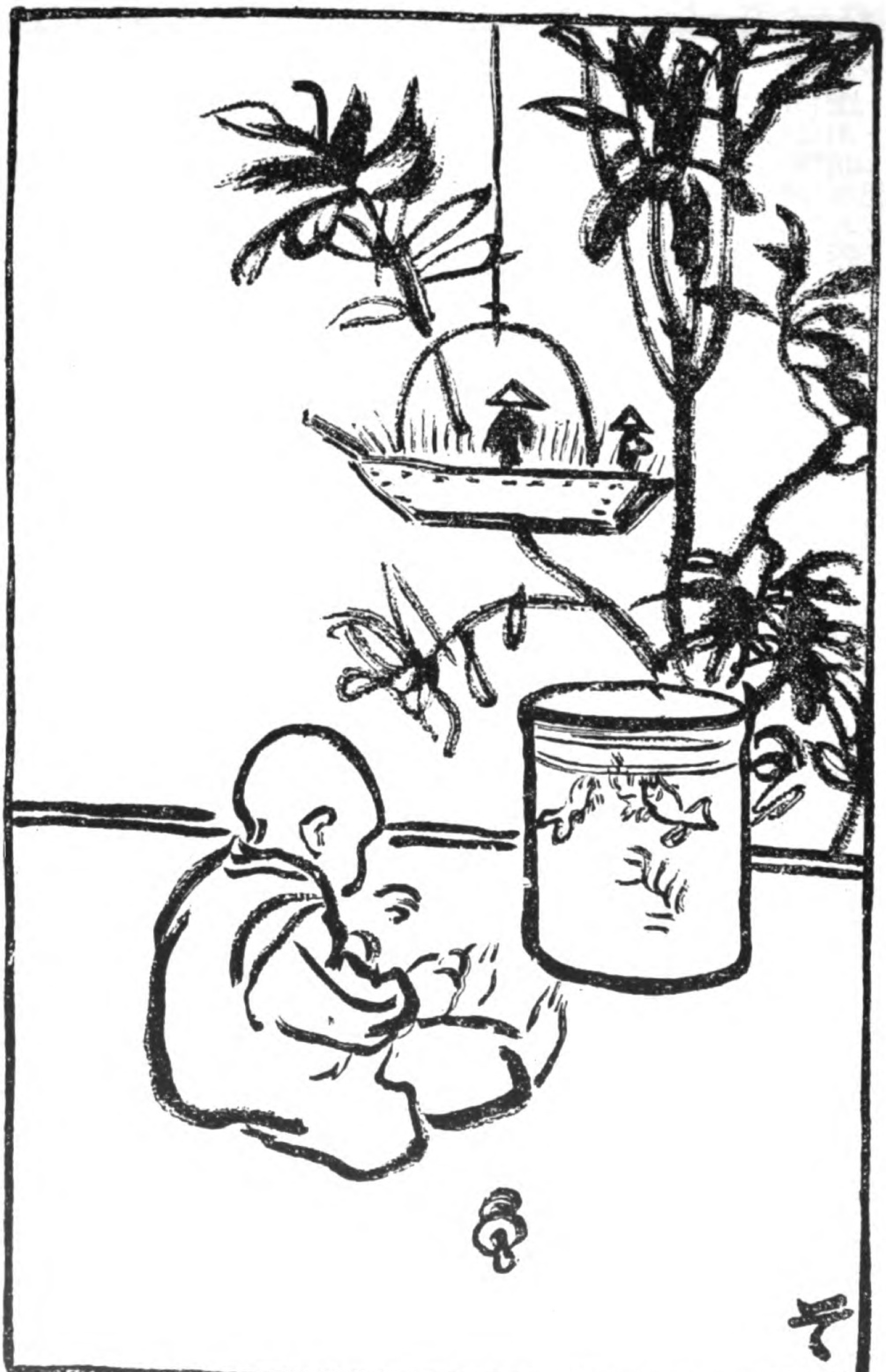
と聲が掛ると三人も等しく立つて親々に飛びつくのであつた。

夕日に對した九十九里の海、大きい力強い、永久不死の莊嚴、こんな大觀に觸れるには、茲の人達は餘りに心が弱つて居た。それは無頓着に平氣に笑つてる齋藤の眼にも同じであつた。

齋藤は借りる約束をして置いた家が、直ぐそこだからと云つて案内した。齋藤は始め、自分の家庭も非常に淋しいのだから、出來るならば一緒に居つていたゞく方が都合が好いなどゝ、幾度も手紙で千枝子に云つて遣つたのだが、それは千枝子の方で固く辭したのだ。

約束の家は千枝子にも奨やにも厭では無かつた。齋藤は歸路を話しながら歩いて、

水野の君不幸は云ふまでも無いが、僕などもちつとも幸福ぢやない。生きてゐて大きな家にゐるんだ



金魚　（結城素明畫）

弱い女……………………107

から、幸福でないと云つたつて人は承知しないが……」

千枝子も婆やもそれには答へられなかつた。婆やは何を考へたか、幾度も溜息を吐いたやうであつた。婆やは齋藤が自分達を玆へ引寄せるに就ては、自分から餘程希望した處があつて、自分がまだ逢はないのを幸に、家の方へは良い加減な事を云つて置いたに違ひない。齋藤の内儀や舅御が、千代子の風采を見て、慥かに驚いた樣子であつた處で判る。そんな事を考へた後で、

「でも奧さまさへしつかりして居てくれさへすれば何んでもない。」

かう又心で打消すのであつた。併しさうまで氣を廻されては、齋藤も氣の毒だ。齋藤は自分の家庭に不愉快な事が多いから、水野の未亡人でも來て互に話合つたら、そこに何等かの慰藉が得られるだらう位に考へたまでゝ、それ以上に野心などあつた譯では實際なかつた。

夕飯の時に内儀は一寸顔出した外、聲は近い座敷で屢〻聞えたが、それつきり顔は出さなかつた。舅御も聲だけは聞えたが、顔出は更にしなかつた。齋藤もさういふ譯で、ゆつとり話は出來なかつた。

千枝子はそれ程齋藤を便りにして來た譯ではないが、女心で矢つぱり心細く、其夜は能く寢られなかつた。

翌日借りた家へ直ぐ移ると云うたので、齋藤の内儀も少し氣の毒になつたらしく、昨日とは人の變つたやうに親切にしてくれた。臺所の物などは見繕つて一切を男や女に屆けさしてくれた。齋藤も一緒に

荷物など運んで手傳つてくれた。元と網曳までした家の隱居所で隨分古くはなつてるけれども、見苦しいといふ程の家ではなかつた。六疊二間に臺所に三疊の間が附いてるのだから、質素に暮らす四人の世帶には廣過ぎる位であつた、母屋とは全く別になつてゐて、丈一丈位の松が周圍にびつしり植ゑてあつて、如何にも隱れて住む人の家らしいのを千枝子も婆やも喜んだ。

昨日まで年寄が一人居つたとかで、拭掃除も行屆いてゐたから、移つてくると云つても何の事は無かつた。

元と庭らしかつた處は大方畑にしてあつて、茄子、大角豆、豌豆、胡瓜、大根などが、草もはやさず畝並正しく作つてある。隅の方には南瓜の蔓があたり一ぱいにはびこつて、野暮々々しい無様な花が盛んに咲いて居つた。母屋の若い主人は氣の良さゝうな人で『あなたがたのたべる位は好きに取つて下さい』と云ふのも嬉しかつた。僅に高い圍ひの土堤には、月見草や、薊や、撫子や、自然の草花の多いのが都から來た人の目には不思議に思はれる程であつた。

きり／＼すが其處にも此處にも鳴いてる。人が行くとばつたや蝗が、ハタハタと飛び散るのである。遠くの松林では頰白も目白も啼いてる。チエイチエイと聲の尾を曳いて啼くのは松雀であらう。小夜子もみな子もあたりの面白さに時間も忘れて遊んでゐる。

床の左が手摺窓になつてる。西南に向つてるから、松の間の涼しい風がわざとのやうに這入つてくる。

千枝子は氣も心も漸く定りかけて、一層の疲勞を覺えた。身を手摺窓に寄せかけ風に向つて、何を見

るともなく松の間越しに外を眺めてゐるのである。幼なき二人を育てゝ行く外には當分何の望みもなく自然に定められた廢殘の運命を自覺して、出來る限り世帶を手輕にと心掛けて來たのであるから、一切を忠實な婆やに任せて、自分は只閒な隙がな、心魂現在を離れ執着斷ち難く死別した夫の上に走るのである。夫の俤をあり〳〵と眼に視て我と我が心を痛ましめ、熱涙の頬に傳はるのを自ら氣つけば、それが何よりも命の慰藉になるのである。

勝手の始末に心を奪はれて、一心に働いてた婆やは、急に思ひ出したやうに表へ出て來た。千枝子がそれと氣づいて顏を背けた樣子に、

『奥さま孃ちやん達は、』

千枝子は『あそこに』と云ふつもりでも聲が出ない。婆やはいつもするやうな身のこなしをして、

『奥さまは又お考へなさつたのですか、かうした野廣い氣安い處へ來たからと思つて、私は少し安心してゐましたのに、奥さまはまだ少しの間もお一人では置けない。』

叱つた婆やの目にも涙は一ぱいであつた。併しかういふこともいつもの事で、二人が一しきり涙を流せば、後は又心も晴れるのである。

だが田舍住居に氣も變ればと一筋に思つて來た婆やは、此家に落ちついて直ぐから是れではと心を痛めるらしかつた。齋藤家へ賴んで何か早く仕事をさせていたゞかなくては仕樣がない。婆やはそんな事を考へるのであつた。

小夜子、みな子は、もう母屋の娘を友達にして、三人が手に手に撫子を持ち、螽斯を紙に包んで持ち、何か唄ひながら松林の外から歸つて來た。

千枝子は苦も無い二人の子を見れば、萎れた草花が、水を得て復活へるやうに元氣が出るのである。それでも千枝子は戀人に死後れた女の心持の方が常であつて、二人の娘の母といふ氣持はどうしても未だ寄生の思ひとしか考へられないのだ。

婆やは何に彼にかにつけて、

『掛替のない旦那様の生きたお形見のお二人に離れられないお母さまぢやありませんか。どうぞ早く母といふお心持になつて下さい。』

と言はれる度に、それは最う全くそれに違ひないと思ふのだけれど、自分ではどうすることも出來ないやうに、淋しい悲しい思ひがひつきりなしに、寄せては返し、寄せては返す波のやうに胸に漲るのだ。

風通しのよい中の六疊へ母子三人を並ばせて、婆やはお午餐の用意を出した。小夜子もみな子も只婆や／＼と何も彼も婆やでなければならないやうに呼び立てる。千枝子は勉めてお母さんがよそつてあげると、いろ／＼介錯はするけれど、じんから心が添はなければ、それは爭はれない處があるのだ。千枝子のしこなしがどうしてもしつくりとは二人の兒に添つては見えない。千枝子もそれを氣づくと、我れと自分が悲しく、見る／＼顏に曇りがかゝるのだ。婆やは二人の兒等にも心が離せない。さうして其若

いお母さんにも心が離せないのだ。

『さア御飯が濟んだらみんなして海を見に行きませうねい。お母さま。』

『ねい婆や勇さんが日暮に早く來るつて云つたよ。』

『ぢやそれまで待ちませうかねい。』

午後から空が薄曇りに曇つて風は少しも無くなつた。

陽氣が蒸熱くなつて來て、海の音が北に多く響つたり南に多く響つたりする。母屋の者が來ての話に海の音がかういふ風に聞える時は近い內に雨だといふことであつた。

婆やは自分のかしづいてる奥さまを、あたりの人逹に立派な奥さまだと云はせたい。で、海へ出るまでお髮を直せと頻りに云ふのであつた。

『身嗜みは女の慰みの一つです。』

婆やはいつもさういつて、千枝子にお化粧を勸めるのだ。千枝子も又『さうだらうかねい』と云つて、敢て婆やに逆らはない。

千枝子が髮を結ひ終つた處へ、齋藤の內儀は下女を伴につれて見舞に見えた。千枝子の夫が遊びに來た時の事などいろ／＼話した。能く話して見れば厭な人でもないと思ふと、千枝子は內儀が其病氣故に大きな家に我儘をしてゐる身でありながら、幸福な氣持でゐられない不仕合な人に同情するのであつた。

婆やは、自分がかうして引添つてきたのは、自分から願つて來たのであるから、幾許か自分で稼いで細い世帯を助けねばならぬといふ意味を熱心に話した。

齋藤の内儀は、僻んだ心から邪推が先に立つて、一時非常に厭に感じたのを隠すやうな氣味で、云はば義理一遍に訪ねて來たのであるけれど、話せば解ける女の心で、婆やなどから細々と訴へられると、大きな家に生れた勝氣の誇があつて、萬事に力になつてやる氣になつたらしかつた。

内儀の歸つた後で、婆やは「奥さまこれからは何もかも、齋藤さんよりはお内儀さんに頼まなければいけません」と云つた。

幼い人達は海へ行く時間を待ちかねて「勇さんが學校から歸つたかどうか見てくる」と云つて、二人は手を組んで出掛けた。

强い太陽の光を遮ぎる薄い雲の輝きが、横に見渡して空の際まで續いた白波の光と相映じて、幻の明りとでも云ひたい。船も人馬も眼に入る磯の總てが空想に浮ぶ景色のやうである。

昨日小松原に立つた五人は、素足に汐水を踏んで、不思議な景色の一部分になつてゐるのであつた。

勇は案内顔に美しい貝を見つけては小夜子みな子を頻りに喜ばせて、それが樂しいらしく、先へ先へと走つては又親々を遠くから眺めて走り返るのである。齋藤は親しかつた友人の妻から、友人の病氣した前後の消息やら、それに伴うた總ての出來事を細々と聞いた。

水野檢事の夭死は、多くの同僚を泣かせた人生の慘事で、齋藤なども熱烈なる同情者の一人であつたが、今目のあたりに、其哀傷にやつれた若い未亡人から、まるで詩其物のやうな自然に包まれつゝ、悲しい美しい出來事と其追懷とを聞くのは、自己の一切を忘れて悲慘な運命に伴ひたく思ふ程、深く强く人生の味ひを感ずるのであつた。

『どうせ世の中はつまらないもの』と我と我が運命を輕蔑して、一切の事を輕く笑ひ輕く悲み、怒つてもしんから怒らず、恨んでもしんからは恨めない。いつの間にかさうなつて來てゐた齋藤も、今日許りはほんとうに泣いた。さうして齋藤は腹の力を絞つて、

『貴女の不幸は又貴女の幸福だ。貴女の今の内生活は僕などには到底想像することさへ出來ない幸福だ。』

と云つた。

『わたしと同じやうに泣いてくれた人があつたと思ふと、絶えさうな命も繋がるやうな思ひが致します。』

千枝子も我れを忘れてさういつた。婆やは二人の後に引添つて二人の話を聞漏らすまいとはしても、力の這入つた話になると、何の事か解らない。婆やは聊か不安の念を起さゝるを得なかつた。婆やは歸らうと云ひ出す機會を得るに苦んだ。

歸つてきて見ると、頻りに同情してくれる母屋の者が、風呂桶を運んで來て湯を立てゝ置いてくれた

朝夕の空氣の肌ざはりが東京とは別であると感じた。そのせいか夜の寢心地も滑かな感じがした。主從の者は人々の親切も嬉しく、良い處へ來たと相慶するのであつた。

それから暫くの間、村内の至る所で『奥さまを見たか』といふ詞を聞いた。水野といふを知る人もなく、千枝子といふ名を無論知つた人もない。外でも内でも千枝子は奥さまといふ名になつてしまつた。

齋藤は三日目四日目には必ず遊びに來た。勇は毎日來ない日は無い。

其後婆やは、齋藤が何か熱心に考へてるらしく、ぱつたり逢つても、人に氣のつかないやうな事の幾度もあつた事を變だと思つた。千枝子も泣いて婆やを困らせるやうな事は絶えて無かつた。



「夏」と「淑女畫報」

夏は來れり窓に迫る青葉若葉はうれしけれど、五月雨るゝ日は、文よむに物憂し。海に陸に文明の世の旅は樂しけれど、話の種盡きては興さめたり。かゝる時、かゝる折、こゝに新らしき伴侶となりて、徒然を慰する雜誌、その名を『淑女畫報』と云ふ。春四月花吹雪頻りなる頃生れ出でたる淑女畫報、口繪の豐富清楚と、記事の多趣味多方面とを誇るもの。大方の讀者またその價値を認められて、**今や盛名隆々他の同種雜誌を凌ぐに到れり**。

風薫る別莊の欄にも、缺月斜めに杜鵑鳴き渡る深山の住居にも、長亭短驛、須臾にして過ぐる東海の旅客にも、稚子寢かしつけて、こと一と息、鬢の毛かき上ぐる若き妹にも、みな見て美しく、讀んで面白き此の**淑女畫報**、團扇、扇とともに座右を離したまふな。

毎月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	…金二十錢
四册（三ヶ月分）	…前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	…前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	…前金二圓八十錢
内｛定刊數…十二册 增刊四回：一、五、九、十一月價格同一	
郵税	一册 二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	…	…	…	五十錢
四半頁	…	…	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	…	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置／切目等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●書目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十五年六月十二日印刷納本　第拾貳卷第九號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　市川七作

印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

電話　三千　百十　三八　番番

前田越嶺君著

建國神話 希臘物語

全一册洋装四六判装幀優美
紙數約三百五十頁
口繪寫眞版八頁
凸版挿畫約三十頁

近刊

ホメロスの『イリアド』『オヂッセス』は千古の大作雄篇なり、本書は此の大作雄篇を經とし、其他希臘神話に關する幾多の古書を緯として編したる一種の希臘古事記にして、前半には創世の神々、オリンプの神々、さては河海の神々、地獄の神々等に至るまで一切を網羅し、後半には建國の偉業を大成したる祖神幷に神として祭られたる彼の英雄(ヘロイック)時代の勇將猛士の性行事歴を列傳的及物語的に述べたる書なり、我邦には『古事記を讀まざれば、建國の體制を審にする能はず』と云ふが如く、泰西には『希臘神話を知らざれば、西歐の文物制度を解すること能はず』と云へば、本書は此の方面より見ても有益趣味の書たるを失はず。

東京日本橋本町三丁目 博文館 振替口座東京二四〇

新時代の要求に應じて出でたる
婦女教訓の活文字!!!

堀內新泉君著

常識讀本 現代女大學

●花嫁の卷……

◎他人の家庭に入り新時代の花嫁として成功せんと欲する滿天下の處女は先づ本書を讀め！

◎新時代の良妻を娶り內顧の憂ひを一掃し揮身業務の人と爲り一大奮闘を試みんと欲する滿天下の青年は先づ本書を讀め！

◎我が最愛の娘をして他人の家庭に賞讃すべき花嫁として大成功せしめんと欲する滿天下の父母は先づ本書を讀め！

◎我が子に良妻を娶り一家子孫の大繁榮を期せんと欲する滿天下の舅姑は先づ本書を讀め！

◎既に他人の家庭に入りて人の妻となり未だ家風に通せず家事に馴れず日夜徒らに煩悶せる滿天下の花嫁は特に直ちに本書を讀め！

（紙數二百八十頁　正價五十五錢　郵稅八錢）

和裝菊判　裝幀優美

■在來の女大學は直ちに以て今日の時代に適用すべからず著者之を憂ひて玆に新時代の女大學を作る先づ婦女の本分より筆を起して花嫁生活、常識の應用、花嫁と心情、花嫁の品位、速に夫の家族と同化せよ、速に夫の家風に馴れよ、急進主義の花嫁、家庭と老人、夫に事へる道、舅姑に對する事へ方、小舅小姑に對する心得、親類並に世間の交際、心の持方、花嫁日常十則等總て是皆現代を表準として何れの家庭にも直ちに之を適用して其效果を收め得べき空前の活文字！若夫れ現代處女にして本書一冊を携へんか如何なる複雜なる家庭に入るも新時代的花嫁として成功せん事疑ひ無し苟くも現代社會に婦女として大成せんと欲する者は須らく時勢に疎き死書を抛つて千山萬岳日の將に發せんとする如き此の一大活書を讀め!!!

■東京　博文館　本町■

女（後付の三）

文學士　久保

作文資料　記事文鑑

世上幾種の美辭麗句集は、杜撰甚しくして、憑據するに足らず、圓機活法の類は、陳套に失して、役に立たず。こゝに於て、著者は、多年研究の結果、新式の排列法を案出し、新にこの書を編述せらる。通篇、數十の部門を分ち、あらゆる事項を網羅し、一字一句の贅語冗辭なく、崑山の玉、たゞ人の採擇するに任かす。この書を座右に備ふるもの、文を作るに際して、筆端毫も窘束せず、千篇立どころに成るの概あるを得む。

全一册洋裝
三六判上製
紙數四百
五十餘頁
正價七十錢
郵稅八錢

作文資料　書翰文鑑

世に書翰文の類書多しと雖も、徒に拙劣なる類例を一二百篇列記するに過ぎず。本書は、編者の新警なる著意により、分類逐項、詳細に書翰の種類を詳說し、主題、詞藻、用語、類句の數項に分ち、鼇頭の文例のみを以てするも、古今名家の所作、無慮數百篇の多きに上れり。これ絢に類書中に冠絕するのみに非ず、當代文章の典據たるべきものなり。凡百の類書こゝに於てか廢棄すべく、而して、斯書ひとり好文の士の机上に在るを得む。

全一册洋裝
三六判上製
紙數四百
五十餘頁
正價七十錢
郵稅八錢

發兌元　東京日本橋本町

女（後付の四）

婦女必讀の大全書

第七編 **育兒の務** 田村貞策君・朝夷孤舟君共著

第八編 **簡易治療法** 藤井靜子女史著

第九編 **禮式と作法** 佐方鎭子女史著

第十六編 **魚鳥家畜の飼養** 鹿野化骨君著

第十七編 **女子作文法** 遠藤ふみ子女史・松崎ふく子女史共著

第十八編 **子女の教養** 棚橋絢子女史著

第廿五編 **新式化粧法** 藤波芙蓉君著

第廿六編 **室内裝飾法** 近藤正一君著

第廿七編 **衣服の調整** 石崎篁園君著

第卅四編 **交際と談話** 福田琴月君著

第卅五編 **婦人日常座右銘** 高須梅溪君著

第卅六編 **日用家庭理科** 一戸清方君著

第卅七編 偉人の妻

前田雪子女史著

何れの國、何れの時代に於ても偉人として世に立てるもの多くは皆内助の功に待たざるはなし、本書は古今東西に於ける英雄豪傑の妻、大政治家の妻、大學者の妻、大教育家の妻、大發明家の妻、大事業家の妻、大宗教家の妻、あらゆる階級の婦人を收む、貞女あり、烈婦あり、才媛あり、閨秀あり、家庭の良婦あり、交際場裡の女王あり、糟糠の妻あり、賢夫人あり、尙附錄には偉人を惱ましめたる妻ありて、是れ亦一興を添ゆ、苟も良人を助けて世に偉業を企てしめんとするの婦人は、必ず一本を購ひ以て鑑を本書收むる所の偉人の妻に仰がざるべからず

第卅八編 家庭日常 公けの心得

小西眞雄君著

●公に於ける一人前の人と一人前ならぬ人（二節）●婚姻と離婚とに就ての心得（八節）●法律上の親子といふことに就ての心得（二節）●親の權利と戸主の義務に就ての心得（三節）●隱居と養子とに就ての心得（六節）●親族と家族とに就ての心得（三節）●親族會と後見とに就ての心得（七節）●養料扶助の義務に就ての心得（四節）●相續上の心得（二節）●戸籍上の手續に就ての心得（三節）●貸借に就ての心得（四節）●賣物と抵當とに就ての心得（二節）●贈與と賣買とに關しての心得（五節）●法律に定められたる委託といふことに就ての心得（四節）●主人と雇人とに關しての心得（四節）●他人のものと自分のものとに就ての心得（四節）●住居及び身體の保全に就ての心得（五節）●隣同志の關係並に水と火とに就ての心得（七節）……………此外百〇九節

第卅九編 歐米 魚介新料理

赤堀峰吉君著

赤堀氏の割烹家として世に立つや久しく從つて日本料理界に於ける氏の名聲は嘖々たるものあり近還歐米各國に遊んで諸國の料理法を研究し歸來和洋料理の革新を行はるゝもの少なからず本書は未だ一般割烹家の知らざるもの多き歐米最新式の魚介料理法を網羅したるものにて恰かも氏が教場に立つの態度を以て丁寧親切に叙述されたれば何人と雖も一讀直ちに實習するを得べし讀者最も美にして珍なる新料理法を鹽梅して實庭の膳羞に供すべく試みられんことを乞ふ

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

露國海軍中佐 ウラジミル、セメヨーノフ著
前陸軍通譯 山口虎雄君譯

嗚呼此一戰

菊判紙數二百餘頁
口繪寫眞版數十個
正價五十八錢 郵税八錢

露國に出版されし唯一の海戰記出づ

日露戰爭はあらゆる點に於て最近世界に於るレコード破りの巨擘にして、日本海の大海戰は、此の大事件の最重要なる一齣なりとす。本書は、當時敵の司令長官ロゼストウエンスキー提督の幕僚として、旗艦スワロフ號に乘組み、其の戰鬪記錄主任たりし。セメヨーノフ中佐が、身數傷を蒙りて、自由を失するに至るまで、親しく手記せしものに係り。虎龍の兩艦隊が、國運を賭せる空前の大激戰の壯烈、凄慘なる狀況を、詳記して餘蘊なし。著者は公平なる戰記家の第一人として、該國人中に、盛名隆々たるの人。其の序文の一節に曰く――予は記憶なるものに信を置かず。されば此の書は些事の末に至るまで、總て精確なる記錄によりたるものにして此の點に關しては、予は、敢て全幅の責任を辭せず――と。其精細なる描寫、犀利なる觀察、加ふるに行文の流暢なる、實に一讀、躬其境にあるの思あらしむ。宜なり原書出版後、英、佛、獨、伊、瑞西其他各國語に飜譯され、到る所好評嘖々たるを。蓋し我が此一戰と共に、海戰記、否、戰爭記中の白眉たるものならん乎。曠古の大戰役を記念すべく、敢て滿天下の人士に此書を薦む

東京 博文館 本町

女（後付の八）

PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界　第拾貳卷（增刊月宮殿）第九號（毎月一回廿三日印刷納本）
明治四十五年六月十一日印刷納本
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

大學目藥

『小兒の眼病には小兒用大學目藥を用ひられよ



登錄商標

大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑也世に有觸し賣藥の類に非ず

●定價金十錢（郵稅二錢）　中瓶三十錢（郵稅四錢）　大瓶五十錢（郵稅八錢）　▲各地藥店に在り

日本大阪北濱（ヘブリン丸元祖本家）

參天堂藥房

効能の槪略

▲はやり目　▲トラホーム　▲星目　▲のぼせ目　▲かすみ目　▲たゞれ目　▲血目　▲打撲目　▲疲勞目

其外眼病一切に驚くべき奇効あり

◉又この藥は目力を强くする確効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし

定價（本號）四拾錢●郵稅（本號限り）四錢